ヒストリー・オブ・ジャップス・プログレッシヴ・ロック

マーキームーン社刊

History of Jap's Progressive Rock 1970→1990

by. NUMERO UENO

マーキームーン社刊

ヒストリー・オブ・ジャップス・プログレッシヴ・ロック

マーキームーン社刊

マーキームーン社刊

NOVELA

VIENNA

TERU'S SYMPHONIA

STARLESS

GERARD

PAGEANT

OUTER LIMITS

SHINGETSU

Mr.SIRIUS

DEJA-VU

AFTER THE RAIN

SOCIAL TENSION

●各税込¥2,200

'80年代、日本のロック・シーンを揺るがした精鋭たちが、いまCDで甦る！これは日本のロックの**新しい古典**だ!!

5:1特典盤プレゼント 平成6年3月5日発売「ネクサス・プログレッシヴ・ロック再編シリーズ」KICS-2518〜2525(全8枚)、4月30日発売「ネクサス」KICS-2526〜2533(全8枚)、6月、8月、11月、平成7年3月発売予定のユーロ・ロック・コレクション〜新編＋アンコール(全42枚予定)の中から5枚お買い上げの方にⒶ：㊙8cmCD、Ⓑ：「オルメ/RARITA' NASCOSTE」8cmCDのいづれかをプレゼントします。(尚Ⓑは現在庫がなくなった場合、Ⓐをお送りします)。**帯下の応募券5枚とⒶかⒷいづれかをご記入の上、送料・手数料として定額小為替400円(郵便局でお求め下さい)**を下記宛お送り下さい。(〒/住所/氏名/年令を併せてご記入下さい。)。

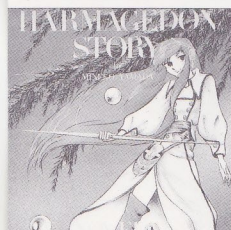
【宛先】〒112 東京都文京区音羽1-2-3 キングレコード株式会社・販促第一部「NEXUS〜ユーロ・ロック特典盤'94」係

【応募〆切】平成7年6月30日(当日消印有効)

青の肖像/ノヴェラ
●KICS-2518

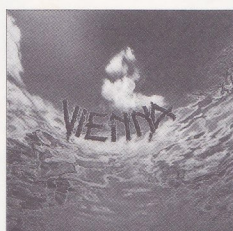
NOVELAがユーロ&プログレ・ファンのために書き下ろした(?)「青の肖像」。この妖しげで美しいメロディー・ラインはまるでサウンド・トラックのようにヴィジュアルだ。どこまでものびきったスウィートなギターが感動を呼ぶ…。

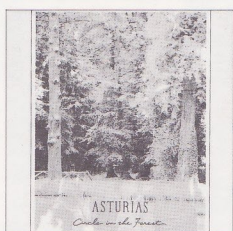
ワーズ/ノヴェラ
●KICS-2519

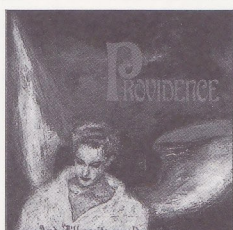
当時のノヴェラ・サウンドを求めたファンにとっては、"期待はずれ"だった「ブレイン・オブ・バランス」、後期ジェネシスのサウンドに近いともいえるラスト・アルバム「ワーズ」、共に今聴くと意外にすなおに聴けるはずだ。

最終戦争伝説/ノヴェラ
●KICS-2520

アニメ「最終戦争伝説」(ハルマゲドン＝山田ミネコ原作)のイメージ・サントラとして制作されたアルバム。今回オリジナルな形での再CD化が決定。オリジナルな形でパートIIと共に再発売。

最終戦争伝説パートII/ノヴェラ
●KICS-2521

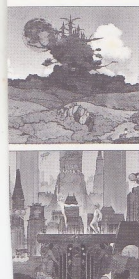
山田ミネコ原作「最終戦争伝説」のイメージ・アルバムの続編。第1作が好評だったため、企画されたアルバムだが、内容的には、もちろん1作目のコンセプトの延長線上にある。ノヴェラ向きの企画であり、ピッタリはまってしまっているノヴェラが楽しめる。

オーヴァーチュア＝序章/ヴィエナ
●KICS-2522

プログレ・スーパー・バンドであるヴィエナの記念すべきデビュー・アルバムだ。ジェラルド、アウター・リミッツ、アフレイタス、ノヴェラという4つのバンド出身者からなるこのバンド、当然ながらテクニックの方は、既に完成されており、インストゥルメンタル・パートの強力なパワーは、かつてのバンドにはなかったもの。

サークル・イン・ザ・フォレスト/アストゥーリアス
●KICS-2523

伝説のグループ"新月"のギターの津田春彦とキーボードの花本彰、ザバダックの上野洋子等を従えて展開するマルチ・プレイヤーの大山曜のプロジェクトがアストゥーリアスだ。プログレ・ファンはもとより、ECM系のニューエイジ・サウンドとして、一般の方にも極上のBGMとなるでしょう。

伝説を語りて/プロビデンス
●KICS-2524

日本列島の最北、北海道の札幌で活動を続け、地元では絶対な存在のプロビデンスのデビューアルバム。パワフル・ボーカル・スタイルを持つ久保田陽子をフィーチャーして、クリムゾン的なインプロビゼーションをハード・プログレッシヴ・ロック色で塗り込めたサウンドは鬼気迫る嵐の様だ。アトールのギターのクリスチャン・ベアもゲスト参加した好作品だ。

ダージ/ミスター・シリウス
●KICS-2525

バンドとして確立されたMr.シリウスの2ndアルバム「Dirge」は、前作で宮武和広が築き上げた世界をより複雑多岐に渡る演奏力、サウンド・コンセプト、そして、シャープなパワーによって彩かに総合音楽としての極上のプログレッシヴ・ロックへと発展させた。日本のプログレッシヴ・ロックが、世界へ誇れる名盤である。

ノイの城/平山照継
●KICS-2526

ノヴェラのリーダーであり、自己のプロジェクト、テルズ・シンフォニアでも活躍した平山照継のソロ・デビュー盤。

シンフォニア/平山照継
●KICS-2527

平山のソロ第2弾。マーラーやワーグナーを愛する彼の音楽性が強く出た一枚。紅一点下町香織のヴォイスが魅力的。

エッグ・ザ・ユニヴァース/テルズ・シンフォニア
●KICS-2528

平山照継のソロプロジェクト・バンドの第一弾。ノヴェラの最高作と噂の高い「サンクチュアリ」等と並ぶ傑作。

ヒューマン・レース・パーティー/テルズ・シンフォニア
●KICS-2529

テルシンの第二弾。「ヒューマニズム」をテーマとした本作も、いつもどおりのトータルな作りがなされている。

ステップ・イントゥ・ヴィエナ/ヴィエナ
●KICS-2530

あの「序章」をも凌駕してしまったスーパープログレ・バンド、ヴィエナのセカンド。その切れ味の良さは特筆に値。

プログレス〜ラスト・ライヴ/ヴィエナ
●KICS-2531

'89年1月、大阪のミューズホールでのラスト・ライヴ!! ヴィエナの最高作とするファンも多くその評価通りの内容だ。

ブリリアント・ストリームス/アストゥーリアス
●KICS-2532

"日本のマイク・オールドフィールド"である大山曜のプロジェクトの2ndアルバム。タイトル曲は20分以上の大傑作。

夢の報酬/ページェント
●KICS-2533

リーダー中嶋一晃の脱退後発表された作品。永井博子色を前面に押し出したバラエティーなサウンドを持つ力作。

発売元：キングレコード株式会社☎03-3945-2114

ゼファー：ベストセレクション・新作も続々入荷中!!

YES
WEMBLEY ARENA 1978 (3CD)¥5,800
『TORMATO』発表1ヶ月後のライヴ。ステレオライン録音の為、各パートのフレーズが肌で感じられます。ボーナストラックは75年、Pモラーツ参加のライヴ。

YES
LIVE IN ARGENTINA (1CD)¥2,600
生まれ変わったYESのライヴは1985年。とても珍しいライン録音。Tケイ、Tラビンのソロから CHANGESへの流れは絶妙。9012では満足できなかったあなたへ…。

YES
THE ANCIENT YES 1991 (2CD)¥4,800
8人YES、『'91・80日間世界一周ツアー』より正真正銘、初日のライヴ。満足度120%の3CD。やはり LONELY HEARTには MAKE EASYのイントロでしょう。

UK
PHILADELPHIA '78 (1CD)¥3,000
第一期UKのライヴをサウンドボード録音で。この時期にここまで出来上がっていた SAHARA OF SNOW。Jウェットンのベースも妙にマッチしています。超ハイテンションLIVE。

BOSTON
MARY ANN (1CD)¥3,000
1987年 THIRD STAGEツアーを高音質で収録。ラストのメドレーで気を失います。ボーナスは幻のTショルツ製作のデモテープから2曲。とてもレアです。

BRAND X
SAN FRANCISCO '77 (1CD)¥3,000
ドラマーの出入りの激しかった頃の高音質ラインライヴ。アレンジに変化がみられます。『ライヴストック』と聞きくらべてみてはいかがでしょう。

CAN
MOTHER SKY (1CD)¥3,600
ジャーマンアシッドの真髄を聞かせる77年ベルリンでのライヴ。当時未発表曲ではじまるステージはダモ鈴木の独断場。ビタミンCからマザースカイへの流れは圧巻の一言。

CAN
UNOPENED (1CD)¥3,600
1968、69年のアウトテイク集。『MONSTER MOVIE』や『DELAY』とは、また違った良さがあります。ヴォーカルはマルコム・ムーニー。

KEVIN AYERS
SPANISH BANANA (1CD)¥4,200
1981年スペインでのライヴ。Aサマーズ、Mオールドフィールド、Jケイルなど参加メンバーが超豪華。特にAサマーズのプレイは聴きものです。

KEVIN AYERS
DAYS IN IBIZA (1CD)¥3,000
1976年のドイツとイギリスのライヴ。放送用音源のため高音質。ポリス加入以前のA・サマーズのギターが演奏のクオリティーをさらに高めています。

MIKE OLDFIELD
LIVE TUBLAR BELLS (1CD)¥3,600
1979年エクスポーズから TUBLAR BELLSをサウンドボート録音。本作品はラフミックスです。M・OLDFIELDファンのあなたなら、必ず違いがわかるはずです。

KRAFTWERK
BREMEN (1CD)¥3,600
ファーストアルバム発表の約1年後、1971年ドイツのライヴ。"ビートクラブ"で満足できなかった方に、完全盤を高音質でおとどけします。

DREAM THEATER
MAJESTY (1CD)¥3,800
DREAM THEATERの前身"MAJESTY"。'86年限定1000枚でリリースした自主製作盤のCD化。6曲全てを完全収録したものはこれだけ。そこには原石としてのDシアターがある。

DREAM THEATER
EXCELENT (1CD)¥2,500
1993年ニューヨークでのライヴ。3代目シンガーJ・ラブリエを迎え無敵となったD・シアターを充分堪能できます。'88年から存在する『TO LIVE FOREVER』収録。フルボリュームで!!

ROBERT FRIPP
ELEVEN IMPROVISATIONS (1CD)¥3,100
1987年1月8日、ロンドンでのライヴ。アコースティック・ギターのみの演奏を高音質で収録。"ムーン・チャイルド"レーベル。

＊その他、プログレ/'60～'70年代ロックは他店にない品揃え！ ご来店、お問い合わせお待ちしてます！

XEPHYR ゼファー

INFORMATION

- 広告の商品を含む通信販売ご希望の方は必ず電話にて在庫確認の上、ご注文をお願いします。
- ご注文後はすぐに商品代引で発送します。送料は一律¥600。但し商品3タイトル以上お買い上げの場合は無料です。(現金書留、郵便為替の場合も同様。)
- 商品のお問合せ、ご質問等お気軽にお電話下さい。

〒160 東京都新宿区西新宿7-5-4 西新ビル1F
Tel/Fax. 03-5330-3959
OPEN EVERYDAY 12:00～8:00

●輸入ロックビデオバーゲン●

ABWH/マウンテン・ビュー 9/9/'89 ジェフ・バーリン	AB	158	¥4000
ELO/ロンドン、ニュービクトリア'76	B	45	3000
/プロモ13曲	B	50	2500
ELP/フランス'71完全版(ベルギーと同じ)	B	60	2500
/後楽園'72完全版	A	80	5000
/ジョーンズビーチ NY'92	A	105	3500
/ニューヨーク'93	A	120	4000
/デュッセルドルフ'71	A	15	2000
/B.S.S.ツアー・ドキュメント'73	A	55	3500
/カリフォルニア・ジャム'74	A	55	5000
/オリンピア、モントリオール 8/26/'77	A	90	3000
/ドイツ'78 3曲	A	15	3500
/ヒューストン、テキサスサミット 8/20/'86	A	100	4000
GTR/ミュンヘン'86、イタリー'86			
Nu/マドリッド、トッカータ'83～'86	A	60	4000
PFM/ローマ、イタリー'72 白黒	A	10	5000
/イタリー'80	A	55	6000
UK/オランダ'79 他5曲	A	20	4000
VDGG/ベルギー'71、ヨークシャー'70s	A	30	3500
/ヴィエナ、オーストラリア78(ワンタリングのプロモ含む)	B	25	3500
アシュラ/スペイン'81	A	15	5000
アース・アンド・ファイア/オランダ'76			
アトミック・ルースター/ベルギー'71	B	30	2500
アニー・ハスラム/ボトムライン、ニューヨーク'90	A	50	3500
/ニュージャージー'90	A	85	4000
アーバン・サックス/フランス'81	B	30	3500
アモン・デュールII/ドイツ'74			
アラン・ホールズワース/ドイツ'86 ハズバンド、アカギ	B	24	3000
/フロリダ'88	B	45	4000
/サンホセ'92	A	100	5000
アール・ゾワイ/セレモニー プロモ	A	5	3000
アレア/イタリー'72			
アンジュ/ナンシー'88	AB	10	5000
イエス/フランス'70 2nd LP プロモ	A	24	3000
/ロンドン、クイーンズ・パーク'75	A	60	3000
/グラスゴー、アポロ、スコットランド 10/'77	B	91	4000
/フィラデルフィア、スペクトラム'79	AB	55	3500
/ブエノスアイレス、アルゼンチン'85 完全版	A	155	5000
/フィラデルフィア 4/16/'91	A	175	5500
/フランクフルト 5/29/'91	A	161	6000
/ケルン、ドイツ 6/2/'91	A	162	6000
イット・バイツ/ロンドン、メルトダウン'88	A	51	2500
/ライヴ 10/10/'89	A	45	3000
/レア・ライヴ'89	A	71	5000
/タウン&カントリー'89	AB	52	3500
ヴァレンシュタイン/スーセン、ドイツ'79			
ヴァンゲリス/オランダ'91 ジョン・アンダーソン参加	A	85	6000
ヴィードルシュ/パリ'79	A	12	3500
ウルテンベルグ/フランス'84	BC	20	3500
エイジア/エイジア・イン・エイジア武道館'83レイク 完全版	B	115	3000
/ローレリー'89	A	45	4000
/ケルン'89	A	55	5000
/東ベルリン'90	A	40	5000
/ウィーン'90	B	75	5000
/フランクフルト'90	A	66	5000
/アカデミー、ニューヨーク'92	A	90	5000
エクセプション			
エニット/クラレット・ホール・ファーム 8/'84	A	80	3500
エロイ(イーロイ)/アーレム アマデウス、ドイツ'88	A	71	5000
/ロックポップ'78			
エンブリオ/中近東ツアー'85			
オズリック・テンタクルズ/タンブリッジ'89			
カーヴド・エアー/ロック・オブ・ザ・'70s ベルギー'71	AB	29	3000
カヤック/ゲット・バック、オランダ'74			
カン/ドイツ'71＋'72&インタビュー'87	B	20	3500
/レア・ライヴ'72 インタビュー多し ドキュメント	B	25	3000
/フランクフルト'76"アイ・ウォント・モア"	A	5	5000
カンサス/プロモ'78 5曲＋カナダ・ジャム'79	A	22	3500
/ヒューストン、テキサス'79	B	105	3500
/スプリングフィールド'91	A	77	4000
キャプテン・ビーフハート/コーラス、パリ'80 SNL'80	C	40	4000
キャメル/プロモ：スノーグース、ラヤダー、シティ・ライフ他	A	30	2000
キャラバン/ホウキング'90 再結成初日	A	40	6000
/ベルギア'91	A	60	7000
キング・クリムゾン/セントラル・パーク'74他 ヒストリー	AB	45	3500
/フライテイズ'81＋トロント'81	B	28	2000
/ロック・オブ・ザ'80s＋浅草国際リハーサル'81	B	25	3500
/アラバマ・ホール、ミュンヘン'82	A	45	2500
クイーン/ライヴ 4/17/'75	A	20	2500
/レインボウ・シアター'73 完全版	A	55	4000
/ハマースミス'75 完全版	A	61	4000
/アールズ・コート'77	A	120	5000
/ミュンヘン'79	A	45	4000
クラウス・シュルツ/リンツ、オーストリア'80	A	62	7000
/セントピエール'82	B	21	4000
/ベルギー'82	B	60	5000
/ドレスデン'89			
クラナト/イタリー'88	A	32	3500
クラフトワーク/ボローニャ、イタリー'90	A	46	3500
/ライヴ'78&プロモ アウトバーンのメイキング含む	A	40	3500
/フランクフルト'91	A	50	5000
/ユトレヒト'91	A	110	5000
/ミュンヘン'91	AB	91	4500
/ベルギー'91	A	111	5000
クリス・スクワイア/サンホセ'92 アラン・ホワイト	A	80	5000
グル・グル/ロックポップ'78			
/ドイツ'89			
グローブシュニット/ロックパラスト'78			
/ビートクラブ'84	AB	50	6000
ケイト・ブッシュ/クリスマス・コンサート'79 ガブリエル	B	60	3000
ケビン・エアーズ/OGWT'71＋'75JUKE BOX'76 ホールワールド含む	AB	20	5000
ケビン・エアーズ&オリー・ハルソール/スペイン'81	B	60	4000
ゴールデン・イヤリング/オランダ'71			
コロシアム2/サイト&サウンド'78 G.ムーア、D.エイリー	AB	40	2500
ゴング・メゾン/ロンドン'91	A	80	5000
サーガ/ドイツ'79～'88	A	60	3500
/ロックポップ、ドルトムント、ドイツ 12/18/'81	A	53	3500
/ヴィデオ・サウンズ'81＋オランダ'82	A	40	3500
/ヴェネズエラ'82	A	45	3500
/フランクフルト、ドイツ'90	A	35	3000
サテン・ホエール/ロックポップ'78			
サムラ・ママス・マナ/スウェーデン'84	A	10	5000
ジェスロ・タル/MSG、ニューヨーク'78	BC	45	3500
/アリーナ ドキュメンタリー'79	B	60	4000
/ドルトムント'82	A	42	3500
/ドイツ'78～'87アンダーソンのソロLP曲ライヴ含む	AB	58	4000
/トリビュート・トゥ・バッハ、ベルリン'85 ジョブソン	A	70	4000
/リオ、ブラジル'88	A	63	3500
/ウィーン'88	A	100	3500
/ニューヘヴン、コネチカット 10/30/'89	A	116	4000
/ウィンチェスター 10/28/'89	A	115	4000
/ミュンヘン'80	A	63	4000
/ニュージャージー'84	A	55	4000
/ブダペスト'86 白黒	B	40	3500
/トルコ'91	A	75	5000
/マンヘイム'92	A	133	5000
/ハル'92	A	70	4000
ジェネシス/フランス'70ナーザリークライム スタジオライヴ	A	30	3000
/ミッドナイト・スペシャル'73(Watcher/Musical Box)	B	20	3000
/ブリッスル 1/13/'74限定品	A	65	5000
/イン・コンサート'76 ブラッフォード	A	45	3500
ジェフリー・タウンズ/コレクター、フランス'87	A	35	3500
ジェントル・ジャイアント/サイト&サウンド'78 完全版	AB	50	3500
ジェーン/ロックポップ、ドイツ'78			
ジェーン・バーキン/ライヴ'89	A	70	2500
ジャン・ミシェル・ジャール/チャイナ・コンサート'81 完全版	A	80	3500
/ヒューストン、テキサス 4/5/'86	A	55	3500
/リヨン、フランス 10/5/'86	A	55	3500
/ロンドン'87	A	52	3500
/パリ、フランス'90	A	75	4000
ジャン・リュック・ポンティ/ブラジル'85 S.ヘンダーソン	B	40	4000
ジョン・アンダーソン/ニューヨーク'92	A	105	5000
ジョン・マクラフリン・ワン・トゥルース・バンド/ベルリン'78	B	20	4000
/ブラジル'78	B	30	4000
マクラフリン&パコ・デ・ルシア/ドイツ'87	AB	40	4000
マクラフリン&パコ、ディメオラ、エスクード/パリ'80＋'84	A	30	4000
マクラフリン&パコ、コリエル/ミーティング・オブ・ザ・スピリット'79	A	55	3500
マクラフリン&ジョナス・ヘルボーグ/ファブリック'87	A	70	5000
ジョン・マクラフリン/パリ'90	A	60	5000
スティーヴ・ハケット/ムジクラデン'79(Aランク)			
/ビデオ・サウンズ、ノッティンガム'81	A	30	3000
/ガスタング'82(Aランク)			
/モントリオール'87 インタビュー多し	A	80	3500
/イタリー'88	A	60	4000
/チルブルグ、オランダ 5/28/'88	B	85	4000
/ボッカム・セック、ドイツ 9/16/'88	AB	90	4000
/ボトムライン、NYC'92	A	55	3500
スティーヴ・ハケット&スージー・クワトロ/ガスタング'82 ウェイクマン	B	15	2500
スティーヴ・モーズ・バンド/ボトムライン、ニューヨーク'90	A	90	3500
スティックス/ライヴ'82	A	40	3500
/プロモ12曲	B	50	2500
/セントルイス'91	A	117	4000
/リノ'91	A	104	4000
スリー/ボストン'88	AB	45	3500
セバスチャン・ハーディー/シドニー'75"ロザーナ"	A	5	5000
ソフト・マシーン/モントルー・ジャズ・フェス'74 ホールズワース「収束」A面	B	20	3500
ソリューション			
タンジェリン・ドリーム/リコシェ プロモ他	A	21	2500
/ミュンヘン'81 オーケストラ	A	33	3000
/ギリシャ'83 白黒	AB	95	5000
/カンサス・シティー 6/13/'86	B	110	4000
ティーヴォ/パリ、コーラス'78	A	42	3500
/ローマ、イタリー'81	AB	43	3500
/スプロウルプラザ'89	A	55	4000
/イタリー'90	A	81	3500
ティディエ・ロックウッド/ニューヨーク'87	B	28	4000
/フランス'90	A	40	4000
ディープ・パープル/ビッキー・ランドルズ・ショウ'71 "Into The Fire"他	B	28	3500
/ハマースミス・オデオン 5/74(ドイツ'75含む)	AB	50	3500
/パリ'85	AB	104	3000
デビッド・アレンス・ゴング/バース、ビルトン'71＋LA'84	AB	35	5000
/ノッティンガム'90	A	56	3500
/バルチモア'90	A	122	6000
デリリュウム/イタリー'72			
トッド・ラングレン/ニッケル・オデオン、コロンバス'80	AB	60	3500
トリビュート/ハンブルグ'85 ピエール・ムーラン	AB	91	6000
トリップ/モンテカルロ・ポップ・コンサート'72	AB	82	15000
ドリーム・シアター/ニューヨーク'93			
ナイス/ロンドン、ロイヤル・アルバート・ホール'69 白黒	C	30	2500
ニュートロルス/イタリー'68			
バカ/ナンシー'88	AB	12	5000
バークレイ・ジェームス・ハーベスト/スウェーデン'78	BC	62	3500
/ミュンヘン'80	AB	30	3000
/ドルトムンド、ドイツ'82～'86	B	45	3500
/ウィクティムス、ウェンブリー'84	B	70	3500
/DDRツアー 6/86東ドイツ	B	105	3500
バース・コントロール/ロックポップ'78			
ハットフィールド&ザ・ノース/ロンドン、レインボウ'75	A	20	2000
/ノッティンガム'90	A	56	3500
パット・メセニー/ABC,USA TV'77マーク・イーガン	B	27	4000
/ハンブルグ、カーネギー・ホール、ドイツ'80 イーガン	A	150	6000
バンコ・デル・ムトゥオ・ソッコルソ/イタリー'72			
ピーター・ハミル/ロックパラスト、ドイツ'81	A	60	3500
/タイム・ピーセズ'86	B	40	3500
/ケルン、ドイツ'88	A	75	5000
/イタリー'88	A	41	4000
/オランダ'89 W.エリス	A	121	6000
/ドイツ'90(トリオ)	A	50	5000
/ベルギー'86	B	120	5000
/トロント'90	B	120	5000
/ウィーン'90	A	130	7000
/ベルリン'92	A	100	5000
ビートルズ/ハリウッド・ボウル、エド・サリバン'64 白黒	A	25	2000
/コンプリート・エド・サリバン・ショウ'64＋'65 廃盤	AB	26	3500
/レット・イット・ビー アウトテイクス 白黒	AB	60	3500
/アビーロード ドキュメンタリー 本邦初公開	B	75	4000
ピンク・フロイド/フィルモア 10/'70	AB	55	2500
/ヴェニス・イタリー 7/15/'89	A	91	3500
フィル・コリンズ/MSG、ニューヨーク'90	A	160	3500
フェアポート・コンヴェンション/オックスフォード'86	A	105	5000
/ボトムライン'91	A	54	3500
フォーカス/ポートレイト、ドイツ'72超貴重フィルム初公開	A	30	4000
/ロンドン、レインボウ'74＋OGWT'72＋ライヴ'74他	B	40	4000
/ロンドン、レインボウ'73 リンデン	B	45	3000
/DKRC'75(ブレイン・ボックス 再結成ライヴ含む)	AB	25	3500
/オランダ'90 再結成・完全版	A	30	4000
フォルムラ・トレ/イタリー'72			
ブラック・サバス/パリ、フランス'70 完全版	A	60	3500
ブライアン・イーノ/ロンドン'80＋ニューミュージック'89	A	50	3500
ブライアン・フェリー/ライヴ'77 ウェットン、コリンズ、スペディング、マンザネラ	B	45	3500
ブラッフォード/ロック・ゴーズ・トゥ・カレッジ 3/17/'79ホールズワース アネット・ピーコック	A	40	3500
/ケンタッキー・ドラム・クリニック'85	AB	110	4000
/ボトムライン、ニューヨーク'90(アースワークス)	A	71	3500
フラレック/アムステルダム'85	AB	31	4000
フランク・ザッパ/ポートレイト、ミュンヘン'78	A	45	3000
/アン・イブニング・ウィズ、パラディアム'81 再編集版	A	120	3500
/バルセロナ、スペイン'88	AB	122	3500
/フランクフルト'92	A	164	6000
ブランドX/スウェーデン'82			
ヘスト/ライヴ'90	A	90	3500
ペッカ・ポーヨラ/ヘルシンキ'81	A	30	4000
/フィンランド'93	A	30	6000
ベック・ボガート&アピス/イン・コンサート、ロンドン72白黒	C	12	3000
ペンタングル/ベルギー'70	A	31	3000
ペンドラゴン/ティルブルグ、オランダ'89	A	95	4500
ボストン/USA'79 ライヴ プロモ(DKRC)	AB	25	2500
/ハミルトン、オンタリオ 12/7/'88	A	107	3500
ポポル・ブフ/スウェーデン'73	B	5	5000
マイク・オールドフィールド/チューブラーベルズ フリス、ヒレッジ参加	A	26	2000
/ロンドン'77＋オーストリア'81	A	40	3500
/エクスポーズド'79 ペッカ、ムーラン参加	C	50	3000
/メイキング・オブ・ブルーピーター'79	B	35	3000
/インカンテーションズ'79(50%白黒)	BC	50	3500
/ドイツ'79～'85	AB	41	3500
/オン・エアー、ドイツ'80	A	40	3500
/エッセンシャル、ネブワース'80 廃盤	A	70	3500
/ビデオ・サウンズ'81	A	30	2500
/ウェンブリー'81	BC	40	3000
/エジンバラ'81	A	39	3500
/ミュンヘン'82 オーケストラ	B	30	3000
/ロスキルデ、デンマーク'82	B	55	3500
/ラズマタズ'82 インタビュー多し	AB	50	3000
/スーパーフラッシュ'83 ンタヒュー多し	AB	50	3000
/イタリー、ビアレジオ'84	A	60	3000
/スペイン'84＋スイス'85	AB	63	3500
/ピーターズ・ポップ・ショウ'87	AB	30	3000
/ウインド・チャイムス プロモ集	A	60	3500
/ドイツ、イタリー'86～'89	A	85	3500
/ドルトムンド、ドイツ'93			
マグマ/パリ'72＋'79＋'81＋'82リハーサル含む(カラー)	BC	60	3500
/フランス'81 白黒 完全版	B	118	3000
/モナコ'83 屋外リハーサル(カラーバージョン)	C	31	3000
/ヘルシンキ、フィンランド'84 完全版	C	167	4500
/ウィーン、オーストリア'87 白黒	C	140	3500
マハビシュヌ・オーケストラ/DKRC'73 コブハム	C	20	3000
/モントルー'74 ポンティ、ナラダ 一部白黒	AB	35	4000
/ドイツ'73	B	30	4500
/フランス'82	B	60	4500
/ルガノ'86	AB	81	5000
/ポーランド'91	A	45	4000
/リッツ'92	A	110	5000
/アレンタウン'92 アコースティック	A	45	4000
/トロント'92	A	111	6000
ミッシング・パーソンズ/チュブ、ロンドン'83未発表プロモ含	AB	40	4000
ムーディ・ブルース/プロフィール・イン・ロック P.モラッツ	B	35	2500
/プロモ3曲	A	14	1000
/ウェンブレー'84 完全版	A	70	4000
/モントリオール 8/21/'86	AB	108	2500
/セントルイス'90	BC	98	3500
/アトランタ'91	A	108	5000
/オーランド'91	A	115	5000
/リノ'91	A	106	5000
メディナ・アサハラ/マドリッド、スペイン'86	A	15	4000
ヤクラ/イタリー'72			
ヤン・アッカーマン/リオ、ブラジル'89 フォーカスの曲多い	AB	31	3500
ユーライア・ヒープ/ライヴ'73 3曲	A	15	2500
/ロックポップ'78			
ラッシュ/ザナドゥ、フェアウェル～＋DKRC'75	A	30	2500
/DKRC'74＋ピンク・ポップ・フェスティヴァル'79	B	30	3500
/モントリオール フォーラム ケベック'86	AB	115	3500
/トロント、カナダ 5/17/'90	A	118	3500
/フィラデルフィア 12/1/91	A	119	4000
/フランクフルト'92	A	124	5000
ラ・デュッセルドルフ/ロックポップ'78			
リターン・トゥ・フォーエバー/OGWT'76 ディメオラ、クラーク、コリア、ホワイト	B	40	3500
リック・ウェイクマン/地底探検'75	AB	40	4000
/ロンドン、ハマースミス・オデオン'81	B	40	3000
/サンパウロ、ブラジル'81	AB	50	4000
/ウィーン、オーストリア'90	B	121	3500
R.ウェイクマン&P.モラーツ/オーランド'91	A	60	6000
リベリ(アレアの前身バンド)			
ルネッサンス/スタジオ・ライヴ'70～'79	AC	30	3500
/シカゴ'83	B	46	3500
/フィラデルフィア 5/'87 再結成	B	65	3500
レインボウ/オーストラリア'76 ティオ、パウエル	A	15	3000
/ミュンヘン 10/20/'77 完全版	A	120	3500
レ・オルメ/イタリー'72 フェローナ含む			
レッド・ツェッペリン/コペンハーゲン、デンマーク'69白黒	A	35	3500
/ネブワース'79 完全版	A	160	4000
/ライヴ・エイド'85 完全版＋アトランティック'88	A	63	3500
ロキシー・ミュージック/OGWT'72＋ビートクラブ'73＋モントルー'73 イーノ	C	30	2500
/ストックホルム'76	B	50	3000
ロバート・フリップ/BBCドキュメント	A	33	3500
ロバート・フリップ&クラフティーズ/ワシントン'85	AB	81	5000
リンツ・キーボード・フェスティヴァル：オーストリア'80 再入荷 画質アップ /クラフトワーク、スカイ、YMO、OMD、R.ムーグ、W.カルロス	A	41	4000

○ライヴ・オーディオ・カセットテープも、多数取り扱っております。
○料金未記入は、入荷予定です。

ロッカーズ

〒160 東京都新宿区西新宿7-9-15
新宿ダイカンプラザ・ビジネス清田
205号 TEL.03-3366-3343
営業時間 13：00～19：00(年中無休)

●自主制作もの、限定販売品、とっくに廃版になったものなどが多く含まれています！
●A～Eは画質ランクですが、だいたいの目安で絶対的なものではありません(初めて購入される方には、C以下はお薦めできません)。
●通信販売希望の方は現金書留か郵便為替で商品価格＋送料(1本¥500、2～4本¥1,000、5本以上は無料)を加えて送金して下さい。当日～3日以内ですべて発送します。VHSかBetaの区別をお忘れなく!!(VHSのみの物もあります) また、料金後払いを希望される方は電話かハガキで御注文願います。 ●カタログは72円切手2枚同封の上、請求して下さい(マーキーで見たと記入のうえ)。

BELLE ANTIQUE NEW RELEASES IN FEBRUARY/MARCH

TO FOREIGN MUSICIANS & DISTRIBUTORS.
WE ARE SPECIALISTS OF PROGRESSIVE ROCK. PLEASE SEND US YOUR UNKNOWN MATERIALS. WE MAY INTRODUCE THEM IN JAPAN. WE ARE LOOKING FORWARD TO YOUR CONTACT. THANKS.

御詫び：マーキー誌上で告知したマジカル・パワー・マコの「スーパー・レコード」は、現在、権利上の関係から発売が無期延期となりました。発売日が決定次第、再度告知致しますのでお待ち下さるようお願い致します。

MARQUEE/BELLE ANTIQUE RELEASES

カルプ・ディアン 時間牢の物語

BELLE ANTIQUE 9454
¥2,800（税抜価格）
3月中旬発売予定

サックスをメイン楽器にし、甘美なトーンのギター・フランスらしいイメージのキーボードを融合させ、全くといっていい程、他の有名グループの音に似ていない、強固なオリジナリティーを感じさせるのがこのカルプ・ディアンです。当時、アトールの評判が高かったけれど、フランスらしさという点ではこのグループのほうが上、と思っていた人も多いはず。この比類ない幻想美を誇るアルバム・カヴァーを見て、胸をときめかせる人なら、彼等の世界へと旅立つパスポートを既に手にしているといっていいでしょう。繊細でいながらも力強いシンフォニック・ワールドです。

ジョセ・シッド 10,000光年の果て

LPサイズカヴァーCD：
MARQUEE 9452-S
¥3,500（税抜価格）
ノーマルCD：
MARQUEE 9452-N
3月中旬発売予定

ヨーロッパ最果ての国、ポルトガルのサウンド。今まで、タントラくらいしか日本へは伝えられていませんでしたが、このジョセ・シッドやペトルス・カストルス等、CD化が待たれているアルバムが存在します。本作品はメロトロン、ハモンド、ムーグ、グランド・ピアノ等、当時の名器群を駆使してアレンジのしっかりしたサウンドを聴かせてくれます。LPサイズ・カヴァーはアナログの良さを伝える為、美しいリーフレット（必見！）が付いています。ノーマル・サイズにも一応、イラストを見ることはできます。

ヴィジターズ ヴィジターズ

MARQUEE 9451
¥2,800（税抜価格）
3月中旬発売予定

ロックウッドの最初期の録音としての歴史的価値のあるこのヴィジターズですが、サウンドの素晴らしさばかりでなく、その希少性から、マニアの間で高額のプレミアムが付けられていた幻の作品（日本に数枚しかないでしょう）でした。ロックウッドのヴァイオリンをリード楽器にし、ヘヴィーなシンフォニック・サウンドをブレンドした力強い作風です。フォルムラ・トレが1stで演奏していたミサ曲〝DIES IRAE〟を始め、どの曲もみずみずしい躍動感に満ちています。今回のCD化にあたって2曲のボーナス・トラックスを収録します!!

NOW PRINTING

フロマージュ パスト・イヤーズ

BELLE ANTIQUE 9453
¥2,920（税抜価格）
3月25日発売予定

国内のプログレッシヴ・ロック・ムーヴメントの先駆けとなったフロマージュ。2枚のLPと、コンピレーションCDがありましたが、現在は共に入手不可能になっています。というわけで、彼等のナイーヴで美しい曲を広く聴いていただく為、過去の2枚のLP（全面収録予定）の曲に加えて、ボーナス・トラックを追加したアルバム。ジャケットも新たにしたものです。現在、フロマージュは活動を休止中ですが、新たなプロジェクト・チームとして活動を再開するという明るいニュースが入りました。このCD共々、彼等の動向に御注目下さい!!

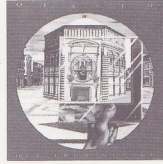
美狂乱 〝乱〟（ライヴVol.3）

BELLE ANTIQUE 9343
¥2,920（税抜価格）
1月下旬発売予定

「風魔」のCD化に続いて、美狂乱のライブVol.3の登場です。今回の最大の聴き物は組曲〝乱〟。あの「パララックス」に収録された大作を覚えているでしょう？　室内楽的アプローチもあるあの実験的な作品は、そのパフォーマンスの困難さからたった一度しかライヴで演奏されませんでした。その幻のライヴ・テイクが遂に発見されたのです。その壮絶なプレイを聴いて、その場で発売が決定してしまったという因くつきの作品。それだけに迫力は申し分なし。他に「警告」、「二重人格」等を収録します。「風魔」を聴いてぶっ飛んだあなた。これを聴いたら腰を抜かさないように気をつけて下さい!!

フィンチ グローリー・オヴ・ジ・インナー・フォース

MARQUEE 9450
¥2,920（税抜価格）
2月下旬発売予定

'70年代の熱きパッションを今に伝えるオランダのフィンチは、技術的なクォリティーの高さはもちろん、それをねじ伏せてしまうだけの情感の深さを持ち、ロック・スピリットを感じる好グループとして長い間、ファンの間で語り継がれてきました。彼等には3枚の遺産が残っていますが、そのどれもが、それぞれに輝き、甲乙付け難い完成度を持っています。今回、第一弾としてファースト・アルバムにLP未収シングルを加えたCDがリリースできることになりました。さらに、国内盤のみの特典としてゴールド・ディスク使用にてリリースします。御期待下さい!!

クェーサー アウト・フロム・クェーサー

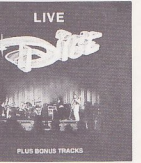
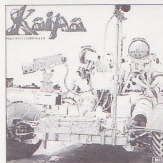
BELLE ANTIQUE 9449
¥2,920（税抜価格）
2月25日発売

'70年代の日本のシーンには、自主レーベルという概念がなかった為、メジャー・レーベルから無視された多くのプログレッシヴ・ロック・グループが存在し、彼等のほとんどはレコード化することができずに歴史の中に埋没してしまいました。このクェーサーもそんな経路をたどったグループ。長い沈黙を続けていたメンバーが、昨年、制作した作品。'70年代の曲に加えて、新しく書き下ろしたシンフォニック作品がぎっしりとつめ込まれています。アイン・ソフの山本要三もギターで参加しています。長い時を経て、さらに洗練されて甦るクェーサー・サウンドに御期待下さい!!

フォン・ツァムラ ツァムラララナンマ

MARQUEE 9455
¥2,920（税抜価格）
4月5日発売予定

大好評だったツァムラの2種のアルバムに続き、このフォン・ツァムラ（スウェーデン語ではボン・サムラ）の作品をお届けします。「家庭のひび割れ」の後、分裂したメンバーの内、ハッセ・ブルニウソンとエイノ・ハーパラが結成したグループのデビュウ作。ツァムラの発展型といっていいサウンドで、どこかユーモラスながら、やっていることは技巧的なサウンド。そういう意味で、「家庭のひび割れ」に続くツァムラのニュー・アルバム的に聴いてもらって全く問題ないと思います。御期待下さい!!

好評発売中

カイパ
セカンド
MARQUEE 9345
¥2,800（ライナー付）

ツァムラ・マンマス・マンナ
初老の新来者の為に/親しみ易いメロディーの神秘
MARQUEE 9341 ＊2CDs ¥4,855

ツァムラ・マンマス・マンナ
家庭のひび割れ
MARQUEE 9342
¥2,920

レコルダンド・オ・ヴァーレ・ダス・マサス
幻想の彼方へ
MARQUEE 9337
¥2,920

ダイス
黙示録の4人の御使い達
BELLE ANTIQUE 9225
¥2,428

ダイス
ライヴ
BELLE ANTIQUE 9340
¥2,920

美狂乱
風魔（LIVE VOL.2）
Belle Antique 9339
¥2,920

天地創造/アイン・ソフ
駱駝に乗って（アーリー・ライヴ Vol.1）
BELLE ANTIQUE 9120
¥2,920

天地創造/アイン・ソフ
過去への扉（アーリー・ライヴ Vol.2）
BELLE ANTIQUE 9336
¥2,920

スフィンクス
ザルモクセ
MARQUEE 9333
¥2,920

SFF
ザ・シンフォニック・スペクタクルズ
MARQUEE 9334 2CDs
¥4,855

イル・ベルリオーネ
イル・ベルリオーネ
BELLE ANTIQUE 9229
¥2,920

ベル・アンティーク 商品販売店大募集!!

マーキー/ベル・アンティークではできるだけ多くのファンの方に素晴らしい作品を入手できるよう、販売店を募集しています。当方の作品は現時点では直接マーキーからしかお求めになれません。輸入盤店/国内盤店を問わず、御連絡下さい。詳細をお話し致します。

〒161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
マーキー/ベル・アンティーク
TEL.03-3954-2055　FAX.03-3954-9563

主要販売店リスト

＊マーキー/ベル・アンティークの商品は以下の主要販売店で入手できます。通販の場合はTELにて在庫確認の上、代金＋送料（1枚なら350円）をマーキー内ベル・アンティーク係までお送り下さい。

〈東京〉
マザーズ・レコード 03-3461-1134
ディスク・ファン 03-3367-0668
新宿レコード 03-3363-3669
レコファン 03-3468-9543
パム 0427-23-1005
ディスクユニオン新宿店 03-3352-2691
ディスクユニオン渋谷2号店 03-3461-1121
ガーデン・シェッド 03-5389-6721
ピース・アイ・レコード 03-3380-7332

〈東北・北海道〉
仙台 ディスク・ノート 022-222-2837
レコード・ギャラリー 022-221-5308
オールド・レーン 022-213-0141
札幌 グルグル 011-271-0161

〈関西〉
大阪 ディスク・インなんば店 06-644-2822
神戸 ハックルベリー 078-332-0766

〈東海・中部・甲信越〉
沼津 シーザー 0559-62-9070
名古屋 ディスク・ヘヴン 052-853-3571
エイト 052-735-0988
マスタングレコード 052-265-0452
金沢 レコード・ジャングル 0762-64-3672

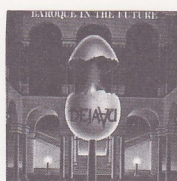
"1枚1枚が偉大なる歴史の証(あかし)"

MADE IN JAPAN RECORDS 再発シリーズ開始!

◀第1弾▶
3. 15. 発売

限定300枚プレス
各¥2,920

アウターリミッツ・ページェント等、続々と再発致します!!

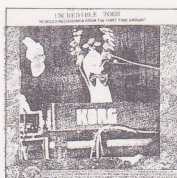
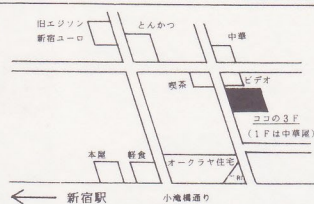
ミダス
「Beyond the Crear Air」
MJC-1001

デジャヴ
「バロック・イン・ザ・フューチャー」
MJC-1002

アタラクシア
「刻まれた時間」
MJC-1003

Mr.シリウス
「ライヴ」
MJC-1004

今年の発売予定ラインナップ
- 夜来香「デヴュー・アルバム」3月頃
- アルスノヴァ2nd「Transi」5月頃

ガーデン・シェッド会員募集中!
年会費三千円で、こんなにお得な特典が...
- 新品輸入盤, メイド・イン・ジャパン・シリーズ, エジソン・シリーズのCDが5%引き
- 毎月新入荷情報&レビューいっぱいの通販リストを郵送します
- 会員だけのスタンプ・サービス!50コたまると二千五百円の金券になります

資料をご希望の方は、ガーデン・シェッドまで九十円切手を同封の上、お申し込み下さい。

MUSIC SALES NETWORK

Progressive Artistry

廃盤、貴少盤の専門店!! 《通販専門》

- 1〜2カ月に1回カタログ発行。
- ご希望の方は360円を郵便振替（東京2-121166　プログレッシヴ・アーティストリー）で振込むか、切手 90円を4枚 同封の上でご請求下さい。（申込方法が変わりました。御注意下さい。）
- 廃盤、プログレ高価買い取り致します。（10枚以上出張又は送料もちで買い取ります。）

※都営新宿線船堀駅に業務係設置!!
不在の場合ありますので TEL 確認の上、ご来店下さい。（東京都江戸川区船堀 4-9-23　サンハイツ船堀101　プログレッシヴ・アーティストリー業務係）

TEL & FAX
03−5696−3281

〒134 東京都江戸川区宇喜田町1245−29
1245-29 Ukita-cho, Edogawa-ku, Tokyo 134

ontents

グラビア

おことわり
本書は1991年に刊行が予定されていたもので、活動中のアーティストに関しては、一部の情報が古くなっております。あらかじめ御了承ください。

NUMERO UENO 著

「JAP'S PROGRESSIVE ROCK 1970-1990」
発売記念ライヴ

再現
JAP'S PROGRESSIVE ROCK '94

＊マーキー52号掲載のライヴ・インフォメーションは、こちらに変更になりました。

4月8日(Fri)

渋谷 ON AIR WEST

OPEN 6:30　　START 7:00

CAST

藤村幸宏
YUKIHIRO FUJIMURA (g,vo)

塚本周成
SHUSEI TSUKAMOTO (kbd)

永川敏郎
TOSHIO EGAWA (kbd)

永井敏巳
TOSHIMI NAGAI (b)

菅沼孝三
KOZO SUGANUMA (ds)

SPECIAL GUEST

難波弘之
HIROYUKI NAMBA (dbd,vo)

その他特別ゲストを予定

前売　3800円
当日　4300円

チケットは2月25日以降に、○チケットぴあ　○チケットセゾン　○ワールド・ディスク　○ガーデン・シェッド　にて発売。

問合せ
ON-AIR：03-5458-4688
マーキー：03-3954-2055

※ファン・クラブ先行予約あり。お問合せは03-3937-9713トリアーデ内　上野まで

シェラザード

ライヴ急遽決定!!
第3期シェラザードが遂に始動。

[personel]

平山照継(g)　元ノヴェラ、テルズ・シンフォニア(現)
五十嵐久勝(vo)　元ノヴェラ、スプリット・パズル
永川敏郎(key)　元ノヴェラ、アースシェイカー、ジェラルド(現)
大久保寿太郎(b)　スターレス(現)
堀江睦男(ds)　元スターレス、ウルフ、テラ・ローザ

大阪　4月21日　ア・ム・ホール(06-633-8125)
open 18:00　start 19:00
東京　4月25日　ON AIR WEST (03-5458-4688)
open 18:00　start 19:00
東京、大阪ともに料金は　前売　¥3,605 (1 Drink付)
当日　¥4,120 (1 Drink付)
2/20よりチケットぴあ・チケットセゾン・他プレイガイドにて発売

お問合せ：ホットスタッフ　プロモーション
03-5839-9999

難波弘之&センス・オヴ・ワンダー

難波弘之(key)　そうる透(dr)　根岸孝旨(b)
ライヴ・ツアー日程

3/16　名古屋ダイヤモンドホール
開場18:00　開演19:30
前売¥4000　当日¥4500
3/17　大阪ミューズホール
ゲスト　五十嵐久勝
開場18:00　開演19:00
前売¥4000　当日¥4500
3/18　京都ラグ
開場18:00　開演19:30
前売¥4120　当日¥4635
3/22　渋谷オンエア　ウエスト
開場18:00　開演19:00
前売¥4000　当日¥4500

お問合せ：ケイ・ミュージック
03-3444-7421

History of Jap's Progressive Rock 1970→1990

by. NUMERO UENO

日本のプログレッシヴ・ロックの軌跡

日本のロック、とりわけ日本のプログレッシブ・ロックは、“プログレッシブ・ロック＝ヨーロッパのもの”というヨーロッパに対する至上主義とコンプレックス、そしてプログレッシブ・ロックは70年代初期のロックの一産物であり過去の産物と決めつけてしまい“プログレは死語だ”と吹聴した日本のロック評論家達とメディア、そう思い込んでしまったロック・ファンによって、アンダーグラウンドな位置に押し込められ続けてきた訳だが、日本のプログレッシブ・ロックは、初期の段階ではイギリスやヨーロッパのプログレッシブ・ロック・サウンドを模倣して取り入れる事から始まったが、その後独自の発展を遂げて欧米諸国に劣らないサウンドと歴史を脈々と刻み、現在に至っては世界の頂点に立つシーンを作り上げてきたのだ。

この本は偏見によって取り沙汰されてしまった世界に誇れる日本のプログレッシブ・ロックの真の姿を克明にまとめたものであり、日本のプログレッシブ・ロック・ファンはもとより、日本のロック・ファンの為に作られた本なのです。少しでもファンの皆さんに役立ち、また少しでも多く日本のプログレッシブ・ロックを愛してくれるファンが増えてくれる事を祈って制作したものです。この本には日本のプログレッシブ・ロック・シーンの全体の流れを追った“ヒストリー”とその歴史を作り上げてきた250余りに上ぼるグループのアーティスト達の“ファイル”の両面の視野から制作しました。

先ずは日本のプログレッシブ・ロックが脈々と刻み続けてきた“ヒストリー”から紐解いて行くことにしよう。日本のプログレッシブ・ロックの歴史は大きく分けると、1960年代半ばのGSブームが衰退して行き、日本の中で本格的なロック・サウンドが誕生する中で、一つのロック・サウンドの形態として模索して誕生してきた1969年～1972年頃にかけての“黎明期”、この模索するロックの中から明確にプログレッシブ・ロックを独自のオリジナル・サウンドへと確立した“プログレ第Ⅰ世代”(1973年～1975年)、日本に数多くのイギリス、ヨーロッパのプログレッシブ・ロック・サウンドの様々な形態が紹介されて、これらのサウンドを吸収してより本格的なヨーロッパ・スタイルのプログレッシブ・ロック・サウンドを作り上げたが、日本のロック評論家やメディアによって“プログレは死語だ”とのレッテルを貼られてしまった“幻の黄金期”(1976年～1979年)、日本独自のハード・プログレッシブ・ロック・サウンドを確立して、商業的に成功を納めたノヴェラの影響を反映した関西と、70年代末期からのフュージョン・ムーヴメントとUKサウンドに触発された土壌のもとにアンダーグラウンド・シーンへ潜伏しながら発展を遂げて行った関東とのサウンドや体質の差が明確に築かれていく“関西と関東の独自の発展期”(1980年～1983年)、インディーズ・プログレを中心とした“日本のプログレッシブ・ロックの最盛期”(1984年～1988年)、そして長年に渡ってプログレッシブ・ロック・シーンを支え続けてきたアーティスト達による解体から再生と新世代グループ達の台頭による現在のプログレ・シーンの動向である“解体～復活/新世代誕生期”(1984年～現在)の6つの時期に分かれる。これらの時期の一つ一つを時代の流れと共に追って行く事にしよう。

Chapter I 黎明期 〈1969年~1972年〉

"GS解体から模索するロック誕生"

1 日本のロック誕生前夜

タイガース、テンプターズ、ブルーコメッツ等が作り上げてきたGSブームも1968年には最高潮に達して、各芸能プロダクションが競い合って数多くのGSグループをデビューさせた。またサウンド的にもよりアイドル/歌謡曲化して行くグループからサイケデリック・サウンド至るまで多彩に発展して行き、また世間でもミニ・スカート、アングラ、ハレンチ、サイケなどの新宿フーテン文化や学園紛争の勃発やベトナム反戦闘争の激化等戦後最大の若者文化を築き上げた年であったが、GSグループがこうして爆発的に急増して行けた背景として、GSグループのミュージシャン達がベビーブーム世代であった事は見逃せない要因であった。そして日本のロックはこのGSブームによって急増したミュージシャン達と若者文化のパワーを土壌として誕生して行くのである。GSブームが最高潮に達した1968年を境にして、翌年にはよりアイドル化してしまったGSサウンドの低下やメンバーの不仲、対立、規制の枠を一方的に押しつけようとする芸能プロダクションへの不満、そしてより本格的なロック・サウンドを追求し始めたミュージシャン自身の自我の芽生えという問題が一気に巻き起こり、GSムーヴメントは急速に崩壊への道を辿り、GSグループとしてデビューした中から、ゴールデン・カップス、ハプニングス・フォー、フラワーズ、サムライズ、フローラルなどのグループ達が本格的なロック・サウンドの為の試行錯誤を開始し、またブルース・クリエイション、横浜のパワーハウス、神戸のヘルプフル・ソウルなどの様に初めから、ジミ・ヘンドリックス、クリーム、ヴァニラ・ファッジ等のアート・ロックやニューロック・サウンドを持つグループ達が一斉に登場してきて、1969年という年はGSムーヴメントの終りを告げると共に日本のロックの誕生の年となったのだった。具体的に例を挙げるとGSグループとしてデビューした後にサウンド転向を図った組としてはクニ河内(Kbs)やチト河内(Ds)、篠原信彦(Kbs)らが在籍していたハプニングス・フォーが1969年5月に発表したプログレッシブな感性を盛り込んだトータル・コンセプト・アルバム「クラシカル・エレガンス」や小林勝彦や麻生レミ、和田ジョージらが在籍していた内田裕也率いるフラワーズが1969年7月に発表したジャニス・ジョプリンやジミ・ヘンドリックスのカヴァーアルバム「チャレンジ」が代表例。またニューロック・サウンドを持つ新人グループとしてデビューした組は、1969年3月にアルバム「ブルースの新星」を発表したパワーハウス(柳ジョージ、陳信輝等が在籍)、1969年8月にデビューした竹田和夫率いるブルース・クリエイションなどが代表例。まだレコード・デビューはしていなかったが、エム、トゥー・マッチ、チューリップスなども精力的な活動を開始している。またGSグループのライブ活動はジャズ喫茶やディスコティックであったが、ジャズ喫茶やディスコティックでは音響やスペース、また"踊れるナンバーをやらなければならない"などの制約が多かったが、この状況を打破しようとして1969年になるとロック・イベントが数多く開催され始めた。成毛滋とミッキー吉野がウッドストックを日本でも再現しようとして主催して、9月22日に日比谷野音に於いて行なわれた日本初の野外フリーコンサート"第1回10円コンサート"(出演:成毛滋、ミッキー吉野、パワーハウス、フラワーズ、エム)、このイベントは好評を博して、10月30日には"第2回10円コンサート"(出演:フラワーズ、モップス、ハプニングス・フォー、パワーハウス、成毛滋/動員数:5000人)も開催され、その後も継続して開催された。またニューミュージック・マガジン誌が主催して、9月28日には新宿厚生年金ホールに於いて"第1回日本ロック・フェスティバル"(出演:ゴールデン・カップス、エディ藩グループ、パワーハウス、フラワーズ、ブルース・クリエイション、成毛滋グループ、チューリップス)も行なわれ、こちらのイベントも70年代に入っても定期的に開催され、これらのミュージシャン自身によって企画されたイベントによって69年~70年にかけて、日本のロックは急速に誕生して行ったのである。そして何よりも、この日本のロック、そして日本のプログレッシブ・ロックが誕生して行く黎明期に於いて重要な役割を果した2人のミュージシャンがいた。柳田ヒロと成毛滋である。この2人の活動がなかったら、日本のプログレッシブ・ロックは誕生しなかったと言っても、過言ではない。

2 柳田ヒロと成毛 滋

柳田ヒロは1968年夏に、モンキーズ・ファンクラブ日本支部の公募によって集まったギターの菊地英二、ボーカルの小坂忠、ドラムスの義村康一、ベースの杉山喜一と共にGSグループ"フローラル"を結成。日本ミュージカラーという本邦唯一のピクチャーディスク制作会社からシングル「涙は花びら」でデビューしたフローラルは、当初の目的通り10月に来日したモンキーズの前座を務めたが、グループのイニシアティブを握る柳田ヒロは、アート・ロック&サイケデリック・ロックへの興味が強くなり始め、ベースとドラムスが脱退して、柳田ヒロ、小坂忠、菊地英二の3人にバーンズというサイケデリック・ロック・グループをやっていたドラムスの松本隆とベースの細野晴臣を加えて、1969年4月1日にエイプリール・フールを結成した。コロムビア・スタジオに於いてアルバムのレコーディングを4月に終えた彼らは新宿パニック、六本木

エイプリル・フール時代の柳田ヒロ(右端)

スピード等のディスコを中心として精力的なライブ活動を開始して、インプロビゼイションを重視したエキサイティングなステージを繰り広げた。エイプリール・フールのサウンドはヴァニラ・ファッジからの影響の強いアート&サイケデリック・ロックであったが、柳田ヒロが主導権を持つナンバーではインプロビゼイションによるオルガン・プレイ、シュールなサウンド・エフェクト等も取り入れられており、柳田ヒロ自身の実験的なロック・アプローチは“記念すべき”日本に於けるプログレッシブ・ロックの誕生とも呼べるサウンドであった。日本のプログレッシブ・ロック史上に於いて記念すべきエイプリール・フールのアルバム「エイプリール・フール」は、コロムビア・レコードの配給によって1969年10月に発売されたが、ブリティッシュ・プログレやジャズ的なインプロビゼイション志向が強い柳田ヒロと、もともと“給料”がもらえてレコーディングが確定していたという経済的な動機によってエイプリール・フールへ加入し、ウエスト・コースト志向の強い松本と細野、小坂との音楽性の違いによって、9月27日に東京・日消ホールに於いて行なわれたアルバムの発売記念無料コンサートを最後に解散。実験的なロックに目覚めた柳田ヒロは、成毛滋の提案によって開催された日本初の野外でのフリーコンサート“10円コンサート”(日比谷野音)等に積極的に参加して行き、これらのセッションを通じて親交を深めた元ジャックスのドラマーのつのだひろ、元パワーハウスのギターの陳信輝、ゴールデン・カップスのベースの加部正義と共にセッション・グループ、フード・ブレーンを結成。1970年10月にポリドールよりアルバム「晩餐」を発表した。この作品は、陳がパワーハウスから追求し続けたブルース・ロック色と、柳田ヒロのエッグやキャラバン等のカンタベリー系のオルガン・ロックに通じるプログレッシブ・ロック色が混然一体となった先進的なロック作品であり、柳田ヒロはエイプリール・フール時代よりも明確な形として、プログレッシブ・ロック・スタイルを確立し始めていた。このフード・ブレーンはセッション・バンドであった為に短命に終わり、陳と加部は、より本格的なブルース・ロックを追求する為に、スピード・グルー&シンキを結成。一方、プログレッシブ・ロックに本格的に目覚めた柳田ヒロは、つのだひろ(Ds)、石川恵樹(B)、元GSのアウト・キャスト&アダムスのギターの水谷公生、ヴァイオリンの玉木宏樹を従えて柳田ヒロ・グループとしてライブ活動や劇団「天井桟敷」の音楽担当を行ない、1970年11月には東芝リバティーからアルバム「ミルク・タイム」を発表。このアルバムのサウンドは、ヴァイオリンとチェンバロによる美しいクラシカル・パートとギター、エレクトリック・ヴァイオリン、デイブ・スチュワート風のオルガン・プレイをフィーチャーしたワイルドなインター・プレイを聴かせるサイケデリック&プログレッシブ・ロック・パートとを対比させたサウンドであり、日本に於いて初めて、明確な形としてアルバム全編を通じて、プログレッシブ・ロック・サウンドを作り上げた記念すべきアルバムであった。日本で初めての実験的なプログレッシブ・ロック・サウンドを明確に確立した柳田ヒロは、約一年間という短期間の間に数多くの“プログレッシブ”な作品を発表して行く。前記した1stソロ・アルバム「ミルク・タイム」と前後して東芝リバティーから発表された佐藤允彦とサウンド・ブレイカーズのアルバム「恍惚の昭和元禄」、1971年に入ると、3月にワーナーパイオニアから彼の2ndソロ・アルバム「Hiro Yanagida」を発表。この時期の柳田ヒロの作品に必ず顔を出すギターの水谷公生、ドラムスにはハプニングスフォーのチト河内、フルート&サックスに横田年昭、ベースにはストロベリー・パスや玉木宏樹&SMTに参加する江藤勲というライン・アップによって録音された本作は、「ミルク・タイム」と同様のプログレッシブ・ロック・サウンドであるが、前作よりもインプロビゼイション志向から、エッグ、ナイス、キャラバンなどに通じるアンサンブルを持つプログレッシブ・ロック・サウンドへ成長した作品であり、柳田ヒロのプログレッシブ・ロックが洗練され完成されたアルバムであった。また彼は自らのソロ作品ばかりではなく、「恍惚の昭和元禄」を初めとして積極的にセッション・アルバムにも参加。サックス&フルートの市原宏祐を中心として、柳田ヒロのソロ・アルバムにも参加しているフルートの横田年昭、ドラムスのチト河内、ギターの水谷公生やベースの寺川正興、ギターの直居隆雄、ボーカルの布施明らの当時のプログレッシブ・ロック・シーンの強者ミュージシャンを集めて結成されたセッション・グループ、ラヴ・リヴ・ライフに参加して、柳田ヒロの2ndソロ・アルバム発売の翌月(4月)にキング・レコードより1stアルバム「Love Will Make A Better you」を発表。また、寺山修司原作の劇団「天井桟敷」主演映画「書を捨てよ町へ出よう」のサントラ盤(ビクター/1971年7月発売)では、つのだひろ(Ds)、石川恵樹(B)、J. A. シーザー、そしてファーラウトのギタリストである左右栄一らと共に参加していた。1970年秋から1971年にかけて、柳田ヒロが“プログレッシブ”な感性をフルに発揮した時期であり、この時期の彼の活動そのものが“日本のプログレッシブ・ロック

の誕生”の足跡であったのだ。

柳田ヒロの“プログレッシブ・ロック創造”の活動は主にスタジオに於けるセッション演奏が中心であったが、成毛滋は一ミュージシャンの演奏やサウンド作りといったものを超えたPAシステムやレコーディング技術から、ロックのライブの方法に至るまで、日本のロック・シーンが誕生して行く過程の中で、総合的に最も貢献したアーティストである。　成毛滋は慶応大学に入学すると高橋幸宏の兄らと共にGSグループ“フィンガーズ”を結成して、フジテレビの「勝ち抜きエレキ合戦」に出場。かねてからコンテスト荒しとして評判の高かった彼らは、このコンテストに優勝し、1967年2 月にユニオン・レコードより、シングル「灯のない街」でデビューを果したが、1968年になると衰退し始めたGSブームを反映してソフト・ロック・サウンドへと変化を見せ始めた。彼らはキング・レコードへ移籍をして、アルバムを発表した。この頃からギタリストである成毛滋は、本格的なロック・サウンドに目覚め始めて、1969年春に慶応大学卒業と共にフィンガーズが解散すると、夏にアメリカで行なわれたロック最大のイベント“ウッドストック”に合わせてアメリカへ渡った。アメリカ滞在中にロック・スピリットやロック・コンサート為の本格的なアンプやPAシステム(当時の日本のグループは全て、小さなギター・アンプやベース・アンプのみでライブ演奏しており、PAシステムなどは一切使用していなかった。)、またA&Mレコードのスタジオに於いてレコーディング技術等を学んで帰国すると、日本でもウッドストックの様な野外に於けるロックの本格的なフリーコンサートを開催しようと計画して、ゴールデン・カップスのキーボードであったミッキー吉野と共に自腹を切って1969年9月22日に“第1回10円コンサート”を東京・日比谷野外音楽堂に於いて開催。この10円コンサートは好評を博して、定期的に開催されて、ニューミュージック・マガジンが主催して行なわれた“日本のロック・フェスティバル”(成毛も出演。)と共に日本のロックの黎明期に於いて重要な役割を果していった。また成毛滋自身も、これらのロック・イベントを通じて、日本のロックの中心人物として注目を浴びて行き、1970年10月にCBSソニーより初のソロ・アルバム「イエロー・リバー」を発表。ギターの他、オルガンも担当した本作は平均的なロック作品であるが、後に成毛がフライド・エッグやストロベリー・パスで作り上げたプログレッシブ・ロック・サウンドの片鱗も見られる作品であった。1971年初めにジャックスや渡辺貞夫カルテットを経て、フード・ブレーンで活動していたドラマーのつのだひろと意気投合して、ストロベリー・パスを結成。(ライブに出演する際には成毛滋グループと名乗っていた。)成毛滋とつのだひろは、日本初の本格的なブリティッシュ・ロック・サウンドを求めて、エレキ・インスト・バンドのオールスターズ・ワゴンに在籍していたベースの江藤勲や、元ベベスやパワーハウスのボーカルの柳ジョージをゲストに加えて、レコーディングを行ない、1971年6月にフィリップス・レコードからアルバム「大鳥が地球にやって来た日」を発表。後に大ヒット・ナンバーとなる“メリージェーン”を含む本作は、当時の日本のロック・シーンの中で、初めて本格的なブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドを取り入れた作品であり、またB面ラストを飾るタイトル・ナンバーでは、ピンク・フロイド的な要素も取り入れられたプログレッシブ・ロックを披露しており、柳田ヒロの一連の作品と並んで、日本にプログレッシブ・ロックが誕生した記念すべきアルバムであった。彼らはジョン・メイオールやB.B・キングの来日コンサートの前座を務めて、日本のロック・ファンから絶大な人気を得て行ったが、(ミュージック・ライフ誌の人気投票で成毛滋は1971年、1972年と連続ギター部門第1位、キーボード部門第3位、つのだひろはドラム部門第1位に入っている。)フリーの来日コンサートを目の当りにした成毛滋は、ブリティッシュ・ロックの奥の深さに驚き、突然、ロンドンに渡ってしまい、ストロベリー・パスは解散。自分自身のサウンドを追求する事に暗中模索していた成毛滋は、イギリスに渡って本格的なブリティッシュ・ロックに接して、ユーライア・ヒープ、レッド・ツェッペリン、EL&Pといったグループ達のサウンドを通じて、自らのサウンドを見い出して帰国。帰国するとすぐに、9月に箱根アフロディーテでピンク・フロイドを中心に開催されたイベントに、つのだひろとエスケープというクリムゾンなどのコピーをやっていたグループに在籍していたギターの高中正義(当時は弱冠18歳)をベースに加えて出演。ブリティッシュ・スタイルのロック・トリオで出演した彼らは成功を納め、1971年10月にストロベリー・パスを発展させた型として、フライド・エッグを結成した。当時の日本のロック・シーンは未だ産声を上げたばかりで、PAシステム、レコーディング技術、アンプ、楽器、コンサートのノウハウなど全ての点に於いて、欧米諸国とは比べものにならない程、劣ってい

フライド・エッグ(中央:成毛滋)

フライド・エッグのプロモーション・ブック

た。従ってこの状況を打破する為にはミュージシャン自身が試行錯誤しなければならなかった。成毛滋、本格的なロック・バンドのコンサート・ツアーを行なう事を考えて、フライド・エッグ結成と同時にロンドンへWEMのPAシステムを注文して欧米並みのロック・コンサートを実行出来る為の準備を進める傍ら、10月中旬〜翌年1月12日までの約3ヶ月間に渡って、ビクター・レコード・スタジオに於いて、アルバム「Dr. シーゲルのフライド・エッグ・マシーン」のレコーディングを行なった。このレコーディングは日本のロックのアルバムのレコーディングとしては初めて、16チャンネル・マルチ・レコーディング・システムで行なわれ、ドラムス、ベース、オルガンのベーシック録音の次に様々な楽器をダビングして行き、ドラムスのタムの1つの音から全てに渡ってリバーブやコンプレッサーなどのエフェクト処理やEQ処理を行なって音を作り上げてミックス・ダウンするという、現在では常識的な録音方法であるが、当時の日本のロックのレコーディングとしては前例のない画期的な方法を取り入れたものであった。また楽器や演奏面に於いても、成毛滋がムーグ・シンセサイザーを使用したり、ハモンド・オルガンをレスリーとディスト・ティド・オルガンとに使い分けたり、高中正義がエレキ・ギターを弓で弾く、といった新しい試みもなされていた。レコーディング終了後の1972年1月25日に東京・千駄ヶ谷の東京体育館に於いて日本のロック・グループ初のソロ・コンサート“成毛滋ワンマン・コンサート”を、2500人という記録的な動員を集めて行ない、4月にはフィリップス・レコード内のヴァーティゴ・レーベルよりアルバムを発表。ユーライア・ヒープから影響されたハード・ロックとEL&P的なオルガン・プログレッシヴ・トリオ・サウンド、初期キング・クリムゾンの持つメランコリックな叙情派プログレッシヴ・ロック・サウンドといった当時のブリティッシュ・ロック&プログレッシヴ・ロックから強い影響を受けたこのアルバムは、1970年〜1971年にかけて柳田ヒロが試みた即興的なロック・アプローチによるプログレッシヴ・ロックから、明確に計算されたアンサンブルを取り入れたヨーロッパ的なプログレッシヴ・ロックへと進歩を見せた日本で初めての本格的なプログレッシブ・ロック・サウンドが確立されたアルバムであり、かつプログレッシブ・ロックに欠かす事の出来ない録音上の技術を取り入れた日本で初めての本格的なロック・アルバムとしても記念すべき作品であった。このアルバムが発売されると日本のロック・ファンや音楽関係者からは絶賛を浴び、またシングル「メリージェーン」の大ヒットも相まって彼らの人気は頂点に達した。成毛滋はアルバム発売記念の為の本格的なツアーを計画して、ロンドンから購入したWEMのPAシステム、音響スタッフ3名、照明スタッフ2名、マネージャー&アシスタント5名からなるフライド・エッグ・コンサート・チームを作り、ガロと共に、京都・円山公園音楽堂、大阪厚生年金会館、日本青年館ホール、名古屋港湾会館に於いて、日本のロック史上初のコンサート・チームよる“フライド・エッグ・コンサート・ツアーwith GARO”を行なった。彼らにとって最も充実した時期を迎えたが、つのだひろと高中が加藤和彦に誘われて、9月にサディスティック・ミカ・バンドを結成する為にフライド・エッグを脱退してしまい、解散。日本にロックが誕生して行く70年代初頭の黎明期の中で、成毛滋が誰よりもいち早く確立した本格的なブリティッシュ・ロック、とりわけオルガン・プレイを中心とする構成力に富んだアンサンブルを持つプログレッシブ・ロック・サウンドは、今後の日本のプログレッシブ・ロックの発展に大きな影響を与えた。また本格的なロック・コンサートの為のPAシステムの導入やツアー・チームの確立、マルチ・レコーディング・システム、野外に於けるフリー・コンサートのノウハウ、そして、ロック・スピリットの多方面に渡って、日本のロック・シーンの確立にとって彼が与えた影響は数限りなかったのである。

3 劇団“天井桟敷”の存在

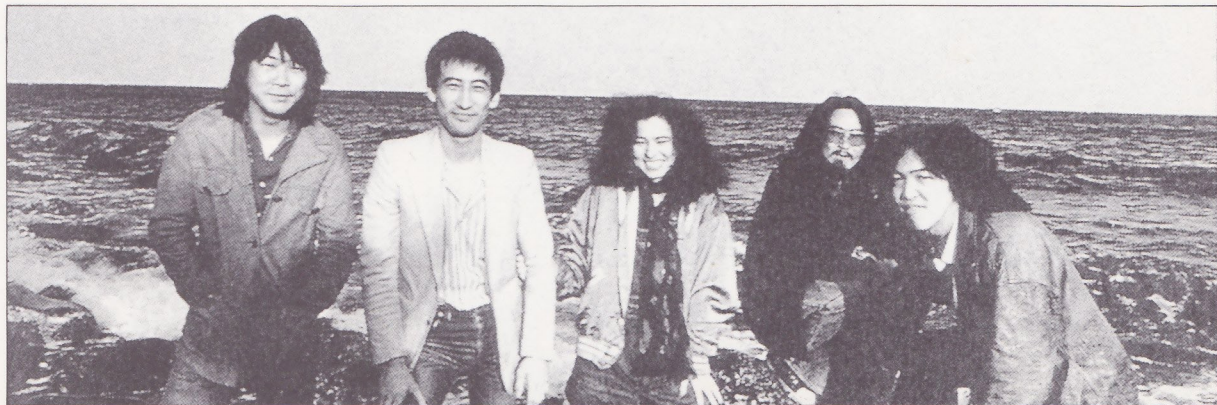
成毛滋や柳田ヒロといったアーティスト達が、模索して生み出した日本のプログレッシブ・ロックの黎明期に於いて、寺山修司の劇団「天井桟敷」の果した役割も見逃す事の出来ない存在であった。60年代にはカルメン・マキを輩出した劇団「天井桟敷」は、寺山修司の鋭い感性に基づいた革進的な劇団であり、1969年頃から、先進的なロック・ミュージックを演劇の中に精力的に取り入れ始めた。
1969年には演劇「東京零年」でエイプリール・フールを起用したのを初めに、映画「書を捨てよ町へ出よう」では、柳田ヒロ・グループ(柳田ヒロ、つのだひろ、左右栄一、石川恵樹)やフラワー・トラベリン・バンドの石間英樹、ハプニングス・フォー、J.A.シーザーらに作曲と演奏を担当させ、また、1970年7 月には東京・後楽園野外ステージに於いて、ロック・ミュージカル「ブラブラ男爵」をフラワー・トラベリン・バンドを起用して生ライブ演奏をさせていた。数多くの先進的なロックの感性を持ったミュージシャン達を起用した中で、1971年に公演された呪術劇「邪宗門」を全面的に音楽担当を受け持ったJ.A.シーザーは、演劇と共にライブ演奏をするスタイルを確立・定着させて、劇団「天井桟敷」と密接な関係となって行き、これ以降の「天井桟敷」の音楽は彼が全面的に受け持つ様になり、J.A.シーザーは、「天井桟敷」の中で、初期ピンク・フロイド的なサウンドを母体としたアヴァンギャルドで、鬼気迫る圧倒的なパワーのプログレッシブ・ロック・サウンドを自由奔放に繰り広げていった。
この劇団「天井桟敷」が先進的なミュージシャン達を精力的に起用して、自由奔放なサウンドを支持した事も、日本に於けるプログレッシブ・ロックの誕生に一役買っていたのである。

Chapter II プログレ第1世代 〈1973年〜1975年〉

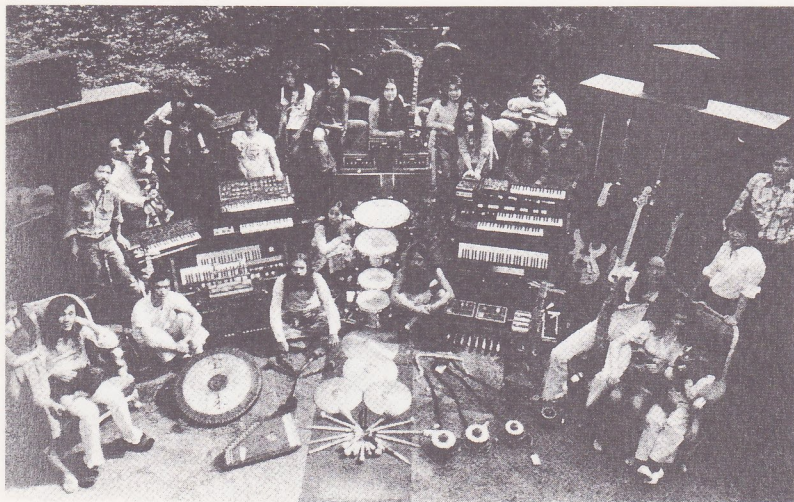
"本格的プログレバンド登場!"

1 本格的なプログレッシヴ・ロック・スタイルの確立

日本のプログレッシブ・ロックは、柳田ヒロや成毛滋らの手によって、生み出された訳だが、彼らはとりわけ"プログレッシブ・ロック"というサウンドを意識して作為的に取り入れていた訳ではなく、日本にロックが誕生して行く暗中模索状態の中で、数々のロックの手法を吸収する一貫として取り入れられただけであり、100%プログレッシブ・ロックと呼べるサウンドではなく、また彼らの事を"プログレ・ミュージシャン"と呼べるものではなかったが、彼らの作り上げたサウンドを土台として、また流行のブリティッシュ・ロックの一貫としてピンク・フロイドやEL&P、ユーライア・ヒープ、ディープ・パープル等のサウンドを作為的に取り入れて、プログレッシブ・ロック・サウンドを意図的に追求したGS世代ではない若い世代のグループ達が急速に登場してきたのである。四人囃子、カルメン・マキ&OZ、ファーイースト・ファミリー・バンド、コスモス・ファクトリーなどがその代表例であるが、これらのグループの共通点としては、先進的な発想を持った若い世代のミュージシャンであること、GS世代のミュージシャンより高度な演奏技術を身につけていること。また、日本のロックの黎明期に活躍したミュージシャン達が、欧米のグループ達のサウンドを模倣したに過ぎないサウンドであったのに対して、当時の流行のブリティッシュ・ロック・サウンドを手本としながらも、その中で自分達のオリジナリティーを確立し、自然に日本語で歌われていること、などが挙げられる。本当の意味に於いて、"オリジナリティーを持つ日本のロック"・サウンドが誕生したのは、彼らの登場によってであり、未だロック自体の中でジャンル分けや偏見が出来上がらない時代に作り上げ、ブリティッシュ・ロック＝プログレッシブ・ロック、あるいは、流行しているロック＝プログレッシブ・ロックという時代であったので、四人囃子、カルメン・マキ&OZ、ファーイースト・ファミリー・バンドなどはこの時代を代表するプログレッシブ・ロックという地位のみならず、日本を代表するロック・グループであり、日本のロック史の中で最も商業的成功を収めたグループ達であった。日本のプログレッシブ・ロックが最も"売れていて、メジャーな地位"にいた時代であった訳だ。

四人囃子は都立鷺宮高校に通う仲間によって1971年に結成された。結成当初はディープ・パープルやマウンテンなどのコピーグループであったが、次第にオリジナル・ナンバーに取り組むようになり、吉祥寺OZなどのライブ・ハウスを中心に活動して行った。1973年8月には東京・浅草俳優座に於いて初のワンマン・コンサートを行ない、この頃にはディープ・パープルなどのブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドにピンク・フロイド的なアプローチとシュールな歌詞といったプログレッシブ・ロック要素も加えた彼らのオリジナル・サウンドを確立して、1974年6月に東宝レコードよりアルバム「一触即発」でデビューを果した。8月5日には福島県郡山市の郊外にある開成山公園に於いて行なわれた日本最大のロック・フェスティバル"ワン・ステップ・フェスティバル"に出演して、彼らの白熱した演奏は大きな評判を呼び、クリエイション、カルメン・マキ&OZと並んで日本を代表する人気ロック・グループとしての座を急速に獲得して行った。(ミュージック・ライフ誌の人気投票ではドラムスの岡井大二が1位ギターの森園勝敏が2位に入っている。)また、森園勝敏という人気ギタリストも生み出した。ブリティッシュ・スタイルに基づいたプログレッシブ&ハード・ロックを確立した彼らは、1976年には2ndアルバム「ゴールデン・ピクニックス」を発表。常に"プログレス"し続けた彼らは、早くもサウンドの方向転換を計り、初期の頃に持っていたブリティッシュ・ハード・ロック色は消えて、ピンク・フロイド的SEコラージュや空間演出をベーシックとしながらも、彼らの豊かなアイデアと多彩な音楽性、

カルメン・マキ&OZ

レコーディング技術の枠を集約させた“真の意味に於いて”プログレッシブなサウンドへと発展させて行ったが、このアルバム発売直後に、四人囃子の要であった森園勝敏が突然、脱退してしまい、この脱退が今後の四人囃子の商業的な成功にも大きな影響を与えてしまった。四人囃子と同じく、ディープ・パープルなどのブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドから大きな影響を受けたサウンドを持つカルメン・マキ&OZは、「天井棧敷」から1968年にアングラ・フォーク歌手としてデビューしたカルメン・マキが、ジャニス・ジョプリンから影響を受けてロックに目覚め、タイム・マシーン(近田春雄、立川直樹らが在籍していた。)、ブルース・クリエイションとのセッションを経て、1971年暮れにギタリストの春日博文と結成したグループ。1975年にキティーレコードよりアルバム「カルメン・マキ&OZ」でレコード・デビューを果して、このアルバムに収められているナンバー“私は風”の大ヒットにより、クリエイション、四人囃子と共に日本のロック・グループの頂点に立った。一般的にはカルメン・マキ&OZは純粋なブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドのグループと見られがちだが、ブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドをベーシックとしながらも、クリムゾン的なベース・ラインや大幅なメロトロンの導入等、プログレッシブ・ロックとしての要素も明確に持ち合わせたサウンドであり、四人囃子と並んで日本のハード・プログレッシブ・ロックの草分け的な存在のグループであった。1stアルバムの大ヒットにより気を良くしたキティー・レコード側は、2ndアルバムの録音をアメリカで行なう事に決定して、ロサンジェルスにあるCherokee Studioに於いてレコーディングを行なったが、1976年8月に発売された2ndアルバム「閉ざされた街」は前作程のセールは挙げられず、この当時のロック・グループとしては初めての大掛かりなツアーを実行した事の商業的な失敗など理由により煮詰まってしまって、3rdアルバムの発売を待たずに解散に追い込まれてしまった。四人囃子やカルメン・マキはあくまでブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドをベーシックに、持っていたが、より純粋なプログレッシブ・ロック・サウンドを確立したのが、ファー・イースト・ファミリー・バンドとコスモス・ファクトリーである。四人囃子にしろこのファー・イースト・ファミリー・バンドやコスモス・ファクトリー、クロニカルなど、この当時のプログレッシブ・ロック・グループは大なり小なり、ピンク・フロイドの影響を強く受けているが、これはこの当時、日本に於いてどんなグループよりもピンク・フロイドが売れているブリティッシュ・ロック・グループであり、プログレッシブ・ロック・グループであった為で、当時のプログレッシブ・ロック・グループ達にとっては、数多くのプログレッシブ・ロック・サウンドの中から、自らの意志による選択で、ピンク・フロイド・サウンドを追求した訳ではなく、当時の流行ロック・サウンドとして取り入れたのである。このように、日本のプログレッシブ・ロック史のサウンドの発展は、日本に於いて紹介された海外のプログレ・レコードや国内発売された順番と密接な関係を持って歩んで行くことになる。話が少し横に外れたので元に戻すと、ファー・イースト・ファミリー・バンドとコスモス・ファクトリーは共に、ピンク・フロイドからの影響が強いサウンドを持っていたが、とりわけ、ファー・イースト・ファミリー・バンドは、宣伝のコピーにも“日本からのピンク・フロイドへのアンサー”とある様に、サウンド・スタイルとしてはピンク・フロイドに最も近いスタイルを持っていたグループだ。ファー・イースト・ファミリー・バンドのリーダーである宮下フミオは、頭脳警察のオリジナル・メンバーであった左右栄一、柳田ヒロ・グループのベーシストであった石川恵樹、GSの大御所グループ、スパイダースの後期のドラマーであった前田トミオと共に1971年に、ファー・イースト・ファミリー・バンドの前身グループ、ファーラウトを結成。結成当初はレッド・ツェッペリン等から影響されたブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドであったが、1973年に元ランチャーズの喜多嶋修(琵琶)と、フラワー・トラベリン・バンドのジョー山中をゲストに加えて制作されたアルバム「日本人」では、琵琶や日本笛、日本太鼓などの邦楽器と、ムーグ・シンセサイザーやハモンド・オルガンを導入して、初期のピンク・フロイドに通じるサイケデリックな“トリップ”プログレッシブ・ロック・サウンドと、日本的な表現を融合させたサウンドを確立。このアルバムはコスモス・ファクトリーの1stアルバム「トランシルバニアの古城」と並んで、日本で初めての純粋なプログレッシブ・ロック・サウンドを聴かせる記念すべき作品であった。1974年には、「ワン・ステップ・フェスティバル」などにも参加したが、宮下フミオはファーラウトのサウンドをより、エレクトロニクス・ミュージック・プログレへ発展させる為に、ファーラウトを解散させて、秋にファー・イースト・ファミリー・バンドを結成した。アルバム「地球空洞説」は1975年 8月にコロムビア・レコードより発売され、東京の増上寺の地下ホールに於いてデビュー・コンサートを行なった。ファーラウトのサウンドよりも、「おせっかい」の頃のピンク・フロイドに近いシンセサイザーを中心として、洗練されたプログレッシブ・

ファー・イースト・ファミリー・バンド

ロック・サウンドに仕上がったこのアルバムは、コロムビア・レコードの強力な宣伝力にも手助けされて、爆発的な好セールスを記録し、アメリカ、イギリス、を始めとする世界各国に於いても発売されて、高い評価を受けた。このアルバムの好セールスに気を良くしたコロムビア・レコード側は、次作のアルバムのレコーディングをタンジェリン・ドリームのクラウス・シュルツのプロデュースのもとにイギリスで行なう事を決定。日本のロック・グループ初のイギリス録音は、1975年11月に、ロンドン郊外にあるヴァージン・レコードのマナー・スタジオに於いて、3週間に渡って行なわれたが、前作程の好セールスを上げる事が出来ず、またマネージメントへの不満や人間関係で煮詰まってしまい、高橋正明(後の喜多郎)、伊藤祥、高崎静夫、深草彰らが脱退して、1976年には解散に追い込まれてしまった。　一方、68年に日本マーキュリー・レコードという自主制作レコード会社より、「恋の夜汽車」というシングルをリリースした名古屋のB級GSグループであったサイレンサーと、バーンズというGSグループが合体して1970年に結成されたのが、コスモス・ファクトリーである。彼らは地元、名古屋で活動している所を音楽評論家の立川直樹に見い出されて、1971年に東京へ上京して、立川直樹のもとで、プログレッシブ・ロック・バンドとしてのサウンドを煮詰めて、ピンク・フロイド、初期キング・クリムゾンのメランコリックな叙情派プログレ、そしてプロコル・ハルム、ムーディー・ブルース的な壮大な叙情派プログレ・サウンドを確立した。1973年にハンブル・パイの来日コンサートの前座を務めると、日本初の本格的なプログレ・バンドとして四人囃子と共に高い評価を受け始めて、1973年 9月にアルバム「トランシルバニアの古城」をコロムビア・レコードより発表した。当時としてはまだ珍しかったメロトロンやムーグ等を駆使した壮大悲愴のスケールを持つ叙情派プログレやオルガンやヴァイオリンをフィーチャーしたブリティシュ・オルガン・プログレなど、初期クリムゾンと、ピンク・フロイド色が強く表われた日本初の純粋なプログレッシブ・ロック・アルバムであり、彼らの最高傑作であったが、その後は次第にコンパクトでキャッチーなサウンドへと

深草アキが結成した観世音(右端：深草)

変化して行き、商業的にも煮詰まってしまい、1977年に解散してしまった。

GS世代とは違った若い世代のミュージシャンであったこれらのグループは、1971年頃に結成され、1974年〜1975年にかけてレコード・デビューを果たして、カルメン・マキ&OZの1stアルバム「カルメン・マキ&OZ」(1975年)、ファー・イースト・ファミリー・バンドの1stアルバム「地球空洞説」(1975年)、四人囃子の1stアルバム「一触即発」(1976年)と2ndアルバム「ゴールデン・ピクニックス」(1976年)といった様に、デビュー・アルバムが爆発的な好セールスを記録し、前作以上の条件や宣伝をかけたのにも関わらず、商業的な失敗に終わってしまい、これを理由に、1976年〜1977年にかけて解散に追い込まれる、といった同じ足跡を辿ってしまった。これは、1970年〜1973年にかけて暗中模索の中から急激に発展を遂げて、犇き合っていたロック・グループ達が、1974年7月31日〜8月11日にかけて、福島県郡山市の郊外にある開成山公園で開催された日本のロック史上最大の野外ロック・フェスティバル「ワン・ステップ・フェスティバル」に出演して大きな注目を浴びて、1974年〜1975年にかけて一斉にレコード・デビューを果し、今までのフォーク・ムーヴメントに代わり、日本のロックが商業音楽の中での地位を急速に得て、1975年には、空前の日本のロック・ブームが訪れた為に、このムーヴメントの中心グループ達のデビュー・アルバムが大ヒットを飛ばした訳だが、「プログレは死語だ」と書き立てた音楽評論家や、ニューミュージックやフュージョンの台頭に伴うハード・ロックの衰退、プロダクションやスタッフ側の不整備などの要因によって、再び、急速に状況的、商業的に煮詰まって行った為である。

そして、この1975年、プログレ第1世代を境に、プログレッシブ・ロックの流れは、アンダーグラウンド・シーンへと潜行してしまい、再び日本の商業音楽シーンの中で、メジャーな地位を築く事は無くなってしまったのである。

〈ワン・ステップ・フェスティバルの日程と出演〉

8月4日——神無月、サンハウス、陳信輝グループ、イエロー、ウェスト・ロード、トランザム、リタ・クーリッジ&クリストファーリン、沢田研二&井上尭之バンド

8月5日——ダウン・タウン・ブギ・ウギ・バンド、つのだひろ&スペース・バンドあんぜんバンド、エディー藩&オリエント・エキスプレス、クリエイション、四人囃子

8月8日——南正人、異邦人、南無、外道、シュガー・ベイブ、センチメンタル・シティ・ロマンス、はちみついっぱい、ミッキー吉野グループ

8月9日——デイヴ平尾&ゴールデン・カップス、めんたんぴん、信天羽、VSOP、ラブ、グレープジャム、宿屋の飯盛り、上田正樹とサウス・トゥ・サウス、かまやつひろし、オリジナル・ディラン

8月10日——宮下フミオ&ファーラウト、サディスティック・ミカ・バンド、内田裕也&1815ロックンロールバンド、キャロル、ヨーコ・オノ&プラスティック・スーパー・オノ・バンド

Chapter III 幻の黄金期 〈1976年~1979年〉

"多様化するプログレ/アンダーグラウンドへの潜伏"

1 多様化するプログレッシヴ・ロックのスタイル

1975年には空前の日本のロック・ブームが訪れ、四人囃子、ファー・イースト・ファミリー・バンド、コスモス・ファクトリーなどのプログレ第Ⅰ世代のグループ達が、日本の商業音楽シーンの中でもメジャーな存在として活躍したのだが、「プログレは死語だ」と書き立てた音楽評論家(ロックの一音楽形態として、プログレッシブ・ロックは現在でも、世界中で根づいているが、日本のこの当時の自称"ロック評論家"達が、1960年代末期から1970年代初期にかけてイギリスやアメリカを中心として生み出されたロックが、その後、ロックの中で多様化して行き、様々なロック形態として発展を遂げて行った事を正しく捉えていなかった為に、プログレッシブ・ロックを70年代初期に於ける流行音楽として片付けてしまい、日本に於いてマスコミやメディアの間で、「プログレは古い、死語だ」という考えが定着してしまったのである。)や、ニューミュージックやフュージョンの台頭、プロダクションやスタッフ側の不整備などの要因によって、急速に状況や商業的に煮詰まってしまった。このプログレ第Ⅰ世代のグループ達は、サウンド的にも、プログレッシブ・ロックという意識は強かったものの、当時の日本に於ける流行音楽であったピンク・フロイドからの影響が強く、またディープ・パープルやユーライア・ヒープといったブリティッシュ・ハード・ロックを土壌にしたサウンドが主流であり、当時の日本の商業的なロックとしての側面が強く、自ら様々な形態のプログレッシブ・ロックを吸収して、プログレッシブ・ロックの中だけで自らの音楽を追求する"プログレ・ミュージシャン"と呼べる存在ではなかったのである。(このプログレ第Ⅰ世代以前にプログレッシブ・ロック・アーティストとして活躍したミュージシャン達の中で、この時期以降にプログレッシブ・ロックを相変らず追求したミュージシャンは一人もいなく、多くの者はプロ・ミュージシャンとして現在でも活躍しているが、他の音楽へ転身してしまっている。平たく言えば、"一時期、流行っていたから、プログレを演ってみた"という意識が強かったのである。)そして、このプログレ第Ⅰ世代が衰退し始めた1976年頃から、このプログレ第Ⅰ世代に代わって、より本格的なサウンドを持ち、純粋に様々なプログレッシブ・ロック・サウンド形態を追求する新しい世代のグループ達が登場して来たのである。東京では1975年~1976年にかけて、新月の母体となるセレナーデやHAL、マンドレイク、破天荒、クェーサー、美狂乱(美狂乱は静岡で結成されたグループだが、東京を中心として活動を行なっていた。)、関西では魔璃鴉、天地創造、カーラド・スコープ、だててんりゅうなどのグループ達が結成され、活動を開始し、80年代に於いてより明確になって行く、東京と関西のグループ達のサウンドの差の母体となる様々な要因を生み出して行ったのである。1975年以前には全国に両手で数えられる程度の数しか存在しなかったプログレッシブ・ロック・グループが、70年代後半に爆発的な数に膨れ上がって行った訳であるが、これは70年代の初めにはピンク・フロイドやキング・クリムゾン、YES、EL&Pといった大メジャーのグループ達のアルバム程度しか、日本で発売されていなかったのが、70年代後半にはジェネシス、ジェントル・ジャイアントなどを初めとする数多くの、そして様々なプログレッシブ・ロック・サウンドのアルバムが日本でも発売されて、プログレッシブ・ロックへの知識と興味が増大して行った事や、ミュージシャンの持つ演奏力の向上、また、プログレッシブ・ロックの一つの主役であるキーボードが、70年代前半まではムーグ、アープ、プロフェット、マトリックスといった高価な海外製品しかなかったのが、70年代後半にはコルグ、ローランド、ヤマハなどの国産メーカーが、アマチュア・ミュージシャンでも手に入れる事の出来る手頃な価格の国産キーボードの製造を開始し、また海外メーカーの価格自体も円高などにより下がった事なども、一つの要因として見逃せない影響を及ぼしたのである。これらの事を背景として、70年代後半に、本当の意味に於いての"プログレッシブ・ロック・ミュージシャン"が、日本で育って行き、プログレに対して充分な知識と興味、演奏技術、楽器を手に入れたミュージシャン達の手によって、最も純粋なプログレッシブ・ロックが生み出されて行った。皮肉な事だが、「プログレは死語だ」と決めつけられて、メディアやレコード会社から、最も無視をされていたこの時期こそ、日本のプログレッシブ・ロック史上、最も創造的な黄金期であったのだ。

2 "幻"の黄金期を迎える東京

先に挙げた様に、イギリスのプログレッシブ・ロックのレコードの国内発売の多様化から、最も影響を受けたのは、東京周辺のグループ達であった。特に70年代半ばに結成されたグループ達は、日本に於いて、ピンク・フロイドの次にメジャー・グループであったキング・クリムゾンとEL&Pからの影響を受けたサウンドが主流であった。キング・クリムゾンの影響下のグループとしては、静岡の美狂乱が1974年、P-モデルの前身グループとして有名なマンドレイクが1973年に先駆的な存在として結成されている。双方のグループ共に結成当初はブリティッシュ・ハード・ロック色が強いサウンドであったが、1976年頃には明確にキング・クリムゾンを意識したプログレッシブ・ロック・サウンドを確立して本格的

なライブ活動を開始している。アウターリミッツの前身グループであったメビウスも1976年に結成され、キーボード・トリオにも関わらず、クリムゾンのナンバーを数多く取り上げていた。また、初期キング・クリムゾンの持つメランコリックな叙情サウンドとジェネシスから影響された新月の母体となったセレナーデも、1974年にキーボードの花本とボーカルの北山を中心として結成されたアウト・オブ・コントロールというグループを発展させた型として、1975年に結成されている。これらのキング・クリムゾンからの影響下にあるサウンドを追求していたグループのうち、美狂乱はキング・クリムゾンそのもであり続けようとしたサウンドを追求して、後期キング・クリムゾンのサウンドを通じて、オリジナリティーに昇華させたサウンドを確立、マンドレイクは初期クリムゾンの持つ暗黒の世界を描くドラマチックな構成のプログレッシブ・ロック・サウンドを悲愴感やエロティシズム、残酷に満ちた世界を鮮明に映し出すシュールな歌詞によって表現する世界を生み出し、メビウスは初期クリムゾンのメランコリックな世界と、クリムゾンの持つ和声法や対旋律をアンサンブルによって聴かせるサウンドへアプローチを始め、1979年にアウターリミッツを結成する事によって、これに本格的な取り組みを始めた。これらのキング・クリムゾンからの影響を持つグループ達は、キング・クリムゾンのサウンドを通じて、自らのオリジナリティーを確立したが、各グループの結成時期には真剣にキング・クリムゾンのコピーに取り組み、研究を重ねた結果に辿り着いたものであった。　一方、EL&Pから影響を受けたキーボード・トリオとしては、四人囃子に加入したベースの佐々間正英やキーボードの茂木田多加が、和光大学内で1973年頃に結成したミスタッチあたりが先駆的な存在であったが、1976年頃に破天荒、クェーサーらを筆頭に、数多くのグループが活動を開始した。その中でも、破天荒、クェーサーの両グループは純粋にEL&Pサウンドを追求し、また卓越した演奏力を持つグループとして際立った存在であった。

1975年～1976年頃から結成、活動開始したキング・クリムゾンとEL&Pからの影響を受けたグループ達を先陣として、1977年に入ると、様々なプログレッシブ・ロック・サウンドを吸収したグループ達が、一斉に活動を開始した。グリーンの母体となった、ユーライア・ヒープやブラック・サバスとキャメル的なサウンドを融合させたキャメロット、キング・クリムゾンに和旋律や歌舞伎を取り入れた独特のサウンドを持つシュール・モア、クィーンやレッド・ツェッペリン、スパークスから影響を受けて、東京のハード・プログレッシブ・ロックの先駆的な存在となったムーン・ダンサーの前身グループのサイレン、トリアンビラートに影響を受けたキーボード・トリオの魔法陣や、ぬり壁、阿媚叫喚、また、カンタベリー系のジャズ・ロックからの影響を受けたムーン・チャイルド、メサイア、ベラドンナ、カレイド・スコープなどのプログレッシブ・ジャズ・ロック勢や、ハード・プログレッシブ・ロック・サウンドであった初期のKENSOらも活動を開始。更に1978年にイギリスでプログレッシブ・ロックの救世主として騒がれてUKがデビューすると、80年代前半の東京のプログレッシブ・ロック・シーンの主流となるUKサウンド派の先駆的な存在で

新月のアルバム発売の広告

新月のファンクラブ会報「月刊新月」

マンドレイクのライヴのチラシ

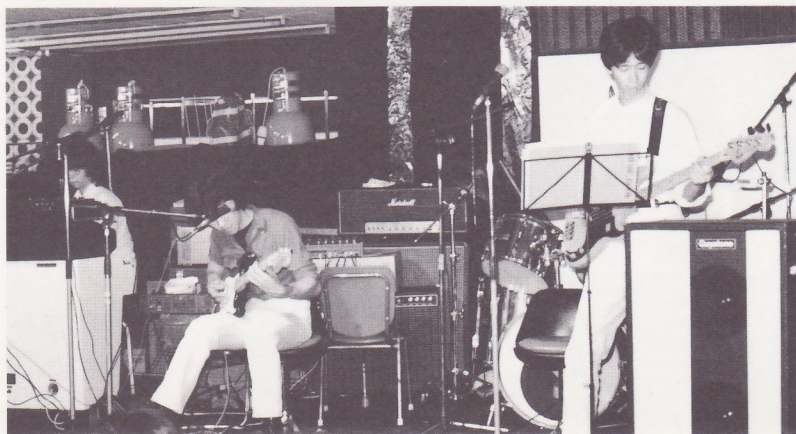
全盛期の美狂乱（1978年：吉祥寺シルバーエレファント）

あるグリーンが、キャメロットを母体として結成される、といった具合に、イギリスの様々なプログレッシブ・ロック・サウンドから大きな影響を受けて、純粋にプログレッシブ・ロックを追求するミュージシャン達が、一斉に活動の火蓋を切り、アンダー・グラウンド・シーンの中で、1978年〜1979年頃には、最盛期を迎えたのである。

1978年11月25日には、当時、日本で唯一のプログレッシブ・ロックの専門雑誌であった「フールズ・メイト」紙の主催により、これらのグループを集めたイベント“From The New World”が御茶ノ水の全電通ホールに於いて行なわれて、このイベントに出演したグループの中から、新月、美狂乱らが脚光を浴びて行った。セレナーデ、HAL、ベラドンナなどの幾つかのグループを合体させて、1976年暮れに結成された新月は、初期キング・クリムゾンのメランコリックな世界とジェネシスのシアトリカルなサウンドを母体としながら、日本的な演出を加味したサウンドを確立して、フールズ・メイト誌の支援のもとに、他の追従を許さない存在として頭角を現わし、この時代の東京のグループとしては唯一、1979年にビクターレコード内に新設されたZENレーベルより、アルバム・デビューを果たし、また美狂乱は渋谷屋根裏や吉祥寺シルバーエレファントに於いて精力的ライブ活動を展開して、キング・クリムゾンと寸分違わないエキサイティングな演奏を繰り広げて、アンダーグラウンド・シーンの中で“美狂乱フリーク”と呼ばれる熱狂的なライブ・ファンを生み出す伝説的な存在となって行き、新月、美狂乱は、70年代後半の東京の幻の黄金期の頂点に立つグループとして名を馳せていった。なお、この時期に結成されたアウターリミッツとKENSOは、未だ未だ暗中模索段階であり、彼らの本領が発揮されるのは80年代に入ってからの事である。

これらの70年代後半に登場してきたグループ達の大きな共通点としては、海外のプログレッシブ・ロック・グループから多大な影響を受けていること、そして、海外のあるグループのサウンドを徹底的に研究した（あるいはコピー）土壌のもとに自らのサウンド作りを形成している事、また、特に、この時期の東京では、フュージョン・サウンドの中で育ってきた演奏技術を身に付けたミュージシャン達が多い事もあって、歌のパートよりも、イントゥルメンタル・パートに比重を置いたサウンド、あるいは全編イントゥルメンタル・サウンド指向である事。（彼らが影響を受けたグループもキング・クリムゾンやEL&P、カンタベリー系のジャズ・ロックなど、イントゥルメンタル指向のグループばかりであった。）などが挙げられる。そして、これらの傾向と土壌が、80年代に入るとより一層、明確な形として、後続のグループ達へ受け継がれていき、“東京のプログレッシブ・ロック・サウンド”を形成して行くのである。また、イントゥルメンタル指向、テクニカル・サウンド指向は、これらのプログレ・グループが、プリズム、スペース・サーカス、クロスウィンドといったフュージョン系のプログレッシブな感性を持つジャズ・ロック・グループ達と密接な関係のライブ活動やメンバー交流による影響も大きな要因であり、また、「プログレは死語だ」とメディアから無視された為に、商業的に“売れる”事を一切諦めて、自分達の好きなサウンドを自分達の為に追求する事に徹し、アンダーグラウンド・シーンへ潜伏して行った事も要因の一つとして挙げられる。

この“幻”の黄金期を形成した要因を幾つか挙げて来たが、もう一つ、大きな出来事がある。それは、日本で唯一のプログレッシブ・ロック専門のライブ・ハウス「吉祥寺シルバーエレファント」が1978年に開店した事である。1976年〜1977年に一斉にライブ活動を始めたグループ達は、この当時、渋谷屋根裏（美狂乱、新月、キャメロット等が出演していた。）を中心として、他には渋谷ジャン・ジャン（クェーサー等が出演）、吉祥寺DAC801（マンドレイクが根城にしていた。）、高円寺レッド・ハウス（観世音、アウターリミッツ、シュール・モア等が出演）などのマイナーなライブ・ハウスに各々が悪条件のもとに細々と出演するといった程度しか活動の場を持てなかったが、1978年初頭に「吉祥寺シルバーエレファント」が開店すると、東京のこれらのアンダーグラウンドな存在のグループ達が、一斉にシ

結成当時のアウターリミッツ（1979年：下北沢五番街）

初期のグリーン

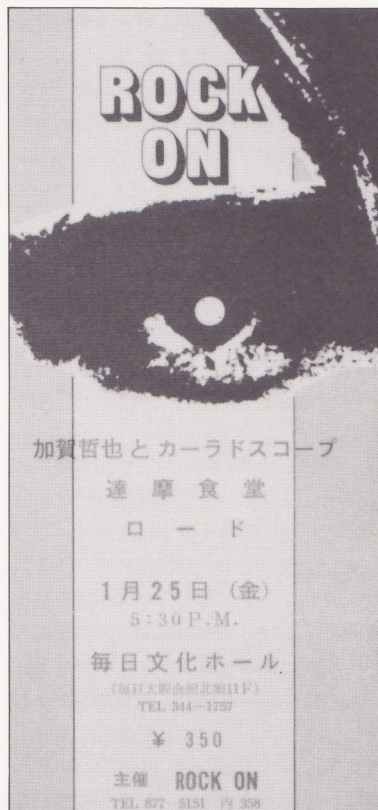
ルバーエレファントに於いて精力的な活動(美狂乱、新月、グリーンらは1ヶ月に2回ぐらいのペースで出演していた。)を開始。吉祥寺シルバーエレファントの開店は、70年代後半のシーンを育成させ、1979年に訪れる最盛期に対して大きな貢献を果したのである。吉祥寺シルバーエレファントの存在は、開店した1978年から現在までも、東京のプログレッシブ・ロック・シーンにとって、最も大きな支えとなっており、吉祥寺シルバーエレファントのライブの1つ1つの歴史がそのまま、70年代末期〜現在までの東京のプログレッシブ・ロック・シーンの歴史と言っても過言ではない。

こうして一斉に膨れ上がったシーンの中で活動するグループ達は、1979年にはピークを迎えたが、より一層、「プログレは死語だ」というレッテルを貼るメディアの風潮や、世間ではフュージョンやテクノ・ポップ、パンクなど新しいロックの波が急激に誕生して行く激動のロック時代であった為に、70年代初期のイギリスのプログレッシブ・ロック・サウンドは"古臭いもの"として映り、彼ら自身も時代に合った新しい"プログレッシブ(=進歩的)・ロック"を追求するべく、テクノ・ポップやオルタネイティブ・ニューウェーブなどのサウンドへ転身を図り、(マンドレイクは、1979年にP－モデルと改名。また新月は1981年に解散して、ギターの津田とキーボードの花本はフォノジェニックスを結成、といった具合)1980年を境にして急激にサウンドの転身や解散に追い込まれて行き、80年代に入ると、UKから影響を受けたサウンドのグループや、ジャズ・ロック勢台頭と共に、消滅してしまった。

3
関西プログレの源流

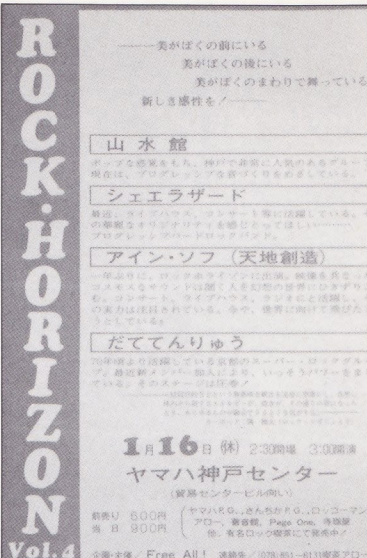
キング・クリムゾン、EL&Pを始めとするインストゥルメンタル指向の強いテクニカルな海外のプログレッシヴ・ロック・サウンドから純粋に影響された東京のプログレッシヴ・ロック・シーンに対して、関西のプログレッシヴ・ロック・シーンのグループ達は、グラム・ロックやクィーン、ユーライア・ヒープなどのハード・ロックとプログレッシヴ・ロックを融合したサウンドを日本語によって表現する事を追及した。

関西に於けるプログレッシブ・ロックの歴史は、タイガースに次ぐ関西の大御所GSグループであったリンド&リンダースのリーダーの加賀てつやが、リンド&リンダースを解散後の1971年頃に結成したカーラド・スコープから始まる。カーラド・スコープは桑名晴子がコーラスで参加していたが、加賀てつやのポップなボーカルとフルートをフィーチャーしたピンク・フロイド的なサウンドであり、コスモ・ファクトリーやファー・イースト・ファミリー・バンドといったグループ達のムーヴメントに位置するグループであった。またカーラド・スコープと共に関西プログレ・シーンの、黎明期を作り上げたグループとしては、1971年にキーボードの隣雅夫が結成した京都のだててんりゅうが有名な存在であった。結成当初のだててんりゅうはブリティッシュ・ハード・ロック色の強いキーボード・トリオであったが次第にEL&Pからの影響の強いプログレッシヴ・ロック・サウンドへと成長して、関西に於けるロック・イベントに精力的に参加をして行き、キーボードの隣のエマーソン張りのパーカッシヴなオルガン・プレイは、アマチュア・グループでありながら、音楽評論家達から注目を浴びる存在であった。これら70年代前半の関西のグループ達は、四人囃子、コスモ・ファクトリー、フライド・エッグといった日本のロック・シーンのメジャー・グループ達と同様の流れを持つグループ達に過ぎなかったが、1975〜76年にかけて登場して来た若い世代のグループ達によって、本当の意味に於いて関西のプログレ・シーンの源流が作られて行くのであった。1972年〜75年頃にかけて関西のロック・シーンは、ちょうど"関西流のロック・サウンド"の創世期にあたり、桑名正博が在籍していたファニーカンパニーや、上田正樹とサウス・トゥ・サウス、ソー・バット・レビュー、ウェスト・ロードなどの関西弁を取り入れたブルース・ロックの全盛期であり、また、アマチュア・ミュージシャンの間では、T.レックス、デビット・ボウイや外道などのグラム・ロックや、チッ

関西プログレ最古参のカーラド・スコープのライヴ・チケット

関西ハード・プログレの創始者"魔璃鴉"(1975)

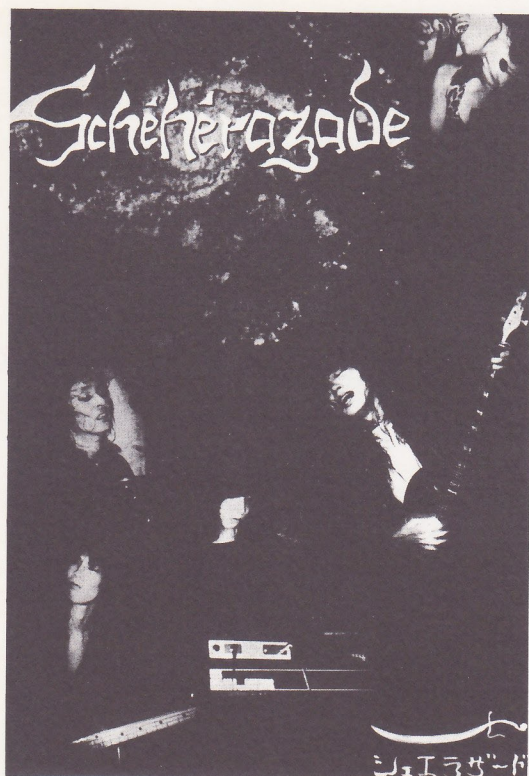
キン・シャックやウイッシュボン・アッシュといったブルースやハード・ロックが混然一体となったブリティッシュ・ロックのコピーが流行っていた時代であった。そして関西ハード・ロックの源流を築く先駆的な存在であるだるま食堂、ブラインド・エキスプレスらも結成されて活動を開始した時期でもあった訳だが、これらのグループのサウンドのルーツとしては、T.レックス、ウィッシュボーン・アッシュ、ユーライア・ヒープ、キッチン・シャックなどの"あくの強い"ロック・サウンドと、歌心に重点を置いたロック感性が強く存在していた。また、上田正樹とサウス・トゥ・サウス、ウエストロードといったブルース・ロック勢で占められていた大阪に対して、グラム・ロックやハード・ロックといった新しい感性を持ったグループ達は、神戸と京都を中心として活動を行なっており、こういった土壌の中で、"関西流ハード・プログレッシヴ・ロック"と、"関西流のジャズ・ロック"という2つの流れの関西流のプログレッシヴ・ロック・サウンドを生み出したグループ達が、1975年〜76年にかけて、神戸を舞台として登場して来たのである。"関西流ハード・プログレ"の創始者である魔璃鴉は、だるま食堂やブラインド・エキスプレスといったハード・ロック・グループの一つとして、1972年に神戸で結成された。結成当初はユーライア・ヒープのコピーバンドとしてスタートした彼らは、1974年にメンバー・チェンジをして、キーボードの難波正司とドラムスの福島正彦が加入すると、ブリティッシュ・ハード・ロックを基本としながらも、イエス、クィーン、初期のキング・クリムゾンなどの影響を受けたプログレッシヴ・ロック・サウンドを融合させた"ハード・プログレッシヴ・ロック"へと発展して行き、神戸ヤマハ・センターを始め、京都サーカス&サーカス、拾得などのライブ・ハウスに於いて精力的な活動を展開して、1976年頃には地元関西に於いて、だるま食堂、ジャック・ダニエル、ブラインド・エキスプレスらと共に絶大な人気を誇る存在として君臨する様になった。そして、この魔璃鴉に憧れ、触発された若いミュージシャン達の中から、1977年には元飢餓同盟の平山照継、元ジギーの五十嵐久勝、大久保寿太郎、元週末放浪者集団の引頭英明らが集まって、シェラザードが結成され、また高校時代からやっていた乱舞流のリーダーの中嶋一晃も、1976年に永川敏郎らが加入すると、魔璃鴉に触発されたサウンドへ転身して、80年代から現在まで関西プログレ・シーンの先陣に立ち続けているミュージシャン達が、一斉に活動を開始して、関西プログレッシヴ・ロックの源流を明確に確立して行き、また"神戸プログレ・ルネッサンス"が1976年〜79年に作り上げられて行った。前記した関西ハード・プログレ・サウンドを作り上げて行ったグループ達の共通点としては、平山継照は週末放浪者集団(ページェントのドラムスの引頭英明や、DADAの小西健司らが在籍)や飢餓同盟(DADAの小西健司、ケネディーのドラムスの安田隆が在籍)を通じて、T.レックス、外道などのグラム・ロックからの影響の強いサウンドをやっており、また中嶋一晃も、ランブルの初期にはT.レックス、グランド・ファンク、外道などのコピーをやっていた、という例からも解るように、プログレ以前の音楽的な土壌としてグラム・ロックは重要な要因であり、またユーライア・ヒープやクィーンといったプログレッシヴな要素を持つハード・ロック・サウンドから最も影響を受けたサウンドを、あくまで日本語で表現する歌心に重点を置く、という手法を用いた点である。また、ステージングやヴィジュアル・イメージの点に於いては、グラム・ロックの影響を

感じる派手な衣装や厚塗りのメイクが取り入れられていた。こうして、東京のプログレ・シーンとは音楽的、状況的にかなり異った形成をして行った“関西流ハード・プログレ”は、神戸というある程度、限られた人脈の中で、他のグループのメンバー同志との交流が深く、また、このハード・プログレ勢と時期を同じくして、アース・シェイカー、山水館を始めとした、新しい世代による関西ハード・ロック・ムーヴメントと密接な関係と人脈を共有しながら、急激に発展を遂げて、1979年にシェラザードと山水館が合体して結成されたノヴェラの登場によって、関西のロック・シーンの中で、メジャーな存在である不動の位置を築いて行った。そして、洋楽プログレからの純粋な影響が強く、フュージョンやテクノ・ポップとの密接な関係を保ち、アンダーグラウンドな位置に潜伏して行った東京のシーンとは対照的な形成の歩みを、80年代に入ると、より一層、独自の道を歩んで行く事になる。

一方、“ハード・プログレ”とは別のプログレッシヴ・ロックであった“関西流のジャズ・ロック”は、アイン・ソフの前身グループであった天地創造の歴史から始まる。天地創造はもともと、神戸在住のギタリストの山本要三が高校時代(1971年)に結成した、レッド・ツェッペリンやチッキン・シャック、テイストといったブルース・ロックのコピーバンドであったが、1973年頃にはウイッシュボン・アッシュの影響を受けたブリティッシュ・ロック・サウンドを確立して、一時期はメジャーデビューの話も持ち上がったが、最終的にはこの話がまとまらずに、グループは煮詰まってしまって、またこの頃に山本自身が、ソフト・マシーンやキャラバンといったカンタベリー系のジャズ・ロックに興味を持ち始めて、音楽的方向転換を計画。1975年に山本の他、藤川(Kbd)、鳥垣(B)、名取(Ds)というライン・ナップとなった彼らは、プログレッシヴ・ロック・グループとしての第一歩を歩み出した。ハード・プログレの先駆的存在であった魔璃鴉と共に、地元神戸のヤマハ・センターが主催したイベント“ロック・ホライゾン”を始めとした数多くのライブをこなして、70年代後半の関西プログレ・シーンを代表するグループとして、地元で知れ渡る様になり、1976年にはマハビッシュヌ・オーケストラなどから影響を受けたカリスマや、ウイッシュボン・アッシュから影響を受けて結成されたアーデル・ハイド・ハイジ(ラウンド・ハウスの前身)といったプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ達が登場して、関西に於けるジャズ・ロック・シーンを形成して行った。(ラウンド・ハウスも、1979年には、キャメル、ブランドX、リタン・トゥ・フォーエバーから影響を受けたジャズ・ロック・サウンドを確立。)東京のシーンの中でも、70年代後半にはカンタベリー系のジャズ・ロックから影響を受けたグループが数多く誕生したが、東京のグループが、ニュークリアスやソフト・マシーンといった、ジャズ的アプローチのインター・プレイに重点を置いたのに対して、天地創造やラウンド・ハウスは、キャラバンやキャメルといったアンサンブル派のグループからの影響が強く、全編インストゥルメンタル・サウンドでありながら、関西プログレのグループ達が大切にしていた歌心を反映した“泣き”のメロディーに重点を置いたサウンド作りをしていた。(同じマニアックなプログレッシヴ・ジャズ・ロックを吸収したサウンドを形成しても、東京と関西という異なったフィルターを通して作り上げたサウンドに明確な差が現れる点が興味深い。)

1975〜76年頃に、グラム・ロックやハード・ロックを土壌に持つ若い世代の中から、神戸に於いて生み出された魔璃鴉、天地創造、シェラザードといったグループ達が作り上げた“関西プログレの波”は、大阪のハード・ロック・ムーヴメントを中心とした“大阪のロック・パワー”と密接な関係を保って、関西一円に急激に広がって行き、京都のフロマージュ、大阪のラウンド・ハウスらが、1978〜79年には次々と登場して来て、関西プログレ・シーンを築き上げた訳だ。また、関西のロック・シーンに於いて重要な位置を占めて行き、それとは対称的に、ジャズ・ロック勢は80年代に入ると、ハード・ロックやハード・プログレ勢に押されて衰退して行った。また、この“神戸プログレ・ルネッサンス”を支えた存在として、神戸元町にあるヤマハが主催していたイベント“ロック・ホライゾン”が果たした役割は大きく、また京都のサーカス&サーカスや、大阪バハマといったライブ・ハウスの存在も大きかった。特に大阪バハマは若手グループを積極的に出演させ、1983年に大阪・梅田にキャンディー・ホールがオープンするまでの間、関西のプログレ・グループを育成する場として、大きな影響力を持っていた。更に“ロックの甲子園”とも呼ぶべき、ヤマハ主催のロック・コンテスト“8.8.”も関西のロック・シーンの爆発的な成長へ大きな貢献を果した。そして、この関西プログレ・シーンが誕生して行く中で、シェラザード(後のノヴェラ)や天地創造、DADAなどを一手に手掛けてマネージメントしていた、リユカの山田次郎氏と、この山田氏との共同プロデュースによって、日本で

神戸元町ヤマハのイベント“ロック・ホライゾン”のチラシ(1)

神戸元町ヤマハのイベント“ロック・ホライゾン”のチラシ(2)

アイン・ソフ(1980年)

初めての日本のプログレ・レーベル"ネクサス"がキング・レコード内に1980年に発足されて、神戸のグループ達が一斉にアルバムを発表し、その中からノヴェラというスター・グループが生み出されて行った事が、関西プログレ・シーンの発展の最も重要な出来事であったのだ。

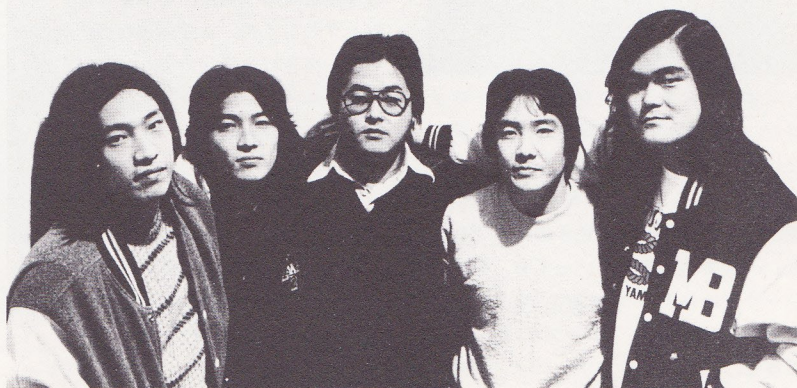
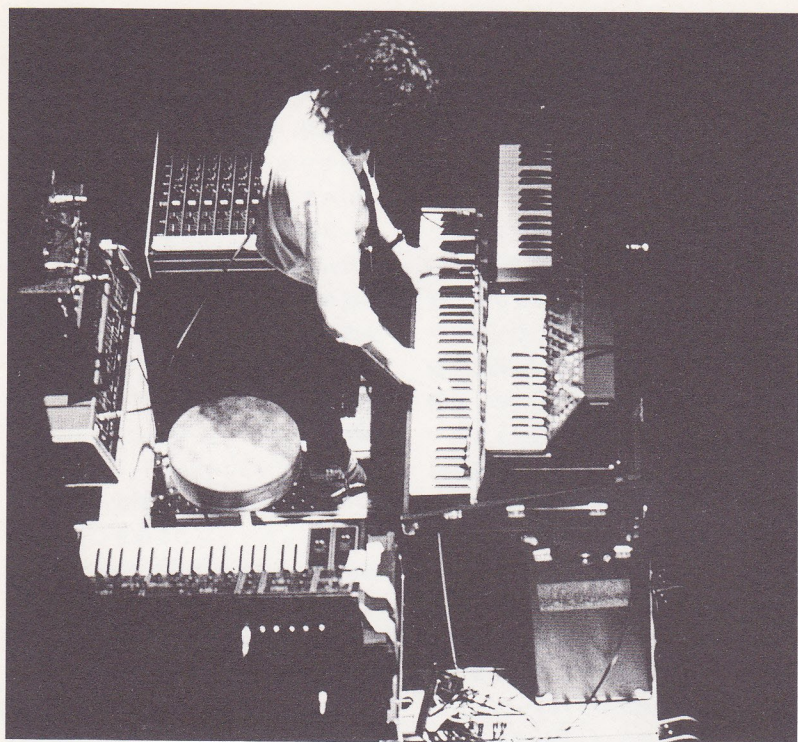
4 ジャズ・ロック・ムーヴメント

イギリスの様々なスタイルのプログレッシブ・ロックを吸収して、アンダーグラウンド・シーンに於いて"幻"の黄金期を形成して行った70年代中頃から後半にかけての東京のプログレッシブ・ロック・シーンの動きとは別に、東京に於いて、もう一つのムーヴメントがあった。それは、チック・コリアのリタン・トゥ・フォーエバーやマハビッシュヌ・オーケストラ、ウェザーリーポートといったアメリカの"プログレッシブ"な感性を持ったフュージョン・グループ達から影響を受けたジャズ・ロック(フュージョン)・サウンドの台頭である。(日本に於いて、"フュージョン"というと、"軽い"、"BGM的な"とか、"無個性音楽"の代名詞的なイメージが支配的であり、これはラリーカールトン、リーリトナー、渡辺貞夫、高中正義といった連中のサウンドから来る印象が強い為であろうが、"フュージョン"とは、本来、「混合」という意味であり、従来のジャズ・サウンドの中に、ロックやクラシック、ラテン、etc、といった音楽を取り入れた進歩的なジャズ・サウンドの事を指した言葉であった。いわゆる、ジャズからのアプローチの"プログレッシブ・ロック"としての側面も強く持った音楽であり、フュージョンの初期の頃は、こういったアーティスト達が多かったが、日本ではより"BGM的な"取っ付き易い音楽ばかりが、紹介されて、商業的な成功を納めてしまったので、誤解を招いてしまった。)

ジャズの帝王、マイルス・デイビスが1969年に発表したアルバム「ビッチェズ・ブリュー」は、電気楽器とポリリズムの導入によって、従来のオーソドックスなジャズへの訣別を表明したサウンドであり、ジャズ界を騒然とさせて、一部の保守的なジャズ・ファンに頭を抱えさせたが、同時にロック・ファンから熱い注目を浴びる様になり、70年代以降の新しい"ジャズ時代"へ向けての大きな扉となった。そして、このマイルスの新しいサウンドに参加していたチック・コリアはリタン・トゥ・フォーエバー、ジョー・サビヌルとウェイン・ショーターはウェザーリポート、ジョン・マクラフリンはマハビッシュヌ・オーケストラ、ハービー・ハンコックはヘッド・ハンターズを結成して、新しいジャズ・ムーヴメント"クロス・オーバー(後にフュージョンと呼ばれる様になる。)"が一斉にアメリカ全土、そしてヨーロッパに広がって行った。この動きと彼らの追求したサウンドは、正に、ジャズに於ける"プログレッシブ"サウンドであったのである。

そして日本に於いても、1973年に渡来して、現在までニューヨークで活動を続ける川崎燎が、1975年に発表にしたアルバム「プリズム」によって、日本人の手によるクロス・オーバー=フュージョン・サウンドの口火は切られた。そして1977年には、ジョージ・ベンソンの「ブリージン」の大ヒット、ニューヨークのセッション・ミュージシャン達によって結成されたスタッフ、そしてリー・リトナーのヒット及び、相次ぐ来日によって、日本国内に於いても、各レコード会社の制作欲が強くなり、78年には、デイヴ・グルーシン、リー・リトナー、ハービー・メイ

ソン、etcのメンバーをバックに起用した渡辺貞夫の「カリフォルニア・シャワー」が大ヒットを飛ばすと、ジャズ畑、あるいはスタジオ・ミュージシャン達のリーダー・アルバムが一斉に制作され始めて、渡辺香津美、大村憲司、秋山一将、深町純、高中正義らのスターを生み出していき、1978年に1979年には、空前の"フュージョン・ブーム"が誕生して行った。日本に於いて、こうしたジャズ・ミュージシャンやスタジオ・ミュージシャン達の手による"心地良いBGM"としての色合いの強いフュージョンが、商業的な音楽シーンで一世を風靡する中、チック・コリアのリタン・トゥ・フォーエバーやビリー・コブハム、マハビッシュヌ・オーケストラといった初期のアメリカのフュージョンから影響を受けたロック・フィールドからのアプローチによる"プログレッシブ"な感性を持つフュージョン(ジャズ・ロック)・グループも登場して来たのである。このプログレッシブな感性を持つロック・アプローチのジャズ・ロック・グループの旗頭は、リタン・トゥ・フォーエバーやビリー・コブハム、サンタナから影響を受けたロック・フィーリングの強いプログレッシブなジャズ・ロックや、ラテン音楽、メロウなジャズ・サウンドなどの多方面な要素を持ったプリズムであった。ロード・ランナーというロックン・ロール・グループに在籍していたギターの和田アキラと、ジャコ・パストリアスから影響を受けたベースの渡辺健を中心として結成されたプリズムは1975年頃から、高円寺次郎吉、渋谷屋根裏等の都内のライブ・ハウスを中心に精力的なライブ活動を開始。ハード・ロックやロックン・ロールが全盛期の当時の日本のロック・シーンの中でテクニカルなインストゥルメンタル・サウンドを全編に繰り広げる彼らの存在は、先進的であり、またアル・ディメオラやサンタナからの影響の強い超絶的なギター・プレイを聴かせる和田アキラを中心としたプリズムの高度な演奏力は、今までの日本のロックの常識を破る驚異的な存在として、また当時、日本に於いて絶大な人気を誇っていた四人囃子のギタリストの森園勝敏の加入によって、都内のライブ・ハウスの噂さの的となって行った。何回かのメンバー・チェンジを経て、1977年には、和田アキラ(G)、渡辺健(B)、久米大作(P)、伊藤幸毅(Organ&Synth)、鈴木徹(Ds)、森園勝敏(G)の6人編成となり、平均年齢弱冠21歳という、正に新しいロックの時代の申し子であったプリズムは1977年9月にアルバム「プリズム」でデビューを果たすと、スウィング・ジャーナル誌などの保守的なジャズ雑誌では、「これはロックで、フュージョンではない」、またロック雑誌では「これはロックではなく、ジャズだ」という様に、ロックとジャズの狭間に位置するプリズムの先進的なサウンドは賛否両論を呼んだが、当時人気ナンバー・ワンのギタリストであった森園勝敏が加入している事や、実際に和田アキラのギターを耳にした強烈な印象によって、ギター・キッズ層を中心として爆発的なセールスを記録。フュージョン・ブーム到来の中で、一躍、日本のロック・シーンの人気グループへと踊り出たプリズムの商業的な成功によって、スペース・サーカスやクロス・ウィンドといった都内のライブ・ハウスで活躍していたプログレッシブな感性を持つロック・フィールドからのアプローチのフュージョン・グループ達が、一斉にデビューを果たし、同時期に台頭して来たカンタベリー系のジャズ・ロックから影響され、アンダーグラウンド・シーンで活動するジャズ・ロック・グループ達とは一線を引く、メジャー・シーンの中でのムーヴメントを確立した。また、1980年になると、今まで保守的なジャズやフュージョン畑で活躍してきたプロ・アーティスト達の中からも、マライアや、カズミ・バンド、KEEPなどの先進的な感性を持つプログレッシブ・ジャズ・ロック・サウンドを追求するグループ達が、このムーヴメントに加わって来た。1970年代後半にラテン系の軽快なフュージョン・サウンドのグループ、小林泉美&フライング・ミミ・バンドで活躍していたサックスの清水靖晃、ギターの土方隆行、ベースの渡辺モリオが笹路正徳(Kbs)、山本秀夫(Ds)らを加えて、1977年にユピテル・レコードよりオーソドックスなジャズ・アルバム「マライア」を発表。このアルバムの制作によって意気投合した彼らは、先進的な音楽感性を持つスタジオ・ワークの為のチーム"マライア・プリジェクト"を結成して、彼らが今までやって来た保守的なジャズ&フュージョンを一掃した先進的なプログレッシブ・ロック&ジャズ・ロックと斬新なポップス・サウンドを打ち出したサウンドを確立して、1980年に新生マライアとしての1stアルバム「Yen Trick」を発表したのを始め、村田有美、亜蘭知子などのプロデュース等のスタジオ・ワーク活動を精力的に開始した。彼らのサウンドは、クィーンやトト、UKといったプログレッシブな感性の強いロックを母体を母体として、ジャズ、ポップスなど幅広い音楽を吸収した"新しいタイプ"のプログレッシブ・ロック・サウンドであり、プリズムらが確立したアメリカのプログレッシブなフュージョンから影響されたジャズ・ロックとは違った感性を持っていた。マライアに触発されて、今までジャズ畑で活動していたギタリストの渡辺香津美も、マライアのメンバーを全面に起用したカズミ・バンドを結成して、1981年にアルバム「頭狂好児唐眼」を発表するなど、プロ・ミュージシャンの間で、マライアの存在は、先進的なロック、ジャズ&ポップスの手本として、大きな影響を及ぼす様になって行った。
しかし、先にメジャー・シーンの中でプ

一世を風靡したプリズム(1978年)

DADA

ログレッシブなフュージョンのムーヴメントを確立したプリズム一派や、マライア集団は、プロ・ミュージシャンの中で、大きな音楽的刺激と、演奏面での技術の向上に於ける影響を与える存在として高い評価をされたが、一般の音楽ファンへの"受け"には今一歩、及ばず、1982年頃になる、商業的な煮詰まりと、ミュージシャン自身の他の音楽への興味の移り変わりにより、プリズム以外のグループは急激に消滅して行き、この時期以降のプログレッシブな感性を持つジャズ・ロックの活動の場は、アンダーグラウンド・シーンへと移行して行ってしまった。

5 前衛音楽の台頭

日本に於いて、プログレッシブ・ロックが、"最も創造的な"エネルギーで満ちていた1970年代後半のシーンの中で、前記した3つのムーヴメントの他に、前衛音楽の台頭も見逃せない動きの一つであった。一言で前衛音楽といっても、クラッシック畑の中での"現代音楽"や、ジャズ畑の中での"フリー・ジャズ"は古くから存在し、プログレッシブ・ロックの範疇の中での"前衛音楽"と、同様の要素を持っており、本来ならば、明確に分類する事は難しいが、ここでは、あくまで、"ロック・フィールドからのアプローチによる前衛音楽"として、プログレッシブ・ロックに属するものだけに限定して、話を進める事にする。ロック・フィールドからのアプローチによる"前衛音楽"に位置するものとしては、1960年代にニューヨーク音楽家、詩人、画家、映画作家らが集合した総合芸術集団"フルクサス"に参加していたヴァイオリンの小杉武久が、1969年に帰国して結成したタージマハール旅行団や、クラッシック畑を抜け出したパーカッション奏者の山下勉、寺山修司の劇団「天井棧敷」の音楽担当をしていたJ. A. シーザーらが、前衛音楽の草分け的な存在であったが、プログレッシブ・ロックとしての、より明確な音楽形態とスタンスを打ち出したアーティストが、マジカル・パワー・マコである。マコはギター、シンセサイザー、パーカッション等を1人でこなすマルチ・インスルトゥルメンタル・プレイヤーであり、16才で東京へ上京して、現代音楽の作曲家の第一人者である武満徹に見い出されて、武満徹の関係したTV、映画等の音楽を手掛けた後に、1973年暮れにポリドール・レコードよりアルバム「マジカル・パワー」を発表。現代音楽を学んだ素養のもとに、初期アシェラ・テンペルや、ヘルダーリンといった実験的なジャーマン・ロック&アシッド・フォークと、東洋の民族音楽を融合させ、攻撃性と楽園風な美意識を表現した自由奔放なプログレッシブ・ロック・サウンドを確立した。マコはその後も、メジャー・レコード会社であるポリドールから、アルバム「スーパー・レコード」(1975年)、「JUMP」、(1977年)等を発表し続けて、プログレッシブ・ロックというフィールドに於ける"前衛音楽"の先駆的な役割と影響を果たした。そして、このマコの動きや、タンジェリン・ドリームなどのジャーマン・エレクトロニクス前衛音楽に触発されたアーティスト達が、70年代後半になると、アンダー・グラウンド・シーンの中で活動を開始した。活動と言っても、プライベートな録音活動が主であり、この録音された作品を支持する者達によって、自主制作レコードのレーベルが、細々とながら発足されて行った。東京では、小ロのレコードの委託プレス会社であったコジマ録音が1976年から、自社レーベル"ALM"を設立して、小杉武久や、前衛音楽をやっていた頃の坂本龍一等の作品の制作を開始し、また輸入レコード店であった中野レコード周辺の手によって、1976年VOICEレコードが設立されて、ブレスト・バーンやカルナ・キューレなどの作品が制作された。また関西では、歌手から音楽評論家に転向して、雑誌「ロック・マガジン」の編集長やNHKの「若いこだま」のDJを務めていた阿木譲が、1978年にヴァニティー・レコードを設立してDADA、SABといったジャーマン系の実験的なエレクトロニクス・ミュージックの作品や、Phew、あがた森魚などの実験的なロック作品を発表。これらのレーベルが海外で、タンジェリン・ドリームなどのジャーマン実験プログレや、イーノがブームになっていた70年代の後半の日本に於ける前衛音楽の台頭を促進させたばかりか、80年代の半ばに定着して、その後、ブームを作る"インディーズ(自主制作)"の先駆的な役割を果した。また、80年代初頭に流行するテクノ・ポップや、バッハ・リヴォリューション、DADA、そして喜多郎や姫神センセーションに至るエレクトロニクス・ミュージックの母体としても、大きな影響を与えたのであった。

Chapter IV 関西と関東の独自の発展期 〈1980年〜1983年〉

1 ハード・プログレ誕生 "ソヴェラ神話"

前章の「関西プログレの源流」の所で述べたが、関西流のハード・プログレッシブ・ロック・サウンドは、1972年にハード・ロック・グループとして神戸で結成された魔璃鴉によって生み出された。結成当初はユーライア・ヒープのコピーなどを中心としたグループであった魔璃鴉は、1974年にメンバー・チェンジを行なうと、従来のブリッティシュ・ハード・ロック・サウンドを母体としながら、クィーン、イエス、初期キング・クリムゾンなどの影響を受けたプログレッシブ・ロック・サウンドを取り入れ始めて、"関西流のハード・プログレッシブ・ロック・サウンド"を確立した。地元神戸を中心として精力的なライブ活動を展開して、ジャック・ダニエルやブラインド・エキスプレスなどのハード・ロック・グループ達と共に、絶大な人気を誇る存在として君臨する様になって行き、この魔璃鴉に憧れ、触発された若いミュージシャン達の中から、1977年には元飢餓同盟の平山照継、元ジギーの五十嵐久勝、大久保寿太郎、元週末放浪者集団の引頭英明、そして青方均が集まって、シェラザードが結成された。(結成当初は"パンドラ"という名前であったが、すぐに改名。)

シェラザードの曲のほとんどを作曲していた平山照継は、兵庫県立西宮北高校2年生の時に(1974年)、小西健二が結成したブルース&ハード・ロック・バンド、週末放浪者集団に加入して、1年間程活動した後の1975年春に、先に週末放浪者集団を脱退したベースの小西健二と、ドラムスの安田隆と共に飢餓同盟を結成。飢餓同盟は、外道の様なグラム色とプログレ色の見え隠れするハード・ロック・サウンドのグループであったが、精神性や思想的なものを第一に考えていた小西に対して、よりサウンドや演奏面のグレードを図ろうとした平山は、1976年夏に飢餓同盟を脱退して、ジギーというグループをやっており、ユーライア・ヒープのようなハード・ロックをやりたかったベースの大久保寿太郎と共に、1977年3 月にシェラザード結成へと駒を進めたのである。魔璃鴉のサウンドはユーライア・ヒープ等のハード・ロックを母体としながら、クィーン、イエス、初期キング・クリムゾンなどのプログレッシブ・ロックの要素も取り入れていたが、サウンドの全体としては、ツイストやだるま食堂などの様な関西流の泥臭いポップスや、レゲエ的なカラーも持ち合わせた混然一体としたサウンドであり、まだまだ純粋にハード・プログレッシブ・ロック・グループと呼べるものではなかったが、シェラザードはユーライア・ヒープ風のブリティッシュ・ハード・ロックを明確にバック・ボーンに持ち、ブリティッシュ・ロックが持つ陰鬱さと、平山が当時好んで聴いていたジェネシス、キャメル、イエス、クィーンなどのブリティッシュ・プログレの華麗なキーボード・アレンジを融合させたサウンドを確立。また、歌詞の面に於いても、魔璃鴉は当時の日本のロックやポップスの平均的なラヴ・ソングであったのに対して、シェラザードの平山照継は、ヨーロッパを題材としたお伽噺的なものや、シュールな叙情詩といったファンタジー・ワールドを描いて、よりサウンドとマッチした世界を作り上げた。魔璃鴉によって試行錯誤されて生み出された"ハード・プログレ"は、シェラザードによって、明確なスタイルとして完成されたのである。そして、ヴィジュアル・イメージやライブのステージングに於いても、T・レックスやデビッド・ボウイといったグラム・ロックから影響された魔璃鴉やだるま食堂らの派手なメイクと衣装といったものをシェラザードは、妖艶なメイクと、中性的なイメージの衣装といった自分達の"世界"へと洗練させて行き、こうして、"関西流のハード・プログレ(正式には、彼らは自分達の事を、"プログレッシブ・ハード"と呼んでいた。)"のスタイルは生み出されたのである。

シェラザードは地元神戸・元町にあるヤマハ・センター主催のイベント"ロック・エナジー"や、京都のサーカス&サーカス、大阪バハマといったライブ・ハウスを中心として精力的なライブ活動を開始。1978年春には、ドラムスの引頭が脱退し、元だるま食堂の秋田鋭次郎が加入し、またキーボードの青方も就職を理由に脱退して、中島一晃と共にランブル、フロマージュで活動していたキーボードの永川敏郎が加入し、平山照継(G)、大久

ノヴェラのデビュー・ライヴのチラシ

ノヴェラのファン・クラブ会報

保寿太郎(B)、五十嵐久勝(Vo)、永川敏郎(Kbs)、秋田鋭次郎(Ds)というライン・アップとなったシェラザードは地元神戸を中心として、急激に人気を博して行ったが、シェラザードは地元神戸を中心として人気の高かったハード・ロック・グループ、山水館へボーカルの五十嵐が度々、ゲスト出演する様になって、バンド内の体制が次第に崩れていき、1978年12月20日の大阪バハマでのライブを最後に解散してしまった。しかし、この時期にシェラザードがロッキンf誌のテープ・コンテストに応募したデモ・テープが、グランプリに決まり、シェラザードを抱えていたプロダクションのリュカの山田次郎氏の「コンテストのグランプリに輝いた良い時期にやめてしまうのは、もったいない、この機会により強力なグループを作ろう」という提案のもとに、時を同じくして解散した山水館のベースの高橋良郎、ギターの山根基嗣と、シェラザードの平山、五十嵐、永川、秋田が集まり、シェラザードのサウンドを引き継ぐスーパー・グループとして、1979年2月にノヴェラが結成された。ノヴェラは、地元で急激な人気を得てきたシェラザードと山水館の主力メンバーが集まり結成された為に、地元の音楽関係者やロック・ファンから、大きな期待を寄せられて、1979年4月に兵庫ピッコロ・シアターに於いて、デビュー・コンサートを成功させると、一躍、関西に於いて人気ナンバー・ワン・ロック・グループとしての不動の地位を築き上げた。また、10月には新宿ロフトにて東京初ライブを行ない、彼らの噂さを聴きつけたファンによって新宿ロフト開店以来、第2位の動員を記録する超満員のファンを集めて、早くも、ノヴェラは、人気ロック・グループとしての第一歩を踏み出した。

1980年3月にはキング・レコード内にプロデューサーのたかみひろし氏によって新設された国内初のプログレ・レーベル"ネクサス"の第一弾アーティストとして、大々的なプロモーションのもとに、デビュー・アルバム「魅惑劇」が発売され、爆発的なセールスを記録して、ノヴェラは日本の人気ロック・グループの仲間入りを果たして、ハード・プログレッシブ・ロックを定着させた。

シェラザード時代にはブリティッシュ・ロックの持つ陰鬱さの臭いが強かったが、初期ノヴェラでは、よりクィーンやキッスといったハード・ロック色と、自分達のオリジナリティーに溢れるカラフルなハード・プログレッシブ・ロック・サウンドへ発展させた。

日本の80年代初期のロック・シーンに於いて、スターダムに伸し上がったノヴェラの存在は強く、アマチュア・ミュージシャンの間で、彼らのサウンドをコピーするグループが爆発的に生まれ、(関西では、ソフィア、ペール・アキュート・ムーン&テルズ・シンフォニアのベースの井上靖が加入していたオーヴァーチェア、マグダレーナ&テルズ・シンフォニアのボーカルの徳久恵美が以前にやっていたノヴェラの完コピ・グループ、HZ、東京ではアルメリア、アベル、名古屋のルーシェルらの数多くのグループが、ノヴェラのコピー・グループとして出発した。)ノヴェラの作り上げた"ハード・プログレッシブ・ロック・サウンド"を手本とするグループ達が、1980年〜1983年にかけて、日本全国に数多く出現してきて、"ハード・プログレッシブ・ロック"="ノヴェラ"という図式とジャンルを形成して行ったのである。地元関西に在住して活動するグループで、今までメジャー・デビューを果して、これだけ商業的な成功を収めたグループがいなかった為に、特に地元関西でのノヴェラの存在は大きくプログレッシブ・ロックという枠のみならず、関西の当時のロック・シーンの中で、1970年代末期〜1980年代初期にかけての東京などの日本のロック・シーンは、フュージョン、そしてテクノ・ポップ、パンクなどという具合に、数々の新しいロック・サウンドが目ま苦しく主導権争いを繰り広げていた激動の時代であ

ノヴェラが生み出したファッション"ヴィオロン族"

第1期ノヴェラ

ったのにも関わらず、関西に於いては、これらの世の中の動きよりもノヴェラの影響の方が強く、アースシェイカー、アクション、マリノ、44マグナムといった関西のハード・ロック・グループ達によって形成される“関西ハード・ロック黄金期”への発展にとって大きな役割を果たして、関西ではこれらのハード・ロックとプログレッシブ・ロックが猛威を振う独自のシーンが、ゆるぎない地位を長い間に渡って、保ち続けていく事になるのである。

また、アマチュア・ミュージシャン達への影響力とは他に、シェラザード、ノヴェラに参加したミュージシャン達自身の手によって、大久保寿太郎はシェラザードII、ファッション、そしてスターレス、青方均はシェラザードII、ファッション、引頭英明はシェラザードII、ファッション、そしてページェント、高橋良郎、山根基嗣、秋田鋭次郎はアクション、永川敏郎はジェラルド、五十嵐久勝はパズル、仙波基はペール・アキュート・ムーン、西田竜一はヴィエナ、そして平山輝継はテルズ・シンフォニアといった様に、数々のプログレッシブ・ロックやハード・ロック・グループが結成されて、関西に於けるプログレッシブ・ロック、そしてハード・ロックの人脈の幹を形成して行った。

ノヴェラは、日本のプログレッシブ・ロック史上に於いて、最も影響力を持つ存在のグループであったが、その影響はミュージシャン達へのみならず、ノヴェラを通じて、プログレッシブ・ロックを知り、聴き始める、といった“プログレ・ファンやリスナー”の増大へも大きな役割を果たして、1985年前後に訪れる日本のプログレの最盛期を形成するグループ達とファン層も、ノヴェラから生み出されたものを土台としたものであった。そして、日本のプログレッシブ・ロック史上に於いて、“女の子のファンに騒がれて支持の高い”ノヴェラの女の子のファンの中で、1980年～1983年頃にかけて、“フランス人形”のようなヴィオロンを着て、ジェラルミンのケースにバンドのステッカーをべたべた貼りまくって持ち歩く、“ヴィオロン族”なるファッションも生み出され、また少女マンガの中でも度々、彼らが登場するといった社会現象に至るまでの存在であった。

ノヴェラは、日本のプログレッシブ・ロック・シーンに於いて、一つのカルチャーを生み出したグループとして、現在までのプログレ・シーンの中で影響を振っているのである。

2 UK/ジャズ・ロック・サウンドの新しい波

関西ではノヴェラの出現によって、ハード・プログレッシブ・ロックが猛威を振い始めた1980年に、東京のプログレ・シーンは一つの時代の転換期を迎えた。

1970年代後期～1980年代初期にかけての東京のロック・シーンはフュージョン、テクノ・ポップ、パンクなどの新しいロックの波が目まぐるしく主導権争いを繰り広げていた激動の時代であり、70年代初期のイギリスのプログレッシブ・ロック・サウンドから影響を受けて活動していた70年代中頃～後期にかけての東京のプログレ・グループ達のサウンドは、“古臭いもの”として映り、また彼ら自身も時代に合った新しい“プログレッシブ・ロック(進歩的なロックという意味)”を追求するべく、テクノ・ポップやオルタネイティヴ・ニューウェーヴなどのサウンド

へ転身を図るなど、1980年代を境にして、数多くのグループが、サウンドの転身や解散に追い込まれて行った。

こうした転換期の中で、プログレの救世主として、ジョン・ウェットン、エディー・ジョブリン、ビル・ブラッフォード、アラン・ホールズワースの4人によって結成されたUKが、1979年5 月に来日すると、このUKの"新しい響き"を持ったサウンドに触発されたグリーン、ネガスフィアなどの新しいグループ達が次々と結成され、また、アクア・ポリスやKENSOといった新しい感性を持ったジャズ・ロック的なリズムを取り入れた最もテクニカルなインストゥルメンタル指向の強いグループ達が、1980年を境にして、吉祥寺シルバーエレファント界隈の主導権を握るようになった。特に80年代の東京のプログレ・シーンの顔となってゆくKENSO、ネガスフィア、アウターリミッツの3グループは共に、1977年〜1978年に結成され、サウンド的な試行錯誤を重ね、81年〜82年にかけて、自らの追求するサウンドを確立して、東京のプログレ・シーンへ本格的に登場して、以降、長年に渡って、東京のプログレ・シーンのサウンドや体質を形成して行くリーダー的な存在として、この時期に育って行ったのである。また、KENSO、ネガスフィア、アウターリミッツの3グループは、自分達の追求するサウンドをようやく確立し始めた、グループとしての"幼年期"の頃(1980年〜1981年)に、彼らにとっては実験的な試行の一貫として、自主制作レコード(KENSOは町田にあるレコード店パムから1stアルバム「KENSO」を1981年に、アウターリミッツは観世音と共にメイド・イン・ジャパン・レコードの第一弾としてジョイント・アルバム「メイド・イン・ジャパン」を1981年に、またネガスフィアはLLEレーベルのオムニバス・アルバム「精神工学様変容」に一曲参加、といった様に作品を発表している。)を制作しており、ノヴェラの爆発的なセールスによって、メジャー進出へ意気揚々としていた関西のプログレ・シーンとは対照的に、これらの東京のグループ達は、いち早く、メジャー・レコード会社に売り込む事を諦めて、自分達の好きな様にサウンドを作れるインディーズ・レーベルへ目を向けて、これらのグループが日本のプログレ・シーンに於いて、インディーズ・レコードの先駆的な役割を果たしたのも、一つの大きな共通点であった。先に挙げたグループで、アウターリミッツ以外のグループ達(アウターリミッツは、この時期に活動したグループとは異なった、キング・クリムゾンやPFMといった70年代初期のプログレ・サウンド・カラーを持った存在であり、KENSO、ネガスフィア、アクア・ポリス等が最も活躍した1982年〜1984年頃には一時、活動停止をしており、その後、メンバーチェンジの末に、最盛期を作り上げたグループであった。一言で言えば、彼らとは一時代前のサウンド・カラーをベーシックに持ち、また彼らは一時代後に自分達の持ち味を生かしたサウンドを確立したグループである。)のうち、ケンソーは、1974年相模原高校内で結成されたハード・ロック・グループを母体としながら、次第にサウンドを変化させ、中期PFMのプログレッシブ・ロック・アンサンブルとパット・メセニー等のジャズ・ロックを融合させた独自のプログレッシブ・ジャズ・ロック・サウンドを確立して、80年代前半の東京のプログレ・シーンのリーダー的存在であった。また、アクア・ポリスは早稲田大学内にあるプログレッシブ・ロックのサークル"イオロス"内で、ブラッフォード、ブランドX、キング・クリムゾン、イエスなどのコピーをしてきた仲間の中から、オリジナルを演奏するグループとして1980年に結成されたグループで、ブラッフォードやブランドXを強く感じさせるジャズ・ロック・サウンドのグループであった。そして、ネガスフィアは、1978年にハード・ロック・グループとして出発して、1980年暮れにリーダーの川崎薫がメンバーを一新して、イエス風のプログレッシブ・ロック・サウンドへ変化、その後、次第にUKから影響されたジャズ・ロック・サウンド色が強調されたサウンドを確立したグループであった。これらのグループはインストゥルメンタル指向が強く、ジャズ・ロックの要素が支配的なサウンドであった為に、高度な演奏技術、とりわけドラマーの力量のよって左右されてしまう音楽であった。その結果として、各グループのドラマー達は、各グループのライブでの看板として成長し、吉祥寺シルバーエレファント界隈では、KENSOの山本治彦、ネガスフィアの菅野詩朗、アクア・ポリスの竹迫一郎といったドラマー達が、美狂乱の佐藤政治と共にスター・プレイヤーとして人気を集める、といった風潮が強い時代であった。

70年代の後半から、様々な音楽性や状況の違いによって生み出された東京と関西のプログレ・シーンの独自性は、80年代前半のこうした状況の中で明確に確立されて行った訳だが、様々な相違点の中で、80年代前半から現在にかけて、大きな影響を及ぼす要因がある。それは、グループ結成の為のメンバーの交流の場である。東京では1980年初期の頃から、大学内にプログレッシブ・ロックのサークルが数多く誕生して、このサークルで、数多くのプログレ・グループが誕生した。例を挙げるとアクア・ポリスを輩出した早稲田大学の"イオロス"や、アタラクシアやアウター・リミッツの荒牧隆を生んだ慶応大学の"ユーロ・ロック研究会"、フライング・ティー・カップやジャンキーズといったUKタイプのグループが数多くいた東京大学の"ブリティッシュ・ロック研究会"デジャヴやハッピー・ファミリーが在籍していた明治大学の"軽音楽同好会"などが有名。またプログレ・サークルではなくても、東京のグループの大半は大学や高校の音楽サークル内で結成されており、(アウターリミッツは武蔵野音楽大学、ハルやベラドンナは青山学院大学、KENSOは県立相模原高校、etc)結成当初は、必ず洋楽のプログレ・サウンドのコピーから出発しており、これらのプログレ・サークル内で、豊富にプログレッシブ・ロック・サウンドを吸収した上で、オリジナル・サウンドを追求するグループへと発展している。またメンバー捜しをする場合にも大学のサークルや、先輩、後輩といったつながりが大きい。従って、東京ではマニアックな洋楽指向のプログレ・サウンドのグループが数多く育ち、またグループの活動停止や解散も、大学卒業や就職に伴う場合が多い。これに対して、関西では、スタジオやライブ・ハウスのメンバー募集や、お互いのバンド間でのつながりによる紹介でグループが結成される場合が多く、この場合にはコピー時代はあまりなく、オリジナル・サウンドをすぐに始めるグループが多いのである。

この辺のグループ結成の場の体質の違いも、独自の発展への大きな要因の一つと言えよう。

Chapter V プログレ最盛期 〈1984年〜1987年〉

"プログレッシヴス・バトルとプログレッシヴ・ナイトが生み出したもの"

1 インディーズ・プログレ前夜

前項で述べたが、"プログレは死語だ"と決めつけるメジャー・レコード会社の大半は、日本のプログレ・グループをリリースする事には全く興味を示さず、唯一、ネクサス・レーベルを設立したキング・レコードも、リュカの山田氏絡みの神戸のグループしかリリースする事がなかった為に、レコードを発表する場をほとんど奪われてしまったプログレ・グループ達は、次第に自らのお金で、レコードを自主制作する事に目を向け始めた。早くも、1970年代の後半にエレクトロニクス・ミュージック&前衛音楽の分野では、ヴァニティー・レコードやALMレコード、VOICEレコードといった超マイナーな自主制作レーベルが、日本に於いて初めて設立されたが、よりプログレ然としたバンド物の自主制作としては、1981年東京・町田にあるプログレ専門レコード店の"PAM"が制作したKENSOの1stアルバム「KENSO」や、ヌメロ・ウエノが設立したメイド・イン・ジャパン・レコードから第一弾として発表された観世音とアウターリミッツのジョイント・アルバム「メイド・イン・ジャパン・」が、先駆的な作品として発表された。しかしこの時期の自主制作(インディーズ)は、300枚プレス以下のごく少ない数しか制作されず、リスナーに聴かせる為よりも自己満足的な行為の色合いが強かった。また、当時の日本に於いては自主制作レコードを取り扱うレコード店は少なく、まともに販売するすべがなかったのである。従って、この時期のインディーズはほとんどリスナーの目に止まる機会もないままに終わってしまったが、その後次第に、アヴァンギャルドやパンク系の自主制作レコード制作の動きが活発になってくると、東京を中心として、輸入レコード専門店で自主制作レコードを取り扱う店も増加して行き、1984年頃には、作り手側と売り手側、聴き手側との関係が整ったインディーズ・シーンが、現在の様な大規模のものではないが、誕生して行き、この中で、プログレッシヴ・ロックの自主制作レコードも地道に制作される様になって来た。特にメジャー・レコード会社への期待を一早く断った東京では、インディーズの制作や販売の情況も一早く整い、1984年にプログレの専門誌である「MARQUEE MOON」がベル・アンティーク・レーベルを設立して、フロマージュの1stアルバム「ONDINE」、LEEレーベルがネガスフィアの「Castle In The Air」とラクリモーザのアルバム、またバンドのメンバー自身の手によって制作された夢幻の1stアルバム「シンフォニア・デッラ・ルナ」、ピカレスク・オブ・ブレイメンなどのアルバムが、一斉に発表されると、ちょうど海外のプログレの新譜がほとんどなかった時期であったので、東京のプログレ・マニア層から、注目を浴び、特に今までの日本のプログレ・グループのレコードにあまりなかったヨーロッパ指向の強いシンフォニック・ロック・サウンドであった夢幻の1stアルバム「シンフォニア・デッラ・ルナ」は、初回プレス300枚をまたたく間に完売して、再プレスするという、今までのプログレの自主制作レコードからは想像もつかない好セールスを記録した。これらの一斉に発表された自主制作のアルバム達によって、洋楽指向の強いプログレ・マニア層の目を、日本のグループへ向けさせる大きなきっかけとなったのである。そして、こうして地道に作られたプログレ・インディーズの土壌をもとに、1985年に入ると、一気に大規模なシーンへ急成長を遂げる事になるのである。

夢幻の1stアルバム「シンフォニア・デッラ・ルナ」

2 プログレッシヴス・バトル/プログレッシヴ・ナイト、そしてプログレッシヴ・サーキット

東京ではKENSO、ネガスフィアといったジャズ・ロック系と、アウターリミッツなどのシンフォニック系のサウンドを持ったグループ達が成長を遂げ、またインディーズへ活動を向けて行き、関西ではノヴェラの商業的成功や関西ハード・ロック・ブームのもとにハード・ロックと密接な関係を持って発達したプログレ・シーンが確立され始めて、独自の発展を遂げて行き、東京、関西共に充分に実力を蓄えたグループ達が犇き合っていた1984年末〜1985年春にかけて、今後のプログレ・シーンを大きく左右するイベントが行われた。これが、「プログレッシヴ・ナイト」と、「プログレッシヴス・バトル・ライブ」であ。

「プログレッシヴ・ナイト」は大阪・梅田にあったライブ・ハウス"キャンディー・ホール"に於いて、1984年12月31日の大晦日の深夜から1985年1月1日の早朝にかけて行なわれたイベントで、ページェント、スターレス、ジェラルド、ソフィア、剣の舞、イヴ、ミダス、パズルといった当時の関西のプログレ・シーンを代表するグループが総出演。キャンディー・ホールは1983年6月に開店したばかりの"生のいい"ライブ・ハウスであり、開店当時から、ソフィア、スターレス、ページェント、ジェラルドなどのプログレ・グループやハード・ロックに力を入れており、定期的にイベントを行っていたが、「プログレッシヴ・ナイト」は、キャンデ

第1回「プログレッシヴ・バトル・ライヴ」のリハーサル中のアウターリミッツ

ィー・ホールの寺田氏を中心として、リュカの山田氏、マクランサの西村氏の協力を得て、行われたもの。ノヴェラの多大な影響や、ハード・ロック全盛期で、最も“熱く”なっていた大阪のロック・シーンの中で、キャンディー・ホールやバハマでライブを重ねて実力を蓄え、また、“ノヴェラに続け”というパワーに満ちていた地元のプログレ・グループを集めたこのイベントの開催は、実にタイミングの良いものであった。ロッキンf誌でも、“ザ・関西'85”という特集号が組まれて、当時の“最も熱くなっていた”関西のロック・シーンの中で、このイベントは大きく取り上げられて、地元はもとより、全国のプログレ/ハード・ロック・ファンから大きな注目を集めるチャンスとなった。このイベントによって、日本のプログレ史上で最もエキサイティングな年、1985年の幕は明けたのである。

このイベントを目の当たりに体験したマーキームーン誌のライターであった中藤正邦氏は、マーキームーン誌を辞めて、関西と関東を代表するプログレ・グループ達のオムニバス・ソノシート「Progressives'Battle」を企画。スターレス、ソフィアと共に地元関西で人気の高かったページェント、自主制作アルバム「シンフォニア・デッラ・ルナ」が好セールス中であった夢幻、そして剣の舞の関西の3つのグループと、一時的活動を中止していたが、新戦力を得て復活したばかりのアウターリミッツ、シルバーエレファントに於けるライブで人気の高かったネガスフィア、アクア・ポリスの関東の3グループの、計6グループによるオムニバス・ソノシートは、1985年3月に発表されると、予想外の反響を呼び、アウターリミッツのマネージメントをしていたヌメロ・ウエノと共に、発売記念イベントを企画して、日本のプログレ・シーン初の関東と関西のグループのバトル出演形式によるイベント「プログレッシヴス・バトル・ライブ」が、5月3日〜6日の4日間に渡って、吉祥寺シルバーエレファントに於いて開催された。5月3日が夢幻、5月4日がページェント/アウターリミッツ、5月6日がベラフォン/ネガスフィアというスケジュールで行われたこのイベントの開催によって、今まで違った環境のもとに成長を遂げてきた関東と関西のグループ同志の対抗意識が表面化され、ミュージシャンはもとより、スタッフやファン側にもこの対抗意識熱が広がって行き、このパワーによって、急激に日本のプログレ・シーンの最盛期が作られて行くのである。80年代の日本のプログレ・シーンは、表面的に見渡せば、「キング・レコードのネクサス・レーベル＝ノヴェラ一派のハード・プログレ」という単純な図式で成り立っていたが、この「プログレッシヴス・バトル・ライブ」によって、今までアンダーグラウンド・シーンに深く潜伏していたマニアックな洋楽指向のシンフォニック・ロック系のグループ達が脚光を浴びるきっかけが作られ、急激に、「インディーズ・レーベル＝シンフォニック・ロック系のグループ」という対抗勢力が力を蓄えて行った。また、このイベントは、今まであまり日本のプログレッシヴ・ロックに関心を示さなかったマーキームーン誌の読者を中心とするユーロ・ロックのマニア層が、日本のグループへ目を向けるターニング・ポイントとしても、大きな役割を果した。そして、関西V.S.関東という対抗意識の旗頭として、このイベントに於いて最も注目を集めたページェントとアウターリミッツは、このイベントをステップとして急速に成長を遂げて、インディーズ・プログレの旗頭、そして日本のプログレ・シーンを代表する人気グループへと育って行く事になるのである。

「プログレッシヴ・ナイト」と「プログレッシヴス・バトル・ライブ」の2つのイベントによって、急速に脚光を浴びて活性化された関西と関東のプログレッシヴ・ロック・シーンは、関西やハード・プログレ系のグループを中心とした「ファンタジア」、マニアックなシンフォニック系のグループを中心とした「プログレッシフ」や「ユニコーン」、バンド情報の為の新聞であった「Whimsy Angel」や「わっしょい」などのミニコミ誌に支えられて、増大して行き、数多くのグループがレコード・デビューを控えて犇き合っていたシーンのピークを迎えた1985年11月に、「プログレッシヴ・ナイト」と「プログレッシヴス・バトル・ライブ」の規模を広げた日

ロック・ライヴの情報誌「WHINSY ANGEL」のプログレッシヴ・ナイトの特集記事

本のプログレ史上最大のイベント「プログレッシヴ・サーキット」が開催された。このイベントは東京・渋谷エッグマン、横浜ライブスクェアー・ビブレ、名古屋エレクトリック・レディ・ランド、大阪キャンディー・ホールの全国4ケ所のライブ・ハウスを中心として、キング・レコードのネクサス・レーベル、メイド・イン・ジャパン・レコード、ディスク・ユニオン、コロンビア・レコード、バースディ・ソングが企画・主催したイベントであり、11月9日～11月20日にかけての期間で4ケ所合わせて、延べ20日、出演グループは、ジェラルド、センス・オブ・ワンダー、ページェント、アウターリミッツ、スターレス、ブラック・ペイジ、ソフィア、ルーシェルを始めとする総勢20グループに及ぶ、という大規模なものであった。この中で、スターレス、ソフィア、ブラック・ペイジ、ケネディーらの関西勢はキング・レコード内に新設されたネクサス・レーベルの“ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”で次々とレコード・デビューを果し、また10月にアルバム「ミスティー・ムーン」を発表したばかりであったアウターリミッツを始め、ページェント、アタラクシアらのシンフォニック系のグループは、メイド・イン・ジャパン・レコードからアルバムを発表し、他のグループ達もインディーズ・レーベルよりレコードを発表。このイベントを境に、数多くのグループ達が一斉にアルバムを発表して、リリース・ラッシュを迎えたのである。

プログレ最大のイベント「プログレッシヴ・サーキット」の日程

3 関西プログレとネクサス・ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ

80年代前半～中ばにかけての関西プログレ・シーンの中核は、ノヴェラを中心に形成されて行く人脈と、ノヴェラに触発され、ハード・ロックと密接な関係を保ちながら成長を遂げて行ったハード・プログレッシヴ・ロック・グループ達であった。この動きの最右翼に位置するグループは、シェラザードのベーシストであった大久保寿太郎が、青方均、引頭英明らと共に結成したシェラザードII、ファッション、そしてクライシストを経て、1984年に結成したスターレスと、土坂健司、貴智明、西田竜一、林信也らが集って、ノヴェラのコピーバンドとして1980年に結成されたソフィアである。スターレスはキングダムというハード・ロック・グループに在籍していたギターの中川隆雄、スネーク・チャーマーのドラムスをやっていた堀江睦男、ルシフェルというハード・プログレッシヴ・ロック・グループのボーカルであった宮本佳子、キーボードの上村禎徳という関西のハード・ロック&プログレッシヴ・ロック・シーンを渡り歩いてきた強者達によって結成されたグループで、レインボー、ジューダス・プリスト・タイプのブリティッ

スターレス

ジェラルド(永川敏郎)

シュ・ハード・ロックをベーシックとしたサウンドを売り物にしたグループであった。198年5月に大阪キャンディー・ホールに於いてデビュー・ライブを行い、その後、精力的なライブ活動を展開して、関西プログレ・シーンの中で一躍、人気グループへと成長を遂げて行った。1985年の秋に企画されたイベント「プログレッシヴ・サーキット」と前後して、キング・レコードのネクサス・レーベル内にノヴェラのプロダクション“リュカ”の山田氏の協力をもとに、“ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”が企画されて、スターレスは、このシリーズの旗頭として、先陣を切って12月にアルバム「銀の翼」を発表。ニューウェーヴ・サウンドへ転身してしまったノヴェラに代わるハード・プログレッシヴ・ロック・ムーヴメントの旗頭のグループとして、ファンから大きな期待を寄せられたが、小悪魔的な魅力で人気の高かったボーカルの宮本佳子(ジュラ)が、音楽性の相違を理由に脱退してしまい、代わって西垣宏子が加入したが、このジュラの脱退やプロダクションの不整備が商業的に反映してしまい、1988年4月には解散に追い込まれてしまった。

一方、ソフィアは、結成当初はノヴェラのコピー・グループであったが、ボーカルの貴がネバーランド加入の為に脱退、またドラムスの西田竜一もノヴェラに加入の為に脱退して、1982年には、土坂(G)、林(B)、森川(Vo)、細川(Ds)の4人によるライン・ナップに定着すると、ラッシュ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドを確立。東京へも早くから進出して、ヴィジュアル・スキャンダル、ルシフェル等と共に“仮面舞踏会”へも出演して、スターレスと共に関西のハード・プログレッシヴ・ロック・シーンの担い手として、ノヴェラのファンの女の子達の層を中心に人気を博して行った。ソフィアをバック・アップしていたキャンディー・ホールが設立した自主制作レーベル“キャンディー・レコード”より、ミニ・アルバム「ソフィア」を発表して、彼らの人気も最高潮に達して行ったが、1985年の中頃から、今までのラッシュ・タイプのプログレッシヴ・ロック・サウンドから、U2などのニューウェーヴ・サウンドへ変化をし始めて、1986年2月にキング・レコードのネクサス・レーベルからリリースされたメジャー・デビュー・アルバム「ディファイアンス」では、アーバン・ダンスの成田忍のプロデュースのもとに、ニューウェーヴ色が強調されたサウンドへと明確な変貌を遂げた。

ファンクラブ会報とミニコミ誌の数々

しかし、このサウンドの転身が、今までのプログレ・ファンから失望を買い、またソフィア自身も音楽的に行き詰まってしまい、1986年10月には解散してしまった。

また、関西在住のグループではなかったが、関西系の人脈とサウンドを持つグループとして、最もこの時期にシーンの中核であったのが、ノヴェラを脱退したキーボードの永川敏郎が、1984年に結成したジェラルドである。本家本元のノヴェラが、1985年に今までのハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドからニューウェーヴ・サウンドへと転身を図ってしまうと、ノヴェラ一派のプログレ・ファンからの期待を一身に集めて、ジェラルドは、“プログレッシヴ・サーキット”や“プログレッシヴ・ナイト”などのイベントを始めとして、精力的な活動を行い、関西系のハード・プログレ・シーン及び、

キング・レコードのリーダー的な存在、また、日本のプログレ最盛期に於いて、最も人気を誇るグループとして、シーンに君臨していたが、スターレスやソフィアなどの主要グループの相次ぐ解散によるネクサス・レーベル“ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”の商業的な失敗や担当ディレクターの退社によって、ネクサス・レーベルそのものが、日本のプログレ・グループのアルバム・リリースを打ち切ってしまい、アルバム発表の場を失い、またリズム隊の脱退を理由に、ジェラルドは1986年に活動停止をしてしまった。

こうして、ノヴェラを中心に形成された人脈の中で育った関西のハード・プログレ・シーンとネクサス・レーベル系のムーヴメントは、1986年を境に、急速に衰退して行ったのである。

ページェントのレコーディング風景(スタジオJAM)

関西プログレを支えたミニコミ誌「ファンタジア」

4 メイド・イン・ジャパン・レコードの台頭

“キング・レコードのネクサス・レーベル＝関西のノヴェラ一派のハード・プログレ”という既成勢力に対抗する新勢力として、日本のプログレッシヴ・ロックの最盛期に於いて、最も強い影響力を持っていたのが、洋楽指向の強いマニアックなシンフォニック系のグループを主力としたインディーズ・レーベルのメイド・イン・ジャパン・レコードである。メイド・イン・ジャパン・レコードは、ソシアル・コンプレックスというヨーロッパ盤の輸入卸売会社を経営していたヌメロ・ウエノが、アウターリミッツ、観世音らのグループのマネージメントを受け持つ様になり、メジャー・レコード会社へ彼らを幾ら売り込んでも、梨のつぶてであった為に、1981年に設立したインディーズ・レーベルである。第1弾作品として、観世音とアウターリミッツのジョイント・アルバム「Made In Japan」をリリース後は、しばらくレーベル活動を停止していたが、日本のプログレッシヴ・ロックが盛り上がりを見せ始めた1985年に、プログレッシヴ・ロックの大手輸入レコード店であったエジソンの資本をもとに、レーベル活動を再現して、1985年秋からアウターリミッツの1stアルバム「Misty Moon」を皮切りに、本格的なリリースを開始した。

先に行われた「プログレッシヴス・バトル・ライブ」や「プログレッシヴ・サーキット」等のイベントを通じて、東京の洋楽マニア層を中心に大きな期待を集めていたアウターリミッツのデビューアルバムは、「プログレッシヴ・サーキット」の開催最中、キングのネクサス・ネオ・プログレッシヴ・シリーズや、他のインディーズの作品のリリース・ラッシュ(1985年冬〜1986年夏)に先駆けで、最もタイミングの良い時期に発表され、また、今までのインディーズの作品とは、録音のクォリティーが比べものにならない程高い、本格的な24チャンネル・マルチ・レコーディングによる作品であった為に爆発的なセールを記録して、商業的な波に乗ったメイド・イン・ジャパン・レコードは、第2弾アルバムとして、1986年3月にページェントのデビューアルバム「螺鈿幻想」を発表。絶妙なヴァイオリン・プレイと、近代クラシックから影響を受けた本格的なシンフォニック・サウンドによって、東京の洋楽マニア層から絶大な人気を誇

ヤクルト・ホール出演中のページェント＋ブラック・ペイジ(1986年10月)

アウターリミッツの表看板の川口貴(vln)

っていたアウターリミッツと、対抗ノヴェラー派&キング・ネクサス・レーベルの最右翼に位置し、すば抜けた歌唱力を持つ永井博子の描く"怪奇幻想世界"をジェネシス流の叙情派サウンドによって表現して、また学芸会的な奇想天外のステージ・パフォーマンスによって、関西で絶大な支持を得ていたページェントという、東京と関西で最も人気を博していた2大グループを擁したメイド・イン・ジャパン・レコードは、日本のプログレ最盛期に於いて、ブームを起こして、今までメジャー・レコード会社が相手にしなかったマニアックなシンフォニック系のグループのアルバムを続々と発売して行った。アウターリミッツ、ページェントを始め、夢幻、ミスターシリウス、アタラクシア、ベラフォン、ヴァーミリオン・サンズ、マグダレーナ、ミダス、デジャヴなどの数多くのグループの作品を発表して、1986年を境に急速に衰退して行ったネクサス・レーベル一派や、他のインディーズ・グループ達とは対照的に、日本のプログレ・シーンを支える中心レコード会社へと飛躍的な発展を遂げて行き、またクラウン・レコードのVICEレーベルや、キング・レコード内に、ネクサスに代わる新レーベルとして1988年に設立されたクライム・レーベルなどのメジャー・レコード会社との共同プロデュースや、日本のプログレ・グループのマネージメント・オフィス"ヴィエナ・ガーデン"、ヨーロッパのプログレの再発シリーズ"エジソン・ユーロピアン・ロック・シリーズ"の運営なども含めて、今後の日本のプログレッシヴ・ロック・シーンの主導権は、メイド・イン・ジャパン・レコードへと移行して行った。

このメイド・イン・ジャパン・レコードの成功の要因は、当時のインディーズに於いて画期的な24チャンネル・マルチ・レコーディングを使用したメジャー・レコード会社の作品と変わらない録音クオリティーと完成度を持っていた事、既成のレコード会社の枠を超えた個性的な洋楽指向のサウンドを持つグループを擁していた事、ライブに於けるプロモーション用のソノシート配布や、アンダーグラウンド・シーンの中での宣伝活動、エジソンというプログレの大手レコード店との一体化した商業作戦、そして何よりも、日本のロック・シーンそのものが、既成のレコード会社からインディーズ・レーベルへと移行して、空前のインディーズ・ブームを形成して行く最中に、このインディーズ・ブームに乗った事である。

特に1986年秋にアウターリミッツとページェントの2グループによって東京・新橋ヤクルト・ホールに於いて行われたイベント「メイド・イン・ジャパン・フェスティバル」の動員数や、アウターリミッツの「ミスティー・ムーン」とページェントの「螺鈿幻想」のインディーズ・シーンに於ける記録的なセールス、そしてキング・ネクサス・レーベルのネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズに於いて、メイド・イン・ジャパン系の夢幻のアルバム「レダと白鳥」が、最も好セールスを示した事などが、日本のプログレ・シーンの流れが、今までのキング・ネクサス・レーベルからメイド・イン・ジャパン・レコードへ移って来た事を象徴していた。

そして、今後、現在までの日本のプログレ・シーンを作り出して行くのは、メイド・イン・ジャパン・レコード及び、ヴィエナ・ガーデンの手に委ねられて行くのである。

ヤクルト・ホール出演中のアウターリミッツ(1986年10月)

Chapter VI 解体から再生/新世代誕生 〈1988年～〉

1
解体から再生

1986年を境に、キング・レコードのネクサス・レーベルは日本のプログレ・グループのアルバム制作を中止してしまい、ジェラルド、ノヴェラ、テルズ・シンフォニア、スターレス、ソフィア、ペール・アキュート・ムーンなどのネクサス・レーベルのアーティストを中心とした主要な関西のプログレ・グループ達が、次々と解散や活動停止に追い込まれて行き、またインディーズ・レーベル系のネガスフィア、ルーシェル、ラクリモーザといったグループ達も、サウンドの行き詰まりや、商業的な理由によって、次々と解散して行き、1985年の最盛期には50以上の数のグループが活動していたのが、約1年後には、1/3以下の数へ激減してしまった。また、唯一、商業的な成功を納めて、軌道に乗っていたメイド・イン・ジャパン・レコード系のアーティストの中でも、表面的には相変わらず、絶大な人気を誇っていたアターリミッツとページェントも内部崩壊の危機を腹んだ状況を迎えていた。この一斉に訪れた最盛期と背中合わせの崩壊の危機の要因としては、主要グループのほとんどが、1980年代の初期に結成された同世代のグループであった為に、今までやって来たプログレッシヴ・ロック・サウンドを自分達なりに追求し尽くして、音楽的な方向転換を必要としていたグループが多かったことや、

VIENNAのデビュー記事

VIENNAの 1stアルバムのレコーディング風景

TERU'S SYMPHONIA

キング・ネクサス・レーベルの商業的不振による閉鎖、マネージメント側の不整備などが挙げられる。こうして一気に崩壊を迎えた激動の時期に唯一、生き残ったメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノは、この崩壊を食い止め、シーンを再び盛り上げる為牽引車役のグループを作る事を考え、元ジェラルドの藤村幸宏、元ノヴェラの西田竜一、アウターリミッツの塚本周成と荒牧隆、ページェントの中嶋一晃らを誘い、1987年春にヴィエナを結成。(ヴィエナのライン・ナップは最終的に、藤村、西田、塚本に元アフレイタスの永井敏巳)また、第3期ノヴェラに終止符を打った平山照継は、ノヴェラに代わるパーマネント・グループとして、元ペール・アキュート・ムーンの仙波基と井上靖、古井英明、下町香織(すぐにマグダレーナの徳久恵美に交替。)を集めて、テルズ・シンフォニアを正式なグループとしてスタートさせて、崩壊しかけていた日本のプログレ・シーンは再び活気を取り戻した。

メイド・イン・ジャパン・レコードのヌメロ・ウエノは、ヴィエナやテルズ・シンフォニアらをバック・アップする為に、キング・レコード内に、休止してしまったネクサス・レーベルに代わる新レーベル“クライム”を新設して、復興の為の準備を進めて、クライム・レーベルの第1弾として、そして日本のプログレ・シーンの復興の旗頭として、日本のプログレ・グループとしては破格の宣伝のもとに、1988年5月にヴィエナがデビューした。このヴィエナとテルズ・シンフォニアの存在によって、再び活気を取り戻した日本のプログレ・シーンの中で、デジャヴ、ソシアル・テンション、プロビデンスなどの若手グループ達も育成されたが、復興の象徴であったヴィエナが、ドラムスの西田竜一の脱退から、解散に追い込まれて、レコード・デビューから、9ケ月という短命で終わってしまった。そして、このヴィエナの解散は、80年代のプログレ・シーンを長年に渡って支えてきたプログレ・ミュージシャン達の一つの時代の終わりの象徴であり、世間でも、昭和から平成へと新しい時代を迎え、日本のプログレ・シーンも、このヴィエナの解散から、新しい時代へと突入するのである。

ソシアル・テンション

2
新世代誕生

80年代のプログレ・シーンに於いて、長年に渡って活動を続けてきたミュージシャン達の間で、バンドの“解体”とヴィエナ、テルズ・シンフォニアといったグループの“再生”が繰り返されている中、85年に訪れたプログレ最盛期の主要グループ達に影響されて、デジャヴ、ソシアル・テンション、ロザリア、ホワイト・ファング、アイ、アゾート、セイレーン、オーガスト、イル・ベルリオーネ、アイシスといった若い世代のグループ達が頭角を現し始めて、80年代のプログレ・シーンの中で長年に渡って活動してきた昭和30年代生まれのミュージシャン達のムーヴメントとは、一線を引く、若い世代による新たなシーンが誕生してきたのである。

85年の最盛期に於いては、ページェント、スターレス、ソフィア、夢幻といった関西のグループの活動が目覚しく、“西高東低”といった感が強かったが、この新しい世代のグループ達の大半は東京周辺のグループ達であった。また、最盛期の関西のグループ達の多くは日本語で歌われるボーカルとハード・ロック色の強いギターを中心として、ノヴェラのサウン

新生DEJA-VU

ドが見え隠れするシンフォニック・ロック・アレンジを取り入れた、俗に言う"関西プログレ"サウンドであったが、最盛期以降の日本のプログレッシヴ・ロック・シーンを支えていたのが、マニアックな洋楽指向のシンフォニック・ロック・グループを主体とした東京のメイド・イン・ジャパン・レコードであった為に、唯一、"関西プログレ"サウンドを継承するロザリア以外のグループは、デジャヴ、ソシアル・テンション、などの様にマニアックな洋楽指向のシンフォニック・ロックや、オーガスト、アイ、アイシスといった女性ボーカルをフィーチャーしたグループが主流を占めていた。メイド・イン・ジャパン・レコードが東京に所在しており、プログレッシヴ・ロックの専門店が東京に集中していた為に、日本の

久保田陽子(vo:プロビデンス)

プログレッシヴ・ロックの商業的な動きも、東京に集中してきた中、アウターリミッツを脱退したボーカルの上野知己を得て、数段スケール・アップを遂げたデジャヴが、ヴィエナの解散によって失望した東京のプログレ・ファンの間で、ヴィエナやアウターリミッツに代わる東京のプログレ・シーンのニュー・リーダーとして、次第に認められる様になって行き、また、ソシアル・テンションも東京のマニアックな洋楽指向のファンから絶大な評価を受ける存在として成長。また、唯一、"関西プログレ"サウンドを聴かせ、全員女の子にもかかわらず仲々の演奏力を持ったロザリアも、プログレ界のアイドルとして、頭角を現し始めて、1990年

ロザリアのリーダーの三浦奈緒美

夏には、フランスのアトールの来日を記念して川崎のクラブ・チッタで開催されたイベント「クライム・シンジケート」にアトールと共に、デジャヴ、ソシアル・テンション、ロザリア、ホワイト・ファングらも出演して、若い世代のシーンが確立されようとしていたが、ニュー・リーダーとして大きな期待を集めていたデジャヴが、リーダーの桜庭の音楽性の相違を理由に、突然、解散してしまい、ヴィエナ、デジャヴの再度に渡る短命の解散によって、日本のプログレ・ファンは大きな失望を抱く様になってしまった。そして、デジャヴの解散を発端として、ロザリア、ソシアル・テンションも、プログレ・サウンドを押し進め様としたリーダーと、他への音楽指向が強かった他のメンバーとの音楽性の違いによって、次々と解散に追い込まれて行き、この若い世代によるムーヴメントは、長くは続かなかった。

3
90年代への道

80年代の日本のプログレ・シーンを長年に渡って支えてきたミュージシャン達のムーヴメントは、マイペースで活動を続けるミスター・シリウスとテルズ・シンフォニアを除いて、ヴィエナの解散を最後に幕を閉じて、また新たに登場して来た若い世代のシーンも、充分な成長を遂げる事が出来ずに短命に終わってしまい、日本のプログレ史上、"最悪な情況"に陥ってしまった1990年。日本のプログレ・シーンも、ついに歴史の幕を閉じてしまうのではないか、というファンの心配が蔓延し始めたが、1991年現在、長年に渡ってプログレ・シーンを支えてきたミュージシャン達と、後続した若い世代の中から、本当にプログレッシヴ・ロックを愛するミュージシャン達の手によって、"復活ブーム"を中心とした新たなムーヴメントが、生まれつつある。先ず、これの口火を切ったのが、アースシェイカーで活動していた永川敏郎と、ヴィエナ解散後は、デッド・チャップリンで活

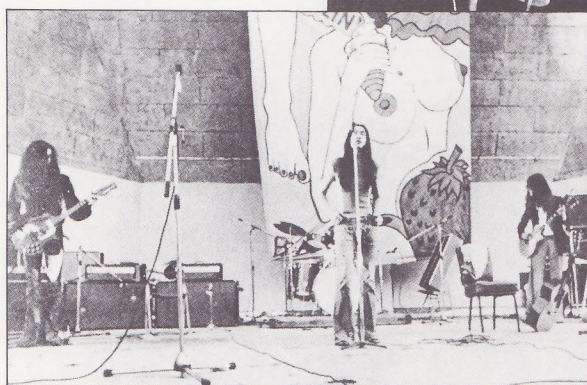
13年振りに再結成されたシェラザード

復活したジェラルドのレコーディング風景

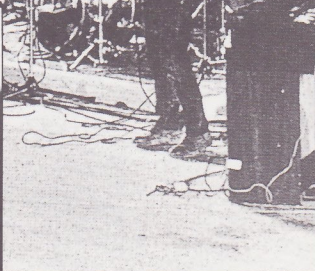
アフター・ザ・レイン

動していた藤村幸宏の手によって、5年振りに復活したジェラルドである。復活したジェラルドの新作「アイロニー・オブ・フェイト」は、久しく大きな話題のなかった日本プログレ・シーンへ、大きな起爆剤となり、また、本誌の発売記念として、13年振りに再現ライブを行ったノヴェラの前身グループである"伝説"のシェラザードの影響も大きな刺激となって、スターレス、ネガスフィア、美狂乱、孔雀音、アイン・ソフ、ミダス、マグダレーナなどの数々のグループ達が、復活の狼煙を上げ始めている。また、短命で終わってしまった若い世代のミュージシャン達の中からも、プログレッシヴ・ロックを真剣に追求しようとする元アウターリミッツのギターの荒牧隆、元ソシアル・テンションのベースの太田雅彦、元ロザリアの三浦奈緒美の3人によって、アフター・ザ・レインが結成され、今後のプログレッシヴ・ロック・シーンの主役として活動して行く存在となるであろう。

日本にプログレッシヴ・ロックが、1969年に誕生してから、22年の時を経た現在、日本のプログレッシヴ・ロックの歴史は、新たな、そして大きな第一歩を再び歩み出したのである。

LOVE LIVE LIFF ＋ 1

FAROUT

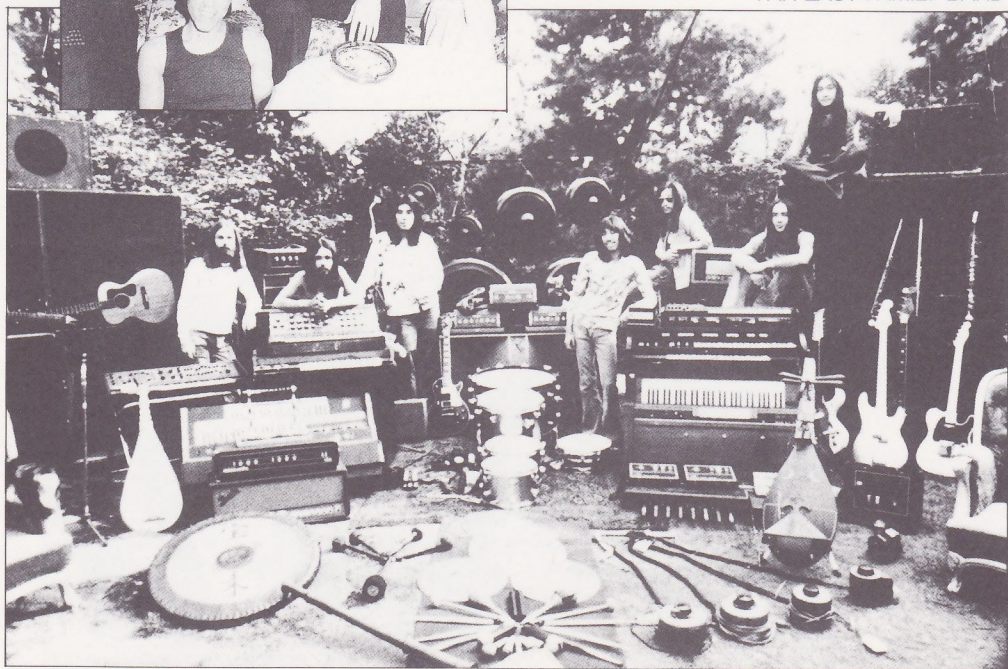
FLIED EGG

FLOWER TRAVELIN' BAND

四人囃子

森園勝敏（四人囃子）

COSMOS FACTORY

カルメン・マキ & OZ

FAR EAST FAMILY BAND

SHINGETSU

新月

北山　真（新月）

BI・KYO・RAN

美狂乱（全盛期のメンバー '78）

後期美狂乱（1982）

GREEN

MOON CHIRD

TIME UNIT

MESSIAH

観世音

〝関西プログレの源流〞[1976–79]

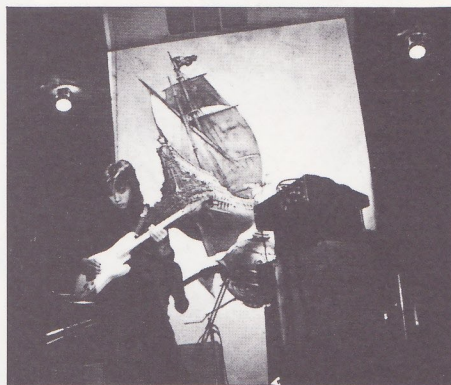
DADA

ROUND HOUSE

CHARISMA

飢我同盟（平山照継と小西健司　'76）

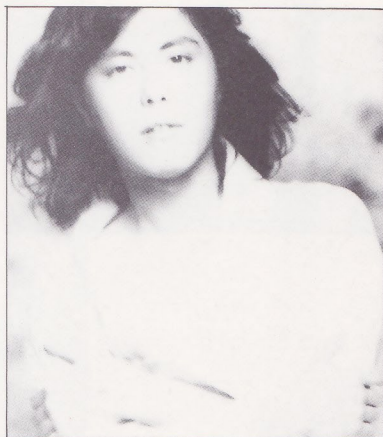
AIN-SOPH

ライヴ出演中の山本要三（天地創造）

〝ハード・プログレの創始者〞魔璃鴉

〝ノヴェラの前身〞シェラザード

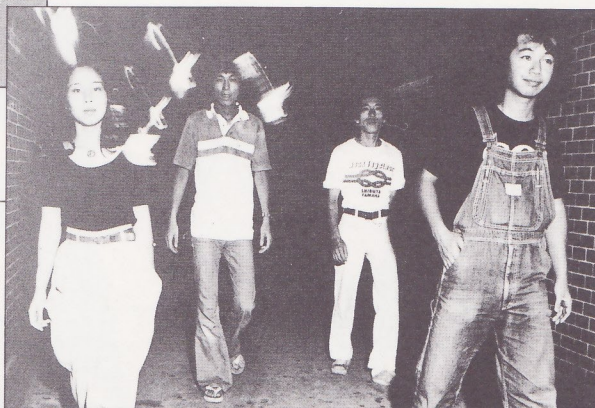
MOON DANCER

"70's JAZZ-ROCK"

MARIAH

難波弘之（SCENCE OF WONDER）

SPACE CIRCUS

CROSS WIND

第1期PRISM

結成当初のアウターリミッツ（1979）

アルバム「少年の不思議な角笛」プロモーション写真（1986）

12" EP「マリオネッツ・ラメント」プロモーション写真（1987）

Artists File

Artists Index

Artists Index

Artists Index

アイ[i]

◀Member▶

池谷　佳子　Keiko Ikeya(Vo)'88~'89
天野　尚美　Naomi Amano(Vo)'89~
伊香　俊哉　Toshiya Ikou(G)
佐藤　仁代　Kimiyo Sato(Kbd)ex.SYLPHIED,GIEEL
田中　稔　Minoru Tanaka(B)'88~'89 ref.SCHEHERAZADE
原田　直幸　Naoyuki Harada(Ds)'88~'89

◀Discography▶

● V.A.(CD)-「Prospective Faces II」MADE IN JAPAN:MCD-3207 '89
● CT-「i」 '91

アラン・ホールズワーズ張りのテクニックの持ち主であるギター の伊香とクリス・スクワィアー・タイプのベーシストである田中が長年に渡って温めてきた構想をもとに、ボーカルの池谷と元ジゼルのキーボードの佐藤、ドラムスの原田を集めて1988年3月に東京で結成。クラシカルな歌唱法の女性ボーカルをフィーチャーし、ルネッサンスやカンタベリー系のジャズ・ロックを始めとした70年代のブリティッシュ・プログレのエッセンスを強く臭わせるオリジナリティーに溢れるサウンドには好感が持てる。1989年8月に吉祥寺シルバーエレファントにてライブ・デビュー。また秋にはオムニバスCD「プロスペクティヴ・フェイセスII」に1曲参加をして、このレコーディングに際してボーカルが池谷から天野にチェンジ。プログレ・マニアの間で今後が期待されるグループとして注目を集めたが、1990年にドラムスの原田とベースの田中(田中はヴァーミリオン・サンズの蠟山らと共にシェヘラザードを再結成)が脱退して、一時期活動停止していたが、現在、ドラムスに岩切哲が新加入し、ベースには元舞踏の岡本がヘルプとして参加して活動を再開した。

アイシス[ISIS]

◀Member▶

和田　春美　Harumi Wada(Vo)~'89
田中　敦子　Atsuko Tanaka(Vo)'90~
片岡　祥典　Yoshinori Kataoka(Kbd)~'90
金原　雅之　Masayuki Kinbara(G)
内野　竜次　Ryuji Uchino(B)~'89
和田　真治　Shinji Wada(Ds)~'80
武山　純司　Junji Takeyama(B)'89~'90

アイシスはキーボードの片岡が中心となって1988年に大阪で結成された新鋭グループ。ルネッサンスやキャメル、エニワンズドーターといったシンフォニック系のグループを好み、また初代の女性ボーカルの和田がマグダレーナの徳久恵美からの影響が強い歌唱法である為に、マグダレーナやページェント、テルズ・シンフォニアといった関西プログレ系のシンフォニック・バラードを主体とするサウンドである。1989年春にオムニバスCD「プロスペクティヴ・フェイセスI」に1曲収録した後、ボーカル

が和田から田中、ベースもメンバーチェンジをして、翌年にデモ・カセットを自主レーベルで発表。現在はリーダーの片岡がグループを離れ、バンドは再編成中である。

◀Discography▶

● V.A.(CD)-「Prospective Faces I」MADE IN JAPAN:MCD-3203 '89

● CT-「ISIS」'90

アイン・ソフ[AIN-SOPH]

◀Member▶

山本　要三　Yozox Yamamoto(G) ex.TENCHISOZO,ref.Dr.JEKYLL&Mr.HYDE

鳥垣　正裕　Masahiro Torigai(B) ex.TENCHISOZO,ref.BELLAPHON

名取　　寛　Hiroshi Natori(Dr) '79～'81 ex.TENCHISOZO,ref.ROUND HOUSE

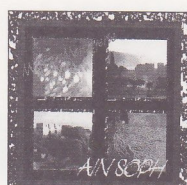
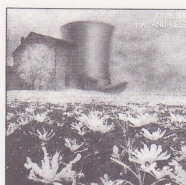
富家　大器　Taiqui Tomiie(Dr) '84～ ex.STARLESS,ULTRA BIDE,BELLAPHON

藤川喜久男　Kikuo Fujikawa(Kbd) '77～'78,'84～ ex.YUREISEN,TENCHISOZO

服部　真誠　Masey Hattori(Kbd) '79～'80 ex.DARUMASHOKUDO,ref.99.99

高嶋　Takashima(Kbd) '81

垣　光隆　Mitsutaka kaki(Kbd) '86～ ex.BELLAPHON,STARLESS

◀Discography▶

● ALBUM-「妖精の森(A Story of Mysterious Forest)」
(LP)NEXUS:GP-801'80★/(CD)CRIME:KICS-2054 '90/(CT)NEXUS:AOF-5153 '80★

● ALBUM-「帽子と野原(Hat And Field)」(LP)NEXUS:K28P-603 '86★

● ALBUM-「駱駝に乗って(Ride On A Camel)」(CD)BELLE ANTIQUE:9120 '91

● ALBUM-「海の底の動物園(Marine Menagene)」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2921 '91

神戸に在住のギタリストの山本要三が高校時代に組んでいたバンドを解散後、1971年に天地創造を結成。結成当時はチッキンシャックやテイスト等のコピーを中心とするブルース・ロック・グループであったが、次第にウィッシュボン・アッシュから影響されたブリティッシュ・ロック・サウンドのグループへと発展して行った。1974年にはメジャー・レコード会社からシングル・デビューの話もあったが、結局この話は流れて天地創造は煮詰まってしまい、解散状態に陥ってしまう。そして、この頃山本要三は、ソフト・マシーンやキャラバンといったカンタベリー系のジャズ・ロックに対して興味を抱き始めて、今までのメンバーを一新して、元幽霊船のキーボードの藤川喜久男、ベースの鳥垣正裕、ドラムスの名取寛、ボーカルの笠原和彦を集めて、1975年9月に新生天地創造をスタートさせた。しばらくするとボーカルの笠原が脱退し、全編インストゥルメンタル・サウンドとなった新生天地創造は、1976年1月に神戸にあったジャンゴという音楽喫茶店に於いて新生天地創造として初ライブを行なった後、8

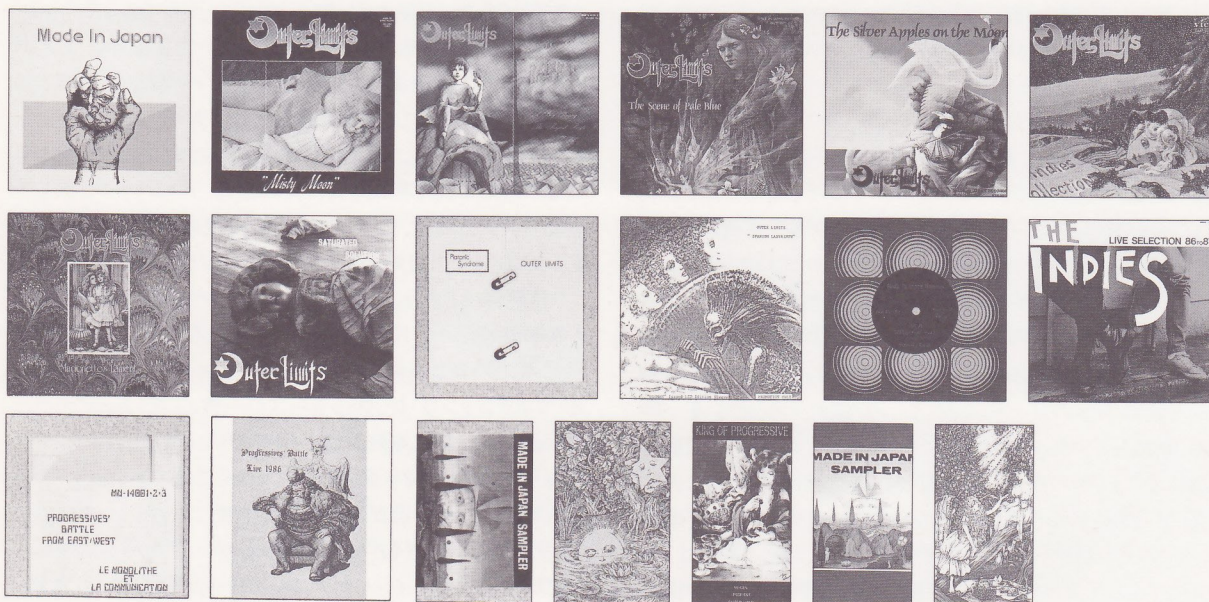
月には神戸海員会館に於いて行なわれたイベント"プログレッシヴ・コンサート"に魔璃鴉、ラウンド・ハウスと共に出演。また12月には魔璃鴉と共に東京ツアーを行ない、渋谷屋根裏等でライブを行なうなどLUCの山田次郎氏のマネージメントのもとに精力的なライブ活動を開始した。1977年3月にはデモ・テープを制作して、("Dr.マッコイ""海の底の動物園"の2曲を録音。)当時、「ロッカダム」というプログレ&ブリティッシュ・ロックのミニコミ誌を主催していたたかみひろし氏のもとへ自分達のデモ・テープを送り、たかみひろし氏は日本にもブリティッシュ系のジャズ・ロック・サウンドを持つグループが存在する事に驚き、キング・レコードへ入社をして日本のプログレ・グループをリリースする為のレーベル"ネクサス"の準備を進める傍ら、天地創造というグループ名は今ひとつパっとしないと判断したたかみひろし氏の命名により、1977年11月に天地創造はアイン・ソフと改名して、京大西部講堂で行なわれたイベントにDADA、だててんりゅう、連続射殺魔と共に出演。キャラバンや初期ソフト・マシーンから影響を受けたカンタベリー系のプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドをアンディー・ラティマやパイ・ヘイスティング・タイプの山本要三のギター・ワークと、ディヴ・スチュワート張りの藤川喜久男のオルガン・プレイを中心とした卓越した演奏技術によって表現するアイン・ソフの存在は、地元神戸を中心として高い評価を集めて行った。またLUCの同じ所属アーティストとしてDADAと交友を深め、(77年夏にドラマーの名取が急病の為、山本要三と藤川喜久男はDADAの小西健二(Kbd)、泉陸奥彦(G)と共にフリップ&イーノ、テリエ・リピタル的な即興演奏のセッション・ユニット"FOUR FRIENDS"を一時期、結成していた。)1978年1月〜6月(6月には渋谷屋根裏に於いてアイン・ソフとして東京初ライブ)の期間はDADAと共にライブ活動を行なって、アイン・ソフのメンバーにDADAが参加して、名曲"妖精の森"などを演奏していた。また、1月にはアイン・ソフとしてのデモ・テープを制作。("駱駝にのって"、"妖精の森"の2曲を録音。)アルバム制作へ向けての準備を進めたが、レコード会社が正式には決らずあせり始めていた彼らは、LUCのマネージメントにも問題があり、1978年12月に解散した。この解散に伴いドラムスの名取はラウンド・ハウスに加入して活動していたが、1979年5月にキング・レコードのプロデューサーのたかみひろし氏からノヴェラ、ダダとアイン・ソフの3グループへの正式なレコード契約の申し入れがあり、アイン・ソフは急拠、山本要三(G)、名取寛(Ds)、鳥垣正裕(B)の3人で再結成するが、キーボードの藤川は個人的な理由により参加出来ず、キーボードのオーディションを行ない、だるま食堂や増田俊郎&セプテンバー・ブルーで活動していた服部真誠が加入して、1980年1月にキング・レコード・スタジオに於いて、レコーディングを開始。6月にキング・レーコード洋楽内に設立した新レーベル"ネクサス・レーベル"から、ノヴェラに次ぐ第2のプログレッシヴ・ロック・グループとして、(本当はたかみひろし氏はこのアイン・ソフの方に力を入れていたが、商業的理由によりノヴェラの方が先にリリースされた。)デビューアルバム「妖精の森」が発売された。山本要三のジャージーなギター・プレイと、ディヴ・スチュワート・タイプのオルガン奏者であった藤川とは対照的な服部のピアニスト・タイプのキーボード・ワークを中心とした卓越したテクニックに裏付けされた硬質なジャズ・ロックと、メロディアスな叙情派プログレとを融合させたサウンドは、好評を博して、特にB面全てを費やして録音された組曲"妖精の森"は人気ナンバーとして話題を集めたが、アルバム発売直後に、本来フュージョン指向であった服部が99.99を結成の為にグループを離れ、活動停止。高島というキーボード奏者を加えて2ndアルバムの為のデモ・テープを録音したが、もの足りない部分が多く、2ndアルバム・リリースの話は断ち切れとなりアイン・ソフ自体も活動停止してしまった。しばらくの間、沈黙を保っていた山本要三は、1983年にオシリスというグループをやっているギタリストの河原博文と共に"Dr.ジキル&Mr.ハイド"というユニット名で、河原のインディーズ・レーベルであるサウンド・オブ・ポピーから3本のカセット作品をリリースする傍ら、友人の紹介でベラフォンを結成したばかりのドラマーの富家大器と知り合い、音楽的に投合する部分があり、"YOZO&TAIQUI BAND"を結成する。"YOZO&TAIQUI BAND"はメンバー捜しをするが結局は山本要三と共に天地創造、アイン・ソフと歩んで来たベースの鳥垣、そして天地創造時代のキーボード奏者であった藤川という旧知のメンバーが集まって、1984年にアイン・ソフは再結成された。再結成されたアイン・ソフは1986年1月に6年振りのニューアルバムのレコーディングを行ない、1986年3月にキング・レコードのネクサス・レーベル内に新設されたネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズの一貫として、2ndアルバム「ハット&フィールド」を発表。また同年9月には大阪のキャンディーホールに於いて8年振りの正式なライブを行なった。(ベラフォンのキーボードの垣がゲストとして参加して、ツイン・キーボードであった。)1987年4月にはベラフォンが1stアルバム「ファイアー・フライ」をメイド・イン・ジャパン・レコードから発表して、富家、垣はもちろん、ベースには鳥垣もゲスト参加。アイン・ソフとベラフォンは混然一体とした関係であったが、1988年にベラフォンが活動を停止した為に垣が正式加入をして、アイン・ソフは山本(G)、藤川(Kbd)、垣(Kbd)、鳥垣(B)、富家(Ds)というライン・ナップとなった。山本要三はドラムスの富家と共にオシリスの河原が結成した新たなグループであるヘレテイックの2ndアルバムにセッションで参加したり、NECアベニューから発売されているイージーリスニングのオムニバス・アルバムに参加するなどマイ・ペースな活動を続け、現在は3rdアルバム制作へ向けての準備中である。

アイン・ソフはカンタベリー系のジャズ・ロック・サウンドを聴かせてくれる稀有の存在であり、また彼らの卓越したテクニックは日本を代表するジャズ・ロック・グループの一つとして高く評価されている。なをオリジナル・ドラマーであった名取寛はアイン・ソフの活動と平行して1978〜82年頃にかけて、ラウンド・ハウスというカンタベリー系のジャズ・ロック・サウンドのグループのメンバーとしても活動していた。

アウターリミッツ[OUTER LIMITS]

◀Member▶

塚本　周成　Shusei Tsukamoto(Kbd) ex.MöBIUS,VIENNA
桜井　信行　Nobuyuki Sakurai(Dr) ex.MöBIUS
藤井　暢之　Nobuyuki Fujii(G) '79~'80 ex.MöBIUS
杉本　　正　Tadashi Sugimoto(B,Vo) '79~'85,'89 ref.KANON
荒牧　　隆　Takashi Aramaki(G,B) '85~ ex.ATARAXIA,VIENNA,ref.PAS DE DEUX,KANON,AFTER THE RAIN
石川　　正　Tadashi Ishikawa(B) '87~'88 ex.UG TENDERNESS,ref.JACKS'N'JOKER
川口　　貴　Takashi Kawaguchi(Vin,G) '79~'87 ref.KANON
上野　知己　Tomoki Ueno(Vo,Kbd) '84~'88 ref.DEJA-VU

◀Discography▶

- ALBUM-「Made In Japan(A Side:KANZEON)」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1001 '81★
- ALBUM-「Misty Moon」
  (LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1004 '85★/(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2910 '90
- ALBUM-「不思議な角笛(A Boy Playing The Magical Bugle Horn)」
  (LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1009 '86/(CD)CRIME:280E-2053 '89
- ALBUM-「ペール・ブルーの情景(The Scene of Pale Blue)」
  (LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1012 '87/(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2912 '90
- ALBUM-「The Silver Apples On The Moon(*Live)」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-3208 '89
- ALBUM-「Indies Collection(*Best)」(CD)VICE:ECD-1012 '89 ★
- 12"EP-「Marionette's Lament」VICE:18EC-1 '87★
- 7"EP-「Saturated Solution」MADE IN JAPAN:MIJ-1002(Ltd/50) '84★
- 7"FLEX-「Platonic Sydrome」EURO:EU-001 '84★
- 7"FLEX-「Spanish Labyrinth」MADE IN JAPAN:MIJ-PRO-004(Promo) '85
- 7"FLEX-「Whispering or…?(B Side:PAGEANT)」MADE IN JAPAN:MIJ-PRO-009(Promo) '86
- V.A.(LP)-「Indies Live Sellection(*Live)」VICE:GWX-183~184 '87★
- V.A.(7"FLEXI)-「Progressive's Battle」MONOLITH:MN-14001~3 '85★

●V.A.(7"FLEXI)-「Progressive's Battle'86(with BOOK)」MADE IN JAPAN:MIJ-1069 '86★
●V.A.(CT)-「Made In Japan Sampler I」MADE IN JAPAN:MIJTP-2001(Promo) '84
●V.A.(CT)-「Made In Japan Sampler II」MADE IN JAPAN:MIJTP-2002 '85★
●V.A.(CT)-「Offical Bootleg Lives I」MADE IN JAPAN:MIJTP-2007 '87★
●V.A.(VD)-「Kings of Progressive」MADE IN JAPAN:MIV-99001 '86★
●V.A.(VD)-「Made In Japan Sampler」MADE IN JAPAN:MIJVD-002 '85★
●V.A.(VD)-「Offical Bootleg Lives」MADE IN JAPAN:MIV-58002 '87★

東京の北、駒込にある聖学院高校に通っていた塚本周成は高校を卒業すると直ぐに、高校時代の同級生の音楽仲間であった桜井信行、藤井暢之を誘い、メビウスというキーボード・トリオを1976年に結成。メビウスはキング・クリムゾン、EL&P、PFM等のコピー(とりわけ、当時の塚本はキング・クリムゾンに傾倒しており、キーボード・トリオなのにもかかわらず、クリムゾンのナンバーを数多く取り挙げていた。)の他にオリジナル・ナンバーを演奏するグループとして活動を始め、ローランドのデモンストレーション演奏などの場でライブを行っていた。この時演奏していたオリジナル・ナンバーは初期のアウターリミッツでも演奏していた"Running Away"など2〜3曲。UKやEL&P的なキーボード・トリオ・サウンドをベーシックにしながらもキング・クリムゾンの幻想的な空間を表現するナンバーであった。武蔵野音楽大学のパイプオルガン科に入学した塚本周成はメビウスとして約3年間活動した後、彼が大学3年生の時(1979年)に大学の作曲科の友人を通じて、同大学のコントラバス科に入学してきた1年生の杉本正と知り合う。メビウスの桜井、藤井、に杉本がベースで加わり、藤井がベースからギターへと回り、また杉本が同音大のヴァイオリン科の1年生であった川口貴を引き込み、新たなライン・ナップとなってこのグループは、"アウターリミッツ"と命名。(アウターリミッツというバンド名はSF映画の「アウターリミッツ」からとったもので、桜井と塚本は大のSFファン)1979年7月の事である。1979年の11月に桜井の通う駒沢大学の学園祭で初ライブを行った後、正式なライブ・デビューは池袋のヤマハが1979年の12月に豊島公会堂で主催した"Hellow Mary You! Vol.2"というイベントであった。(ここで彼らは"Running Away"、"Platonic Syndrome"、"Misty Moon"、"Mixer"の4曲を演奏。)塚本はヴァイオリンの加入により、ヴァイオリンをフィーチャーした曲を書く様になり、キング・クリムゾンに傾倒していた事もあって、この頃の曲は彼特有の近代クラシックの和声法に基づいたアンサンブルでありながら、クリムゾン色が強く表れていたものが多かった。ちなみに、他のメンバー共、キング・クリムゾンとクラシックという音楽的な接点はあったが、塚本はEL&P、UK、YES、ピンク・フロイド等プログレとクラシック、ドラムスの桜井はジョージ大塚の師示を受けチック・コリア等のジャズ&フュージョンやワーグナー等のクラシック、杉本はユーロ・ロックなどのプログレ一般からスペース・サーカス、クリーム等のロック派、川口はレッド・ツェッペリンなどのハード・ロックやスペース・サーカスといったフュージョン、藤井はジェントル・ジャイアントという様な指向性を持ち彼らの指向性が調和して今後のアウターリミッツの独特の世界を築き上げて行く事になる。池袋Cityや江古田SOSなどのマイナーなライブ・ハウスでの活動をこなしていた彼らにとって1980年夏に運命的な出会いが訪れる。それは、当時ソシアル・コンプレックスというプログレのレコードの輸入卸業者まがいの事務所をやっていた、現在のメイド・イン・ジャパン・レコードの社長&プロデューサーであるヌメロ・ウエノとの出会いだった。たまたま彼らのライブを耳にしたヌメロ・ウエノは演奏力は今一歩ながらも、彼らの群を抜いた楽曲の素晴らしさに大きな衝撃を受け、彼の主催する定期コンサートにアウターリミッツを出演させる為にコンダクトを取り、以降、彼らのプロデュース&マネージメントを受け持つ様になる。1980年夏にアウターリミッツはデモ・テープを制作("Running Away"と"Platonic Syndrome")し、吉祥寺のシルバーエレファントや新宿ロフト、高円寺Red Houseなどのライブ・ハウスで月2回くらいの本格的ライブ活動を始める。1981年4月にギター&ボーカルの藤井が脱退し、ギターレスの4人編成となり、キング・レコード等にアルバム・リリースの話を持って行くが相手にされず、プロデューサーのヌメロ・ウエノが自腹を切ってメイド・イン・ジャパン・レコードを設立し、観世音とのジョイント・アルバム「Made In Japan」を自主制作で1981年12月にリリース。(300枚プレス/このレコードは日本のプログレ初の自主制作アルバムであった。)アウターリミッツは翌年にもデモ・テープを録音("Misty Moon"、"飽和溶液"、"アルジャーノンに花束を")するが、レコードの売れ行きは全く良くなく、活動も消極的になり、一時活動停止状態となり、プロデューサーのヌメロ・ウエノも離れたが、1984年の初めに国内のプログレ・シーンが盛り上がりそうな気配を感じ、ヌメロ・ウエノが再び彼らに声をかけて、活動停止状態にあったアウターリミッツは、武蔵野音楽大学の声楽科に入学したばかりのヌメロ・ウエノの弟である上野知己をボーカルに加え、1984年7月8日の吉祥寺シルバーエレファントで復活ライブを行う。この時のライブで限定50枚プレスのシングル「飽和溶液」を発表。(テイクは1982年に録音されたもの。)国内のプログレ・シーンが盛り上がる予感を見せ始めてきた中、マーキー誌を抜けた中藤正邦氏の提案で、関東、関西を代表する6グループによるオムニバス・サンプラー・ソノシート「Progressives' Battle」が企画され、復活したばかりのアウターリミッツも声をかけられ、レコーディングの準備を進めたが、ドラムスの桜井が急病で入院してしまい、録音は代わりに

杉本の知り合いであった柴田が参加。アウターリミッツはこのサンプラーの為に書き下ろした新曲“Marrionettes' Lament”を渋谷のサウンド・マーケットにて1985年1月にレコーディングし、このサンプラーは4月に中藤氏が設立した自主制作レーベル“モノリス”から発売された。このサンプラーは予想外の反響を呼び、モノリス・レーベルとメイド・イン・ジャパン・レコードの協同企画による発売記念イベント“Progressives' Battle Live”が1985年の5月2日～5日の4日間に渡って吉祥寺のシルバーエレファントで開催され好評を博し、その中でもページェント、夢幻、そしてアウターリミッツは大きな注目を浴びた。このイベントとここに出演し注目を集めたグループ達が今後の日本のプログレ・シーンの隆盛を作って行く重要な役割を果して行くのである。また、アウターリミッツ自身も東京を代表するプログレ・グループとしての位置を築いて行く第一歩となった。7月に入り、ファースト・アルバムのレコーディング2週間前になり、ベースの杉本が突如脱退した。アウターリミッツは急拠メンバー捜しをするが適任者が見つからず、アタラクシアでギターを弾いていた荒牧隆に白羽の矢を立て、荒牧は生まれて初めてベースを手にして僅か1週間で全てをマスター。アウターリミッツは都内の豊島園にあるユーフォニック・スタジオで8月20日～29日までの9日間でレコーディング。ヌメロ・ウエノが再開させたインディーズ・レーベルであるメイド・イン・ジャパン・レコードより、9月21日にアルバム「ミスティー・ムーン」がリリースされた。このアルバムは今までのプログレ・インディーズとは比較にならない録音クオリティーと完成度を持った衝撃的な作品として絶賛を博して、初回1500枚はまたたく間に完売。当時のフールズ・メイト誌インディーズ・チャートでもウィラードに次いで2位を記録、プログレ・インディーズNo.1バンドとして不動の位置を築いた。このアルバムの発売記念ツアーは東京2回、名古屋、大阪で行われたが、このアウターリミッツのツアーは、渋谷エッグマン、横浜ビブレ、名古屋のELL、大阪のキャンデーホールの4カ所が共同企画で行った大規模なプログレ・イベントの一貫でもあり、アウターリミッツが一躍、全国的なバンドとして名声を上げるのに絶好のチャンスでもあった。アウターリミッツを皮切りにページェント、ネガスフイア、ペール・アキュート・ムーンなどのインディーズ勢とスターレス、ソフィア、ブラックペイジ、夢幻などのキング・レコードのネクサス・レーベル勢が一斉にアルバム・リリースを始め、1986年に入るとかってない日本プログレ・ムーヴメントの最盛期を迎え、アウターリミッツも数多くのライブをこなして波に乗り、1986年4月に発売された夢幻の2ndアルバム「レダと白鳥」にヴァイオリンの川口貴がゲスト参加。1986年5月に開催された“第2回Progressives'Battle Live”にも参加した後、(5月5日に出演/ゲスト:永井博子)7月に2ndアルバムの為のレコーディングに入る。1stアルバムが好セールスを上げたために色々な面で好条件のもとでのレコーディングであったこのアルバムは、ドラムスの桜井が書いた物語をテーマとしたトータル・アルバムとして制作され、弦楽四重奏やオペラ歌手までゲストに加え、またアタラクシアとアウターリミッツをしばらくの間、兼任でやっていた荒牧が、アウターリミッツに専念してベースとギターのダブルネックを使用してギタリストとしての才覚を発揮したアルバムであり、アウターリミッツの高い音楽性とオリジナリティーを最も発揮した日本のプログレ史上の名作として完成、2ndアルバム「少年の不思議な角笛」は9月25日に発売された。そしてこのアルバムの発売記念ライブとしてページェント、ブラック・ペイジと共に新橋ヤクルト・ホールで行われた“メイド・イン・ジャパン・フェスティバル”に出演、チケットは発売日から2～3日で完売しホールは超満員。名実共に日本を代表するプログレ・バンドとなった。1986年12月にベースの石川正が加入して荒牧はギターに専念、上野(Vo,Kbd)、塚本(Kbd)、川口(Vln)、荒牧(G)、石川(B)、桜井(Ds)の6人編成となったアウターリミッツは彼らの長い歴史の中で最高に充実したライン・ナップとなる。1987年2月～4月にかけて、初期のメンバーを集めた3rdアルバム「ペール・ブルーの情景」、12inchシングル「マリオネッツ・ラメント」、FM NHK浦和のオン・エアー用のスタジオ・ライブのレコーディングをユーフォニック・スタジオで行う。4月15日にFM NHK浦和に出演し、スタジオ・ライブを45分に渡りオン・エアー。4月21日、3rdアルバム「ペール・ブルーの情景」発売。4月25日、新宿のスペース107ホールで行われたイベント“春の祭典”に出演と相変わらず精力的な活動をこなす傍ら、プログレ界のスーパーグループを作ろうというプロデューサーのヌメロ・ウエノの呼びかけにより、元ノヴェラのドラムスの西田竜一、元ジェラルドのボーカル&ギターの藤村幸宏、ページェントの中嶋一晃、元ジェラルドのキーボードの氷川敏郎と共にアウターリミッツの塚本(Kbd)と荒牧(B)もこのプロジェクトに参加。結局、藤村、西田、塚本、荒牧というライン・ナップに落ち着き、グループ名も“ヴィエナ”と決定し、6月頃から本格的なリハーサルが開始された。アウターリミッツの方はクラウン・レコードのVICEレーベルから12inchシングル「マリオネッツ・ラメント」を7月21日に発売して、メジャー・デビューを果し、7月26日に吉祥寺のシルバーエレファントで発売記念ライブを行い、この時ヴィエナが顔見せ初ライブで共演。この日のライブはエレファントの動員記録を達成する超満員。この頃になるとフランス、イタリア、アメリカなどの海外でもアウターリミッツは注目を集めるようになり、(フランスのHarmonie誌ではアウターリミッツが表紙を飾ったり、80年代の世界のプログレのベスト・アルバムに「少年の不思議な角笛」を挙げたり、Notes誌でも「ミスティー・ムーン」を80年代のベスト3アルバムに選んだりしていた。)世界的レベルの評価を受けていた。塚本の書く曲は近代クラシックの手法に基づいたアンサンブルと彼独特の多彩なメロディーと曲構成、複雑多岐に渡る変拍子が一体となったオリジナリティーに豊んだものであり、キーボード奏者としても壮大なオーケストレーションを操るプレイヤーとして才能に溢れ、荒牧のギタープレイはロバート・フィリップやスティーヴ・ハウ的な多彩なアイデアに豊んだものであり、川口のヴァイオリンは世界的レベルの素晴らしい演奏を聴かせ、上野のボーカルはオペラ唱法を取り入れ、これが一体となって、他に追従を許さないプ

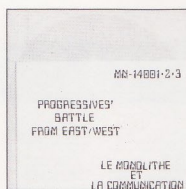
ログレッシヴ・ロックを作り上げたのである。しかし、絶頂期を迎えていたアウターリミッツにとって致命的な出来事が起こる。7月26日のシルバーエレファントのライブを最後にして、サウンドの要である川口貴がクラシックに専念する為に脱退。後任のヴァイオリニストを必死で捜し回り、オーディションを行うが、川口に匹敵する人材は見つからず、また塚本のヴィエナの活動が忙しくなり、(荒牧は1987年12月にヴィエナを脱退。自らのグループである“PAS DE DEUX”を結成し、アウターリミッツと平行して活動。)アウターリミッツは川口不在で数回のライブを行うが、活動停止状態に近いものになってしまった。そして88年の11月にベースの石川が脱退、2月にはボーカルの上野がデジャヴに加入する為に脱退という具合に相次ぐメンバーの脱退により崩壊状態になってしまったアウターリミッツを再び復活させようとして、オリジナル・メンバーであったベースの杉本を誘い、塚本(Kbd)、荒牧(G&Vo)、杉本(B&Vo)、桜井(Ds)というライン・ナップで1989年5月4日に渋谷エッグマンでライブを行ったが、ボーカル不在状態とイメージ・チェンジしようとしたサウンドが不評を買い、このライブを最後にアウターリミッツは結成から10年という長い歴史に幕を閉じた。1989年12月、キング・レコードのクライム・レーベルより発売された「パッゾ・ファンファーノ・ディ・ムジカ」という企画アルバムに塚本、荒牧、川口、杉本、桜井、上野が参加。また1987年4月にレコーディングされたスタジオ・ライブ・テイクがメイド・イン・ジャパンからライブ・アルバム「The Silver Apples On The Moon」として90年12月に発売された。現在、塚本はドラムスの桜井、ヴィエナのベースの永井と共にソロ・アルバム制作を計画中。ギターの荒牧、ベースの杉本、ヴァイオリンの川口は“KANON”という新しいバンドを結成し、ライブ・デビューの準備中であったが、KANONは計画だけに終わり、現在、ギターの荒牧隆は、ソシアル・テンションのベースの太田雅彦、ロザリアのキーボードの三浦奈緒美と共にアフター・ザ・レインを結成。

東京のプログレ・シーンの中で最も長く活動を行い、ライブと作品制作を精力的にこなし、追従を許さない真の“プログレッシヴ・ロック”サウンドを確立した彼らは、日本のプログレ史の中で、日本を代表する世界的なレベルのグループとして語り継がれて行くだろう。

アクア・ポリス[AQUA POLIS]

◀Member▶

中潟　憲雄　Norio Nakagawa(Kbd)
竹迫　一郎　Ichiro Takesako(Ds) '78～'81, '83～'85 ref.NOA
高橋　直哉　Naoya Takahashi(Ds) '82 ex.BELLADONNA,HAL,SHINGETSU
川上　達朗　Tatsuro Kawakami(Ds) '82
桑原　　聡　Satoshi Kuwabara(B) '78～'81
伴田　　宏　Hiroshi Handa(B) '82 ex.KALEIDOSCOPE
桜井　良行　Yoshiyuki Sakurai(B) '83～'85 ex.HAL.ref.NOA
渡辺　幸一　Koichi Watanabe(G) '78～'81
浜田　龍美　Tatsumi Hamada(G) '82～

◀Discography▶

- 7″FLEXI—「Eldorado」MARQUEE MOON:MM0008(Promo) '83
- V.A.(7″FLEXI)-「Progressive's Battle」 MONOLITH:MN-14001～3 '85★

アクア・ポリスは早稲田大学のプログレッシブ・ロック・サークル“イオロス”内で、クリムゾン、ブラッフォード、YESなどをコピーしてきた仲間の中から、オリジナルを演奏するグループとしてキーボードの中潟憲雄が中心となって、渡辺幸一(G)、桑原聡(B)、竹迫一郎(Ds)というライン・ナップで1980年夏に結成。同年12月に越谷にあるスタジオ・ホップで現形美という団体が主催したライブ・イベントでライブ・デビュー。81年頃からはアウターリミッツ等と共演し、吉祥寺シルバーエレファントを中心

として本格的なライブ活動を開始し、若手グループながらブラッフォード等から影響を受けたプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドは素晴らしく、またビル・ブラッフォードに狂信的な竹迫一郎のドラミングは注目を集め、当時の東京のプログレ・シーンを代表するグループの一つとして評価されたが、メンバー・チェンジが激しく、82年に入ると、中潟の他は浜田(G)、元新月のドラマーであった高橋、カレイド・スコープのベーシストの伴田というライン・ナップに一装し、また83年に入ると、中潟(Kbd)、竹迫(Ds)、浜田(G)、桜井(B)というライン・ナップにまたもや大幅なメンバー・チェンジを繰り返す。結局、この83年〜85年の活動停止まで続いたライン・ナップの時が最も充実していた期間であったが、リーダーの中潟が大学卒業後はマイ・ペースな活動しか出来ず、作品の方もマーキー誌の付録ソノシートくらいしか残さないままに活動を停止してしまった。アクア・ポリスの活動停止と前後してドラムスの竹迫はアクア・ポリスのサウンドをよりブラッフォード化したジャズ・ロック・グループ"ノア"を結成、ベースの桜井も参加して現在、活動中である。

アシュール[ASHULE]

◀Member▶

橋元　成朋　Shigetomo Hashimoto(Kbd)

◀Discography▶

●CT-「夢の情景(Yume No Joukei)」 '89

●V.A.(CD)-「Progressive Faces II」MADE IN JAPAN:MCD-3207 '89

●V.A.(CD)-「Kings' Boards」MADE IN JAPAN:MCD-2918 '90

●CT-「Landmark For Century」AUGUST CAROL:AUC-2 '91

<HAS>

●CT-「落日の楽園(Rakujitsu No Rakuen)」共倒れ本舗:LW-1009 '88★

アシュールは仙台でシンセの多重作品を制作している橋元成朋のソロ・ユニット名であり、以前は"HAS"と言う名前で1988年にカセット作品を1本、また89年になり現在のアシュールという名前に変名してカセット作品1本とメイド・イン・ジャパン・レコードからリリースされている2枚のオムニバス・アルバムに1曲づつ参加している。ライブ活動は少なく、自宅録音がメインである彼のサウンドはマイク・オールドフィールドや夢幻を連想させる透明感に溢れるシンフォニックなサウンドであり、この手の中では第一級品のセンスとサウンド作りをしている。

アストラル・テンペル[ASTRAL TEMPEL]

◀Member▶

河原　博文　Hirofumi Kawahara(Syn,ect) ref.OSIRIS,Dr.JEKYL&Mr.HYDE,HERETIC

アストラル・テンペルというユニットはオシリスの河原博文がオシリスと同様に自らのプライベート録音による作品を発表する時の別ユニットでカセットを3本制作している。アストラル・テンペルという名前からも想像できる様にアシュラ・テンペルから影響された前衛的なエレクトロニクス・ミュージック・サウンドであった。(オシリスの項を参照)

アストゥーリアス[ASTURIAS]

◀Member▶

大山　　曜　Yoh Ohyama(Kbd,G,B) ref.AFFLATUS

津田　治彦　Haruhiko Tsuda(G) ex.BELLADONNA,HALL,SHINGETSU,PHONOGENIX

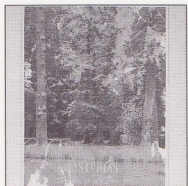
花本　　彰　Akira Hanamoto(Kbd) ex-SERENADE,SHINGETSU,PHONOGENIX

桜井　和美　Kazumi Sakurai(Ds) from AFFLATUS

<GUESTS>

上野　洋子　Yoko Ueno(Vo) from ZABADAK

大野由美子　Yumiko Ohno(P)

◀Discography▶

●ALBUM-「Circle In The Forest」(LP)CRIME:K28P-727/(CD)CRIME:K32Y-2155 '88

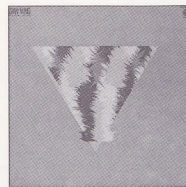
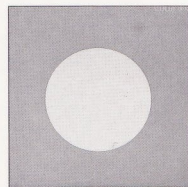
●ALBUM-「Brilliant Streams」(CD)CRIME:KICP-9 '90

東京にあるフォノジェニック・スタジオでマニュピレーターとしてサバダックやレベッカ等のアルバムに参加しているマルチ・プレイヤー(B,G,Synth,A-G)である大山曜が、自らの音楽を発表する場として命名したユニットがアストゥーリアスである。彼は1985年頃から自らのユニットを計画し始め、1987年に同スタジオに勤める伝説的グループ、新月をやっていたギターの津田治彦、キーボードの花本彰、そしてアフレイタスのリーダーであるドラムスの桜井和美という人材を得て正式にアストゥーリアスというユニットを結成。8月に吉祥寺のシルバーエレファントでライブ・デビュー(この時のライブでは、元新月のボーカルであった北山真をゲストに加え、新月の名曲"鬼"を演奏。)した後、1988年10月にファースト・アルバム「Circle In The Forest」、1990年2月に2ndアルバム「Brilliant Streams」をキング・レコードのクライム・レーベルよりリリース。マイク・オールドフィールドあたりからの影響の強い彼の作品は双方共、甲乙の付け難い良質の作品として仕上っており、またマルチ・プレイヤーとして、ミスターシリウスの宮武和広と並ぶ才覚を発揮している。アストゥーリアスはライブ活動はあまり行なわなく、録音活動が中心のユニットであり、サバダックのボーカルの上野洋子やハバナ・エキゾチカのベースの大野由美子等もゲスト参加をしている。

東 祥高[YOSHITAKA AZUMA]

◀Member▶

東 祥高　Yoshitaka Azuma(Syn)

◀Discography▶

●ALBUM-「Moon Light of Asia」(LP)COLUMBIA:YF-7005AX '81★

●ALBUM-「Asian Wind」(LP)COLUMBIA:YF-7024X '81★

● ALBUM-「Far From Asia」(LP)COLUMBIA:YF-7043X '82★
● ALBUM-「Mysterious Asian Roads」(LP)COLUMBIA:YZ-180 '83★
● ALBUM-「Azuma」(LP)PRIVATE MUSIC:2020-1P '87
● ALBUM-「NHK 国宝への旅(Kokuhoeno Tabi)」(CD)NEC:N29C31 '89★

関西の人気フォーク・グループ、五つの赤い風船のメンバーであった東祥高は、五つの赤い風船を脱退後、シンセサイザー・ミュージックのアーティストへと転向した。1981年のわずか1年の間に発表された3枚のアルバムであるエイジア3部作は派手な宣伝もなく余り話題にならなかったが、ここで繰り広げられる荘厳で美しいロマンの世界を聴けば、海外での評価が高いのもうなずけよう。アプローチとしては先にデビューした喜多郎に近く、ただメロディーに趣きを置くよりも、長い曲を聴かせてしまう構築性に彼の本質があるように思える。その後はNHKテレビの音楽を担当して、次第に頭角を現し、アメリカのニューエイジ・レーベル、プライベート・ミュージックよりデビューを果した。

アゾート[AZOTH]

◀Member▶

安達　雅之　Masayuki Adachi(G,Vo)
永井　睦人　Chikato Nagai(Vo)'85~'88
鈴木　　勉　Tsutomu Suzuki(Kbd)'85~'88
渥美　淑子　Toshiko Atsumi(Kbd)'88~ ref.EVE
野田　真弘　Masahiro Noda(B)'85~'88
永田　独歩　Doppo Nagata(B)'89~
藤井　優和　Yuwa Fujii(B)'88
藤原　一宏　Kazuhiro Fujiwara'89~
佐藤　信行　Nobuyuki Sato(Ds)'85~'88

アゾートはブラック・ペイジのローディーをしていた安達雅之(G)、鈴木勉(Kbd)とページェントのローディーをしていた永井博子の弟の永井睦人(Vo)らで1985年10月に結成された大阪のグループ。結成当時のサウンドは関西プログレ・サウンドを根底にしてYES等の影響を受けたサウンドであったが、幾多のメンバー・チェンジを重ね、サウンドの方もF.ザッパやジャズ・ロック、ポップスからの影響が強いプログレッシヴ・ロックへ変貌。現在までにカセット作品を2本と、メイド・イン・ジャパン・レコードのオムニバスに1曲参加している。サウンド的にはまだグループの方向性が定らず模索段階のグループだ。

アタラクシア[ATARAXIA]

◀Member▶

村田　秀明　Hideaki Murata(Vo,B)
小町　　明　Akira Komachi(Kbd)
沼田　伸子　Nobuko Numata(P)
松尾　泰明　Yasuaki Matsuo(Ds)
荒牧　　隆　Takashi Aramaki(G) '85~'86 ref.OUTER LIMITS,VIENNA,PAS DE DEUX,KANON,AFTER THE RAIN
大宮　　淳　Atsushi Ohmiya(G) '86~ ref.PAS DE DEUX

◀Discography▶

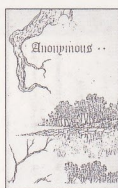
- ALBUM-「刻まれた時間(Adolescence of An Ancient Warrior)」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1007 '86★
- V.A.(CD)-「Symphonic Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3205 '89
- V.A.(CT)-「Made In Japan SampilerⅡ」MADE IN JAPAN:MIJTP-2002 '85★
- V.A.(VIDEO)-「Made In Japan Sampler」MADE IN JAPAN:MIJVD-002 '85★

東京の慶応大学内にあるユーロ・ロック研究会で村田、松尾、小町らがやっていたジェネシスのコピーバンドを母体として、1984年にアタラクシアの前身バンド"POSITION A"を結成。同年の秋にアタラクシアと改名して吉祥寺シルバーエレファントでアウターリミッツの前座として正式にライブ・デビュー。即興的なでたらめ英語を歌う村田の独得のボーカル・スタイルとジェネシスやIQに近いドラマチックなサウンドは評価が高かった。1985年の夏にギタリストの荒牧隆がアウターリミッツのベーシストとして1stアルバム「ミスティー・ムーン」に参加して、アタラクシアのギタリストとアウターリミッツのベーシストとして平行的な活動を始めたが、1986年の2月にアタラクシアを脱退し、代わりに大宮淳が加入して、アルバム「刻まれた時間」を自主制作レーベル"メイド・イン・ジャパン"より5月に発売。好調なスタートを切った彼らだったが、メンバーの大半が大学を卒業して就職し、現在、活動は停滞している。なお、1989年の秋にメイド・イン・ジャパン・レコードから発売されたオムニバスCD「シンフォニック・ロック・コレクション」に彼らのアルバムのトップに収録されていた"Adolescence of An Ancient Warrior"の新録ヴァージョンがおさめられている。

アノニマス[ANONYMOUS]

◀Member▶

竹内　一弥　Kazuya Takeuchi(Kbd,G,Ds)
増山　育男　Ikuo Masuyama(G,Kbd)
大村智比古　Tomohiko Ohmura(B)
小西　俊一　Shunichi Konishi(Ds)

◀Discography▶

●CT-「Musica Fantasia」'85★

●CT-「2」'86★

●CT-「冬の物語(Fuyu No Monogatari)」'87★

●CT-「Moon Shooter」'88★

アノニマスは竹内一弥を中心として名古屋で結成された夢幻、エニッド・タイプのクラシカル・シンフォニック・ロック・グループ。1985年に1stカセット「Musica Fantasia」を自主制作でリリースし、88年までに4本のカセット作品を発表しており、録音活動中心のアマチュア・グループである。88年以降は何も活動を行っておらず現在は自然消滅した。なお、竹内と増山はヘレティックの2ndアルバムにゲスト参加をしている。

阿媚叫喚[ABIKYOKAN]

阿媚叫喚は1977年頃に東京のアンダーグラウンド・シーンで活動していた幻のキーボード・トリオ。彼らのサウンドは全編インストゥルメンタルであり、後期クリムゾンを想わせるリズム隊にインプロビゼーションによるアヴァンギャルトなキーボード・プレイが凄まじいプログレッシヴ・ロックを展開していたバンドだ。各メンバーのテクニックもかなりのもので、キング・クリムゾンやホークウインドをキーボード・トリオで表現した彼らのサウンドは異彩を放つ存在であった。活動期間はさほど長くはなかったと思われる。

アフター・ザ・レイン[AFTER THE RAIN]

◀Member▶

荒牧　隆　Takashi Aaramaki(G) ex.ATARAXIA,OUTER LIMITS,VIENNA

三浦奈緒美　Naomi Miura(Kbd) ref.ROSALIA

太田　雅彦　Masahiko Ota(B,Vo) ref.SOCIAL TENSION

<Support Member>

石崎　豊　Yutaka Ishizaki(Ds) ref.SEILANE ex.ROMANESQUE SYNDROME

川村　賢司　Kenji Kawamura(Piano) ref.SEILANE

◀Discography▶

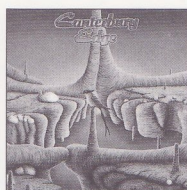
●CD-「Schehelazade」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-PRO1 '91(Promo)

キーボードの遠藤信夫がしばらく、他の音楽活動をしたいという理由で1991年初めに活動を休止したソシアル・テンションのベーシストの太田雅彦と、アウターリミッツ解散後、アウターリミッツのメンバーであったヴァイオリンの川口貴、ベースの杉本正らと共に新グループ"KANON"結成を計画した(このグループは結局、活動するまでに至らなかった。)ギタリストの荒牧隆の2人がプログレッシヴ・ロックの王道を行くスーパーグループを結成しようと意気投合して、急病の為にロザリア及び音楽活動を休止していたロザリアのキーボードの三浦奈緒美を誘い、1991年3月に結成されたばかりのグループがアフター・ザ・レインである。結成されたばかりなので、まだライブ活動は開始されていないが、若手の世代のプログレッシヴ・ロック・グループの主要ミュージシャン達によって結成されたこのアフター・ザ・レインは今後の活動が大いに期待される。おそらく、今後の日本のプログレ・シーンに大きな影響を与えるグループとなるであろう。なを、現在コルサコフ作品の近代クラシックの名曲「シェラザード」をモチーフとしたナンバーを収めたプロモーション用のシングルCDを制作中で、セイレーンのドラムスの石崎とキーボードの川村がサポート・メンバーとして参加している。

アフレイタス[AFFLATUS]

◀Member▶

桜井　和美　Kazumi Sakurai(Ds) ref.ASTURIAS
西沢　均　Hitoshi Nishizawa(Kbd) '84~'88
門馬　ひろみ　Hiromi Monma(Kbd,Syn-B) '86~
山崎　Yamazaki(B) '85~'86
永井　敏己　Toshimi Nagai(B) '87 ex.FOUR,ref.VIENNA,DED CHAPLIN,GERARD,GRAY
大山　曜　Yoh Ohyama '88 from ASTURIAS
上田　一晞　Kazuki Ueda '85

◀Discography▶

●CT-「AFFLATUS」'86★
●V.A.(LP)-「Progressive's Battle'88」MADE IN JAPAN:MIJ-1017 '88★
●V.A.(LP)-「Canterbury Edge」MADE IN JAPAN:MIJ-1019 '88★
●V.A.(CD)-「Jazz Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3206

ドラムスの桜井、キーボードの西沢らがやっていたブラッフォードやブランドX、UKのコピーバンドであったサンゲリア(結成は80年)を解散後、オリジナル・ナンバーをやるグループとしてドラムスの桜井が1983年春にアフレイタスを結成。84年の春に渋谷屋根裏にてライブ・デビュー。一時期ボーカルが加入したりしてUKタイプのテクニカルなプログレ・バンドであった彼らは、85年にギターの上田が加入して次第にプリズムやリタン・トゥ・フォーエバー的なジャズ・ロック・サウンドへと変化し、85年秋にデモ・カセットを発売。この時点では今一歩であった彼らが86年に桜井(Ds)、西沢(Kbd)、上田(G)、門馬(Syn-B)というライン・ナップになってからは彼らの高度な演奏技術と多彩なジャズ・ロック・サウンドが開花し、"関西のブラック・ペイジ、関東のアフレイタス"と評価される様になる。1987年に入りFOURというブランドXタイプのテクニカル・ジャズ・ロック・バンドに在籍していたベーシストの永井敏巳が加入し、最強のライン・ナップとなる。特に上田の和田アキラ張りのギターと永井のパーシー・ジョーンズ張りのフレットレス・ベースは日本のトップ・クラスの演奏テクニックを誇ったが、1987年暮れに永井敏巳がヴィエナに加入のために脱退。代わってアストゥーリアスの大山曜がサポートとして参加しメイド・イン・ジャパン・レコードからリリースされたオムニバス・アルバム2枚に参加(ただし、1曲は永井がベース)するが、89年にギターの上田が脱退し、グループは自然消滅した。アフレイタスは演奏技術とサウンドの両面に渡り、東京のアンダーグラウンドなジャズ・ロック・シーンの中で最も優れた

グループであった。なお、ドラムスの桜井は87年からアストゥーリアスに参加して現在もマイ・ペースに活動、ベースの永井はヴィエナ→デッド・チャップリン&ジェラルド他数多くのセッションで活躍、ギターの上田もバック・ミュージシャンとして活躍している。

アベル[ABEL]

◀Member▶

村上　正樹　Masaki Murakami(Vo)
浅海　　淳　Jun Asami(G,Kbd) ex.ARMERIA,ref.VALKYRE
水口　貴之　Takayuki Minaguchi(G) ref.VALKYRE
渡辺　賢二　Kenji Watanabe(B)
石田　　正　Tadashi Ishida(Ds) ref.VALKYRE

◀Discography▶

●CT-「Grand Prologue」'83★
●CT-「Katharsis」'84★

ノベェラのコピーバンドからスタートして東京のハード・プログレッシヴ・ロック・グループであり、ノヴェラ・タイプのサウンドを純粋に聴かせるグループとしては初期のルーシェルと並んで最右翼に位置するグループであった。彼らは83年と84年にカセット作品を発表し、録音状態は悪いながらも、そこに収められている楽曲は仲々素晴らしかった。1984年にグループは解散したが、浅海、水口、石田の3人はアベルのサウンドを継承するグループ、ワルキューレを1985年に結成した。

アルスノヴァ[ARSNOVA]

◀Member▶

津端　　圭子　Keiko Tsubata(Kbd)
熊谷　　桂子　Keiko Kumagaya(Kbd) '86〜 ex.SYLPHIED
西頭　　京子　Kyoko Saito(B,Vo)
斉藤　優美子　Yumiko Saito(Ds)

ベースの西頭京子が大学時代に同級生であったドラムスの斉藤優美子を誘い、YESやクリムゾンのコピーバンドを転々とした後、キーボードの津端圭子と知り合い、1983年に日本のプログレ唯一のレディース・キーボード・トリオであるアルスノヴァを結成。結成当初はEL&Pのコピーバンドとしてスタートしたが、その後はオリジナル曲を手掛けるようになり、都内のライブ・ハウスに出演し始める。メンバー全員がゴブリン、アレア、オザンナ等のイタリアン・プログレやYES、EL&Pといったブリティッシュの本格的なプログレに憧れている事もあり、レディースとは思えない本格的なプログレ指向のサウンドと天才的なオルガン・プレイを展開させる津端やクリス・スクワイヤ張りの高度なプレイを聴かせる西頭らの演奏力は凄じいものがあり、マイナーな存在ながらレディース・プログレの頂点に立つサウンドと演奏力を誇っていたが、天才的なキーボード奏者の津端が85年に脱退。以前にレディース・ハード・プログレ・バンドであるシルフィードに在籍していた熊谷桂子が1986年に加入したが以前の完成度は築き上げられず活動を停止。彼女達のプログレッシヴな指向性と感性、そして演奏力は何も作品を発表しないままに消えてしまうにはあまりにも惜しい存在であった。

アルメリア[ARMERIA]

◀Member▶

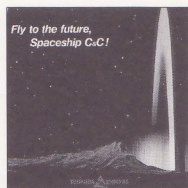
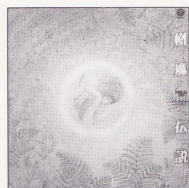
西森　毅　Takeshi Nishimori(G,Vo) ref.LUCIFER
浅海　淳　Atsushi Asami(G) '81~ ref.ABEL,VALKYLE
細野　純弘　Yosihiro Hosono(Vo) '81~ ref.LUCIFER
鬼海　仁　Hitoshi Kikai(B) ref.LUCIFER
桑原　康　Yasushi Kuwabara(Ds) ref.LUCIFER
野中　康恵　Yasue Nonaka(Kbd) '81
橋北　哲哉　Tetsuya Hashikita(Kbd) '81~ ex.VISUAL SCANDAL
吉田　学　Manabu Yoshida(Kbd) '81 ref.LUCIFER,PRIVATES

アルメリアはノヴェラから影響を受けて出現した東京のハード・プログレッシヴ・ロック・グループの中で、ヴィジュアル・スキャンダルと並んで草分け的な存在のグループで、1981年7月に西森毅(G)を中心として桑原(Ds)、鬼海(B)、野中(Kbd)、の4人によって結成された。81年7月26日に東京桜台SOSホールにてデビュー・ライブ後、9月に浅海(G)が加入、12月に野中(Kbd)に代わって橋北(Kbd)とボーカルの細野が加入して、西森(G)、浅海(G)、鬼海(B)、橋北(Kbd)、細野(Vo)、桑原(Ds)というライン・ナップとなって本格的なライブ活動を開始。編成がノヴェラと同じであり、またボーカルの細野がノヴェラの五十嵐と近い歌唱法であり、全体的にかなりノヴェラに近い印象を受けるハード・プログレッシヴ・ロック・グループであった。約1年間程活動を行った後、1982年4月の渋谷ショーボート(現在のラ・ママ)のライブを最後に解散。ギターの浅海はアベル結成へ、キーボードの橋北はヴィジュアル・スキャンダルへ加入。そしてリーダーの西森は細野(Vo)、鬼海(B)、桑原(Ds)と共にルシフェルを結成する。活動は1年程と短かかったが、ルシフェル、アベル、ヴィジュアル・スキャンダルといった東京のハード・プログレッシヴ・ロック・シーンを形成するグループ達のルーツ的な存在として一役買ったグループであった。

安西史孝[FUMITAKA ANZAI]

◀Member▶

安西　史孝　Fumitaka Anzai(Kbd) ex.CROSSWIND

◀Discography▶

● ALBUM-「樹魔伝説(Juma-Densetsu)」(LP)COLUMBIA:CX-7080 '82★
● ALBUM-「Fly To The Future,Spaceship C&C!」(LP)NEC.S.C:YGAS-38 '85★
● ALBUM-「イティハーサ」(CD)KITTY:H32K20114 '88

プログレッシヴなジャズ・ロック・グループであったクロスウィンドの3rdアルバムに参加する傍ら、キーボードの安西はマンガ家の水樹和佳の"樹魔伝説"のイメージ・アルバムの音楽を担当。このアルバムはリズム隊にメロトロン等まで使用した安西の多彩なキーボード・ワークが聴きもので、この手のアニメものの中でもプログレッシヴな色合いが強い好作品に仕上っている。安西はこのアルバム以外にもつくば博のNEC館用のレコードなど幾多のスタジオ・ワークをしている。

安楽死[ANRAKUSHI]

◀Member▶

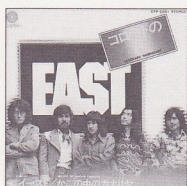
徳久　恵美　Megumi Tokuhisa(Vo) ex.LUCIFER ref.MAGDALENA,TERU'S SYMPHONIA
藤井　　卓　Taku Fujii(G) ref.MAGDALENA,MUGEN
浜田　勝憲　Katsunori Hamada(B) ref.PALE ACUTE MOON,TERRA ROSA,DEAD END
上村　禎徳　Yoshinori Uemura(Kbd) ref.STARLESS
大岩　　　　Oiwa(Ds)

安楽死はマグダレーナの藤井卓(ギター)がやっていたマグダレーナの前身的グループであり、マグダレーナのボーカルの徳久恵美やスターレスのキーボードの上村禎徳、ペール・アキュート・ムーン、テラ・ローザ、デッド・エンドへと活動を進めるベースの浜田勝憲らが参加していた。安楽死はほとんどライブ活動も行なわずに消滅し、藤井の音楽はマグダレーナで開花した。(マグダレーナの項を参照)

イースト[EAST]

◀Member▶

瀬戸　龍介　Ryusuke Seto(G,Jap's Heros)
森田　　玄　Gen Morita(G,Koto,Bambo-Fiute)
吉川　忠英　Ted Yoshikawa(G,Biwa)
足立　文男　Fumio Adachi(Ds,Kbd)
朝日　　昇　Noboru Asahi(B)

◀Discography▶

- ALBUM-「East」(LP)CAPITOL:CTP-9058 '72★
- 7″EP-「Beautiful Morning」CAPITOL:CTP-2679 '72★
- 7″EP-「コロラドの月(Cororado Moonbeams)」CAPITOL:CTP-2851 '73★

瀬戸龍介と森田玄らが1963年頃から始めたフォーク・グループ"ニューフロンティアーズ"は当初、CS&Nなどのコピーバンドであったが、1971年に渡米をして尺八、琴、琵琶などの邦楽器を取り入れたプログレッシヴなフォーク&ロック・サウンドと急激に発展して行き、72年にアメリカのキャピトル・レーベルと契約しバンド名もイーストと改名。1972年にアメリカのキャピトル・レーベルを通じて日本、オーストラリア等6ヶ国でアルバム「イースト」とシングル「ビューティフル・モーニング」を発売。翌年には2ndシングル「コロラドの月」をリリースするが、バンドは解散。瀬戸龍介はその後ソロ・アーティストとなりイーストのサウンドを継承した邦楽器サウンドのアルバムをリリース。吉川忠英はスタジオ・ワークで活動。イーストはファーイースト・ファミリーハンドと並び邦楽器を導入し和旋律をフォーク&ロックに取り入れた代表的なグループであった。

イースト・バイオニック・シンフォニア[EAST BIONIC SYMPHONIA]

◀Member▶

小沢　　靖　Yasushi Ozawa
岡部　　馨　Kaoru　Okabe
浜田　和明　Kazuaki Hamada
今井　和雄　Kazuo Imai
多田　正美　Masami Tada
越川　和尚　Kazunao Koshikawa
推　　　啓　Hajime Sui
向井　千恵　Chie Mukai
峰岸　政春　Masaharu Minegishi
服部　達雄　Tatsuo Hattori

◀Discography▶

●ALBUM-「East Bionic Symphonia」(LP)ALM:AL-3001 '76★

イースト・バイオニック・シンフォニアはタージマハール旅行団の小杉武久に共感した門下生によって結成された即興音楽集団であり、1976年7月13日に神田美学校に於いて即興ライブを行ない、その時の演奏がコジマ録音の自主制作レコード「East Bionic Symphonia」として1976年に発売された。弦楽器やパーカッションなどを中心とした前衛、実験音楽であり、タージマハール旅行団と同様の方向性を持つものであった。

イブ[EVE]

◀Member▶

釜木　茂一　Shigekazu Kamaki(G) ex.MUGEN,ORPHEUS, ref.KEHELL,SIRIUS
古和田　貴子　Takako Kowada(Vo)
岡本　芳孝　Yoshitaka Okamoto(Ds)
脇本　　靖　Yasushi Wakimoto(B)
渥美　淑子　Toshiko Atsumi(Kbd) '87~ ref.AZOTH
落合　尚典　Naonori Ochiai(B) ex.ORPHEUS,TSURUGINOMAI

◀Discography▶

●CT-「EVE」EVE:8-04FC '88★
●CT-「Dream Magic」RST CALL '88★

オルフェウスや夢幻に在籍していたギタリストの釜木茂一と女性ボーカルの古和田貴子が中心となって1984年に結成された大阪のハード・プログレッシヴ・ロック・グループでかなりポップス色の強いストレートなロック・サウンドであった。85年にギターの釜木が一時脱退し、1年間程活動停止をしていたが86年暮れに活動再開。87年にキーボードの渥美淑子が加入して5人編成となり翌年にデモ・カセットを2本制作。現在でも活動中。なお、ギターの釜木は自らのジャズ・ロック・グループ"ケッヘル"とミスターシリウスでも活躍しており、キーボードの渥美もアゾートでも活動している。

イオ[IO]

◀Member▶

石澤　博幸　Hiroyuki Ishizawa(B) ex.ROSE BAND
平垣　章子　Akiko Hiragaki(Vo)
稲葉　　光　Hikaru Inaba(Ds)
石田　克久　Katsuhisa Ishida(Kbd)
上村　政弘　Masahiro Uemura(G) ex.DARANI

◀Discography▶

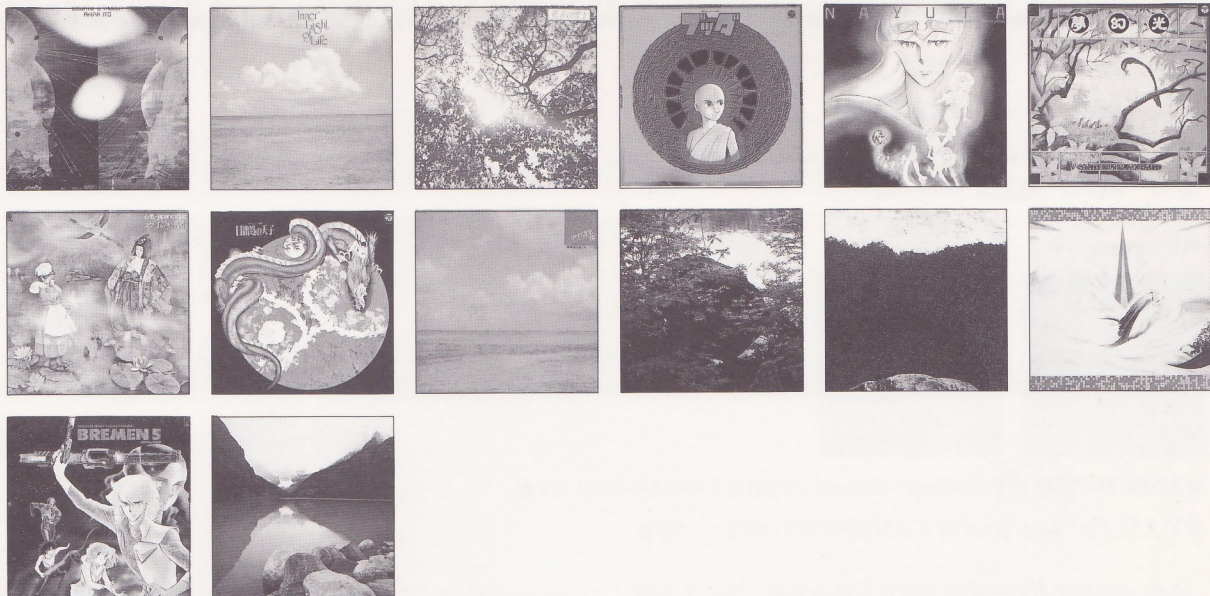
● ALBUM-「Glass Castte」(CD)IO:LMCD-1140 '90

イオは元ロゼ・バンドの石澤が中心となって1988年10月に結成された東京の新鋭グループでテルズ・シンフォニアやページェント・タイプのシンフォニック・ロック・サウンドのグループである。彼らは1990年の夏に自らのレーベルからCD「Glass Castle」をリリース。ボーカルの平垣の歌唱法は今一歩ながらみずみずしい演奏を聴かせてくれ好感が持てる。このCDのレコーディング後、元蛇羅尼のギタリストであった上村はグループを脱退している。

伊藤 祥[AKIRA ITO]

◀Member▶

伊藤　　祥　Akira Ito(Syn) ex.FAR EAST FAMILY BAND
〈GUESTS〉
ジョー山中　Joe Yamanaka(Vo) ex.FLOWER TRAVELIN'BAND ⑤
豊田　貴志　Takashi Toyoda(Vln) ex.SPACE CIRCUS ⑤⑦
篠原　信彦　Nobuhiko Shinohara(Kbd) ex.HAPPNINGS 4, FLOWER TRAVELIN BAND, TRANZAM ⑤⑥⑦
石川　　恵　Kei Ishikawa(B) ex.FAROUT, CRNICLE, TASMARIN ⑤⑥⑦
チェピート　Chepito(B) ex.EASTAN ORBIT ⑤④⑦
小川てつとむ　Tetsutomu Ogawa(G) ⑤
高橋ヒロシ　Hiroshi Takahashi(G) ⑤
高崎　静夫　Shizuo Takasaki(Ds) ex.FAR EAST FAMILY BAND, ref.KANZEON ⑤④
石間　秀樹　Hideki Ishima(G) ex.FLOWER TRAVELIN BAND, ref.TRANZAM ⑥
仙波　清彦　Kiyohiko Semba(Perc) from SQUAIRE, ex.KANZEON ⑥
菊地　正志　Masashi Kikuchi(Bambo-Flute) ex.KANZEON ⑥
巳城　研二　Kenji Mishiro(Vo) ex.CHRONICLE ⑥
瀬戸　龍介　Ryusuke Seto(G,Biwa) ex.EAST
原田　裕臣　Hiroomi Harada(B)

◀Discography▶

- ALBUM-「菩薩&夢幻(Bosatsu&Mugen)」(LP)BLACK:BBL-2020 '78★
- ALBUM-「やすらぎを君に(Inner Light of Life)」(LP)KING:SKS-38 '78★
- ALBUM-「聖音の響き(Seionno Hibiki)」(LP)KING:SKS-76 '79★
- ALBUM-「ブッダ(Budda)」(LP)COLUMBIA:CX-7096 '83★④
- ALBUM-「那由他(Nayuta)」(LP)STAR CHILD:K25G-7154 '83★⑤
- ALBUM-「夢幻光(Mugenko)」(LP)COLUMBIA:YF-7062 '83★
- ALBUM-「心気 Japaneaqu」(LP)KING:K28A-189 '81★⑥
- ALBUM-「日出処の天子(Hiizurutokorono-Tenshi)」(LP)COLOMBIA:CX-7056 '82★⑦
- ALBUM-「やすらぎを君に(Inner Light of Life)」(LP)DISKPORT:SE-3079(Promo) '78
- ALBUM-「禱(Prayers)」(CD)dPOLYSTAR:H35X-20001/(LP)POLYSTAR:R28X-1001 '86★
- ALBUM-「一水皿見(Four Corners of The Water)」
  (CD)POLYSTAR:H35X-20002/(LP)POLYSTAR:R28X-1002 '86★
- ALBUM-「Marine Flower」(CD)POLYSTAR:H35X-20003/(LP)POLYSTAR:R28X-1003 '86★
- ALBUM-「Eon」(LP)CBS SONY:25AG-681 '79★
- ALBUM-「Bremen 5」(LP)STAR CHILD:K28G-7231 '85★
- ALBUM-「ホピの予言(Hopi Prophecies)」(LP)POLYSTAR:R28X-1004/(CD)POLYSTAR '86★
- ALBUM-「α波トーク(α Wave Take)」(CD)KING:KICS-2086 '90
- ALBUM-「小倉百人一首」(CD)CBS:32DG-37 '85★

伊藤祥はファーイースト・ファミリー・バンドのメンバーとして1975年に発売された1stアルバム「地球空洞説」と2ndアルバム「パラレル・ワールド」に参加した後に喜多郎や宮下フミオと同じ様な東洋を表現したシンセサイザー・ミュージック奏者としてソロ活動を始め数多くの作品をリリースしている。彼の純粋な作品から環境音楽やアニメのイメージ・レコードまで幅広い範囲で作品の制作をしている彼の中で代表的なものはソロ・アルバムのデビュー作「菩薩&夢幻」('78)、「夢幻光」('83)、「日出処の天子」('82)といった所。サポート・メンバーとしてファーラウトのベースの石川やフラワートラベリン・バンドに参加していたキーボードの篠原、クロニクルのボーカルの巳城、ファーイースト・ファミリー・バンドや観世音のドラマーの高崎などが参加していた。

稲田保雄とベミファミリー[YASUO INADA+BEMI FAMILY]

◀Member▶

稲田 保雄 Yasuo Inada(Kbd)
藤井 章司 Shoji Fujii(Ds) ex.SHOCK,SMOKY MEDICINE,ref.IPPUDO
志村 昭三 Shozo Shimura(G)

◀Discography▶

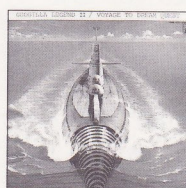
● ALBUM-「感覚思考(Kankaku-Shiko」(LP)東宝TAM:AX-5803 '74★
● V.A.(LP)-「East West'77」CANYON:WT-9001～2 '77★

クラシック畑出身の稲田保雄なる人物の活動についての詳細は不明だが、彼は藤井彰司(ベース/元スモーキー・メディスン、そして後に一風堂で活躍。)と志村昭三を従えて"ベミ・ファミリー"というユニットで1974年に東宝レコードよりアルバム「感覚思考」をリリース。このアルバムはドビュッシーの"水に映る影"やベートーベンの"悲愴"などをモチーフとし、オリジナル作品として発展させたアルバムであり、ピアノ、オルガン、メロトロン、シンセサイザーを用いて富田勲的なアプローチのシンセサイザー・ミュージック・パートからトリオ編成によるスリリングなインプロビゼーションを展開するイタリアン・プログレ風のサウンドまで当時のキーボード・サウンドのアルバムの中では最も先進的なプログレッシヴ・ロックとして高く評価されるものであった。このベミ・ファミリーというユニットは1977年にヤマハのイースト・ウエストに出場したが、この頃には平均的なポップ・ロック・サウンドへと変化してしまった。

井上 誠[MAKOTO INOUE]

◀Member▶

井上 誠 Makoto Inoue(Kbd) from HIKASHU

◀Discography▶

● ALBUM-「ゴジラ伝説(Gozira Chronology I)」(LP)KING:K28G-7110★/(CD)KING:K32X-7032
● ALBUM-「ゴジラ伝説II(Gozira Chronology II)」(LP)KING:K28G-7171★/(CD)KING:K32X-7033
● V.A.(LP)「Synthetic Space」RCA:RVL-7107 '78★

P-モデルと共にテクノ・ポップの騎手として80年代前半に活躍したヒカシューはもともと、劇団で演劇を学んでいた巻上公一(Vo)が自分の演劇の音楽を担当する為に井上誠(Kbd)、山下康(Kbd)、海琳正道(G)、戸辺哲(Sax)と共に1977年に結成したグループであり、ピンク・フロイド、クラフト・ワーク、ロバート・ワイアット、ブライアン・イーノ、フランク・ザッパ、ロキシー・ミュージックといったグループから影響された彼らの初期のサウンドは正にプログレッシヴ・ロックと呼ぶべき先進的な鋭い感性を持ったグループであったが、そのメンバーの中でも最もプログレ色を受け持っていたのがキーボードの井上誠である。彼はヒカシューでも常にメロトロンを使用していた訳だが、ブライアン・イーノと特撮怪獣映画の「ゴジラ」の伊福部昭から多大

なる影響を受けているミュージシャン。彼は造形大学を中退後、1977年にヒカシューに参加。ヒカシューのデビューより1年前の1978年に「プレイボーイ」誌のシンセサイザー・コンテストに自らのプライベート録音作品を応募して優秀賞に輝きRCAレコードから発売されたこのコンテストのオムニバス・アルバム「Synthetic Space」にマンドレイクの平沢進などの作品と一緒に収録されている。井上のこの作品はプログレッシヴ・ロックとしてのシンセサイザー・ミュージックとしては第一級品のもので、若き日の彼の才能に目を見張らされた。1979年に東芝EMIからアルバム「ヒカシュー」でデビュー、井上はヒカシューで活動を続ける傍ら、1983年にキング・レコードより、伊福部昭作曲の"ゴジラ"をシンセサイザーでアレンジ・演奏したアルバム「ゴジラ伝説」をリリース。伊福部の近代クラシック・ナンバーをプログレッシヴ・シンセサイザー・ミュージックに見事に昇華させたアルバムであり、ゴジラ復活ブームに一役買う大ヒット作品となり、パート3まで制作後は現在でもヒカシューで活躍中だ。

イル・ベルリオーネ[IL BERLIONE]

◀Member▶

井戸沼　尚也　Naoya Idonuma(G)
小倉　和夫　Kazuo Ogura(B)
川村　雅裕　Masahiro Kawamura(Ds)
高野　浩雄　Hiroo Takano(Fl,Sax)
谷口　博史　Hirofumi Taniguchi(Kbd,Vo)

◀Discography▶

●CT-「Il Berlione」PRM-4005 '90
●V.A.(CD)-「Lost Years In Labyrinth」BELLE ANTIQUE:9119 '91

イル・ベルリオーネは1987年に結成された東京の新鋭グループ。結成当時は井戸沼(G)、川村(Ds)、そして白鳥仁(B)のトリオ編成で新生クリムゾン的なプログレッシヴ・ロック・サウンドをベーシックとしたジャズ・ロックをやっていたが、現在ではサックス&フルート、キーボードを加え、オルタネイティヴなニューウェーブ色なども加わったカラフルなサウンドへと発展した。演奏力も安定しており、将来性が楽しみなグループだ。なお、彼らは90年に自主制作でカセットを発表している。

イルリヒト[IRRLICHT]

◀Member▶

山本　順　Jun Yamamoto(Vo)
浅倉　優作　Yusaku Asakura(G)
和田誠一郎　Seiichiro Wada(G)
青島　伸行　Nobuyuki Aoshima(B)
勝俣　誠　Makoto Katsumata(Ds)

クラウス・シュルツのアルバム・タイトルから命名されたイルリヒトは名前とは裏腹にハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドのグループ。イルリヒトはボーカルの山本とギターの浅倉が博多でプログレッシヴ・ロック・バンドとして多重録音を繰り返し暖めて来たバンドで、クラウス・シュルツなどに影響を受けたサウンドのグループとして出発したが、メンバーチェンジを繰り返し

て1982年に山本(Vo)、浅倉(G)、和田(G)、青島(B)、勝俣(Ds)というライン・ナップになってからはプログレッシヴ・ロックの要素が時折り顔を出すローリング・ストーンズ風のハード&グラム・ロック・バンドへと変身した。82年頃には博多から東京のライブ・ハウスへよく遠征に来ていたが、その後の活動は不明。

イワオ[IWAO]

◀Member▶

川嶋　いわお　Iwao Kawashima(G,B,Vo)
和田　幸之介　Kounosuke Wada(Ds) ex.DAY BREAK
世良　みつる　Mitsuru Sera(Kbd)

イワオは大阪に在住していた川嶋いわおが結成したグループで、プログレッシヴ・ロックをベーシックにしながらもムーン・ライダースなどのオルタネイティヴ系のニューウェーブの要素も取り入れられた一風変わったサウンドを持つグループであり、1984年まで大阪のアンダーグラウンド・シーンでライブを行っていた。仕事の都合で川嶋が1984年に東京に上京してから、一時期東京でイワオを再結成したが短命に終ってしまった。

インターフェイス[INTERFACE]

◀Member▶

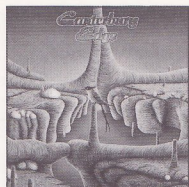
白鳥　春樹　Haruki Shiratori(Kbd)
梅木　伸之　Nobuyuki Umeki(Kbd)
河内　Kawachi(kbd)
菅原　一　Hajime Sugawara(G)
能祖　信二　Shinji Nouzo(Kbd)

インターフェイスは梅木信之と能祖信二の2人のキーボード奏者を中心に結成された東京のグループで、1977年～79年頃に吉祥寺のシルバーエレファント等でライブ活動を行っていた。彼らのサウンドはタンジェリン・ドリームの影響を多大に受け、かつピンク・フロイドやノヴァリス等のプログレッシヴ・ロック・サウンドを吸収したエレクトロニック・ミュージックであり、当時彼らが制作したデモ・テープ(非売品)はかなりの水準を持つ好作品であった。

インターポーズ[INTERPOSE]

◀Member▶

田中　健司　Kenji Tanaka(G)
三浦　宏之　Hiroyuki Miura(G)
藤枝　かなで　Kanade Fujieda(B)
佐藤　勝彦　Katsuhiko Sato(Ds)
真野　めぐみ　Megumi Mano(Kbd,Vo) ex.SCHEHERAZADE,ROSE BAND

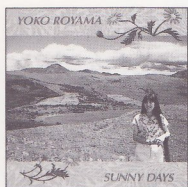
◀Discography▶

● V.A.(LP)-「Canterbury Edge」MADE IN JAPAN:MIJ-1019 '88★

インターポーズはツイン・ギターにベース、ドラムス、そしてヴァーミリオン・サンズの前身のシェヘラザードのオリジナル・ボーカルであり、ロゼ・バンドでキーボードを担当していた事もある真野めぐみがボーカルで加わった5人編成のジャズ・ロック・バンドである。1987年頃から都内のライブ・ハウスで活動を始め、1988年にはメイド・イン・ジャパン・レコードからリリースしたオムニバス・アルバム「カンタベリー・エッジ」に1曲収録。真野のポップな歌とストレートなジャズ・ロック・サウンドを聴かせるグループだったが1989年に解散。

ヴァーミリオン・サンズ[VERMILION SANDS]

◀Member▶

蠟山　陽子　Yoko Rouyama(Vo) ref.SCHEHERAZADE
山田　雅弘　Masahiro Yamada(Kbd) ref.SCHEHERAZADE
坂上　真清　Masumi Sakaue(G)
太田　研司　Kenji Ota(B,Vo) '85~'87 ref.NEBULA
小笠原　良二　Ryoji Ogasawara(B) '87~
山崎　孝文　Takafumi Yamazaki(Ds) '85~'87
的場　ひさし　Hisashi Matoba(Ds) '87~ ref.NEBULA
田辺　弘幸　Hiroyuki Tanabe(Fl) '85~'87

◀Discography▶

● ALBUM-「Water Blue」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1016'87★/(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2913 '90
● V.A.(CD)-「Symphonic Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3205 '89
〈Yoko Rouyama Solo〉
● ALBUM-「Sunny Days」(CD)BONSAI:BNCD-001 '90

ルネッサンスやメロウ・キャンドル、スティーライスパンなどのマニアックなブリティッシュ・プログレ&トラッド・フォークのコピーをやっていたシェヘラザードに在籍していた女性ボーカルの蠟山陽子とキーボードの山田雅弘にイエスなどのコピーバンドをやっていたギターの坂上真清が声をかけて1985年の2月に結成。結成当初のメンバーは上記の3人の他に太田研二(ベース&ボーカル)、山崎孝文(ドラムス)、田辺弘幸(フルート)という6人編成で、ルネッサンス的なシンフォニック・ロックとトラッド・フォークをベーシックとしたブリティッシュ色を強く押し出したリリカルなサウンドは、一部のマニアの間で脚光を浴び、東京のアンダーグラウンド・シーンで早くから高い評価を受けていた。1987年にベースの太田がEL&Pタイプのキーボード・トリオ"ネビュラ"を結成の為に脱退し、またドラムスの山崎も同時に脱退。代わってベースの小笠原とドラムスの的場が加入して1987年秋にレコーディング、12月にメイド・イン・ジャパン・レコードからファースト・アルバム「ウォーター・ブルー」を発表。初回プレス分はまた

たく間に完売。90年夏にはボーカルの蠟山陽子のソロ・アルバム「サニー・デイズ」を自らの自主制作レーベルであるBONSAIレコードから発売。このアルバムはトラッド・フォークのスタンダード・ナンバーも含まれたヴァーミリオン・サンズのサウンドの延長線上のもので、ヴァーミリオン・サンズのメンバーが参加して作られたもの。またフランスのムゼア・レーベルから2ndアルバム発売の為に現在は準備中。なお、蠟山と山田はシェヘラザードを復活させ現在はヴァーミリオン・サンズと平行活動を行っている。

ヴィエナ[VIENNA]

◀Member▶

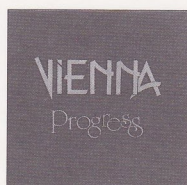
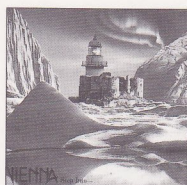
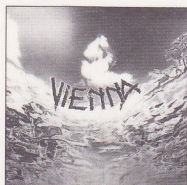
藤村　幸宏　Yukihiro Fujimura(G,Vo) ex.GERARD,ref.DED CHAPLIN

塚本　周成　Shusei Tsukamoto(Kbd) ex.MÖBIUS,from OUTER LIMITS

荒牧　　隆　Takashi Aramaki(B) '87 ex.ATARAXIA,from OUTER LIMITS,ref.PAS DE DEUX,KANON,AFTER THE RAIN

永井　敏巳　Toshimi Nagai(B) '88～ ex.FOUR,AFFLATUS,ref.DED CHAPLIN,GERARD,GRAY

西田　竜一　Ryuichi Nishida(Ds) ex.SOPHIA,NOVELA,TERU'S SYMPHONIA ref.JACKS'N'JOKER,ACTION

◀Discography▶

● ALBUM-「Overture」(LP)CRIME:K28P-707/(CD)CRIME:K32Y-2124/(CT)CRIME:K28W-590 '88
● ALBUM-「Step Into...Vienna」(LP)CRIME:K28P-730/(CD)CRIME:K32Y-2175 '88
● ALBUM-「Progress(*Live)」(CD)CRIME:292E-2011 '89
● 7″FLEXI-「Follow You」Rock'n f(Promo) '88
● CT-「Vienna」MADE IN JAPAN(Promo) '87
● VIDEO-「Progress」MUSICA LIBERO:480V-1017(Promo) '90

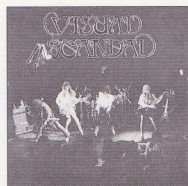
1987年4月、ノヴェラ、ジェラルド、スターレスなどの主要グループの活動停止やページェント、アウターリミッツなどのグループの主要メンバー脱退が相い継ぎ、傾きかけてきたジャパニーズ・プログレッシヴ・ロック・シーンの救世主となるスーパー・グループを作ろうとプロデューサーのヌメロ・ウエノが、ジェラルドのキーボードの永川敏郎とギターの藤村幸宏、ノヴェラを脱退したドラムスの西田竜一らに提案。毎日のようにメンバーの検討の為のミーティングを行い、藤村幸宏(ギター&ボーカル)、西田竜一(ドラムス)、アウターリミッツの塚本周成(キーボード)、ページェントの中嶋一晃(ギター)そしてベースの適任者が見つからずアウターリミッツのギターの荒牧隆がベースを担当して5月からサウンドの方向性を固める為のリハーサルを開始した。(ジェラルドの永川敏郎はアースシェイカーに加入しプロダクションの契約上、参加せず。)文字通り、各バンドから主要メンバーが集まったこのスーパーユニットは"ヴィエナ"と命名され初ライブに向けて本格的にリハーサルを行ない、(当初参加していた中嶋一晃は脱退。)1987年7月26日に吉祥寺シルバーエレファントで行なわれたアウターリミッツのライブにゲスト参加をして2曲披露。この時点ではまだまだグループとしてサウンドの方向性は固まっていなかった。ヴィエナは11月22日に渋谷のエッグマンで正式なデビューライブを行ない、正式なバンド形態として復活したテルズ・シンフォニアと共にプログレ・ファンから大きな期待と注目を浴びた彼らに対して、メイド・イン・ジャパン・レコードとキング・レコードが共同企画をしてキング・レコード内にクライム・レーベルを新設、ヴィエナはこのクライム・レーベルの第一弾アーティストとしてアルバム発売とレーベル発足の準備が進められる。88年1月、フォー、アフレイタスというジャズ・ロック・バンドでパーシージョーンズ張りのテクニックを誇っていたベーシストの永井敏巳が荒牧隆に変わって加入し、レコーディングを開始。ファースト・アルバム「Overture=序章」は5月21日にクライム・レーベルの第一弾として発売された。このアルバムは日本のプログレとしてはかつてないほどの大規模なプロモーションがなされ、「ロッキンf」誌には特集記事にソノシートが付録されるなど、大きな話題を呼んだ。また、ベースの永井が加入した事によって藤村(Vo&G)、塚本(Kbd)、永井(B)、西田(Ds)の4人の鉄壁なライン・ナップとなったファースト

のアルバムのレコーディングを通じて、バンドとして結束を固めて本当の意味に於いての"バンド"としての出発点に立った彼らはレコード発売記念ツアーとして東京の中野公会堂(5月28日)等でライブを行った。塚本=藤村コンビで作られるサウンドはジェラルドの持っていた叙情的なメロディーとアウターリミッツ的な変拍子が一体となったハードであり、キャッチーであり、かつ壮大なスケールを持つシンフォニック・ロックを作り出し、日本でトップ・クラスに位置するテクニックを持つ永井=西田のリズム隊はヴィエナのサウンドにとって不可欠な強力な武器としてプログレ・ファンの前に強烈なインパクトを持って登場してきたのであった。夏には東京、大阪など全国7ヶ所でツアーを行った後、9月に早くも2ndアルバムのレコーディングを開始。12月25日に2ndアルバム「Step Into....Vienna」発売。1stアルバムでは未だバンドとして完成されていなかった彼らの真価をフルに発揮した本作は演奏技術、サウンド、アルバムの構成力のすべての点に於いて日本のプログレの頂点を極め、彼ら4人でしか表現できない日本のプログレの名作として、プログレ・ファンの間で高く評価され彼らの人気も急激に高まり波に乗った感があったが、アルバム発売と前後してドラムスの西田が突然脱退を申し出てバンドで協議の結果、解散と決定。2ndアルバムの発売記念ツアーは急拠解散ツアーに変更され東京、大阪、名古屋の3ヶ所で行なわれ、1989年1月15日の東京の新宿パワーステーションを最後に幕を閉じた。結成から解散まで1年半余りという短い間ではあったが、その演奏技術と作曲・アレンジ力、パワーのすべての点に於いて強烈なインパクトを残し、プログレ・ファンやミュージシャンに影響を与えた彼らは日本のプログレ史上、再びない不世出のスーパーグループであった。

ヴィジュアル・スキャンダル[VISUAL SCANDAL]

◀Member▶

神林　健二　Kenji Kanbayashi(B)
橋北　哲也　Tetsuya Hashikita(Kbd) ref.ARMERIA
流石　　勲　Isao Nagareishi (Ds)
高瀬　秀樹　Hideki Takase(Vo) ref.LUCIFER
芹田　　浩　Hiroshi Serita(G)
永瀬　　怜　Rei Nagase(G)

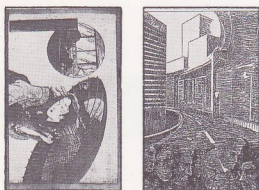
◀Discography▶

● 7″EP-「Visual Scandal」VISUAL SCANDAL(Ltd.100) '81★
● VIDEO-「Visual Scandal」VISUAL SCANDAL '83★

ヴィジュアル・スキャンダルは、ノヴェラ同時期にデビューした東京を代表する"オケバン"(=お化粧バンドの略)であり、デビッド・ボウイなどのグラム・ロックをベーシックとしながらノヴェラ風なハード・プログレッシヴ・ロックの要素も兼ね備えたグループで、この手の女の子のファンの間では伝説的な存在のグループだ。ヴィジュアル・スキャンダルはベースの神林"チェリー"を中心として80年に結成。80年6月に原宿のクロコダイルにてライブ・デビュー、この頃の彼らのサウンドは外道のコピーを中心としたものであったが、81年に神林(B)、流石(Ds)、高瀬(Vo)、芹田(G)、永瀬(G)というライン・ナップとなってからは上記したグラム・ロックにハード・プログレの要素を取り入れたサウンドへと変化し、彼らは自主制作で限定100枚プレスのシングル「Visual Scandal」を制作、ライブの時に販売した。83年にキーボードの橋北が加入してよりハード・プログレッシヴ・ロック色が強まったが、次第にバンドは煮詰まって行き1985年1月15日に渋谷屋根裏のライブを最後に解散した。

薄羽蜉蝣[USBAKAGERO]

◀Member▶

前田　ヨシヒロ　Yoshihiro Maeda(Kbd)'86～'87
今沢　ツトム　Tsutomu Imazawa(B)
筒井　ヒデキ　Hideki Tsutsui(Vln,Clarinet,P)
荻中　マサキ　Masaki Oginaka(Tp,Recorder)'87
出羽　ヨシハル　Yoshiharu Dewa(Ds)'87
畑中　ヒデユキ　Hideyuki Hatakenaka(Fl)'87
沢田　カズヒロ　Kazuhiro Sawada(G)'86～'87

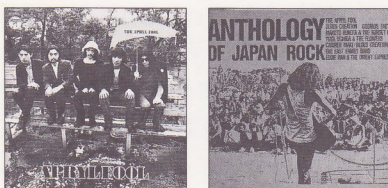
◀Discography▶

● CT-「薄羽蜉蝣(Same)」'86
● CT-「劇的変革(Gekiteki Henkaku)」'88

薄羽蜉蝣は2本のカセット作品をリリースしている札幌のアマチュア・ジャズ・ロック・グループ。ベースの今沢とヴァイオリンの筒井を中心としたサウンドは、1stカセット「薄羽蜉蝣」(86年発表)の時点では平均的なカンタベリー系ジャズ・ロックであったが、88年にリリースされた2ndカセット「劇的変革」ではトランペット、フルート、リコーダーなども加え、ZAO、UNIVERS ZEROといったチェンバーロックやマウロ・パガーニなどのような地中海を想わせるジャズ・ロック・サウンドへと発展した。演奏技術は今一歩であったが、鋭い感性を持ったグループで、ライブ活動はあまり積極的ではなく、もっぱらスタジオ・ワークのグループであったようだ。現在、彼らは自然消滅してしまった。

エイプリール・フール[APRYL FOOL]

◀Member▶

細野　晴臣　Haruomi Hosono(B) ref.HAPPY END,YMO,ティン・パン・アレイ
松本　隆　Takashi Matsumoto(Ds) ref.HAPPY END,ティン・パン・アレイ
柳田　ヒロ　Hiro Yanagida(Kbd) ex.FRORAL ref.LOVE LIVE LIFE,FOOD BRAIN,SHINROKUMONSEN
菊地　英二　Eiji Kikuchi(G) ex.FRORAL
小坂　忠　Chu Kosaka(Vo) ex.FRORAL ref.フォージョーハーフ

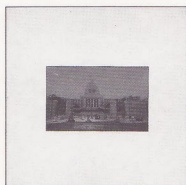
◀Discography▶

● ALBUM-「Apryl Fool」(LP)COLUMBIA:YS-10068-J '69★
Re-issued(LP)COLUMBIA:AX-7444/(CD)COLUMBIA:CA-2091 '88
● V.A.-「Anthology of Japan Rock」(LP)COLUMBIA:AX-7447/(CD)COLUMIA:CA-2094 '88

モンキーズ・ファンクラブの日本支部が公募して1968年に結成されたGSグループのフローラル(ミュージカラーレコードからシングル2枚をリリース。)に在籍していたキーボードの柳田ヒロ、ボーカルの小坂忠、ギターの菊池英二の3人は本格的なブリティッシュ・ロック・サウンドのバンド結成の為に、柳田ヒロの兄の柳田優がやっていたドクターズというグループでベースをやっていた細野晴臣、その細野とバーンズというサイケ・ロック・グループをやっていたドラムスの松本隆を誘い69年4月1日にエイプリール・フールを結成。4月に虎の門にあるテイチク・スタジオでアルバム「エイプリール・フール」をレコーディング。4月20日に虎の門の某所で行なわれたロック・ジャム(スカイやブルース・クリエイション等が出演)を始め、新宿パニック等でライブ活動を開始した。当時の彼らのサウンドはヴァニラ・ファッジ、アイアン・バタフライ、ドアーズといったサイケデリック・ロック色が強く、また実験的なアート・ロック色も取り入れられたもので、GSから本格的ロックへ成長した日本のロック・シーンの第一歩を記す記念的なアルバムであると共に、プログレッシヴ・ロックとしての要素を取り入れた日本初のサウンドでもあった。1969年の9月にアルバム「エイプリール・フール」が発売され、9月27日に日消ホールに於いて発売記念コンサート(入場料無料のフリーコンサート)が行なわれたが、もともと"レコード発売が決定しており給料が出る"為に参加しアメリカン・ポップス指向であった細野、松本と、よりブリティッシュ、とりわけプログレッシヴ・ロックを追求しようとしていた柳田との音楽的な対立によりバンドは崩壊し、このコンサートが発売記念コンサートであると共に解散コンサートとなってしまい、細野、松本は大滝詠一、鈴木茂を誘いバレンタイン・ブルー結成、そしてはっぴいえんど、ティンパン・アレイへと活動して行き、(細野はその後、YMO、松本は作詞家に転向)小坂忠はミュージカル"Hair"に参加した後、フォージョーハーフ、ティンパン・アレーを経てゴスペルのシンガーへと進み、柳田ヒロは柳田ヒロ・グループ、フード・ブレーン、ラヴ・リヴ・ライフと初期ジャパニーズ・プログレの立役者として大活躍をして行った。

エスケイプ[ESCAPE]

◀Member▶

高中　正義　Masayoshi Takanaka(G,Vo) ref.FLIED EGG,SADISTIC MIKA BAND
石山　恵三　Keizo Ishiyama(Ds)
畑野　亨　Toru Hatano(B)
武谷ひかる　Hikaru Takeya(Kbd)

◀Discography▶

● V.A.(LP)-「Brush」G.O.D.FAMOUS CO.:TPR-1176 '71★

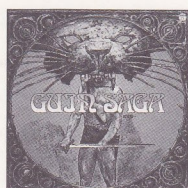
エスケイプは高中正義がフライド・エッグ加入以前にやっていたクリムゾンなどのコピーを中心としたグループであり、1971年に幾つかのアマチュア・グループを集めた自主制作によるオムニバス・アルバム「ブルッシュ」に参加。初期クリムゾンの叙情性を感じさせるナンバーをやっていた。高中正義はこの後、フライド・エッグを経てサディスティック・ミカ・バンドへと進み、ベースの畑野亨は1977年にシンセサイザー奏者へ転向してコロムビアからアルバム「杏子」をリリースしている。

淡海悟郎&ビック・マウス[GORO OUMI & BIG MOUTH]

◀Member▶

淡海　悟郎　Goro Oumi(Kbd) ex.MINOTAURUS
豊田　勝敏　Katsutoshi Toyoda(Ds)
高水　健司　Kenji Takamizu(B) ex.KAZUMI BAND①

渡辺　　直樹　Naoki Watanabe(B)②
ハイ・メイカン　Hai Meikan(G)

◀Discography▶

- ALBUM-「Guin Saga I (辺境篇)」(LP)COLUMBIA:CX-7121 '83★/(CD)35C35-7154 '84★
- ALBUM-「Guin Saga II (陰謀篇)」(LP)COLUMBIA:CX-7176 '84★/(CD)32C35-764 '85★
- ALBUM-「Guin Saga III (戦乱篇)」(LP)COLUMBIA:CX-7217 '85★/(CD)32C35-7641 '85★
- ALBUM-「Guin Saga Graphity」(LP)COLUMBIA: /(CD)32C35-7755 '86★
- ALBUM-「Guin Saga IV (七人の魔道師)」(LP)COLUMBIA: /(CD)32CC-1004 '86★

<GORO OUMI SOLO>

- ALBUM-「虹神殿(Nijishinden)」(LP)COLUMBIA:CX-7139 '84★

70年代後半にミノタウルスというキーボード・トリオで活動していた淡海悟郎が栗本薫原作のヒロイック・ファンタジー"グイン・サーガ"のイメージ・レコードの為に作ったユニットが、ビック・マウスであり、1983年〜86年までコロムビアから5枚のアルバムをリリースしている。サウンドは淡海悟郎のハードなオルガンとギターをフィーチャーしたハード・ロックと壮大なオーケストラが織りなすプログレッシヴ・ロックであり、この手のイメージ・レコードの中ではロック色が強い第1級品の作品として仕上っている。特に「II＝陰謀篇」はこのシリーズの最高傑作アルバム。なお、淡海悟郎はアニメのイメージ・レコードやプロレス関係のレコードを数多く手掛けており、その中で鳥図明 児原作の「虹神殿」が傑出したシンセ・ミュージック作品である。

オクタスコープ[OCTASCOPE]

◀Member▶

吉田　一弥　Kazuya Yoshida(Vo,G)
佐田　　将　Masaru Sada(B,Vo)
関根　安里　Anri Sekine(Vln,Kbd) '78〜 ref.TAO,EROX
藤田　響一　Kyouichi Fujita(Ds)

オクタスコープはTAOのキーボード&ヴァイオリン奏者の関根安里が在籍していた東京のアンダーグラウンドな存在のグループ。1977年8月にギター&ボーカルの吉田、ベースの佐田、ドラムスの藤田の3人で後期クリムゾンやソフト・マシーン等のコピーとインプロビゼーションによるセッション・グループとしてオクタスコープを結成。1978年にキーボード&ヴァイオリンの関根が加わり、1978年からカンタベリー系のジャズ・ロック的なオリジナル・ナンバーを演奏するグループとして吉祥寺シルバーエレファントや渋谷屋根裏に於いてライブ活動を開始したが、1980年に関根がTAO結成の為に脱退して自然消滅してしまった。

オシリス[OSIRIS]

◀Member▶

河原　博文　Hirofumi Kawahara(Syn) ref.HERETIC,ASTRAL TEMPEL,Dr.JEKYL&Mr.HYDE

◀Discography▶

- ALBUM-「In The Mist of Time」(LP)SOUND OF POPPY:JHWH-1001 '81★
- CT-「Journey To New World」SOUND OF POPPY:JHWH-001 '79★
- CT-「A Midsummer Night's Dream」SOUND OF POPPY:JHWH-002 '79★
- CT-「Osiris Mythology」SOUND OF POPPY:JHWH-003〜4
- CT-「Astral Tempel」SOUND OF POPPY:JHWH-006
- CT-「Rhapsody For You」SOUND OF POPPY:JHWH-007
- CT-「The Restoration of Soul」SOUND OF POPPY:JHWH-008
- CT-「In And Out」SOUND OF POPPY:JHWH-011
- CT-「El Rayo De Luna」SOUND OF POPPY:JHWH-012

京都に在住している河原博文はアシュラ・テンプルやヘルドン等から影響を受け、プライベート・レコーディングを始め1979年頃からオシリスというユニット名でカセット作品を発表し始める。そして1981年に自主制作でアルバム「In The Mist of Time」をリリース。またオシリスとは別ユニットで"アストラル・テンペル"、アイン・ソフの山本要三とユニットの"Dr.ジキル&Mr.ハイド"でもカセット作品を制作。実験的なジャーマン・プログレから影響を受けたプログレ・サウンドを追求する数少ないアーティストであった。彼は1984年にヘレティックというユニットに発展させ現在までにアルバム2枚をリリースしている。

オーラ[OOLA]

◀Member▶

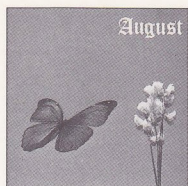
秋葉　和義　Kazuyoshi Akiba(G,G-Syn)
松世　純一　Junichi Matsuyo(Ds,P)
天崎　直人　Naoto Amazaki(B) ex.EURASIA,ref.MONGOL

元ユーラシアのベースであり、東京のシルバーエレファント界隈で数多くのセッションに参加していた天崎直人が1985年に結成したギタートリオ・バンド。ギターシンセを多用した新生クリムゾン的なモダン・プログレ・サウンドは異色の存在であり、シルバーエレファントでライブ活動していたが約1年間くらいで活動停止。天崎はモンゴルに加入した。

オーガスト[AUGUST]

◀Member▶

河合　良典　Yoshinori Kawai(G)
工藤　美鈴　Misuzu Kudo(Vo)
菅野　　荘　Sou Kanno(B,A-G)
高田　礼人　Ayato Takada(Kbd)
小野寺寿勝　Kotokatsu Onodera(Ds) '88〜'89
西田　　均　Hitoshi Nishida(Ds) '89〜 ex.PROVIDENCE

◀Discography▶

- ●ALBUM-「八月の印象(Same)」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2916 '90
- ●CT-「August」BSP PROJECT '89★
- ●V.A.(CD)-「Prospective Faces I」MADE IN JAPAN:MADE IN JAPAN:MCD-3203 '89

ページェントやルネッサンス、イルージョン等のコピーバンド"ベクサシオン"を母体として1988年に結成された札幌のグループ。彼らは女性ボーカルである工藤の透明感溢れる歌唱法をフィーチャーしたイルージョンのサウンドの影響が多大なるリリカルなサウンドを持つグループで東京のヴァーミリオン・サウンズと共に一部のマニアの間で早くから評判になっていた。1989年に自主制作でカセット・テープ「August」を発表、またメイド・イン・ジャパン・レコードのオムニバスCD「Prospective Faces」に参加。1990年4月にメイド・イン・ジャパン・レコードから1stアルバム「八月の印象」を発表して現在も活躍中。

オムニエナ[OMNIENA]

◀Member▶

韮沢　明　Akira Nirasawa
豊島　シン　Shin Toyoshima
藤代　ヤス　Yass Fujishiro
コウ　Koh

◀Discography▶

- ●CT-「Omniena」LLE:MM3417 '82★

オムニエナはアヴァンギャルト・ミュージックとして東京のアンダーグラウンド・シーンで活動していたグループで、82年にLLEレーベルからカセットを1本リリースしている。ギター、キーボード、ドラムス、ベースの四人編成から成る彼らのサウンドは後期クリムゾンのフリースタイルな部分を発展させたインプロビゼーションが中心のサウンドであり、時折り陰鬱なボーカルとピアノで醸し出すデカダンスの空間が交差する異色なサウンドを持つグループとして異彩を放つ存在であった。

オルフェウス[ORPHEUS]

◀Member▶

川村　康文　Yasufumi Kawamura(Vo)
釜木　茂一　Shigekazu Kamaki(G) ref.MUGEN,EVE,KEHELL,PAGEANT,Mr.SIRIUS
服部　和貴　Kazuki Hattori(Kbd)
児玉　勝　Masaru Kodama(B) '82~

落合　尚典　Naonori Ochiai(B)~'82 ref.TSURUGINOMAI,EVE
長瀬ひろゆき　Hiroyuki Nagase(Ds)

◀Discography▶

●ALBUM-「Orpheus」(LP)SUB ROCK:14710 '83★

オルフェウスはノヴェラから影響を受けて1979年頃から活動を始めた大阪のハード・プログレッシヴ・ロック・グループで後に夢幻を経てイヴ、ケッヘル、Mrシリウスで活躍するギターの釜木茂一や初期の頃には後に剣の舞やイブで活動するベースの落合尚典が在籍していた。1983年に自らでアルバム「オルフェウス」を制作。録音状態や演奏力はアマチュア・レベルであったが、ノヴェラ・エイジが生んだアンダーグラウンドなシーンの1つの記録として貴重なものであった。グループはこのアルバム制作後解散した。

オーヴァーチュア[OVERTURE]

◀Member▶

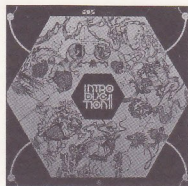
坂下　拓　Taku Sakashita(G)
日光　理枝　Rie Nikkou(Vo)
吉田　茂　Shigeru Yoshida(Kbd)
寺下　享一　Ryoichi Terashita(Ds) ref.PAM
井上　靖　Yasushi Inoue(B) ref.FERIER,PAM,TERU'S SYMPHONIA

オーヴァーチュアはペール・アキュート・ムーンやテルズ・シンフォニアのベーシストとして活躍する井上靖やペール・アキュート・ムーンのドラマーの寺下享一が在籍していた神戸のアンダーグラウンドな存在のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。彼らは高校の同級生であったギターの坂下とキーボードの吉田が中心となって、1981年にノヴェラのコピーバンドとして結成。1983年頃には坂下(G)、吉田(Kbd)の他、日光(Vo)、寺下(Ds)、井上(B)というライン・ナップとなって、ノヴェラ・タイプのオリジナル・ナンバーを演奏するグループへと発展して、神戸のホリディー・インや大阪バハマ等で本格的なライブ活動を開始する。この頃に数多く存在したノヴェラから影響を受けたサウンドを持つハード・プログレッシヴ・ロック・グループの中で、アンダーグラウンドな存在ながら、第2期ノヴェラに近いサウンドや安定したリズム陣など秀れた存在であったが、1984年の夏に解散。井上はこの解散ライブを見に来ていたフェリアのメンバーに声をかけられ、フェリアに半年間程、在籍した後に、ペール・アキュート・ムーンに加入。また寺下もペール・アキュート・ムーンに加入している

カーラド・スコープ〈ユグドラジル〉[KALEIDO SCOPE]

◀Member▶

加賀　哲也　Tetsuya Kaga(Vo,E-G,Fl)
板倉　克之　Katsuyuki Itakura(Kbd)
田中コージ　Kouji Tanaka(B)
藤丸　Fujimura(Ds)
〈GUEST〉
桑名　晴子　Haruko Kuwana(Vo)

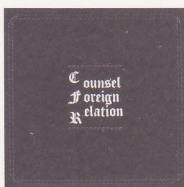
◀Discography▶

● V.A.(LP)-「Introduction 1」SOR:NAS-568 '74★

関西の大御所GSグループであったリンド&リンダースのリーダーであったボーカルの加賀てつやがリンド&リンダース解散後に結成したのがこのカレイドスコープである。カレイドスコープは1972年頃～75年頃まで活動。関西で最も古いプログレッシヴ・ロック・グループであり、コスモス・ファクトリーやファーイースト・ファミリー・バンドらと同様のピンク・フロイドから強い影響を受けたサウンドであった。なおダルマ食堂らと共に彼らのナンバーを収録した自主制作のオムニバス・アルバムが存在し、コーラスで桑名晴子が参加している。

カウンセル・フォーリン・リレーション[COUNSEL FOREIGN RELATION]

◀Member▶

内田　　穣　Minoru Uchida(Ds)
古谷　弘毅　Hiroki Furuya(G,B,Kbd,Vln)
横田　昌也　Masaya Yokota(B)
門倉　泰寛　Yasuhiro Kadokura(Kbd)'90～

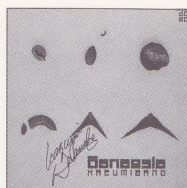
◀Discography▶

● ALBUM-「...And A Little Step」(Mini LP)C.F.R.'89
● ALBUM-「Counsel Foreign Relation」(Mini LP)C.F.R.'90

カウンセル・フォーリン・リレーション(C.F.R.)は内田(Ds)、古谷(G)、横田(B)の3人によるトリオ編成の東京の新鋭グループで、彼らは自主制作で2枚のミニ・アルバムをリリースしている。89年にリリースされた1stアルバム「...And A Little Step」はブラッフォードあたりからの影響の強いジャズ・ロックにメロディアスなプログレッシヴ・ロック・サウンドを加味したサウンドであったが、2ndアルバム「C.F.R」では新生クリムゾン的なネオ・プログレッシヴ・ロック・サウンドへと変化した。

カズミ・バンド[KAZUMI BAND]

◀Member▶

渡辺香津美　Katsumi Watanabe(G)
清水　靖晃　Yasuaki Shimizu(Sax) from MARIAH
笹路　正徳　Masanori Sasaji(Kbd) fromMARIAH,ref.NASCA
高水　健司　Kenji Takamizu(B) ref.BIG MOUTH
山木　秀夫　Hideo Yamaki(Ds) from MARIAH,KEEP

◀Discography▶

● ALBUM-「頭狂好児唐眼(Talk You Tight)」(LP)BETTER DAYS:YF-7022 '81★/(CD)BETTER DAYS:CY2369 '88

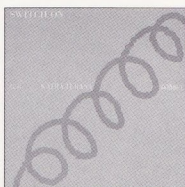
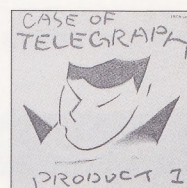
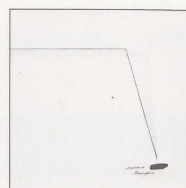
● ALBUM-「Ganaesia」(LP)DOMO:AW-28002 '82★/(CD)DOMO:POCH-1019 '90

ジャズ畑出身の人気ギタリストであり、リー・リトナーとの共演アルバムやギターワーク・ショップ等の活動をしていた渡辺香津美がマライアの山木(Ds)、笹路(Kbd)、清水(Sax)そしてスタジオ・ミュージシャンである高水(B)という日本のトップ・クラスのスタジオ・ミュージシャンを集めて、香津美自身にとって初めてプログレッシヴなロック・アプローチも取り入れたジャズ・ロック・サウンドを追及したのがカズミ・バンドである。カズミ・バンドは81年にコロムビアの先進的なジャズ・レーベルであるベターディズからアルバム「頭狂好児唐眼」と、82年にドモ・レーベルからアルバム「ガネシア」の2枚のアルバムを発表。ブラッフォードを彷彿とさせる山木のドラミングや変幻自在の香津美のギターワークなどの高度な演奏技術に支えられ、またマライアのプログレッシヴな音楽センスを取り入れたジャズ・ロック・サウンドに仕上がっている。なを香津美はこの後、坂本龍一、矢野顕子、小原礼、村上秀一、清水靖晃らと"カクトウギ・セッション"に参加し、自らのリーダーアルバム「キリン」を制作。現在ではビル・ブラッフォード、ジェフ・バーリンのリズム隊と共にアルバム「A Slice of Life」等を発表している。

カトラ・トゥラーナ[KATRA TURANA]

◀Member▶

広池　敦　Atsushi Hiroike(Vo)
松井亜由美　Ayumi Matsui(Vln)
斉藤　史彦　Fumihiko Saito(P) '80~'83
藤田佐和子　Sawako Fujita(P) '85~ ref.LACRYMOSA
田中　信幸　Nobuhiko Tanaka(Ds) '81~
渡辺　聡司　Satoshi Watanabe(Ds) '80 ref.LACRYMOSA
斉藤　千尋　Chihiro Saito(B) '80~'82 ref.LACRYMOSA,CIRCADIAN RYTHM,GOLDEN AVANT-GARDE
三木　黄太　Kota Miki(Cello) '85~
北島　妙子　Tamiko Kitajima(B) '89

◀Discography▶

● ALBUM-「Katra Turana」(LP)TELEGRAPHE:TG-008 '82★/(CD)WAX:TKCA-30046 '90

● ALBUM-「Kimera」(LP)TELEGRAPHE:TG-031 '86★/(CD)WAX-TKCA-3004 '90

● 12"EP-「The End」SWITCH:15SW-4502 '85★
● 7"FLEXI-「Mortera In The Moon Light」MARQUEE:E-5992(Promo) '80
● V.A.(LP)-「精神工学様変容(Psychotronic Metamorphosis)」LLE:PM-1001 '81★
● V.A.(ALBUM)-「若いこだま(Wakai Kodama)」(LP)TRIO: '83★/(CD)WAX:TKCA-30044 '80
● V.A.(ALBUM)-「Case of Telegraphe」(LP)TELEGRAH: '83★/(CD)WAX:TKCA-30120 '90
● V.A.(CD)-「Switch On」SWITCH:25WD-0009 '89
● V.A.(CD)-「Telegraphe Works」WAX:TKCA-30045 '90

カトラ・トゥラーナは世期末の妖し気な空間を表現する異色ボーカリストの広池敦が中心となって堀井(Vo,Kbd)、石原(P)の3人で1980年6月に結成。翌月に渋谷屋根裏でデビューライブを行ったが、この一回のライブのみで石原は脱退し、代わって斎藤史彦(P)と斎藤千尋(B,Vln)が加入して8月15日に渋谷屋根裏でライブを行う。(共演:水玉消防団、絶対零度)また同年に彼らの"Morta In The Light"がマーキー誌の付録ソノシートとして発売。翌年の81年には広池(Vo)、松井(Vln)、斎藤(P)、斎藤(B)、田中(Ds)というライン・ナップとなり、マーキームーン誌がディストリビュートした自主制作のLLEレーベルから発売されたオムニバスLP「精神工学様変容」に名曲"Hontaiji Telephone"を収録。新宿ロフトに出演した際にテレグラフ・レコードを主宰していた地引氏の目に止まり、1982年にテレグラフ・レコードより1stアルバム「カトラ・トゥラーナ」を発表。チェンバーロック・サウンドを基盤に置き、広池のフリーなボーカル・ワーク等によって世期末デカダンスを表現するサウンドが開花したこのアルバムは日本のアンダーグラウンド・ミュージックの名作であり、当時イギリスのレコメンデット・レコードから高い評価を受けた。このアルバム発表後、ベースの斎藤がラクリモーザ結成の為脱退。カトラ・トゥラーナはトリオ・レコードから発売されたオムニバス・アルバム「若いこだま」とテレグラフ・レコードのオムニバス・アルバム「Case of Telegraphe」に参加。その後、彼らはしばらくの間活動を停止し、85年に広池(Vo)、松井(Vln)、藤田(P)、田中(Ds)、三木(Cello)というライン・ナップとなり活動を再開。同年にスウィッチ・レーベルより12インチ・シングル「The End」、86年に2ndアルバム「Kimera」をテレグラフ・レコードより発表。サウンドの面も初期の頃のようなチェンバーロック色は薄くなり、より実験的なアヴァンギャルド・ミュージック色が強く押し出されてきた。2ndアルバム発表後彼らの活動は消極的となり自然消滅状態となってしまったが、89年に2ndアルバム「Kimera」のCD再発にあたってボーナス・トラックとして3曲を2ndのライン・ナップにベースの北島を加えて新録した。

ガラパゴス[GALAPAGOS]

◀Member▶
熊谷　匡　Takumi Kumagaya(B)
後藤　雅夫　Masao Goto(Ds)
清水　一登　Kazuto Shimizu(P)

ガラパゴスはニュークリアスやソフト・マシーン等のカンタベリー系のジャズ・ロックから影響を受けた前衛ジャズ・ロック・グループで、1976年から80年頃まで東京のアンダーグラウンド・シーンで活動。1978年の11月25日に御茶ノ水の全電通ホールに於て行われたフールズ・メイト誌主催のイベント"From New World"に美狂乱、新月、目合らと共に出演していた。

カリスマ[CHARISMA]

◀Member▶
福山　宣司　Takashi Fukuyama(G)
泉　陸奥彦　Mutsuhiko Izumi(G) ref.DADA,KENNEDY,SADATO GROUP
近藤　研之　Hiroyuki Kondo(B) ref.DAY BREAK
菅沼　孝三　Kozo Suganuma(Ds) ref.DARUMA SHOKUDO,99.99,BLACK PAGE,DED CHAPLIN,GRAY
高山　博　Hiroshi Takayama(Kbd) ref.DAY BREAK

◀Discography▶

● V.A.(CD)-「70'S West Japanese Rock Scene」MADE IN JAPAN:MHD-25013 '91

カリスマはギタリストの泉奥陸彦が1974年頃に結成した大阪のグループで、初期のカリスマのサウンドはサンタナ風のロック・フュージョンであったが、1975年の後半にドラムスの菅沼考三、ギターの福山宣司、ベースの近藤研之、キーボードの高山博に泉陸奥彦というライン・ナップとなって安定して本格的な活動を始める。1976年にプロモーション用のデモ・テープを制作。(後にDADAやケネディーで取り上げているお馴染みのナンバー"フライング・シップ"等を収録。)サウンドは後に泉がDADAやケネディーで作り上げたヘルドン・タイプの前衛的なジャズ・ロック&エレクトロニクス・ミュージックやマハビッシュヌ・オーケストラから影響されたエモーショナルなジャズ・ロック・サウンドの原点的なものであり、当時の関西のプログレ・シーンの中で先進的であり、異彩を放つ存在であった。地元の学園祭や"8.8.ロック・ディ"などのコンテストを中心としたライブ活動を行ない、ドラムスの菅原孝三の驚異的なドラミングを中心とする卓越した演奏テクニックは高い評価を受けており、1977年にはバンドとして最も充実した時期を迎えたが、1977年末頃にギタリストの泉陸奥彦は前衛的なエレクトロニクス・ミュージック・サウンドを追及していた飢餓同盟の小西健司と意気投合して、お互いに追及していたサウンドを発展させるべく、シンセサイザー・ユニットのDADAを結成。また、キーボードの高山博はベースの近藤研之らと共にイエス、スターキャッスルから影響されたサウンドを持つディ・ブレイクを結成。ドラムスの菅沼孝三はダルマ食堂、99.99を経てブラック・ペイジに参加して日本プログレ界を代表するドラマーとして脚光を浴びて行った。カリスマは関西プログレ・シーンで異彩を放つ存在のギタリストである泉陸奥彦がDADAを経てケネディーで完成をみたマハビッシュヌ・オーケストラ・タイプのプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドの原点であったと共に、多彩な人材を擁し70年代後半の関西プログレ・シーンを代表するグループであった。

カルナ・キュール[KARUNA KHYAL]

◀Discography▶

● ALBUM-「Alomoni 1985」(LP)VOICE:VO-1002 '75★

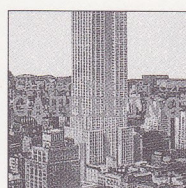
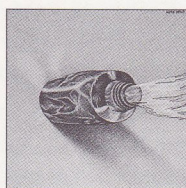
阿木譲が主宰していたヴァニティー・レコードを代表として、1970年代後半にプライベート・レコーディングによるアヴァンギャルド・ミュージックの自主制作盤が数多く制作されたが、このカルナ・キューレもその中の一例。ヴァニティー・レコードと同様の方向性を持つアヴァンギャルド・ミュージックを制作していたボイス・レコードの第2弾アルバムとして75年に発表された本作は同レコードの第1弾にリリースされたブレスト・バーンと比較するとさほど攻撃的な側面は持たないオリエンタル・カルマ・サウンドといった所。マジカル・パワー・マコ等にも通じる点が多い。

カルメン・マキ&OZ[CARMEN MAKI & OZ]

◀Member▶

カルメン・マキ　Carmen Maki(Vo) ex.BLUES CREATION,ref.LAFF,5X
春日　博文　Hirobumi Kasuga(G) ref.NOISE
鳴瀬　善博　Yoshihiro Naruse(B) '71~'72 ref.SMOKEY MEDICINE,BUX BUNNY,CASIOPEA

千代谷　　晃　Akira Chiyotani(B) '72~'75
川上　　茂幸　Shigeyuki Kawakami(B) '76~'77 ref.NOISE,ZONE
樋口　　晶之　Masayuki Higuchi(Ds) '71~'72 ex.BLUES CREATION,ref.CREATION
吉田　　宣司　Senji Yoshida(Ds) '72~'74
内藤　　正美　Masami Naito(Ds) '75
久藤　　賢一　Kenichi Kudo(Ds) '76
武田　　　治　Osamu Takeda(Ds) '77 ex.FAROUT,CRONICLE,ref.ZONE,GREEN
石川　　清澄　Kiyozumi Ishikawa(Kbd) '72~'75
川崎　　雅文　Masafumi Kawasaki(Kbd) '76~'77 ex.YELLOW

◀Discography▶

● ALBUM-「Carmen Maki & OZ」(LP)POLYDOR:MR5053 '75★/(CD)H25P-20305 '89
● ALBUM-「閉ざされた町(Tozasaretamachi)」(LP)KITIY:MKF1005 '76★/(CD)H25K20147 '89
● ALBUM-「III」(LP)KITIY:MKF-1025 '77★/(CD)H25K-20148 '89
● ALBUM-「Last Live」(LP)KITIY:MKA9003-4 '77★/Re-issued(LP)KITIY:KVD-0001~2/(CD)HAOK-20144~50 '89
● ALBUM-「Gathering(※Best)」(LP)KITIY:25MS-004 '78★
● 7"EP-「午前1時のスケッチ(Gozenichijino Sketch)」KITIY:DR1904 '75★
● 7"EP-「空へ(Sorae)」KITTY:DKQ1013 '77★
● 7"EP-「私は風(Watashiwa Kaze)」KITTY:DRQ1014 '77★

カルメン・マキは高校中退後、劇団"天井桟敷"に入団し68年9月に"書を捨てよ街に出よう"で初舞台を踏んだ後、CBSソニーのディレクターに見い出され、69年1月に「時には母のない子のように」でフォーク・シンガーとしてデビューしたが、ジャニス・ジョプリンから影響を受け次第にロックに魅かれて行き、70年に"カルメン・マキ&タイムマシーン"を近田春夫や立川直樹らと結成。しかしタイムマシーンは短命に終り、71年にはブルース・クリエーションと共に活動する様になり9月にコロムビア・レコードより「カルメン・マキ&ブルース・クリエーション」をリリース。彼女はこのレコーディングを通じて、より一層本格的なロックをやりたいという気持ちが募り、自らのグループを結成する事を計画。71年の暮れに友人を通じて知り合ったギターの春日博文を中心としてベースの鳴瀬喜博、元ブルース・クリエイションのドラムスの樋口晶之と共にカルメン・マキ&OZを結成。翌年にはベースの鳴瀬がチャー達とやっていたスモーキー・メディスンの方に専念する為に脱退、ドラムスの樋口もクリエーション結成の為に脱退し、代わってベースに千代谷晃、ドラムスには吉田宣司が加入して吉祥寺OZや渋谷ジャン・ジャンなどを中心にして本格的なライブ活動を開始。1974年の秋にファースト・アルバムのレコーディングに入るが、カルメン・マキ&OZはカルメン・マキと春日のバンドであり、リズム隊のメンバーチェンジが激しく、レコーディングに入った時点でのライン・ナップはマキ、春日の他は石川清澄(Kbd)、千代谷(B)、吉田(Ds)であったが、レコーディング中にリズム隊とキーボードの石川が脱退し、その穴埋めとしてオリジナル・メンバーであった鳴瀬(B)、元エム、ファニーカンパニーの西哲也(Ds)、深町純(Kbd)が参加してレコーディング。レコーディング直後に川上茂幸(B)、内藤正美(Ds)という新メンバーが決まり、ファースト・アルバムのジャケットにはマキと春日、内藤、川上の4人が写っている。こうして激しいメンバーチェンジの中に制作された

デビューアルバム「カルメン・マキ&OZ」は1975年1月に発売されるやいなや、それまでの日本のロック・レコードでは前例を見ない10万枚以上のセールスを記録、日本のポップス・シーンに本格的なロック時代の幕開けの引金となったのである。カルメン・マキ&OZはディープ・パープルなどのブリティッシュ・ハード・ロックの影響が強いサウンドであったが、キング・クリムゾン的なベース・ラインやメロトロンを導入した壮大なプログレッシヴ・ロック・サウンドも時折り顔を出すサウンドの側面も持っており、2nd、3rdと進むにつれてこの傾向は明確に現れてくる。1976年の初めにまたもやメンバー・チェンジがあり、ドラムスが内藤から久藤賢一、キーボードが元イエローの川崎雅文に交代。1stアルバムが爆発的なセールスを上げた為に、キティー・レコードは2ndアルバムのレコーディングをアメリカで行う事に決定し、カルメン・マキ&OZは1976年4月〜5月の2ヶ月間に渡ってロサンジェルスにあるCherokee Studioにてレコーディング、8月に2ndアルバム「閉ざされた町」発売。1977年にはまたドラマーが久藤から元ファーラウト、クロニクルのドラマーであった武田治に交代し3rdアルバムをレコーディングしたが、2ndアルバムが1stアルバムの様な好セールスを上げられず、金銭的な理由からバンドは煮詰まってしまい解散が決定。3rdアルバムの発売を待たずに1977年10月18日の新宿厚生年金会館大ホールに於て解散コンサートを行い幕を閉じてしまった。そして3rdアルバムが12月、また解散コンサートを収めたライブ・アルバム「ライブ」が78年8月にリリースされた。

そしてカルメン・マキはカーマイン・アピスのプロデュースのもとソロ・アルバム「ナイト・アタッカー」を制作後、LAFF、5X、RUSTを率いて活動。ギターの春日とベースの川上はNOISEを結成し活動したのち、ベースの川上はドラムスの武田と共にZONEを経て、一時期グリーンにも参加していた。

カルメン・マキ&OZは日本のロックの黎明期に於けるサウンドから一歩進んだハイ・レベルなロック・サウンドを確立したバンドであり、日本のロック・シーンに於て初めて商業的な成功を納めたバンドとして一つの時代を築き上げた歴史的な評価が高いが、またプログレッシヴ・ロックという見地からも最もメロトロンを大幅に導入し、ハード・ロックの中に初期キング・クリムゾンの叙情性を取り入れる事に成功したグループとして高く評価すべきバンドであった。

カレイドスコープ[KALEIDOSCOPE]

◀Member▶

川崎　薫　Kaoru Kawasaki(Kbd) ref.NEGASPHERE
伴田　宏　Hiroshi Handa(B) ref.ACQUA POLIS
山崎慎一郎　Shinichiro Yamazaki(Sax)
石垣　秀之　Hideyuki Ishigaki(Ds)

◀Discography▶

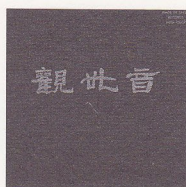
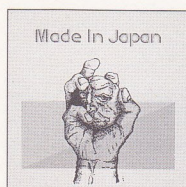
- ALBUM-「Dual Cosmos(A Side:宇江須文左衛門Group)」(LP)LEE:1002 '82★
- 7"FLEXI-「Darkness(B Side:Lost)」MARQUEE MOON:MM0004(Promo) '82★
- CT-「Kaleidoscope」LEE:MM3485 '81★

ネガスフィアのリーダーであるキーボードの川崎薫と後にアクア・ポリスに参加するベースの半田宏、そしてサックスの山崎慎一郎、ドラムスの石垣秀之の4人によって81年に結成されたカレイド・スコープはサックスの山崎を中心としたインタープレイのフリージャズ・ロック・スタイルをとるバンド。81年にマーキー・ムーン誌のディストリビュートによるLEEレーベルからカセットを1本と82年に同レーベルより宇江須文左衛門グループとのオムニバスLP「Dual Cosmos」、マーキームーン誌の付録ソノシート「Darkness」を発表した。

観世音[KANZEON]

◀Member▶

深草　アキ　Aki Fukakusa(B,Vo,Shinkin) ex.FAR EAST FAMILY BAND
大場　　博　Hiroshi Oba(G)
鈴木　伸一　Shinichi Suzuki(Kbd)
伊藤　孔八　Kouhachi Ito(Kbd,Vo) '80~
関口　　仁　Jin Sekiguchi(Ds) '78~'79
小林　秀樹　Hideki Kobayashi(Ds) '80
高崎　静夫　Shizuo Takasaki(Ds) '81~'82 ex.FAR EAST FAMILY BAND
宮崎　青畝　Seigyu Miyazaki(Bambo-Flute) '80
菊池　雅志　Masashi Kikuchi(Bambo-Flute,Yokobue) '80~
仙波　清彦　Kiyohiko Semba(Perc,Tsuzumi) '80 from SQUARE,ref.HANIWA ALL STARS
溝口　健二　Kenji Mizoguchi(Biwa) '81~'82

◀Discography▶

●ALBUM-「Made In Japan(B Side:OUTER LIMITS)」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1001 '81★
●ALBUM-「観世音(Same)」(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25007 '91

観世音はファーイースト・ファミリー・バンドを1978年に脱退したベースの深草彰が大場(G)、鈴木(Kbd)、関口(Ds)らと1978年8月に結成したグループであり、ファーイースト・ファミリー・バンドで作り上げた和旋律を取り入れたピンク・フロイド的プログレッシヴ・ロック・サウンドを継承し発展させたサウンドを追及するグループである。1979年3月に吉祥寺シルバーエレファントに於てライブ・デビューし、11月には白樺湖の合宿所でデモ・テープの為のレコーディングを行う。日本の風土に根づいた自然サウンドを目指し、邦楽器演奏者達とも交流を深め尺八の宮崎青畝、ザ・スクエアやはにわオールスターズでも知られ仙波流の家元でもあるつづみの仙波清彦らを加え、1980年7月には深草(B、Vo)、大場(G)、鈴木(Kbd)、伊藤(Vo、Kbd、A-G)、小林(Ds)、宮崎(尺八)、仙波(つづみ他)というライン・ナップとなり、観世音の追及する和旋律によるプレグレッシヴ・ロック・サウンドは完成を迎える。また、観世音は演劇音楽の担当も多く手掛けており、80年12月には国際青年演劇センター主催による日本とペルーの親善交流劇「勇士オヤンタイ伝説」のデモンストレーション・コンサートとしてペルーのミゲル・フローレンス・グループとのジョイント・コンサートを科学技術館サイエンス・ホールで行ったり、国際芸術家センター主催の手話劇「酒呑童子」や「夜叉ヶ池」の音楽担当をし、劇と同時にライブ演奏を行っていた。1981年12月にアウターリミッツとのジョイント・アルバム「メイド・イン・ジャパン」を自主制作レーベルであるメイド・イン・ジャパンから発売。(ここに収録されているテイクは79年11月に白樺湖合宿で録音されたもの。)81年の暮れから深草(B、Vo)、大場(G)、鈴木(Kbd)、菊池(尺八)、伊藤(Vo、Kbd、A-G)、に元ファーイースト・ファミリー・バンドのドラムスの高崎、琵琶の溝口というライン・ナップで活動していたが、1982年により日本の自然を表現するサウンドを追及しようとしていた深草とポップスやロックをやりたかった大場、鈴木の音楽的方向性の違いにより観世音は解散。その後、深草はベースから中国の古楽器である奏琴に楽器を持ち代えてパフォーマンスを始め、82年角川映画「伊賀忍法帖」に参加、83年にビクターレコードより発売されたアルバム「ザ・祝詞」の作曲を担当。84年には尺八の菊池、パーカッションの宮本と共にイマゴムンデというグループを結成し活動、現在は奏琴奏者として新星堂からソロ・アルバムを2枚リリースし活躍中。大場と伊藤は一時期、コイナーというプログレ・バンドを結成したがほとんど活動のないままにに消滅。鈴木は小林明子のバック・バンド等で活動している。観世音は和旋律を取り入れてあくまで日本のサウンドにこだわり続け、そのサウンドを完成させた素晴らしいグループであると共に、ライブに於ても圧倒的な迫力を見せつけたグループとして高く評価すべきグループであった。

キープ[KEEP]

◀Member▶

和田アキラ　Akira Wada(G) from PRISM
深町　純　Jun Fukamachi(Kbd) from PRISM
富倉　安生　Yasuo Tomikura(B) ex.TRANZAM
山木　秀夫　Hideo Yamaki(Ds) from MARIAH,KAZUMI BAND

◀Discography▶

● ALBUM-「DG-581」(LP)TRASH:3F-28001 '81★/(CD)RIVSTAR:32RR-1007 '89
● ALBUM-「Rock'n Rocked Rock」(LP)TRASH:3F-25001 '82★/(CD)RIVSTAR:32RR-1008 '89

キープはプリズムの和田アキラ(G)、21st.センチュリー・バンドなどをやっていた深町純(Kbd)、マライア、カズミ・バンドの山木秀夫(Ds)、トランザムに参加していた富倉史生(B)という強者揃いのメンバーが集結して1981年に結成されたユニットで、ブラッフォード・タイプの正統派ジャズ・ロックを超絶テクニックで聴かせるスーパーユニットであった。81年に「DG-581」、82年に「Rock'n Rocked Rock」の2枚のアルバムをトリオ・レコードのトラッシュ・レーベルからリリースしており、その間はライブ・ハウス等で精力的にライブ活動も行っていた。特に82年に発表された2ndアルバムは日本のジャズ・ロックに於ける屈指の名作であり、キープは一般的に知名度はないがより高い評価が与えられるべき素晴らしいユニットであった。

飢餓同盟[KIGADOMEI]

◀Member▶

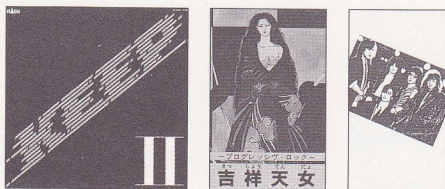
平山　照継　Terutsugu Hirayama(G) ref.SCHEHERAZADE,NOVELA TERU'S SYMPHONIA
小西　健司　Kenji Konishi(B) ref.DADA,4D
安田　隆　Takashi Yasuda(Ds) ref.KENNEDY

小西健二が結成した週末放浪者集団(ページェントのドラムスの引頭英明も在籍していた事がある。)というブルース&ハード・ロック・バンドに、当時神戸の高校2年生であった平山照継が加入し、(1974年)1年間程このバンドで活動したが、1975年の春に先に週末放浪者集団を脱退したベースの小西健二とドラムスの安田隆と共に飢餓同盟を結成。飢餓同盟は小西が中心となっていたグループであったが、結成当時の彼らのサウンドは外道のようなプログレ色とグラム色の見え隠れするハード・ロックであり主に平山が作曲を担当していた。彼らは神戸の地元の学園祭やサンダーハウス等でライブ活動を行っていたが、1976年夏に平山照継が脱退。DADAの源流的な前衛音楽へとサウンドは一変し、1977年に阿木譲がパーソナルをやっていたFM NHKの"若いこだま"で天地創造やだててんりゅうらと共にスタジオ・ライブを行っていたりしたが、小西はカリスマをやっていた泉奥陸彦と共に飢餓同盟・カリスマの音楽を発展させたシンセサイザーデュオ"DADA"を1977年に結成した。なをギターの平山は飢餓同盟を脱退後、シェラザードを経てノヴェラを結成、現在もテルズ・シンフォニアで活躍。ドラムスの安田はセッション活動を経てケネディーに参加した。

吉祥天女[KISYO-TENNYO]

◀Member▶

大室　淳一　Junichi Omuro(Kbd)
浜田　雅之　Masayuki Hamada(Vo)
児玉　伸也　Shinya Kodama(G)
千木良　靖　Yasushi Chigira(B)'85~'87
内田　卓夫　Takuo Uchida(B)'88~'89
鈴木幸太郎　Kotaro Suzuki(Ds)'85~'87
山村　淳一　Junichi Yamamura(Ds)'87~'89

◀Discography▶

● ALBUM-「One Night Lover」(LP)POLYDOR:28MR22 '88/(CD)POLYDOR:H32W20007 '88★
● CT-「吉祥天女(Same)」PANAMU MUSIC '86★
● VIDEO-「吉祥天女(Same)」PANAMU MUSIC '87★

吉祥天女は後期ルーシェルやセラフィータと同様にハード・プログレッシヴ・ロックとポップスとの中間に位置するサウンドを聴かせる東京のグループ。大室(Kbd)、児玉(G)、千木良(B)、浜田(Vo)、鈴木(Ds)というライン・ナップで1985年夏にスタート。このライン・ナップで1986年に自主制作カセット「吉祥天女」を発売。1987年にドラムスの鈴木が脱退して山村が加入しポリドールよりアルバム「One Night Lover」をリリース。この頃になると初期のプログレ色は一切排除され完全にポップス・バンドとなってしまった。そして89年の暮れに大室、児玉、山村が脱退して吉祥天女は解散。90年に脱退した大室、児玉、山村は"THE I LOVE YOU"というポップス・バンドを結成し現在も活動中である。

喜多郎[KITARO]

◀Member▶

喜多郎(高橋正明)　Kitaro(Masaaki Takahashi)(Kbd) ex.FAR EAST FAMIRY BAND

◀Discography▶

●ALBUM-「天界(Astral Trip)」(LP)ZEN:1001 '77★/(CD)VICTOR:VDR-1297 '86

●ALBUM-「大地(From The Full Moon Story)」(LP)ZEN:1006 '78★/(CD)VICTOR:VDR-1298 '87

●ALBUM-「Oasis」(LP)CANYON:C25-R0030 '79★/(CD)CANYON:D35R-0003 '83

●ALBUM-「Silk Road」(LP)CANYON:C25R0038 '80★/(CD)

●ALBUM-「Silk Road」(LP)CANYON:C25R0052 '80★/(CD)CANYON:D35R-0004 '83

●ALBUM-「敦煌(Tonkou)」(LP)CANYON:C28R0073 '81★/(CD)CANYON:D35R-0006 '83

●ALBUM-「In Person」(LP)CANYON: '83★/(CD)CANYON:D35R-0005 '83

●ALBUM-「気(Ki)」(LP)CANYON: '83★/(CD)CANYON:D35R-0007 '83

●ALBUM-「西方(Saiho)」(CD)SOUND DESIGN:P33S-20017 '85

●ALBUM-「天空(Tenku)」(LP)WEA: '86★/(CD)WEA:32XL-167 '86

●ALBUM-「天竺(Tenjiku)」(CD)SOUND DESIGN:P33S-20037 '86

●ALBUM-「飛雲(Hiun)」(CD)SOUND DESIGN:P33S-20038 '86

●ALBUM-「亜細亜(Asia)」(CD)SOUND DESIGN:P33S-20039 '86

●ALBUM-「Best Sellection」(CD)CANYON:D33R-0013 '84

●ALBUM-「Silk Road Best」(CD)CANYON:D32R-0014 '85

●ALBUM-「Silk Road The Best」(CD)CANYON:D32R-0018 '85

●ALBUM-「Kitaro Special」(CD)CANYON:D32R-0040 '86

●ALBUM-「Silk Road Super Best」(CD)CANYON:D32P-6026 '86

●ALBUM-「回想(Kitaro All The Best)」(CD)SOUND DESIGN:P33S-20024 '86

●ALBUM-「The Light of The Spilit(BOX)」(CD)WEA:50XL-250 '87

●ALBUM-「全曲集(These 10 Years)」(CD)WEA:50XL-294~5 '88

●ALBUM-「BEST」(CD)CANYON:D32P-6185 '87

●ALBUM-「選集16(Senshu16)」(CD)CANYON:D32P-6319 '89

●ALBUM-「Utopia」(LP)XEROX:NO number(Promo) '82

●ALBUM-「Theme of Radio House Ginga」(LP)ニッポン放送:P-1020(Promo)

●7"EP-「ノアの箱舟(Noah's Ark)」SOUND DESIGN:451142-2 '83★

●7"EP-「Caravan」SOUND DESIGN:1142-1 '83★

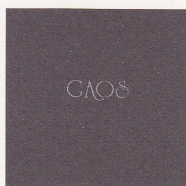
●7"EP-「1000年女王(Angel Queen)」CANYON:7A0149 '82★

喜多郎の本名は高橋正明。彼はファーイースト・ファミリー・バンドのキーボードとして1975年に発表された1stアルバム「地球空洞説」と2ndアルバム「パラレル・ワールド」に参加した後、ビクター・レコード内の新設レーベル"ZEN"より1977年にシンセサイザーのソロ・アルバム「天界」を喜多郎名義で発表。ファーイースト・ファミリー・バンドの流れを汲む和旋律を取り入れたシンセ・ミュージックは"マインド・ミュージック"の旗手として大いに注目を浴び、1980年にNHKのテレビ番組「シルクロード」の音楽担当をし、アルバム「シルクロード」が大セールを上げてからは、彼のイージーリスニングとしてのシンセ・ミュージックは不動の座を築き現在までに数多くのアルバムをリリースしている。プログレッシヴ・ロックのシンセ・ミュージック作品という点から評価をすれば初期の「大地」や「オアシス」あたりの作品が最も優れたものである。

ギャオス[GAOS]

◀Member▶

星加　敦史　Atsushi Hoshika(G)
山田　正純　Masazumi Yamada(G)
元村　一晟　Kazunari Motomura(B)
工藤　和宏　Kazuhiro Kudo(Ds)

◀Discography▶

● ALBUM-「Gaos」(LP)PARADISE:ICR-1674 '87★/(CD)PARADISE:PRJ-777 '89

"ギャオス"というバンド名のイメージからは想像もつかないリリカルなジャズ・ロック・サウンドを聴かせる京都のグループで、1987年に自らの自主制作によるアルバム「Gaos」を発表している。ツイン・ギターにベース、ドラムスという編成の彼らのサウンドはキーボード類を一切使用していないのにもかかわらず多彩な2人のギタリストのプレイにより変化に富んだ音を生み出している。また、各メンバーのテクニックも優れており、プログレ色はあまり強くはないが、心地良いジャズ・ロック=フュージョンを聴かせてくれるグループであった。87年にこのアルバムをリリースした後、バンドは解散した。

キャメロット[CAMELOT]

◀Member▶

岡本　英利　Hidetoshi Okamoto(B) ref.GREEN
栗原　務　Tsutomu Kurihara(G) ref.GREEN,EUROX
白田　朗　Akira Shirata(Kbd) ref.GREEN
岡本サミュエル　Samuel Okamoto(Ds)

キャメロットは80年代初めに東京のアンダーグラウンド・シーンで活躍していたUKタイプのサウンドを持つグリーンの前身バンドである。ドラムスの岡本サミュエルを中心として高校時代から知り合いであったベースの岡本英利とギターの栗原務、日大芸術学部音楽科に通っていたキーボードの白田朗によって1977年4月に結成。ユーライア・ヒープやブラック・サバス的なハード・ロックとプログレッシヴなアンサンブル、ポップな歌メロが混然一体となったサウンドであり、学祭や渋谷屋根裏などでライブ活動を行っていたが、ベースの岡本、ギターの栗原、キーボードの白田がUKに触発されて、1979年にグリーンを結成した。

クェーサー[QUASAR]

◀Member▶

松浦　義和　Yoshikazu Matsuura(Kbd) ref.PRISM

クェーサーは1976年～79年頃まで渋谷のジヤン・ジヤンなどのライブ・ハウスを中心として活動していた東京のキーボード・トリオ。リーダーでありキーボードの松浦はエマーソンから多大な影響を受けており、クェーサーのサウンドもかなりEL&Pに近いものであった。当時、クェーサーの存在は同じEL&Pタイプのキーボード・トリオとして東京の破天荒、関西のだててんりゅ

うと並び、アンダーグラウンド・シーンの中で高く評価されており、一時期メジャーレコード会社からのリリースの話もあったが、1980年頃に解散。キーボードの松浦は1985年にプリズムに加入して「Nothin' Unusual」、「Dreamin'」、「Live Arive Vol.2」、「The Silence of The Moon」の4枚のアルバムに参加。また1986年にキング・レコードからリリースされたアースシェイカーのアルバム「オーバーラン」などにも参加し、活動している。クェーサーは日本のプログレッシヴ・ロックの幻の黄金期であった1970年代後半の東京のアンダーグラウンド・シーンを語る上で欠かせないグループであったと共に数多くいるキーボード・トリオの中で最もEL&Pのサウンドに傾倒していたグループであった。

孔雀音[KUJAKUON]

◀Member▶

石川　真澄　Masumi Ishikawa(Kbd)
松本　元昭　Hiroaki Matsumoto(G)
武士　守広　Morihiro Takeshi(B)
加藤　史朗　Fumiaki Kato(Ds)
小塚　　靖　Yasushi Kozuka(Vln)
延上真麻音　Masao Enjo(Comp.)

◀Discography▶

●ALBUM-「夕霧楼の幻想(Same)」(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25003 '90★
●CT-「Kujakuon」'84★
●CT-「Live」'85★

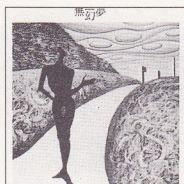
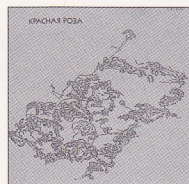
孔雀音というグループは延上真麻音という作曲家が自分の作品を演奏する為のグループとして彼が演奏者を集めたグループで、バンドのメンバーは演奏するだけで、作曲家は別にいる、という形態を取った異色な存在の東京のジャズ・ロック・グループ。大学生であり、マハビッシュヌ・オーケストラやギル・エバンスに影響を受けた延上は1982年の春に大学の知人関係からメンバーを集めて、自分の作品を演奏するグループ、孔雀音を結成。結成当時はキーボードの石川、ギターの松本の他はドラムス、ベースにサックスという編成であったが、1983年春にベースの武士とドラムスの加藤が加入し、1983年夏に新宿ピット・インと荻窪ワッツにてデビューライブを行う。秋にはヴァイオリンの小塚が加入して、ジャン・リュック・ポンティーやフレンチ・ジャズ・ロック風のプログレッシヴ・ロック・サウンドが確立。演奏の面でも各メンバー共、卓越した演奏技術を持っており、特にヴァイオリンの小塚のエモーショナルなプレイは、アウターリミッツの川口と並び日本のプログレ・シーンの中で優れたヴァイオリニストとして評価され、このグループの看板となっていた。1984年2月に六本木のマッド・スタジオでデモ・テープの為のレコーディングを行い、このデモ・テープを持ってレコード会社やオーディションへ売り込んだが、失敗に終わり、孔雀音のメンバーは挫折し解散。マーキーの沢田守が主宰していた自主制作カセット・レーベルから、彼らの録音したデモ・テープが孔雀音解散直後に発売されて、当時一部のプログレ・マニアの間で話題を呼んでいた。彼らの解散から6年経った1990年12月にメイド・イン・ジャパン・レコードの"History of Japanese Progressive Rock シリーズ"よりデモ・カセットがCD化され、これを機会に作曲家の延上とベースの武士は現在、孔雀音再結成を計画中である。

クラスナヤ・ローザ[KPACHAR POEA]

◀Member▶

内山　純一　Junichi Uchiyama(G)

小山　哲人　Tetsuto Koyama(B) ref.A-MUSIK
椿　　秀利　Hidetoshi Tsubaki(G)
原田ジュン　Jun Harada(Ds)
ロリー　　　Rorie(P,Syn)

◀Discography▶

● 7"FLEXI-「Orange Room」CRAGALE:CS-202 '82★
● V.A.(LP)-「無幻夢(Mugenmu)」LEE:1003 '82★

クラスナヤ・ローザというロシア語のバンド名を持つこのグループは横浜にある「夢音」というプログレ&アヴァンギャルドの音楽喫茶店に集まってきた連中によって結成したグループでハット・フィールド&ノース風のカンタベリー系ジャズ・ロックとアフターディナーやPTA'sなどのインディー系のアヴァンギャルド・ロック・サウンドが混然一体となった不思議議な音空間を作っていた。1982年にクラゲイル・レコードからソノシート「Orange Room」とLLEレーベルからリリースされたオムニバス・アルバム「無幻夢」に1曲参加している。その後、ピアノのロリーは世期末デカダンスと大正ロマンティズムに彩られたソロ作品をインディーズでリリース。また、ベースの小山哲人はA-MUSIKに参加した。

グリーン[GREEN]

◀Member▶

岡本　英利　Hidetoshi Okamoto(B) ex.CAMELOT,ref.HAKURYU
栗原　　務　Tsutomu Kurihara(G) ex.CAMELOT,ref.GREEN,EUROX
白田　　朗　Akira Shirata(Kbd)
菅野　詩朗　Shiro Sugano(Ds) '79~'81 ex.MAHOUJIN,ref.NEGASPHERE
武田　　治　Osamu Takeda(Ds) '81 ex.FAROUT,CHRONICLE,ZONE,OZ
土屋　敏寛　Toshihiro Tsuchiya(Ds) '82~
菊地　　　　Kikuchi(Vo) '81 ref.NEGASPHERE
高久　精華　Seika Takahisa(Vo) '82~

キャメロットというハード・プログレ・バンドをやっていたベースの岡本、ギターの栗原、キーボードの白田の3人がUKに触発されて1979年4月に結成されたのがグリーンである。渋谷屋根裏でデビューライブを行ったが、結成当時はドラマーが定まらず、アウターリミッツの桜井信行なども手伝っていた事があるが、1979年10月にシンフォニックなキーボード・トリオの魔法陣に在籍していた菅野詩朗が加入し、吉祥寺シルバーエレファントや渋谷屋根裏等で精力的なライブ活動を開始。グリーンのサウンドはUK風のソリッドなプログレッシヴ・ロック・サウンドに陰施法や陽施法などの邦楽フレーズや和声を取り入れたものであり、このあと東京のアンダーグラウンド・シーンに数多く出現するUKタイプのグループ達の先駆的な存在となった。また、盛んに最新楽器を導入して作り上げられる彼らのサウンドは、他の70年代後半のプログレ・バンドのサウンドとは一線を引く、新しい時代のプログレ・サウンドと言えるものであった。そしてサウンド作りもさる事ながら、アラン・ホールズワース張りの栗原のギターやスペース・サーカスの岡野はじめ並のテクニックを持つ岡本のベースなど、全員、卓越したテクニックを持つ優れたグループでもあった。彼らはシルバーエレファントなどの東京のアンダーグラウンド・シーンのライブ・ハウス界隈で美狂乱、新月、観世音、マンドレイクと並び評価される様になり、1981年にはボーカルの菊池が加入してインストゥルメンタル・グループから歌を加えたグループへと変化をし始め、プログレッシヴ・ロック・バンドとして最も充実した時期を迎えたが、1981年の終わ

りにドラムスの菅野がネガスフィアに加入する為に脱退。一年余り活動停止状態となり新メンバーを捜し、1982年2月にドラムスに土屋敏寛、4月に女性ボーカルの高久精華が加入して新生グリーンは活動を再開。新生グリーンのサウンドはケイト・ブッシュに影響された精華のボーカルをフィーチャーし、今までの和旋律を取り入れたUK風プログレ・サウンドを母体としながらも、ポップなサウンドへと変化した。(当時、彼らは自分達のサウンドをアバンギャルド・オリエンタル・ロックと呼んでいた。)新宿JAMや屋根裏を中心としてライブ活動を重ねていたが1983年にサウンド的に行き詰まり解散。ギターの栗原は1984年にTAOを解散して新結成した"EUROX"に加入し、中森明菜のアルバム「不思議」を始めバック・バンドやCMソング等で現在も活躍。ベースの岡本は白竜のサポート・メンバーなども努めていたが、グリーン以降はミュージシャンを引退してしまった。

クレオパトラ[CLEOPATRA]

◀Member▶

杉本　　淳　Jun Sugimoto(Vo,G) ref.みや竹(SIRIUS)
藤岡　千尋　Chihiro Fujioka(Ds) ref.Mr.SIRIUS,みや竹
長嶋　伸行　Nobuyuki Nagashima(B) ref.PAGEANT,MUGEN
岡本　好正　Yoshimasa Okamoto(Kbd)
河井　賀文　Yoshifumi Kawai(Vo)

クレオパトラはコロシアムやアラン・ホールズワースから影響を受けた杉本淳一(G)が1980年に藤岡千尋(Ds)、長嶋伸行(B)と共に結成した大阪のカンタベリー系のジャズ・ロック・グループで結成から半年後にボーカルの河井賀文、キーボードの岡本好正が加入してインストゥルメンタル・ナンバーとボーカル・ナンバーとを半々ぐらいづつ演奏していた。日本に於てブリティッシュ・ジャズ・ロック・サウンドを追及するバンドは少なく、クレオパトラは貴重な存在であったが、ライブ活動はアマチュアのバンド大会に数回出場したのみで1982年には解散してしまった。解散後、ベースの長嶋は中嶋一晃らとページェント結成へと歩み、ドラムスの藤岡はミスターシリウスに加入した。また、1980年に杉本、藤岡、長嶋の3人はシリウスをやっていた宮武和広のプロジェクト"みや竹"に参加し、"月下美人"を宮武のプライベート・スタジオでレコーディング。このテープは第4回ロッキンfテープ・コンテストで編曲賞を受賞し、1990年9月にメイド・イン・ジャパン・レコードから発売された宮武和広のアンソロジー・アルバム「クリスタル・ヴォヤージ」に収録されている。

グレイ[GRAY]

◀Member▶

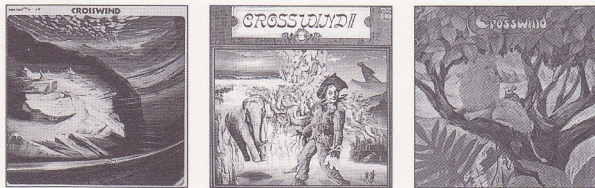
青柳　　誠　Makoto Aoyagi(Kbd,Sax) ex.NANIWA EXPRESS
道下　和彦　Kazuhiko Michishita(G)
菅沼　孝三　Kozo Suganuma(Ds) ex.CHARISMA,DARUMASHOKUDO,99.99 from BLACK PAGE,DED CHAPLIN
永井　敏己　Toshimi Nagai(B) ex.FOUR,AFFLATUS,VIENNA, from DED CHAPLIN,GERARD

元ナニワ・エクスプレスのサックス奏者であったキーボードの青柳誠が、ゲーリーバートンなどとセッション活動をしていたギターの道下和彦、99.99やブラック・ペイジ、デッド・チャップリンで活躍しているドラムスの菅沼孝三、アフレイタス、ヴィエナ、デッド・チャップリン&ジェラルドで活躍している　永井敏巳と共に1990年に結成したジャズ・ロック・グループで8月に渋谷エッグマンにてライブ・デビュー。ブランドXタイプのプログレッシヴ・ジャズ・ロックからカシオペア風のフュージョンまで幅広いジャズ・ロックを聴かせるグループで、日本のプログレ界No.1のテクニックを誇る菅沼、永井のリズム隊を始めとして卓越したテクニックをライブで披露している。まだ結成されたばかりのグループだが、注目株の一つだ。

クロスウィンド[CROSSWIND]

◀Member▶

小川　銀次　Ginji Ogawa(G) ref.RC.SUCSESSION
渡辺　　理　Tadashi Watanabe(Kbd) '76~'77
丸尾めぐみ　Megumi Maruo(Kbd) '78
古木　吉彦　Yoshihiko Furugi(Kbd) '79
安西　史孝　Fumitaka Anzai(Kbd) '82
遠藤　敬三　KeizoEndo(B) '76~'78
小林　一夫　Kazuo Kobayashi(B) '79~
佐藤　正治　Masaharu Sato(Ds) '76~'77 ref.BIKYORAN
杉本　　清　Kiyoshi Sugimoto(Ds) '79
そうる　透　Soul Toul(Ds) '79~ ex.OTOBOKE CATS,ref.SENCE OF WONDER

◀Discography▶

- ALBUM-「Crosswind」(LP)ELBON:BON-7002 '78★
- ALBUM-「CrosswindII」(LP)ELBON:BON-7005 '79★
- ALBUM-「そして夢の国へ(Sosite Yumuno Kunie)」(LP)KITTY:28MS-0008 '82★
- V.A.(LP)-「俺たちの生きた時間(Sound track)」KITTY:20MS-0017 '83★

某音楽雑誌のメンバー募集欄を通じて知り合った小川銀次(G)と遠藤敬三(B)が"ねずみ小僧"というハード・ロック・グループを結成して活動したが、ボーカルが脱退して行き詰まり、いいボーカリストがいなかった為にインストゥルメンタルだけのバンドを結成しようと、1976年6月に小川銀次(G)、遠藤敬三(B)、渡辺理(Kbd)、佐藤正治(Ds)の4人でクロスウィンドを結成。1977年12月に"下北沢音楽祭"で優勝、何回かのメンバーチェンジを経て1978年4月に小川(G)、遠藤(B)、丸尾めぐみ(Kbd)、杉本清(Ds)というライン・ナップとなった彼らは新興レコード会社であるエルボン・レコードと契約を交わし、1stアルバム「Crosswind」を7月にレコーディング。10月にこのアルバムが発売されると、先にデビューしたプリズム、スペース・サーカスと共にロック・フィールドからのアプローチをしたフュージョン・グループとして注目を集めた。同じロック・フィールドからアプローチをしたフュージョン・グループと言っても、プリズム、スペース・サーカスは緻密なリズム・アレンジと曲構成に支えられスパニッシュ・アンサンブルを主体とするグループであり、チック・コリアのリタン・トゥ・フォーエバーあたりからの影響が強かったが、このクロスウィンドはジミ・ヘンドリックスなどからの影響が多大なあくまでロック色を強く押し出した小川銀次のギター・プレイを全面的に聴かせるプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドであり、全曲に渡り小川のギターのソロ・プレイをフィーチャーした曲作りがなされていた。

1stアルバム発表後、小川銀次と他のメンバーの演奏技量の差により、小川銀次以外のメンバーは全員脱退し、小川(G)、小林一夫(B)、古木吉彦(Kbd)、そうる透(Ds)という新しいライン・ナップとなった彼らは1979年に2ndアルバム「CrosswindII」を発表。コンセプト・アルバムとして作られた本作は1stよりもアンサンブルに重点が置かれ、プログレッシヴ色が増し、またメンバーも一新して1stのメンバーよりも力量あるメンバーが揃い充実した演奏を聴かせてくれる。このアルバムを発表後、ギターの小川銀次がRCサクセションに参加したり、ドラムスのそうる透が難波弘之のセンス・オブ・ワンダーの他数多くのスタジオ・ワークに参加するなど、クロスウィンドは一時期活動停止状態であったが、1982年に小川(G)、そうる透(Ds)、小林一夫(B)、安西史孝(Kbd)というライン・ナップでキティー・レコードへ移籍して3rd「そして夢の国へ」を発表。前作と同様にコンセプト・アルバムとして作られた本作は安西の多彩なキーボード・ワークとよりアンサンブルに重点を置くサウンド作りによって、最もプログレ色が強いアルバムであり、また彼らにとっても最高傑作アルバムとなったが、翌年に暴走族をテーマとした映画「俺たちの生きた時間」の音楽を白竜と共に担当した後にバンドは解散してしまった。ギターの小川は現在、小川銀次バンドを作り、地道にライブ活動を行っており、そうる透はセンス・オブ・ワンダーを経て現在では売れっ子スタジオ・ミュージシャンとして活躍している。

クローズ・トゥ・ジ・エッジ[CLOSE TO THE EDGE

◀Member▶

佐藤　満　Mitsuru Sato(G,Vo) ref.MARTIAN ROAD,YONIN-BAYASHI
中村 道徳　Michinori Nakamura(G) '73~'74
三国 義貴　Yoshiki Mikuni(Kbd)
神馬 利明　Toshiaki Jinma(B) '73~'74
阿部　Abe(B) '75
工藤 利範　Toshinori Kudo(Ds) '73~'74
佐藤 昭信　Akinobu Sato(Ds) '75 ref.MARTIAN ROAD

クロス・トゥ・ジ・エッジは森園勝敏の後任として四人囃子に加入したギター&ボーカルの佐藤ミツルが札幌で四人囃子加入以前にやっていたグループで、1973年に佐藤ミツルを中心に結成された。バンド名を見てもすぐに連想できる様に彼らはイエスのコピーを中心として、オリジナルも演奏していたグループで1973年にAロックに出演したのを初めとして地元のイベントやコンテスト等に精力的に出演。彼らの高水準な演奏力は地元はもとより、全国的にも名を轟かせたが、1975年にワールド・ロック・フェスティバルに出場した頃から佐藤ミツル以外のメンバーは流動的なセッション・メンバーとなり、とあるセッションを通じて知り合ったキャッツ・アイというソウル・グループをやっていたキーボードの中島優貴、ジパングというグループのギターの牧野哲人らと共に佐藤ミツルは1976年にクロス・トゥ・ジ・エッジを発展させたグループとしてマーシャン・ロードを結成した。

クロニクル[CHRONICLE]

◀Member▶

武田　治　Osamu Takeda(Ds) ex.FAROUT,ref.OZ,ZONE,GREEN
石川　恵　Kei Ishikawa(B) ex.FAROUT
発地 伸男　Nobuo Hotchi(G)
已城 研二　Kenji Mishiro(Kbd)

◀Discography▶

- ALBUM-「Live At Whisky A Go-Go」(LP)TOSHIBA EMI:ETP-72037 '75★
- ALBUM-「今は時のすべて(Imawa Tokiosubete)」
　(LP)TOSHIBA EMI:ETP-72088 '75/★(CD)TOSHIBA EMI:TOCT-5859 '90
- 7"EP-「くりかえし(Kurikaeshi)」(LP)TOSHIBA EMI:ETP-20170 '75★
- V.A.(CD)-「Rare Tracks」(LP)TOSHIBA EMI:CT25-5579 '90★

クロニクルはギターの発地伸男、キーボードの巳城研二、ファーラウトや柳田ヒロ・グループで活躍していたベースの石川恵樹、同じくファーラウトの最後のドラマーであった武田治によって1974年に結成され、武者修行の為に渡米。1975年にカリフォルニアの"ウィスキー・ア・ゴーゴー"で行われたライブを収録したアルバム「Live At Go-Go」を東芝EMIよりリリース。また3月にハリウッドにあるエルドラド・スタジオでレコーディングを行い、9月に2ndアルバム「今は時のすべて」とシングル「くりかえし」を

リリース。クロニクルのサウンドはコスモス・ファクトリーあたりと同様にピンク・フロイドから影響されたプログレ色が強いが、あくまで歌をメインとしたグループであり、どちらかと言うとプログレの味付けをした歌ものロックといった所。クロニクルはレコーディングをした後帰国をしてしばらくすると解散。ドラムスの武田治は77年にカルメン・マキ&OZに加入。他のメンバーはタスマリンというグループ名でテレビ・アニメの「超人ロック」などの音楽担当をしたり、ベースの石川とキーボードの巳城は伊藤祥や宮下文夫が音楽担当するアニメ関係のレコードのサポート・ミュージシャンとして活動している。

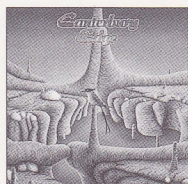
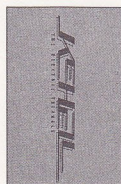
ケッヘル[KEHELL]

◀Member▶

釜木　茂一　Shigekazu Kamaki(G) ex.ORPHEUS,MUGEN,EVE,PAGEANT from Mr.SIRIUS

上西京太郎　Kyotaro Jonishi(B)

浜田　　亨　Toru Hamada(Ds)

◀Discography▶

- CT-「Kehell」KEHELL(Promo) '87★
- V.A.(LP)-「Canterbury Edge」MADE IN JAPAN:MIJ-1019 '88★
- V.A.(CD)-「Jazz-Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3206 '89

ケッヘルはオルフェウス、イヴといった関西のB級ハード・プログレッシヴ・ロック・グループを渡り歩いてきて、現在はミスターシリウスに参加しているギターの釜木茂一が1987年に結成したジャズ・ロック・トリオ。87年にデモ・テープを制作し、1988年にメイド・イン・ジャパンからリリースされたジャズ・ロック・オムニバス「カンタベリー・エッジ」に1曲収録している。キーボード・レスによる彼らのサウンドはシンプルではあるが、アラン・ホールズワースから影響された釜木茂一のギターワークを始めとして、各メンバー共、かなりの力量を持っており、ブラッフォードやアラン・ホールズワース・タイプのプログレッシヴ・ジャズ・ロック・シーンの中で屈指のグループと言えるだろう。

ケネディー[KENNEDY]

◀Member▶

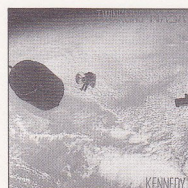
泉　　陸奥彦　Mutsuhiko Izumi(G) ex.CHARISMA,DADA,SADATO GROUP

安田　　　隆　Takashi Yasuda(Ds) ex.KIGADOMEI

ジュジュ北岡　Juju Kitaoka(Kbd)

仙波　　　基　Motoi Semba(Kbd) '85～'86 ex.TERU'S SYMPHONIA,PALE ACUTE MOON,ref.4LDK

伊藤　　宏二　Kohji Itoh(Sax) ex.SADATO GROUP

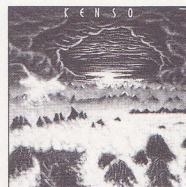
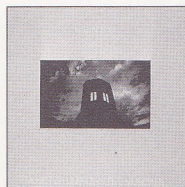
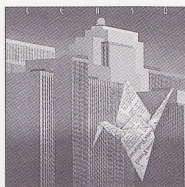
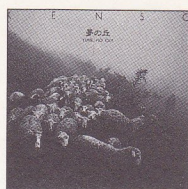
◀Discography▶

● ALBUM-「Twinkling Nasa」(LP)NEXUS:K28P-597 '86★
● ALBUM-「Kennedy!(*Live)」(LP)MONOLITH:MNK-8 '87

関西のアヴァンギャルド・シーンの中で中心人物としてカリスマ、DADAを率いて活動してきたギターの泉奥陸彦が1984年に、サックス奏者のサダトのユニットである"サダト・グループ"に参加。サダト・グループとしてインディーズのKANG GUNGレーベルよりソノシート「Sadato Group」をリリース後、サダト・グループのサックス奏者である伊藤宏二と共にファミリークラブというグループを経て、1985年にケネディーを結成。メンバーは泉、伊藤の他、セッション・マンとして活動していたジュジュ北岡(Kbd)、1970年代にノヴェラの平山照継、DADAの小西健司と飢餓同盟というハード・ロック・バンドをやっていてその後、あがた森魚のアルバム「乗物図鑑」等に参加していたドラムスの安田隆の4人にサポート・メンバーとしてテルズ・シンフォニアのキーボードである仙波基が加わった編成であった。1985年秋に東京渋谷エッグマンにてライブ・デビュー。1986年1月にはキング・レコードのネクサス・レーベルよりアルバム「Twinkling Nasa」を発表。このアルバムは1981年〜84年の間に泉が自分のプライベート・スタジオでレコーディングを行い温めて来たもので、メンバーの他にサダト・グループの宇佐美(Ds)なども参加。またカリスマ時代から取り上げてきたナンバー"飛行船パートⅠ"も収録されており、ホークウインドやジョン・マクフリンのマハビッシュヌ・オーケストラを想わせるエネルギッシュで実験的なプログレッシヴ・ロックを作り上げていた。このアルバム発表後、ケネディーはインディーズのモノリス・レーベル傘下となり、1987年の10月8日に大阪センサス・ホールで行われたライブを収録したアルバム「Kennedy!」を発表。ケネディーの本領はライブにあり、泉の攻撃的なギター・インプロビゼーションを中心としてエネルギッシュな演奏を繰り広げる力作であった。この頃のケネディーは大谷令文や五十嵐久勝などをゲストに加えてライブを精力的に行っていたが、1989年5月にキーボードのジュジュ北岡が不慮の事故に遭い死去。8月に吉祥寺シルバーエレファントにて追悼コンサートを行い、このライブを最後に解散してしまった。カリスマ時代から15年余りの間、泉が一貫して追及した前衛的プログレッシヴ・ロックはケネディーで完成されたのだ。

ケンソー[KENSO]

◀Member▶

清水　義央　Yoshihisa Shimizu(G)
山本　治彦　Haruhiko Yamamoto(Ds) '75〜'88 ref.LOOK
村石　雅行　Masayuki Muraishi(Ds) '88〜
田中　政行　Masayuki Tanaka(B) 〜'81
松元　公良　Kimiyoshi Matsumoto(B) '82〜'89
三枝　俊治　Shunji Saegusa(B) '89〜
森下　一幸　Kazuyuki Morishita(Kbd) 〜'81
牧内　　淳　Atsushi Makiuchi(Kbd) '82〜'84
佐橋　俊彦　Toshihiko Sahashi(Kbd) '83〜'90
小口　健一　Kenichi Oguchi(Kbd)
光田　健一　Kenichi Mitsuda(Kbd) '90〜
矢島　史郎　Shiro Yajima(Fl) '80〜'83

◀Discography▶

- ALBUM-「Kenso」(LP)PAM:001 '81★
- ALBUM-「Kenso II」(LP)PAM:002 '83★
- ALBUM-「Kenso」(LP)NEXUS:K28P-542 '85★/(CD)CRIME:280E-2024 '89
- ALBUM-「イン・コンサート(Music For Unknown Five Musicians)」(LP)NEXUS:K18P-598-9 '86★/(CD)CRIME:KICS-2055-6 '90
- ALBUM-「Sparta」(CD)CRIME:292E-2058 '89
- ALBUM-「Self Portrait(*Best from 1st&2nd)」(LP)PAM:004 '87
- ALBUM-「夢の丘(Yume No Oka)」(CD)ELECTRIC BIRD:KICP-142 '91

アウター・リミッツと共に80年代の東京のプログレ・シーンをリードしてきたプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ"KENSO"の歴史は古く、結成は1974年にさかのぼる。神奈川県にある県立相模原高校に通う清水義央(G)は、同級生である田中(Ds)、二宮(Ds)、塚平(B)を集めて"喧騒"というハード・ロック・バンドを作る。(バンド名の"喧騒"は県立相模原高校の愛称から文字ったもの)当時の清水はレッド・ツェッペリンを中心としてブラック・サバスなどの曲のコピーをしており、文化放送の"ハローパーティー"という番組のアマチュア・バンド・コンテストで優勝した事もある。1976年にキーボードの大矢享が加入してから、ハード・プログレッシヴ・ロックへとサウンドは変化したが(彼らの1stに収められている"ふりおろされた刃"はこの頃のナンバー。)表面的スタイルでのプログレッシヴ・ロックではなく真のプログレッシヴ・サウンドを目指し、1977年に音楽的に行き詰まり"喧騒"は解散。神奈川歯科大学へと進んだ清水は一時期音楽から足を洗っていたが、1979年12月にピアノ即興演奏をしていた牧内淳と出会い、清水は牧内と2人で"かごめ"に取り組み始め、高校時代に一緒に"喧騒"をやっていたベースの田中政行、国立音大卒業のフルートの矢島史郎、ドラムスを始めギター、キーボード、サックス、ベース、ボーカルを一人でこなして自主制作アルバム「治彦1978」を制作しており、ロッキンfのテープ・コンテストで優勝した経歴も持ち、また東京音大の作曲科にも在籍しているドラムスの山本治彦を集めて、1980年に"KENSO"を結成。上記の清水(G)、牧内(B)、矢島(Fl)、山本(Ds)の4人の他に森下一幸(Kbd)を加え、1981年に町田にあるレコード店"PAM"から自主制作アルバム「KENSO」を発売。このアルバムは清水ら自身によるプライベート録音されたもので、あくまでアマチュア作品ではあるが当時のプライベート・レコーディングとしてはかなりレベルの高い作品であった。また音楽的にも即興演奏のナンバーなども含まれてはいるもの、"海"や"日本の麦唄"など日本の風土に基づいたイメージをドビュッシー、PFM等から影響を受けた緻密なアンサンブルのプログレッシヴ・ロックによって表現したKENSOの独特のサウンドを確立させた。アルバム発売後は清水の学業の方が多忙の為に活動停止状態であったが、12月に長い間、清水と活動を共にしてきたベースの田中政行に代わって、松元公良が加入。82年4月には"KENSO"になってからの初ライブを吉祥寺シルバーエレファントにて行なった。(共演はアクア・ポリス)清水(G)、矢島(Fl)、山本(Ds)、松元(B)、牧内(Kbd)というライン・ナップとなったKENSOは清水のプライベート・スタジオでレコーディングを開始し、83年初めに2ndアルバム「KENSO II」をリリース。このアルバムは1stの時に作り上げたKENSOのサウンドをジャズ・ロックというスライドを通じて、より明確に押し進めたサウンドであり、今後のKENSOサウンドを確立したアルバムであった。また演奏、自主制作レベルでの録音の双方に渡り、前作とは比較にならない程の進歩がみられ、音楽性、録音、演奏に渡り日本のプログレ・インディーズの名作であった。1983年にフルートの矢島が脱退し、キーボードの佐橋俊彦が加入してダブル・キーボード編成となりマイ・ペースなライブ活動を行ない、彼らの音楽性、そしてドラムスの山本の驚異的なドラミング等によって東京のアンダーグラウンド・シーンの中で一躍、人気No.1のプログレ・グループへと躍り出たが、1984年にキーボードの佐橋が一時期脱退し、小口健一が加入したが、もう一人のキーボード奏者である牧内が不慮の病気により死去し、再び佐橋が戻り、清水(G)、佐橋(Kbd)、小口(Kbd)、松元(B)、山本(Ds)というライン・ナップとなる。そして1984年8月～12月にかけて清水のプライベート・スタジオでレコーディングが行われた3rdアルバム「KENSO」が1985年5月にキング・レコードのネクサス・レーベルから発売され、メジャー・デビュー。このアルバムには矢島や難波弘之(Kbd)などのゲストも参加して作られた作品であり、今までプログレッシヴ・ロック・バンドとして歩んで来たKENSOの最高傑作であった。1985年9月4日に六本木のピット・インでライブを行い、このライブを収録した2枚組のアルバム「イン・コンサート」が1986年1月にネクサス・レーベルより発売されるが、山本治彦がケンソーと平行してやっていたポップス・バンドのルック(山本はルックで

キーボードを担当)が"シャイニー・オン"のヒットにより、活動が忙しくなり、今まで以上にライブ活動が困難な状態に陥ってしまう。1987年にはすでに廃盤となってプレミアム価格で取り引きされていたインディーズ時代の1st「KENSO」と2nd「II」からのベスト・アルバム「Self Portrait」がPAMから発売されたが、1988年に長年に渡って清水らと活動を共にしてKENSOの演奏の要であったドラムスの山本治彦とベースの松元が脱退し、村石雅行(Ds)と三枝俊治(B)が加入してパット・メセニーあたりから影響されたジャズ=フュージョン色が強くなり始め、1988年7月に5枚目のアルバム「スパルタ」がキング・レコードのネクサス・レーベルより発表される。演奏力の上では以前のメンバーよりもアップして洗練されたジャズ・ロック・サウンドへと変化したKENSOは現在、キーボードの佐橋が脱退し、清水(G)、村石(Ds)、三枝(B)、小口健一(Kbd)、米田(Kbd)というライン・ナップで次作のレコーディングを行っている。

演奏力、録音、音楽性のすべての点に於て優れたバンドとして日本をもとより海外でも高い評価を受けているKENSOは、あくまで緻密なアンサンブルを追及する独自のプログレッシヴ・ジャズ・ロックを確立したグループである。

ゴールデン・アヴァンギャルト[GOLDEN AVANT-GARDE]

◀Member▶

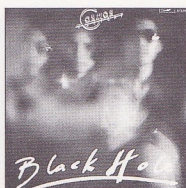
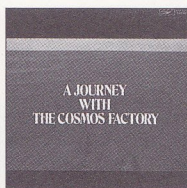
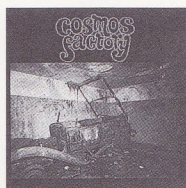
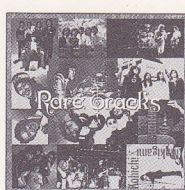
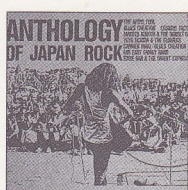
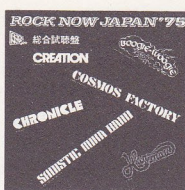
斉藤　千尋　Chihiro Saito(B,Vo) ex.KATRA TURANA,LACRYMOSA
長沼　武司　Takeshi Naganuma(Ds) ex.TIME UNIT,SOFT WEED FACTOR
田中耕太郎　Kotaro Tanaka(G) '86～'87 ex.CIRCADIAN RYTHM
阿部　雄治　Yuji Abe(G) '87～ ref.KATRA TURANA
中野　泰博　Yasuhiro Nakano(Sonic Disaster) '87～ ex.METAMORFOSE,DRY PROJECT
榎本　隆一　Ryuichi Enomoto(G) '87～ ex.SAISEIKOBO

ゴールデン・アヴァンギャルドはカトラ・トゥラーナ、ラクリモーザと日本で唯一のチェンバー・ロックを追及し続けている東京のアヴァンギャルド・シーンの中心人物である斎藤千尋(B)が1986年秋に結成した彼のニュー・グループ。結成当時のメンバーは斎藤(B)の他、元タイム・ユニット、ソフト・ウィード・ファクターやラクリモーザのライブ・サポートもやっていた長沼武司(Ds)、元サーカデアン・リズムの田中耕太郎(G)の3人で、86年秋に西荻窪Watts'にてデビュー・ライブを行なう。87年にはギターの田中が脱退して、カトラ・トゥラーナのギタリストでもある阿部雄治とメタモルフォーゼやDRYプロジェクトをやっていた中野泰博、DRYプロジェクトや再生工房のギタリストである榎本隆一が加入。新生キング・クリムゾンとラクリモーザで斎藤が作り上げたチェンバー・ロック・サウンドが交差する斎藤独自の世界を表現する彼らは現在、アルバムの為のレコーディングに入っている。

コスモス・ファクトリー[COSMOS FACTORY]

◀Member▶

泉　つとむ　Tsutomu Izumi(Vo,Kbd)
水谷ひさし　Hisashi Mizutani(G)
滝としかず　Toshikazu Taki(B)
岡本　和男　Kazuo Okamoto(Ds)

◀Discography▶

- ALBUM-「トランシルバニアの古城(An Old Castle of Transylvania)」
  (LP)COLUMBIA:YZ-41 '73★/(CD)COLUMBIA:COCA-7253 '91
- ALBUM-「謎のコスモス号(A Jounney With The Cosmos Factory)」
  (LP)TOSHIBA EMI:ETP-72083 '75★/(CD)TOSHIBA EMI:CT-5860 '90
- ALBUM-「Black Hole」(LP)TOSHIBA EMI:TP-72129 '75★/(CD)TOSHIBA EMI:CT-5577 '90
- ALBUM-「嵐の乱反射(Metal Reflection)」(LP)TOSHIBA EMI:TP-72258 '76★
- 7"EP-「追憶のファンタジー(Fantastic Mirror)」COLUMBIA:LL-2622 '75★
- 7"EP-「心の宇宙(The Infinite Universe of Our Mind)」TOSHIBA EMI:PRT-1011(Promo) '75
- 7"EP-「遠い日々(Days In The Past)」TOSHIBA EMI:ETP-10050 '75★
- V.A.(LP)-「Rock Now Japan'75」TOSHIBA EMI:PRT-8048(Promo) '75★
- V.A.(ALBUM)-「Anthology of Japan Rock」(LP)COLUMBIA:AX-7447 '88★/(CD)COLUMBIA:CA-2094 '88
- V.A.(CD)-「Rare Tracks」TOSHIBA EMI:CT25-5579 '90

68年に日本マーキュリー・レコードという自主制作レコード会社より、「恋の夜汽車」というシングルをリリースした名古屋のB級GSグループであったサイレンサーと、バーンズというB級GSグループが合体して結成されたのがコスモス・ファクトリーだ。コスモス・ファクトリーは泉つとむ(Vo、Kbd)、水口ひさし(G)、滝としかず(B)、岡本和男(Ds)の4人によって1970年に結成され、名古屋で活動を重ねている所を見い出されて71年に東京に上京し、音楽評論家の立川直樹のもとでプログレッシヴ・ロック・バンドとしてのサウンドを煮詰め、ピンク・フロイド、初期キング・クリムゾン、プロコル・ハルム、ムーディー・ブルース的な叙情派プログレ・サウンドを確立。1973年5月に来日したハンブル・パイの前座を努めると日本初の本格的プログレ・バンドとして四人囃子と共に高い評価を受け始め、1973年6月～7月にかけてコロムビア・スタジオでレコーディングを行ない、9月に1stアルバム「トランシルバニアの古城」をコロムビア・レコードより発表。当時としてはまだ珍しかったメロトロンやムーグ等を駆使した壮大なスケールのシンフォニック・ロックや、オルガンやヴァイオリンをフィーチャーしたブリティッシュ・オルガン・プログレッシヴ・ロックなど、初期キング・クリムゾンとピンク・フロイド色が強く表れた日本初の純粋なプログレッシヴ・ロック・アルバムであり、彼らの最高傑作であった。(当時の評論家たちは2ndや3rdが最高傑作と無責任で的外れな事を書いていたが、プログレッシヴ・ロックという見地から正しく評価すれば、この1stが最高傑作である。)アルバム発表後、ムーディー・ブルースの来日コンサートの前座を努めたり、六本木ミンゴスやムジコ等のライブ・ハウスを中心として活動を行ない、1974年に東芝EMIへ移籍して2ndアルバム「謎のコスモス号」のレコーディングを74年の暮れから75年にかけて東芝EMIスタジオとモウリ・スタジオで行ない4月に発売。1stの様な壮大なスケールを持つ叙情的な部分は少なくなり、クリムゾン風なフレーズを用いたエレクトロニクス・サウンド色が強調された音作りへと変化した。その後彼らは75年の暮れに3rd「ブラック・ホール」、76年には4thアルバム「嵐の乱反射」をリリースしたが、1st、2ndアルバムのようなプログレッシヴ・ロック色は影を秘めてコンパクトなエレクトロニクス・サウンドへと変化してしまい、1977年になると映画のサウンド・トラックを担当したり、大滝裕子のバックをつとめたりして活動していたが、行き詰まり自然消滅。キーボードの泉つとむはツトム・ヤマシタのツアー・ミュージシャンとして活動、ギターの水谷ひさしはソロ・アルバムを一時期リリースしていたが、(かつてのコスモス・ファクトリーのプログレ・サウンド色は一切ないニューミュージックのアルバムであった。)その後の活動はない。

フライド・エッグや柳田ヒロらが模索して作り上げたプログレッシヴ・ロックを土台として日本初の本格的なプログレッシヴ・ロックを築き上げたコスモス・ファクトリーは四人囃子と共に日本のプログレ史に永遠に刻まれる素晴らしいグループであった。

コスモ・チャイルド[COSMO CHILD]

◀Member▶

和田　良二　Ryoji Wada(Kbd,G,B,Vo)ex.SAGITTARIAN

◀Discography▶

●CT-「Cosmo Child」ROAD:R-006 '85★

コスモ・チャイルドはサジタリアンのギタリストであった和田良二のプライベート録音による作品を発表する為のユニットで1985年にロゼが主宰するカセット・レーベルのロード・レコードからカセット・アルバム「コスモス・チャイルド」を発表している。ギターを初めキーボード、ベース、ボーカルを一人でこなしたこの作品はアマチュア・レベルであるがキャメル・タイプの叙情派シンフォニック・ロックであった。なを和田は現在でもビデオやカセット・テープ作品を制作している。

サイレント・パレス[SILENT PALACE]

◀Member▶

えごう　Ego(Kbd,Tabla,Perc.)
横沢　H.Yokozawa(Flute,Pan-pipe)
藤木　S.Fujiki(G,Synth)
岡　T.Oka(B)
野崎　T.Nozaki(Perc.,Tabla)

サイレント・パレスはえごう(Kbd,Tabla)、横沢(Fl)、藤木(G,Synth)、岡(B)、野崎(Ds,Tabla)の5人編成によるグループで、フルートとエレクトリック・ピアノをフィーチャーしたチック・コリアのリタン・トゥ・フォーエバーの初期あたりのジャズ・ロックとマイク・オールドフィールド風の美しいプログレッシヴ・ロック・サウンドを持つグループであった。彼らは1985年に阿木護が企画したオムニバス・カセット「EGO」に参加していたが、現在は活動を行っていない。かなりマイナーな存在のグループではあったが、サウンドはなかなか良いものを持っていたグループであった。

サーカディァアン・リズム [CIRCADIAN RYTHM]

◀Member▶

村山けいこ　Keiko Murayama(Vo)
田中耕太郎　Kotaro Tanaka(G,Syn)ref.GOLDEN AVANT-GARDE
大里　真宏　Mahiro Osato(Ds)
斉藤　千尋　Chihiro Saito(B)ex.KATRA TURANA, ref.LA(RYMOSA,GOLDEN AVANT-GARDE
小崎　裕美　Yumi Ozaki(Vln)
菊地　俊行　Toshiyuki Kikuchi(G)

◀Discography▶

●7"EP-「新鮮なかおり(Shinsenna Kaori)」AIR:3008 '86★

サーカディアン・リズムは、1986年に自主制作レーベルであるLLEからシングル「新鮮なかおり」をリリースした東京のアンダーグラウンド・シーンで活動していたアヴァンギャルド・ロック・グループで、斉藤千尋(B)がラクリモーザと平行して参加していた。彼らのサウンドは女性ボーカルの村山をフィーチャーした白痴少女的なデカダンスの空間とラクリモーザ風のチェンバーロック・サウンドの2面性を持っていた。87年頃まで活動していたが現在は解散、ギターの田中は斉藤千尋と共に86年秋にゴールデン・アヴァンギャルドを結成した。

サージェリー [SURGERY]

◀Member▶

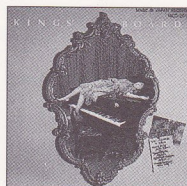
掘沢　俊樹　Toshiki Horisawa(G,Vo,Kbd)
下田　順　Jun Shimoda(B)'84~'87
小嶺　恒夫　Tsuneo Komine(B)'88~ from BLACK PAGE
安藤　善康　Yoshiyasu Ando(Ds)'84~'87
荒張マサユキ　Masayuki Arahari(Ds)'88
森分　憲親　Kenshin Moriwake(Ds)'89~

サージェリーはもともと、ギターの堀沢が高校時代に結成したバンドで1980年、高校卒業と共に解散。青山大学へと進学した堀沢が1984年に下田(B)、安藤(Ds)を誘って再結成し、ラッシュ・タイプのハード・プログレッシヴ・トリオとして活動を始め、渋谷エッグマン等に出演するが、1987年4月に下田、安藤が脱退し活動停止。再結成の為にオーディションを行ない、ブラック・ペイジのベース小嶺、ブラック・ペイジの菅沼の弟子で菊地ひみこのバックを努めていたドラムスの荒張がメンバーとして決まり、再び活動を開始。ニューライン・ナップとなったサージェリーは今までのラッシュ・タイプのハード・プログレからUK風のポップなロック・サウンドへと変身し、また演奏力の面ではかなりレベル・アップをした。89年9月よりドラムスが森分に代わり、現在都内のライブ・ハウスにて活動中である。

桜庭統バンド [MOTOI SAKURABA BAND]

◀Member▶

桜庭　統　Motoi Sakuraba(Kbd) ex.DEJA-VU
井下　憲　Ken Ishita(B) ex.DEJA-VU
下田　武男　Takeo Shimoda(Ds) from WHITE FANG

◀Discography▶

●ALBUM-「戯曲音創(Gikyokuonzo)」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2920 '90
●V.A.(CD)-「Kings'Boards」MADE IN JAPAN:MCD-2918 '90

1989年10月にデジャヴを解散させたリーダーでありキーボード奏者の桜庭統は、1990年9月にメイド・イン・ジャパン・レコードから発売された企画アルバム「キングス・ボード」に1曲参加し、その時彼の曲に参加した元デジャヴのベースの井下憲、ホワイト・ファングのドラムスの下田武男と意気投合し、桜庭統バンドを結成し、桜庭統のソロ・アルバムのレコーディングを10月〜11月にかけてスタジオ・ディグで行ない、1990年12月にアルバム「戯曲音創」をメイド・イン・ジャパン・レコードから発売。桜庭統のアルバムのサウンドは全編インストゥルメンタルであり、デジャヴの延張線上にあるUKタイプのサウンドを基本としながら、よりピアノを中心としたチック・コリア風の技巧的なスパニッシュ&ジャズ・ロック・サウンドの要素も加えたものになっている。

サジタリアン [SAGITTARIAN]

◀Member▶

黒沢　龍章　Tatsuaki Kurosawa(Kbd,Vo)
早坂　元博　Motohiro Hayasaka(Kbd,Vo)
和田　良二　Ryoji Wada(G,Syn,Vo) ref.COSMO CHILD
五木田龍臣　Tatsumi Gokita(G,Ds,Vo)
三宅　淳一　Junichi Miyake(B)
本田　豊彦　Toyohiko Honda(Ds)

◀Discography▶

●ALBAUM-「Sagittarian」(LP)ARIES:RIO-842282(Ltd.100) '84★
●CT-「Sagittarian」ROAD:RMA-033 '84★

サジタリアンはダブル・キーボード、ダブル・ギター編成の東京のアマチュア・レベルのシンフォニック・ロック・グループで、1984年に自らの自主制作によるLP「サジタリアン」を残している。(限定100枚プレス)彼らのサウンドはキャメルやノヴァリス・タイプの叙情派シンフォニック・ロック・サウンドであった。ライブ活動もほとんどないままに1984年に解散。ロゼの主宰するカセット・レーベルであるロード・レコードより、このアルバムから抜粋されたカセット「サジタリアン」が発売されていた。サジタリアン解散後、ギターの和田良二はプライベート録音による作品の制作を始め、コスモ・チャイルドというユニットで活動している。

サダト・グループ [SADATO GROUP]

◀Member▶

サダト　Sadato(Vo,Sax)
泉　陸奥彦　Mutsuhiko Izumi(G,B) ex.CHARISMA,DADA,ref.KENNEDY
伊藤　宏二　Koji Ito(Sax) ref.KENNEDY
宇佐見　斉　Sai Usami(Ds)

◀Discography▶

●7″ FLEXI-「SadatoGroup」KANG-GUNG:SHY-2003 '84★

<SADATO SOLO>

●ALBUM-「初(Hajime!)」(LP)KAMPAI:KR1 '87

アメリカ人のサックス奏者であるサダトのユニット“サダト・グループ”は、前衛的なジャズ・ロック・グループであり、DADAの泉奥陸彦(G)、伊藤宏二(Sax)、宇佐見斉(Ds)の4人によって1984年に結成され、関西のインディーズ・レーベルであるKANG—GUNGレコードよりソノシートをリリース。ネケディ的なアヴァンギャルト・ロックをよりフリージャズ・アプローチによって捕えたサウンドであった。泉と伊藤は85年にファミリークラブを経てネケディーを結成し、サダトは自らのソロ・アルバムを制作しながら現在も活動している。

佐藤充彦&サウンド・ブレイカーズ [MASAHIKO SATO&THE SUNDO BREAKERS]

◀Member▶

佐藤　充彦　Masahiko Sato(P)
柳田　ヒロ　Hiro Yanagida(Kbd) ex.FRORAL,APRYL FOOL,FOOD BRAIN, ref.LOVE LIVE LIFE,SHINROKUMONSEN
水谷　公生　Kimio Mizutani(G) ref.LOVE LIVE LIFE
ルイスハネス　Louis Haynes(Ds)
寺川　正興　Masaoki Terakawa(B) LOVE LIVE LIFE
豊住　苫三郎　Tozaburo Toyozumi(Ds)
高木　元輝　Mototeru Takagi(Sax)

◀Discography▶

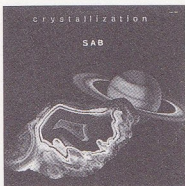
ALBUM-「恍惚の昭和元禄(Amalgamation)」(LP)TOSHIBA LIBARTY:LTP-9018 '70★

佐藤充彦は60年代末～70年代にかけて、フリージャズや前衛音楽シーンで活躍していたピアニストであり、ソロ活動はもとよりツトム・ヤマシタらを始め数多くのセッションにも参加していた。佐藤充彦の数多くあるソロ・アルバムの中で、1970年に東芝リバティーから発売された佐藤充彦&サウンド・ブレイカーズのアルバム「恍惚の昭和元禄」は他のフリージャズ的なソロ・アルバムとは異なるプログレッシヴ・ロックとしての色合いの強い作品に仕上がっている。先ず、サウンド・ブレイカーズのメンバーはエイプリール・フールやフード・ブレーン、ラヴ・リヴ・ライフ等で活躍していた日本のプログレの黎明期の立て役者であるオルガンの柳田ヒロ、同じくラヴ・リヴ・ライフのギターの水谷公生とベースの寺川正興、フリージャズ畑で活躍していたサックスの高木元輝といった強力な布陣で特にアルバムA面の柳田ヒロのオルガンと水谷公生のギターをフィーチャーしたロック色の強いサウンドが聴きもの。演説や効果音、クラッシック音楽などがコラージュされる中、アヴァンギャルドに、そしてエネルギッシュに演奏されるオルガンとギターのインタープレイは柳田ヒロの「Milk Time」に近いプログレッシヴ・ロックであった。なお、サウンド・ブレイカーズのレコードは、この1枚のみで、ライブ活動なども行っていなかったようだ。

SAB[SAB]

◀Member▶

SAB(Syn)
Meg(Syn)
Ravi(Sitar,Fl)

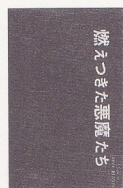
◀Discography▶

● ALBUM-「Crystallization」(LP)VANITY:002 '78★

SABは1978年にロック・マガジンの阿木譲が設立した前衛音楽の自主制作レーベルであるヴァニティーレコードの第2弾としてアルバム「Crystallization」を発表しているシンセサイザー・ユニット。サブ・メグの2人のシンセサイザー奏者にシタール&フルート担当のラビの3人のこのユニットのサウンドは繊細な音の微粒子が宇宙空間を舞う様な淡々としたシンセサイザー・ミュージックであった。SABは同じくヴァニティーレコードから発売されたあがた森魚のアルバム「乗物図鑑」に参加していたが、その後の活動は不明。

山水館[SANSUIKAN]

◀Member▶

高橋　良郎　Yoshiro Takahashi(Vo,B) ref.NOVELA,ACTION
山根　基嗣　Mototsugu Yamane(G) '77～ ref.NOVELA,ACTION
渡辺　邦孝　Kunitaka Watanabe(Kbd) '74～'78
岡田　　洋　Hiroshi Okada(Ds) '74～'77
片山源次郎　Genjiro Katayama(Ds) '77～

◀Discography▶

● CT-「燃えつきた悪魔たち(Moetsukita Akumatachi)」LUC '78★

山水館の歴史は古く、もともと高橋良郎(Vo,B)、渡辺邦孝(Kbd)、岡田洋(Ds)の3人によって1974年6月に神戸で結成されたキーボード・トリオ編成のグループであった。この頃の彼らはEL&Pのコピーグループであったが、1976年9月頃からオリジナルを作り始め次第にサウンドに変化が見られるようになる。1977年2月にラジオ関西の「スター登竜門」に出場しグランプリを受賞。4月にドラムスの岡田が脱退し代わって片山源治郎が加入。また10月にはギターの山根基嗣が加入して、高橋(Vo,B)、山根(G)、渡辺(Kbd)、片山(Ds)というライン・ナップとなった山水館は初期の頃のキーボード・トリオとは打って変わり、KISSやクィーンのようなハード・ロック・サウンドへ変身。

大阪のバハマや京都の拾得、サーカス&サーカスといったライブ・ハウスで活動を精力的に行ない、だるま食堂、ジャック・ダニエルといった1974～76年頃に関西で絶大的な人気を誇っていたバンド達に触発されて犇き合っていたアマチュアのハード・ロック・バンド達の中から山水館は飛び抜けた存在となる。

1978年5月に朝日放送テレビの「ハロー・ヤング・コンテスト」に出場し特別賞を受賞。波に乗った感のあった彼らだったが、10月にキーボードの渡辺が脱退し、サポート・メンバーとしてシェラザードの初代キーボードの青方とボーカルの五十嵐が参加してライブを行っていたが、バンドの体制が崩れ始めて行き、12月27日に大阪の御堂会館で行なわれたイベント「What's Rock Vol.7」(共演はジャック・ダニエル、フロマージュ、夢幻)に出演したのを最後に解散。高橋と山根はシェラザードの平山(G)、五十嵐(Vo)、永川(Kbd)、秋田(Ds)と共に1979年2月にノヴェラを結成と歩んで行き、ノヴェラとしてアルバムを3枚リリースした後の1982年1月に高橋、山根、秋田は、ノヴェラを脱退し、山水館のハード・ロック・サウンドを再び打ち出したアクションを結成した。

J.A.シーザー[J.A.SEAZER]

◀Member▶

J.A.シーザー　J.A.Seazer(G,Syn,Perc.etc.)

◀Discography▶

- ALBUM-「邪宗門(Jashumon)」(LP)VICTOR:SF-1021 '72★
- ALBUM-「国境巡礼歌(Resital)」(LP)VICTOR:SJX-130 '73★
- ALBUM-「阿呆船(Ship of Fools)」(LP)COLUMBIA:XX-7004 '77★
- ALBUM-「身毒丸(Shintokumaru)」(LP)VICTOR:SJX-20086 '78★
- ALBUM-「田園に死す(Denenni Shisu)」(LP)CBS:SOLL-100 '79★
- ALBUM-「邪宗門/身毒丸(Jashumon/Shintokumaru)」(LP)VICTOR:SJX-8097〜8 '83★
- ALBUM-「さらば方舟(Saraba Hakobune)」(LP)SMS:SM28-5409 '84★
- 7"EP-「首吊りの木(When Everybody's Going To Die)」CBS SONY:SONA-86120 '70★
- V.A.(LP)「書を捨てよ 町へ出よう(Shoosuteyo Machiedeyo)」(LP)CBS '70★
- V.A.(LP)「書を捨てよ 町へ出よう(Shoosuteyo Machiedeyo)」VICTOR:SJV-514 '71★
- V.A.(LP)-「書を捨てよ 町へ出よう(Shoosuteyo Machiedeyo)」(LP)天井桟敷:TENJ-99002 '71★
- CT-「奴婢訓(Directons To Servants)」ACRC:001★
- CT-「レミング(Lemmings)」ACRC:002★
- CT-「砂(Suna)」
- CT-「虹翔伝説」
- CT-「J.A.SEAZER」

J.A.シーザーは1970年にCBSソニーから「首吊りの木」というシングルでデビューした異色のアングラ・フォーク歌手であったが、寺山修司の劇団"天井棧敷"の演劇「東京零年」の為に"東京巡礼歌"などの曲を作曲し、(「東京零年」の為に書かれた"東京巡礼歌"と"1970年8月"は映画のサントラ盤「書を捨てよ町へ出よう」に収録されており、柳田ヒロ(Kbd)、角田ヒロ(Ds)、左石栄一(G/ex-頭脳警察&ファーラウト)、石川恵樹(B)が演奏している。)次第に劇団"天井棧敷"と密接な関係となって行き、(この頃の"天井棧敷"がプログレッシヴ・ロックへ果した役割は大きく、70年には「ブラブラ男爵」をフラワートラベリン・バンドに担当させたり、エイプリル・フール、ハプニングス4、柳田ヒロ・グループ、下田逸郎といった連中に音楽担当をさせていた。)1971年に公開された呪術劇「邪宗門」で全面的に音楽を担当し、演劇と共にライブ演奏をするスタイルが確立し、これ以降の"天井棧敷"の演劇及び寺山修司の映画などの音楽をほぼ一手に受け持つ事になった。1972年にはビクター・レコードよりアルバム「邪宗門」発売。1973年にはJ.A.シーザーのコンサートを収録したアルバム「国境巡礼歌/リサイタル」を同じくビクター・レコードより発売。1977年には演劇「阿呆船」のアルバムがコロンビア・レコードより、また78年には「身毒丸」がビクター・レコードから発売された。1972年の「邪宗門」から78年の「身毒丸」頃までのJ.A.シーザーのサウンドは初期のピンク・フロイドやちょっとマニアックな例になるがイタリアのヤクラを想わせる近代クラシックの手法を取り入れたアヴァンギャルドなプログレッシヴ・ロック・サウンドであり、鬼気迫る圧倒的なパワーと重厚なプログレッシヴ・ロックは他に追従を許さない世界を築き上げている。また、この頃のJ.A.シーザーはギターを始めとする弦楽器、エフェクト、パーカッション、シンセサイザーを曲によって使い分け、他にギターの森岳夫を始め、ドラムス、ベース、キーボード、ブラス・セクションといった編成によって演奏を行っていた。特に「邪宗門」と「阿呆船」が彼の最高傑作アルバムである。また、1978年にはキング・レコードから発売された友川かずきのアルバム「俺の裡で鳴り止まない詩」のバックをJ.A.シーザー・バンドで全面的に務めていたりもしていた。1979年にCBSソニーから発売された映画のサウンド・トラック・アルバム「田園に死す」あたりから、初期の頃に持っていた妖気迫るプログレッシヴ・ロックからソフィスティケイトされたサウンドへと変化し始め、1979年以降の彼の作品でプログレッシヴ・ロックと呼べる作品は見当たらなくなってしまった。なお、レコード会社から発売されたレコード作品の他に、劇団天井棧敷の公演の時に発売されていたカセット・テープ作品がディスコ・グラフィーの項に記載されているもの以外にも数多くある。

シェヘラザード[SCHEHERAZADE]

◀Member▶

和田　史和　Fumikazu Wada(Kbd) '80~'83
山田　雅弘　Masahiro Yamada(Kbd) '84,'90~ ref.VERMILION SANDS
真野めぐみ　Megumi Mano(Vo) ~'83 ref.ROSE BAND,INTERPOSE
蠟山　陽子　Yoko Rouyama(Vo) '84,'90~ VERMILION SANDS
佐藤　俊樹　Toshiki Sato(G) '84,'90~
藍　圭助　Keisuke Ai(G) '80~
木村　茂　Shigeru Kimura(B) ~'84
田中　稔　Minoru Tanaka(B) '90~ ex.I
相川　和彦　Kazuhiko Aikawa(Ds)

シェヘラザードはノヴェラの前身グループであったシェラザードとは別のグループで、こちらの方はブリティッシュ・トラッド・フォーク&プログレッシヴ・ロック・サウンドの東京のグループ。彼らはベースの木村を中心として1980年に結成され、1983年頃から都内のライブ・ハウス等でのライブ活動を開始。ライブ活動開始当初のメンバーはリーダーの木村(B)の他に和田(Kbd)、相川(Ds)、真野(Vo)、佐藤(G)というライン・ナップであったが、1984年にキーボードの和田に代わって山田が加入し、またボーカルの真野に代わって蠟山が加入。メロウ・キャンドルやイルージョン、ルネッサンスといったブリティッシュ・トラッド・フォーク&プログレ・バンドのコピーを中心としたライブでの演奏は東京の一部のマニアの間で話題を集めたが、1985年にシェヘラザードでやっていたサウンドを本格的なオリジナル・サウンドへ発展させようとした蠟山と山田が、ヴァーミリオン・サンズ結成の為に脱退し、シェヘラザードは活動停止。その後は蠟山、山田はヴァーミリオン・サンズとして現在でも活躍しているが、1990年4月に蠟山(Vo)、山田(Kbd)の2人がオリジナル・メンバーであったドラムスの相川、ギターの佐藤にアイを脱退したベースの田中稔、ギターの藍圭助を加えて現在、再びシェヘラザードとしてヴァーミリオン・サンズと平行して活動を始めた。

シェラザード［SCHEHERAZADE］

◀Member▶

平山　照継　Terutsugu Hirayama(G) ex.KIGADOMEI,ref.NOVELA,TERU'S SYMPHONIA

五十嵐　久勝　Hisakatsu Igarashi(Vo) ex.ZIGGY,ref.NOVELA,PUZZLE

大久保寿太郎　Jutaro Okubo(B) ref.SCHEHERAZADE II, FASION,STARLESS

引頭　英明　Hideaki Indo(Ds) '77〜'78 ref.SCHEHERAZADE II, FASION,PAGEANT

秋田　鋭次郎　Eijiro Akira(Ds) '78 ref.NOVELA,ACTION

青方　均　Hitoshi Aokata(Kbd) '77〜'78 ref.SCHEHERAZADE II, FASION

永川　敏郎　Toshio Egawa(Kbd) '78 ex.RUMBLE,FROMAGE,ref.NOVELA,GERARD,EARTH SHAKER

◀Discography▶

●CT-「Scheherazade Story」LUC '78★

●V.A.(CD)-「70' West Japanese Rock Scene」MADE IN JAPAN:MHD-25013 '91

シェラザードは言わずと知れたノヴェラの伝説的な前身グループであり、1977年の3月に神戸で結成された。結成のいきさつは、1976年の夏に飢餓同盟を脱退した平山照継(G)が神戸のあるスタジオに貼ってあった"ジギー"というグループのメンバー募集を見つけ連絡をした事から始まる。ジギーは五十嵐久勝(Vo)、大久保寿太郎(B)、前川欣也らがやっていたハード・ロック・バンドであり、ギターが脱退した為にメンバー募集を出してはいたが、平山が連絡を取った時にはほとんど解散状態で、ユーライア・ヒープのようなハード・プログレッシヴ・ロックをやりたかった大久保と関西の地元の先輩バンドであるだるま食堂や、とりわけ地元神戸でハード・プログレッシヴ・ロックの先駆的なサウンドをやっていて人気の高かった魔璃鴉(マリア)から影響を受けていた平山が意気投合して新しいバンド結成を計画、先ずジギーのボーカルの五十嵐を誘い、ドラムスには平山が高校2年生の時に参加していたブルース&ハード・ロック・バンド"週末放浪者集団"に参加していた事のある引頭英明、そしてキーボードには大久保の友人を通じて知り合った青方均が決まりリハーサルに入る。このバンドは始め"パンドラ"という名前であったが、シェラザードとすぐに改名。1977年5月に神戸大学の学園祭にてデビュー・ライブを行う。夏にはデモ・テープの為の録音を行い"鏡"、"シェラザードのテーマ"、"燃ゆる光"、"明日の影"、"悪魔が泳ぐ夢の国へ"(ノヴェラの3rdアルバム「パラダイス。ロスト」に収録されている"地球"の原曲)、"少年期"の6曲をレコーディング。後にノヴェラのマネージメントをするLUCの山田氏がシェラザードのマネージャーとなって本格的なライブ活動に入り、"ロック・イン六甲"などのイベントに出演し始めるが、1978年の始めにドラムスの引頭が脱退し代わってだるま食堂のドラマーであった秋田鋭次郎が加入。また4月にはキーボードの青方が就職を理由に脱退し、中嶋一晃とランブル、フロマージュをやっていた永川敏郎が加入。平山(G)、五十嵐(Vo)、大久保(B)、秋田(Ds)、永川(Kbd)というライン・ナップとなったシェラザードは大阪のバハマや京都のサーカス&サーカスといったライブ・ハウスを中心に活動を再開した。ハード・ロックを基盤にしながらも壮大なスケールを持ったシンフォニック・サウンドと物語性の強い歌詞は今までにない"プログレッシヴ・ハード"という音楽を確立し、彼らは地元で女の子を中心にして急激に人気を高めていった。78年夏にはロッキンf誌のテープ・コンテストの為のデモ・テープを制作し"少年期〜時の崖"、"涙の中へ"の3曲をレコーディング。9月16日にはヤマハの神戸センターで行われたイベント"ロック・エナジー"に出演(このイベントには山水館、アースシェイカー、ノイズ等が出演)、秋には数多くのライブをこなしたが、(ドラムスの秋田が骨折して、初代ドラマーの引頭が1ケ月間程、参加していた。)ボーカルの五十嵐が山水館のゲストとして活動し始めバンド内の体制が次第に崩れて行き、12月20日の大阪のバハマのライブを最後に解散した。またこの時期にロッキンf誌のテープ・コンテストに応募したデモ・テープがグランプリに決まり、シェラザードと共に時を同じくして解散した山水館のベースの高橋良郎、ギターの山根基嗣とシェラザードの平山、永川、五十嵐、秋田が話し合いを行い、シェラザードを引き継いで行くグル

ープとして1979年の2月にノヴェラを結成した。
なを、ベースの大久保は先にシェラザードを脱退した初代ドラマーの引頭とキーボードの青方均らを誘い、1979年の初めにシェラザードIIを結成したが、ライブを2回したのみで短命に終わり、1980年に大久保、引頭、青方にフロマージュをやっていた中嶋一晃(G)らを加え、テクノ・ポップ・グループ"ファッション"を結成。その後、引頭は中嶋一晃が結成したページェントに加入。大久保は1984年にスターレスを結成した。

シェラザードII[SCHEHERAZADE II]

◀Member▶

大久保寿太郎 Jutaro Okubo(B) ex.SCHEHERAZADE,ref.STARLESS,FASION
青方　均 Hitoshi Aokata(Kbd) ex.SCHEHERAZADE,ref.FASION
松山　マサキ Masaki Matsuyama(Vo) ex.SILVIA,ref.STARLESS
奥田　正一 Shoichi Okuda(Vo) ex.RUNBLE
尾崎　努 Tsutomu Ozaki(G)
引頭　英明 Hideaki Indo(Ds) ex.SCHEHERAZADE,ref.FASION,PAGEANT

1978年暮れに解散したシェラザードは、平山(G)、五十嵐(Vo)、秋田(Ds)、永川(Kbd)の4人に時期を同じくして解散した山水館の高橋(B)、山根(G)を加えてノヴェラを結成したが、ベースの大久保寿太郎は第一期シェラザードのメンバーであったキーボードの青方均とドラムスの引頭英明、シルヴィアというハード・ロック・グループに在籍していたボーカリストの松山マサキとギターの尾崎努を誘い、1979年初めにシェラザード IIを結成。シェラザード時代のナンバーに、キーボードの青方が作曲するハード・プログレッシヴ・ロック・ナンバーを加えて演奏していた。シェラザード IIはデビューライブを大阪のバハマで1979年春に行ったが、バンドは短命に終わり、結局、2回のライブを行っただけで半年間程で解散。大久保、引頭、青方の3人はフロマージュをやっていた中嶋一晃らと共に1980年にプログレッシヴなテクノ・ポップ&ロック・バンドであったファッションを結成。ファッションも短命に終わり、大久保はスターレス結成へ。引頭は中嶋一晃が結成したページェントへと参加。またシェラザード IIの初代ボーカリストの松山はベラフォンの前身グループとなったスターレス(※大久保が結成したハード・プログレ・バンドのスターレスとは別グループ)へ加入した。

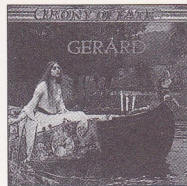
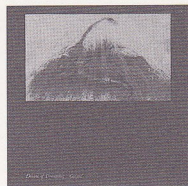
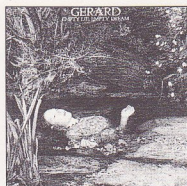
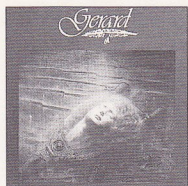
ジェラルド[GERARD]

◀Member▶

永川　敏郎 Toshio Egawa(Kbd) ex.RUMBLE,FROMAGE,NOVELA,ref.EARTH SHAKER
藤村　幸宏 Yukihiro Fujimura(Vo,G) ref.VIENNA,DED CHAPLIN
魚谷　泰正 Yasumasa Uotani(B) '84~'86 ex.DEVILS
永井　敏己 Toshimi Nagai(B) '90~ ex.FOUR,AFFLATUS,VIENNA,ref.DED CHAPLIN,GRAY
谷本　正樹 Masaki Tanumoto(Ds) '84~'86 ex.DARAKUTENSHI
五十嵐公太 Kota Igarashi(Ds) '90~ JUNIHITOE,TV

〈GUESTS〉

川田　洋平 Yohei Kawada(B)①
佐藤　正治 Masaji Sato(Ds)①

◀Discography▶

- ALBUM-「Gerard」(LP)NEXUS:K28P-424 '84★/(CD)CRIME:K32Y-2125 '88①
- ALBUM-「虚実の城(Empty Lie,Empty Dream)」(LP)NEXUS:K28P-544 '85★/(CD)CRIME:K32Y-2126 '88
- ALBUM-「夢の中の夢(Dream Of Dreaming)」(Mini LP)NEXUS:K18P-569 '85★
- ALBUM-「Irony Of Fate」(CD)CRIME:KICP-90 '91

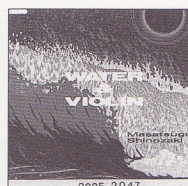
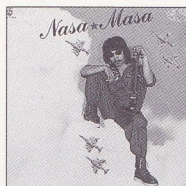
ジェラルドはランブル、フロマージュ、シェラザード、ノヴェラと関西プログレを代表するバンドを歩んできたキーボードの永川敏郎が結成したグループ。第Ⅰ期ノヴェラ=平山(G)、五十嵐(Vo)、永川(Kbd)、高橋(B)、山根(G)、秋田(Ds)による3rdアルバム「パラダイス・ロスト」が81年12月に発売され、翌年の1月22日に大阪の毎日ホールで行なわれた"ジャパン・ヘビーメタル・ファンタジーVol.2"(共演:ラウドネス、5X)に出演後、高橋、山根、秋田がアクション結成の為に脱退。ノヴェラは活動停止を余儀なくさせられ、新しいメンバー捜しを始め、ドラムスに元ソフィアの西田竜一とベースに笹井りゅうじが決定しリハーサルを重ねていた頃、あくまで関西に留まり活動を続けて行くノヴェラの方針に対して、永川は東京で活動するという気持ちが大きくなり始め、自らのグループ結成を計画して82年10月に笹井りゅうじ(Vo&B)、山根元嗣(G)、井上慎二郎(Ds/後にマグダレーナに参加)に手伝ってもらい最初のデモ・テープ作りを行なう。11月に第2期ノヴェラでの1stアルバム=通算4枚目「サンクチュアリ」のレコーディングを行った翌年1月に墜落天使というハード・プログレ・バンドでドラムスをやっていた谷本正樹と笹井の3人で2度目のデモ・テープを制作し自らのグループ名をジェラルドと決め、ジェラルドの母体が出来上る。83年3月にアルバム「サンクチュアリ」発売と発売記念コンサートを大阪毎日ホールと芝郵便貯金ホールで行なうと直ぐに、永川はドラムスの谷本を連れて東京に上京。ノヴェラ脱退とジェラルド結成の決意を固め、東京でベースとギターのメンバー捜しを始める。上京してきて直ぐの4月にノヴェラのアルバム「最終戦争伝説Ⅰ」のレコーディングに参加。本城未沙子のレコーディングを通じて二井原実から元クリエーションのアイ高野のグループであるビーハイブでギターをやっていた藤村幸宏を紹介されジェラルドのメンバーに決定。6月に永川は藤村(Vo、G、B)、谷本(Ds)の3人で3度目のデモ・テープを制作。また友人からの紹介でデビルスをやっていた魚谷泰正(B)がメンバーとして決定する。永川は9月にミニ・アルバム「シークレット・ラヴ」と「Unreleased Tracks」のレコーディングをした後、その時ちょうどノヴェラのメンバーのソロ・アルバムの企画が持ち上がり、平山と五十嵐のソロ・アルバムと同様にソロ・アルバム・シリーズの一貫として永川のジェラルドも発売が決定し、プロデューサーのたかみひろし氏の提案で元美狂乱の伝説的なドラマーの佐藤正治、フォノジェニックスのベースの川田洋平をゲストに加えてレコーディングを行ない、このレコーディング中に永川(Kbd)、藤村幸宏(Vo、G)、魚谷泰正(B)、谷本正樹(Ds)の4人で正式にジェラルドを結成。1984年2月27日の中野サンプラザと2月21日の大阪厚生年金ホールで行なわれたノヴェラのライブを最後に正式にノヴェラを脱退し、ジェラルドに専念。表向きには永川のソロ・アルバムとして発売されたジェラルドの1stアルバム「Gerard」が3月にキング・レコードのネクサス・レーベルから発売され、デビュー・ライブが3月24、25日に東京目黒鹿鳴館、3月30、31日大阪キャンディーホールにて超満員のもと行なわれた。ジェラルドのサウンドは永川のジェネシス、UKといったプログレ指向を反映したものであり、ノヴェラと同様にハード・プログレッシヴ・ロックを基盤としながらも、ノヴェラよりキーボードをフィーチャーしたプログレッシヴ・ロック・サウンドを持っていた。また演奏面に於いては谷本、魚谷のリズム隊に難があれど、日本のプログレ界を代表するキーボード奏者である永川の卓越したプレイと藤村のソリッドなギタープレイとギタープレイとは対照的なバラード・ナンバーでの甘く切ないボーカル・ワークによってプログレ・ファン、特にノヴェラの女性ファンから大きな期待を担ってのデビューであった。ジェラルドはプロダクションに所属せず自分達の力で1ヶ月に1〜2回のペースでライブ・ハウスに於いて精力的なライブ活動を行ない、1984年12月の大晦日の夜中に大阪キャンディーホールで行なわれたプログレのオール・ナイト・イベント"プログレッシヴ・ナイト"にミダス、剣の舞、スターレス、パズル、ソフイア、ページェント、EVEと共に出演。年が明けた85年1月〜2月にかけて2ndアルバム「虚実の城」とミニ・アルバム「夢の中の夢」のレコーディングを行ない2ndアルバム「虚実の城」は5月に発売された。この頃のジェラルドのライブ活動の場は東京では目黒鹿鳴館から渋谷のエッグマンに移し、また大阪はキャンディーホールで相変らず精力的に活動を行なっている。10月にはミニ・アルバム「夢の中の夢」発売。その頃盛り上ってきたプログレッシヴ・ロックを更に発展させようとして渋谷エッグマン、横浜ビブレ、名古屋エレクトリック・レディランド、大阪キャンディーホールの4つのライブ・ハウスの合同企画で1985年の11月9日〜20日の

12日間に各所で延べ20日、出演グループ総勢19バンドに及ぶプログレ最大のイベント"プログレッシヴ・サーキット"が開催され、ジェラルドもこのイベントの主役の一つとして4ヶ所のライブ・ハウスに参加、ジェラルドの中で最も充実した時期を迎えたが、1986年3月12、13日の大阪キャンディーホールでのライブを最後にかねてから演奏技量に問題のあった谷本、魚谷のリズム隊が脱退し活動停止。リズム隊を捜したが良い人材がおらず、またキング・レコード・サイドもスターレス、ソフィアなどをリリースしたネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズの失敗によってプログレはもう制作しないという方針となってしまい、結局バンドは自然消滅。キーボードの永川は86年夏に、以前からライブ・サポートをしていたハード・ロック・バンドのアースシェイカーに正式加入し、藤村はセッション・マンとして活動に入ったが、87年の春頃に"プログレ界のスーパーバンドを作ろう"というメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノの呼びかけで、藤村はノヴェラを脱退したドラムスの西田竜一、アウターリミッツのキーボードの塚本周成とギターの荒牧隆(ベースを担当)、ページェントのギターの中嶋一晃らとヴィエナを結成。1988年の1月には藤村(G)、塚本(Kbd)、永井(B)、西田(Ds)というライン・ナップとなり、ヴィエナは5月にレコード・デビューしてアルバムを2枚制作し、ファンの大きな期待に応えて素晴らしいグループとして活躍。また12月にはヴィエナの藤村、西田;永井に永川の4人で再現ジェラルド・ライブを渋谷のエッグマンで行った。しかし、ヴィエナは翌年1月に解散し、藤村はラウドネスを脱退したボーカルの二井原実と元ヴィエナの永井敏巳(B)、ブラック・ペイジの管沼孝三(Ds)と共にデッド・チャップリンを結成し現在も活躍しているが、1989年の暮れに永川敏郎が再びジェラルドを活動させ、新作アルバムを制作する事を計画し、1990年7月にオリジナル・メンバーである永川敏郎(Kbd)とデッド・チャップリンと平行して参加した藤村幸宏(Vo、G)にヴィエナ、デッド・チャップリンと藤村と一緒に活動を行っている永井敏巳(B)、十二単、TVと活動し現在はTHE HEARTのサポート・メンバーをしている五十嵐公太(Ds)というライン・ナップで4年振りにジェラルドを正式に再結成し、現在は新作アルバム「アイロニー・オブ・フェイト」のレコーディングを行っている。ヴィエナ解散後の現在のプログレ・シーンにとってこのジェラルドの再結成は久し振りの大物バンド登場として大いに期待されている。

篠崎正嗣[MASATSUGU SHINOZAKI]

◀Member▶

篠崎　正嗣　Masatsugu Shinozaki(Vln)

◀Discography▶

- ●ALBUM-「Nasa=Masa」(LP)WEA:M-11008 '80★
- ●ALBUM-「蛍川(Hotarugawa)」(LP)NEXUS:K28P-644/(CD)NEXUS:K32Y-2036 '86
- ●ALBUM-「Glass Violin」(CD)NEXUS:K32Y-2121/(LP)K32X-2121 '88
- ●ALBUM-「Water&Violin」(CD)NEXUS:292E-2047 '89
- ●ALBUM-「G線上のアジア(Asia On "G" String)」(CD)NEXUS:KICP-73 '90
- ●ALBUM-「Profile(※Best)」(CD)KING:DCY-90092 '90(Promo)

篠崎正嗣は1967年に桐朋学園音楽科を中退して、スタジオ・ミュージシャンとしてスタート。1980年にワーナーパイオニアからソロ・デビューアルバム「NASA=MASA」を発表。このアルバムは平均的なロック&フュージョン・サウンドであったが、1986年に映画「蛍川」の音楽を担当し、アルバム「蛍川」をキング・レコードから発表。このアルバムはヴァイオリンの他に胡弓も使用し、オリエンタルなニューエイジ・サウンドから、ジャン・リュック・ポンティーあたりのヴァイオリンをフィーチャーしたプログレッシヴ・ロック・サウンドまで聴かせる好アルバムであった。その後、篠崎正嗣はキング・レコードでアルバム「グラス・ヴァイオリン」、「ウォーター&ヴァイオリン」、「G線上のアジア」とソロ・アルバムを発表。これらの作品はアルバム「蛍川」のサウンドを基本としながらも、作品を発表する毎にアコースティック楽器によるオリエンタルなニュー・エイジ・ミュージック色が強くなって行った。また1989年には玉木宏樹、中西俊博という2人のヴァイオリニストと共にアルバム「Le Mistral」というアルバムを発表したり、

「ラスト・エンペラー」、「異人たちの夏」、「遺産相続」などの映画の音楽担当、山本寛斎やコシノ・ジュンコ等のファッション・ショーや幾つかのCMなども手掛けている。

ジャンキーズ[JANKEES]

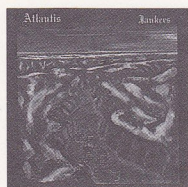
◀Member▶

太田　一史　Kazushi Ota(Vo,G,B)

米谷　達也　Tatsuya Yoneyatani(B,Kbd)

佐藤　克哉　Katsuya Sato(Ds)

ステッフェン・H・ウィットニー　Stephen H.Whitney(Vln)

◀Discography▶

●ALBUM-「Atlantis」(LP)FOUR SEASON:1001 '87★

●CT-「The Wizard」★

東京大学のフォーク・ソング研究会といえば、ネガスフィアのリーダーの川崎薫やフライング・ティー・カップなど代々UKタイプのサウンドを持つプログレ・バンドを輩出して来ているが、このジャンキーズも米谷(B,Kbd)、太田(Vo,G)、佐藤(Ds)の3人によって1984年12月に東京大学のフォーク・ソング研究会内で結成されたUKタイプのトリオ編成のグループ。'85年頃は大学のサークル内でのライブ活動のみであったが、1986年3月にデモ・テープ「The Wizard」を制作して4月にシルバーエレファントにて正式なライブ・デビュー。1986年11月にはヴァイオリン奏者のステッフェン・H・ウィットニーを加え、1987年8月に自らの自主制作でアルバム「アトランティス」を発表。UK的なプログレッシヴ・ロックをベーシックとしてポップ色も加味されたTAOあたりに近いサウンドを持っていた。

シュール・モア[SURREAL MORE]

シュール・モアは1978年〜80年頃にかけて高円寺にあったライブ・ハウス"Red House II"等に出演していたアンダーグラウンドな存在のグループ。彼らはボーカルにダブル・ギター、ベース、ドラムスというキーボード・レスの5人編成であり、和旋律を取り入れた後期クリムゾン的なサウンドを、古語を巧みに用いて"大和を想う心"を表現した歌舞伎スタイルのボーカルとロバート・フリップ・タイプのギターワークの対比によって聴かせる個性的なサウンドを持つグループであり、マイナーな存在ではあったが、高度な演奏テクニックに支えられた素晴らしいサウンドは高く評価すべきものであった。特に彼らのナンバーの中で"いくさ旅"や"首をとれ"は傑出した作品であった。

ジュテーム[JETAIME]

◀Member▶

藤原　和也　Kazuya Fujiwara(G)

山田じゅん　Jun Yamada(Vo)

後藤史守男　Shizuo Goto(B)

竹中　辰夫　Tatsuo Takenaka(Ds)

◀Discography▶

●V.A.(CD)-「Prospective Faces II」MADE IN JAPAN:MCD-3207 '89

ジュテームはページェントやノヴェラから影響された岐阜のハード・プログレッシヴ・ロック・グループで、特にギターの藤原がページェンとの中嶋一晃から多大な影響を受けており、ページェントのナンバーなどもライブで演奏している。彼らは地元のライブ・ハウスで地道に活動しており、1989年にはメイド・イン・ジャパン・レコードから発売されたオムニバスCD「プロスペクティブ・フェイセスII」に一曲参加している。

シュヴァルツ[SCHWARZ]

◀Member▶

吉岡　真文　Mabumi Yoshioka(Kbd)
長坂　　勉　Tsutomu Nagasaka(G)
福本　達磨　Tatsuma Fukumoto(B)
上面　博史　Hiroshi Jomen(Ds)

◀Discography▶

●CT-「言葉のない物語」(Kotobanonai Monogatari) '91

シュヴァルツは1988年12月に北海道大学の軽音サークル内で結成された札幌の新鋭グループで、1989年11月にライブ・ハウス"ペニー・レイン"でライブ・デビュー。キーボードの吉岡のブリテッシュ&イタリアン・プログレから影響されたクラシカルなキーボード・プレイと、ディープ・パープルやレインボーといったブリティッシュ・ハード・ロック色を強く打ち出したギターとリズム隊が混然一体となったハード・プログレッシヴ・サウンドを持っており、またハード・プログレッシヴ・ロックなのにもかかわらず、全編ボーカルレスのインストゥルメンタル・サウンドなのもシュヴァルツの大きな特徴であり、イタリア系のヘビープログレやハンガリーのソラリスを想わせる重厚なサウンドとまとまりのある演奏力は新人グループながら、プロビデンス、オーガストに続く札幌第3のグループとして今後の成長が大きく期待されている。彼らは91年1月にデモ・カセット「言葉のない物語」をリリースしている。

シルフィード[SYLPHIED]

◀Member▶

上原　由美　Yumi Uehara(Vo)ref.SIREEN
矢部　　翠　Midori Yabe(G)ref.SIREEN

東京のレディース・ハード・プログレッシヴ・ロック・グループのシルフィードとは同名別グループで、このシルフィールドはアンダーグラウンドな存在の関西のハード・プログレッシヴ・ロック・グループで、関西のレディース・ポップ&プログレッシヴ・ロック・グループのセイレーンのボーカルの上原とギターの矢部がセイレーン加入以前に在籍していたグループ。女性ボーカルにギター、ベース、キーボード、ドラムスという編成のアマチュア・レベルの平均的なハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドであった彼らの活動は短く、1984年頃に数回ライブを行ったのみで解散した。

ジゼル[GIZEL]

◀Member▶

八田みゆき　Miyuki Yata(G) ex.SYLPHIED
佐藤　仁代　Kimiyo Sato(Kbd) ex.SYLPHIED,ref.I
柴田　伸子　Shinko Shibata(B) '84~'85 ex.SYLPHIED
小倉　美香　Mika Ogura(B) '85~'86
柴田　実子　Miko Shibata(Ds) '85~'86
藤森さえ子　Saeko Fujimori(Ds) '84~'85 ex.SYLPHIED
ジル　Zill(Vo) '84~'85
結城利江子　Rieko Yuki(Vo) '85~'86

ノヴェラに憧れていた八田みゆき(G)は女の子によるノヴェラのコピー・バンドを結成する為にプレイヤー誌でメンバー募集を行い、佐藤仁代(Vo)、柴田伸子(B)、藤森さえ子(Ds)、熊谷桂子(Kbd)が集まって1983年4月にシルフィードを結成。メンバー全員、ノヴェラのファンであり、純粋にノヴェラのコピー・バンドであった彼女達は渋谷屋根裏などでライブ活動を行っていたが、より本格的にオリジナル・ナンバーを演奏するバンドを作ろうとして1984年7月にシルフィードを解散して、ギターの八田、ベースの柴田、ドラムスの藤森にシルフィードではボーカルを担当していた佐藤がキーボードとなり、ボーカルにジルを加えてジゼルを結成。(なおシルフィードのキーボードの熊谷はレディース・キーボード・トリオのアルス・ノヴァに加入。)1984年冬に渋谷のラ・ママでデビューライブを行ったが、1985年5月に八田、佐藤の2人のメンバーを残してメンバーチェンジを行い、結城(Vo)、小倉(B)ベースの柴田の妹の柴田実子(Ds)が新加入して再スタート。ノヴェラ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロックをやるレディース・グループとして唯一の存在であり、またアルス・ノヴァと共に東京のレディース・プログレ・グループの先駆的な存在であったが、1986年2月の鹿鳴館のライブを最後に、より本格的にプログレッシヴ・ロックを追求しようとしたキーボードの佐藤が脱退して解散。キーボードの佐藤は元シルフィードのベースの柴田らとのセッションを経て、1988年にアイに加入して現在でも活動中である。

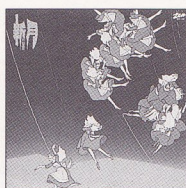
新月[SHINGETSU]

◀Member▶

北山　真　Makoto Kitayama(Vo) ex.SERENADE
花本　彰　Akira Hanamoto(Kbd) ex.SERENADE,ref.PHONOGENIX,ASTURIAS
津田　治彦　Haruhiko Tsuda(G) ex.HAL,BELLADONNA,ref.PHONOGENIX,ASTURIAS
高橋　直哉　Naoya Takahashi(Ds) ex.HAL,BELLADONNA,ref.ACQUAPOLIS
桜井　良行　Yoshiyuki Sakurai(B) '77 ex.HAL,SERENADE,ref.AQUAPOLIS,NOA
鈴木　清生　Shizuo Suzuki(B) ex.SERENADE
遠山　豊　Yutaka Toyama(G) '78
<GUESTS>
小久保　隆　Takashi Kokubo(Kbd) ref.BACH REVOLUTION

津田　裕子　Yuko Tsuda(Kbd)

清水　一人　Kazuto Shimizu(Kbd)'80 ref.KILLING TIME

◀Discography▶

●ALBUM-「新月(Same)(LP)ZEN:1009 '79★
/Re-issued(LP)MADE IN JAPAN:MHL-28001 '89/(CD):MHD-32001 '89

〈MAKOTO KITAYAMA SOLO〉

●「動物界之智嚢(Dobutsukainochinou)」SNOW:SN-1

日大芸術学部音楽学科に通っていたキーボードの花本彰を中心として北山真(Vo)、高津昌之(Vo、G)、鈴木清生(B)、小松(Ds)らによって1975年に結成された日本初の本格的なユーロピアン・スタイルのシンフォニック・ロック・グループであったセレナーデのサウンドをより発展させ、よりレベルの高いバンドを目指して、リーダーの花本彰は以前より交流があり、ロシア近代クラシックの和声を取り入れたプログレッシヴ・ロック・サウンドのHALと中期以降のゴングやブランドX風のカンタベリー系ジャズ・ロックをやっていたベラドンナのギタリストの津田治彦と意気投合。当時、津田が通っていた青山学院大学の学食でミーティングを重ね、互いにやっていたセレナーデ、HAL、ベラドンナを総合させてレベルの高いプログレッシヴ・ロック・バンドを結成する事を決意し、セレナーデから花本彰(Kbd)と桜井良行(B)、HAL&ベラドンナから津田治彦(Vo&G)と高橋直哉(Ds)、そして遠山豊(Vo&G)の5人が集まり、1976年の暮れに新月を結成。東京の板橋区成増にある知人のスタジオで週4日で半年以上リハーサルを重ねて、1977年の夏に渋谷屋根裏に於いてデビューライブを行なう。結成時に参加していたベースの桜井良行はすぐに脱退して、元破天荒、後にマンドレイクに参加するベースの阿久津徹が一時期参加していたが、1978年にセレナーデに在籍していてその後はカレイド・スコープで活動していたベースの鈴木清生が加入。渋谷屋根裏や江古田のマーキー等のライブ・ハウスを中心としてライブを重ねて、次第に実力を上げて行った彼らはボーカルを強化する為にセレナーデのボーカリストであった北山真を誘い、1978年秋に北山が加入。1978年11月25日に御茶ノ水全電通ホールでフールズ・メイト誌とオムニ・プロダクションの主催で行われた"From The New World"というイベントに美狂乱、ガラパゴス、目合、UNIT Xらと共に出演。日本的な情景を織り混ぜた物語性の強いコンセプトを持つ歌詞とジェネシスや初期のクリムゾンの叙情性を強く打ち出したシンフォニック・ロック・サウンドを津田治彦のスティーヴ・ハケット張りの多彩なギターワークと花本彰の華麗なキーボード・プレイ、鉄壁なリズム陣による高度な演奏技術で表現された彼らのサウンドは素晴らしく、また劇団「インカ帝国」で演劇を学び、ピーターガブリエルから影響されたボーカルの北山の曲の場面に応じた衣装の早換りやベンチ、電話、モンスターマスク、能面などのありとあらゆる小道具を用いたステージ・パフォーマンスは話題を呼び、フールズ・メイト誌が盛んに彼らを取り上げげた事によって、一部のプログレ・マニアの間で絶大な評価を得るようになり、先進的な音楽をリリースする為にビクター・レコード内に新設されたZENレーベルと契約を交わし、1979年4月～5月にかけて箱根ロックウェル・スタジオで300時間以上を費してアルバムのレコーディングを行った。このレコーディング時間量は四人囃子の「ゴールデン・ピクニックス」などの一部のレコードを除き、日本のプログレッシヴ・ロックのレコーディングとしては破格の好条件であり、演奏、アレンジ、ミックスの全てに渡り完成度の高い作品に仕上った。特にアルバム・トップを飾る"鬼"は日本のプログレッシヴ・ロック史上に於いて名曲中の名曲であり、アルバムも日本のプログレッシヴ・ロックを語る上で欠かせない名盤である。この彼らのデビューアルバムは1979年7月25日に発売され、7月25日と26日の2日間に渡って東京の芝ABC会館ホールに於いて発売記念コンサートを行った。ボーカルの北山が自分達のステージに対する価値観を某ミニコミ誌で「1に照明、2に舞台セット、3にPAで最後に演奏」と語っているように新月はステージでのよりパーフェクトな表現を追求し、以前からの北山のパフォーマンスに加えてステージ上に巨大な三面マルチ・スクリーンまで持ち込んで行なわれたこのコンサートは高く評価された。またこの頃の新月のステージでは、レコーディング直前に脱退し、マネージャーに転向したボーカル&ギターの遠山に代わって、バッハ・リヴォリューションのキーボードの小久保隆や津田治彦の妹の津田裕子(Kbd)らのサポート・メンバーを加えた編成で演奏していた。当時のビクターレコードは新月を強く売り込む為にABC会館でのコンサートをビデオ撮影して"鬼"、"せめて今宵は"そしてビクターレコードのスタジオでレコーディングされたLP未収録曲の"少女"の3曲のプロモーション・ビデオも制作して彼らをプッシュしたが、1979年12月14日にビクターミュージック・プラザで行われたフールズ・メイト主催のイベント"科学の

夜”に美狂乱と共に出演した後に、彼らのプロダクションであった箱根ロックウェルが経営不振を理由に倒産し、すでに計画中であった2ndアルバムのレコーディングは中止され、1980年春にキリング・タイムのキーボードの清水一人をサポート・メンバーに加えて吉祥寺シルバーエレファントのライブを終えると、ジャズ・ロック指向の強い鈴木、高橋のリズム隊と抒情派プログレ指向の花本、北山の音楽性の違いとプログレッシヴ・ロックをいつまでもやっていても売れないという商業的な問題の為に解散に追い込まれてしまった。新月解散後、キーボードの花本とギターの津田の2人はフールズ・メイト誌の編集長であり、現在YBO²などで活躍している北村昌士と共にフォノジェニックスを結成。自主制作で12インチ・シングルとカセット・テープ、バップ・レコードからアルバム1枚をリリース。現在ではマルチ・プレヤーである大山曜のプロジェクト・グループ“アストゥーリアス”に2人共参加しており、キング・レコードのクライム・レーベルよりアルバム2枚をリリース。また、このアストゥーリアスのデビューライブ(1988年8月/吉祥寺シルバーエレファント)では北山真をゲストに加えて、新月の名曲の“鬼”を演奏した。ボーカルの北山真は新月解散後、劇団インカ帝国で活動し、自主制作カセット「動物界之智嚢」を発表していたが、現在では音楽活動は行っていない。ドラムスの高橋は一時期アクア・ポリスに参加していた。

新月というグループは四人囃子、コスモス・ファクトリー、ファーイースト・ファミリー・バンドといった当時の流行音楽の一貫としてプログレッシヴ・ロックを取り入れたプログレ第Ⅰ世代のグループ達のサウンドとは一線を引く、本格的なユーロピアン・スタイルのシンフォニック・ロック・サウンドを日本で初めて確立したグループであり、70年代末〜80年代にかけて日本のプログレッシヴ・ロック・サウンドが本格的にそして多様化して行った先駆けとなった存在のグループであった。そしてまた、新月は歌詞のコンセプト、サウンド、演奏技術、ステージでの表現力の全ての点に於いて完成され、日本のプログレッシヴ・ロックの頂点に立つグループであったのだ。

シンデレラ・サーチ[CINDERELLA SEARCH]

◀Member▶

仲村　明恒　Akihisa Nakamura(Vo)
横山　勝将　Katsumasa Yokoyama(G)
市原　敬志　Takashi Ichihara(Kbd)
加藤　　修　Osamu Kato(B)
山下ひろし　Hiroshi Yamashita(Ds)
蓑部　純子　Junko Minobe(Vln)

◀Discography▶

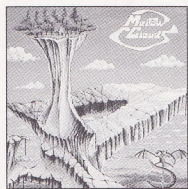
●CT-「Cinderella Search」’91

シンデレラ・サーチはボーカルの仲村のピーター・ガブリエルやマリリオンのフィッシュに傾倒している衣装とメイク、ステージングで注目を浴びている東京の新鋭シンフォニック・ロック・グループで、当然サウンドの方もマリリオンやジェネシスにかなり近い。シンデレラ・サーチはもともとボーカルの仲村がマリリオンやラッシュのコピーバンドとして1986年10月に結成したが短命に終わり、仲村はジェネシスの完コピ・バンドであったワードローブを経て、加藤(B)、横山(G)、村岸(Kbd)、関(Ds)と共に1988年10月にマリリオンのコピーバンドであるグレンデルを結成。そしてこの学園祭バンドであったグレンデルを母体として1989年4月にオリジナルをやるバンドとしてシンデレラ・サーチを再び結成。オリジナル・メンバーはグレンデルの仲村(Vo)、横山(G)、加藤(B)の他に杉山(Kbd)と清水(Ds)というライン・ナップであったが、現在はキーボードに市原、ドラムスに山下、そして女性ヴァイオリニストである蓑部が参加している。テクニック、サウンドはまだまだ発展途上であるが現在、シルバーエレファントに出演中の若手グループとして期待されている。

白川ヨシノブ[YOSHINOBU SHIRAKAWA]

◀Member▶

白川ヨシノブ　Yoshinobu Shirakawa(Syn)

◀Discography▶

●ALBUM-「Mellow Clouds」(LP)TOEN:1001 '88★

白川ヨシノブは1988年に自らの自主制作でアルバム「Mellow Clouds」を発表しているシンセサイザー奏者で、彼のこの作品は彼の手によってプライベート・レコーディングされたもの。サウンドの方はメロディアスなシンフォニック・シンセミュージックである。なお、このアルバムは限定100枚のみプレスされたもので、ごく一部の輸入盤店で発売されていた。

ショック[SHOCK]

◀Member▶

竹中　尚人　Naoto"Char"Takenaka(G) JONNY LOUIS&CHAR ref.SMOKY MEDICINE,PINK CLOUD

佐藤　　準　Jun Sato(Kbd) ref.SMOKY MEDICINE

藤井　章司　Shoji Fujii(Ds) ref.SMOKY MEDICINE,BEMI FAMILY,IPPUDO

ショックはチャーがスモーキーメディスン以前にやっていたハード・プログレッシヴ・ロック・グループであり、スモーキーメディスンの母体ともなったグループ。メンバーはスモーキーメディスンを経てアレンジャーとして活躍するキーボードの佐藤準、スモーキーメディスンの後にベミ・ファミリーを経て一風堂に参加するドラムスの藤井章司、そしてチャーといった顔ぶれであった。ショックは1970年〜72年頃まで活動していたが、1972年の暮れにカルメン・マキ&OZのオリジナル・ベーシストであった鳴瀬喜博を加え、ブルース・ロック・バンド"スモーキーメディスン"を結成した。

スキャンドール[SCANDOLL]

◀Member▶

猪上　一郎　Ichiro Inoue(G)

梶谷　陽祐　Yosuke Kajitani(B,Kbd)

長谷　克彦　Katsuhiko Hase(Ds)

田中　尚一　Naokazu Tanaka(Vo,Kbd)

◀Discography▶

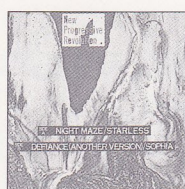
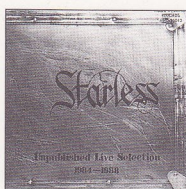
●CT-「おやすみなさい(Oyasuminasai)」'86★

スキャンドールは1985年頃に京都で結成されたマイナーな存在のハード・プログレッシヴ・ロック・グループで、1986年にデモ・テープ「おやすみなさい」をライブ会場のみで発売。初期ノヴェラ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドをより、ブリティッシュ・ハード・ロックとシンフォニック・プログレ色を強調したサウンドと曲作りはマイナーな存在ながら素晴らしく、また演奏面に於いても安定したテクニックを持っていた好グループであり、関西ハード・プログレのアンダーグラウンド・シーンの中でルシフェルと共に評価をすべきグループであったが、1987年頃にはハード・プログレ色が薄くなり、ハード・ロック・グループへと変身し、たいした活動もないままに自然消滅してしまった。

スターレス[STARLESS]

◀Member▶

宮本　佳子　Yoshiko Miyamoto(Vo)'84〜'87 ex.LUCIFER,ref.4LDK
西垣　宏子　Hiroko Nishigaki(Vo)'88
中川　隆雄　Takao Nakagawa(G) ex.SNAKE CHARMER
堀江　睦男　Nobuo Horie(Ds) ex.SNAKE CHARMER,ref.TERRA ROSA,WOLF
上村　禎徳　Yoshinori Kamimura(Kbd) ex.ANRAKUSHI
大久保寿太郎　Jutaro Okubo(B) ex.SCHEHERAZADE,SCHEHERAZADEII, FASION

◀Discography▶

●ALBUM-「銀の翼(Silver Wings)」(LP)NEXUS:K28P-596 '86★/(CD)CRIME:280E-2055 '90
●7″ EP-「Night Maze(Side B:SOPHIA)」NEXUS:7SSY-15 (Promo) '86
●CT-「Welcome To The Starless World」'84★
●V.A.(VIDEO)-「Gal's Paradise」vos:4509 '88★
●ALBUM-「Unpublished Live Selection」(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25012 '91

ノヴェラの前身グループとなったシェラザードのベーシストの大久保寿太郎は、シェラザードII、クライシスト、ファッションを経て、ディープ・パープルやレインボーといったブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドを母体としたバンド結成を計画し、1984年2月にキングダムというハード・ロック・バンドに在籍していたギターの中川隆雄、大谷令文らとスネーク・チャーマーというハード・ロック・バンドをやっていたドラムスの堀江睦男、マグダレーナの前身グループであった安楽死に一時期在籍していたキーボードの上村禎徳、ルシフェルというハード・プログレ・バンドに在籍していた女性ボーカルの宮本佳子(=ジュラ)というライン・ナップが集まり、スターレスを結成。1984年5月に大阪キャンディーホールでデビューライブを行なう。(共演はソフィア)デビュー後、大阪キャンディーホールを中心として精力的にライブ活動を行なったスターレスは12月31日にキャンディーホールで行なわれたイベント"Progressive Night"にミダス、剣の舞、ジェラルド、ソフィア、パズル、ページェント、EVEと共に出演。スターレスはノヴェラやシェラザードの流れを汲むハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドにレインボーなどのブリティッシュ・ハード・ロック色を加味したサウンドであり、そのサウンドを安定したアンサンブルとパワフルな堀江のドラミング、紅一点のボーカルのジュラのキャラクター等によって聴かせるグループとして、関西プログレ・シーンの中で、ページェント、ソフィアと並ぶ人気を急速に得て行った。1985年に入ると関西を中心としてプログレッシヴ・ロック・ムーヴメントの最盛期となり、キング・レコードは関西プログレッシヴ・ロック・グループ達をリリースする為に"ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ"を計画し、ソフィア、ケネディー、アイン・ソフ、夢幻、ケンソー、ブラック・ペイジをリリースする事を決定。スターレスもこのシリーズの一番の旗頭としてリリースされる事が決定して、1985年9月20日〜10月20日にかけて大阪のラスク・スタジオで、プロデューサーにノヴェラの平山照継

を迎えてアルバム「銀の翼」のレコーディングを行ない、”ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”の先陣を切って12月21日に発売。また、同日に大阪キャンディーホール、1986年1月7日に東京の渋谷ライブ・イン、1月8日に横浜ビブレで発売記念ツアーを行なった。このアルバムは彼らの実力を証明した好アルバムに仕上がっており、日本のハード・プログレッシヴ・ロックの代表作の一枚と言えるものであった。この頃がスターレスにとって最も充実した時期であったが、スターレスの表看板であったボーカルのジュラが1986年6月21日に豊田市民会館で行なわれたイベントを最後に脱退してしまい、ジュラの脱退がスターレスにとって致命的な痛手となり、活動停止を余儀なくさせられてしまった。(なお、1986年9月にはソフィアのボーカルの森川をゲストに迎えてキャンディーホールで行なった。)スターレスは新しいボーカリストのオーディションを行ない。レディース・ハード・ロック・バンドのレイジアのボーカリストであった西垣宏子がジュラの後任に決まり、約1年間の沈黙を破り、1987年4月に大阪の近鉄小劇場で西垣加入の初ライブを行なったが、ジュラと歌唱法のタイプも違い、キャラクターも違った西垣は、ジュラのイメージが定着してしまったスターレス・ファンから好意的に受け入れてもらえず、またキング・レコードの”ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”が商業的な失敗に終わり、スターレスの次作を発売してくれるレコード会社も決まらずにバンドは煮詰まってしまい、1988年4月に東京の鹿鳴館と大阪バーボン・ハウスで行なわれたライブを最後に自然消滅してしまった。その後、ドラムスの堀江はハード・ロック・バンドのテラ・ローザ、そして現在はウルフで活躍。ベースの大久保とギターの中川は一時期、ページェントを脱退したギターの中嶋一晃と新しいグループ結成を計画していたが、現在、ベースの大久保とギターの中川は再びスターレスを始める為にメンバーのオーディションを行なっている。また、先にスターレスを脱退したボーカルのジュラはテルズ・シンフォニアやペール・アキュート・ムーンのキーボード奏者であった仙波基と共にヴァージニア・アシュトリー・タイプのポップ・デュオ”4LDK”を結成。1988年7月にキング・レコードのクライム・レーベルよりシングルCD「4LDK for LDK」をリリースしたが、現在では音楽活動を行なっていない。

スターレス[STARLESS]

◀Member▶

富家　大器　Taiqui Tomiie(Ds) ex.ULTRA BIDE,三十三間堂, ref.BELLAPHON,AIN-SOPH
落合　尚典　Naonori Ochiai(B) ref.ORPHEUS,TSURUGINOMAI,EVE
垣　光隆　Mitsutaka Kaki(Kbd) ref.BELLAPHON,AIN-SOPH
松山マサキ　Masaki Matsuyama(Vo) ex.SCHEHERAZADE II
野内　Nouchi(G)

スターレスという名前のプログレ・バンドは3グループ存在し、元シェラザードのベースの大久保寿太郎が1984年に結成した大阪のハード・プログレッシヴ・ロック・バンドのスターレスが有名だが、このスターレスは京都のベラフォンの母体となったグループ。あがた森魚の「乗物図鑑」や三十三間堂に参加していたドラムスの富家大器と大久保寿太郎らが結成したシェラザードIIのボーカルをやっていた松山マサキ、松山と一時期ELLEというバンドをやっていたキーボードの垣光隆、フロマージュに一時期参加していたギターの野内、オルフェウスやEVEで活動するベースの落合尚典の5人によって、1981年9月に結成。ライブもほとんどないままに、サウンド的にも方向性が定まらず、半年程で解散し、富家と垣はハザードのギターの田中を誘って1982年2月にベラフォンを結成。ベースの落合はオルフェウスに参加した。なお、このスターレス、そして大久保寿太郎が結成したハード・プログレッシヴ・ロックのスターレスの他の残りの一つのスターレスは、マンドレイクや破天荒のベーシストであった阿久津徹が1983年頃に結成を計画したグループで、このグループは結局、メンバーが固まらず、ライブも行なわないままに自然消滅してしまった。

スタッブス[STUBBS]

◀Member▶

加門　良　Ryo Kamon(B)
今野　一彦　Kazuhiko Konno(Ds)
河西　堅　Ken Kawanishi(G)

山下功次郎　Kojiro Yamashita(Kbd)
ヨリノ　ラムチャー　Ramcher Yorino(Vo)

◀Discography▶

●CT-「The New Proper Lifes Style」'83★
●CT-「The Idyll Party」'84★
●CT-「The Prime Moving Lump」'85★
〈Kamon Ryo Solo〉
●CT-「Dedicated To Rick Derringer」'82★
●CT-「ギターの国からキラキラ」'83★
●CT-「Kamon Ryo III」'84★
●7″ FLEXI-「ImpalsIII」'85★

スタッブスは日本では珍らしいカンタベリー系のジャズ・ロックやキャラバン・タイプのプログレッシヴ・ロック・サウンドを持つ北海道のグループ。特にキーボードがディヴ・シンクレア張りのオルガン・プレイを聴かせ、全体的なサウンドも初期キャラバンに最も近い。スタッブスはギターの加門良とキーボードの山下功次郎が1982年頃にシューリアリスティック・リボリューション・ミュージック・カンパニーというフリージャズ・バンドで知り合い、1983年に結成。1983年から85年までに3本の自主制作カセット作品をリリース、また加門良のソロ・カセット3本をリリースし、1986年には解散してしまった。

ストロベリー・パス[STRAWBERRY PATH]

◀Member▶
成毛　　滋　Shigeru Narumo(G,Kbd) ref.FLIED EGG
つのだひろ　Hiro Tsunoda(Ds,Vo) ex.JACKS,S.WATANABE QUARTET,FOOD BRAIN, ref.FLIED EGG,SADISTIC MIKA BAND,CAPTIN HIRO&SPACE BAND
〈GUESTS〉
江藤　　勲　Isao Eto(B) ref.H.TAMAKI&SMT
柳ジョージ　Geoge Yanagi(Vo) ex.GOLDEN CUPS
中谷　　望　Nozomu Nakatani(Fl)

◀Discography▶

●ALBUM-「大鳥が地球にやって来た日(When The Raven Come To The Earth)」(LP)PHILIPS:FX-8516 '71★
●ALBUM-「メリージェーン物語(※BEST)」(CD)PHILIPS:25LD-120 '89
●7″ EP-「Mary Jane On My Mind」PHILIPS:ES-1207 '71★

慶応大学に通う成毛滋(G)は高橋幸宏の兄らと共にGSグループ"フィンガーズ"を結成してフジテレビの"勝ち抜きエレキ合戦"に出場。このコンテストに優勝したフィンガーズは1967年にユニオン・レコードより、シングル「灯のない街」でデビューし、1968年にはキング・レコードへ移籍。移籍後のフィンガーズのサウンドは哀退し始めたGSブームを反影してソフト・ロック・サウンドへと変化。この頃からギターの成毛滋は本格的なロック・サウンドに目覚め始め、1969年初めにフィンガーズが解散すると、彼は'69年夏にアメリカで行なわれたロック最大のイベント"ウッド・ストック"に合わせて渡米。アメリカで本格的なロック・ライブの為のアンプやPAシステムを学び、またウッド・ストックを目のあたりにして、野外に於けるロックのフリーコンサートを日本でも開催する事を計画。彼は帰国し、9月22日に日比谷野外音楽堂で第1回10円コンサートを開催。主催した成毛滋とミッキー吉野の他、パワーハウス、フラワーズ、エムといった所が出演。また、9月28日には新宿厚生年金ホールでニューミュージック・マガジンの主催によるイベント"第1回日本ロック・フィスティバル"が開催され、ゴールデン・カップス、パワーハウス、フラワーズ、ブルース・クリエイション、エディ藩グループ、チューリップスと共に成毛滋も出演。これらのイベントを通じて、成毛滋は日本のニューロックの荷い手として最も注目を浴びて、'70年10月にCBSソニーより初のソロアルバム「イエロー・リバー」をリリース。ギターの他、オルガンも担当した本作は平均的なロック作品であるが、後に成毛滋がフライド・エッグやストロベリーパスで作り上げたプログレッシヴ・ロック・サウンドの片隣も見られるナンバーも含まれたアルバムであった。このアルバムを発表後、10円コンサートや日本ロック・フェスティバルなどのイベントやセッションを通じて、後期ジャックスや渡辺貞夫カルテットを経て、柳田ヒロ(Kbd)、陳信輝(G)、加部正義(B)と共に実験的なブルース&プログレッシヴ・ロックのセッション・バンド"フード・ブレーン"で活動していたドラムスのつのだひろと親交を深めて、1971年初めに成毛滋(G,Kbd)とつのだひろ(Ds,Vo)の2人でストロベリー・パスを結成。(ライブに出演する時は成毛滋グループという名前の方が多かった。)成毛滋とつのだひろは日本初の本格的なブリティッシュ・ロック・サウンドを求めて、'60年代半ばにエレキ・インスト・バンドのオールスターズ・ワゴンに在籍していたベースの江藤勲や元ベベスやパワーハウスのボーカル&ベースの柳ジョージをゲストに加えてレコーディングを行ない、1971年6月にフィリップス・レコードからアルバム「大鳥が地球にやって来た日」を発表。後に大ヒットをする"メリージェーン"を含む本作は当時の日本のロック・シーンの中で、初めて本格的なブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドを取り入れた作品であり、またB面ラストを飾る大作ナンバー"大鳥が地球にやって来た日"ではピンク・フロイド的な要素も取り入れられたプログレッシヴ・ロック・サウンドも含んだ意欲的な作品であり、柳田ヒロの一連の作品と並んで、日本にプログレッシヴ・ロックが誕生した記念すべきアルバムであった。ストロベリー・パスはジョン・メイオールやBBキングの来日コンサートの前座を努めるなどして彼らの存在は日本のロック・ファンに浸透して行ったが、成毛滋がロンドンへ渡英して解散。成毛滋はイギリスから帰国するとコロンビア・レコードより、ブリティッシュ・ハード・ロック&ブルース・ロック・サウンドの2ndソロ・アルバム「ロンドン・ノーツ」を1971年11月に発表。そして、箱根アフロディーテで行なわれ野外ロック・イベントにストロベリー・パスのつのだひろ、エスケープというグループでギターを担当し、クリムゾン等のコピーをやっていた高中正義(B)と共に出演して、ストロベリー・パスから発展した形としてフライド・エッグを結成した。

スパイラル[SPIRAL]

◀Member▶

小川　文明　Fumiaki Ogawa(Kbd) ref.BLACK PAGE,TERU'S SYMPHONIA
小川　逸史　Itsufumi Ogawa(G) ref.BLACK PAGE
久保多美子　Tamiko Kubo(Vo) ref.BLACK PAGE
奥田　治義　Hiroyoshi Okuda(B)
北畑　隆義　Takayoshi Kitabatake(Ds)

スパイラルは1983年にキーボードの小川文明とギターの小川逸史の小川兄弟を中心に結成された大阪のジャズ・ロック・グループ。ブラック・ペイジの前身グループであるスパイラルのサウンドは基本的にブラック・ペイジと同様のジャズ・ロックであり、ブラック・ペイジよりもブラッフォードあたりのカンタベリー系ジャズ・ロック色の強い好グループであったが、1984年にベースの奥田が脱退して解散。1985年に小川兄弟は元ドラゴンズ・バクのベースの小峰、元カリスマ、だるま食堂、99.99のドラムスの菅沼孝三を加えてブラック・ペイジを結成した。

スペース・サーカス[SPACE CIRCUS]

◀Member▶

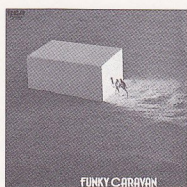
岡野はじめ　Hajime Okano(B) ref.PINK

佐野　直行　Naoyuki Sano(G)

山際　　築　Kizuku Yamagiwa(Kbd) '75～'77

豊田　貴志　Takashi Toyoda(Kbd,Vln) '78～'79

小川　宣一　Senichi Ogawa(Ds)

◀Discography▶

● ALBUM-「Funky Caravan」(LP)RVC:RVL-8028 '77★

● ALBUM-「Fantastic Arrival」(LP)RVC:RVL-8043 '78★/(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25005 '90

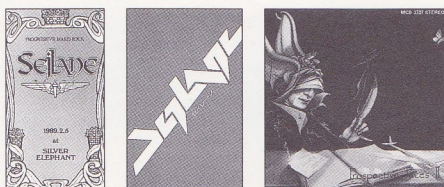
スペース・サーカスはブラザース・ジョンソンやアース・ウィンド&ファイアー、スタンリークラークなどのアメリカン・ソウル・ミュージック指向のベースの岡野はじめを中心として、高校時代に"ごあいきょう"というグループを結成して"第1回アマチュア・ロックコンテスト"に入賞した経歴の持ち主であるギターの佐野行直、ブリティッシュ系のハード・ロック・サウンドのアマチュア・グループに在籍していたドラムスの小川宣一、ソウル系のサウンドのセミ・プロ・バンドでキャンプ回りをしていたキーボードの山際築によって1975年に結成された東京のジャズ・ロック・グループ。チック・コリアの中期リターン・トゥ・フォーエバーあたりのサウンドを思わせるスパニッシュ色を強調したプログレッシヴなジャズ・ロックとファンキーなソウル&フュージョン・サウンドを作り上げてきたスペース・サーカスは渋谷屋根裏やアマチュア・ロック・コンテスト等を中心として活動を行ない、ベースの岡野はじめのブラザース・ジョンソンやスタンリー・クラーク張りの超人的なチョッパーベース・プレイや佐野のディメオラ風のギターワークは東京のライブ・ハウス界隈で噂さの的となり、また1976年にデビューを果たして世間を騒がせていたプリズムを筆頭とするフュージョン・ムーヴメントの中、プリズム、クロスウィンドと同じくロック・サイドからのアプローチのフュージョン・グループの有力株として注目を集めて、1977年RVCレコードと契約して、1977年11月～12月にかけて朝日サウンドスタジオ501stでレコーディングを行ない、1978年3月にアルバム「ファンキー・キャラバン」でデビュー。このアルバムのA面1曲目に収められたナンバー"アリババ"での岡野はじめの超絶的なベース・プレイは話題を集め、プリズム、カシオペアにつぐ人気を得て行なったが、サウンドの方向性の違いにより、キーボードの山際築が脱退してしまい、トリオ編成でしばらくの間、ライブをこなしていた彼らは、タージマハール旅行団などでヴァイオリンを弾いていた豊田貴志(Kbd,Vln)を加えて、1978年秋に日音スタジオ、RCAスタジオ、スターシップ・スタジオを使って2ndアルバム「ファンタスティック・アライバル」 をレコーディング。1stアルバム「ファンキー・キャラバン」ではタイトル・ナンバーの"ファンキー・キャラバン"は3部構成でスパニッシュ風のプログレッシヴ・ジャズ・ロックの好作品であったが、他のナンバーはファンキーなソウル色を強く押し出したサウンドであり、またアルバム作りもシンプルなものであったが、キーボードがソウル指向の山際からエディ・ジョブソンからの影響の強い豊田へチェンジした事により、2ndアルバムは宇宙をテーマとしたトータル・イメージのもとに豊田のシンフォニックなキーボードとリリカルなヴァイオリン・プレイをフィーチャーしたプログレ色を強く押し出したサウンドへと変化を遂げ、また各メンバーの演奏テクニックやアルバムの完成度の点に於いても1stアルバムを数段上回った作品に仕上がっており、日本のプログレッシヴ・ジャズ・ロック・シーンの屈指の名作であった。この2ndアルバムにフュージョン・ファンから大きな期待を寄せられたスペース・サーカスであったが、アルバム・レコーディング直後に新加入したキーボードの豊田貴志が脱退してしまい、2度にわたるキーボード奏者の脱退によってグループは行き詰まってしまい、1979年に解散。スペース・サーカスを脱退した豊田貴志は近代クラシックの和声法を取り入れたシンセ・ミュージックのソロ・アルバムを1985年にCBSソニーから発表して、その後もシンセ・ミュージックのソロ作品をリリース。リーダーであったベースの岡野はじめは原マスミなどのレコーディング・ワークを経てファンキーなポップ・グループ"ピンク"を結成して現在も活動中。スペース・サーカスはプリズム、クロスウィンドと並ぶロック・アプローチからのフュージョン・グループであり、プリズムがスパニッシュ調のハードなプログレッシヴ・ロック・サウンドとメロウなソフト・フュージョン・サウンドの2面性

を持っていたのに対して、スペース・サーカスはファンキーなビートを基盤としながらも中期リターン・トゥ・フォーエバーのスパニッシュ風サウンドに最も近いサウンド作りであり、最もプログレッシヴ・ロック色が強いサウンドを持つ優れたグループであった。

セイレーン[SEILANE]

◀Member▶

嶋崎　琢也　Takuya Shimazaki(Vo)'86~'90
武川　正太　Shota Mukawa(Vo)'90~
工藤　　勉　Tsutomu Kudo(G)
高梨　新子　Shinko Takanashi(Kbd)'86~'89
川村　賢司　Kenji Kawamura(Kbd)'89~
中野　昌子　Masako Nakano(B)'86~'88
工藤　　真　Makoto Kudo(B)'88~
浦山　忠之　Tadayuki Urayama(Ds)'86~'88
石崎　　豊　Yutaka Ishizaki(Ds)'88~ ex.ROMANESQUE SYNDROME

◀Discography▶

●CT-「Seiren」(Promo) '87
●VIDEO-「Seilane」STUDIO VISUAL TRAP:SVT-2 '89★
●V.A.(CD)-「Prospective Faces II」MADE IN JAPAN:MCD-3207 '89
●CT-「SEILANE 1990」 '90

セイレーンは東京のハード・プログレッシヴ・ロック・バンド。1986年4月に日大芸術学部の軽音楽部内で、ボーカルの嶋崎、ギターの工藤を中心にして高梨(Kbd)、中野(B)、浦山(Ds)というメンバーで、初めはワルキューレ(Walkure:この本に収録されているワルキューレとは別バンド)というバンド名でスタートしたが、1987年8月にセイレーン(この時の英語名は大阪のセイレーンと同じSEIRENであった。)と改名。セイレーンとしてのデビューライブは1987年10月に豊島公会堂で行なわれた日大芸術学部の軽音楽部の定期コンサート。また8月にデモ・テープ「SEIREN」を制作。1988年11月にメンバー・チェンジを行ない、工藤(B)、そして元ロマネスク・シンドロームの石崎(Ds)が加入しこの頃から吉祥寺シルバーエレファント等で本格的にライブ活動を開始。(またバンド名の英語表記もSEILANEと改名)1989年4月に自主制作でライブ・ビデオを発売、また7月にはキーボードが高梨から川村へとチェンジして、メイド・イン・ジャパンのオムニバスCD「プロスペクティヴ・フェイセスII」に参加。この頃の彼らのサウンドは甘い嶋崎のボーカルをフィーチャーした吉祥天女や後期ルーシェル風のハード・プログレッシヴ・ロックであったが、1990年2月にボーカルの嶋崎が脱退し、現ボーカリストの武川が加入し、よりストレートなロック色を増し、またバンドの演奏力もかなり向上してきた。現在は現メンバーによるデモ・テープをライブにて発売している。

セイレーン[SIREEN]

◀Member▶

寺田　和恵　Kazue Terada(Kbd)
矢部　　翠　Midori Yabe(G,Vln) ex.SYLPHIED

上原　由美　Yumi Uehara(Vo) ex.SYLPHIED
奥田伊律子　Itsuko Okuda(B)
上野まりあ　Maria Ueno(Ds) ex.LUCIFER

◀Discography▶

●CT-「Sireen In The Dream」SIREEN '87★

東京のハード・プログレッシヴ・ロック・バンドのセイレーン(SEILANE)とは同名別グループで、こちらのセイレーンは大阪のレディース・ポップ&プログレッシヴ・ロック・グループ。彼女たちの結成は1985年4月、結成当時はスターレスのボーカルのジュラやマグダレーナのボーカルの徳久恵美が在籍していた幻のプログレ・バンド"ルーシフェル"のドラマーであった上野まりあ、シルフィードというマイナーなハード・プログレッシヴ・ロック・グループに在籍していたボーカルの上原とギター&ヴァイオリンの矢部にキーボードの寺田というベースレスのライン・ナップで曲作りとリハーサルを繰り返していたが1986年2月に奥田が加入して、バハマやセンサス・ホールでライブ活動を開始。サウンドはゼルダなどのポップ・ロックにプログレッシヴ・ロックのエッセンスを加えたサウンドであった。1987年にデモ・カセット「Sireen In The Dream」を制作し、一時期精力的な活動を行っていたが、1988年に自然消滅してしまった。

セラフィータ[SERAPHITA]

◀Member▶

金森　直幹　Naoki Kanemori(Vo,G,Kbd) LADY DANCE
佐藤　　晋　Shin Sato(B) '86～'87
藤井　雅史　Masashi Fujii(B) '87～
溝口　明宏　Akihiro Mizoguchi(Ds)

◀Discography▶

●ALBUM-「Persona And Shadow」(CD)FEI:89041 '90
●CT-「Chase In The Dream」'88★
●CT-「Seraphita」ONGAKUKAN/FEI '89★

仙台でレディーダンスというハード・プログレッシヴ・ロック・グループをやっていたリーダーの金森直幹(Vo&G)はレディーダンス解散後、東京に上京して1986年に佐藤普(B)、溝口明宏(Ds)と共にセラフィータを結成。1987年にはベースが佐藤から藤井雅史へメンバー・チェンジして、都内のライブ・ハウスで活動を開始。1988年と'89年にデモ・テープをライブのみで発売し、1990年には自主制作でCD「Persona And Shadow」を発表して現在も活動中。彼らのサウンドは金森がボーカル、ギター、キーボードをこなし、ノヴェラ・タイプのハード・プログレとラッシュ風のサウンドを基調としながらポップス色も加味したものとなっている。

セレナーデ[SERENADE]

◀Member▶

桜井　良行　Yoshiyuki Sakurai(B)'76 ex.HAL,ref.SHINGETSU,AQUAPOLIS,NOA
北山　　真　Makoto Kitayama(Vo) ref.SHNGETSU
高津　昌之　Masayuki Takatsu(G)
花本　　彰　Akira Hanamoto(Kbd) ref.SHINGETSU,PHONOGENIX,ASTURIUS
鈴木　清生　Shizuo Suzuki(B) ref.SHINGETSU,KALEIDO SCOPE
小松　　　　Komatsu(Ds) ref.MAGICAL POWER MAKO

ボブ・ディランに狂い、キング・クリムゾンの「アイランド」に強烈な衝撃を受けた北山真は栃木県の宇都宮から上京し、日大芸術学部音楽科に在籍していた花本彰が出した"クリムゾン、PFM、イエスの様なバンドを作りたし。抒情的なボーカリストを求む"というメンバー募集の貼り紙を都内のヤマハでみつけて連絡を取り、1974年にキーボードの花本を中心として"アウト・オブ・コントロール"なるグループを結成したが、このグループ自体は試行錯誤段階で行き詰まり、1975年の暮れには"アウト・オブ・コントロール"を発展させた形として花本(Kbd)、北山(Vo)、にギターの高津、ベースの鈴木、ドラムスの小松を加えて新月の母体となるセレナーデを結成。セレナーデのサウンドは四人囃子やファーイースト・ファミリー・バンド、コスモス・ファクトリーといったプログレ第1世代のように流行していたブリティッシュ・ロック(=ピンク・フロイドあたりの事)の一つとしてプログレッシヴ・ロックを取り入れたサウンドではなく、ジェネシス、PFM、キング・クリムゾンといったユーロピアン・スタイルの本格的なプログレッシヴ・ロックを前面に押し出した日本で初めての本格的なシンフォニック・ロックであった。また、新月のあの名曲「鬼」のフレーズが顔を出すナンバー"回帰イントロダクション"や新月でも演奏されていた大作"組曲:殺意への船出"などは彼らのナンバーでも傑出した作品であり、新月のサウンドはすでにこのセレナーデで完全に確立されていたが、新月と比較すると抒情性が強調されたサウンド作りであった。セレナーデは学園祭やイベント等でライブ活動を行っていたが、1976年8月13日に東京・目黒区民センターで行なわれたイベント"Progressive Rock&Jazz Concert 1976"に出演した際に、共演していたHAL(他にぬり壁等が出演)のギターの津田春彦とセレナーデのリーダーであった花本彰が意気投合して、セレナーデ、HAL、ベラドンナを総合させてよりレベルの高いプログレッシヴ・ロック・バンドを結成することを計画し、花本彰はセレナーデを解散させて1976年暮れにセレナーデの末期ベーシストの桜井良行(元ハル)、ベラドンナ&ハルのドラマーの高橋直哉、ギターの津田春彦にギター&ボーカルの遠山豊を加えて新月を結成。セレナーデのボーカルの北山とギターの高津はL.F.ブルース・バンド、EUNBAというグループで活動し、1978年暮れに北山は新月に加入。ドラムスの小松はマジカル・パワー・マコを経て、1979年にVICTIM、伊藤政則バンドで活動。セレナーデのベーシストであった鈴木清生はカレイド・スコープに在籍した後に1878年に新月に加入といった具合に各メンバー共、入り乱れた活動の駒を進めて、伝説のグループ"新月"は誕生したのであった。

不呪麗(ジュリエーヌ)[JURIENU]

◀Member▶

杉山　雄一　Yuichi Sugiyama(Ds) ref.SABER TIGER,PROVIDENCE
菅　　和義　Kazuyoshi Suga(B)
小畠　敬一　Keiichi Obata(G)
久慈　広孝　Hirotaka Kuji(Vo,Kbd)

◀Discography▶

●CT-「死ぬまでは」(Shinumadewa) '84★

不呪麗はプロビデンスのドラマーとして活躍している杉山雄一が、プロビデンス加入以前に結成していた札幌のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。1982年3月にドラムスの杉山、ベースの菅を中心として結成された彼らはピンク・フロイドやルネッサンスから影響を受けたハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドであった。プロビデンスやレッドと共にライブ活動を行ない、1984年には自主制作でカセット・テープ「死ぬまでは」を発表したが、1985年3月に行なわれた札幌ペニーレインのライブを最後に解散。杉山はハード・ロック・バンド、サーベル・タイガーを経て、プロビデンスへ加入した。

SO[SO]

◀Member▶

大鹿　聡　Satoshi Oujika(B,Kbd,G)

◀Discography▶

●CT-「Ocean's Views」ROAD:R-008 '85★

●CT-「Outdoor Tea Party」ROAD:R-009 '85★

●CT-「Dream Weaver」ROAD:R-013 '87★

SOはロゼが主宰するカセット・レーベルであったROADレコードから1985年～87年にかけて3本のカセットをリリースしているプライベート・レコーディング・ユニット。ギター、キーボード、ベースを大鹿聡が一人でこなしてレコーディングしたこれらの作品はアマチュア・レベルではあるがキャメル・タイプの叙情派シンフォニック・ロックであった。

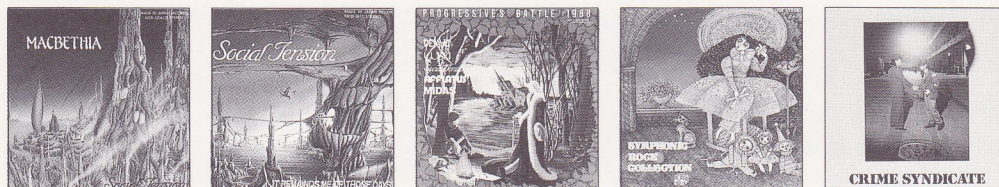
ソシアル・テンション[SOCIAL TENSION]

◀Member▶

遠藤　信夫　Nobuo Endo(Kbd)

太田　雅彦　Masahiko Ota(Vo,B) ref.AFTER THE RAIN

岩崎　　卓　Suguru Iwasaki(Ds)

◀Discography▶

●ALBUM-「Macbethia」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1022/(CD)MADE IN JAPAN:MCD-3204 '89

●ALBUM-「It Remainds Me Of Those Days」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2917 '90

●V.A.(LP)-「Parogressive's Battle '88」MADE IN JAPAN:MIJ-1017 '88★

●V.A.(CD)-「Symphonic Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3205 '89

●V.A.(CD)-「Crime Syndicate(*Live)」CRIME:250E-2068 '89

<NOBUO ENDO SOLO>

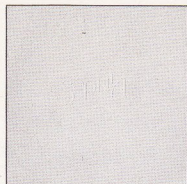
●V.A.(CD)-「King's Boards」MADE IN JAPAN:MCD-2918 '90

茨城県水戸市から上京して来て歌謡系のアイドル・ロック・グループ"ジュリアス"に参加していた太田雅彦((Vo,B)は、歌謡界に嫌気がさし、クリムゾンなどが好きであった彼は自らの音楽を表現できるプログレッシヴ・ロック・グループを作る事を決意。川崎の某音楽楽器店で働いていた太田は、1985年に高中正義などのコピーバンドをやっていた当時16才の遠藤伸夫と楽器屋の店員と客という関係で知り合い意気投合。遠藤と共に曲作りの毎日を過ごしている中、当初はジェネシスやキャメルのようなグループを結成する事を計画していた太田は、キーボード・トリオでやって行く事を決意して、ジャズをやっており以前からの知り合いであったドラムスの岩崎卓を代わりのドラマーがみつかるまでのヘルパーとして加えて、1986年1月にソシアル・テンションを結成。遠藤がキース・エマーソンからの影響が強かった為にEL&Pに非常に近いサウンドを持つキーボード・トリオとしてスタートした彼らは、'86年1月に大井町にある渋谷楽器のホールで行われたアマチュア・ロック・イベントに参加。また1986年の夏頃からは横浜の7thアベニューなどを中心に本格的なライブ活動を開始。(原宿のホコ天ライブなども行なっていた。)1987年8月に吉祥寺シルバーエレファントにアストゥーリアスと共に出演した際に、メイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノの目に止まり、ヌメロ・ウエノが新たにデビューさせようと思っていたデジャヴ、アフレイタス、ミダス、誘精と共にメイド・イン・ジャパン・レコードからリリースされたオムニバス・アルバム「Progressives'Battle'88」に参加。このアルバムの発売記念として1988年5月のゴールデン・ウィークに行なわれた第3回"Progressives'Battle Live"に出演。デジャヴと共に若手のキーボード・トリオとして注目を集める様になり、夢幻を解散してメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーに専念する事になった林克彦のプロデュースのもとにファースト・アルバムのレコーディングを1989年2月～3月にかけて行ない、アルバム「マクベシア」を4月に発売。このアルバムのレコーディングによって、今までEL&Pの模倣的なサウンドにしか過ぎなかった彼らは、イタリアン・プログレ色も加味された彼らのオリジナリティーを持つサウンドを確立。また演奏面やアルバムの完成度の点に於いても、高水準な作品として仕上ったこのアルバムによって、彼らの評価はかなり高くなり、アウターリミッツなき後の東京のプログレ・シーンの中心グループとしてデジャヴと共に人気を二分する様になった。1989年7月にフランスのアトールを迎えて川崎のクラブ・チッタで行なわれたイベント"クライム・シンジケート"にデジャヴ、ロザリア、ホワイト・ファングと共に出演。このライブの模様を収めたライブCDがキングのクライム・レーベルより9月に発売。この頃はデジャヴ、ホワイト・ファング、ロザリアと共にプログレッシヴ・ロック・シーンの新たな騎手として数々のイベントに出演。また年末にはフジTVの年末番組「もろまねバンド合戦」にEL&Pの"展覧会の絵"のコピーで出演するなど精力的な活動を行ないライブ・バンドとしての実力も高まり、大きな期待を荷負って2ndアルバムのレコーディングを1990年4月～6月にかけてスタジオ・ディグで行ない、アルバム「It Remainds Me of Those Days」を8月にリリース。また、メイド・イン・ジャパン・レコードから9月にリリースされた若手キーボード奏者によるキーボード・トリオ・オムニバスCD「キングス・ボード」にキーボードの遠藤伸夫が参加し、太田、岩崎のリズム陣もロザリアの三浦奈緒美とホワイト・ファングの小門学のナンバーでバックを努めた。ソシアル・テンションはリーダーの太田のマニアックなブリティッシュ&イタリアン・プログレ指向を反映した攻撃的なキーボード・トリオ・サウンドであり、日本のキーボード・トリオの中で、デジャヴと並び高い音楽性を持っており、現在、低迷している若手プログレッシヴ・ロック・シーンの中で最も秀れたグループである。

ソフィア[SOPHIA]

◀Member▶

土坂　健司　Kenji Tsuchisaka(G)
貴　智明　Tomoaki Taka(Vo) '80～'81 ref.NEVERLAND
森川　健司　Kenji Morikawa(Vo) '81～
林　伸哉　Nobuya Hayashi(B)
西田　竜一　Ryuichi Nishida(Ds) '80～'82 ref.NOVEL,TERU'S SYMPHONIA,VIENNA
細川　博史　Hiroshi Hosokawa(Ds) '82～ ref.JACKSON JOKER,ACTION

◀Discography▶

- ALBUM-「Sophia」(Mini LP)CANDY:CRL-001 '84★
- ALBUM-「Defiance」(LP)NEXUS:K28P-600 '86★
- 7″ EP-「Defiance(A Side:STARLESS)」NEXUS:7SSY-15(Promo) '86
- 7″ FLEXI-「パンドラの匣(Caja de Pandra)」CANDY:E-7218(Promo) '84
- CT-「Sophia I」WEST POINT '83★
- CT-「Sophia II」WEST POINT '84★

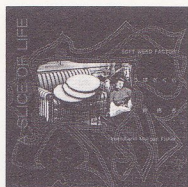
ソフィアはノヴェラのコピーバンドとして、土坂健司(G)、貴智秋(Vo)、林伸哉(B)、西田竜一(Ds)、熊谷(G)に女性キーボード奏者の6人によって1980年10月に結成された。結成当初はノヴェラのコピーのみであったが、熊谷(G)と女性キーボード奏者がすぐに脱退して、4人編成となった彼らはラッシュからの影響が多大なオリジナル・ナンバーも演奏する様になるが、1981年9月にボーカルの貴が元レイジーの田中と井上らが結成したネバーランドに加入の為に脱退。貴に代わって、パンドラというグループをやっていた森川健司が加入するが、今度は1982年4月にドラムスの西田竜一が第2期ノヴェラのメンバーに迎え入れられて脱退。一時期元ピアス、現アクションのドラムスの本宮ひとしが手伝っていたが、細川博史が加入して1982年9月に土坂(G)、森川(Vo)、細川(Ds)、林(B)、の4人によるライン・ナップとなって大阪バハマでライブを行ない、メンバーが安定して本格的な活動を開始。1983年と'84年にデモ・カセットを制作してライブのみで販売。また、1983年4月30日に新宿ACBで行なわれたハード・プログレッシヴ・ロック・バンドのイベント"仮面舞踏会"にヴィジュアル・スキャンダル、ルシフェル、仙台のレディーダンスと共に出演したのを初めとして、東京でも積極的にライブ活動を始め、ラッシュ・タイプの彼らのサウンドはノヴェラなどの女性ファンを中心として人気が高まり、スターレスと共に関西のハード・プログレッシヴ・ロックを代表するグループへと急成長を遂げた。1984年12月に大阪のライブ・ハウス"キャンディーホール"が設立した自主制作レーベル"キャンディーレコード"からミニ・アルバム「ソフィア」をリリース。また、同12月の大晦日にキャンディーホールで行なわれたオール・ナイト・イベント"Progressive Night"にジェラルド、ページェント、EVE、ミダス、スターレス、パズル、剣の舞と共に出演。関西プログレ・シーンの最盛期を迎え、これに目をつけたキング・レコードがネクサス・レーベル内に"ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ"を新設して、スターレス、夢幻、アイン・ソフ、ケネディーらと共にソフィアもキング・レコードより発売が決定し、1986年2月にアルバム「ディファイアンス」をリリースしたが、この頃には初期の頃のラッシュ・タイプのハード・プログレ色は薄れ、このアルバムではアーバン・ダンスの成田忍のプロデュースのもとにU2あたりのニューウェーヴ色が強調されたサウンドへと変化し、このサウンド転身はプログレ・ファンに受け入れてもらえず、またメンバーの音楽性の違いによって、1986年10月12日の渋谷エッグ・マンのライブを最後に解散。ギターの土坂はテルズ・シンフォニアやペール・アキュート・ムーンのキーボードの仙波基と共に"プランニング2"なるユニットを一時期結成してニューウェーヴ・サウンドをやっていたが、現在は引退。ボーカルの森川はスターレスのサポート・メンバーとして一度だけLiveを行なった事もあるが、現在は活動をしていない。ベースの林は、その後上京し、元パズルのギタリストや魔女卵のドラムスの山形らと共にシャンハイで活動中。

ソフト・ウィード・ファクター[SOFT WEED FACTOR]

◀Member▶

坂本　理　Satoshi Sakamoto(Kbd,Vo)
山崎　明彦　Akihiko Yamazaki(G)
増子　尚之　Naoyuki Mashiko(Sax)
坂本　佳織　Kaori Sakamoto(Sax)
駒井　仁　Hitoshi Komai(Clarinet)

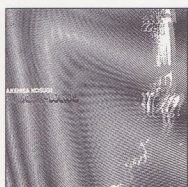
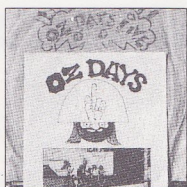
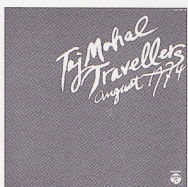
中藤　正邦　Masakuni Nakafuji(B)
長沼　武司　Takeshi Naganuma(Ds) ref.GOLDEN AVANT-GARDE,ex.TIME UNIT,LACRYMOSA
大平　博基　Hiroki Ohara(Cello)

◀Discography▶

●V.A.(LP)-「A Slice Of Life」LLE:1009 '84★
●V.A/(CD)-「Lost Years In Labyrinth」BELLE ANTIQUE:9119 '91

ソフト・ウィード・ファクター(SWF)は元パイディアのキーボードの坂本理が中心となり1983年に結成されたグループであり、ソフト・マシーンの曲名からグループ名を冠した彼らはカンタベリー系のジャズ・ロック・サウンドを持つグループ。ドラムスに元タイム・ユニット(現在、ラクリモーザ/ゴールデン・アヴァンギャルド)の長沼武司、ベースに後にモノリス・レーベルを設立する中藤正邦、キーボード&ボーカルの坂本、ギターの山崎にサックス奏者が2人とクラリネットとチェロという大編成の彼らのサウンドはフリー・インプロビゼーションからストラビンスキー風のポリリズムのアンサンブルまでこなすサックス等のリード陣が大きな特徴であり、ソフト・マシーンからマグマ、アーバン・サックスあたりの実験的なジャズ・ロックである。1984年にLLEレーベルから発売されたオムニバスLP「A Slice of Life」に参加したが、ドラムスの長沼がラクリモーザ、ゴールデン・アヴァンギャルドに参加の為に脱退し、またベースの中藤もモノリス・レーベルの運営に専念する為に脱退するなどして1986年以降は一時活動停止していたが、1990年に活動を再開した。

タージマハール旅行団[TAJ-MAHAL TRAVELERS]

◀Member▶
小杉　武久　Takehisa Kosugi(Vln)
小池　　龍　Ryo Koike(B)
土屋　幸雄　Yukio Tuchiya(Tuba,Vib)
木村　道弘　Michihiro Kimura(G)
永井　清治　Seiji Nagai(Tp)
長谷川時夫　Tokio Hasegawa(Vo)

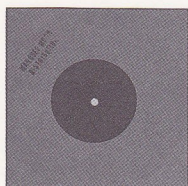
◀Discography▶

●ALBUM-「July15,1972」(LP)CBS:SOCM 95 '72★
●ALBUM-「August 74」(LP)COLUMBIA:OP-7147 ~8 '74★
●V.A.(LP)-「OZ Days Live」OZ '73★
<TAKEHISA KOSUGI SOLO>
●ALBUM-「Catch-Wave」(LP)CBS:SOCM88 '75★

1960年代にニューヨークでブレヒト、小野洋子、ジョナス・メカスらの音楽家、画家、映像作家、詩人等が集合した総合芸術集団"フルクサス"に参加していた小杉武久は1969年に帰国し、タージマハール旅行団なる集団を結成。初期タンジェリン・ドリームに近い前衛・実験音楽であり、前衛音楽の草分けとして有名な存在となる。1972年にCBSソニーよりアルバム「July 15,1972」、1973年には吉祥寺OZで行なわれたライブをOZが制作した自主制作ライブ・オムニバス・アルバム「OZ Days Live」に収録、1974年には草月ホールで行なわれたライブのライブ・アルバム「August 1974」がCBSソニーからリリースされた。また小杉はタージマハール旅行団の活動と平行して、ツトム山下&ホライズンやイースト・バイオニック・シンフォニアでも活動。またタージマハール旅行団を解散させてからはソロ・アルバムを数枚発表している。

タイム・ユニット[TIME UNIT]

◀Member▶

春成　恵一　Keiichi Harunari(Kbd)
関口　　孝　Takashi Sekiguchi(G)
長沼　武司　Takeshi Naganuma(Ds) ref.LACRYMOSA,SOFTWEED FACTOR,GOLDEN AVANT-GARDE
久野　真澄　Masumi Kuno(B) ex.BIKYORAN

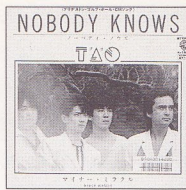
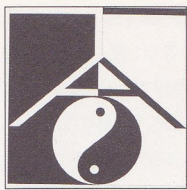
◀Discography▶

●7"FLEX1-「The Clap &公転(A Side:MAGICAL POWER MAKO)」MARQUEE MOON:MM0005(PROMO) '82

タイム・ユニットはキーボードの春成恵一が"プレイヤー誌"のメンバー募集欄を通じて知り合ったギターの関口孝、後にソフト・ウィード・ファクターやラクリモーザ、ゴールデン・アヴァンギャルト等のグループで活躍するドラマーの長沼武司、ベースの松永たかし、ヴァイオリンの渡辺洋子の5人によって1980年2月に結成された東京のアンダーグラウンドな存在のプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ。1980年8月に吉祥寺シルバーエレファントに於いてデビュー・ライブを行なった際に、春成(Kbd)、関口(G)、長沼(Ds)の3人に美狂乱で一時期メロトロンを担当していたベースの久野真澄を加えた4人編成となった彼らのサウンドは、ヘンリー・カウに影響され、キング・クリムゾン的コンセプトと、現代音楽やフリージャズ要素を持ったカンタベリー系のジャズ・ロック・サウンドであり、東京のプログレ・シーンに於いて異色の存在のグループであった。1982年にマーキー・ムーン誌の付録ソノシートで"The Clap&公転"を発表。この頃になると初期の頃のカンタベリー系ジャズ・ロック・サウンドから、ポリ・リズムによる現代音楽の影響が強いサウンドへと変化、1983年頃まで活動していたが、自然消滅してしまった。

TAO[TAO]

◀Member▶

根元　　博　Hiroshi Nemoto(Vo) ref.EUROX
関根　安里　Anri Sekine(Vln,Kbd) ex.OCTASCOPE,ref.EUROX
岡野　治雄　Haruo Okano(B) ref.EUROX
野沢　達雄　Tatsuo Nozawa(Ds) ref.EUROX

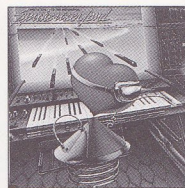
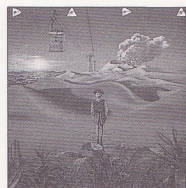
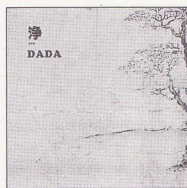
◀Discography▶

● ALBUM-「Far East」(LP) WEA:K-12508★
● 7"EP-「Nobody Knows」WEA:K-1525 '83★
● 7"EP-「Azur」WEA:K-1523 '83 ★
● 7"EP-「Hello, Vifam」WEA:K-1526 '83★

TAOは1980年頃にUKの影響を受けて結成された東京のグループで、元オクタスコープのヴァイオリン&キーボードの関根アンリを中心として、ボーカルの根元、ベースの岡野、ドラムスの野沢という編成で、UKの2ndアルバム「デンジャー・マネー」のサウンドをよりポップにしたサウンド作りであった。結成当初はグリーン等と都内のライブ・ハウスに出演していたが、1983年にワーナーよりアルバム「Far East」でデビュー。TVアニメの"バイファム"などのテーマ曲やCMソングのシングルをリリースし、サウンドは初期の頃のUK色が失われ、完全なポップスへと変化して行った。1984年に元グリーンのギターの栗原務を誘い、バンド名もTAOからユーロックスへと改名。ユーロックスは中森明菜のアルバム「不思議」を始め、数多くのバックを務め商業的な分野で現在も活躍中である。

ダダ[DADA]

◀Member▶

小西　健司　Kenji Konishi(Syn,G) ex.KIGADOMEI,ref.4DK
泉　陸奥彦　Mutsuhiko Izumi(G,Syn) ex.KIGADOMEI,CHARISMA,ref.KENNEDY,SADATO GROUP

◀Discography▶

● ALBUM-「浄(Jyo)」(LP) VANITY:001 '78★
● ALBUM-「DADA」(LP) NEXUS:K26P-130 '81★/(CT) K26W-83 '81★
● CT-「城壁」(Joheki) '79★
● V.A.(LP)-「Invitataion To The Wonderful Synthesizer Land」TOSHIBA:TP-60328 '79★

ノヴェラの平山昭継やページェントの引頭英明らも在籍していた事のある週末放浪者というブルース・ロック・グループを経て、1975年に平山昭継(G)、安田隆(Ds)と共にブルース&ハード・ロック・グループ"飢餓同盟"を結成した小西健司(B,Vo)は、1976年暮れにシェラザードを結成の為に平山昭継が脱退すると、飢餓同盟の今までのブルース&ハード・ロック・サウンドを一掃して、現代音楽やタンジェリン・ドリーム等の様な実験音楽を追求するユニットとして誕生させ、自らもベースからシンセサイザーへと転身。1977年に阿木譲がDJをやっていたFM NHKの「若いこだま」というラジオ番組で天地創造やSAB,だててんりゅう等と共にスタジオ・ライブなどの活動を行なっていたが、マハビシュヌ・オーケストラ的なアプローチのプログレッシヴ・ジャズ・ロックとエレクトロニック・ミュージックを持ち合わせたサウンドをやっていたカリスマのリーダーであり、ギタリストの泉陸奥彦と意気投合して、1977年暮れにDADAを結成。1978年7月にはロック・マガジンの阿木譲が主宰するインディーズ・レーベルであるヴァニティー・レコードよりアルバム「浄」を発表。(このアルバムはまだ彼らの方向性が定まっておらず、インプロビゼーションを中心とした作品で、いま一歩の出来。)彼らは地元関西ばかりではなく東京でもライブ活動を行なったり、全日空の

CM用テープの制作や、東芝EMIから発表されたシンセサイザー・ミュージックのオムニバス・アルバム「Invitation To The Wonderful Synthesizer Land」に参加するなど精力的な活動を行なった。また、1979年6月には自主制作でカセット・テープ作品「城壁」を発表。ノヴェラやアイン・ソフのプロダクションであるLUCの山田次郎氏のマネージメントのもとに精力的な活動を行ない、注目を集めて行った彼らは、1981年にキング・レコードのネクサス・レーベル"第3のグループ"としてアルバム「DADA」をリリース。小西の持つ実験的なエレクロニクス・ミュージックと泉の持つエモーショナルなアヴァンギャルド・ジャズ・ロックを融合させたサウンドを確立したが、小西のオルタナィティヴ・エレクトロニクス・ミュージック指向と泉のフリージャズ・ロック指向の音楽性の違いにより、分裂。小西はDADAを解散するとエレクトロニクス・ポップのユニットである4Dを結成。また、泉はフリージャズのサックス奏者であるサダトのユニットのサダト・グループ、そしてファミリークラブを経て、ケネディーを結成して、カリスマ時代から一貫して追い求めていたアヴァンギャルド・ジャズ・ロックを完成させた。DADAはバッハ・リヴォリューションと並び、日本のプログレ・シーンの中で、シンセ・ミュージックの代表的なユニットであり、最もプログレッシヴでかつ、実験的な感性に溢れたグループであった。

タッケ・プロジェクト[TATSUKE PROJECT]

◀Member▶

田付　元昭　Motoaki Tatsuke(G,B,Syn)
松崎　美樹　Miki Matsuzaki(Vo)
ナガハラサトシ　Satoshi Nagahara(Kbd)
グンジテルノブ　Terunobu Gunji(Vo)

◀Discography▶

●CT-「Mystic World」'88

タッケ・プロジェクトは平山照継のテルズ・シンフォニアに憧れる田付元昭(G,B,Synth.担当)のプライベート・レコーディング・ユニットで、1988年に自主制作でカセット・テープ作品「Mistic World」をリリースしている。この作品はテルズ・シンフォニアの「ノイの城」を手本とし、非常に類似したアマチュア・レベルの作品。このユニットはライブは行なっていなく、プライベート・レコーディングの為のみのユニットである。

だててんりゅう[DATETENRYU]

◀Member▶

隣　雅夫　Masao Tonari(Kbd,Vo)
市川　修　Osamu Ichikawa(P,Fl.)'76

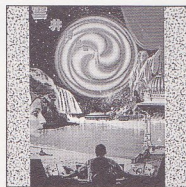
だててんりゅうは加賀哲也のカーラド・スコープと共に関西プログレ・シーンの黎明期を作り上げてきた伝説のグループで、1971年にキーボードの隣雅夫が京都で結成して以来、1980年頃まで10年間に及ぶ活動を行なって来たグループであり、初期の頃はEL&Pタイプのキーボード・トリオ・サウンドであったが、1977年頃からはギターやサックス奏者も加えたファンキーなサウンドを持つグループへと10年間の長い歴史の中で、サウンドの方向性を変化させてきたグループだ。また、メンバーの方も、リーダーであるキーボード&ボーカルの隣以外は次々とチェンジして行ったグループであり、フロマージュのドラマーの谷口なども参加していた事がある。本誌の主旨に従ってプログレッシヴ・ロック・サウンドをやっていた頃の彼らについて触れると、彼ら

がプログレッシヴ・ロック・サウンドをやっていたのは1973年〜76年にかけての時期。キーボードの隣雅夫とベース、ドラムスというキーボード・トリオ編成であった彼らは、隣のエマーソンからの影響が多大なパーカッシヴなオルガン・プレイによって、一部の音楽評論家達からも絶賛されていた。地元のイベントやデパートの屋上などの場で精力的なライブ活動を行なっていただててんりゅうは、1976年になるとピアノとフルートを担当する市川修を加えて、ダブル・キーボード編成となり4月13日に京都の円山野外音楽堂で行なわれた"円山スプリング・フェスティバル"(ペドロ&カプリシャス、ダウン・タウン・ブギ・ウギ・バンド、桑名正博、ブラインド・エキスプレスといったグループが出演した大規模なものであった。)等にも出演していたが、1977年になるとリーダーの隣が突然サウンドの方向転換を図り、メンバーも一新してギター、サックス奏者まで加えた新たなライン・ナップとなり、ファンキーなポップ&ロック・サウンドのグループへ変貌してしまった。関西もプログレ・シーンの黎明期を孤軍奮闘して築き上げた伝説のグループとしてだけではなく、だててんりゅうは関西で唯一のエマーソン・タイプのキーボード・トリオとして、何も作品を発表せずに消えてしまうには、あまりに惜しい存在であった。

玉木宏樹&SMT[HIROKI TAMAKI&SMT]

◀Member▶

玉木　宏樹　Hiroki Tamaki(Vln)
羽田　健太郎　Kentaro Haneda(P)
岡山やすよし　Yasuyoshi Okayama(Ds)
江藤　勲　Isao Eto(B) ex.STRAWBERRY PATH
松武　秀樹　Hideki Mastutake(Syn)
杉本　喜代志　Kiyoshi Sugimoto(G)
高中　正義　Masayoshi Takanaka(G) ref.SADISTIC MIKA BAND ex.ESCAPE,FLIED EGG
岡村　Okamura(Sax)
Y.羽鳥　Y.Hattori(Tp)
K.佐野　K.Sano(Tp)
T.数原　T.Kazuhara(Tb)
安西　史孝　Fumitaka Anzai(Kbd) ref.CROSSWIND
渡辺　健　Ken Watanabe(B) from PRISM
島村　英二　Eiji Shimamura(Ds)

◀Discography▶

●ALBUM-「Time Paradox」(LP)COLOMBIA:CD-7157 '75★

<HIROKI TAMAKI SOLO>

●ALBUM-「雲井時鳥国(Kumoino-Hototogisukoku)」(LP)CBS:28AG417 '79★

●ALBUM-「存在の詩(Zonzai No Uta)」(LP)COLOMBIA:AX-7281 '80★

玉木宏樹は作曲家としてTVドラマ"大江戸捜査網"を始めとして、数多くのTV番組の音楽担当を行ない、また数多くのポピュラー音楽でヴァイオリニストとしてスタジオ・ワークを現在でもこなしているプロ・ミュージシャンである。玉木宏樹は1970年に柳田ヒロ・グループのメンバーとして東芝リバティーからアルバム「Milk Time」を発売。このアルバムではカンタベリー系のジャズ・ロックやナイス、エッグ風のサウンドにエモーショナルなインタープレイを聴かせていた玉木宏樹は、日本のポップス界でヴァイオリニストとして活躍する傍ら、1975年にコロムビア・レコードより玉木宏樹&SMTというユニット名でアルバム「タイム・パラ

ドックス」を発表。ベースに柳田ヒロ・グループやストロベリー・パスの江藤勲、ギターに高中正義、そしてブラス・セクションまで加えて作られた本作はドビッシーやインド音楽、キース・エマーソン等から影響された彼の多彩な音楽性を反映してドビッシー風の近代クラッシックやインド音楽のエッセンスを取り入れたトラディショナルなナンバーやクリムゾンの"21世紀の精神異常者"風のスリリングな大作まで多面的な要素を持ち、当時のプログレ・シーンの中では先進的なアルバムであった。1979年にはクロスウィンドのキーボードであった安西史孝らとシンセサイザー奏者のジョイント・アルバム「雲井時鳥国」に参加し、1980年には玉木宏樹のソロ・アルバム「存在の詩」を発表。ボイスによる多重録音をフィーチャーしたタンジェリン・ドリーム的なアプローチの実験的な作品であった。彼は現在でも数多くのアルバムに参加したり、音楽担当をしているが、「タイム・パラドックス」と前記したソロ作品以外にプログレッシヴ・ロックと呼べる作品はない。

堕落天使[DARAKUTENSHI]

◀Member▶

谷本　正樹　Masaki Tanimoto(Ds) ref.GERARD
赤松　　剛　Tsuyoshi Akamatsu(Vo)
上地　雅巳　Masami Kamiji(B)

堕落天使は1982年頃に大阪で活動していたマイナーな存在のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。ジェラルドのドラマーであった谷本正樹が、ジェラルド以前に加入していたグループであり、また一時期ルーシフェル(スターレスのボーカルの宮本佳子やセイレーンのドラムスの上野まりあらが在籍していた幻のグループ)に参加していた事もある赤松(Vo)や上地雅巳(B)といったメンバーであった。ノヴェラ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドであったが、ほとんど活動のないままに自然消滅してしまった。

蛇羅尼[DARANI]

◀Member▶

上村　政弘　Masahiro Uemura(G) ref.IO

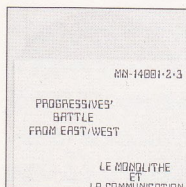
蛇羅尼はIOのギタリストである上村政弘がIOに加入以前にやっていたマイナーな存在のグループ。ほとんど活動もないままに消滅してしまったグループであり、詳細については不明。

剣の舞[TSURUGINOMAI]

◀Member▶

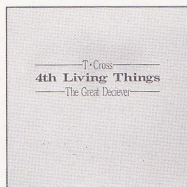
落合　尚典　Naonori Ochiai(B) ex.STARLESS,ORPHEUS,ref.EVE
伊東　　啓　Hiromu Ito(G)
高野　正明　Masaaki Takano(Ds)
妹尾　裕逸　Hirofumi Seo(Kbd)
東　潤一郎　Junichiro Azuma(Vo)

◀Discography▶

● V.A.(7"FLEX1)-「Progressive's Battle」MONOLITH:MN-14001〜3 '85★

オルフェウスを脱退したベースの落合尚典らが中心となって1983年8月に結成された関西のマイナーな存在のハード・プログレッシブ・ロック・グループ。ノヴェラ・タイプのナンバーからファンキーなジャズ・ロック・サウンドまでこなすグループであり、一時期ライブ活動を精力的に行なっていたが結局、サウンドの方向性が固まらずに1986年頃に自然消滅してしまった。なお、彼らは1985年にモノリス・レーベルから発売されたオムニバス・ソノシート「Progressive's Battle」にアウターリミッツ、ページェント等と共に参加している。また、1984年12月31日にキャンディーホールで行なわれたイベント"Progressive Night"にも出演していた。

T.CROSS[T.CROSS]

◀Member▶

黒須つとむ　Tsutomu Kurosu(G,Kbd,B)

● ALBUM-「4th Living Things」'89

● CT-「T.Cross」'90

キング・クリムゾンに影響されてキング・オブ・キングスというグループを結成したギターの黒須つとむは、数回のライブを行なった後に直ぐにキング・オブ・キングスを解散し、1989年にT.CROSSの名儀で自主制作アルバム「4th Living Things」、90年にカセット・テープ作品「T.Cross」をリリース。ギター、キーボード、ベース等を1人でこなして作られたこれらの作品はアマチュア・レベルながら後期クリムゾンから多大な影響を受けたサウンドである。

デジャヴ[DEJA-VU]

◀Member▶

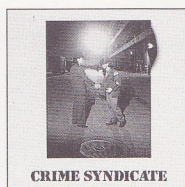
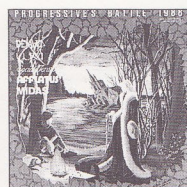
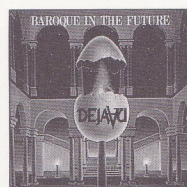
桜庭　統　Motoi Sakuraba(Kbd) ref.SAKURABA BAND

工藤　源太　Genta Kudo(Ds,Vo)

長妻　哲也　Tetsuya Nagatsuma(Vo,B)

井下　憲　Ken Ishita(B) ref.SAKURABA BAND

上野　知己　Tomoki Ueno(Vo,Kbd) ex.OUTER LIMITS

◀Discography▶

● ALBUM-「Baroque In The Future」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1018 '88★/(CD)MCD-3201 '88

● VIDEO-「Ressuraction」MUSICA LIBERO:MLV-2901 '80

● V.A.(LP)-「Progressive's Battle '88」MADE IN JAPAN:MIJ-1017 '88★

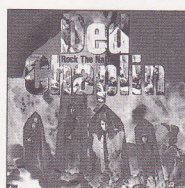
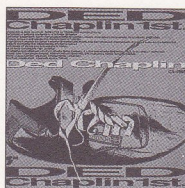
●V.A.(CD)-「Symphonic Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3205 '89
●V.A.(CD)-「Crime Syndicate(※Live)」CRIME:250E-2068 '89
●V.A.(CT)-「Official Bootleg Lives」MADE IN JAPAN:MIJTP-2008 '88★
●V.A.(VIDEO)-「Official Bootleg Lives」MADE IN JAPAN:MIV-58002★

高校時代は秋田でバレー・ボールをやっていた桜庭統は、明治大学に入学して上京し、明治大学のサークル内でドラムスの工藤源太と知り合い、ベースの根元を加えて1984年にEL&Pやセンス・オブ・ワンダーのコピー・バンドであった㊙バンド、ホワイト・スネークのコピー・バンドであったクラッシュド・アイスを経て、1985年に工藤源太(Ds)、長妻哲也(B)と共にデジャヴを結成。結成当初はオリジナルに加えて、UKやEL&Pのナンバー等もライブで取り上げていた彼らは、渋谷ラ・ママや目黒ライブ・ステーション等でライブ活動を開始。UK、EL&Pやロシア・クラシックから影響されたキーボード・トリオ・サウンドと桜庭のキーボード・プレイに、メイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノが注目し、1987年から彼らのマネージメント及びプロデュースを行なう様になった。1987年12月に吉祥寺シルバーエレファントで行なわれた企画ライブ"再現イタリアン・プログレ"にキーボードの桜庭が、アウターリミッツの荒牧(G)、上野(Vo)、石川(B)、VIENNAの西田(Ds)と共に出演して、東京のプログレ・ファンから一躍、注目を集める様になり、1988年4月にメイド・イン・ジャパン・レコードから発売されたオムニバス・アルバム「Progressive's Battle '88」に参加した後、9月にアルバム「バロック・イン・ザ・フューチャー」を発表。東京のプログレ・シーンの中で、若手人気No.1グループとして高い評価を得たが、11月にボーカル&ベースの長妻が就職を理由に脱退して一時活動停止を余儀なくさせられてしまった。1989年1月にアウターリミッツのボーカルであった上野知己を誘い、ベースには明治大学の後輩である井下憲を加えて、新生デジャヴはリハーサルに入り、1989年7月に吉祥寺シルバーエレファントで新生デジャヴとしての初ライブを行い、フランスのアトールを迎えて川崎のクラブ・チッタで行なわれたイベント"クライム・シンジケート"にソシアル・テンション、ロザリア等と共に出演するなど精力的な活動を開始。上野が加入して、今まで弱体であったボーカルが強化され、また桜庭+上野のダブル・キーボード編成となり、サウンドの面でもよりUKやチック・コリア的なジャズ・ロック色を強く押し出した複雑なアンサンブルへと成長を遂げ、演奏力、ライブでの表現力、アレンジ&アンサンブル等の全ての点に於いて飛躍的に進歩を遂げた彼は、ヴィエナなき後のプログレ・シーンの荷負い手として大きな期待が寄せられ、キング・レコードのクライム・レーベルよりアルバム発売が決定したが、キーボードの桜庭が音楽性の相違を理由に解散宣言を発して、1989年10月の渋谷エッグマンのライブを最後に突然の解散となってしまった。デジャヴは桜庭統の優れたキーボード・プレイと作曲力に基づいたUKタイプのキーボード・トリオとして海外のプログレ・ファンからも絶賛されており、1980年代後期の日本のプログレ・シーンを代表するグループの一つであった。特に新生デジャヴのサウンドは素晴らしかったが、クライム・シンジケートのライブのオムニバスCDと解散ライブのビデオのみしか彼らの音を聴く事が出来ず、スタジオ・レコーディングでのアルバムを一枚も残さずに解散してしまったのが惜まれる。なお、現在キーボードの桜庭は一年間の沈黙を破り、元デジャヴのベースの井下とホワイト・ファングのドラムスの下田武男と共にソロ・アルバム「戯曲音創」をメイド・イン・ジャパン・レコードからリリースしており、デジャヴのサウンドをよりチック・コリア的なジャズ・ロックに変化させたサウンド作りをしている。

デッド・チャップリン[DED CHAPLIN]

◀Member▶

二井原　実　Minoru Niihara(Vo) ex.EARTH SHAKER,LOUDNESS
藤村　幸宏　Yukihiro Fujimura(G) ex.GERARD,VIENNA
永井　敏巳　Toshimi Nagai(B) ex.FOUR,AFFLATUS,VIENNA,ref.GERARD,GRAY
菅沼　孝三　Kozo Suganuma(Ds) ex.CHARISMA,DARUMASHOKUDO,99,99,BLACK PAGE,ref.GRAY

◀Discography▶

● ALBUM-「Ded Chaplin」(CD)TRIAD:CA-4696 '80

● CD Single-「Mona Lisa」(CD)TRIAD:CA-8405 '80

● ALBUM-「Rock The Nation」TRIAD:COCA-7145 '91

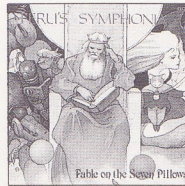
● CD Single-「Rock The Nation」TRIAD:CODA-8648 '91

デッド・チャップリンは1988年にラウドネスを脱退した二井原実が、1989年1月にヴィエナを解散したギターの藤村幸宏を誘い、ソロ・アルバム「ONE」をロサンジェルスでレコーディングを行い、これをきっかけとして、二井原が自らのグループ結成を計画。藤村(G)に元ハリースキュアリのギターの中間英明、元ヴィエナのベースの永井敏己、元44マグナムのドラムスの宮脇智史、ヴィエナ&アウターリミッツのキーボードの塚本周成というライン・ナップでライブ活動をスタートさせ、けっきょく89年暮れには藤村(G)、永井(B)にブラック・ペイジのドラムスの菅沼孝三というライン・ナップとなり、デット・チャップリンを正式に結成。サウンド的にはハード・ロックながら、ヴィエナのメンバーが2人も在籍しているのでヴィエナ風のテクニカルなプログレッシヴ・ロックとしての側面も顔を見せ、また永井=菅沼という現代の日本のロックの頂点に立つテクニックを持つリズム隊によって生み出される複雑多彩なコンビネーションは聴く者を圧倒させる。デット・チャップリンは現在までにアルバム2枚をコロンビア・レコードのトライアド・レーベルより発表している。また、ギターの藤村とベースの永井はデット・チャップリンと平行して、アースシェイカーのキーボードとして活躍している永川敏郎と共にジエラルドとしても活動を開始した。

テルズ・シンフォニア[TERU'S SYMPHONIA]

◀Member▶

平山　照継　Terutsugu Hirayama(G,Vo,Kbd) ex.KIGADOMEI,SCHEHERAZADE,NOVELA
下町　香織　Kaori Shimomachi(Vo) '83～'85,'87
徳久　恵美　Megumi Tokuhisa(Vo) '88～ ex.ANRAKUSHI,LUCLFER,MAGADALENA
仙波　基　Motoi Semba(Kbd) '83,'87～'89 ex.PALE ACUTE MOON,KENNEDY,ref.4LDK
小川　文明　Fumiaki Ogawa(Kbd) '85 ex.SPIRAL,from BLACK PAGE
中尾　唱　Sho Nakao(Kbd) '91～
笹井りゅうじ　Ryuji Sasai(B) '83～'85 ex.NOVELA
井上　靖　Yasushi Inoue(B) '87～ ex.OVERTURE,FERIER,PALE ACUTE MOON
西田　竜一　Ryuichi Nishida(Ds) '83～'85 ex.SOPHIA,NOVELA,ref.VIENNA,JACKSON JOKER,ACTION
古井　英明　Hideaki Furui(Ds) '87～'89
疋田　砂生　Sunao Hikita(Ds) '90～

◀Discography▶

● ALBUM-「ノイの城(Castle of Noi)」(LP)NEXUS:K28P-421★/(CT)NEXUS:K28W-242 '83★

● ALBUM-「Symphonia」(LP)NEXUS:K28P-570 '85★

● ALBUM-「ノイの城+シンフォイア(Castle of Noi+Symphonia)」(CD)CRIME:K32Y-2136 '88

● ALBUM-「Egg The Universe」(LP)CRIME:K28P-714/(CD)CRIME:K32Y-2134 '88

● ALBUM-「Human Race Party」(LP)CRIME:NAS-1409/(CD)CRIME:292E-2046 '89

● ALBUM-「Fable On The Seven Pillows」(CD)SYMPHONIA:SYCD-1 '91

● 7"FLEXI-「Ears For A Hermit」CRIME:SPS-5(Promo) '88

1980年3月にキング・レコードのネクサス・レーベルよりアルバム「魅惑劇」でレコード・デビューして以来、日本のプログレ・シーンはもとより、日本のロック・シーンに於いて人気グループとして活動を続けて来たノヴェラのリーダーであり、ギタリストである平山照継は、1983年に第2期ノヴェラでアルバム「サンクチュアリ」と「最後戦争伝説」を発表すると、自らのソロ・アルバム制作を計画。ノヴェラの西田竜一(Ds)、笹井りゅうじ(B)に仙波基(Kbd)と下町香織(Vo)を集めて、平山のソロ・プロジェクト・ユニットをテルズ・シンフォニアと命名。1983年12月に平山自身が創作した童話に基づいて書き下したファンタジー・ワールドのアルバム「ノイの城」をネクサス・レーベルよりリリース。ノヴェラのサウンドと同様のハード・プログレッシヴ・ロックを基本としながらシンフォニック色を強く押し出した本作は日本のプログレ・シーンに於ける屈指のシンフォニック・ロック作品として、また物語を音楽化した作品としても高い評価を受けた。またこのアルバムの発売記念ライブを1984年4月9日に大阪キャンディー・ホール、4月17日に東京の東横劇場に於いて行なった。その後、平山照継はノヴェラとして活動し、1984年にキーボードの永川敏郎がジェラルド結成の為に、ノヴェラを脱退し、またボーカルの五十嵐久勝もスプリット・オブ・パズルを結成してノヴェラを脱退すると、1985年に西田(Ds)、笹井(B)に岡本優史(Kbd)と宮本敦(Vo)を加えて第3期ノヴェラをスタート。今までのハード・プログレッシヴ・ロックからU2やデュラン・デュラン風のニューウェーヴ・サウンドへとイメージ・チェンジを計った第3期ノヴェラとして活動する傍ら、平山照継はソロ・アルバムの第2弾を計画して、ノヴェラのドラムスの西田竜一、ベースの笹井りゅうじにブラック・ペイジの小川文明(Kbd)、下町香織(Vo)、黒田英津子(Vo)、ページェントの宮武和広(Fl)を集めて、1985年10月にテルズ・シンフォニア名儀の2ndアルバム「シンフォニア」をリリースしたが、第3期ノヴェラが商業的に失敗し、またキング・レコードがプログレッシヴ・ロックへの興味を失い、ノヴェラは1986年に自然消滅。レコード・リリースの場を失なった平山照継は、唯一残ったベースの笹井りゅうじと共に第4期ノヴェラを結成するべく、メンバー捜しと曲作りに明け暮れ、また自らのソロ・プロジェクトの名儀として使っていたテルズ・シンフォニアをノヴェラに代わるプログレッシヴ・ロックのグループとして結成する事を決意して、「ノイの城」の時のキーボード奏者であり、ペール・アキュート・ムーンを解散したばかりであった仙波基、テルズ・シンフォニアのボーカルを務めていた下町香織、仙波基と同じくペール・アキュート・ムーンで活動していたベースの井上靖、オーディションで決めた新人ドラマーの古井英明を集めて正式なグループとして、1987年夏にテルズ・シンフォニアを結成。マネージメント&プロデュースも今までのLUCの山田氏に代わって、VIENNA、ページェント、アウターリミッツなどを抱えていたメイド・イン・ジャパン・レコード(マネージメント・オフィス名はVIENNA GARDEN)のヌメロ・ウエノになって、1987年10月にヴィエナと共に大阪キャンディーホールと東京の渋谷エッグマンにてデビュー・ライブを行なった。(第4期ノヴェラの方は結局、メンバー見つからずに話は断ち切れに終わる。)正式なバンドとして精力的に活動しようとしていたテルズ・シンフォニアの方針に対して、あくまでサポート・メンバーとして参加していた下町とのスタンスの違いにより、1987年12月に下町は脱退して、代わってマグダレーナを脱退したばかりの徳久恵美が新加入をして、バンド"テルズ・シンフォニア"の土台は固まり、1988年3月～4月にかけて大阪のスタジオJAMとキング・レコードに於いてレコーディングを行ない、ネクサス・レーベルに代わって、メイド・イン・ジャパン・レコードとキング・レコードとの共同プロデュースによって新設されたクライム・レーベルからVIENNAに続く第2弾として、1988年7月にアルバム「エッグ・ザ・ユニヴァース」を発表。同7月には東京の科学技術館サイエンス・ホール他でレコード発売記念ツアーを行なった。ボーカルの徳久恵美の表現豊かなボーカル・ワークや仙波基のシンフォニックなアンサンブルとヴァージニア・アシュトレーや坂本龍一などから影響されたアレンジに溢れるセンスの良いキーボード・プレイと、平山照継の多彩なギター・ワーク等によって作り出されるサウンドは、ノヴェラや以前のテルズ・シンフォニアのサウンドよりも、ワーグナーやマーラーといった近代クラシックのオーケストレーションから影響されたシンフォニック・ロック色が強調されたものであり、バンド"テルズ・シンフォニア"としての形態を築き上げたのであった。1989年6月には4thアルバム「ヒューマンレース・パーティー」をキング・レコードのクライム・レーベルより発表。今までの平山流のファンタジー・ワールドからヒューマニズムをテーマとしたこのアルバムは、前作よりもサウンドに磨きがかかり、バンド"テルズ・シンフォニア"としての実力を発揮した彼らの最高傑作であり、バンドとして最も充実した時期を迎えたが、7月に東京、大阪、名古屋、札幌で行なわれた発売記念ツアーを終了後に、ニューウェーヴ系のサウンド指向であった仙波基(Kbd)が脱退。また、1990年1月にはドラムスの古井英明が脱退して、一時期活動停止を余儀なくさせられてしまった。半年間程度、新メンバー捜しとリハーサルを重ねたテルズ・シンフォニアは、ドラムスに疋田砂生とキーボードにサポート・メンバーを加えて、1990年7月にライブを行ない、活動を再開して9月にはスタジオJAMに於いて5thアルバムのレコーディングを行なう。正式なキーボード奏者が不在のまま、平山自身がキーボードも担当して録音されたこのアルバムは平山自身が書き下ろしたアラビアン・ナイト風の童話を音楽化したアルバムであり、絵本的なジャケットの為にメジャー・レコード会社にはこのアイデアは受け入れてもらえず、テルズ・シンフォニアの為のインディーズ・レーベル"シンフォニア"を設立して、1991年2月にアルバム「7つの夜の物語」を発表。現在はキーボードにクラッシック畑出身の中尾が新加入して長い間に渡るキーボード不在情況は解決して、再びプログレ・シーンのリーダー格として活動を開始した。

天地創造[TENCHISOZO]

◀Member▶

山本　要三　Yozox Yamamoto(G) ref.AIN-SOPH,Dr.JEKYL &Mr.HYDE
藤川喜久男　Kikuo Fujikawa(Kbd) ref.AIN-SOPH
鳥垣　正裕　Masahiro Torigaki(B) ref.AIN-SOPH,BELLAPHON
名取　寛　Hiroshi Natori(Ds) ex.ROUND HOUSE,ref.AIN-SOPH

◀Discography▶

●V.A.(CD)-「70'S West Japanese Rock Scene」MADE IN JAPAN:MHD-25013 '91

天地創造というグループは関西のプログレ・シーンが誇るカンタベリー系のジャズ・ロック・サウンドのグループのアイン・ソフの前身グループ。大学時代に組んでいたアマチュア・バンドを解散したギタリストの山本要三が、幽霊船というバンドに在籍していたキーボードの藤川喜久男と知り合い、意気投合して1971年に神戸で結成された。結成当初はメンバーの流動が激しかったが、(シェラザードやノヴェラのボーカルとして活躍する五十嵐久勝も一時期、参加していた事がある。)1975年にリズム隊が脱退して一時期活動停止をしていた彼らは、1976年1月に鳥垣正裕(B)名取寛(Ds)が加入して、本格的なライブ活動を開始。1977年8月には阿木護がDJを担当していたFM NHKの「若いこだま」という番組で、だててんりゅう、飢餓同盟、SBSらと共に出演スタジオ・ライブを行なったり、シェラザートらと共に神戸のヤマハ・センターで行なわれたロック・エナジー等のイベントを始め、数多くのライブをこなし、ナショナル・ヘルスやハットフィールド&ザ・ノースあたりのカンタベリー系のジャズ・ロックから影響された彼らのサウンドは、地元で注目を集める様になって行った。天地創造は当時、「ロッカダム」というプログレ&ブリティッシュ・ロックのミニコミ誌を主宰していたたかみひろし氏のもとへ自分達のデモ・テープを送り、たかみひろし氏は日本にもブリティッシュ系のロック・サウンドを持つグループが存在する事に驚き、キング・レコードに入社して、日本のプログレ・グループをリリースする為のレーベル"ネクサス"を設立して彼らのアルバムの制作を計画するが、1979年にディヴ・スチユワート張りのキーボード・ワークを聴かせ、バンドの大きな魅力の一つとなっていた藤川が脱退。代わって、服部眞誠が新加入して、グループ名も新たに"アイン・ソフ"とたかみひろし氏が命名。1980年5月にファースト・アルバム「妖精の森」を発表。彼らの卓越したテクニックに裏付けされた硬質なカンタベリー系ジャズ・ロックとメロディアスな叙情派プログレとを融合させた組曲"妖精の森"は人気ナンバーとして話題を集めたが、アルバム発売直後にキーボードの服部が脱退して、バンドは活動停止。1984年にベラフォンのドラマーの富家、オリジナル・メンバーであったキーボードの藤川、鳥垣(B)、山本(G)でアイン・ソフを再編成させ、現在でも活動中である。

ディ・ブレイク[DAY BREAK]

◀Member▶

高山　博　Hiroshi Takayama(Kbd) ex.CHARISMA
小倉　淳　Atsushi Ogura(G) '77~'78
長田　和夫　Kazuo Osada(G) '78~'84
近藤　研之　Hiroyuki Kondo(B) '77~'78 ex.CHARISMA
平井　哲也　Tetsuya Hirai(B) '78~'79
宮本　聖二　Seiji Miyamoto(B) '80~
井上　慎一郎　Shinichiro Inoue(Ds) '77~'79 ref.MAITO,MAGDALENA

和田　幸之助　Kounosuke Wada(Ds)'80〜'82 ref.IWAO
瀬戸　　敏雄　Toshio Seto(Ds)'83〜 ref.MASQUE
重松　　克教　Katsunori Shigematsu(Vo,Fl,G)'78〜'79
友枝　　良平　Ryouhei Tomoeta(G,Kbd,Vo)'80〜

DADAやケネディーの泉陸奥陸彦が結成したカリスマのキーボード奏者であった高山博は1977年夏頃からカリスマの活動と平行して、ギタリストの小倉淳との2人のユニット編成でオレゴンやインド旋律を取り入れたジャズ・ロックを始める様になり、77年暮れに高山がカリスマを脱退すると、ギターの小倉、カリスマのベースの近藤研之、ドラムスの井上慎一郎と共にディ・ブレイクを結成。アルバム「危機」頃のイエスの構成力に富んだプログレッシヴ・ロック・サウンドから強い影響力を受け、またマハビッシュヌ・オーケストラやソフト・マシーンといったジャズ・ロックのインタープレイも加味されたサウンドを追求し、1978年春に大阪・森ノ宮青年ホールで行われたイベントに於いてライブ・デビュー。イエス的サウンドを追求した為に、リハーサルにかなり手間取り、ライブ活動を頻繁に行えなかった為に彼らの存在を知るファンは少なかった。78年暮れにギターの小倉から長田、ベースも近藤から平井へとメンバー・チェンジし、またボーカル&フルートの重松が加入して、1979年11月に京都・拾得に於いてライブを行ったが、このライブ終了後にキーボードの高山とギターの長田以外のメンバーが脱退して、1980年初頭にギター&キーボードの友枝、ドラムスの和田、ベースの宮本を加え、またグループ名も新たに"メロディー"と改名して活動を再開して1984年頃まで存在していたが、グループの末期にはメンバーが安定せず、またサウンドの面でも3人編成の現在のジェネシスの様なポップなサウンドへと変化をして行き、自然消滅してしまった。なを、初代ドラムスの井上は舞踏、マグナレーナで活躍。2代目のドラムスの和田はイワオへ加入。また末期メロディーには後にマスクを結成するドラムスの瀬戸が在籍していた。ディ・ブレイクは関西プログレ・シーンの中で決して浮上できなかった存在であったが、そのサウンドは関西プログレ・シーンの中でも本格的なユーロピアン・スタイルのプログレッシヴ・ロックを追求した数少ない存在のグループであった。

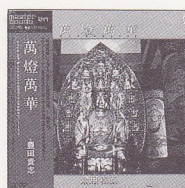
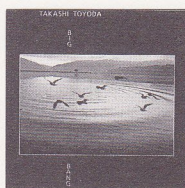
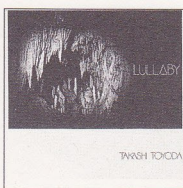
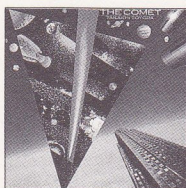
Dr.ジキル&Mr.ハイド[Dr.JEKYL&Mr.HYDE]

◀Member▶
河原　博文　Hirofumi Kawahara(Syn,etc) ref.OSIRIS,ASTRAL TEMPEL,HERETIC
山本　要三　Yozox Yamamoto(G) ex.TENCHISOZO,ref.AIN-SOPH

京都に在住してプライベート・レコーディングによるユニットのオシリスで自主制作アルバム1枚と数本のカセット作品を発表していた河原博文はオシリスの他にアストラル・テンペルという名儀と、このDr.ジキル&Mr.ハイドという名儀でもカセット作品を1983年に発表している。このDr.ジキル&Mr.ハイドというユニットはアイン・ソフのギターリストである山本要三とのユニットであり、美しいアコースティック・サウンドであった。河原博文がオシリスの後に結成したユニットであるヘレティックの2ndアルバム「Escape Sequence」にDr.ジキル&Mr.ハイドのナンバーが収められている。(オシリスの項を参照)

豊田貴志[TAKASHI TOYODA]

◀Member▶
豊田　貴志　Takashi Toyoda(Vln,Syn) ex.SPACE CIRCUS

◀Discography▶

● ALBUM-「彗星(The Comet)」(LP)CBS:32DG-47 '85★
● ALBUM-「Lullaby」(LP)NEXUS:K28P-469 '84★

● ALBUM-「Big Bang」(LP)NEXUS:KICP-2009/(CD)K32Y-3007 '85★

● ALBUM-「Zodiack」(LP)NEXUS:KICP-2010/(CD)K32Y-3008 '85★

● ALBUM-「萬燈萬華(Mantoumange)」(LP)CBS:30AH-1217 '86★

芸大のヴァイオリン科を卒業後の1978年にスペース・サーカスの2ndアルバム「ファンタスティック・アライバル」に参加したヴァイオリン&キーボードの豊田貴志は、いわゆるシンセサイザー・ミュージックのソロ・アルバムの制作を始め、1984年に鍾乳洞の自然エコーを利用したライブ・アルバム「ララバイ」、1985年には近代クラシック和声に基づき、最もプログレッシヴ・ロックとしてのサウンドを聴かせる「彗星」、マインド・ミュージックとして制作された「Big Bang」と「Zodiack」、1986年には「萬燈萬華」などのアルバムを発表している。また彼はポップス業界でスタジオ・ミュージシャンとしても数多くのセッションをこなして現在も活躍中。

トリゾイド[TRIZOYD]

◀Member▶

中潟　憲雄　Norio Nakagata(Kbd) from ACQUA POLIS

坂本　　理　Satoshi Sakamoto(Kbd) ref.SOFT WEED FACTOR

トリゾイドはアクアポリスのリーダーであり、キーボード奏者である中潟憲雄と、パイディアやソフト・ウィード・ファクターのリーダーとして活動するキーボード奏者の坂本理が1982年頃に一時期結成していたユニットで、実験的なジャズ・ロック・サウンドであった。約一年間程、アクア・ポリスやパイディアと平行して活動していた。

中島優貴[YUKI NAKAJIMA]

◀Member▶

中島　優貴　Yuki Nakajima(Kbd) ex.MARTIAN ROAD,LAFF,HEAVY METAL ARMY,ref.EASTAN ORBIT,SABRINA

〈GUESTS〉

佐久間正英　Masahide Sakuma(B,Kbd) ex.MISTOUCH,YONIN-BAYASHI,PLASTICS①

宮永　英一　Eiichi Miyanaga(Ds) ex.MURASAKI,HEAVY METAL ARMY,ref.EASTAN ORBIT①

山本　恭司　Kyoji Yamamoto(G) from VOW WOW①

樋口　宗孝　Munetaka Higuchi(Ds) from LOUNDNESS①、③、④

J.J.　J.J.(Vo) ex.HEAVY METAL ARMY①

チャー　Char(G) ex.SMOKEY MEDICINE,from.JONNY,LUIS&CHAR,PINK CLOUD②、④

ルイス加部　Luis Kabe(B) ex.GOLDEN CUPS,FOOD BRAIN,SPEED,GLUE&SHINKI,from.JONNY,LUIS&CHAR,PINK CLOUD②

ジョニー吉長　Jonny Yoshinaga(Ds) ex.YELLOW,from.JONNY,LUIS&CHAR,PINK CLOUD②

佐藤　真紀　Maki Sato(Vo) ex.TONNY

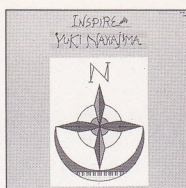
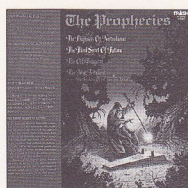
鳴瀬　喜博　Yoshihiro Naruse(B) ex.SMOKEY MEDICINE,BUX BUNNY,OZ,ref.CASIOPEA③

渡辺　　健　Ken Watanabe(B) from.PRISM③

平山　照継　Terutsugu Hirayama(G) ex.KIGADOMEI,SCHEHERAZADE,NOVELA,from.TERU'S SYMPHONIA④

うじきつよし　Tsuyoshi Ujiki(G)④

田中　昌之　Masayuki Tanaka(Vo)④

◀Discography▶

- ALBUM-「大予言〜ハート・オブ・ルネッサンス(The Prophesies〜Heart of Renaissance)」(LP)TRASH:3F-25002 '82★①
- ALBUM-「Inspire」(LP)NEXUS:K28P-450 /(CT)K28W-280 '83★②
- ALBUM-「幻想組曲"やなとなでしこ"(Yamato-Nadeshiko)」(LP)NEXUS:K28P-500/(CT)K28W-346 '84★③
- ALBUM-「孔雀王"幾千年の煌"(Kujakuo)」(LP)STARCHILD:K28G-7388/(CD)K32X-7138 '88④
- ALBUM-「月影(Moonshadow)」(CD)NEC AVENUE:A32C-70 '88
- 7"EP-「ルチアの願い(Lucia's Prayer)」TRASH:3F-702 '82★
- 7"EP-「夢・美聖女(Yume・Bishojo)」NEXUS:K075-7052 '84★

1976年〜79年にかけて札幌で四人囃子の2代目のギタリストとして活躍する佐藤満らと共にマーシャン・ロードというハード・プログレッシヴ・ロック・グループに在籍していたキーボードの中島優貴は、札幌にメンバーを捜しに来たあんぜんバンドの長沢ヒロに引き抜かれて東京に上京。長沢ヒロのグループである"HIRO"、カルメン・マキのLAFFを経て、自らのハード・ロック・グループであるヘビーメタル・アーミー、イースタン・オービットを率いて活動した後、1982年にトリオ・レコードのトラッシュ・レーベルよりソロ・アルバム「大予言〜ハート・オブ・ルネッサンス」を発表。ベースに四人囃子の佐久間正英、ドラムスにラウドネスの樋口宗孝とイースタン・オービット&柴の宮永英一、ギターにバウワウの山本恭司といった日本のハード・ロック界の人気ミュージシャンを揃えた本アルバムは、基本的にハード・ロック・サウンドに仕上がってはいるものの、曲によっては中島のエマーソン張りのパーカッシヴなオルガンをフィーチャーしたサウンドや、シンフォニック・ロックとしての要素も持ち合わせたサウンド作りがされたものであり、彼のアルバムの中で最もプログレッシヴ・ロックとしての要素を押し出した作品であった。その後、中島優貴はジョニー・ルイス&チャーのメンバーを起用したアルバム「インスパイア」、プリズムのベースの渡辺健やベースの鳴瀬らを起用したシンセサイザー・ミュージック&イージーリスニング・アルバム「やまとなでしこ」、平山照継らを起用したロック・サウンドのアニメのイメージ・アルバム「孔雀王」などをリリース。現在はNECアベニューでα波による精神安定の為のシンセサイザー・ミュージック・アルバムを数枚リリースしている。

難波弘之&センス・オブ・ワンダー[SENCE OF WONDER]

◀Member▶

難波　弘之　Hiroyuki Namba(Kbd,Vo) ex.BUX BUNNY
そうる　透　Soul Toul(Ds) '80〜'84 ex.OTOBAKE CATS,from CROSSWIND
鈴木　徹　Toru Suzuki(Ds) '85〜'86 ex.PRISM
小森　景資　Keisuke Komori(Ds) '87〜'89
田辺モットー　Motto Tanabe(B) '80〜'81
荻原　基文　Motofumi Ogiwara(B) '82〜'83
小室　和之　Kazuyuki Komuro(B) '84〜'88
根岸　孝旨　Takamune Negishi(B) '89
厚見　麗　Rei Atsumi(Kbd) '84 ex.MOON DANCER,TAKYON,ref.VOW WOW
〈GUESTS〉
青山　純　Jun Aoyama(Ds) ref.PRISM②
伊藤　広規　Hiroki Ito(B)②

椎名　　和夫　Kazuo Shiina(Syn)②、③
山下　　達郎　Tatsuro Yamashita(Vo)②、③
北島　　健二　Kenji Kitajima(G)②、③
佐久間　正英　Masahide Sakuma(Kbd) ex.MISTOUCH,YONIN-BAYASHI,PLASTICS ③
小川　　銀次　Ginji Ogawa(G) ref.CROSSWIND ③
渡辺　香津美　Kazumi Watanabe(G) ex.KAZUMI BAND ④
中西　　俊博　Toshihiro Nakanishi(Vln)④
瀬川エイイチ　Eiichi Segawa(G) ref.ATLAS

◀Discography▶

● ALBUM-「飛行船の上のシンセサイザー弾き(Hikousenno Ueno Synthesizer Hiki)」
(LP)RVC:RAL-8802 '82★/(CD)RVC:R32A-1004 '87★③

● ALBUM-「真幻魔大戦(Shingenma-Taisen)」(LP)ANIMAGE:ANL-1027 '84/(CD)ANIMAGE:32BTC-7 '87★

● ALBUM-「Green Requiem」(LP)STAR CHILD:K28G-7183 '85★

● ALBUM-「ブルジュワジーの秘かな愉しみ(Le Charme Discret de La Bourgeoisie)」
(LP)RVC:RAL-8822 '85★/(CD)RHCD-552 '85★/(CT)RAT-8822 '85★④

● ALBUM-「N氏の天球儀(The Celestial Globe of Mr.N)」
(LP)RVC:RAL-8837 '86★/(CD)RVC:R32A-1007 '86★/(CT)RVC:RAT-8837 '86★

● ALBUM-「Best Pack of Hiroyuki Namba」RVC(CD)R35A-1001 '86★

● ALBUM-「Synphobeat」(CD)RVC:R32A-1027 '87/(LP)

● ALBUM-「Aqua Planet」(CD)RVC:R32A-1040 '89/(LP)RVC:RAL-8860 '89/(CT)RAT-8860 '89

● 12"EP-「Who Done It?」RVC:RAL-4502 '83

● 7"EP-「Key Station」RVC:RAS-509 '82

● 7"EP-「7½ Dune」RVC:RAS-566 '88

● 7"EP-「Slow Down」RVC:HRTD-3004(Promo) '86

● Single CD-「71/2 Dune」RVC:R10A-102 '88

〈ATLAS〉

● ALBUM-「ハレー彗星(Halley's Comet)」(LP)CROWN:GWL-33 '85★

〈SOLO ALBUM〉

● ALBUM-「Sence of Wonder」(LP)KING:SKS-1032 '79★①

● ALBUM-「Party Tonight」(LP)RVC:RAL-8503 '81★/(CD)RVC:R32A-1003 '87★②

1970年代に金子マリ&バックス・バニーのキーボード奏者としてプロ入りして、山下達郎のバック・バンドや幾多のセッション活動を経たキーボード奏者であり、またSF作家でもある難波弘之は、1979年にキング・レコードより初のソロ・アルバム「センス・オブ・ワンダー」を発表。1981年には2ndソロ・アルバム「パーティー・トゥナイト」をリリースする傍ら、1980年におとぼけキャッツのドラマーであったそうる透、ベースの田辺モットーを率いて、自らのグループであるセンス・オブ・ワンダーを結成。1982年にRVCから発売された難波弘之の3rdアルバム「飛行船の上のシンセサイザー弾き」はセンス・オブ・ワンダーのメンバー(ベースは荻原基文に交代)にクロスウィンドのギターの小川銀次や北島健二(G)、四人囃子の佐久間正英らのゲスト・ミュージシャンを加えて作られたアルバムであり、UKなどのプログレ色を初めて打ち出した作品として仕上っており、バンド"センス・オブ・ワンダー"としての初顔見せアルバムであった。1984年になると、ベースが小室和之に交代し、またムーンダーサーやタキオンのキーボード奏者であった厚見麗が加入して、ダブル・キーボード編成となったセンス・オブワンダーは、平井和正の"真幻魔大戦"のイメージ・アルバムの制作を担当して、初めてバンド"センス・オブ・ワンダー"としてフル・アルバムを制作。またプログレッシヴ・ロック・グループとしての真価をフルに発揮した本作は、雄大なノヴァトロンをフィーチャーしたシンフォニックなものから、EL&P的なキーボード・トリオ・サウンドまで幅広いプログレッシヴ・ロック・サウンドを展開し、またそうる秀と小室和之という鉄壁なテクニックを誇るリズム隊に支えられて、難波弘之と厚見麗という日本のロック界を代表する2人の卓越したキーボード・ワークが見事な作品。1985年に入るとドラムスがそうる秀から元プリズムの鈴木徹へとチェンジして、アニメーションのイメージ・レコード「グリーン・レクイエム」とアルバム「ブルジュアジーの秘かな愉しみ」を発表。また日本青年館でコンサートを行なったり、プログレ史上最大のイベントであった"プログレッシヴ・サーキット"(9月)に出演するなど、最も精力的に活動を行なった年であった。また、翌年にはアルバム「N氏の天球儀」を発表。センス・オブ・ワンダーがプログレッシヴ・ロック・グループとしての真価を発揮し、バンドとしても充実していた時期は1984年〜86年であり、アルバム「真幻魔大戦」や「ブルジュアジーの秘かな愉しみ」を始めとして、この時期にリリースされたものはUKタイプのテクニカルなプログレッシヴ・サウンドを聴かせてくれる作品に仕上がっている。1987年になり、ドラムスが鈴木徹から小森景資にチェンジして発表されたアルバム「シンフォビート」でセンス・オブ・ワンダーは今までのプログレッシヴ・ロックからポップ色を増したロックへと変化。1989年にもアルバム「アクア・プラネット」をリリースしたが、難波弘之のプロダクション・サイドの理由により一時活動停止。1991年3月に再び活動を再開した。難波弘之&センス・オブ・ワンダーは、日本のロック・シーンの頂点に立つテクニックを持つプロ・ミュージシャン達によって結成されたグループであり、1980年代のほとんどのプログレッシヴ・ロック・グループがアンダーグランドなシーンで活動する中、あくまでもメジャー・シーンで活動し続けているグループとして高く評価すべき存在である。

ナイフ・エッジ[KNIFE EDGE]

◀Member▶

繁田由起夫　Yukio Shigeta(Ds)
栃沢　潤　Jun Tochizawa(B) ex.GINKAKU,ref.PICARESQUE OF BREMEN

ナイフ・エッジは1979年頃に活動をしていた東京のアンダーグランドな存在のキーボード・トリオで、EL&Pのカヴァーを主体としてオリジナル・ナンバーも演奏していた。演奏力もかなりのものを持っており、エマーソンの手癖までも表現した彼らの演奏は一部で驚異的な存在と噂さをされる程であった。銀角というハード・ロックとジェスロ・タル風のプログレッシヴ・ロックを融合させたグループをやっていたベースの栃沢潤(後に盛岡でピカレスク・オブ・ブレイメンを結成。)らが参加していた。

ナル・エ[null A]

◀Member▶

田川　和弘　Kazuhiro Tagawa(G)
重田　勝憲　Katsunori Shigeta(Kbd)

ナル・エはカリスマやディ・ブレイクのキーボード奏者として活躍した高山博がカリスマ加入以前にやっていたイエスのコピー・グループのギタリストであった田川和弘とキーボードの重田の2人によって結成されたDADAタイプのシンセセイザー・ミュージック&実験音楽サウンドのユニット。1979年〜90年頃に活動を行っており、DADAと共にライブ活動をしていた事もある。

南無[NAMU]

◀Member▶

西林　Nishibayashi(G) ex.ACID SEVEN
じゅん　Jun(Kbd.Vo)

南無はアシッド・セブンというサイケデリック・ロック・グループに在籍していたギタリストの西林が1970年代初期に結成した横浜のグループ。ユーライア・ヒープやブラック・サバスといったブリティッシュ系のハード・ロック・サウンドを基盤としながら、よりエネルギッシュなオルガンをフィーチャーしたハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドであった。1972年〜74年頃まで活動しており、1974年7月31年〜8月11日までの12日間に渡って福島県郡山市内の開成山公園で行なわれた日本ロック史上最大の野外ロック・イベント"ワンステップ・フェスティバル"の8月8日に外道、シュガー・ベイブ、はちみつぱいらと共に出演していた。

ぬりかべ[NURIKABE]

◀Member▶

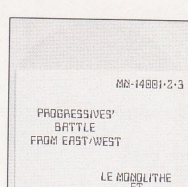
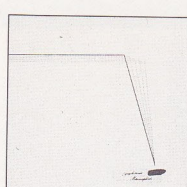
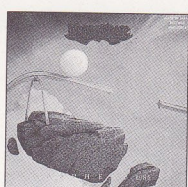
岩崎　匠　Tatumi Iwasaki(Kbd)
佐藤　Sato(G)

ぬりかべは1975年頃に上智大学のサークル内で結成されたグループで、ヴァイオリン、キーボード、ギター、ベース、ドラムスという編成のクリムゾン・タイプの東京のマイナーな存在のグループ。彼らのサウンドはキング・クリムゾンをベーシックとしながらもオリジナリティー豊かなアンサンブルを聴かせる独特のサウンドであった。彼らは学園祭やイベント等でライブ活動を行なっていたが、グループの詳細については不明。1977年頃まで存在していたと思われる。

ネガスフィア[NEGASPHERE]

◀Member▶

川崎　薫　Kaoru Kawasaki(Kbd,B) ref.KALEIDOSCOPE
石井もとい　Motoi Ishii(Kbd,Vo) '78〜'80
矢田　徹　Toru Yata(Kbd) '83〜'85
大森　政人　Masato Omori(G) '78〜'80
真嶋　宏佳　Hiroyuki Majima(G) '81〜'85
渡辺　修　Osamu Watanabe(G) '86 ex.YUSEI
デトレフ・ヨープ　Detlef Job(G) '86 ex.NOVALI S
高沢　悟　Satoru Takazawa(Ds) '78〜'80
佐藤亜希良　Akira Sato(Ds) '80〜'82
菅野　詩朗　Shiro Sugano(Ds) '82〜'85 ex.MAHOUJIN,GREEN
堂免　稔泰　Toshihiro Domen(Ds) '86 ex.YUSEI
坂野　誠二　Seiji Sakano(B) '80〜'82
徳武　浩　Hiroshi Takutake(B) '82〜'85
手塚　啓一　Keiichi Tezuka(B) '86 ex.YUSEI
菊地　Kikuchi(Vo) '84 ex.GREEN
平田　士郎　Shiro Hirata(Vo) '85〜

◀Discography▶

- ●ALBUM-「Castle In The Air」(LP)LLE:1007 '84★
- ●ALBUM-「Disadvantge」(LP)DIW:5001 '85★
- ●ALBUM-「1985〜1986(Live)」(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25014 '91
- ●7"FLEX1-「Change Your Fate」DIW:PLM-088(Promo) '85
- ●CT-「Live」LLE:MM3404 '81★
- ●V.A.(LP)-「My Record Festival Vol. I 」DISKPORT:SE-3086B '79★
- ●V.A.(LP)-「精神工学様変容(Psychotronic Metamorphosis)」LLE:PM-1001 '81★
- ●V.A.(7"FLEX1)-「Progerssives'Battle」MONOLITH:MN14001-3 '84★
- ●V.A.(7"FLEX1)-「Progerssives'Battle '86」MADE IN JAPAN:MIJ-1069(Promo) '86

東京大学に通う川崎薫はボーカル&キーボードの石井もとい、ギターの大森政人、ドラムスの高沢悟(後にインディーズ・レーベルのLLEを主宰。)と共にブリィッシュ・ハード・ロックから影響されたサウンドを追求するグループとして1978年にネガスフィアを結成。(※結成当時、川崎はベーシストであった。)1979年には西武デパートのディスク・ポート主催のアマチュア・ロック・コンテスト"マイ・レコード・フェスティバル"に出演し、このときの演奏がディスク・ポートが制作したオムニバスLP「My Record Festival」に収録されているが、ハード・ロック・グループとして誕生したネガスフィアはサウンド的に煮詰ってしまい、1980年に解散。川崎はネガスフィアをイエスやUKといったプログレッシヴ・ロック・グループとして再結成する事を計画し、1980年暮れにメンバーを一新して、真嶋宏佳(G)、佐藤亜希良(Ds)、坂野誠二(B)を集め、またキーボード奏者がみつからない為に川崎がベースからキーボードへの転向して新生ネガスフィアを結成し、吉祥寺シルバーエレファントを中心として本格的なライブ活動を開始。1981年にLLEレーベルからリリースされたオムニバス・アルバム「精神工学様変容」に参加。この頃のネガスフィアのサウンドは、スティーヴ・ハウに影響された真嶋のギターを中心として、イエスやタイフォン的なシンフォニック・プログレッシヴ・ロックとハード・ロックを融合させたサウンドを展開していたが、バンドとしてはまだ、暗中模索段階であった。1982年になるとドラムスの佐藤とベースの坂野が脱退して、魔法陣やグリーンを渡り歩いて来た凄腕ドラマーの菅野詩朗とベースの徳武浩が加入し、また翌年にはキーボードの矢田徹が加入して川崎(Kbd)、矢田(Kbd)、真嶋(G)、徳武(B)、菅野(Ds)というライン・ナップ(※ボーカリストは定まらず、元グリーンのボーカリストの菊地などが頻繁に入れ替って参加していた。)となり、飛躍的な演奏上の成長を遂げ、またサウンド的にもUK的なアプローチのテクニカル・ジャズ・ロックにイエス風のシンフォニック・ロック色を加味したネガスフィアのオリジナル・サウンドを確立。吉祥寺シルバーエレファントに於いて精力的なペースでライブ活動を行ない、KENSO、アウターリミッツ、アクアポリスと並び80年代の東京のプログレ・シーンを代表するグループへと急成長を遂げて行った。また、ライブに於いてブラッフォード張りの菅野のドラミングはKENSOの山本治彦、美狂乱の佐藤正治と並んで、人気を集め、ネガスフィアの名前を知らしめるのに一役を買っていた。1984年に自主制作レーベルであるLLEよりファースト・アルバム「Castle In The Air」を発表。マーキー誌のベル・アンティーク・レーベルからリリースされたフロマージュの1st「オンディーヌ」、夢幻の1st「シンフォニア・デッラ・ルナ」、といったアルバムとほぼ同時期に発表されたこのアルバムは、プログレ・インディーズ・ブームの先駆的な役割を果たし、一部のプログレ・マニアの間で好評を博したが、正式なボーカリストが不在である為にボーカルが弱体であり、またの当時のプログレ・インディーズの録音条件は今と比べ物にならない程、恵まれていなかったので、ライブに於ける躍動的な演奏を発揮する事が出来ず、今一歩の出来であった。(ただし、録音は悪いながら、B面に収められ

ていた大作“Holly Ground Ceremony”は彼らの最高傑作曲として評価が高かった。) 1985年3月に盛り上がりを見せ始めていた日本のプログレ・シーンに先駆けてマーキー誌のライターを務めていた中藤氏がインディーズ・レーベル“モノリス”を設立して、関東・関西を代表するプログレ・グループ6バンドを収めたオムニバス・ソノシート「Progressives' Battle」を計画して、ネガスフィアも参加。またこのオムニバスの発表を記念して5月3日〜6日に吉祥寺シルバーエレファントで行なわれた“プログレッシヴス・バトル・ライブ”にアウターリミッツ、ページェント、夢幻、アタラクシア、ベラフォンと共に出演して、アウターリミッツと並んで東京のプログレ・シーンを代表するグループへと評価は高まって行き、ボーカリストの平田士郎が加入して彼らにとって最も充実した時期を迎えた。1stアルバムが好セールスを上げた為に、大手輸入レコード店のディスク・ユニオンが主宰するDIWレコードより2ndアルバム発売が決定し、夏にレコーディングを行い、11月に2ndアルバム「Disadvantage」発売。1stアルバムよりも録音条件が改善され、数段上回る出来栄えとなったが、ドラムスの菅野が音楽性の違いを理由に脱退を申し入れて、2ndアルバムの発売記念として1986年1月に渋谷エッグマンで行なわれたライブを最後にドラムスの菅野とベースの徳武、キーボードの矢田、ギターの真鳴が脱退してしまい、演奏の要を失ったネガスフィアは活動停止を余儀なくさせられてしまい、川崎は彼らに代わるメンバー捜しに明け暮れた。1986年5月に第2回“プログレッシヴ・バトル・ライブ”が開催され、ネガスフィアはこれに出演する為に、誘精のベースの手塚とドラムの堂面、ギターの渡辺を誘い、またドイツから日本へ移住して来た元ノヴァリスのギタリストのデトレフ・ヨープを加えてネガスフィアの立て直しを計り、ライブを行なったが、前ライン・ナップでの演奏力には及ばず、川崎は挫折してしまい、1986年秋にネガスフィアを解散。UKとイエスから影響された素晴らしいサウンドと卓越した演奏力を兼ね備えたグループとして、またKENSO、アウターリミッツと並ぶ80年代の東京のプログレ・シーンを支え続けたグループとして、ネガスフィアは高い評価を与えられるべきグループであった。

ネビュラ[NEBULA]

◀Member▶

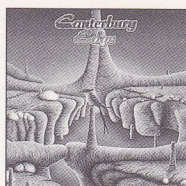
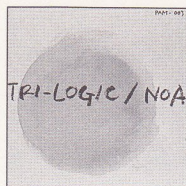
朝日　大輔　Daisuke Asahi(Kbd)
太田　研二　Kenji Ota(B) ex.VERMILION SANDS
的場ひさし　Hisashi Matoba(Ds) from.VERMILION SANDS

ネビュラはキーボード奏者の朝日大輔が、ヴァーミリオン・サンスを1987年に脱退したベーシストの太田研司、ヴァーミリオン・サンズに1987年に加入したドラマーの的場ひさしと共に1988年に結成した東京キーボード・トリオ。EL&Pから影響された朝日のキーボード・プレイとサウンドは、EL&Pよりもトリアンビラートやトレースに近いクラシカルなキーボード・トリオ編成によるプログレッシヴ・ロックであり、好感の持てるサウンドであったが、ほとんど活動を行なわないまま自然消滅してしまった。

ノア[NOA]

◀Member▶

竹迫　一郎　Ichirou Takesako(Ds) ex.ACQUA POLIS
三苫　裕文　Hirofumi Mitoma(G)
桜井　良行　Yoshiyuki Sakurai(B) '88〜 ex.ACQUA POLIS,HAL
大関　隆夫　Takao Ozeki(B) '86〜'87
立花　史郎　Shiro Tachibana(Vo) '88〜

◀Discography▶

● ALBUM-「Tri-logic」(LP)PAM:003 '87

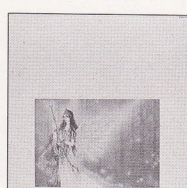
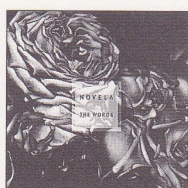
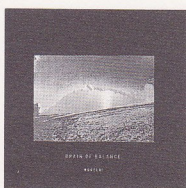
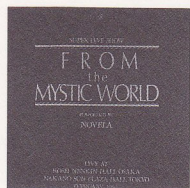
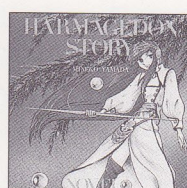
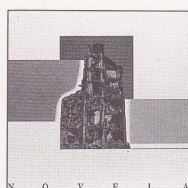
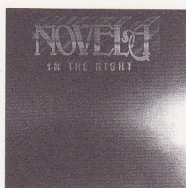
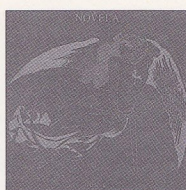
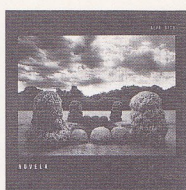
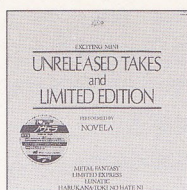
● V.A.(LP)-「Canterbury Edge」MADE IN JAPAN:MIJ-1019 '88★

ブラッフォード・タイプの東京のジャズ・ロック・グループ、アクア・ポリスのドラマーとして活躍していた竹迫一郎はアクア・ポリスのリーダーの中潟の仕事上当合でアクア・ポリスが活動停止してしまうのと前後して、1986年に自らのグループ、ノアを結成。アクア・ポリスのブラッフォード・タイプのジャズ・ロック・サウンドを継承し、よりブラッフォードに近いプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドを追求。1987年に町田にあるレコード店"PAM"のインディーズ・レーベルより、アルバム「Tri-Logic」をリリース。また1988年にはメイド・イン・ジャパン・レコードより発売されたジャズ・ロック・オムニバス「Canterbury Edge」に一曲収録。アラン・ホールズワース張りの三苫のギターワークとブラックフォード狂の竹迫のドラミングが聴かせ所のグループであり、現在でも地道に活動を続けている。

ノヴェラ[NOVELA]

◀Member▶

平山　照継　Terutsugu Hirayama(G) ex.KIGADOMEI,SCHEHERAZADE , ref.TERU'S SYMPHONIA
五十嵐　久勝　Hisakatsu Igarashi(Vo) '79～'84 ex.ZIGGY,SCHEHERAZADE,ref.PUZZLE
宮本　敦　Atsushi Miyamoto(Vo) '85～'86 ex.99.99
山根　基嗣　Mototsugu Yamane(G) '79～'81 ex.SANSUIKAN,ref.ACTION
高橋　良郎　Yoshiro Takahashi(B) '79～'81 ex.SANSUIKAN,ref.ACTION
笹井りゅうじ　Ryuji Sasai(B) '82～'86 ref.TERU'S SYMPHONIA
永川　敏郎　Toshio Egawa(Kbd) '79～'84 ex.RUNBLE,FROMAGE SCHEHERAZADE,ref.GERARD,EARTHSHAKER
仙波　基　Motoi Semba(Kbd) '84 ref.TERU'S SYMPHONIA,PALE ACUTE MOON,KENNEDY,4LDK
岡本　優史　Yushi Okamoto(Kbd) '85～'86
秋田　鋭次郎　Eijiro Akita(Ds) '79～'81 ex.DARUMASHOKUDO,SCHEHERAZADE,ref.ACTION
西田　竜一　Ryuichi Nishida(Ds) '82～'86 ex.SOPHIA,ref.TERU'S SYMPHONIA,VIENNA,JACKSONJOKER,ACTION

◀Discography▶

- ALBUM-「魅惑劇(Novela)」(LP)NEXUS:GP-800 '80★/(CT)AOF-5148 '80★/(CD)CRIME:280E-2021 '89
- ALBUM-「In The Night」(LP)NEXUS:K26P-30 '80★/(CT)K26W-15 '80★/(CD)CRIME:280E-2022 '89
- ALBUM-「Paradise Lost」(LP)NEXUS:K28P-218 '81★/(CD)CRIME:K32Y-2135 '88
- ALBUM-「聖域(Sanctuary)」(LP)NEXUS:K28P-332 '83★/(CD)CRIME:K32Y-2127 '88
- ALBUM-「最終戦争伝説 I (Harmagedon Story I)」(LP)STAR CHILD:K25G-7134 '83★
- ALBUM-「最終戦争伝説II(Harmagedon Story II)」(LP)STAR CHILD:K28G-7212 '84★
- ALBUM-「最終戦争伝説 I &II(Harmagedon Story I &II)」(CD)CRIME:280E-2051 '90
- ALBUM-「From The Mystic World」(LP)NEXUS:K20P-441〜2 '84★/(CD)CRIME:KICS-2052〜3 '90
- ALBUM-「Brain Of Balance」(LP)NEXUS:K28P-527 '85★/(CD)NEXUS:
- ALBUM-「The Words」(LP)NEXUS:K28P-647 '86★/(CD)NEXUS:K32Y-2042 '86★
- ALBUM-「Best Of Collection」(CD)NEXUS:K32Y-2043 '86★
- 12'EP-「青の肖像(Requiem)」NEXUS:K18P-150 '81★
- 12'EP-「Secret Love」NEXUS:K18P-419 '83★
- 12'EP-「Unreleased Tracks」NEXUS:K20P-491 '84★
- 12'EP-「Alpha City」NEXUS:K12P-526 '85★
- 12'EP-「Land of Time」NEXUS:K20P-592 '86★
- 7'EP-「Jealousy」NEXUS:K07S-7004 '80★
- 7'EP-「Magical Action」NEXUS:K07S-GK7501 '80★
- 7'FLEXI-「Illusion」NEXUS:SPS-1(Promo) '84
- VIDEO-「Novela I 」LUC '83★
- VIDEO-「Novela II」LUC '83★
- VIDEO-「聖域(Sanctuary)」LUC '84★
- VIDEO-「In Person」TOEI VEIDEO:TE-M359 '85★
- VIDEO-「Novela History I 」LUC '86★
- VIDEO-「Novela History II」LUC '86★

ハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドを確立させ、地元神戸を中心として絶大な人気を博していたシェラザードは、「ロッキンf」誌のアマチュア・テープ・コンテストのグランプリに輝いた矢先、より強力なグループを飾る為に、1978年12月21日に大阪バハマに於いて解散コンサートを行なった。そしてシェラザードを解散させたリーダーであり、ギタリストの平山照継、キーボードの永川敏郎、ボーカルの五十嵐久勝、ドラムスの秋田鋭次郎の4人は、シェラザードのマネージメントを行なっていたLUCの山田氏の紹介によって、1978年12月27日御堂会館で行なわれたライヴを最後に時を同じくして解散した地元神戸の人気ハード・ロック・グループ、山水館のベースの高橋良郎とギターの山根基嗣を加えて、1979年2月にノヴェラを結成。レコード会社への売り込みの為に3月に大阪の天満にあったストリップ劇場“ロマン座”のステージを借りて、“名もなき夜のために”、“涙の

中へ"、"誘惑の街へ"の3曲を録音してデモ・テープを制作。彼らは連日リハーサルを重ね、4月30日に兵庫ピッコロ・シアターにてデビュー・ライヴを行なった。地元で急激な人気を得てきたシェラザードと山水館の主力メンバーが集まり結成されたノヴェラは、地元音楽関係者を始めロック・ファンからも大きな期待を寄せられてのデビューライヴであり、充分にその期待に応え彼らは一躍、関西に於いて人気NO.1ロック・グループとしての地位を築き上げた。6月にはキング・レコードへの売り込みの為にピッコロ・シアター小ホールに於いて、"恋はあまのじゃく(ロング・ヴァージョン)"、"イリュージョン"、"レティシア"の3曲を録音して2回目のデモ・テープ制作を行なった。当時キング・レコードのディレクターであったたかみひろし氏は、天地創造(のちにアンソ・ソフと改名。)のレコードを制作する為のキング・レコード内にプログレッシヴ・ロック・レーベル"ネクサス"を新設して発売の準備を進めており、天地創造のマネージメントも行なっていたLUCの山田氏の紹介でノヴェラの存在を知り、ロッキンｆ のテープ・コンテスト優勝の肩書きがあったノヴェラの方が好セールスを望めるというキング・レコードの営業サイドの判断によって、ネクサク・レーベルの第1弾アーティストとしてノヴェラのデビューが決定された。デビューが決定したノヴェラは、9月22日～29日にかけて東京のキング・レコード・スタジオ及びCBSソニー六本木スタジオに於いてレコーディングを行ない、また10月9日に新宿ロフトにて東京初ライブを行なった。新宿ロフト開業以来第2位の動員を記録(286人)し超満員で行なわれたこのライブで、早くも東京に於いても彼らは人気ロック・グループとしての第一歩を踏み出したのであった。1980年3月5日にデビューアルバム「魅惑劇」発売。3月8日に東京・青山タワーホール、3月11日に大阪厚生年金会館ホールに於いて初ホール・ライブによるレコード発売記念コンサートを行なった。また、東京12チャンネルのテレビ番組「ぼくら野球探偵団」の主題歌を担当し、主題歌のシングル「マジカル・アクション」が4月21日に発売され、ノヴェラ自身もこの番組に人気グループ"ノヴェラ"が誘拐されるという設定で出演したり、東京12チャンネルの番組「独占おとなの時間」にもゲスト出演して"イリュージョン"を披露するなど、精力的なプロモーション活動を行なった。ルネッサンスやピーターハミルといったプログレッシヴ・ロックと、クィーンから影響された平山照継が書き下ろすナンバーは、シンフォニック・プログレッシヴ・ロックとしてのファンタジーと壮大なスケールを生み出し、またスリリングなハード・ロックとしての側面を持つサウンドであり、ドラムスの秋田鋭次郎とベースの高橋良郎が生み出すパワフルでテクニカルなリズムに支えられ、ジェネシスやエディー・ジョブソンから影響された永川敏郎のオルガン、メロトロン及び多彩なシンセサイザーによる華麗なアンサンブルと、プログレッシヴ・ロック色を描く平山照継と、生きの良いストレートなハード・ロック・ギターを弾く山根基嗣の2人のギタリストが演出する対比、3オクターヴに及ぶ五十嵐久勝のハイトーン・ヴォイスと高橋、平山らによる多彩なコーラス・ワークが一体となって、複雑な音楽性を持ちながらパワー溢れるハード・ロックを感じさせるノヴェラ流の"ハード・プログレッシヴ・ロック"サウンドは当時の日本のロック・シーンにとって衝撃的な存在であった。また、メンバー全員、派手なメイクと派手なステージングを行ない、その為にプログレ・マニア達や評論家達からミーハー・バンドだと見なされ、賛否両論されたが、当時のノヴェラの人気は凄かった。コンサートはいつも超満員であり、彼らは熱狂的な女の子のファンの間ではヴィオロンを着て、ジュラルミン・ケースにステッカーをベタベタと貼るというファッションまで生み出され、日本で最も人気の高いプログレッシヴ・ロック・グループはもとより、当時、日本で最も人気が高かったロック・グループとして日本のロック・シーンの中でカリマス的な存在へと押し上げられて行った。

1stのアルバム発売から3ケ月という早いペースで2ndアルバムのレコーディングを6月25日～7月5日にかけてキング・レコード・スタジオにて行い、2ndアルバム「イン・ザ・ナイト」が10月21日、2ndシングル「ジェラシー」が11月21日に発売された。また11月～12月にかけて来日したガールのサポートを務め、東京・浅草国際劇場(2日間)、大阪フェスティバル・ホール、名古屋市公会堂でライブを行なった後に2ndアルバムのレコード発売記念コンサートを東京千代田公会堂(12月21日)、大阪高槻市民会館(12月24日)に於いて行なった。

1stアルバムのレコーディングの時点から2ndアルバムのB面に収録する予定になっていた大曲"回想のかけら"を収めた2ndアルバムは、プログレ・マニア達からも大きな注目を集め、彼らの実力が認められて行った。翌1981年2月23日～3月1日にかけてレコーディングされたミニ・アルバム「青の肖像」が6月21日に発売され、第1期ノヴェラの人気は最高潮に達し、4月16日に第1期ノヴェラとしては最大の規模のコンサートが渋谷公会堂で行なわれ、彼らの人気バンドとしての実力が最も充実した時期を迎えた。充実した時期を迎え波に乗っていたノヴェラは、今まで制作した2枚のアルバムでのレコーディング上の不満を解消すべく、元四人囃子のギタリストの森園勝敏をサウンド・プロデューサーに迎え、3ndアルバム「パラダイス・ロスト」のレコーディングを9月2日～15日にかけてキング・レコード・スタジオにて行なった。平山照継らも語っているように、森園勝敏をプロデューサーに迎えた事は彼らにとって、録音やトラック・ダウンをする上で強力な味方となり、トータル・アルバムとして作られた「パラダイス・ロスト」は、ノヴェラ自身にとっても、リスナー・サイドから見ても完成度の高いノヴェラの最高傑作アルバムに仕上がった。また、この「パラダイス・ロスト」や「青の肖像」の頃から平山照継の作曲に大きな変化が現われ、今までロック・バンド的なアンサンブル・アレンジでしかなかった彼のプグレッシヴ・ロック・サウンドの中に、ワーグナーやマーラーといったクラシックから影響された対旋律によるアンサンブルや、オーケストレーション的な発想が取り入れられる様になり、これ以降のノヴェラのサウンドや、現在のテルズ・シンフォニアのサウンド作りの基本的姿勢が形成され始めた訳だ。特に「青の肖像」はこの点に於いて平山の生み出す音楽にとって記念すべき作品と言えよ

う。11月17日に大阪毎日ホールに於いて行なわれた"第1回ヘビーメタル・ファンタジー"に子供ばんど、バウワウと共に出演。3rdアルバム「パラダイス・ロスト」が12月21日に発売され活動情況及び作り上げた音楽の充実度は頂点に達していた彼らであったが、「パラダイス・ロスト」のレコーディング時あたりから、平山照継のプログレッシヴ・ロック指向に対して、ストレートなハード・ロック指向であったベースの高橋良郎との音楽性の相違が表面化し、ベースの高橋良郎、ドラムスの秋田鋭次郎、ギターの山根基嗣はノヴェラを脱退して、新しいグループ結成を決意。1982年1月22日に大阪毎日ホールで行なわれた"第2回ヘビー・メタル・ファンタジー"(共演:カルメン・マキ&5X、ラウドネス)で脱退を表明して、3月19日に大阪毎日ホールで行なわれた"気まぐれナイト"コンサートを最後に脱退し、第1期ノヴェラは終止符を打った。メンバーの半数が脱退して、残されたギターの平山、キーボードの永川、ボーカルの五十嵐は、新メンバー捜しのオーディションに明け暮れ、当初は関西で運営している彼らの事務所のLUCのマネージメントの限界を感じて、東京のプロダクションを捜し、メンバーも東京で捜す事を考えたが、ノヴェラを受け入れてくれる東京サイドのプロダクションが見つからずに、結局は関西に残留を決め、五十嵐の知人を通じてオーディションにやってきた新人のベーシストである笹井りゅうじと、ソフィアのオリジナル・メンバーであったドラムスの西田竜一に決定して、第2期ノヴェラのリハーサルを8月から開始。(ノヴェラを脱退した高橋良郎、秋田鋭次郎、山根基嗣は山水館のサウンドの延長線上のハード・ロック・グループ、アクションを結成。)11月に第2期ノヴェラとしの第1弾アルバム「聖域(サンクチュアリ)」のレコーデイングを行い、12月4日に夙川バートン・ホールに於いて開かれたファン・クラブの集いで新生ノヴェラとして初めて人前で演奏した後、12月27、28日に東京・目黒鹿鳴館、12月30日に大阪バラードに於いて正式な第2期ノヴェラの初ライブを行なって再スタートを切った。新加入のリズム隊は若い人材である為に、秋田=高橋のリズム隊の派手な迫力には及ばないまでも、第1期と並ぶ演奏力を身につけたノヴェラは、第1期の時よりも人気は上昇して行ったが、1983年2月にアルバム「聖域(サンチュアリ)」が発売され、東京郵便貯金会館と大阪毎日ホールでの発売記念コンサートを終えると、あくまで関西に留まり活動を続けて行くノヴェラの方針に対して、東京での活動を望んだキーボードの永川敏郎は、ノヴェラ脱退と自らのグループ、ジェラルド結成の決意を固めて、堕落天使というマイナーなハード・プログレッシヴ・ロック・グループに在籍していたドラムスの谷本正樹を連れて東京へ上京。永川が東京へ上京してしまった為に思う様に活動やリハーサルがとれなくなってしまったノヴェラは、半年に1回くらいのペースでのライブ活動を余儀なくさせられてしまった。永川が上京して直ぐの4月に山田ミネコ原作の少女コミックス「最終戦争伝説」のイメージ・アルバム「最終戦争伝説」のレコーディングを行い、7月に発売。このアルバムはアニメ・ファンの強い支持を得て、ノヴェラの1stアルバム「魅惑劇」に続く好セールスを記録し、ジャパンやクィーンといった海外アーティストのファンの女の子、"ヴィオロン族"の女の子、ハード・ロック・ファン、アニメ・ファンを巻き込んで、行き着く所を知らぬ勢いの人気を誇っていたノヴェラの内情はしっくりと行かず、9月にミニ・アルバム「シークレット・ラヴ」と「Unreleased Takes」のレコーディングを行なった後、ノヴェラのメンバーのソロ・アルバムの企画が持ち上がり、平山照継はノヴェラのサウンドよりも明確にルネッサンスあたりのプログレッシヴ・ロックとクラシックのオーケストレーションから影響されたサウンドのアルバム「ノイの城」を、ノヴェラのリズム隊の笹井(B)、西田(Ds)、と仙波基(Kbd)、下町香織(Vo)、というメンバーを集めて、テルズ・シンフォニア名義で12月に発表。また自らのグループ、ジェラルド結成の為のメンバーを東京で捜した永川敏郎は元クリエイションのアイ高野のグループであるビーハイブでギターを担当していた藤村幸宏、デビルスというハード・ロック・グループに在籍していた魚谷泰正(B)と大阪から連れて来たドラムスの谷本正樹に美狂乱の伝説的ドラマーの佐藤正治とフォノジェニックスのベースの川田洋平をゲストに加えて、11月にレコーディング。そして、ノヴェラは翌年の1984年2月27日の中野サンプラザと2月21日の大阪厚生年金ホーに於いて、ライブ・アルバムの為のコンサートを行なった。このコンサートは第2期ノヴェラのライブの中で、最もボルテージの高い演奏を繰り広げたが、このコンサートを終了後、キーボードの永川敏郎がジェラルドに専念する為に正式に脱退し、ボーカルの五十嵐も音楽性に違いを理由に脱退してしまい、結果的にはこのライブが、第2期ノヴェラとしての最後のステージとなってしまった。表向きは永川敏郎のソロ・アルバムとして、3月にアルバム「ジェラルド」が発売され、ジェラルドは3月24、25日に東京・鹿鳴館、3月30、31日に大阪キャンディー・ホールに於いてライブ・デビューし、五十嵐久勝もポップ・サウンドのソロ・アルバム「パズル」を発表し、自らのグループ、スプリット・パズルを結成して活動を開始した。一方、平山照継は、4月に東京・東横劇場ホールと大阪キャンディー・ホールに於いてテルズ・シンフォイアのアルバム「ノイの城」の発売記念ライブを行なった後、第2期ノヴェラとしての最後のアルバムとなった山田ミネコ原作の「最終戦争伝説2」を6月にレコーディング。表面的には第2期ノヴェラの作品となっているこのアルバムはテルズ・シンフォニアのキーボードの仙波基とボーカルの下町香織が全面的に参加しており、先に脱退したキーボードの永川は2曲だけソロ・パートを弾いた程度の参加であり、実質的にはテルズ・シンフォニアのメンバーで作られたノヴェラ名義のアルバムであった。9月にアルバム「最終戦争伝説2」が発表され、一般のファンに対しては、10月になって永川、五十嵐の脱退がやっと正式に発表され、ファンの間で"永川、五十嵐脱退コンサートの実現"の抗議と署名運動も起こったが、ノヴェラの新たなるメンバー捜しの為のオーディションを行ない、元99.99のボーカルであった宮本敦、プロ活動をしていたキーボードの岡本優史を迎え、第3期ノヴェラのリハーサルに専念していた。"もういつまでもハード・プログレをやっていても古い。もっとポップなサウンドをやれ。"というレコー

ド会社やプロダクションの意見を聴き入れた平山照継は、今まで彼が作り上げたきたハード・プログレッシヴ・ロックを捨てて、デュラン・デュランやカジャ・グー・グーといったニューウェーヴ・サウンドへとイメージ・チェンジを計り、1985年1月に大阪キャンディー・ホールに於いて、変貌した第3期ノヴェラの初ライブを行なった。4月にはアルバム「ブレイン・オブ・バランス」と12"インチ・シングル「アルファ・シテイー」を発表して、4月26日には渋谷公会堂に於いて発売記念コンサートを行なったが、(このライブの模様はビデオ「In Person」として東映ビデオから発売された。)今までのノヴェラのファンからは、五十嵐、永川の脱退とサウンドの大幅なイメージ・チェンジに対する失望を買い、煮詰まってしまった彼らは、1985年10月16日に大阪キャンディー・ホールで行なわれたライブを最後にライブ活動を停止。1986年には12"インチ・シングル「ランド・オブ・タイム」と4月〜5月にかけてアルバム「ワーズ」(この「ワーズ」は第3 期ノヴェラ・サウンドの集大成アルバムであり、サウンド的にはプログレッシヴ・ロックとは呼べないが、現在のテルズ・シンフォニアの手法やティアーズ・フォー・フィアーズ風のプログレッシヴなアイデアに富んだ良質のポップ・アルバムとして完成度が高い傑作であった。)のレコーディングを行なったが、レコーディング終了後に、キーボードの岡本が渡米の為に脱退。またボーカルの宮本とドラムスの西田も情況的な不満を理由に脱退してしまい、平山照継と笹井りゅうじの2人は1987年春に第4 期ノヴェラを結成するべくデモ・テープを制作して、メンバーとレコード会社捜しをするが挫折してしまい、日本のプログレ史上、最大のグループ、ノヴェラの輝かしい歴史の幕は下ろされた。日本のプログレシッヴ・ロック・シーンを代表する作曲家、平山照継が生み出すスリリングなハード・ロックと、ルネッサンス、ジェネシス風のプログレッシヴ・ロック、マーラーやワーグナー流の対旋律によるアンサンブルとオーケストレーション、クィーンから影響された多彩なアンサンブル・ロックを融合させたサウンドは、ノヴェラ流の"ハード・プログレッシヴ・ロック"という新しいジャンルを確立させ、ノヴェラは日本のプログレ史上、最も商業的な成功を納めたバンドであるばかりか、彼らの存在は多くのアマチュア・プログレッシヴ・ロック・ミュージシャンに影響を与え、特に関西プログレッシヴ・ロック・シーンの活性化に大きな役目を果し、また"ヴィオロン族"というファッションまで生み出したのであった。なをノヴェラに参加したメンバー達のその後の動向についてふれておくと、リーダーの平山照継は第4期ノヴェラを結成する事に挫折した後、ノヴェラに代わるパーマネント・グループとして以前にソロ・ユニットであったテルズ・シンフォニアを正式にグループとして結成。プロダクションも長年籍を置いていたLUCからヴィエナ・ガーデンへと移籍して、現在までにアルバム3枚制作して、現在でも日本のプログレ・シーンの第1線で活躍。第1期〜第2期のキーボード奏者である永川敏郎はジェラルドでアルバム2枚を制作した後、アースシェイカーに加入して、現在でも活躍する傍ら、6年振りにジェラルドを復活させてニューアルバムを発表。第1期〜第2期のボーカルの五十嵐久勝は自らのグループ、スプリット・パズルで活躍した後、現在では現役ミュージシャンを離れ、大阪でスタジオ・パズルを経営。第1期のベーシストの高橋良郎は、ノヴェラ脱退から現在までハード・ロック・グループ、アクションで活躍している。第1期のドラマーの秋田鋭次郎は高橋良郎、山根基嗣と共にアクションを結成して、アルバム1枚を制作した後、一身上の都合で現役ミュージシャンを引退。第1期のギタリストである山根基嗣はアクションを経て現在では元爆風スランプの江川ほーじんのグループ、ライナセロスで活動。
第2期〜第3期のドラマーの西田竜一は、ノヴェラ脱退後、東京へ上京してジェラルドの藤村(G)、アウターシュミッツの塚本(Kbd)、アフレイタスの永井(B)共にヴィエナを結成し活動した後、ジャクソン・ジョーカーを経て、現在は高橋良郎と共にアクションで活躍、第2期〜第3期のベーシストの笹井りゅうじはノヴェラ解散後、現役ミュージシャンを引退し、コンピューター関係の仕事についている。

ハーレクイン [HARLEQUIN]

◀Member▶

関口　　敦　Atushi Sekiguchi(kbd)
藤井久美子　Kumiko Fujii(Vo)
一関　博光　Hiromitu Ichinoseki(G)
川久保貴生　Takao Kawakubo(Ds)
斉藤　真一　Sinichi Saito(B)

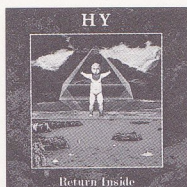
ハーレクィンは1986年12月に結成された東京のマイナーな存在のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。ノヴェラからの影響が多大なサウンドを持つアマチュア・グループであり、吉祥寺シルバーエレファント等で数回ライブを行なっていたが、約1年程度の間活動した後に活動停止し、自然消滅してしまった。

ハイ [HY]

◀Member▶

佐々木慈子　Yoshiko Sasaki(Vo,Kbd)

小松　義光　Yoshimitsu Komatsu

◀Discography▶

● ALBUM-「Return Inside」(CD)SYNTAX:MFX-K0001'87

HYは女性ボーカル&キーボード奏者の佐々木慈子とキーボード奏者の小松義光の2人によるシンセサイザー・ミュージックのデュオ・ユニットであり、1987年に自主制作レーベル"シンタック"からプライベート録音されたCDアルバム「Return Inside」を発表している。佐々木のしなやかなボーカルをフィーチャーしたメロディアスなシンセ・ミュージック作品である。なお、シンタック・レーベルでは他にもシンセ・ミュージック作品をリリースしており、自主制作によるプライベート・ミュージック・レーベルである。

盃勝浮 [PAIKAPPU]

◀Member▶

筒井　徹志　Tetsushi Tsutsui(Ds,Taiko)

筒井　宗志　Takashi Tsutsui(G,Syn,Biwa)

志村平兵衛　Heibei Shimura(B)'79~'82

石野　秀丸　Hidemaru Ishino(G)'79~'82

岩佐　　透　Toru Iwasa(Kbd,Vo)'83~

外崎　　洋　Hiroshi Sotozaki(B)'83~

矢野　悦生　Etuo Yano(A-G,Biwa)'83~

◀Discography▶

● CT—「盃勝浮(Same)」'83★

● V.A.(LP)—「My Record Festival Vol.7」DISKPORT:DMF-7 '81★

盃勝浮はギターの筒井宗志とドラムスの筒井徹志兄弟を中心として、1972年に結成されたエアーズを源流に持つ東京のアンダーグラウンドな存在のグループ。1976年にエアーズから、ジュノーと改名し、更に1979年に盃勝浮と改名。筒井(G)、石野(G)、志村(B)、筒井(Ds)というライン・ナップとなった彼らは、1981年に西武デパートのディスク・ポートが主催するコンテスト"My Record Festival"に参加。(ディスク・ポートで制作されたオムニバス・ライブ・アルバム「My Record Festival Vol.7」の爆風スランプの前身グループ、スーパー・スランプらと共に収録されている。)和旋律を取り入れたイル・ヴォーロやキャメル風のメ

ロディアスなインストゥルメンタル・プログレッシヴ・ロックを聴かせていたが、1983年になり、筒井兄弟以外のメンバーが全てチェンジして、岩佐(Kbd,VO)、外崎(B)、矢野(琵琶,A.G)に筒井兄弟となった盃勝浮は琵琶や太鼓といった邦楽器をフィーチャーして、より和旋律を強調したサウンドへと変化し、自主制作カセット作品「盃勝浮」をリリース。その後は活動停止していたが、1985年春に吉祥寺シルバーエレファント等でライブ活動を再開したが、翌年には自然消滅してしまった。

バイブル・ブラック [BIBLE BLACK]

◀Member▶

浅沼　　孝　Takashi Asanuma(G) ref.YBO2
三輪厚太郎　Kotaro Miwa(Ds)
金井浩〈ロゼ〉　Hiroshi Kanai〈Rose〉(G,Kbd,B) ex,EURASIA,ref.ROSE BAND

◀Discography▶

●CT一「Bible black」ROAD '85★

後に自主制作カセット・テープ・レーベル、ROADレコードを主宰する金井(G)がユーラシアを1981年に脱退した後に結成した東京のマイナーな存在のプログレッシヴ・ロック・グループ。金井浩がギター、キーボード、ベースを担当し、後にYBO²に参加したギターの浅沼とドラムスの三輪というトリオ編成の彼らは、後期クリムゾン風のナンバーからノヴァリス風のメロディアスなナンバーまで幅広いサウンドを持っていた。金井浩は約2年間程、バイブル・ブラックで活動後、1983年からはROSEという名前でソロ作品を自主制作レーベルから発表している。

パッゾ・ファンファーノ・ディ・ムジカ [PAZZO FANFANO DI MUSICA]

◀Member▶

荒牧　　隆　Takashi Aramaki(A-G,E-G) ex.ATARAXIA,OUTERLIMITS,VIENNA, ref.PAS DE DEUX,KANON,AFTER THE RAIN
杉本　　正　Tadashi Sugimoto(E.B,Contra-Bass,Cello) ex.OUTERLIMITS,from KANON
川口　　貴　Takashi Kawaguchi(Vln) ex.OUTER LIMITS,from KANON
宮武　和広　Kazuhiro Miyatake(Fl,A-G,Comp.) from Mr.SIRIUS,PAGEANT
桜庭　　統　Motoi Sakuraba(P,Comp.) ex.DEJA-VU,ref.M.SAKURABA BAND
桜井　信行　Nobuyuki Sakurai(Ds) ex.MOBIUS,OUTERLIMITS
杉本　恭子　Kyouko Sugimoto(P,Celesta)
林　　克彦　Katuhiko Hayashi(Organ,Mellotron,Comp.) ex.MUGEN,PAGEANT
上野　知己　Tomoki Ueno(Organ,Mellotron) ex.OUTERLIMITS,DEJA-VU
徳久　恵美　Megumi Tokuhisa(Vo) ex.ANRAKUSHI,LUCIFER,MAGDALENA,from TERU'S SYMPHONIA
塚本　周成　Shusei Tsukamoto(Comp.) ex.OUTERLIMITS,MOBIUS,VIENNA
平山　照継　Terutsugu Hirayama(Comp.) ex.KIGADOMEI,SCHEHERAZADE,NOVELA,from TERUS SYMPHONIA
藤井　　卓　Taku Fujii(Comp.) ex.ANRAKUSHI,from MAGDALENA

◀Discography▶

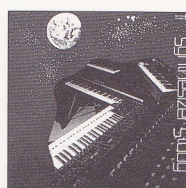
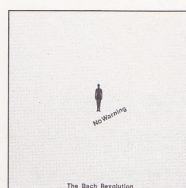
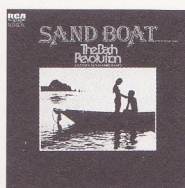
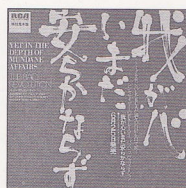
● ALBUM-「狂気じみた饒舌家の音楽」(Pazzo Fanfano di Musica)」(CD)CRIME:292E-2081'89

パッゾ・ファンファーノ・ディ・ムジカはヴァイオリンやチェロ、フルート、ピアノ、チェンバロといったアコースティック楽器をフィーチャーした室内楽的なクラシカル・ロック・サウンドのアルバムを制作する為に集まったユニット名であり、1989年12月にアルバム「狂気じみた饒舌家の音楽」をクライム・レーベルからリリースしている。作曲陣にアウターリミッツ&ヴィエナの塚本、ノヴェラ&テルズ・シンフォニアの平山、マグダレーナの藤井、夢幻の林、デジャヴの桜庭、Mr.シリウスの宮武、演奏陣にはアウターリミッツの川口(Vln)、杉本(B,Cello)、桜井(Ds)、荒牧(G)、上野(Kbd)、デジャヴの桜庭(P)、Mr.シリウスの宮武(Fl,A-G)、林(Kbd)、テルズ・シンフォニア&マグダレーナの徳久(Vo)といったメイド・イン・ジャパン・レコードとヴィエナ・ガーデンに所属するアーティスト達による豪華な顔ぶれによって制作されたこのアルバムは作曲家陣が在籍しているグループのサウンドの臭いを感じさせる室内楽クラシカル・ロックに仕上がっており、オパス・アヴァントラ風のナンバーから、バロック風の作品、PFMから影響されたプログレッシヴ・ロックまでイタリアを強く意識した作品である。なお、このユニットはこのアルバムだけの為のものであり、他に活動はない。

バッハ・リヴォリューション [BACH REVOLUTION]

◀Member▶

鈴川　元昭　Motoaki Suzukawa(Syn)'77
田崎　和隆　Kazutaka Tazaki(syn)
神尾　明朗　Akio Kamio(Syn)
小久保　隆　Takashi Kokubo(Syn)'79

◀Discography▶

● ALBUM-「我が心今まだ安らかならず(Wagakokoro Imada Yasurakanarazu)」(LP)RCA:RVC-2054 '77★
● ALBUM-「砂の舟(Sand Boat)」(LP)RCA:AVC-2219 '78★
● ALBUM-「No Warning」(LP)RCA:RVC-6422 '79★
● V.A.(LP)-「Synthesizer Study」OVERSEAS:FEX-13-V (Promo) '78
● V.A.(LP)-「Super Fighter's Theme(With MINOTAURUS)」KING:SKA-257 '79★

バッハ・リヴォリューションは、シンセサイザー奏者のデュオ・ユニットとして、関西のDADAと並んで代表的なグループ。田崎と神尾の2人でプライベート録音を繰り返してサウンドを固めて行った彼らは、1977年にもう1人のシンセサイザー奏者、鈴川を加えてRCAビクターよりアルバム「我が心今まだ安らかならず」を発表。翌年には鈴川が脱退して映画のサウンド・トラック・アルバム「砂の舟」を制作。またこの頃にはマンドレイクのライブにゲスト参加する様になり、バッハ・リボリューションとマンドレイクが協力してシンセサイザーのテキスト・アルバム「Synthesizer Study」(非売品)の制作も担当していた。1979年には小久保隆が加わり、(彼はこの頃、新月のライブにもゲスト参加していた。)3rdアルバム「No Warning」を発表。また淡海悟郎のキーボード・トリオ、ミノタウルスと共に新日本プロレスのテーマ・ミュージックのアルバムなども制作していた。彼らのサウンドは多

様性を持っていたダダよりも、タンジェリン・ドリームに近い純粋なシンセサイザー・ミュージックであり、メカニカルなサウンドを作り上げていた。

ハッピー・ファミリー［HAPPY FAMILY］

◀Member▶

宮野　達哉　Tatsuya Miyano(B)
牧野　　滋　Shigeru Makino(G)
森本　賢一　Kenichi Morimoto(Kbd)
永瀬　敬一　Keiichi Nagase(Ds)

◀Discography▶

●CT-「Happy Family」'90

ハッピー・ファミリーはデジャヴを輩出した明治大学のサークル内で1987年4月に結成された東京の新人グループ。結成当初はイエス、クリムゾン、PFM等のコピー・バンドであったが、1989年4月に森本(Kbd)、宮野(B)、牧野(G),近藤(Ds)というライン・ナップになってからは次第にオリジナル・ナンバーを取り上げる様になり、90年4月にドラムスが近藤から永瀬に交代してマグマやユニバース・ゼロといったチェンバー&ジャズ・ロックを志すグループへと発展。現在はデモ・テープを1本制作しており、マグマからの影響が強いジャズ・ロック・サウンドの新人グループとして注目されている。

破天荒［HATENKO］

◀Member▶

破天荒は1974〜76年頃にかけて東京のアンダーグラウンドなシーンで活動していた幻のキーボード・トリオであり、エマーソン・レイク&パーマーから多大な影響を受けたサウンドのグループであった。当時の東京のアンダーグラウンド・シーンで活動するプログレッシヴ・ロック・グループ、とりわけキーボード・トリオとしては群を抜いた演奏力を持っており、一部で伝説的なグループと噂されていた存在であった。筆者の手元には彼らについての資料がほとんど無いのでメンバー全員の名前については不明だが、P-モデルの前身グループとして伝説的な存在であるマンドレイクで活躍するベーシストの阿久津徹が在籍していた。

バトル・チョチョリーナ［BATTLE CIOCCIOLINA］

◀Member▶

沢田　守　Mamoru Sawada(Ds,Vo)
村上　常博　Tsunehiro Murakami(G,Vo)
石山　敬一　Keiichi Ishiyama(B)

バトル・チョチョッリーナはマーキームーン誌でライターをしているドラムスの沢田守、石山敬一(B)、村上常博(G)の3人が集まってマグマ、ZAOなどのフレンチ・ジャズ・ロック・グループから影響されて1990年に結成された東京の新人グループ。まだ結成されたばかりのグループなのでサウンドの方向性や演奏はまだ固まっていないようで、今後の成長に期待したい所である。

バンド OF 妻三郎 [BAND OF TSUMASABURO]

◀Member▶

岡部　卓　Suguru Okabe(Vo,G,B)
佐藤由紀夫　Yukio Sato(G,Vo) '75~'77,'85
渡辺　修　Osamu Watanabe(G,Vo) '73,'84,'86
吉田　健志　Kenji Yoshida(Kbd,G) '75,'84
筒井　佳二　Keiji Tsutsui(Kbd) '86 ex.MARINO,MIDAS
長尾　仁　Hitoshi Nagao(Sax) '75~'71,'91
山根　博明　Hiroaki Yamane(Vln) '85~'86
中根　一彦　Kazuhiko Nakane(Ds) '75
大北　信義　Nobuyoshi Ohkita(Ds) '84~'86
松本　卓也　Takuya Matsumoto(Ds) '89~

"バンド OF 妻三郎"という風変りな名前を持つこのグループは、リーダーの岡部卓(G,B)が1971年秋に神戸で結成し、現在でもマイ・ペースな活動を行なっている息の長いグループ。従ってサウンドも様変わりを続けた訳だが、結成当初はジャックスのようなサイケデリック・ロック&フォーク・サウンドを目指すグループとしてスタートし、1975年頃からキャメルなどのナンバーを取り上げ、プログレッシヴ・ロック要素が現れ始め、1984年に"Band of Tea & Shoes"、1985年に"Bricolage"、1986年以降は再び"バンド OF 妻三郎"という風に一時期名前を変えていた頃にはヴァイオリニストも加わって、キャメルなどのカンタベリー系の叙情派プログレッシヴ・ロック・サウンドのグループへと本格的に発展して行った。リーダーの岡部以外はメンバーの流動が激しく、主だったメンバーのみ、上記に挙げておいた。彼らは現在でもマイ・ペースに活動している。

ハル [HAL]

◀Member▶

津田　治彦　Haruhiko Tsuda(G) ref.BELLADONNA,SHINGETSU,PHONOGENX,ASTURIAS
鎌田　洋一　Youichi Kamata(Kbd)
桜井　良行　Yoshiyuki Sakurai(B) ref.ACQUA POLIS,NOA
高橋　直哉　Naoya Takahashi(Ds) ref.BELLADONNA,SHINGETSU,KALEIDOSCOPE,AQUA POLIS

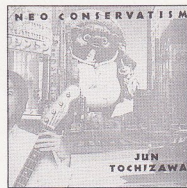
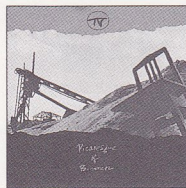
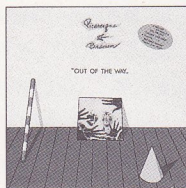
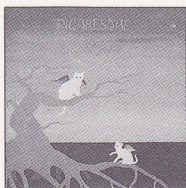
ハルは新月のギタリストである津田治彦が高校卒業後の1970年頃に結成したグループで、ストラビンスキーなどのロシア近代クラシックの和声法を全面的に取り入れたプログレッシヴ・ロック・サウンドを追求するグループであり、津田の音楽性を大きく反響した、当時としてはかなり先進的な感性を持つ強者グループであった。結成当時からのオリジナル・メンバーである津田(G)、鎌田(Kbd)に加え、1974年になると津田の通っていた青山学院大学で知り合った高橋(Ds)と桜井(B)というライン・ナップとなり、本格的にライブ活動を開始し、学祭やイベント等に積極的に出演する様になる。1975年には調布にある電通大学で行なわれたイベントに出演してコスモス・ファクトリーらと共演。この頃にはドラムスの高橋と津田は高橋がリーダーシップを取っていたカンタベリー系ジャズ・ロック・グループのベラドンナを結成して平行活動を行なっていたが、1976年8月13日に東京・目黒区民センターで行なわれたイベント"Progressive Rock & Jazz Concert 1976"に出演した際に、共に出演していたセレナーデのリーダーであったキーボードの花本彰と津田治彦が意気投合して、互いにやっていたセレナーデ、ベラドンナ、HALを統合させてよりレベルの高いプログレッシヴ・ロック・バンドを結成する事を決意し、1975年暮れに新月を結成。

HAL、ベラドンナ、共に新月を結成してしばらくの間は存在していたが1976年の初めに解散。津田と高橋は新月で活躍し、その後、津田はフォノジェニックスを経て、現在でもアストゥーリアスで活動しており、ドラムスの高橋はフリージャズ・ロック・グループのカレイド・スコープを手伝ったり、一時期アクア・ポリスにも加入していた。またベースの桜井も新月の結成時のオリジナル・メンバーとして参加し、カレイド・スコープを手伝っていた後、1983年にアクア・ポリスに加入。アクア・ポリスが活動停止となる1985年まで在籍した後、現在ではアクア・ポリスのドラムスの竹迫一郎が結成したブラッフォード・タイプのプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ"ノア"で活動している。HALは東京の、そして日本のプログレッシヴ・シーンを代表する秀れたギタリストである津田治彦の持つプログレッシヴな感性を発揮した先進的なグループであった。

ピカレスク・オブ・ブレイメン [PICARESQUE OF BREMEN]

◀Member▶

栃沢　潤　Jun Tochizawa(Vo,Ds,Vln) ex.GINKAKU,KNIFE EDGE
中野　秀敏　Hidetoshi Nakano(G) '83～'85
西村　聡子　Satoko Nishimura(Fl,Kbd) '83～'85
工藤ゆかり　Yukari Kudo(Vo) '86～
小松　孝知　Takatomo Komatsu(G) '86～
加藤　直彦　Naohiko Kato(G) '89～
佐藤　將展　Masanori Sato(Ds) '88～

◀Discography▶

- ALBUM-「Picaresque of Bremen」(LP)A-14448 '84★
- ALBUM-「Tales of An Alchemist」(LP)BMR-1131 '85★
- ALBUM-「Out of The Way」(LP)INTERCOM:ICR-1637 '87★
- ALBUM-「IV」(CD)INTERCOM:ICD-1010 '88★
- ALBUM-「Chrono Clasm」(CD)INTERCOM:ICR-1055 '90

〈JUN TOCHIZAWA SOLO〉

- ALBUM-「Neo Conservatism」(LP)A-11404'82★

盛岡に生まれ育ったベースの栃沢潤は、東京の大学に進学して東京へ上京すると、ブリティッシュ系のハード・ロックやジェスロ・タルに影響されて銀角というグループを結成して、吉祥寺のシルバーエレファント等で活動。1977～79年頃まで銀角として活動し、またEL&Pの完全コピーバンドのナイフ・エッジというキーボード・トリオに参加した後、卒業と同時に地元盛岡へ帰郷。1982年に自主制作で自らのソロ・アルバム「Neo Conservatism」を制作した翌年、ジェスロ・タルを目標としてピカレスク・オブ・ブレイメンを盛岡で結成。1984年には栃沢がベースの他、ボーカル、ドラムス、ヴァイオリンまで一人でこなし、キーボード&フルートの西村、ギターの中野と共に自主制作で1stアルバム「ピカレスク・オブ・ブレイメン」、1985年には2ndアルバム「Tales of An Alchemist」を制作。あくまでアマチュア・レベルの録音と演奏であったが、日本では他に例のないジェスロ・タル・タイプのサウンドは貴重な存在であり、また東北地方のプログレッシヴ・ロック・グループ(他に仙台のアシュールと青森のミトコンドリアがいる程度。)としても貴重な存在であった。1986年からは栃沢はメンバーを一新し、サウンドも今までのジェスロ・タル・タイプのプログレッシヴ・ロックからポップなものへと変化してしまった。ポップになってからの彼らはアルバム2枚を制作し、現在でも活動している。

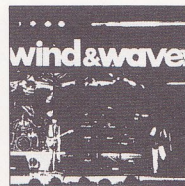
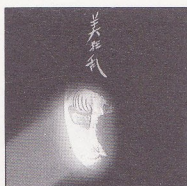
美狂乱［BIKYORAN］

◀Member▶

須磨　那雄　Kunio Suma(G,Vo)
吉永　伸二　Shinji Yoshinaga(B) '74～'80
白鳥　正英　Masahide Shiratori(B) '81～'83
山田　芳嗣　Yoshitugu Yamada(Ds) '74～'75
長沢　正昭　Masaaki Nagasawa(Ds) '77,'82～'83
佐藤　正治　Masaharu Sato(Ds) '78～'81 ex.CROSSWIND
杉田　孝子　Takako Sugita(Vln) '77～'78
久野　真澄　Masumi Kuno(B,Kbd) '77～'78 ref.TIME UNIT
増田　義高　Yoshitaka Masuda(Kbd) '79

〈GUESTS〉

中島　優貴　Yuki Nakajima(Kbd) ex.MARTIAN ROAD,LAFF,HEAVY METAL ARMY ref.EASTAN ORBIT,SABRINA ①
永川　敏郎　Toshio Egawa(Kbd) ex.RUNBLE,FROMAGE,SCHEHERAZADE from NOVELA,ref.GERARD,EARTHSHAKER ★②

◀Discography▶

- ALBUM-「美狂乱(Bikyoran)」(LP)NEXUS:K28P-287 '82★/(CD)CRIME:280E-2033 '89
- ALBUM-「Parallax」(LP)NEXUS:K28P-410 '83★/(CD)NEXUS:K32Y-2061 '86
- ALBUM-「御伽世界(Fairy Tale)」(LP)BELLE ANTIQUE:8704 '87★
- ALBUM-「風魔(WHOMA)」(LP)BELLE ANTIQUE:8805 '88
- V.A.(LP)-「Wind & Wave'78」W2:UGD-270 '78(Promo)

　ロバート・フリップのギターから音楽の深淵な本質と厳然たる摂理を学び、精神の対話を続けた須磨邦雄が作り上げた美狂乱は、キング・クリムゾンそのものであり続け、クリムゾンというグループを通り抜けて、自らのオリジナリティーに到達したグループであった。日本のプログレッシヴ・ロック・シーンを代表するグループ、美狂乱の歴史は古く、静岡に在住していたギタリストの須磨邦雄は地元の高校を卒業すると、ベーシストの吉永伸二と共に東京へ上京。クラブに出演するセミ・プロ・バンドの仕事をこなす傍ら、吉永と2人で実験的なロックの作曲に取り組む様になるが、静岡の知り合いのドラマーの山田芳嗣に、静岡でブルースのハコ・バンの仕事があるからと呼び戻され、須磨は吉永と共に帰郷し、ブルースの仕事をこなす傍ら、東京在住時代に須磨と吉永の2人で作曲した実験的ロック・サウンドに取り組む為に、須磨(G)、吉永(B)、山田(Ds)の3人で美狂乱を結成。1974年4月の事だ。この第1期美狂乱のサウンドは初期キング・クリムゾンの持つメランコリックな世界を描く叙情派プログレッシヴ・ロック的なものであり、当時、クリムゾンの存在を知らなかった須磨は知人から"美狂乱のサウンドはキング・クリムゾンに似ている"と指摘され、初めてクリムゾンを知り強い憧憬と共鳴を受ける。1976年5月にドラムスの山田芳嗣が脱退し、長沢正昭が加入すると、須磨はキング・クリムゾンのサウンドを徹底的に研究する為に、キング・クリムゾンのコピーを始めグループ名も"まどろみ"と改名、須磨のフリップとの精神対話の第一歩を踏み出したのである。フリップを生涯唯一の音楽の師と仰いだ須磨はクリムゾン・サウンドの深遠な本質を捜し、まどろみはひたすら、キング・クリムゾンに近づく事のみを考え演奏を繰り返した。まどろみは浜松のヤマハがスポンサーを務めるAMラジオ番組に出演して、クリムゾンの"Great Deceiver"を演奏した事があり、クリムゾンと寸分違わない凄まじい演奏を繰り広げ、地元静岡で驚異的な存在として知れ渡るようになった。1978年に入ると浜松ヤマハの主催のWind & Waveコンテストに出場する事が決まったが、ドラムスの長沢が突然脱退してしまい、急拠、静岡で第1期美狂乱の弟バンド的なグループに在籍しており、その後東京に上京して小川銀次

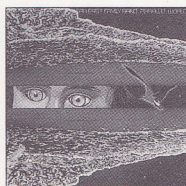
率いるプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ、クロスウィンド(デビュー前の頃)に加入していたドラムスの佐藤正治を東京から呼び戻し、このコンテストの為だけの出演という事で、あの伝説的なドラマーの佐藤が加入して、須磨那雄(G)、吉永伸二(B)、佐藤正治(Ds)、久野真澄(Kbd)、杉田孝子(Vln)というライン・ナップとなった彼らは、グループ名も以前の美狂乱に戻して、7月23日に静岡つま恋のHEホールで行なわれたWind & Waveコンテストの決勝大会に出場して"警告"を演奏。このコンテストが伝説のグループ"第2期美狂乱"のデビュー・ライブであった。(なおこのコンテストの演奏を収録したオムニバス・ライブ・アルバム「W&W'78」が浜松ヤマハで制作されており、デビュー・ライブどは思えない凄まじい演奏がレコード盤に残されている。)その後、美狂乱はまどろみ時代から参加していたヴァイオリニストの杉田孝子を加え、5人編成となり、1978年11月25日に東京・お茶の水にある全電通ホールに於て行なわれたフールズ・メイト誌主催のイベント"From The New World"に新月、ガラパゴス、目合等と共に出演して東京での初ライブを行なった後、渋谷屋根裏や吉祥寺シルバーエレファントで精力的なライブ活動を開始。美狂乱のサウンドは一言で言ってしまえばキング・クリムゾンだが、"クリムゾンから影響を受けた"とか、"クリムゾン・タイプの・・・"といった生やさしい次元ではなく、また時代によって様変わりし続けたクリムゾンというグループのサウンドの一面を借用して自らのサウンドに取り入れた、といった手合いのものでもない。クリムゾンというグループと対話を続け、クリムゾンというグループを通り抜け、自らのオリジナリティーに到達した孤高の地に存在していたサウンドであった。彼らのサウンドはとりわけ後期クリムゾンを強く感じさせたが、ジェントル・ジャイアントから影響されたコーラス・アンサンブルや牧歌的な叙情派サウンドも持ち合わせており、それらが一体となって美狂乱のオリジナリティーを確立していた。またロバート・フリップと対等なレベルに位置するテクニックを身につけた須磨のギター・プレイとブラッフォード張りのテクニックをパワフルに演じる佐藤のドラミング、正確無比の吉永のベースが生み出す演奏は正に神がかったと言うべきパワーと完成度を持っており、東京のライブ・ハウスに進出して来た彼らを体験したファンにとって、あまりに衝撃的な存在であった。彼らの噂は東京のアンダーグラウンド・シーンで一躍、有名になり、"美狂乱フリーク"という熱狂的なファンまで誕生。とりわけ、ドラムスの佐藤のプレイだけを見たくてライブ通いをするファンまで生まれた。1979年になると、ヴァイオリンの杉田が脱退して4人編成となった彼らの演奏には一層の磨きがかかり、美狂乱にとって最も充実した時期を迎える。(特に79年12月4日に渋谷屋根裏で行なわれたライブは彼らのベスト演奏として有名である。)1980年に入ると須磨と長年共にしてきたベーシストの吉永が脱退していまい、代わって白鳥正英が加入して、夏~冬にかけて静岡にあるスタジオで"ぜんまい仕掛け"、"警告"、"タバスコ"の3曲を録音してデモ・テープを制作し、また須磨(G)、白鳥(B)、佐藤(Ds)の3人編成となった美狂乱の初ライブを12月に吉祥寺シルバーエレファントに於いて行なった。またこの頃にキング・レコードのディレクターのたかみひろし氏が彼らに興味を持ち、レコードの話を持ちかけるが、1981年3月に静岡のライブ・ハウス・"サーカス・タウン"に於て行なったライブを最後に伝説的ドラマーの佐藤が音楽性の相違を理由に脱退してしまい、美狂乱は活動停止を余儀なくされてしまい、また須磨自身も美狂乱を続けて行く事に煮詰まってしまった。しかし再三のたかみ氏の説得によって、アルバム制作を決意した須磨はベースの白鳥に、まどろみ時代のドラマーであった長沢正昭を加えてリハーサルを開始し、1982年8月にキング・レコード第2スタジオにてレコーディングを行なった。元マーシャン・ロード&イースタン・オービットのキーボードの中島優貴、ヴァイオリンの中西俊博らを加えて制作されたデビュー・アルバム「美狂乱」は佐藤=吉永時代の演奏とくらべてしまったら、どうしても聴き劣りするものの、美しく仕上げられた好アルバムであった。このアルバムのレコーディング後の10月8日にサックス奏者の森重夫をゲストに加え、渋谷エピキュラスでライブを行い、12月にアルバム「美狂乱」がキング・レコードのネクサス・レーベルより発売された。そして12月6日に東京・新宿ACBホール、1983年3月22日に大阪バーボン・ハウスに於て、パーカッション奏者の雨宮たくまを加えてレコード発売記念ライブを行なった。(この時のライブ演奏は第3期美狂乱のベスト演奏であった。)また、8月にはジェラルドの永川敏郎(Kbd)等を加えてセカンド・アルバム「パララックス」をレコーディング。前作よりも数段上回る完成度を持つ傑作アルバムであったが、レコーディング終了後、須磨は以前から煮詰まっていた状況が本格化して美狂乱解散を決意。秋に出演が予定されていた慶応大学の学園祭のスケジュールもキャンセルして解散。結局、美狂乱のラスト・ステージは3月22日の大阪バーボン・ハウスとなってしまい、セカンド・アルバムの発売記念ライブも行なわれずじまいで美狂乱の歴史の幕を閉じてしまった。新月と共に70年代後半の東京のプログレ・シーンを常にリードしてきた希有の存在であったグループ"美狂乱"がライブ演奏で与えた衝撃は、永遠に語り継がれてゆくだろう。

なお、美狂乱解散から8年。静岡で沈黙を守り続けた須磨邦雄は、現在第4期美狂乱の結成及び、活動を計画中のこと。再び彼の至高のプログレッシヴ・サウンドを聴ける日も近いだろう。

ファーイスト・ファミリー・バンド [FAR EAST FAMILY BAND]

◀Member▶

宮下　文夫　Fumio Miyashita(Vo,G) ex.FAROUT
伊藤　　祥　Akira Ito(Syn) '74~'76
高橋　正明　Masaaki Takahashi(Syn) '74~'76 KITARO
深草　　彰　Aki Fukakusa(B) ref.KANZEON,IMAGO MUNDI
福島　博人　Hirohito Fukushima(G)
高崎　静夫　Shizuo Takasaki(Ds) '74~'76 ref.KANZEON
原田　裕臣　Yujin Harada(Ds) '76~

◀Discography▶

- ALBUM-「地球空洞説(The Cave Down To The Earth)」(LP)COLUMBIA:CD-7139 '75★
  Re-issued:(LP)CLUMBIA:AX-7444 '88/(CD)CLUMBIA:30CA-2093 '88
- ALBUM-「Nipponjin」(LP)CLUMBIA:LQ-7013 '76★
- ALBUM-「多元宇宙への旅(Parallel World)」(LP)CLUMBIA:LQ-7002 '76★/(LP)YX7284 '80(CD):C0CA:7257 '91
- ALBUM-「天空人(Tenkujin)」(LP)CLUMBIA:LX-7029 '77★
- 7"EP-「地球空洞説(The Cave Down To The Earth)」COLUMBIA:CD-256M '75★
- V.A.(ALBUM)-「Anthology of Japan Rock」(LP)COLUMBIA:AX-7447/(CD):CA-2094 '88

1974年7月に福島県郡山市にある開成山公園で開催されたイベント"ワンステップ・フェスティバル"に出演した後、ファーラウトを解散させた宮下フミオは、ファーラウトで生み出した初期ピンク・フロイド的なプログレッシヴ・ロックと日本の土壌に根ざされた精神を融合したサウンドを発展させるべく、伊藤祥(Kbd)、高橋正明(Kbd/後の喜多郎)、深草彰(B)、福島博人(G)、高崎静夫(Ds)を集めて、1984年秋にファーイスト・ファミリー・バンド(F.E.F.B.)を結成。冬にサウンドを固める為に千葉県佐倉にある雄蛇ヶ池で合宿リハーサルを重ね、1957年3月〜4月にかけてコロムビア・スタジオに於いてファースト・アルバム「地球空洞説」をレコーディング。またアルバムのプロモーション用にプロモーション・ビデオを制作。(曲は"地球空洞説"他)アルバム「地球空洞説」は8月に発売され、音楽関係者を集めて東京の増上寺の地下ホールに於てデビュー・コンサートを行なった。ファーラウトのサウンドよりも、「おせっかい」の頃のピンク・フロイドに近いシンセサイザーを中心とし、洗練されたプログレッシヴ・ロック・サウンドに仕上がったこのアルバムは、コロムビアの宣伝力にも手助けされて爆発的なセールスを記録。10月にはアメリカ、イギリスを始めとする海外諸国でも発売され、海外の音楽誌では「ピンク・フロイドに対する日本からのアンサー」として高く評価された。このアルバムの好セールスに気をよくしたコロムビア・レコード・サイドは次作のアルバムのレコーディングをタンジェリン・ドリームのクラウス・シュルツのプロデュースのもとにイギリスで行なう事を決定して、日本のロック・グループ初のイギリス録音は、1975年11月にロンドン郊外にあるヴァージン・レコードのマナー・スタジオに於て3週間に渡って行なわれた。(裏話になるが、コロムビア・レコードは彼らのイギリス録音には大きな期待を寄せており、彼らがロンドンへ立つ前にコロムビア・レコードの前で、関係者やコロムビア・レコードのスタッフ総出で万歳三唱をやって見送ったと言う。)1日何時間にも渡って即興的なセッションを繰り返したテイクを集めて作られた2ndアルバム「パラレル・ワールド」は1976年3月に発売されたが、前作「地球空洞説」程の好セールを上げる事は出来ず、またロンドン録音に際してのマネージメント上の不満や、メンバー間の人間関係で煮詰まってしまい、高橋正明、高崎静夫、伊藤祥、深草彰の4人が脱退。1976年にアルバム「地球空洞説」からの数曲と、ファーラウトのアルバムに収録されていた"日本人"をリメイクして収録したベスト・アルバム「Nipponjin」をリリースした翌年には宮下フミオ、福島博人に新加入のドラマーの原田裕臣と脱退したベースの深草彰をゲストに加えて、3rdアルバム「天空人」を制作したが、煮詰まってしまい解散。リーダーの宮下フミオはアメリカに渡ってファーイスト・ファミリー・バンドのサウンドをよりシンセサイザー・ミュージックへと発展させたソロ・アルバムを制作して、現在までにアニメのイメージ・レコードなどを始めとする数多くのソロ・アルバムを発表。深草彰はファーイスト・ファミリー・バンドのサウンドを母体

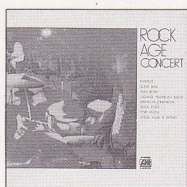
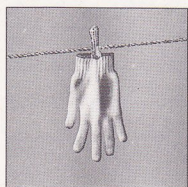
としながら、邦楽器を取入れより日本的な精神を表現したプログレッシヴ・ロック・グループ、観世音を結成して活動した後、ベースを捨て、奏琴奏者へ移身してソロ・アルバムを発表。伊藤祥はライジング・サンというグループを一時期結成したが、その後は宮下や喜多郎と同様のシンセサイザー・ミュージックのソロ・アルバムを数多く発表している。高橋正明は"喜多郎"という名前でシンセサイザー・ミュージックのソロ・アルバムを数多く発表して、マインド・ミュージックの旗手として商業的な成功を納めている。ドラムスの高橋静夫は一時期、観世音に参加しており、また伊藤祥や宮下文夫などのソロ・アルバムにも参加している。原田裕臣も伊藤祥や宮下文夫のソロ・アルバムに参加してスタジオ・ミュージシャンとして活躍。

プログレッシヴ・ロックの中に日本人の精神を求め続けた宮下文夫率いるファーイスト・ファミリー・バンドは、コスモス・ファクトリー、四人囃子と共に、日本に純粋なプログレッシヴ・ロック・グループが誕生する土壌を作り上げたグループとして高く評価される存在であった。

ファーラウト [FAROUT]

◀Member▶

宮下　文夫　Fumio Miyashita (Vo) ref.FAR EAST FAMILY BAND
左右　栄一　Eiichi Sayu(G) ex.ZUNO-KEISATU
石川　恵　Kei Ishikawa(B) ref.CRONICLE,TASMALIN
前田　富雄　Tomio Maeda(Ds) '71'72 ex.SPIDERS
アライマナミ　Manami Arai(Ds) '73
武田　治　Osamu Takeda(Ds) '74 ref.CRONICLE,OZ,ZONE,GREEN
〈GUESTS〉
ジョー　山中　Joe Yamanaka(Vo) from FLOWER TRAVELIN' BAND
喜多嶋　修　Osamu Kitajima(Biwa)

◀Discography▶

- ALBUM-「日本人(Nipponjin)」(LP)COLUMBIA:CD-5047 '73★/(CD)COLUMBIA:CA-4055 '89
- 7"EP-「シュ・シュ(Shu Shu)」ATLANTIC:L-1046 '71★
- V.A.(LP)-「Rock Age Concert」ATLANTIC:L-6007 '71★
- ALBUM-「MIOと11ぴきのネコ」(LP)WEA:L-8014W '72★

ファーラウトは宮下フミオ(Vo)を中心として、頭脳警察のオリジナル・メンバーであったギターの左右栄一、柳田ヒロ・グループに在籍して1970年に柳田ヒロのアルバム「ミルク・タイム」に参加していたベースの石川恵、GSの大御所グループ、スパイダースの後期ドラマーであった前田トミオの4人によって、1971年の初めに結成された。GSブームが終わりを告げ、日本に本格的なロック・グループが続々と産声を上げてきた真っただ中に登場してきた彼らは、ワーナーパイオニアのアトランティック・レーベルから発売されたオムニバス・アルバム「Rock Age Concert」に参加し、シングル「シュ・シュ」を7月にリリース。(またベースの石川恵とギターの左右栄一は柳田ヒロ、つのだひろと共に天井桟敷劇団の映画「書を捨てよ町へ出よう」のサウンド・トラック・アルバムの音楽を担当し、71年7月にビクター・レコードから発売されている。)この頃の彼らのサウンドはレッド・ツェッペリンなどのブリティッシュ系のハード・ロックから影響されたものであったが、翌年8月に元ランチャーズのギタリストであり、琵琶奏者へと転向した喜多嶋修と宮下フミオの2人が組んで発表したアルバム「新中国」を通じて、宮下フミオは日本の土壌に根ざされた精神性を表現するプログレッシヴ・ロック・サウンドへ傾倒して行った。1972年10月に映画「ミオと11ぴきのネコ」のサウンド・トラック・アルバムの音楽を担当した後、ドラムスの前田が脱退してアライ・マナミが加入。1973年にコロムビア・レコードに移籍した彼らは喜多嶋修(琵琶)とフラワートラベリン・バンドのボーカルのジョー山中をゲストに加え、また宮下フミ

オがボーカルの他に日本笛やムーグ・シンセ、アコースティック・ギター、左右栄一がギターの他にハモンド・オルガン、アライ・マナミがドラムスの他に日本太鼓を担当してアルバム「日本人」のレコーディングを開始し、3月に発売。初期ピンク・フロイドに通じるサイケデリックな“トリップ”プログレッシヴ・ロック・サウンドに琵琶などの邦楽器によって表現される日本的な表現を融合させ、荒削りだがエネルギーに満ち溢れたサウンドのこのアルバムは、コスモス・ファクトリーの1stアルバム「トランシルバニアの古城」と並んで日本で初めての本格的であり純粋なプログレッシヴ・ロック・アルバムとして記念すべきものであった。また、初期のジャパニーズ・プログレを代表する名作でもあった。1974年になるとドラムスのアライ・マナミが脱退して、武田治が加入し、7月31日〜8月11日までの期間に渡って福島県郡山市の開成山公園に於いて開催された日本のロック史上最大のロック・イベント“ワンステップ・フェスティバル”に出演したが、バンドは煮詰まってしまい解散。リーダーの宮下フミオはファーラウトのサウンドをエレクトロニクス・ミュージックへ発展させた音楽を作るべく、秋にファーイースト・ファミリー・バンドを結成。またベースの石川恵とドラムスの武田治は日本の土壌に根ざされたポップス&プログレッシヴ・ロック・グループ、クロニクルを結成した。

ファクトリアル [FACTORIAL]

◀Member▶

白浜　雅也　Masaya Shirahama(Kbd,Vo)
成田　直樹　Naoki Narita(B,G,Syn)
奈良サトシ　Satoshi Nara(Ds,Fl)

ファクトリアルは1986年頃に吉祥寺シルバーエレファントを中心としてライブ活動を行なっていた東京のキーボード・トリオ。マリリオンやペンドラゴンといったイギリスのポップ・ロック・サウンドを連想させるポップなサウンドであり、あくまでアマチュア・レベルのグループであった。おそらく1〜2年間程の短い活動期間で自然消滅したと思われる。

フード・ブレーン [FOOD BRAIN]

◀Member▶

陳　　信輝　Shinki Chen(G) ex.POWER HOUSE ref.SPEED,GLUE & SHINKI
ルイス加部　Luis Kabe(B) ex.GOLDEN CUPS ref.SPEED,GLUE & SHINKI,JONNY LUIS & CHAR,PINK CLOUD
柳田　ヒロ　Hiro Yanagida(Kbd) ex.FRORAL,APRIL FOOL ref.LOVE LIVE LIFE,SHINROKUMONSEN
つのだひろ　Hiro Tsunoda(Ds) ex.JACKS,ref.STRAWBERY PATH,FLIED EGG,SADISTICK MIKA BAND CAPTAIN HIRO & SPACE BAND

◀Discography▶

● ALBUM-「晩餐(Social Gathering)」(LP)POLYDOR:MP-2100 '70★/(CD)POLYDOR:HOOP-20337 '90

1960年の中頃に横浜を中心に活動していたミッドナイト・エキスプレス(後にベベスと改名し、ミッキー吉野も在籍)に在籍していたギタリストの陳信輝はより本格的なブルース・ロックを追求して柳ジョージ(ベース)らと共にパワーハウスを結成して、1969年3月にシングル「オブ・ラ・ディイ・オブ・ラ・ダ」と4月にアルバム「ブルースの新星」を東芝エキスプレスから発売。パワーハウスは成毛滋とミッキー吉野が中心となって主催した日本で初めての野外ロック・フェスティバル“第1回10円コンサート”(1969年9月22日/共演:成毛滋グループ、フラワーズ、エム)、“第2回10円コンサート”(10月30日/共演:柳田ヒロ・グループ、モップス、エム、ハプニングス・フォー、成毛滋グループ)やニュー・ミュージック・マガジンが主催した“第1回日本ロック・フェス

ティバル"(9月28日/共演:ゴールデン・カップス、ブルース・クリエイション、フラワーズ、成毛滋)といったイベントに精力的に参加。そしてギターの陳信輝がこれらのイベントを通じて交流を深めたミュージシャン達と、パワーハウスの活動と平行して始めたセッション・グループ"陳信輝グループ"を母体として、パワーハウス解散後の1970年春にゴールデン・カップスのベースの加部正義、細野晴臣や松本隆とエイプリル・フールというサイケ&実験的なアート・ロック・グループをやっていたキーボードの柳田ヒロ、後期ジャックスのドラマーとして活躍したつのだひろと共にフード・ブレーンを結成。1970年9月にアルバム「晩餐」をポリドールから発表。陳信輝と柳田ヒロのプロデュースによる即興性の濃い全編インストゥルメンタル・サウンドは、陳のブルース・ロック色と柳田ヒロの持つ実験的なプログレッシヴ・ロック色の2面性を持ったサウンドであり、当時まだ日本にロック自体が確立していない黎明期の中で、かなり先進的な"アブナイ"アルバムであったが、もともとセッション・グループであったので、アルバム発売時にはフード・ブレーンは解散し、ブルース・ロック指向の陳信輝と加部正義はスピード・グルー&シンキを結成。柳田ヒロは日本のプログレッシヴ・ロックの先駆的なソロ・アルバム「柳田ヒロ」、「ミルク・タイム」を発表して柳田・グループとして活動する傍ら、ラヴ・リヴ・ライフにも参加して、日本のプログレッシヴ・ロック・シーンの黎明期に於ける立て役者として活躍。ドラムスのつのだひろは成毛滋とのユニットのストロベリー・パスを経て、フライド・エッグを結成した。

フェリア [FERIER]

◀Member▶

庄司　好孝　Yoshitaka Shoji(G)
藤本　博美　Hiromi Fujimoto(vo)
松本　美夏　Mika Matsumoto(Kbd)
松井　良作　Ryosaku Matsui(Ds)
中村　雅愛　Masayoshi Nakamura(Ds)
井上　　靖　Yasushi Inoue(B) '84~'85 ex.OVERTURE ref.PAM,TERU'S SYMPHONIA
松本　博之　Hiroyuki Matsumoto(B)
恩田　快人　Yoshihito Onda(B) '81 ref.PRESENCE,JACKS'N JOKER
宮崎　雄三　Yuzo Miyazaki(Kbd) '81 ref.LUCIFER

フェリアはギターの庄司好孝とボーカルの藤本博美を中心として、1980年代初期から現在まで地道な活動を続けている神戸の中堅プログレッシヴ・ロック・グループ。ギターの庄司とボーカルの藤本以外はメンバー・チェンジが激しく、1981年頃にはプレゼンスや現在ジャクソン・ジョーカーのベースの恩田快人やルーシフェルを結成したキーボードの宮崎雄三(ルーシフェルはスターレスのボーカルの宮本やテルズ・シンフォニアのボーカルの徳久らが在籍していた事で知られるUKタイプの幻のグループ。)、1984年頃にはペール・アキュート・ムーンやテルズ・シンフォニアのベースの井上靖らが在籍していた事がある。地元神戸や大阪バハマといったライブ・ハウスでマイ・ペースに活動している彼らのサウンドはハード・プログレッシヴ・ロックにポップな要素を加えたプログレッシヴ・ロックである。"花鳥風月"というナンバーが代表曲として有名である。

フォー [FOUR]

◀Member▶

永井　敏巳　Toshimi Nagai(B) ref.AFFLATUS,VIENNA,DED CHAPLIN,GERARD,GRAY
三浦　忠司　Tadashi Miura(G)
蓮沼　充男　Mitsuo Hasunuma(Ds)

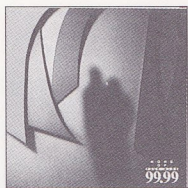
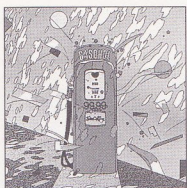
フォーはヴィエナ、デッド・チャップリン、ジェラルド等で活躍している天才フレットレス・ベーシストの永井敏巳がオリジナルをやる為に初めて結成したプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ。埼玉県川口にある高校を卒業した永井敏巳は高校の同級生であったドラムスの蓮沼と蓮沼の大学の同級生のギターの三浦、キーボードの吉川文子を集め、1982年にキング・クリムゾンのコピーバンド"ニューエレメンツ"を始める。(この頃永井はボーカルも担当していた。)1983年にはキーボードの吉川

が脱退し、トリオ編成となった彼らはゴングやブランドXなどのカンタベリー系のジャズ・ロックのコピーを始め、次第にオリジナル・ナンバーも演奏する様になり、バンド名も“GAZEUSE” と改名。地元のライブ・ハウスやコンテスト等で活動。1985年4月に正式にフォーと改名して、85年11月に渋谷エッグマンで行なわれたイベントでライブ・デビュー。ゴングやブランドX、ブラッフォード、後期クリムゾンから影響された即興性の強いプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドとジェフ・バーリンやパーシー・ジョーンズから影響された永井のフレットレス・ベースを自由自在に使いこなした驚異的なプレイは吉祥寺シルバーエレファントなどの東京のアンダーグラウンド・シーンの中で注目される様になったが、1987年1月に吉祥寺シルバーエレファントで行なわれたライブを最後にギターの三浦が脱退して解散。その後、永井敏巳はジャズ・ロック・バンドのアフレイタスに一時期、参加して1987年12月に、ジェラルドのギター&ボーカルの藤村幸宏、アウターリミッツのキーボードの塚本周成、ノヴェラのドラムスの西田竜一で結成したヴィエナに加入。ヴィエナに加入して永井の驚異的なベース・プレイは一気に脚光を浴びる事になった。

フォーナイン [99.99]

◀Member▶

服部　眞誠　Masei Hattori(Kbd) ex.DARUMA-SHOKUDO,AIN-SOPH
成田しのぶ　Shinobu Narita(G) ref.4D,URBANDANCE
谷口　義則　Yoshinori Taniguchi(G)
エディ細木　Eddy Hosogi(B)
菅沼　孝三　Kozo Suganuma(Ds) '82 ex.CHARISMA,DARUMA-SHOKUDO ref.BLACK PAGE,DED CHAPLIN,GRAY
東原　力哉　Rikiya Higashibara(Ds) from NANIWA EXPRESS
横川　理彦　Tadahiko Yokokawa(Vln) ref.4D,P-MODEL,METROFARCE

◀Discography▶

● ALBUM-「99.99」(LP)ELECTRIC BIRD:K28P-6139'82★
● ALBUM-「More of 99.99」(LP)ELECTRIC BIRD:K28P-6215'83★

99.99はダルマ食堂にも在籍していた事もあり、アイン・ソフの1stアルバム「妖精の森」に参加していたキーボード奏者の服部眞誠を中心として1980年に結成された関西のフュージョン・グループ。アルバム2枚をキング・レコードからリリースしたが、かなりポップ色が強いフュージョンで、サウンド的に言えば、この本に載せるべきグループではないが、ブラック・ペイジのドラムスの菅沼、なにわエクスプレスの東原、4D&アーバンダンスの成田、4D&P-モデルの横川etc.といった顔触れが参加していた。なお、Aタイプ、Bタイプに分かれた編成のユニット形態を取っていた。

フミオ&オサム [FUMIO & OSAMU]

◀Member▶

宮下　文夫　Fumio Miyashita(Vo,G) ex.FAROUT,ref.FAR EAST FAMILY BAND
喜多嶋　修　Osamu Kitajima(Biwa)

◀Discography▶

●ALBUM-「新中国(Shinchugoku)」(LP)ATLANTIC:L-6063 '72★

●7"EP-「百姓は楽し(Hyakusyowa Tanoshi)」ATLANTIC:L-1104 '72★

1971年にブリティッシュ・ハード・ロックから影響を受けて結成されたファーラウトのボーカリストの宮下文夫は、シングル「シュ・シュ」をワーナーパイオニアから発表した翌年の1972年8月に、エレキ・インスト・グループのランチャーズのギタリストであった喜多嶋修とのユニット"フミオ&オサム"でアルバム「新中国」とシングル「百姓は楽し」を発表。喜多嶋修の琵琶を中心とした東洋的な色彩の強いアコースティック・フォーク・サウンドであったが、宮下文夫はこの喜多嶋とのセッションを通じて、今までのブリティッシュ・ハード・ロックからファーラウトのサウンドを東洋的な表現による初期ピンク・フロイド的なプログレッシヴ・ロック・サウンドへ発展させる構想を持つ様になった。宮下文夫のプログレッシヴ・ロック・サウンド追求の出発点ともなった記念すべきユニットであった。

フライド・エッグ [FLIED EGG]

◀Member▶

成毛　滋　Shigeru Narumo(G,Kbd) ex.STRAWBERRY PATH

つのだひろ　Hiro Tsunoda(Ds,Vo) ex.JACKS,FOOD BRAIN,STRAWBERY PATH ref. SADISTIC MIKA BAND,CAPTAIN HIRO & SPACE BAND

高中　正義　Masayoshi Takanaka(B) ex.ESCAPE,BRUSH,ref.SADISTIC MIKA BAND

◀Discography▶

●ALBUM-「Drシーゲルのフライド・エッグ・マシーン(Dr.Siegel's Flied Egg Shooting Machine)」(LP)VERTIGO:8603 '72★

●ALBUM-「Good-Bye」(LP)VERTIGO:FX-8606 '72★

●ALBUM-「メリージェーン物語(*Best)」(CD)PHILIPS:25LD-120 '89★

●7"EP-「Someday」VERTIGO:FX-3 '72★

●V.A.(LP)-「Hiro Tsunoda Best Collection」VERTIGO:20Y-14 '75★

<SHIGERU NARUMO SOLO>

●ALBUM-「Yellow River」(LP)CBS SONY:SONP-50257 '70★

●ALBUM-「London Notes」(LP)COLUMBIA:CD-7022 '71★

●7"EP-「Paint Yourself Pretty」COLUMBIA:CD-142 '71★

60年代中期に慶応大学内で結成されたGSグループ"フィンガーズ"のギターでプロ活動を開始した成毛滋は、1969年にフィンガーズが解散して、大学を卒業するとウッド・ストックに合わせて渡米し、ロック・スピリットやロック・コンサートの為の本格的なアンプやPAシステム、またA&Mレコードのスタジオでレコーディング技術を学んで帰国。帰国後は日本でもロックの野外に於けるフリーコンサートを開催しようと計画して、成毛が自腹を切って1969年9月22日に"第1回10円コンサート"を東京・日比谷野外音楽堂にて開催した。この10円コンサートはその後も開催され、ニューミュージック・マガジンが主催して行なわれた

“日本ロック・フェスティバル”(成毛滋も出演)と共に日本のロックが誕生し発展して行く日本のロックの黎明期に大きな役割を果たし、また成毛滋もこれらのロック・イベントを通じて日本のロックの中心人物として注目を浴びて行った。これらのイベント等を通じて成毛滋は、後期ジャックスを経て渡辺貞夫カルテットに参加した後に陳信輝、加部正義、柳田ヒロと共に先進的なロック・グループ“フード・ブレーン”を結成したドラムスのつのだひろと親交を深めて、成毛滋はつのだひろと共に1971年にストロベリー・パスを結成。6月にストロベリー・パスのアルバム「大鳥が地球にやって来た日」をフィリップス・レコードから発表。このアルバムはアメリカン・ロックからブリティッシュ・ハード・ロック、プログレッシヴ・ロックまで聴かせる意欲的な作品として当時、話題を集め、アルバム発売後、BBキングやジョン・メイオールの来日コンサートの前座を務めて成毛滋とつのだひろの人気は日本のロック・ファンの中で絶大なもの(ミュージック・ライフ誌の人気投票で成毛滋は、71年、72年と連続ギター部門第1位、キーボード部門第3位、つのだひろはドラム部門の第1位に入っている。)であったが、フリー来日の際、ブリティッシュ・ロックの底の深さに驚き、成毛滋は突然ロンドンに渡ってしまい、ストロベリー・パスは解散。イギリスに渡って本格的なブリティッシュ・ロックに接した成毛滋は帰国すると、9月に箱根アフロディーテで開催されたイベントにつのだひろとエスケープというグループでギターを弾いていた弱冠18才の高中正義(ベース)とともに出演。ブリティッシュ・スタイルのロック・トリオで出演した彼らは成功を納め、1971年10月にストロベリー・パスを発展させた型としてフライド・エッグを結成。成毛滋は本格的なロック・バンドのコンサート・ツアーを行なう事を考えて、フライド・エッグ結成と同時にロンドンへWEMのPAシステムを注文して欧米並のロック・コンサートを実行できる為の準備を進める傍ら、10月中旬～翌年の1月12日までの約3ヶ月間に渡ってビクター・レコード・スタジオに於てレコーディングを行なった。このアルバムのレコーディングは日本のロックのアルバムのレコーディングとしては初めて16チャンネル・マルチ・レコーディング・システムで行なわれ、ドラムス、ベース、オルガンのベーシック録音の次に様々な楽器をダビングして行き、ドラムスのタムの一つの音から全てに渡ってリバーブやコンプレッサーなどのエフェクト処理やEQ処理を行なって音を作り上げてミックス・ダウンするという、現在では常識的な録音方法であるが、当時の日本のロックのレコーディングとしては前例のない画期的な方法によって行なわれた訳だ。また演奏面や楽器の面でも、高中がエレキギターを弓で弾いていたり、ムーグ・シンセサイザーを使用したり、ハモンド・オルガンをレスリーとディストテーィド・オルガンとに使い分ける、といった新しい試みもなされていた。レコーディング終了後の1972年1月25日に東京・千駄ヶ谷の東京体育館に於て、日本のロック・グループ初のソロ・コンサート“成毛滋ワンマン・コンサート”を3500人という記録的な動員を集めて行ない、フィリップス・レコード内のヴァーティゴ・レーベルより4月にファースト・アルバム「Dr.シーゲルのフライド・エッグ・マシーン」発売。ユーライア・ヒープから影響されたハード・ロックから、EL&P的なオルガン・プログレッシヴ・トリオ・サウンド、初期キング・クリムゾンの持つメランコリックな叙情派プログレッシヴ・ロック・サウンドといった当時のブリティッシュ・ロック&プログレッシヴ・ロックから強い影響を受けたこのアルバムは、1970年～71年頃に柳田ヒロが試みた即興的な実験ロック・アプローチによるプログレッシヴ・ロックから、明確に計算されたアンサンブルを取り入れた本格的なプログレッシヴ・ロックへと進歩をみせた日本で初めての本格的なプログレッシヴ・ロック・サウンドを聴かせるアルバムであり、かつプログレッシヴ・ロックに欠かせる事の出来ない録音上での技術を駆使した日本初の本格的なロック・アルバムとして記念すべき作品であった。また70年代前半のプログレッシヴ・ロック・シーンの中の名盤の1枚としても高く評価されるものであった。このアルバムが発売されると日本のロック・ファンや音楽関係者からは絶賛され、また2月に発売したシングル「メリージェーン」(※オリジナルは1971年5月にストロベリー・パス名義で発売されたが、東京の有線放送のリクエストが多い為に、つのだひろ名義でリメイクされて、再び発売された。)の大ヒットも相まって彼らの人気は頂点に達した。成毛滋はアルバムの発売記念に本格的なツアーを計画して、ロンドンから購入したWEMのPAシステム、音響スタッフ3名、照明スタッフ2名、マネージャー&アシスタント5名からなるフライド・エッグ・コンサート・チームを作り、(日本のロック史上初のコンサート・チームの誕生であった。)ガロと共に5月7日に京都円山公園音楽堂、5月14日に大阪厚生年金会館、5月25日に日本青年館ホール、6月10日に名古屋港湾会館に於て“フライド・エッグ・コンサート・ツアー with GARO”と題されたツアーが行なわれた。彼らにとって最も充実した時期を迎えたが、つのだひろと高中正義が加藤和彦に誘われて、小原礼、ミカと共に1972年9月にサディスティック・ミカ・バンドを結成する為に脱退してフライド・エッグは解散。1月には日比谷野音に於けるライブとスタジオ 録音による未発表曲を集めたアルバム「Good-Bye]が発表された。フライド・エッグ解散後は沈黙を保っていた成毛滋であったが、1976年になって、つのだひろ(Ds)と富田和明(B)と共にフライド・エッグの延長線上のプログレッシヴ・ロック・サウンドを持つロック・トリオ“成毛滋グループ”を復活させ、5月4日に新厚生年金ホールに於てコンサートを行なったが、その後再び、成毛滋はプログレッシヴ・ロックを追求する事はなく、作曲家等でプロ活動を行なっている。

日本にロックが誕生して行く70年代初頭の黎明期の中で、成毛滋が誰よりもいち早く確立した本格的なブリティッシュ・ロック、とりわけ、オルガン・プレイを中心とする構成力に富んだアンサンブルを持つプログレッシヴ・ロック・サウンドは、今後の日本のプログレッシヴ・ロックの発展に大きな影響を与えたばかりか、本格的なロック・コンサートの為のPAシステムやツアー・チームの確立、野外に於けるフリー・コンサートの方式、マルチ・レコーディングシステムによる本格的なレコーディング技術、そしてロック・スピリットの多方面に渡って、日本のロックの

発展にとって彼が与えた影響は数限りない。

フライング・ティー・カップ [FLYING TEA CUP]

◀Member▶
坂口　佳史　Yoshifumi Sakaguchi(G)
有光　秀行　Hideyuki Ukou(Ds)
熊岡　　晃　Akira Kumaoka(Vo)
岡井　將樹　Masaki Okai(Kbd)
久保田直己　Naoki Kubota(Ds)

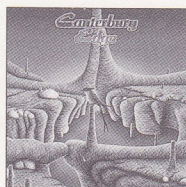
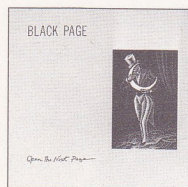
◀Discography▶

● ALBUM-「Flying Tea Cup」(LP)INTERCOM:ICR-1207 '81★

フライング・ティー・カップは、UKから影響を受けたサウンドを持つグループ達(ネガスフィア、ジャンキーズetc.)を輩出してきた東京大学フリティッシュ・ロック研究会内で結成されたUKタイプのプログレッシヴ・ロック・グループで、学園祭などで活動していたが、1981年に卒業記念として自主制作による100枚プレスのアルバム「フライング・ティー・カップ」を制作した。アルバムの1/2はボーカルを中心とした2流ポップ&ロックであったが、残りの1/2はUK的コード進行を中心とするプログレッシヴ・ロック。あくまでアマチュア・レベルではあるが、この手の自主制作の中では仲々の出来栄えであった。

ブラック・ペイジ [BLACK PAGE]

◀Member▶
小川　文明　Fumiaki ogawa(Kbd) ex.SPIRAL,ref.TERU'S SYMPHONIA
小川　逸史　Itsufumi Ogawa(G) ex.SPIRAL
小峯　恒夫　Tsuneo Komine(B) ref.SURGERRY
菅沼　孝三　Kouzou Suganuma(Ds) ex.CHARISMA,DARUMA-SHOKUDO,99.99,ref.DED CHAPLIN,GRAY

◀Discography▶

● ALBUM-「Open The Next Page」(LP)NEXUS:K28P-602 '86★/(CD)CRIME:K1CS-2057 '90
● V.A.(LP)-「Canterbury Edge」MADE IN JAPAN:MIJ-1019 '88★
● V.A.(CD)-「Jazz Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3206 '89

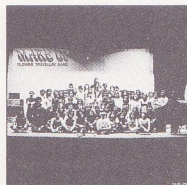
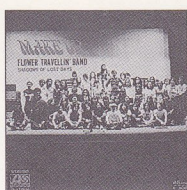
もともとギタリストであった小川文明は大阪の堺東高校に進学すると、キース・エマーソンに憧れてキーボード奏者に転身。同級生らと共にEL&Pのコピーを中心としてオリジナルも演奏していたキーボード・トリオ、ジュピターを結成して活動した後、

高校を卒業すると、カンベリー系のジャズ・ロックなどからの影響を受けてジャズを志す様になり、東原力哉(Ds)らと共にクラブなどに出演するハコ・バンで修行を積み、1982年9月に小川の弟の小川逸史(G)、久保多美子(Vo)らと共にスパイラルを結成、1983年4月にバーボン・ハウスにてデビューライブを行なった。スパイラルのサウンドはハットフィールド&ザ・ノースやナショナル・ヘルスといったカンタベリー系のジャズ・ロックを強く意識したサウンドであり、小川自身もディヴ・スチュワートから強い影響を受けたプレイであったが、(ブラック・ペイジのナンバーの"Rap Rap"や"おやすみ"はスパイラル時代のナンバー。)1984年10月に大阪キャットで行なわれたライブを最後にベースの奥田治義が脱退してしまい、解散。またこの頃、小川文明は羅麗若やUKからの影響が強く、クリスタル・ムーンというフュージョン・グループをやっていたベースの小峯恒夫、ドラムスの菅沼孝三(EX.カリスマ、ダルマ食堂、99.99)を誘い、ギターの小川逸史と共に1985年4月、ブラック・ペイジを結成。1985年7月に大阪バハマに於てデビュー・ライブを行なった。スパイラル時代からのカンタベリー系のジャズ・ロック・サウンドに羅麗若やウェザーリポート、リタン・トゥ・フォーエバーといったプログレッシヴなフュージョン、フランク・ザッパやUKといったプログレッシヴ・ロック・サウンドを融合させたサウンドを確立して、プログレ界No.1のビリーコブハム・タイプの超絶テクニックを持つドラムスの菅沼とアルフォンソ・ジョンソン・タイプのベースの小峯とのリズム隊を中心とした卓越したテクニックを持つ彼らは、すぐに驚異的な存在として関西プログレ・シーンに知れ渡る様になって行った。彼らは渋谷エッグマン、横浜ビブレ、名古屋ELL、大阪キャンディー・ホールの4ヶ所のライブ・ハウスの合同企画によるプログレ・シーン最大のイベント"プログレッシヴ・サーキット"に参加後、キング・レコードのネクサス・レーベルに新設された"ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ"の一貫として、アルバム・リリースが決まり、1986年3月にアルバム「オープン・ザ・ネクスト・ページ」を発売。少ないプレスながら、またたく間に完売したが、このシリーズの担当ディレクターの退職やこのシリーズ自体の商業的失敗から彼らの次作の発売はなく終わってしまった。1986年10月16日に東京・新橋ヤクルト・ホールに於て行なわれた"メイド・イン・ジャパン・フェスティバル"にアウターリミッツ、ページェントと共に出演するなどを始めとして、渋谷エッグマンや堺JURIなどのライブ・ハウスを中心として精力的なライブ活動を行なっていたが、1987年にブラック・ペイジは東京へ上京して活動の場の本拠地を東京へ移すと、各メンバーの個人的なセッション活動が忙しくなり、以前程精力的な活動を出来る状況ではなくなってしまった。1988年9月にメイド・イン・ジャパン・レコードから発売されたジャズ・ロック・オムニバス・アルバム「カンタベリー・エッジ」に参加し、それ以降、現在まで新作は発表していない。なお現在の各メンバーの個人的な活動は、小川文明はマルタや是方スーパープロジェクトといったジャズ・シーンでセッション活動及び、アイドルの編曲などで活躍。ドラムスの菅沼孝三は稲垣潤一やチャゲ&飛鳥を始めとするツアー・メンバーやデッド・チャップリン、グレイのメンバーとして活躍。ベースの小峯恒夫はサージェリーのメンバーとしても活動している。

フラワー・トラベリン・バンド [FLOWER TRAVELIN' BAND]

◀Member▶

ジョー　山中　Joe Yamanaka(Vo)
石間　秀樹　Hideki Ishima(G) ex.ビーバーズ, ref.TRANZAM
和田ジョージ　George Wada(Ds) ex.FLOWERS
上月　潤　Jun Uetsuki(B)
内田　裕也　Yuya Uchida(Vo) '68～'69～ ex.FLOWERS
篠原　信彦　Nobuhiko Shinohara(Kbd) '73～ ex.HAPPNINGS 4, ref.TRANZAM

◀Discography▶

● ALBUM-「Anywhere」(LP) PHILIPS:FX-8507 '69★

● ALBUM-「Satori」(LP) ATLANTIC:P-8056 '71★/(CD) WEA:28XL-289 '89

● ALBUM-「Made In Japan」(LP) ATLANTIC:P-8187 '72★/(CD) WEA:28XL-290 '89

● ALBUM-「Make Up」(LP) ATLANTIC:P-5073-4A '73★/(CD) WEA:35XL-291 '89

● ALBUM-「The Times(＊Best)」(LP) ATLANTIC:P-10053A '75★

● ALBUM-「二人の首領(Futarino Don)」(CD) PHILIPSC:25LD-119 '89

● 7"EP-「Crash」COLUMBIA:LL-10135 '70★

● 7"EP-「Satori Part II」ATLANTIC:P-1035A '71★

● 7"EP-「Map」ATLANTIC:P-1068 '71★

● 7"EP-「Kamikaze」ATLANTIC:P-1100A '72★

● 7"EP-「Make Up」ATLANTIC:P-1190A '73★

● 7"EP-「Woman」ATLANTIC:P-1407A '75★

● V.A.(LP)-「Rock Age Concert」ATLANTIC:L-6007 '71★

● V.A.(LP)-「Rock'n Roll Carnival」ELEKTRA:L-8024E '73★

内田裕也が1968年11月に結成したR&B+サイケデリックGSグループ、フラワーズは1969年7月にアルバム「チャレンジ」を発表した後、ギターの小林勝彦とボーカルの麻生レミが渡米する為に脱退してしまい、内田裕也はより本格的なロック・グループ結成を計画しB級GSグループの残党ミュージシャン達の中から、元ビーバーズのギターの石間秀樹、491を経てジョニー吉長(Vo)や西哲也(Ds:後にエムに加入)らの在籍していたカーニバルで活動していたボーカルのジョー山中(本名:城アキラ)、ギタリストとしてタックスマンに在籍していたベースの上月ジョンにフラワーズのドラムスの和田ジョージを集めて1970年春にフラワー・トラベリン・バンドを結成。結成当初はツェッペリンやクリムゾンなどのコピー・ナンバーでジャズ喫茶などに出演していたが、(内田裕也は結成当初はリード・タンバリンと司会役をやっていたが、彼らのプロデューサーに専念。)7月に東京・後楽園野外ステージに於て行なわれた天井桟敷劇団のロック・ミュージカル「ブラブラ男爵」(寺山修司演出)の音楽担当(生ライブ)を行なった後、10月にフィリップス・レコードより、キング・クリムゾンの"21世紀の精神異常者"、ブラック・サバスの"ブラック・サバス"、アニマルズの"朝日のあたる家"などのカヴァー・ナンバーのアルバム「Anywhere」を発表。このアルバムの発表直後に大阪・万博'70で行なわれたイベント"日本のロック・フェスティバル"にカナダのライト・ハウスらと共に出演して、ライト・ハウスのメンバーが彼らを気に入って、カナダに来るようにと誘いをかける。またこの万博を見に来ていたアメリカの学生のヒッピーが詞をヘルプして、彼らはコピーをやっている事に不満を感じてオリジナルを作ることを始め、西洋楽器で東洋を表現する為にラーガ奏法による東洋音階を取入れた作品「サトリ」を完成して、ビクター・レコード・スタジオにてレコーディングを行い、1971年4月にワーナー・パイオニアのアトランティック・レーベルより2ndアルバム「サトリ」を発表。このアルバムはレッド・ツェッペリン風のブリティッシュ・ハード・ロックとラーガ奏法による5音階(東洋音階)を融合させたハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドであり、彼らの先進的ロック・センスがうかがえる好作品であった。このアルバム発売後、彼らはカナダへ渡った。この当時、海外進出を企ったグループと言えば、ミッキー・カーチス&サムライ(ただしサムライは海外で結成したグループ)くらいしか前例はなく、彼らを受け入れてくれる体制など毛頭ない状況の中で彼らはカナダに渡ったが、始めの半年程はライト・ハウスについて来たユダヤ人の詐欺に会い、所持金も底をつき帰りの飛行機のチケットまで売り飛ばして食いつないだと言う。彼らの2ndアルバム「サトリ」がアメリカ、カナダで発売され、カナダのLPチャートの8位を記録。またライト・ハウスのプロデュースのもと3rdアルバム「メイド・イン・ジャパン」をカナダで録音して、ライト・ハウスのツアーの前座を務めたり、またEL&Pのカナダ・ツアーの前座を務め、カナダの中で人気を博して行った。1972年にフラワー・トラベリン・バンドは日本へ帰国し、東京都立体育館に於て帰国凱旋コンサートを行なったが、(キーボードの篠崎信彦がサポート・メンバーとして参加。)金銭的な問題や日本のロック情況の低さに対して煮詰まってしまった彼らは、モーリ・スタジオで録音した後、1972年9月16日に横須賀文化会館で行なわれたライブをレコーディング。(モーリ・スタジオで録音されたスタジオ・テイクと横須賀文化

会館のライブ・テイクを収録した4thアルバム「Make Up」が1973年2月に発売された。)またフェイセスの来日公園の前座なども務め、彼らは日本のロック・グループの中で最も人気のあるロック・グループとしての地位を築いたが、1972年の年末に来日が予定されていたローリング・ストーンズの前座にフラワー・トラベリン・バンドが選ばれたが、キース・リチャードの大麻不法所持により来日コンサートは中止され、これをきっかけとして彼らは意気消沈してしまい、京都円山公園音楽堂でのコンサートを最後に解散。ギターの石間はソロ・アルバム「ワン・ディ」を発表後、一時引退していたがトランザムに加入。ボーカルのジョー山中はニューヨークに移り住み、ソロ・アルバムを制作を行い、角川映画「人間の証明」シングル・ヒットを飛ばした。また、フラワー・トラベリン・バンドのナンバー「メイク・アップ」が日立のキドカラーのCMソングに使用されて、彼らの解散から数年経ってヒットをした。フラワー・トラベリン・バンドは日本のロック史の黎明期にフライド・エッグと共に先進的なロック・サウンドを作り上げ、日本のロックの土壌を作り上げた偉大なグループであった。

プリズム［PRISM］

◀Member▶

和田アキラ　Akira Wada(G)
渡辺　健　Ken Watanabe(B)
森園　勝敏　Katsutoshi Morizono(G) '77〜'78 ex.YONIN-BAYASHI
鈴木　徹　Toru Suzuki(Ds) '75〜'79 ref.SCENCE OF WONDER
青山　純　Jun Aoyama(Ds) '80〜'84
村上　秀一　Shuichi Murakami(Ds)②、④ ex.BAMBO
木村　万作　Mansaku Kimura(Ds) '85〜
久米　大作　Daisaku Kume(P) '75〜'78 ref.SQUARE
伊藤　幸毅　Koki Ito(Syn,Organ) '75〜'78
佐山　雅弘　Masahiro Sayama(Kbd) '79〜'80 ex.BURNING WAVE
中村　哲　Satoshi Nakamura(Kbd,Sax) '81〜'84 ex.ANZENBAND,SPECTRAM
松浦　義和　Yoshikazu Matsuura(Kbd) '85〜'88 ex.QUASAR
深町　純　Jun Fukamachi(Kbd) '85〜 ex.BAMBO
白尾　泰久　Yasuhisa Shirao(Sax) '77
佐藤　康和　Yasukazu Sato(Perc.) '78〜'79 ref.YAS-KAZ

◀Discography▶

● ALBUM-「Prism」(LP)POLYDOR:MR-3072/(CT)CRF-5011 '77★/(CD)POLYDOR:H28P-2067 '88
● ALBUM-「Second Thought/Second Move」(LP)POLYDOR:MR-3107 '77★/(CD)POLYDOR:H28P-2068 '88
● ALBUM-「Ⅲ」(LP)POLYDOR:MR-3160 '78★/(CD)POLYDOR:H28P-2069 '88
● ALBUM-「Live」(LP)POLYDOR:MRA-9646～7 '79★/(CD)POLYDOR:H50P-20270～1 '88
● ALBUM-「Surprise」(LP)WEA:M-12003W '80★/(CD)WEA:28L2-0008 '87
● ALBUM-「Community Illusion」(LP)WEA:M-12501W '81★/(CD)WEA:28L2-0009 '87
● ALBUM-「Live Arive」(LP)WEA:M-12505W '82★/(CD)WEA:28L2-0010 '87
● ALBUM-「Visions」(LP)MOON:28005 '82★
● ALBUM-「永久機関(∞)」(LP)MOON:28014 '83★
● ALBUM-「Nothin' Unusual」(LP)TDK:T28P-1010 '85★
● ALBUM-「Dreamin'」(LP)SMS:SM28-5426 '86★/(CT)CM28-5426/(CD)MD32-5028 '86
● ALBUM-「Live Arive Vol.2」(CD)SMS:MD32-5108 '87★/(CT)CM28-5146 '87
● ALBUM-「The Silece of The Motion」(LP)SMS:SM28-5435/(CD)MD32- '88
● ALBUM-「Mother Earth」(CD)EMOTION:BCCY-2 '90
● ALBUM-「Prism Super Collction(＊Best)」(CD)POLYDOR:H32P-20081 '88
● ALBUM-「The Best of Prism」(CD)POLYDOR:35PD-3113-26 '87
● 7"EP-「Love Me」POLYDOR:DR6129 '77
● 7"EP-「Sunset Cruise」POLYDOR:DR6228 '78
● 7"EP-「面影の彼方(Unforgettable)」WEA:L-365W '80★
● 7"EP-「Take off」SMS:SM07-259 '86★

プリズムは元来プログレッシヴ・ジャズ・ロックの範疇に純粋に入るグループではなく、ロック・サイドからのアプローチによるフュージョン・グループであり、プログレッシヴ・ジャズ・ロックやラテン、チック・コリア的なスパニッシュ・ジャズなどの多面的な要素を持ったグループである。また日本のフュージョン・ブームの先駆的な役割を果して70年代中期にデビューして以来、常にフュージョン・シーンをリードして行く存在として現在まで活躍している老舗のグループで、数多くのミュージシャンが参加し、またアルバムも15枚以上にのぼる。チック・コリアのリタン・トゥ・フォーエバーやサンタナ、ビリーコブハムといったプログレッシヴな要素を持つロック・アプローチのジャズ・ロックから影響されてベースの渡辺健とロード・ランナーというロックン・ロール・グループに在籍していたギターの和田アキラを中心としてプリズムは結成された。1975年頃から高円寺次郎吉や渋谷屋根裏等のライブ・ハウスを中心として精力的なライブ活動を開始。ハード・ロックやロックン・ロールが全盛期の当時の日本のロック・シーンの中で、いち早く、リタン・トゥ・フォーエバーやビリーコブハムといったアメリカの先進的であり、テクニカルなインストゥルメンタル・ロック&ジャズ・サウンドを確立し、またアル・ディメオラやサンタナからの影響の強い超絶的なギター・プレイを聴かせるギタリストの和田アキラやジャコ・パストリアス張りのフレットレス・ベースの渡辺健を中心とした彼らの高度な演奏力は驚異的な存在として、都内ライブ・ハウスの噂の的となって行った。彼らの登場以前の日本のロック・サウンド&演奏技術とは一線を引く、新しいロック時代の申し子とも言うべき彼らは、何回かのメンバー・チェンジを経て、1977年に和田アキラ(G)、渡辺健(B)、久米大作(P)、伊藤幸毅(Synth.&Organ)、デビュー前のカシオペアに在籍していた鈴木徹(Ds)にゲストという形で度々共演していた元四人囃子の森園勝敏(G) を加えた6人編成となり、1977年4～5月にかけてポリドール・スタジオに於てレコーディングを行ない、8月にシングル「ラヴ・ミー」、9月にアルバム「プリズム」を発表。スウィング・ジャーナル誌などの保守的なジャズ雑誌では、"これはロックでフュージョンじゃない"、またロック雑誌からは"ロックじゃない、ジャズだ"という様に、ロックとジャズの狭間に位置する彼らの先進的なサウンドは賛否両論を呼んだが、当時人気ナンバー・ワン・ギタリストで

あった森園が加入している事や実際、和田アキラのギターを耳にした強烈な印象によって、爆発的なセールスを記録。一躍、日本のロック・シーンの人気グループへと踊り出て、各メンバー共に音楽誌の人気投票の上位に選ばれ、連日のライブも超満員といった具合い。特にギタリストの和田アキラは“天才”の名を欲しいままにして、ギター少年達の神様的な存在となった。デビュー時の平均年齢20歳という正に時代の申し子であった彼らの衝撃的な登場は、日本に“フュージョン”(フュージョンという言葉は良くも、悪くもだが、)の夜明けをもたらした。1stアルバム発売から半年という短いインターバルで2ndアルバム「セカンド・ソウツ」が1978年3月に発売され、プリズムの爆発的なセールにより、各レコード会社はスペース・サーカス、クロスウィンドといったプリズムと同じタイプのロック・サイドのアプローチによるプログレッシヴな感性を持つフュージョン・グループやスクウェア、カシオペアといったジャズ・アプローチのフュージョン・グループ達をデビューさせ、フュージョン・ブームが訪れた。この初期の頃のプリズムのサウンドは、リタン・トゥ・フォーエバーやサンタナ、コロシアム、ビリーコブハムといったロック・フィールドを強く感じさせ複雑なアンサンブルと曲構成を和田アキラの強烈なインパクトを放つギターと森園勝敏のメロディアスなギター・ワークのコントラストやオルガン、シンセ、ピアノ、といった多彩なキーボード・ワークによって演出するプログレッシヴなジャズ・ロックと、ボサノバやラテン・リズムをベーシックとしたメロウなジャズ・アプローチのフュージョンの2面性を持っていた。またこの頃のライブには、サポート・メンバーとしてドラムスの村上秀一や、サックスの白尾泰久らが参加していたが、3rdアルバムのレコーディングを目前にして、ラテン&メロー・サウンド指向のギターの森園とピアノの久米大作が脱退して、(ただし久米は3rdアルバムにゲストとして参加。)パーカッションの佐藤康和が新加入して、1979年2月にアルバム「プリズムIII」発売。アルバム発売後にオルガン&シンセサイザー奏者の伊藤幸毅が脱退し、またメンバーの幾人かが大麻所持事件に巻き込まれて、バンド内の体制が崩壊してしまったプリズムは、1979年7月～8月にかけて行なわれたツアー(キーボードに佐山雅弘を加え、また今まで在籍していたメンバー全員がゲストとして参加。)を最後に活動を停止。11月には先のツアーの模様を収めたライブ・アルバム「Live」発売。ギターの和田アキラは、深町純、松岡直也&ウィシング、本多俊之&バーニング・ウェーヴなどに精力的に参加をしており、一時期は解散の噂もされていたが、バーニング・ウェーヴのキーボードの佐山雅弘と山下達郎グループのドラムスの青山純を新メンバーとして迎えて、和田アキラ、渡辺健の4人で第2期プリズムをスタートさせ、ワーナーパイオニアに移籍して、1980年8月にアルバム「サプライズ」を発表。翌年にはキーボードが佐山から中村哲へとチェンジしてアルバム「コミュニティー・イリュージョン」を発表。第1期プリズムのサウンドが持っていたラテン&メローなフュージョン要素(この当時は、フュージョン台頭期にあった“攻撃的で刺激的な面”はフュージョンから削り落とされ、フュージョンはイージーリスニングとしての地位を固めた。)は世間のブームに対抗するかの様に排除され、攻撃性が強く、また広がりのある空間を作り出すプログレッシヴ・ジャズ・ロックとしての要素を前面に押し出したサウンドであり、この頃の時期がプログレッシヴ・ロックとして最も興味深い。また、和田アキラはキープのメンバーとしても平行して活動しており、彼にとっても最もプログレッシヴな感性に満たされた時期であった。この後このライン・ナップによってアルバム3枚を発表するが、サウンド的に煮詰まって行き、次第に方向性の定まらないものになって行ったが、1985年にTDKレコードへ移籍して、和田、渡辺以外のメンバーを一新して、深町純(Kbd)と元クェーサーの松浦(Kbd)木村(Ds)が新加入して録音された第3期プリズムの1作目のアルバム「Nothin' Unusual」で再び、第2期プリズムの初期の頃のようなプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドへと戻り、86年に「Dreamin'」、87年に「Live Alive Vol.2」と「The Silence of The Motion」を発表。現在は和田アキラ(G)、渡辺健(B&Kbd)、木村万作(Ds) の3人編成となり、アルバム「Mother Earth」を発表したが、再びサウンド的に低迷している。

ブレスト・バーン [BREST BURN]

◀Discography▶

● ALBUM-「Debon」(LP) VOICE:VO-1001'76★

ブレスト・バーンはカルナ・キューレと同じく、VOICEレーベルという自主制作レーベルから1976年にアルバム「Debon」を発表している前衛音楽ユニット。東洋のカルマを表現したアコースティックな前衛音楽であったカルナ・キューレに対して、このブレスト・バーンは初期のファウストやスラップ・ハッピー、イーノから影響された前衛音楽であった。この時代にはこの手のサ

ウンドが盛んに行なわれていたが、彼らの事の詳細については不明。

プロビデンス [PROVIDENCE]

◀Member▶

塚田　円　Madoka Tsukada(Kbd)
久保田陽子　Yoko Kubota(Vo) ex.FIRST DRAW
宮本　憲一　Kenichi Miyamoto(G) '85～'86
小野　聡　Satoshi Ono(G) '86～
広瀬　泰行　Yasuyuki Hirose(B) '83～'85,'87～
数納　剛　Tuyoshi Kazuno(B) '85～'87
千葉　秀樹　Hideki Chiba(Ds) '85'～87,'88
西田　均　Hitoshi Nishida(Ds) '87～'88 ref.AUGUST
杉山　雄一　Yuichi Sugiyama(Ds) '89～ ex.SABER TIGER,JULIENE

〈GUEST〉
クリスチャン・ベア　Christian Beya(G) ex.ATOLL①

◀Discography▶

- ALBUM-「伝説を語りて(And I'll Recite An Old Myth From...)」
  (LP)BSP PROJECT:BSP-004 '90/(CD)CRIME:KICP-10 '90①
- CT-「Tradition」'85★
- CT-「時の涙(Providence)」BSP PROJECT '88
- V.A.(CD)-「Prospective Faces Ⅰ」MADE IN JAPAN:MCD-3203 '89
- VIDEO-「Provideo」BSP PROJECT '88★
- VIDEO-「ProvideoⅡ」BSP PROJECT:BSP-V002 '90

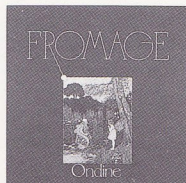
現在の日本のプログレッシヴ・ロック・シーンに於て、最も秀れたプログレッシヴ・ロック・グループの一つである札幌のプロビデンスの歴史は古く、結成は1982年に遡る。札幌にある北海学園大学内の軽音楽部に籍を置いていたギタリストの唐島田淳が中心となって、キーボードの塚田円、ベースの広瀬泰行、ドラムスの本間、ヴァイオリンの今卓也の5人によってキング・クリムゾンのコピーグループとして誕生した。1985年4月にギタリストの唐島田が大学を卒業すると自然消滅してしまったが、北海学園大学の3年生であったキーボードの塚田は、同サークルのギタリストの宮本憲一と共に"変拍子のカッコ良い、そして新月の様に怪しい日本語の歌詞のバンドを作ろう"と計画して、北海学園大学のサークルの先輩であり、ハード・ロック・グループ、ファースト・ドロウのボーカルをやっていた久保田陽子、ドラムスの千葉英樹、ベースの数納剛を誘い、1985年5月に新生プロビデンスを結成。7月には北海学園軽音楽部の定期演奏会でオリジナル・ナンバー2曲に新月の"鬼"などのコピーを加えて初ライブを行なった後に、1986年1月にデモ・テープ「伝説を語りて」を制作・発表。3月にはギターの宮本が脱退して、小野聡が加入。キング・クリムゾンの臭いがする屈折した独自のハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドは、東京のプログレ・マニアや地元札幌のプログレ・ファンから注目を集める様になり、地元札幌のプログレ・ファンの三橋徹らが主催して86年8月に札幌のキャンパス21に於いて行なわれたイベント"第1回札幌プログレッシヴ・ナイト"にジュリエーヌや花郎(ファラン)らと共に出演して、地元札幌に於ける実力No.1プログレ・グループとしての第一歩を踏み出した。その後もこのイベントに積極的に出演し、三橋徹が彼らのプロデュース&マネージメントを担当する様になり、また彼らのデモ・テープを耳にしたメイド・イン・ジャ

パン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノも彼らのサウンドに興味を持ち、アルバム制作の準備を開始した。1987年1月にベースの数納が脱退して、オリジナル・プロビデンスのベーシストであった広瀬が加入して、8月頃から2ndデモ・テープの為の録音に入り、12月に自主制作レーベルより2ndデモ・テープ「時の涙」を発売。1988年1月にドラムスが千葉から西田均へ交代して、3月に東京・吉祥寺シルバーエレファントに於いて東京初ライブを行なった。久保田陽子のパワーに満ちたボーカル・ワークやジョン・ウェットン・タイプの秀れた技術を持った広瀬泰行のベース・プレイを始めとする高度な演奏技術とパワーに裏付けられた独自の屈折したハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドは高い評価を受けて、実力No.1の若手グループとして認められていった。1988年12月にはドラムスの西田が脱退して、オリジナル・メンバーであった千葉が再加入したが、1989年5月に再び脱退。ドラマーが定着しない時期が続いたが、パワーに溢れる素晴らしいドラミングで定評のあるサーベル・タイガーの杉山雄一が加入して、アルバム・デビューに向けて準備が整ったプロビデンスは1989年7月～11月にかけて札幌のジョー・ダウン・スタジオに於いてレコーディング。(フランスのアトールのギタリストであるクリスチャン・ベアがゲストとして参加。)プログレ・ファンからの大きな期待を担ってデビュー・アルバム「伝説を語りて」は1990年3月にキング・レコードのクライム・レーベルから発売された。若手グループのデビュー・アルバムとは思えない完成度を持ったこのアルバムは話題を呼び、好セールスを記録。4月には札幌メッセ・ホール、旭川西武スタジオ9、東京・吉祥寺シルバーエレファント、大阪ブーミン・ホールに於いてアルバム発売記念ツアーを行い、プロビデンスとして最も充実した時期を迎え、1990年7月21日に札幌メッセ・ホールで行なわれたライブ終了後、2ndアルバムに向けての準備を開始したが、1991年1月にプロビデンスの表看板であるボーカルの久保田陽子が札幌のハード・ロック・グループ、サーベル・タイガーへ加入の為に、突然脱退してしまい、現在は塚田(Kbd)、広瀬(B)、杉山(Ds)を中心としてプロビデンスの立て直しを計っている。

フロマージュ［FROMAGE］

◀Member▶

谷口　裕一	Hirokazu Taniguchi(Ds) ex.DATETEN RYU,GMM
中嶋　一晃	Ikkou Nakajima(G) '77～'80 ex.RUMBLE,ref.FASION,PAGEANT
荻島由希夫	Yukio Ogishima(G) '82～'83
近藤　芳夫	Yoshio Kondo(G)
太田　　享	Toru Ota(G) '86～'88 from HERETIC
永川　敏郎	Toshio Egawa(Kbd) '77 ex.RUNBLE,ref.SHEHERAZADE,NOVELA,GERARD,EARTH SHAKER
吉川　智子	Tomoko Yoshikawa(Vo,Kbd) '78～'80 ref.AMAZONESS
嶋村よし江	Yoshie Shimamura(Kbd) '82～'85
北村　佳彦	Yoshihiko Kitamura(Kbd) '86～'88
真下　正樹	Masaki Mashimo(B) '77～'83 ex.GMM
林　　智久	Tomohisa Hayashi(B) '84～'85
田中　勇次	Yuji Tanaka(B) '86～'88
奥田　正一	Shoichi Okuda(Vo) '77～'78 ex.RUMBLE
東沢　　学	Manabu Higashizawa(Vo,Fl) '82～ ex.AT WILL

◀Discography▶

● ALBUM-「Ondine」(LP)BELLE ANTIQUE:8401 '84★

● ALBUM-「Ophelia」(LP)BELLE ANTIQUE:8806 '88★

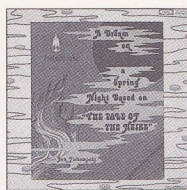
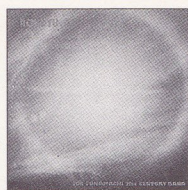
● ALBUM-「月に吠える(Tsukini Hoeru)＊Best」(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25002 '90

1974年に中嶋一晃が結成したランブルの初代ボーカリストの奥田正一は、ランブルを脱退後、某ライブ・ハウスに務めていたが、このライブ・ハウスに出演していた京都のGMMというグループのドラマーの谷口裕一(だててんりゅうに一時期、在籍していた事もある。)とベースの真下正樹と意気投合して、ジェネシス・タイプのプログレッシヴ・ロック・グループを結成する事を計画。1977年秋にランブルを解散したばかりであったギタリストの中嶋一晃を誘い、またキーボード奏者に適任者がみつからなかったので、元ランブルのキーボード奏者の永川敏郎をサポートとして加えて、1977年冬にフロマージュを結成。結成した当初のフロマージュは中嶋一晃がランブル時代にやっていたナンバーを始めとして、中嶋一晃の音楽性を中心としたサウンドであった。1977年3月に京都サーカス&サーカスに於いてデビュー・ライブ(共演:シェラザード)を行ない京都を中心として、精力的なライブを開始したが、直ぐにキーボードの永川敏郎がシェラザードに誘われて脱退し、またボーカルの奥田正一も脱退して、代わってボーカル&キーボードの吉川智子が加入。大阪の御堂会館で行なわれたイベント"What's Rock Vol.7"(山水館のラスト・ステージ)や京都円山公園のイベントなどを始めとして精力的なライブ活動を行ない、地元での人気を得て行なったが、1979年頃からギターの中嶋一晃とボーカルの吉川智子が、元シェラザードの青方(Kbd)、大久保(B)、引頭(Ds)と共にプログレッシヴ・テクノ・ポップ・グループのファッションへ参加して平行活動(ファッションは1979年冬に雑誌「GORO」のイメージ・ガールのイメージ・ソングのコンテストで決勝大会まで行ったが、結局優勝出来ず、煮詰まってしまう。)を行なう様になり、1980年にギターの中嶋がリハーサルの為に京都へ通うのが辛いのと、音楽性の違いを理由に脱退し、ボーカル&キーボードの吉川も時を同じくして脱退。一時活動休止を余儀なくさせられていたフロマージュは残されたドラムスの谷口、ベースの真下に、アット・ウィルというグループを手伝っていたボーカル&フルートの東沢学とキーボードの嶋村よし江、ギターの荻島由希夫を加えて、1982年に第2期フロマージュをスタート。中嶋一晃の音楽性に支えられていた結成当初のフロマージュのジェネシス色を強調したハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドから、東沢の甘いボーカルとフルート・ワークをフィーチャーした叙情的なバラードを中心としたソフトなプログレッシヴ・ロック・サウンドに変化した彼らのサウンドに注目したマーキー誌のライターであり、ラクリモーザのリーダーである斉藤千尋の仲介により、フロマージュは1983年5月15日に吉祥寺シルバーエレファントに於いて東京初ライブを行なった。(共演:アクアポリス)マーキームーン誌の大きなバック・アップに支えられた彼らは、次第にプログレ・マニア層から注目を集める様になり、マーキームーン誌が彼らのアルバムを発売する為に自主制作レーベル"ベル・アンティーク"を設立して、東沢(Vo&Fl)、谷口(Ds)、嶋村(Kbd)に林智久(B)、近藤芳夫(G)を加えて1984年1月〜6月にかけて京都のトーマス・スタジオに於いてレコーディング、秋にアルバム「Ondine」が発売された。このアルバムは夢幻の「シンフォニア・デッラ・ルナ」、ネガスフィアの「Castle In The Air」と共にインディーズ・プログレのムーヴメントの先駆けとなり、またキャメルあたりのサウンドを強く連想させる甘いサウンドであり、録音クオリティー的に今一歩の出来であったが、数少ないプレスながら早々に完売し話題を集めた。しかし、ギターとベース・パートのメンバー・チェンジが激しく、安定しなかった為にもともと活動がままならなかったフロマージュであったが、1985年11月14日の大阪キャンディー・ホール(共演:アウターリミッツ)のライブを最後に、サウンドの要であったキーボードの嶋村が脱退して、活動停止。1986年に入ると、東沢、谷口の2人は、ヘレティックのギターの太田享と北村佳彦(Kbd)、田中勇次(B)を新たに加えて、第3期フロマージュを結成し、10月に吉祥寺シルバーエレファントに於いてライブ活動を再開。1987年にはマーキー誌のベル・アンティーク・レーベルより2ndアルバム「オフェーリア」を発表したが、アルバム発表後は再び活動停止をして現在まで沈黙を保っている。

深町純&21stセンチュリーバンド"バンブー" [JUN FUKAMACHI&21st CENTURY BAND"BAMBO"]

◀Member▶

深町　純　Jun Fukamachi(Kbd) ref.KEEP,PRISM
木村　憲司　Kenji Omura(G) ref.YMO
小原　礼　Rei Obara(B) ex.SADISTIC MIKA BAND
村上　秀一　Shuichi Murakami(Ds)
村岡　健　Ken Muraoka(Sax)

◀Discography▶

●ALBUM-「六喩(Rokuyu)」(LP)TOSHIBA EMI:ETP-72100 '75★

●ALBUM-「Introducing Jun Fukamachi」TOSHIBA EMI:LF-91007 '75★

●ALBUM-「Second Phase」TOSHIBA EMI:LF-91035 '77★

〈JUN FUKAMACHI SOLO〉

●ALBUM-「春の夜の夢(The Tale of The Heike)」(LP)TOSHIBA EMI:TP-72311 '78★

●ALBUM-「海潮音」(LP)COLUMBIA:GX-7031 '80★

芸大の作曲科を卒業寸前で退学した深町純は、1970年代初期から作曲・編曲家、キーボード奏者として歌謡界やフォーク&ポップス・サウンドのソロ・アルバムをリリースしていたが、幾多のセッションを通じて交流を深めた元赤い鳥のギターの大村憲司、ドラムスの村上"ポンタ"秀一、サディスティック・ミカ・バンドのベースの小原礼、サックスの村岡健といった一流のスタジオ・ミュージシャンを従えて、深町純&21stセンチュリー・バンド(ライブではバンブーという名前を使っていた。)を1975年に結成。東芝EMIからアルバム「六喩」を発表した。このアルバムはカンタベリー系のジャズ・ロック的なアプローチがみられるプログレッシヴ・ジャズ・ロック・アルバムであり、プリズムなどのフュージョン・グループが大挙してデビューする以前の、日本のフュージョンの先駆的なアルバムとしてセンセーショナルな作品であり、現在でも高く評価されるべき作品であった。バンブーは六本木ピット・インなどを中心として一時期は精力的に活動する傍ら、東芝のプロ・ユース・シリーズという録音とカッティング技術を売り物にしていたシリーズの制作を担当して、「Introducing Jun Fukamachi」と「Second Phase」の2枚のアルバムや深町純のピアノのソロ・アルバム、村上秀一のパーカッション・アルバムなどを発表したが、これらのアルバムのサウンドは「六喩」とは異なり、深町純のシンセサイザーをフィーチャーしたイージーリスニング&ファンキーなフュージョン・サウンドであった。21stセンチュリー・バンドは1975年〜77年までスタジオ・ワークを中心に活動して解散したが、深町純はシンセサイザーのソロ作品や、ブレッカー・ブラザーズらとのファンキー&プログレッシヴなフュージョン・サウンドのソロ作品などを数多く発表している。これらの作品のサウンドは幅広く、各アルバムによってかなり異なったものであり、商業的な臭いの強いものから、芸術性の高いものまでまちまち。プログレッシヴ・ロックとして評価すべきものとしては、1987年に東芝EMIから発売された芸術祭参加作品の「春の夜の夢」(これはシンセサイザーをメインとしたソロ・アルバムで和旋律と近代クラシックの和声法を取り入れたシリアスな作品。)や1977年にキティーから発売された「ディデラックの海」(このアルバムはブレッカー・ブラザーズらと制作したフュージョン・アルバムであり、ファンキーな面はあるが、ビリーコブハムの初期の作品を想わせるプログレッシヴ・ジャズ・ロックとしての色合いも持ち合わせた作品であった。)などが代表的なもの。また深町純は1981年〜82年にかけてはプリズムのギターの和田アキラ、マライアのドラマーの山木秀夫、元トランザムの富倉安生と共にブラッフォード・タイプのベースのジャズ・ロック・グループ"KEEP"、1985年〜1988年にかけてはプリズムのメンバーとしても活躍。プログレッシヴなジャズ・ロックや先進的なシンセサイザー・ミュージック、歌謡界&ポップス界の革新的な作曲・編曲家として、多方面に渡って日本の音楽シーンに影響を与え続けているアーティストである。

ページェント [PAGENT]

◀Member▶

中嶋　一晃　Ikkou Nakajima(G) '81〜'87 ex.RUMBLE,FROMAGE,FASION

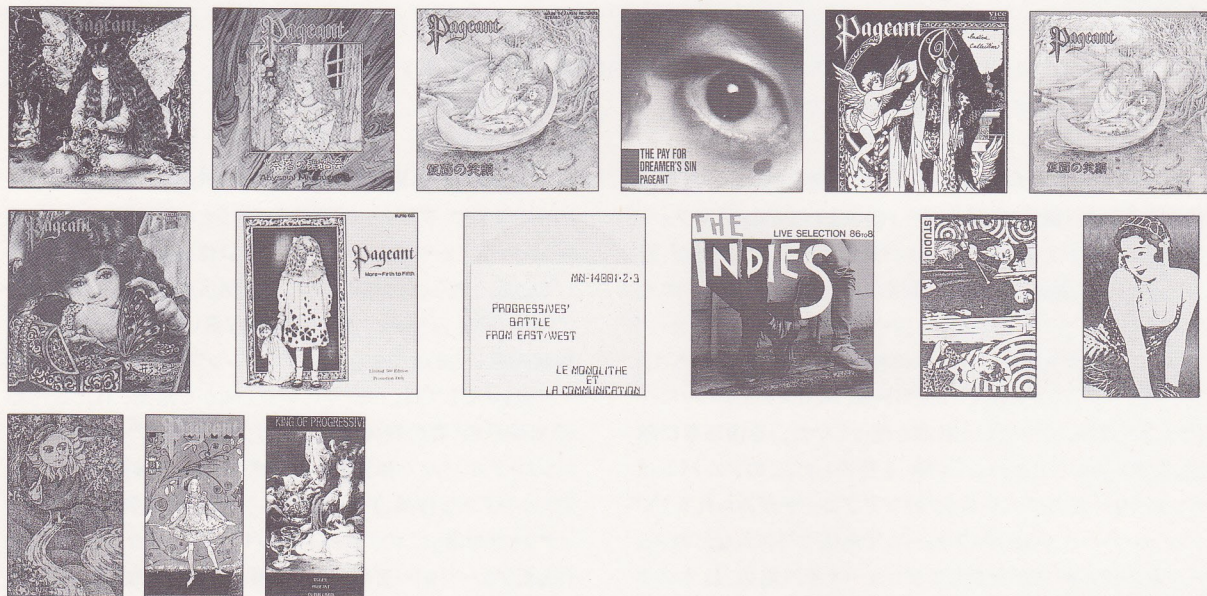
釜木　茂一　Shigekazu Kamaki(G) '88 ex.ORPHEUS,MUGEN,from EVE,KEHELL,Mr.SIRIUS

前野　裕之　Hiroyuki Maeno(G) '89〜 ex.MARINO

門野　家照　Ieteru Monno(Vo) '81〜'83

永井　博子　Hiroko Nagai(Vo,Kbd) ref.Mr.SIRIUS

林　克彦　Katsuhiko Hayashi(Kbd) '86 from MUGEN
加島　有三　Yuzo Kashima(Kbd) '88'89 ex.MAITO,MAGDALENA
宮武　和広　Kazuhiro Miyatake(Fl,A-G) '84～ from Mr.SIRIUS
長嶋　伸行　Nobuyuki Nagashima(B) '81～'86 ex.CLEOPATRA,ref.MUGEN
山田　和彦　Kazuhiko Yamada(B) '86
佐藤　城且　Shirokatsu Sato(Ds) '81～'83
引頭　英明　Hideaki Indo(Ds) '84～ ex.SHEHERAZADE,FASION,SCHEHERAZADE II

◀Discography▶

●ALBUM-「螺鈿幻想(La Mosaique De La Reverie)」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1005 '86★/(CD)CRIME:292E-2007 '89
●ALBUM-「奈落の舞踏会(Abysmal Masquerade)」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1015 '87★①
●ALBUM-「仮面の笑顔(Kamen no Egao)*Re-issued from①+②」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2911 '80
●ALBUM-「夢の報酬(The Pay For Dreamer's Sin)」(LP)CRIME:NAS-1408 '89/(CD)CRIME:292E-2008 '89
●ALBUM-「Indies Collection(*Best)」(CD)VICE:ECD-1013 '88★
●12"EP-「仮面の笑顔(Kamen no Egao)」VICE:18EC-5 '87★②
●7"EP-「人形地獄(Ningyo-Jigoku)」MADE IN JAPAN:MIJ-1010 '86★
●7"FLEXI-「More～Firth of Fifth」MADE IN JAPAN:MIJ-PRO-005(Promo) '86
●7"FLEXI-「Etude(A side:OUTERLIMITS)」MADE IN JAPAN:MIJ-PRO-009(Promo) '85
●CT-「Studio」PAGEANT:PAG-001 '84★
●CT-「Live」PAGEANT:PAG-002 '84★
●VIDEO-「Live in 1985」MADE IN JAPAN:MIJVD-003 '86★
●V.A.(LP)-「Indies Live Sellection」VICE:GWX-183～184 '87★
●V.A.(7"FLEXI)-「Progressive's Battle」MONOLITH:MN-14001～3 '85★
●V.A.(CT)-「Official Bootleg Lives II」MADE IN JAPAN:MIJTP-2008 '88★
●V.A.(VIDEO)-「King of Progressive」MADE IN JAPAN:MIV-98001 '86★
●V.A.(VIDEO)-「Official Bootleg Lives」MADE IN JAPAN:MIV-58002 '88★

フロマージュのギタリストとして活動していた中嶋一晃は、1979年冬に元シェラザードのキーボードの青方均、ベースの大久保寿太郎、ドラムスの引頭英明に誘われて、プログレッシヴ・ロックの要素を持ったテクノ・ポップ・グループ“ファッション”を結成して、フロマージュと平行して活動を始めた。ファッションはメジャー・レコード会社からプロ・デビューする為に結成されたグループであり、(要するに売りに徹した、)雑誌“GORO”のイメージ・ガールの為のイメージ・ソング・コンテストの決勝大会に出場したが、結局、優勝出来ずに終わり、プロ活動を断念した中嶋一晃はファッション、フロマージュ共に脱退。そして1981年秋にジェネシスのコピー・グループをやる為にメンバー捜しをしていたボーカリストの門野家照に声をかけられた中嶋一晃は、以前にフロマージュと対バンした事があったカンタベリー系のプログレッシヴ・ロック・グループ、クレオパトラのベーシストの長嶋伸行、ドラムスの佐藤城且、そして大阪・谷町にある楽器店ACTの“ジェネシスが好きなキーボード奏者がいる”という紹介でキーボード奏者として永井博子を加えて、ページェントを結成。1982年7月6日に大阪・森ノ宮青少年ホールで行なわれた楽器店ACTの主催するイベントに於いてジェネシスのコピーとオリジナル・ナンバーでデビュー・ライブを行なった。初期の頃のページェントはプロ活動を断念した中嶋一晃が趣味感覚で、ジェネシスのコピーを中心に活動するグループとしてスタートした訳だったが、今までキーボード奏者としてのみ参加していた永井博子がジャズ・ハウスで歌っている姿(彼女は大阪音大で声楽を学んでいる。)を初めて耳にした中嶋一晃は、(今では笑い話だが何んと約2年間程、永井博子があんなに歌える事を知らずに、キーボード奏者として参加させていたのだった。)“これはいける、永井博子をボーカルにしよう”と思いつき、再びバンドで勝負しようという気持ちが広がって行き、第1期ページェントを1983年秋に解散して、本腰を入れて活動して行く為に、永井博子(ボーカル&キーボード)、中嶋一晃(ギター)、長嶋伸行(ベース)に元シェラザード&ファッションのドラムスの引頭英明を加えて、1983年秋に第2期ページェントを結成して、NHKのヤング・フェスティバルの大阪大会に出場(2位に入賞)した後、シリウスをやっていたマルチ・プレイヤーの宮武和広(フルート&A・ギター)を加えて、1984年6月に大阪バハマに於いて第2期ページェントとしての正式なデビュー・ライブを行なった。今までの中嶋一晃の作曲だけによる音楽性から永井博子と中嶋一晃との共作による音楽性へ発展したページェントは、ジェネシス的アンサンブルのプログレッシヴ・ロック・サウンドとケイト・ブッシュ風のユーロピアン・ポップス・サウンドを融合させ、永井博子の持つデカダンスの世界を描く詩によって鮮明に表現するページェントのオリジナリティーを確立。またライブ・ステージでは、スパークスから影響されたダンディズムと道化師が同居する衣装・メイクを身にまとい、浪波の笑いの世界と大正ロマンディズムを演じる異様なステージ・パフォーマンスを作り上げて、サウンドの素晴らしさと、ステージ・パフォーマンスの両面に渡って彼らは急激に注目を集め、12月31日の大晦日に大阪キャンディー・ホールで行なわれたイベント“プログレッシヴ・ナイト”にジェラルド、スターレス、ミダス、剣の舞、イヴ、ソフィアと共に出演して、関西のプログレ・シーンの中で人気グループへと成長して行った。台頭しつつある日本のプログレ・シーンに興味を持ったマーキームーン誌のライターであった中藤正邦氏は、インディーズ・レーベル“モノリス”を設立して、関西と関東を代表するグループを集めたオムニバス・ソノシート“Progressives' Battle”を計画。ページェントもアウターリミッツ、ネガスフィア、アクアポリス、夢幻、剣の舞と共にこのオムニバス・ソノシートに参加し、またこのオムニバスの発売を記念して1985年5月3日〜6日の4日間に渡って吉祥寺シルバーエレファントに於いて行なわれたイベント“Progressives' Battle Live”の4日(共演:アタラクシア)、5日(アウターリミッツ)の両日にページェントは出演し、東京初ライブを行ない、東京初ライブながら郡を抜いた人気を博して早くも東京、大阪の双方に渡って人気グループとしての地位を築き始めた。1985年11月に東京・渋谷エッグマン、横浜ビブレ、名古屋ELL、大阪キャンディー・ホールの4つのライブ・ハウスが共同企画で行なった大規模なイベント“プログレッシヴ・サーキット”の11月16日の渋谷エッグマンに於いてアウターリミッツと共に出演した後、メイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノからアルバム制作の誘いがあり、(マーキー誌の“ベル・アンティーク”からも誘いがあった。)1985年12月〜1986年1月にかけて大阪のスタジオJAMにてレコーディングを行なった。当時のインディーズのレコーディングとしては破格の条件のもとで行なわれたこのレコーディングは、キング・レコードのネクサス・レーベルの“ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”に選ばれなかったという事に対しての意地もあって、当時のインディーズのアルバムのクォリティーからは考えられない完成度を持った作品として仕上がり、1986年3月にデビュー・アルバム「螺鈿幻想」発売。3月21日に大阪キャンディー・ホール、4月6日に渋谷エッグマンに於いて発売記念ライブを夢幻のキーボードの林克彦をサポート・メンバーに加えて行なった。アウターリミッツのデビューアルバム「ミスティー・ムーン」と共にインディーズ・プログレとして爆発的なセールを記録し、またライブの面でも超満員の動員を記録。ページェントは日本のプログレ・シーンの中で、最も人気のあるグループとしての地位を確立し、また中嶋(G)、永井(Vo&Kbd)、長嶋(B)、引頭(Ds)、宮武(Fl,G)にサポートとして林(Kbd)を加えたこのライン・ナップの時期が第2期ページェントとして最も充実した時期であったが、86年夏に大阪・近鉄小劇場で行なわれた雑誌「宝島」のイベント(メトロファルス等が共演。)を最後に宮武和広が自らのソロ・プロジェクト“Mr.シリウス”の準備と専念する為に脱退し、またベースの長嶋伸行も脱退。このライブと前後して録音されたシングル「人形地獄」のベースは片面が長嶋、片面が新加入の山田和彦となっており、メンバーチェンジの過渡期に行なわれた。シングル「人形地獄」はアウターリミッツの2ndアルバム「少年の不思議な角笛」、夢幻のシングル「冬夢」(ページェントのリズム隊の引頭、長嶋が参加。)

と共に9月にメイド・イン・ジャパン・レコードから発売され、この発売を記念して10月26日に東京・新橋のヤクルト・ホールに於いて"メイド・イン・ジャパン・フェスティバル"が開催され、アウターリミッツ、ブラック・ペイジと共に出演。前売チケットは発売日から数日で完売し500人以上の動員を集める大盛況であった。(このライブの演奏はクラウン・レコードから発売されているライブ・オムニバス・アルバム「インディーズ・ライブ・セレクション」に収録されている。)また、このライブから新メンバーとしてベーシストの山田和彦が加入したが、12月31日に大阪キャンディー・ホール閉店イベントを最後にライブ・サポート・メンバーとして参加していた夢幻のキーボード奏者の林克彦が脱退した。中嶋一晃(G)、永井博子(Vo&Kbd)、山田和彦(B)、引頭英明(Ds)というライン・ナップとなったページェントは、1987年4月にスタジオ・ライブとリミックス・ヴァージョンによるミニ・アルバム「奈落の舞踏会」を発表。(11月16日にキャンディーホールで行なわれたライブをレコード化する予定だったが、出来が今一歩であった為に予定を変更して、このアルバムが発売された。)この頃から、演奏の向上に重点を置き、よりプロフェッショナルな音楽集団を目指し、"脱プログレ"指向が強くなってきた永井博子と、今までの"学芸会的ステージ・パフォーマンス"スタイルと音楽性を主張する中嶋一晃との価値観の相違が表面化してきたページェントは、東京・新宿スペース107ホール(4月4日、25日、26日)と大阪・布施センサス・ホール(6月6日、7日、24日)に於いて行なわれたイベント"メイド・イン・ジャパン・フェスティバル春の陣"にアウターリミッツ、夢幻、マグダレーナと共に出演したが、6月7日のセンサス・ホール(共演:マグダレーナ)でのライブを最後にリーダーの中嶋一晃が脱退してしまった。脱退した中嶋一晃はヴィエナ結成に一時期加わっていたが、東京へのリハーサル通いが辛いのと音楽性の相違により脱退。一方、今までのページェントのイメージ作りとステージングのアイデア等の演出をしており、ページェントにとってプロデューサー的な役割をしていたリーダーの中嶋一晃の脱退により、ページェントは一時期活動停止をしていたが、1988年3月25、26日に大阪バーボン・ハウスに於いて行なわれたクライム・レーベル発足記念イベントにMr.シリウスに専念していた宮武和広をサポート・メンバーとして加えたライン・ナップで出演し、(共演:ヴィエナ、テルズ・シンフォニア、アウターリミッツ)第3期ページェント、スタート。ページェントの核である中嶋一晃を失ない、一時期は方向性を失なったが、10月にギターの前野裕之が加入して、永井博子のポップス色を強く押し出したページェントはイメージ・チェンジを計り、1989年4月にキング・レコードのクライム・レーベルより2ndアルバム「夢の報酬」を発表。1stの様なジェネシス風のプログレッシヴ・ロック・サウンド色は消えたが、永井博子ならではの詩の世界を表現するユーロピアン・ポップス・サウンドとして完成度の高いアルバムであった。2ndアルバム発表後はキーボード奏者不在の為にサックス奏者などを加えて、年に1〜2回のマイ・ペースなライブ活動を行なっている。なお、ページェントに参加していたメンバー及び現メンバーの個人的な現在の動向を挙げると、ボーカルの永井博子は宮武和広のMr.シリウスに参加してアルバム2枚リリースしている他に、1987年に東京へ上京して、ジャズ・オーケストラの三木敏悟&インナー・ギャラクシー・オーケストラを経て、イクエーターというスパニッシュ&ジャズ・グループとストロベリー・ダンス・バンドというグレン・ミラーのナンバーをダンス・ナンバーにアレンジした音楽をやっているグループ(キング・レコードからCDを発表している。)で活動する傍ら、篠崎正嗣のアルバムを初めとして数多くのスタジオ・ワークもこなして、多方面に渡って精力的なプロ活動を行なっており、名前も永井博子から、現在は大木理沙という名前に改名。中嶋一晃はスターレスの大久保(B)、中川(G)、堀江(Ds)らと共に新しいグループ結成を計画したが、失敗に終わり、現在は沈黙を保っている。ドラムスの引頭英明は1990年12月30日に吉祥寺シルバーエレファンドで行なわれたこの本の発売記念イベントにシェラザード(ノヴェラの前身)のメンバーとして出演していた。

ペール・アキュート・ムーン [PALE ACUTE MOON]

◀Member▶

仙波　基　Motoi Senba(Kbd) ex.NOVELA,TERU'S SYMPHONIA,ref.KENNEDY,4LDK
今村まさひろ　Masahiro Imamura(G)
浜田　勝憲　Katsunori Hamada(B) '85 ex.ANRAKUSHI,TERRA RASA,ref.DEAD END
井上　靖　Yasushi Inoue(B) '85~ ex.OVERTURE,FERIER,ref.TERU'S SYMPHONIA
寺下　享一　Ryoichi Terashita(Ds) ex.OVERTURE,ref.SHOOTGUN MARIDGE
赤堀　信治　Shinji Akahori(Vo)

◀Discography▶

- ALBUM-「Newtopia」(LP)MONOLITH:MN-25005 '85★/(CD)CRIME:K32Y-2137 '88
- 7"FLEXI-「After Moon」MONOLITH:MN-PR-6(Promo) '86
- CT-「Looking For Newtopia」CANDY '85★
- V.A.(7"FLEXI)-「Progressive's Battle '86」MADE IN JAPAN(Promo) '86

ノヴェラのギタリストであり、リーダーであった平山照継がノヴェラの活動と平行して、1983年12月にソロ作品「ノイの城」を発表。このアルバム制作の為に名付けられたユニット名が"テルズ・シンフォニア"であり、このテルズ・シンフォニアのキーボード奏者であり、またノヴェラのアルバム「最終戦争伝説2」のキーボードを担当していた仙波基は、1984年春にテルズ・シンフォニアが解散した後、自らのグループ結成を計画。ギターの今村まさひろ、ボーカルの赤堀信治、オーヴァーチュアという神戸のハード・プログレッシヴ・ロック・グループを解散後、一時期フェリアに加入をしていたベースの井上靖とドラムスの寺下享一を集めて1984年暮れにペール・アキュート・ムーンを結成。1985年2月にデモ・テープ「ルッキング・フォー・ニュートピア」を録音して、1985年3月に大阪キャンディーホールに於いてデビューライブを行なった。(この時のライブに於いてデモ・テープを販売。また250人という動員を集めた。)彼らのサウンドはテルズ・シンフォニアが持つノヴェラ流ハード・プログレッシヴ・ロックを基本としたシンフォニック・ロック・サウンドを継承するサウンドであり、平均年齢21歳という若さながら、リック・ウェックマンに影響された仙波基のキーボード・プレイやニューウェーヴ的なアプローチの多彩な今村のギター・ワークを中心としてその卓越した演奏技量を持っており、関西プログレ・シーンに於いて、直ぐに注目を集める存在となった。マーキームーン誌のライターであり、インディーズ・レーベルのモノリスを設立した中藤正邦は彼らに大きな興味を示して彼らのアルバム発表を決意。ベースの井上靖が脱退して、テラ・ローザやデット・エンドで活躍するベースの浜田勝憲を加えて、1985年9月に大阪・四ツ橋LMスタジオとスタジオDADAにてレコーディングを行なう。ゲストにテルズ・シンフォニアのボーカルの下町香織とノヴェラのボーカルの五十嵐久勝を加えて作られたアルバム「ニュートピア」は12月に発売された。8トラックのレコーダーで録音されたとは想えぬ完成度を持ったこのアルバムは、折しも、日本のプログレ・シーンが最盛期を迎えようとして、各グループが一斉にアルバム制作を開始した真っただ中に、アウターリミッツのデビューアルバム「ミスティームーン」に続いて、先陣を切って発売され、ファンから大きな期待と興味を持って迎え入れられ、インディーズ・プログレのアルバムとしては好セールスを記録。彼らはジェラルド、スターレス、ソフィアといったキング・レコードのネクサス・レーベル勢と、アウターリミッツ、ページェント、夢幻といったインディーズのメイド・イン・ジャパン・レコード勢の人気アーティストと肩を並べる人気を獲得し、また最も将来が有望なアーティストの一つとして高く評価された。1986年1月12日に東京・吉祥寺シルバーエレファントに於いて、アルバム発売記念ライブとして東京初ライブを行ない、精力的なライブ活動を開始。1986年5月には吉祥寺シルバーエレファントで行なわれた"第2回プログレッシヴス・バトル・ライブ"にアウターリミッツ、夢幻、ネガスフィアと共に出演したが、(このライブを含めたこの時のツアーでソノシートを無料配布した。)この頃から仙波基自身のサウンドの方向性は大きく変化して、今までのシンフォニック・ロックから、新生クリムゾンやジャパンといったニューウェーヴ・サウンドを取り入れた新しいタイプのプログレッシヴ・ロックへと発展して行ったが、ドラムスの西田竜一をゲストに加えて、1986年7月24日に大阪キャンディー・ホール、7月27日に東京・吉祥寺シルバーエレファントに於いてライブを行なったが、ライブ終了後にボーカルの赤堀の脱退や、仙波基のサウンドの方向性の変化(彼はヴァージニア・アシュトレイやジャパン、坂本龍一といったアーティスト達のサウンドへ傾倒して行った。)を理由に解散したキーボードの仙波基はソフィアの土坂健司(G)と共にプランニングTWOというユニットやケネディーのメンバーとしてライブ活動を行なった後、スターレスを脱退した女性ボーカリストの宮本佳子と共にバージニア・アシュトレイ・タイプのサウンドを持つデュオ・ユニット、4LDKを結成する傍ら、1987年夏には元ノヴェラの平山照継の正式なパーマネント・グループとして再編したテルズ・シンフォニアに加入。ベースの井上靖は一時期、今村まさひろ、西田竜一と共にポップス・グループ結成を計画したが、1987年夏に仙波基と共にテルズ・シンフォニアに加入。ドラムスの寺下享一はショットガン・マリッジのメンバーとして活動していた。結成から解散までわずか2年たらずの期間の活動であったが、1stアルバムが高い評価を受け、また彼らの新たな方向に大きな期待が寄せられていただけに、解散が惜しまれるグループであり、1985年〜86年にかけての日本のプログレッシヴ・ロック・シーンの最盛期を代表する素晴らしいグループであった。

ベラドンナ［BELLADONNA］

◀Member▶

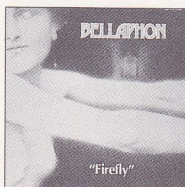
津田　春彦　Haruhiko Tsuda (G) ref.HAL,SHINGETSU,PHONOGENIX,ASTURIAS
高橋　直哉　Naoya Takahashi (Ds) ref.HAL,SHINGETU,ACQUA POLIS
内田　金成　Kanenari Uchidta (B)
のりひと　(Kbd)

ストラビンスキー等のロシア近代クラシックの和声を取り入れたプログレッシヴ・ロック・サウンドを追求していたHALというグループをやっていた津田治彦が、自ら通う青山学院大学のALSというサークルでドラムスの高橋と知り合い、津田のHALに高橋が加入する傍ら、高橋がリーダーシップを取り、中期以降のゴングやブランドXなどのカンタベリー系のプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドを持つグループ、ベラドンナを高橋（Ds)、内田(B)、津田(G)にキーボーディストを加えたライン・ナップで1974年に結成。ベラドンナはHALと平行して活動を行ない、学祭やイベントを中心としてライブ活動を始めたが、1976年の暮れに以前から津田の知り合いだったセレナーデのキーボードの花本彰と意気投合して、互いにやっていたセレナーデ、ベラドンナ、HALを統合させてよりレベルの高いプログレッシヴ・ロック・バンドを結成することを決意し、新月を結成。ベラドンナ，HAL共に新月を結成してしばらくの間は存在していたが、1977年の初めに解散。ギターの津田と高橋は新月で活躍した後、ベラドンナのリーダーであった高橋はフリージャズ・ロック・グループのカレイド・スコープやアクア・ポリスに一時期、加入していた。

ベラフォン［BELLAPHON］

◀Member▶

富家　大器　Taiqui Tomiie (Ds) ex.ULTRA BIDE,三十三間堂,STARLESS,ref.AIN-SOPH
垣　光隆　Mitsutaka Kaki (Kbd) ex.STARLESS,ref.AIN-SOPH
田中　稔裕　Toshihiro Tanaka (G)
柿谷　Kakiya (B) '82
小野　Ono (B) '82~'84
鳥柿　正裕　Masahiro Torigaki (B) '87~ from TENCHI-SOZO,ex.AIN-SOPH

◀Discography▶

- ALBUM-「Firefly」(LP) MADE IN JAPAN:MIJ-1014 '87
- 7"FLEXI-「Labyrinth」MONOLITH:MNPR-4504 '86★
- CT-「Bellaphon」BELLAPHON '83★
- CT-「Bellaphon」BELLAPHON '84★
- V.A.(CD)-「Jazz-Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3206 '89

ウルトラ・ビデ、あがた森魚バンド、三十三間堂といったグループで活躍してきたドラマーの富家大器は、青方(Kbd)、大久保(B)、引頭(Ds)らが結成したシェラザードのボーカリストの松山マサキ、松山と共に一時期、ELLEというグループをやっていたキーボードの垣光隆、後にオルフェウスや剣の舞に参加するベースの落合尚典、フロマージュに一時期在籍していたギターの野内と共に、1981年9月にスターレスというグループを結成したが、半年にも満たずにスターレスは解散して、このスター

レスの富家(Ds)、垣(Kbd)にハザードというグループに在籍していたギターの田中稔裕、ベースの柿谷を加えて、1982年2月にベラフォンを結成。地元京都を中心にライブ活動を始め、1983年にはベースが柿谷から小野に交代してデモ・テープ「ベラフォン」をライブ会場のみの販売にて発表。1984年秋には大阪キャンディー・ホールで行なわれたイベントにページェント、スターレスらと共に出演し、頭角を現わし始めた。彼らのサウンドはキャメル・タイプの叙情的なプログレッシヴ・ロックにジャズ・ロックのエッセンスを加えたサウンドであり、ハード・プログレッシヴ・ロック全盛の関西にあって、ヨーロッパのマニアックなプログレッシヴ・ロックの臭いを持った異質な存在であった。

1985年5月に東京・吉祥寺シルバーエレファントで行なわれたイベント"Progressives' Battle Live"に出演して、東京初ライブ。またミダスと共に"プログレ音楽館"と銘打ったコンサートを行なって次第にヨーロッパのプログレ・マニア層の間で注目を集めて、モノリス・レーベルよりソノシート「ラビリンス」を発表。また、この頃にはドラムスの富家がアイン・ソフにも加入して平行活動をする様になり、1987年3月にはアイン・ソフのベースの鳥垣をゲストに加えて、メイド・イン・ジャパン・レコードよりアルバム「ファイアーフライ」を発表したが、地味な評価に終わり、次第に活動も減り、ギターの田中が脱退するとアイン・ソフに吸収合併され自然消滅をしてしまった。

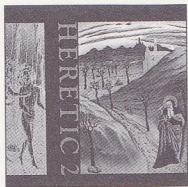
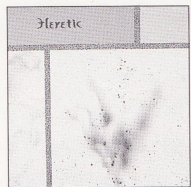
ヘレテイック [HERETIC]

◀Member▶

河原　博文　Hirofumi Kawahara(G,Vln,Vo) ex.OSIRIS,Dr.JEKLE & HYDE
太田　享　Toru Ota(Syn) ref.FROMAGE
森　卓　Suguru Mori(Cello,Syn)
浦沢　美奈子　Minako Urasawa(Voice) '87~
ロビン・ロイド　Robbin Lloyd(Perc.Syn-b) '87~

<GUESTS>

山本　要三　Yozox Yamamoto(G) ex.TENCHI-SOZO,Dr.JEKLE & Mr.HYDE,from AIN-SOPH
富家　大器　Taiqui Tomiie(Ds) ex.ULTRA-BIDE,from BELLAPHON,AIN-SOPH
竹内　一弥　Kazuya Takeuchi(G) from ANONIMOUS
増山　育男　Ikuo Masuyama(Vo) from ANONIMOUS
金井　浩　Hiroshi Kanai(G) from ROSE BAND,ex.BIBLE BLACK,EURASIA

◀Discography▶

● ALBUM-「Interface」(LP)SOUND OF POPPY:JHWH-1002 '85★
● ALBUM-「Escape Sequence」(LP)BELLE ANTIQUE:8807 '88★

京都でプライベート・レコーディングによるユニット"オリシス"をやっていたギターの河原博文は、1984年にギターの太田享、チェロ&シンセサイザーの森卓と共にヘレティックを結成。ヘレティックもライブ活動をメインとしたグループではなく、プライベート・レコーディング活動を主としたグループであり、1985年に自らの自主制作レーベルより1stアルバム「インターフェイス」、1988年にはマーキー誌のベル・アンティーク・レーベルより2ndアルバム「Escape Squence」を発表している。1stの方はフランスのヘルドンのアルバム「Interface」を意識した実験的なサウンドであり、2ndの方は、アイン・ソフのギターの山本やベラフォンのドラマーの富家などをゲストに加えて、ギターをメインとしたアコースティック&エレクトリック・アヴァンギャルド・サウンドのアルバムである。

ベルベット・パウ [VELVET PAW]

◀Member▶

須賀　直美　Naomi Suga(Vo)
桐生　千弘　Chihiro Kiryu(Ds,Vo)
平野安芸子　Akiko Hirano(B)
羽純　玲子　Reiko Hazumi(G)~'86
高沢　祥子　Shoko Takazawa(G)'89~
長見　　順　Jun Nagami(G)'86~'88
池田　亜樹　Aki Ikeda(Kbd)'85
増田友希江　Yukie Masuda(Kbd)'86~
坂口　直弓　Mayumi Sakaguchi(kbd)'81~'85

◀Discography▶

● ALBUM-「Velvet Paw」(CD)CBS:32DH-5281 '89
● ALBUM-「Sign」(CD)CBS:cscl-1190 '90
● ALBUM-「Desire」(CD)CBS:SRCL 1790 '91

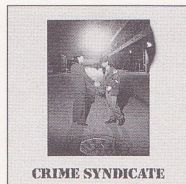
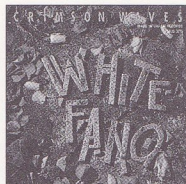
ベルベット・パウは東京のレディース・ポップ&プログレッシヴ・ロック・グループ。ベルベット・パウの歴史は古く、ドラムスの桐生千弘を中心として、彼女が中学時代の1981年に結成された。結成当初はハード・ロックのコピーを中心とした学園祭バンドであったが、次第にオリジナルをやる様になり1983年には渋谷エピキュラスに於いてライブ・デビューを果たし、1985年春から桐生(Ds,Vo)、平野(B)、須賀(Vo)、羽純(G)、池田(Kbd)というライン・ナップとなり、本格的なライブ活動を開始。この頃の彼女たちのサウンドはブラッフォードあたりのカンタベリー系ジャズ・ロックから影響を受けたリズム・コンビネーションを持つポップ色の強いプログレッシヴ・ロック&ヴァン・ヘイレン風のハード・ロックであった。そしてキーボード、ボーカルまでこなして彼女達の曲の全てを作曲している桐生のドラミングは、日本の女性ドラマーの頂点に立つ高度な素晴らしいプレイを繰り広げ、東京のライブ・ハウス・シーンで注目されて行き、コロムビア・レコードからアルバム制作の誘いがあり、レコーディングの準備に入ったが、ベルベット・パウの要のドラムスの桐生が急病で倒れてしまい、活動停止を余儀なくされてしまった。1986年3月～12月まで活動停止をしていた彼女達は須賀(Vo)、桐生(Ds,Vo)、平野(B)、長見(B)、増田(Kbd)というライン・ナップで活動再開。1988年1月に日本青年館で行なわれた"CBSソニー・ラオックス・レディース・コンテスト"の全国大会で優勝し、(ロザリアも出場。)CBSソニーからプロ・デビューが決定。この頃から彼女達のサウンドは以前に持っていたハード・ロックやプログレッシヴ・ロック的要素が薄くなり、ポップなサウンドへと変化して行き、CBSソニーより、1989年7月に1stアルバム「Velvet Paw」、1990年に2ndアルバム「Sign」を元マライアの笹路正徳のプロデュースのもとに制作。イエスの「ビック・ジェネレーター」風のプログレッシヴな完成を持ち合わせ、凝ったポップ・サウンドとして仕上がっている。サウンド的には純粋なプログレッシヴ・ロックではないが、日本のレディース・プログレの中で、アルスノヴァ、ロザリアと共に卓越した技量を持ったグループである。なお、現在は3rdアルバムの制作を行なっている。

ホワイト・ファング [WHITE FANG]

◀Member▶

高橋　　竜　Ryo Takahashi(Vo,B)

小門　　　学　Manabu Kokado (Kbd)
鈴木くにあき　Kuniaki Suzuki (G,Vo)
金木　　　烈　Isao Kaneki (Ds) '87～'89
下田　　武男　Takeo Shimoda (Ds) '89～ ref.M.SAKURABA BAND

◀Discography▶

- ●ALBUM-「Crimson Waves」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2015'90
- ●CT-「300 Miles」'87★
- ●CT-「Get Bitten!」'89★
- ●V.A.(CD)-「Prospective faces」MADE IN JAPAN:MCD-3203'89
- ●V.A.(CD)-「Crime Syndicate」CRIME:250E-2068'89

ホワイト・ファングはベースの高橋竜が高校在学の時にブラック・サバス・タイプのハード・ロック・バンドとして横浜で結成された。1987年にはキーボードの小門学、ギターの鈴木くにあき、ドラムスの金木烈というライン・ナップとなり、地元横浜や東京を中心として本格的なライブ活動を開始し、デモ・テープ「300 Miles」を制作。また「ヤマハ・バンド・エクスプロージョン」神奈川代表に選ばれたのを始め、数多くのコンテストにも出場。1989年には2ndデモ・テープ「Get Bitten!」を制作した後、ドラムスの金木烈が脱退して、下田武男が加入。メイド・イン・ジャパン・レコードから1989年4月に発売されたオムニバスCD「プロスペクティヴ・フェイセス」に参加してメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデュースのもとに7月に川崎クラブ・チッタに於いてフランスのアトールを迎えて行なわれたイベント"クライム・シンジケート"にデジャヴ、ソシアル・テンション、ロザリアと共に出演するなど精力的な活動を行ない、1990年4月にはミニ・アルバム「クリムゾン・ウェーヴス」を発表した。彼らのサウンドは基本的にはブラック・サバスやグランド・ファンクから影響されたハード・ロックであり、曲によってイエスや初期クリムゾンの叙情性が加味されたサウンドである。なお、ドラムスの下田武男は元デジャヴのキーボードの桜庭統のソロ・ユニットのメンバーとしても活動している。

舞踏[MAITO]

◀Member▶

間所　義和　Yoshikazu Madokoro (Syn,G)
岡本　　望　Nozomi Okamoto (B)
加島　有三　Yuzo Kashima (Kbd) '86 ref.MAGDALENA
伊藤　信男　Nobuo Ito (Ds) ref.MAGDALENA
井上　慎一郎　Shinichiro Inoue (Ds) ex.DAY BREAK,MAGDALENA
衛藤　匡史　Masafumi Eto (Ds) '86～'87

◀Discography▶

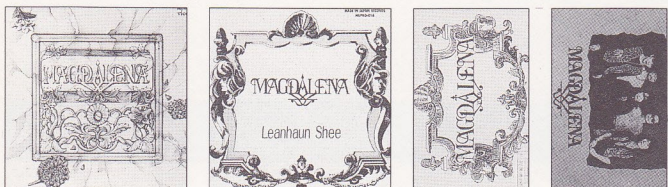
● V.A.(CD)-「Prospective Faces II」MADE IN JAPAN:MCD-3207 '89
● CT-「舞踏(Same)」'87
● CT-「家路(Ieji)」'88

舞踏は大阪・堺市にあるフクダ・スタジオに務める間所義和(Syn, G)が中心となって1986年頃から始めたプライベート・レコーディングのユニットで、ドラムス、パーカッションを合せて3人いるユニークな編成でライブもこなしている。彼らのサウンドはマイク・オールドフィールド風のプログレッシヴ・ロック風なものから、プライベート・ミュージック、実験的なパーカッション・サウンドまで幅広く、1987年に「舞踏」、88年に「家路」の2本の自主制作カセット・テープ作品を発表したり、メイド・イン・ジャパン・レコードから1989年にリリースされたオムニバスCDにも参加するなど地道な活動を行なっている。なお舞踏はマグダレーナとの交友が深く、ドラムスの伊藤、井上やキーボードの加島らがマグダレーナにも参加していた。

マグダレーナ[MAGDALENA]

◀Member▶

徳久　恵美　Megumi Tokuhisa(Vo) '85~'87 ex.ANRAKUSHI,LUCIFER ref.TERU'S SYMPHONIA
北田美都子　Mitsuko Kitada(Vo) '89~
藤井　　卓　Taku Fujii(G) ex.ANRAKUSHI
加島　有三　Yuzo Kashima(Kbd) '86~'87 ex.MAITO
片岡　知久　Tomohisa Kataoka(Kbd) '89~
西口　直良　Chokura Nishiguchi(B) '85~'87
松浦　正平　Shohei Matsuura(B) '89~ ex.MUGEN
井上慎一郎　Shinichito Inoue(Ds) '86~'87 ex.DAY BREAK,from MAITO
伊藤　信男　Nobuo Ito(Ds) '87 from MAITO
形山　和夫　Kazuo Katayama(Ds) '89~ ex.MIDAS,MUGEN

◀Discography▶

● ALBUM-「Magdalena」(LP)VICE:28EC-1001 '87★/(CD)CRIME:280E-2052 '89
● 7"FLEXI-「Leanhaun・Shee」MADE IN JAPAN:MIJ-PRO-016(Promo) '87
● CT-「Magdalena」MAGDALENA:MAG-001 '86★
● V.A.(CT)-「Official Bootleg Lives I」MADE IN JAPAN:MIJTP-2007 '88★
● V.A.(VIDEO)-「Official Bootleg Lives I」MADE IN JAPAN:MIV-58002' 88★
● CT-「Reconstruction」'91

1981年に神戸でノヴェラの完全コピーバンド、HZ(ヘルツ)をやっていたボーカリストの徳久恵美は、1981年秋にキーボードの宮崎雄三、ドラムスの上野まりあと共にUKタイプのハード・プログレッシヴ・グループ、ルーシフェルを結成。半年間程在籍していたが、なかなかバンドが始動しない為に脱退。1983年初頭にギターの藤井卓と知り合い、意気投合して"安楽死"を結成して藤井卓、徳久恵美は"レフト・アローン"や"イービルディーティー"などのナンバーの作曲に取り組むが、メンバーが固らずにバンドが始動しない為に、徳久恵美は脱退して、約1年半の月日が流れた。1984年暮れに徳久恵美はギターの藤井卓と再開。藤井卓はちょうど、マグダレーナを結成の為に女性ボーカルを捜しており、また安楽死の時に徳久と共に作った曲を温め続

けており、再び徳久と藤井は意気投合。ベースの西口直良、キーボードの上村まり、ドラムスの丸山たかしと共にマグダレーナを結成。1985年10月22日に大阪・ヤンタ鹿鳴館にてデビューライブを行なった後、1986年にはキーボードの上村が脱退して、舞踏に参加していたキーボードの加島有三が加入して、芦屋にあるスタジオ「8」に於いてデモ・テープを制作。藤井卓の作るサウンドはジョン・ロードやノヴェラなどのハード・プログレッシヴ・ロックとバロック音楽から影響されたアンサンブルを融合させた叙情派プログレッシヴ・ロックであり、また徳久恵美の美しいファルセットを活かしたクラシカルなボーカルによって華麗に表現する、といったものであった。デモ・テープを制作すると、ヤンタ鹿鳴館を中心として精力的なライブ活動を開始。一方、このデモ・テープを耳にしたメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノは演奏力は未だ今一歩ながら、彼らはサウンドの素晴らしさに大いに興味を示してコンタクトを取り、アルバム発売へ向けて、プロデューサーとして関わった。1987年4月に3日に渡って東京・新宿スペース107ホールに於いて行なわれたイベント"メイド・イン・ジャパン・フェスティバル春の陣"にページェント、夢幻、アウターリミッツと共に出演して、東京初ライブを行ない、東京初ライブながら、彼らのサウンドの素晴らしさと徳久恵美のボーカル・ワークにより、一躍、最も期待される新人グループとして注目を浴び、また6月に大阪・布施センサス・ホールで行なわれた同タイトルのイベントにもページェントと共に出演。(他に夢幻、アウターリミッツ)東京と大阪で行なわれたこのイベントに出演した事によって、グループ自身も成長を遂げ、またファンからも期待の新人グループとして注目を浴びた彼らは、インディースのメイド・イン・ジャパン・レコードからアルバムを発表する為に、7月〜8月にかけて大阪スタジオJAMに於いてレコーディングを開始したが、折しもメイド・イン・ジャパン・レコードとメジャ・レコード会社のクラウン・レコードとの共同レーベル新設の話が決まり、マグダレーナはメジャーデビューする事が決定して、10月にアルバム「マグダレーナ」がクラウン・レコードのVICEレーベルより発売された。新人グループながら卓越したサウンド作りがなされ、またページェントの永井博子とはまったく違ったタイプのボーカリストとして急激に人気を博して行った徳久のボーカル・ワークをフィーチャーしたこのアルバムは高い評価を受け、10月25日に吉祥寺シルバーエレファント、10月29日に名古屋ELL、10月31日に大阪・布施センサス・ホールに於いてゲストにヴィエナのドラマーの西田竜一とアウターリミッツのギターの荒牧隆を加えて、アルバム発売記念ライブを行ない、マグダレーナにとって最も充実した時期を迎えた感があったが、音楽の価値観の相違を理由にボーカルの徳久、キーボードの加島、ベースの西口が脱退してしまい、マグダレーナは解散。ボーカルの徳久はテルズ・シンフォニアの平山照継に誘われて、テルズ・シンフォニアに加入。キーボードの加島はページェントに加入した。一方、残されたリーダーの藤井卓は夢幻にゲスト参加していたが、夢幻が解散すると夢幻のベースの松浦、ドラムスの片山、ボーカルの北田、キーボードの片岡と共に1989年にマグダレーナを再結成して現在も活動中である。

マーシャン・ロード[MARTIAN ROAD]

◀Member▶

佐藤　満　Mitsuru Sato(G,Vo)'76〜'77 ex.CLOSE TO THE EDGE,ref.YONIN-BAYASHI
牧野　哲人　Tetsuto Makino(G)
稲田　純一　Junichi Inada(G)'78〜'79
直井　秀樹　Hideki Naoi(Vo)'78〜'79
中島　優貴　Yuki Nakajima(Kbd) ref.HERO,LAFF,HEAVYMETAL ARMY,EASTAN ORBIT
坂井　紀雄　Norio Sakai(B)'76〜'77
横江　譲二　Joji Yokoe(B)'78〜'79
和井内良典　Yoshinori Waiuchi(Ds)'76〜'77
佐藤　昭信　Akinou Sato(Ds)'78〜'79 ex.CLOSE TO THE EDGE

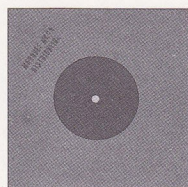
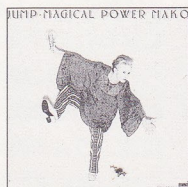
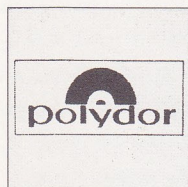
森園勝敏の後任ギタリスト&ボーカリストとして四人囃子に加入した佐藤ミツルが地元札幌で1973年に結成したイエスのコピーバンド"クロス・トウ・ジ・エッジ"を発展させた形で誕生したのが、このマーシャン・ロードである。イエスのコピーバンドとして全国的に名を轟かせたクロス・トウ・ジ・エッジは1975年頃になると佐藤ミツル以外のメンバーは流動的なセッション・メンバーとなり、とあるセッションで知り合ったキャッツ・アイというソウル・バンドのキーボードの中島優貴、ジパングというバンドをやっていたギターの牧野哲人、ベースの坂井、ドラムスの和井内らと共に佐藤ミツルは1976年にマーシャン・ロードを結成。マーシャン・ロードはYESのプログレッシヴ・サウンドとディープ・パープルのハード・ロック・サウンドを融合させたハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドのオリジナル・ナンバーを中心としたグループで、地元札幌ではクロス・トゥ・ジ・エッジ以上の高い評価を受けて

いたが、1976年にアルバム「ゴールデン・ピクニックス」をレコーディングし、このアルバムの発売記念ツアーを直前に控えていた四人囃子のリーダーであり表看板であったギター&ボーカルの森園勝敏が、突然、四人囃子を脱退してしまい、残された四人囃子のメンバーはマーシャン・ロードの佐藤ミツルに白羽の矢を立てて、佐藤ミツルは1977年にマーシャン・ロードを脱退して急拠、四人囃子へ加入。リーダーの佐藤ミツルを失なったマーシャン・ロードは1978年、ボーカルに直井、ギターに稲田、ベースに横江、ドラムスに第2期クロス・トゥ・ジ・エッジのドラムスであった佐藤という新しい顔ぶれと中島(Kbd)、牧野(G)の2人のオリジナル・メンバーによるライン・ナップとなり第2期マーシャン・ロードをスタートしたが、1979年にあんぜんバンドの長沢ヒロが札幌を訪れた際にマーシャン・ロードの中島優貴に目をつけ、中島優貴を誘い、HEROを結成し、マーシャン・ロードは解散した。HEROで東京に上京した中島はその後、カルメン・マキ&LAFF, ヘビー・メタル・アーミー、イースタン・オービット、サブリナ等で活躍。また自らのソロ・アルバムも5枚リリースしており、日本のロック界を代表するキーボーディストとなって行なった。マーシャン・ロードは佐藤ミツルと中島優貴を輩出したグループとして、また札幌のプログレッシヴ・ロック・シーンの先駆的な存在として高い評価を与えられるべきグループであった。

マジカル・パワー・マコ[MAGICAL POWER MAKO]

◀Member▶

マコ　Mako(Syn,G,Perc,etc)

◀Discography▶

- ALBUM-「Magical Power」(LP)POLYDOR:MR-5044' 74★
- ALBUM-「Super Record」(LP)POLYDOR:MR-5055 ' 75★
- ALBUM-「Jump」(LP)POLYDOR:MR-3077 ' 77★
- ALBUM-「Welcome To The Earth」(LP)TOSHIBA EMI:WTP-90099 ' 81★
- ALBUM-「Music From Heaven」(LP)MARQUEE MOON:MAGICAL-001 ' 82★
- ALBUM-「Magical Computer Music」(CD)CBS:32DG-38 ' 85★
- 7"EP-「Flesh Vagitable」TOSHIBA EMI:WTP-17208 ' 81★
- 7"FLEXI-「Music From Heaven(B Side:TIME UNIT)」MARQUEE:MM0005(Promo)' 82★
- V.A.(CD)-「Rare Tracks」TOSHIBA EMI:CT25-5579 ' 90★

マジカル・パワー・マコはギター、シンセサイザー、パーカッション等を一人でこなすマルチ・インストゥメンタリスト、マコによる音楽プロジェクトの事であり、様々なミュージシャンが集まったバンド形態の"マジカル・パワー"との共演によって制作される事もあり、またマコ自身による多重録音によって制作される事もある。マコは静岡県伊豆で生まれ16才で家を出て東京へ上京。日本の現代音楽の作曲家として第一人者である武満徹に見い出され、武満徹の関係したTV、映画等の音楽を手掛ける様になり、(映画「化石の森」や「卑弥呼」等で演奏している。)1973年暮れにポリドール・レコードより1stアルバム「マジカル・パワー」、1975年にマコの多重録音による2ndアルバム「スーパー・レコード」を発表。現代音楽を学んだ素養のもとに初期アシュラ・テンペルやヘルダーリンといった実験的なジャーマン・ロック&アシッド・フォークと東洋の民族音楽を融合させ、攻撃性と楽園的な美意識を表現した自由奔放なプログレッシヴ・ロック作品であり、マコの鋭い音楽性が溢れる作品として評価され

るものであった。1977年には新月の前身グループであったセレナーデのドラムスの小松らが参加したグループ、マジカル・パワーによって制作された3rdアルバム「Jump」を発表。前作とは打って変わり、研ぎ澄まされた感性の中で生硬な、洗練されていないロック・ミュージック・サウンドを打ち出した。この頃まではマジカル・パワーのバンド形態でライブ活動も行なっていたが、マコの音信が跡絶えてしまい、1981年秋に4年振りの4thアルバム「Welcome To The Earth」を東芝EMIよりリリースして再びライブ活動も開始。このアルバムは今までのマコの音楽性を根底からくつがえすテクノ・ポップ・サウンドへと変身してしまったが、1982年にマーキームーン誌の自主制作レーベルから発表された5thアルバム「Music From Heaven」ではマコの多重録音によって1st&2st時のサウンドを再び甦らせた。その後、マコはCBSソニーからアルバム「Magical Computer Music」を発表したが、初期の頃に持っていた先鋭で自由奔放な実験音楽的な部分は一切消えて、テクノ・ポップをベースとした商業的なシンセサイザー・ニュージックへと変化してしまった。

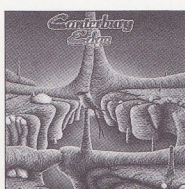
マジック・バス [MAGIC BUS]

マジック・バスは1988年頃に活動していた名古屋のマイナーな存在のアマチュア・キーボード・トリオ。地元の名古屋エレクトリック・レディ・ランド等のライブ・ハウスに出演していた。サウンド的にはトリアンビラート風なプログレッシヴ・ロック・サウンドであった。

マスク [MASQUE]

◀Member▶

口垣内八州彦　Yasuhiko Kuchigouchi(Kbd)
黒石　昇　Noboru Kuroishi(B)
瀬戸　敏雄　Toshio Seto(Ds) ex.MELODY(DAY BREAK)
竹内　一路　Kazumichi Takeuchi(G)
片岡　尊　Minoru Kataoka(G)

◀Discography▶

● ALBUM-「Ingress One(A Side:K.KOGA&ABOUT)」No Label '88★

● CT-「Masque」 '86★

● CT-「Masque 1989」'89

● V.A.(LP)-「Canterbury Edge」MADE IN JAPAN:MIJ-1019'88★

● V.A.(CD)-「Jazz-Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3206 '89★

カリスマのキーボード奏者であった高山博が結成したイエス・タイプの関西のマイナーな存在のプログレッシヴ・ロック・グループ、ディ・ブレイク(メロディー)の末期のドラマーとして活動していた瀬戸敏雄はディ・ブレイクが解散すると、1985年に地元滋賀に於いて自らのプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ、マスクを結成。1986年にデモ・テープを制作後、関西を中心として本格的なライブ活動を開始し、1988年には京都にあるキット・スタジオで企画された自主制作アルバム「Ingress　One」にKOGA&ABOUTと共に参加し、またメイド・イン・ジャパン・レコードからリリースされたジャズ・ロック・グループのオムニバス・アルバム「Canterbury Edge」にも参加して彼らの存在はマイナーな存在ながらもプログレ・ファンに知られる様になった。彼らのサ

ウンドはブランドXやウェザーリポートから影響を受けた複雑なリズム・コンビネーションとアンサンブルを持ったプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループであり、現在の日本のジャズ・ロック・シーンに於いて代表的なグループの一つである。

まどろみ[MADOROMI]

◀Member▶

須磨　邦雄　Kunio Suma(G,Vo) ref.BIKYORAN

吉永　伸二　Shinji Yoshinaga(B) ref.BIKYORAN

長沢　正昭　Masaaki Nagasawa(Ds) ref.BIKYORAN

まどろみは静岡で孤高な存在としてキング・クリムゾンと精神の対話をし続けた伝説のグループ、美狂乱がキング・クリムゾンの音楽の深遠なる本質を学び、キング・クリムゾンのコピーをする為に一時的に改名したグループである。静岡の高校を卒業後、プロ・ミュージシャンを目指したギターの須磨邦雄とベースの吉永伸二は東京へ上京し、セミ・プロ・バンドの仕事をこなす傍ら、実験的ロック・サウンドの作曲に取り組み、1974年に静岡に帰郷して須磨、吉永にドラムスの山田を加えて美狂乱を結成。この結成当時の美狂乱のサウンドは初期キング・クリムゾンの持つメランコリックな世界を描く叙情派プログレッシヴ・ロック的なものであったが、当時クリムゾンの存在を知らなかった須磨は知人から「美狂乱のサウンドはキング・クリムゾンに似ている」と指摘されて初めてクリムゾンを知り、強い共鳴と憧憬を受けて、キング・クリムゾンの深遠なる音楽の本質を知る為にキング・クリムゾンのコピーに取り組み始めて、1976年にグループ名もまどろみに改名。ドラマーも山田から長沢正昭に交代した彼らは、キング・クリムゾンになりきる事のみを考えて夢中になり、この時があったからこそ、後の美狂乱の驚異的な演奏とサウンドが誕生したのであった。まどろみは浜松のヤマハがスポンサーを務めるAMラジオ番組に出演して、クリムゾンの“Great Deceiver”を演奏した事があり、この時の彼らの演奏はクリムゾンと見分けがつかない凄まじい演奏を繰り広げ、今でも伝説的な語り草となっている。1978年初頭にはヴァイオリンの杉田孝子、キーボードの久野真澄も加入して、オリジナル・ナンバーに取り組む様になり、7月23日に静岡つま恋HEホールで行なわれた浜松ヤマハ主催のWind&Waveコンテストに出場する為にグループ名は美狂乱に戻した。(美狂乱に関しては美狂乱の項を参照のこと。)なお、キング・クリムゾンのコピー・グループとしては、アクア・ポリスのドラムスの竹迫一郎らが1982年頃にやっていたCREAM ZONEも有名であった。

魔法陣[MAHOUJIN]

◀Member▶

志賀　　敦　Atsushi Shiga(Kbd)

岡田やすし　Yasushi Okada(B)

菅野　詩朗　Shiro Sugano(Ds) ref.GREEN,NEGASPHERE

◀Discography▶

●ALBUM-「組曲“バビロニア”(Babylonia)」(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25006 '91

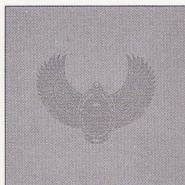
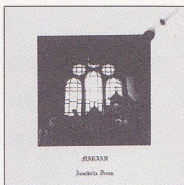
魔法陣はグリーンやネガスフィアで活躍したドラムスの菅野詩朗が在籍していた1970年代後期の東京の幻のキーボード・トリオ。魔法陣はキーボード奏者であり、リーダーの志賀敦がプレイヤー誌に出したメンバー募集によって集まったドラムスの菅野詩朗、ベースの岡田洋の3人によって1978年春に結成。トリアンビラートやトレース、カンタベリー系のキャラバンなどのグループから影響を受けたキーボード・トリオ・サウンドは素晴らしく、破天荒やクエーサー、だててんりゅうといったEL&Pからの影響が多大な当時に他のキーボード・トリオ・サウンドとは一線を引くサウンドを作り上げた魔法陣は1979年春に渋谷屋根裏にてライ

ブ・デビュー。キーボードの志賀の自宅のプライベート・スタジオでデモ・テープ作りとリハーサルを重ね、1979年秋に吉祥寺シルバーエレファントで彼らにとっての2回目のライブを行なったが、このライヴ終了後にドラムスの菅野詩朗が和旋律を取り入れたUKタイプのグリーンに加入して魔法陣は解散。約一年間余りでライブを2回行なったのみしか活動がなかったが、魔法陣は70年代後半の東京のプログレ・シーンの中で、秀れたサウンドを持ったグループとして評価されるべき幻のグループだったのである。なお、彼らが当時録音したデモ・テープは1991年3月にメイド・イン・ジャパン・レコードからアルバム「バビロニア」として発売されている。

マライア[MARIAH]

◀Member▶

清水　靖晃　Yasuaki Shimizu(Sax) ex.FLYING MIMI BAND,ref.KAZUMI BAND,KAKUTOGI SESSION
土方　隆行　Takayuki Hijikata(G) ex.FLYING MIMI BAND,ref.NAZCA
村川　　聡　Satoshi Murakawa(Vo)
笹路　正徳　Masanori Sasaji(Kbd) ref.KAZUMI BAND,NAZCA
渡辺モリオ　Morio Watanabe(B) '80~ ex.FLYING MIMI BAND
山木　秀夫　Hideo Yamaki(Ds) ref.KEEP,KAZUMI BAND,SADATO GROUP
秋山　一将　Kazumasa Akiyama(G) '79
岡沢　　章　Akira Okazawa(B) '79

◀Discography▶

- ALBUM-「Mariah」(LP)YUPITERU :YJ25-7025 '79★
- ALBUM-「Yen Tricks」(LP)BILLBOX:K28A-17 '80★/(CD)KING:K25X-375 '89
- ALBUM-「Auschwitz Dream」(LP)BILLBOX:K28A-171 '81★/(CD)KING:228A-74 '89
- ALBUM-「Red Party(Live)」(LP)BILLBOX:K20A-235-6 '82★/(CD)KING:25X-380 '89
- ALBUM-「Marginal Love」(LP)B&M: '81★
- 12"EP-「うたかたの日々(Utakata No Hibi)」SHAN SHAN:YW7411~12 '83★
- 7"EP-「Marginal Love」B&M:YH-8-B '81★

小林泉美&フライング・ミミ・バンドのメンバーであったサックスの清水靖晃はフライング・ミミ・バンド解散後、ユピテル・レコードより初のソロ・アルバム「Get You」を発表。このアルバムはフライング・ミミ・バンドのポップなフュージョン・サウンドからは想像も出来ないシリアスなジャズ・サウンドであったが、1979年にこのソロ・アルバムの延長線上の作品としてサックスの清水靖晃を中心に元フライング・ミミ・バンドのギターの土方隆行、清水と共に渡辺香津美らのセッションで活躍しているキーボードの笹路正徳、ドラムスの山木秀夫、ベースの岡沢章、ボーカルのジミー村川、ギターの秋山一将らが参加したセッション形態のユニット"マライア"のアルバム「マライア」をユピテル・レコードより発表。このアルバムのサウンドも清水のソロ・アルバム「Get

You」と同一線上にあるシリアスなジャズであったが、このセッションを通じて意気投合したサックスの清水靖晃、ギターの土方隆行、ボーカルの村川聡、キーボードの笹路正徳、ドラムスの山木秀夫にフライング・ミミ・バンドのベースの渡辺モリオを加えて、1980年始めにマライアを結成。先進的な音楽の感性と演奏技術を持った日本のトップ・クラスのスタジオ・ミュージシャン&フュージョンプレイヤーの集団であるマライアは、地道なライブ活動よりも、レコーディングの為のスタジオ・ワーク活動に重点を置いた積極的な活動を開始。笹路正徳のソロ・アルバム「ホット・テイスト・ジャム」、土方隆行のソロ・アルバム「スマッシュ・ザ・クラス」、村田有美のソロ・アルバム「クリシュナ」のバックを全面的に務めた後、ハワイのシーセット・スタジオと音響ハウス・スタジオに於いてマライアのデビューアルバム「Yen Tricks」のレコーディングを行ない、1980年にキング・レコードより発表。メンバーの今までの経歴から想像されるフュージョン・サウンドは一切、排除され、TOTOやクィーンから影響を受けたアンサンブルの緻密な構成力を持つロックと壮大な幻想美に溢れたプログレッシヴ・ロック、スティービー・ワンダーやボズ・スキャッグスが表現する愛情やセクシーさに満ちたポップスを混然一体として作り上げられた彼らのサウンドは、当時の日本のロック&ポップス・シーンに於いて衝撃的な作品であり、また彼らの高水準な演奏力も驚異的な存在として、プロ・ミュージシャン達の間で高い評価を受けた。1981年には2ndアルバム「アウシュビッツ・ドリーム」を発表。このアルバムは前作以上にTOTOやクィーンから影響された緻密な構成力を持つロックと複雑多彩な変拍子に支えられたドラマチックで攻撃的なプログレッシヴ・ロック色を強めた作品であり、彼らの作品の中で最高傑作アルバムとなった。また同年には渋谷エピキュラスで行なわれたライブ・アルバム「Red Party」とB&Mレコードから3rdアルバム「マージナル・ラヴ」を発表する傍ら、サックスの清水靖晃、キーボードの笹路正徳、ドラムスの山木秀夫は渡辺香津美のカズミ・バンドのメンバーとしても活動を行ない、アルバム「頭狂好児唐眠」(1981年)、「ガネシア」(1982年)を制作しており、カズミ・バンドのサウンドもマライア流のプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドに仕上がっている。(またドラムスの山木秀夫はプリズムのギターの和田アキラ、キーボードの深町純らと共にKEEPのメンバーとしても活躍している。)この頃が先進的なポップスとプログレッシヴ・ロック・サウンドのマライアとして最も充実した時期であったが、1983年に発表されたアルバム「うたかたの日々」では実験的なテクノ・ポップス・サウンドへと変身してしまい、また業界の関係者やプロ・ミュージシャンからは絶大な評価を受けていたマライアであったが、彼らのサウンドがあまりにも先進的であった事と、ライブ活動が少なかった為に一般のファンに受け入れてもらえず、煮詰まってしまい解散。キーボードの笹路正徳はギターの土方隆行と共に初期マライアの持つ先進的なプログレッシヴ・ロック&緻密な構成力に溢れるポップス・サウンドを継承するグループ、ナスカを1983年に結成して、アルバム「Words Of Love」を発表した後、現在は2人共、アレンジャー、プロデューサー、スタジオ・ミュージシャンとして第一線で活躍している。サックスの清水靖晃は「北京の秋」などのソロ・アルバムを発表する傍ら、ピエール・バルーなどのセッション・メンバーとしても活躍して、現在はヨーロッパに在住している。日本のロック&ポップス界の異端児であり、先進的なエリート音楽集団“マライア”が創造した世界は、真の意味に於いて“プログレッシブ”ロックであった。

魔璃鴉[MARIA]

◀Member▶

泉　洋次　Yoji Izumi(Vo) '72~'77
谷川　雅治　Masaharu Tanigawa(B)
関戸　研二　Kenji Sekito(Ds) '72~'74 ref.BRIND EXPRESS
福島　正彦　Masahiko Fukushi(Ds) '74~
山田　耕司　Koji Yamada(G) '72~'76
岩井　真一　Shinichi Iwai(G) '76~
辻井　正幸　Masayuki Tsujii(Kbd) '72~'74 ex.DARUMASHOKUDO,ref.BRIND EXPRESS
難波　正司　Tadashi Namba(Kbd) '74~'76
金沢　保裕　Yasuhito Kanazawa(Kbd) '76~'78

◀Discography▶

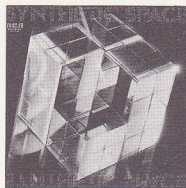
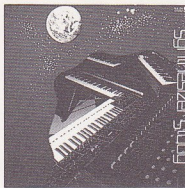
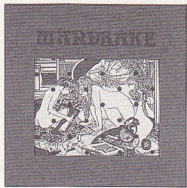
- ALBUM-「魔璃鴉(Maria)」(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25017 '91
- V.A.(CD)-「70'S West Japanese Rock Scene」MADE IN JAPAN:MHD-25013 '91

魔璃鴉はボーカリストの泉洋次が中心となってドラムスの関戸、ギターの山田、元寛永通宝のベースの谷川、元だるま食堂のキーボードの辻井によって1972年8月に神戸で結成された。結成当初はユーライア・ヒープのコピーバンドとしてスタートしたが、次第にブリテッシュ・ハード・ロック色のオリジナルをやる様になって1973年4月にライオン・フォーク・ヴィレッジに於いてライブ・デビュー。1974年8月にはドラムスの関戸とキーボードの辻井がブラインド・エキスプレスに加入する為に脱退して、寛永通宝のドラムスの福島正彦とキーボードの難波正司が加入して第2期魔璃鴉、スタート。12月に神戸海員会館に於いて第2期魔璃鴉としての初ライブを行ない、地元神戸のサンダーハウスを中心として本格的なライブ活動を開始。サウンドもブリティッシュ・ハード・ロックを基本としながら、イエス、初期キング・クリムゾン、クィーンなどの影響を受けたプログレッシヴ・ロックとしての要素も融合させたサウンド、"ハード・プログレッシヴ・ロック"へと発展して行った。シェラザート、そしてノヴェラが登場する70年代末期以降に関西のロック、そしてプログレッシヴ・ロック・シーンの中で一つのジャンルにまで確立された"ハード・プログレッシヴ・ロック"は、この魔璃鴉が生み出したのであった。彼らは大阪バーボン・ハウス、京都サーカス&サーカス、京都・拾得などの関西のライブ・ハウスや、渋谷屋根裏、渋谷ジャンジャンなどの東京のライブ・ハウスなどへも積極的に出演し、月5本くらいのペースでライブをこなして、関西のハード・ロック/プログレッシヴ・ロック・シーンの黎明期に於いて、だるま食堂、ジャック・ダニエルらと共に絶大な人気を誇る存在になって行き、ことにシェラザード、天地創造、ノヴェラなどを始めとする"神戸プログレッシヴ・ルネッサンス"の先駆的な役割を果した。またこの頃にプロモーションの為にデモ・テープを制作している。1976年8月にギターの山田、キーボードの難波が脱退して、ギターの岩井真一、キーボードの金沢保裕が加入して第3期魔璃鴉、スタート。第2期魔璃鴉の頃よりも一層、プログレッシヴ・ロック色の強めた彼らは、マネージャの林の売り込みにより、CBSソニーが彼らに対して興味を示してメジャー・デビューの誘いをかけられ、CBSソニー・スタジオに於いてアルバム・デビューの為のデモ・テープを録音したが、1977年1月に、ストレートなブリティッシュ・ハード・ロック指向派とプログレッシヴ・ロック指向派にグループ内のサウンドの方向性が分かれて、神戸ヤマハ・ホールで行なったライブを最後に、ボーカルの泉洋次が脱退。泉が脱退した後もバンドはしばらく存続していたが、煮詰ってしまい、1978年2月に解散してしまった。先に魔璃鴉を脱退したボーカリストの泉洋次は東京へ上京して、1979年にSMSレコードよりソロ・デビュー。またギターの岩井は稲垣潤一のバック・バンドを経てスタジオ・ミュージシャンとして活動している。シェラザードを結成しハード・プログレッシヴ・ロックを明確に確立した平山照継や大久保寿太郎、キャメルやジェネシス・アプローチのハード・プログレッシヴ・ロック・グループ"ランブル"を結成し、またフロマージュで発展させた中嶋一晃らは、魔璃鴉を見て育ち、魔璃鴉に憧れ、魔璃鴉を手本として自分達流の関西ハード・プログレッシヴ・ロック・グループへ発展させた。関西のハード・プログレッシヴ・ロック・シーンの先駆的な役割を果たした魔璃鴉が後続グループに与えた影響は計り知れないのである。

マンドレイク[MANDRAKE]

◀Member▶

平沢　　進　Susumu Hirasawa(G,Vo) ref.P-MODEL
田中　靖美　Yasumi Tanaka(Kbd) ref.P-MODEL
阿久津　徹　Toru Akutsu(B) ex.HATENKO
田井中貞利　Sadatoshi Tainaka(Ds) ref.P-MODEL

◀Discography▶

- 7'EP-「飾り窓の出来事Part I & II (Kazarimado No Dekigoto)」 MADE IN JAPAN:MIJ-1003(Promo) '84★
- V.A.(LP)-「Synthesizer Study」OVERSEAS:FEX-13-V(Promo) '78

〈Susumu Hirasawa Solo〉

- V.A.(LP)-「Synthetic Space」RCA:RVL-7107 '78

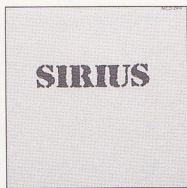
マンドレイクはプログレッシヴな感性を持つテクノ・ポップ・グループ"P−モデル"の前身グループとして有名な東京のプログレッシヴ・ロック・グループであり、70年代後半の東京の"幻の黄金期"に活躍し、新月、美狂乱と共に当時のアンダーグラウンド・シーンを代表するグループであった。マンドレイクはギタリストの平沢進が中心となって1973年に結成され、次第にキング・クリムゾンの影響を強く受けたサウンドを持つグループとして方向が定まって行き、1977年頃にキーボードの田中靖美、ドラムスの田井中貞利、破天荒というEL&Pタイプのキーボード・トリオに在籍していたベースの阿久津徹というライン・ナップに固まると、(以前にはヴァイオリニストを加えた5人編成でキング・クリムゾンのコピーなどをしていた。)渋谷ジャン・ジャンや吉祥寺DAC801を中心として本格的なライブ活動を開始。メロトロンを大幅に導入し、初期クリムゾンの持つ暗黒の世界を描くドラマチックな構成のプログレッシヴ・ロック・サウンドに悲愴感やエロティズム、残酷に満ちた世界といったものを研ぎ澄まされた鋭い感性によって描かれたシュールな歌詞が鮮明に作り出す彼らの世界は素晴らしく、東京のアンダーグランド・シーンの中で、美狂乱、新月と共に脚光を浴びて行った。1978年には雑誌「プレイ・ボーイ」の主催によるシンセサイザー・ミュージックの作品コンテストに平沢進が参加したり、(RCAレコードから発売されたオムニバス・アルバム「Synthetic Space」に収録されている。)シンセサイザー・ユニットのバッハ・リヴォリューションをゲストに加えて、スクリーンや大風船等の演出豊かなライブ・ステージを繰り広げていたが、(マンドレイクはバッハ・リヴォリューションと共にシンセサイザーの教則用のレコード「Synthesizer Study」の制作を担当し、"展覧会の絵"などのナンバーを演奏しており、全てオリジナル・ナンバーではないが、マンドレイクとして唯一、録音されたレコードである。)1978年の後半頃には今までのドラマチックなプログレッシヴ・ロックから、よりメカニズムな冷たさ強調した退廃的なプログレッシヴ・ロック・サウンド(この頃のナンバーは後にP−モデルで取り上げられた"異邦人"など。)へと変化して行き、当時のプログレッシヴ・ロックを取り巻く情況の悪さと、プログレッシヴ・ロック・サウンドからより新しい実験的であり進歩的であったテクノ・ポップ・サウンドへと彼らの興味自体が変化して行き、1978年暮れにマンドレイクを解散して、ギターの平沢進、キーボードの田中靖美、ドラムスの田井中貞利にベースの秋山勝彦を加えて、1979年2月にP−モデルを結成。マンドレイクのサウンドから大変身を遂げたP−モデルは5月に下北沢ロフトに於いてデビューライブを行い、ワーナーパイオニアよりアルバム「In A Model Room」を発表して、ヒカシューと共に先進的なテクノ・ポップ・グループとして、一躍、日本のロック・シーンの表舞台で大活躍をして行き、リーダーの平沢進は現在でも、常に先進的な音楽を追求し続けるアーティストとしてカリスマ的な存在である。マンドレイクは70年代後半の日本のプログレ・シーンにとっての"幻の黄金期"を代表する秀れたグループであり、平沢進の創造したシュールな感性に溢れたそのサウンドは日本のプログレ史上、比類なきものであった。日本のプログレ史上、作品を発表する事が出来ないまま消えて行ったグループの中で、マンドレイクは最も惜しまれるグループの一つであった。

ミスターシリウス[Mr.SIRIUS]

◀Member▶

宮武　和広　Kazuhiro Miyatake(Fl,A-G,Syn,Vo) ex.PAGEANT
加納　敏行　Toshiyuki Kanou(Kbd) '79〜'80
杉本　　淳　Jun Sugimoto(G,Kbd) '80 ex.CLEOPATRA
吉田　久美　Kumi Yoshida(Vo) '80

永井　博子　Hiroko Nagai(Vo)'86~ from.PAGEANT
大谷　令文　Raven Otani(G)'80,'87 ex.SNAKE CHARMER,MARINO
釜木　茂一　Shigekazu Kamaki(G)'88~ ex.OPHEUS,NUGEN,PAGEANT,ref.KEHELL,EVE
稲垣　公章　Kimiaki Inagaki(Ds)'79~'80
藤岡　千尋　Chihiro Fujioka(Ds)'80,'86~ ex.CLEOPATRA
村岡　秀彦　Hidehiko Muraoka(B)'80,'86~ ex.SNAKE CHARHER
宮武美代子　Miyoko Miyatake(A-G)'86~
<GUEST>
清水　義央　Yoshihisa Shimizu(G) from KENSO
小川　文明　Fumiaki Ogawa(Kbd) from BLACK PAGE,ex.SPIRAL

◀Discography▶

● ALBUM-「Barren Dream」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1013'87★/(CD)CRIME:280E-2025　'89
● ALBUM-「Dirge」(CD)CRIME:KICP-69'90
● ALBUM-「Crystal Voyage」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2919'90
● 7"EP-「Eternal Jealousy」MADE IN JAPAN:MIJ-1006　'86★
● CT-「Gate To Europe」MADE IN JAPAN:MIJTP-2004　'86★

大阪の住吉高校に通う宮武和広(G)は高校の同級生であった加納敏行(Kbd)、稲垣公章(Vo)らを集めて、1975年にイエスのコピーグループ"フラジャイル"を結成。学園祭等で活動後、住吉高校を卒業した宮武和広は1978年夏にこのフラジャイルのメンバーと共にオリジナル・ナンバーをやるべく、シリウスを結成。ギタリストとしてはパット・メセニーやラリー・カールトンから影響を受けていた宮武和広が率いるシリウスのサウンドはジェネシスやアンソニー・フィリップスを意識したサウンドであり、後のミスターシリウスのサウンドの源流的なものであった。結成当初は5人編成であったシリウスからリズム隊が脱退して、ボーカルの稲垣がドラムス&ボーカル、宮武和広がギターの他にペダル・ベース、加納敏行がキーボードの他にシンセ・ベースを担当する様になって、御堂筋音楽祭ロック部門優勝、8.8.ロック・ディの決勝大会進出を始めとしたライブ活動を開始したが、シリウスはこの手のライブ・コンテストよりも、ロッキンf誌のテープ・コンテストの方へ力を入れ、1979年、80年の2回連続編曲賞を受賞。(1979年の方はシリウスの3人のメンバーによる宮武和広のプライベート録音作品である"クリスタル・ヴォヤージ"、1980年の方は"みや竹"というプロジェクト名でシリウスのメンバーに、スネークチャーマーのギタリストの大谷令文(後にマリノへ加入。)とベースの村岡秀彦、クレオパトラのドラムスの藤岡千尋とギターの杉本淳らを加えた"月下美人"。)これらのコンテスト荒しを活動の目標にしたシリウスであったが、1981年にキーボードの加納が就職の為に脱退してしまい解散。ギターの他にキーボード、フルート等をこなすマルチ・プレイヤーであった宮武和広は、シリウスのライブに遊びに来たページェントのギターの中嶋一晃に誘われて1984年にページェントに加入して活動する傍ら、自らのソロ・ユニットとしてミスターシリウスの構想を練り始めて、1984年8月に自らの金を注ぎ込んでプライベート・レコーディング・スタジオ"シリウス"を設立。10月頃からページェントのボーカルの永井博子、クレオパトラのドラムスの藤岡千尋と共にミスターシリウスのサウンドを追求する為に、毎夜スタジオ・ワークを繰り返した。1986年3月にページェントのデビューアルバム「螺鈿幻想」がメイド・イン・ジャパン・レコードから発売され、ミスターシリウスの方もカセット・テープ作品「Gate To Europe」とシングル「エターナル・ジェラシー」がメイド・イン・ジャパン・レコードから発売されると、宮武和広が作り上げたアンソニー・フィリップス的な"静"のアコースティク・サウンド&PFMフォーカス、リタン・トゥ・フォーエバー等といった複雑多岐に渡る音楽的な影響の上に生み出された複雑な構成と変拍子を持つ"動"のプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンド、完成度の高い演奏とアレンジ力、録音技術のすべての点に於いてプログレッシヴ・ファンから高い評価を受けたミスターシリウスはアルバム発表の為に準備に入り、宮武和広は1986年夏に大

阪・近鉄小劇場で行われた雑誌「宝島」のイベント出演を最後にページェントを脱退してミスターシリウスのアルバムのレコーディングに専念。宮武和広はギター、フルート、キーボード、ベース、アコーディオンをこなし、前記したページェントのボーカルの永井博子、ドラムスの藤岡千尋の他に、元マリノのギターの大谷令文、ケンソーのギターの清水義央、ブラック・ペイジのキーボードの小川文明らのゲスト・プレイヤーを加えてアルバム制作を進行する傍ら、宮武(G, Fl, Kbd)、永井(Vo, Kbd)、藤岡千尋(Ds)、村岡秀彦(B)、大谷令文(G)というライン・ナップでアルバム発売のデモストレーションを兼ねたミスターシリウスとしての正式なデビュー・ライブを11月8日渋谷エッグマンに於いて行った。1987年3月にメイド・イン・ジャパン・レコードよりアルバム「バレン・ドリーム」が発売され、PFM、フォーカスといったプログレシヴ・ロックとパット・メセニーなどのジャズ・ロック、フレンチ・シャンソンなどの多彩な音楽性を融合させたサウンドをプログレ・インディーズの中で比類ない完成度を持って聴かせるこの作品は高い評価を受け、宮武和広は才能に溢れる作曲家、マルチ・プレイヤーとして日本のプログレ・シーンを代表するアーティストの座を獲得。このアルバム発表後、宮武和広は彼のソロ・プロジェクトであったミスター・シリウスをバンド形態をとったプロジェクト・チームに発展させる為にボーカルの永井博子、ドラムスの藤岡千尋に、ライブ・メンバーとして参加したベースの村岡秀彦、オルフェウス、夢幻、イヴなどの関西のハード・プログレッシヴ・ロック系のグループを点々と渡り歩いてまたギタリストの釜木茂一を加えたライン・ナップを集めて、2ndアルバム制作へ向けて始動。メンバーが固定して、宮武のソロからバンド形態へと発展した彼らはレコディング上はもとより、ライブ・バンドとしても飛躍的な進歩を遂げ、年に一回くらいのペースでライブをこなす傍ら、2ndアルバムのレコーディングを行ない、1990年10月にキング・レコードのクライム・レーベルよりアルバム「ダージ」を発表。演奏技量、アレンジ力、録音のクオリティーの全ての点に於いて前作を遥るかにしのぐ完成度を持つ本作は前作以上の高い評価を与えられた日本のプログレ・シーンに於ける最高傑作の1枚である。また現在活躍しているグループの中でシリウスは最も才能と実力を持ったグループであり、またライブ・バンドとしても最もエキサイティングなステージを繰り広げるグループとして高い評価を受けている。

ミスタッチ[MIS TOUCH]

◀Member▶

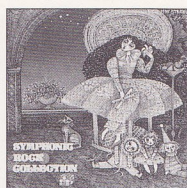
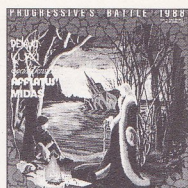
佐久間正英　Masahide Sakuma(B) ref.YONIN-BAYASHI,PLASTICS
茂木由多加　Yutaka Mogi(Kbd) ref.YONIN-BAYASHI

ミスタッチは四人囃子に加入したベースの佐久間正英とキーボードの茂木由多加が、四人囃子加入以前の1973〜74年頃に神奈川県にある和光大学内で結成して活動していたキーボード・トリオ。EL&Pあたりを手本としていたグループであったが、サウンドの詳細と他のメンバーに関しては不明。茂木由多加は1975年に四人囃子へ加入して、しばらくするとベースの中村真一が脱退して佐久間正英も四人囃子へ加入。東宝レコードからシングル「空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ」を発表した。

ミダス[MIDAS]

◀Member▶

右遠　英悟　Eigo Uto(Vin,G,Vo)
三島　克章　Katsuaki Mishima(B)
坂野　美佐　Misa Sakano(Kbd) '82〜'84
林　睿昌　Eisho Rin(Kbd) '85〜 ex.ATOMIC SYSTEM
筒井　佳二　Keiji Tsutsui(Kbd) '85〜 ex.MARINO
形山　和夫　Kazuo Katayama(Ds) '84〜 ex.ATOMIC SYSTEM,ref.MUGEN,MAGDALENA
福島　和知　Kazutomo Fukushima(Ds) '82〜'84

◀Discography▶

- ALBUM-「Beyond The Clear Air」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1021 '88★
- V.A.(LP)「Progressive's Battle '88」MADE IN JAPAN:MIJ-1017 '88★
- V.A.(CD)「Symphonic Rock Collection」MADE IN JAPAN:MCD-3205 '89
- CT-「Midas」(Promo) '87

4歳から8年間、ヴァイオリンの教育を受けたギタリストの右遠英悟とベーシストの三島克章らが参加していた京都の地元のハード・ロック・グループ、ダムネーションを母体として右遠(G,Vo)、三島(B)、坂野(Kbd)、福嶋(Ds)の4人によって1982年7月にミダスを結成。大阪バハマを中心にライブ活動を開始するが1983年12月にドラマーが福嶋からランダム、アトミック・システムといった神戸のアマチュア・プログレ・グループを転々としていた形山和夫に交代。84年になると右遠がギタリストからヴァイオリンへと転身して、ミダスのプログレッシヴ・ロック・サウンドの方向性が固って行った。ミダスのサウンドはUKから影響されたタイトなプログレッシヴ・ロックとバイオリンの練習曲やソナタから影響を受けたクラシカル・ロック、フランスのワパス一風の牧歌的なサウンドを融合させたヨーロッパ指向の強いサウンドであり、右遠の力強いヴァイオリン・プレイが大きな特色。1984年11月29・30日の2日間に渡って大阪キャンディー・ホールに於いて行なわれたイベント"プログレ・ハード・ナイト"(共演:ページェント、スターレス、フロマージュ、ソフィア)や12月31日に同じくキャンディー・ホールに於いて行なわれたイベント"プログレッシヴ・ナイト"(共演:ソフィア、ジェランド、スターレス、ページェント、剣の舞、イヴパズル)などに積極的に参加して、彼らの存在は地元関西を中心にして知られる様になり、1985年5月にドラムスの形山と共にアトミック・システムに参加していたキーボードの林睿昌が加入してミダスにとって最も充実した時期を迎え、デモ・テープを制作する傍ら、ベラフォンと共に"プログレ音楽館"と銘付ったライブを定期的に行なった。1987年にはドラムスの形山が夢幻のメンバーとしても活動し、1988年4月にメイド・イン・ジャパン・レコードから発売されたオムニバス・アルバム「Progressive' s Battle 1988」に参加。また12月にはアルバム「Beyond The Clear Air」を発表。夢幻、ベラフォンと共に関西プログレ・シーンに於いて数少ないヨーロッパ指向の強いマニアックなプログレッシヴ・ロック・サウンドを持つグループとして、東京のプログレ・ファンや海外からも注目されている。ミダスは現在、リーダーであった右遠が脱退して、活動停止状態にあり、ドラムスの片山はマグダレーナに参加している。

ミトコンドリア[MITOCONDORIA]

◀Member▶

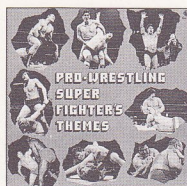
長谷川　淳　Jun Hasegawa(B,Vo)
山形　伸行　Nobuyuki Yamagata(Kbd)
成田恵美子　Emiko Narita(P)
西館　昌男　Masao Nishidate(Ds)

ミトコンドリアは1985年頃に青森で活動していたマイナーな存在のアマチュア・プログレッシヴ・ロック・グループ。ノヴァリスやグローブシュニット等のジャーマン・ロマンティズムに溢れるプログレッシヴ・ロックとポップなサウンドの両面を持つグループであり、ピカレスク・オブ・ブレイメンやアシュールと共に数少ない東北地方のグループとして貴重な存在であった。1986年にはグループ名をΣ(シグマ)と改名して東京に於いてもライブを行なった事もあったが、1987年頃には自然消滅してしまった。

ミノタウルス[MINOTAURUS]

◀Member▶

淡海　悟郎　Goro Oumi(Kbd)

◀Discography▶

●ALBUM-「Super Fighter's Theme(With BATH REVOLUTION)」(LP)KING:SKA-257 '79★

栗本薫原作のヒロイック・ファンタジー「グイン・サーガ」のイメージ・レコードの音楽担当などをしているキーボード&作曲家の淡海悟郎が1970年末期〜80年初期にかけて結成して活動していたキーボード・トリオがこのミノタウルスである。他のメンバーに関しては不明であるが、UK的なソリッドなプログレッシヴ・ロックとハード・ロック・サウンドを融合させたサウンドを持つグループであった。1979年にはバッハ・リヴォリュージョンと共に新日本プロレスのイメージ・レコードの制作を担当していたが、このサウンドは彼らの本来のプログレッシヴ・ロック・サウンドではない。

宮下フミオ[FUMIO MIYASHITA]

◀Member▶

宮下フミオ　Fumio Miyashita(Syn,G) ex.FAROUT,FAR EAST FAMILY BAND

〈GUESTS〉

原田　裕臣　Hiroomi Harada(B)

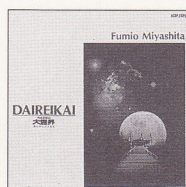
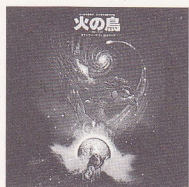
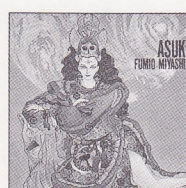
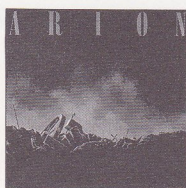
己城　研二　Kenji Mishiro(Kbd) ex.CRONICLE

石川　　恵　Kei Ishikawa(B) ex.FAROUT,CRONICLE

柴田　千歳　Chitose Shibata(Ds)

高崎　静夫　Shizuo Takasaki(Ds) ex.FAR EAST FAMILY BANDO,ref.KANZEON

豊田　貴志　Takashi Toyoda(Vln) ex.SPACE CIRCUS

◀Discography▶

●ALBUM-「Digital City」(LP)TOKUMA:ORF-8003 '81★

●ALBUM-「天川のひびき(Amanogawano Hibiki)」(LP)SMS '81★

●ALBUM-「御詠歌(Goeika)」'82★

●ALBUM-「Arion」(LP)TOKUMA:ANL-1002 '82★/(CD)TOKUMA:35ATC-1 '83★

●ALBUM-「Earth」(LP)TOKUMA:ANL-1007 '82★/(CT)BIWA:701

● ALBUM-「Moon」(LP)TOKUMA:ANL-1011 '84★/(CT)BIWA:702

● ALBUM-「Star」(LP)TOKUMA:ANL-1022 '84★/(CT)BIWA:703

● ALBUM-「アスカ(Asuka)」(CD)KADOKAWA:P33L-20004 '85/(LP)L28P-1225 '85★

● ALBUM-「起光線」(LP)VICTOR:VDR-72 '85★

● ALBUM-「火の鳥(Hinotori)」(LP)KADOKAWA:28AH-2128 '86★

● ALBUM-「Meditation Music天河へ五十鈴編」(LP)KADOKAWA:KA8611/(CD)H33P-20108 '86★

● ALBUM-「火の鳥～宇宙編(Hinotori ～Uchuhen)」(CD)KADOKAWA:H33P-20226 '87

● ALBUM-「大霊界(Daireikai)」(CD)KADOKAWA:H33P-20299 '88★

● CT-「Journey To Space」(CT)BIWA:704

● CT-「大和(Yamato)」(CT)BIWA:705

● CT-「Shion」(CT)BIWA:706

● CT-「Silent Echo」(CT)BIWA:707

● CT-「天河物語(Amanogawa Monogatari)」(CT)BIWA:708

● CT-「Wave」(CT)BIWA:709

● CT-「瞑想(Meisou)」(CT)BIWA:711

● CT-「呼吸(Kokyu)」(CT)BIWA:712

● CT-「五十鈴(Isuzu)」(CT)BIWA:713

● CT-「日本の美(Nihonno Bi)」(CT)BIWA:714

● CT-「神秘(Shinpi)」(CT)BIWA:715

● CT-「神酒(Miki)」(CT)BIWA:716

● CT-「平安(Heian)」(CT)BIWA:717

● CT-「信州(Shinsyu)」(CT)BIWA:718

● CT-「天宇受売文命舞」(CT)BIWA:719

● CT-「御遷宮(Gosengu)」(CT)BIWA:720

● CT-「琴の音(Kotonone)」(CT)BIWA:721

● CT-「オオクニ言祝(Ookuni)」(CT)BIWA:098

● CT-「Harai」(CT)BIWA:099

ファーラウト、ファー・イースト・ファミリー・バンドを率いて、日本の土壌に根ざされた精神を取り入れたプログレッシヴ・ロックを追求してきたリーダーの宮下文夫は1977年にファー・イースト・ファミリー・バンドが解散するとアメリカへ渡って、ファー・イースト・ファミリー・バンドで追求し続けたサウンドを母体としたプライベート録音によるシンセ・ミュージックの作品の制作に取り組む様になりファー・イースト時代の仲間であったドラムスの高崎、ベースの原田やクロニクルのベースの石川恵らを加えて、喜多郎や伊藤祥と同様に自らのレーベルである琵琶レコードを中心としてアリオン、火の鳥などのアニメーションのイメージ・アルバムや角川映画のサウンド・トラックなど現在までに数多くの作品を発表している。1984年に発売された「Earth」、「Moon」、「Star」の3部作やアニメーションのイメージ・アルバムである「起光線」や「アスカ」あたりが彼の代表作である。

ムーンダンサー[MOON DANCER]

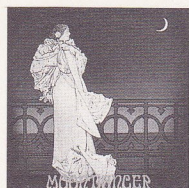
◀Member▶

厚見　麗(玲)　Rei Atsumi(Kbd,Vo) ref.TAKYON,SCENCE OF WONDER,VOW WOW

沢村　拓　Taku Sawamura(G,Vo)

佐藤　芳樹　Yoshiki Sato(Ds)

下田　展久　Nobuhisa Shimoda(B,Vo)

◀Discography▶

● ALBUM-「Moon Dancer」(LP)ALFA:ALR-6014 '79★

● 7"EP-「Arabesque」ALFA:ALR-1008 '79★

キーボードの厚見麗は神奈川県立多摩高校を卒業すると、ストラングラーズ的なロック・サウンドのグループであった薔薇卍(バラマンジ)に加入。フィリップス・レコードからプロ・デビューの話もあったが、結局、決まらずに薔薇卍は煮詰まってギターとベースが脱退してしまい、後任に厚見の高校時代の後輩であったギターの沢村拓とベースの下田展久を誘い再び活動を始めようとしたが、今度はリーダーであったボーカリストが脱退してしまい、バンドは崩壊してしまった。薔薇卍は崩壊してしまったが、せっかくメンバーが集まっているのだから、とキーボードの厚見麗は兼ねてから自分でやりたかった"イエスを母に持ち、レッド・ツェッペリンを父に持つような、ハード・プログレッシヴ・ロックとビートルズやスパークスといったブリティッシュ・ポップを融合させたサウンド"を追求するべく、薔薇卍のギタリストの沢村拓とベーシストの下田展久にドラマーの松坂大助を加えて、1977年夏にサイレン(SIREN)を結成。1977年10月1日に三軒茶屋にあるライブ・ハウス"オデッセイ"に於いてデビュー・ライブを行なった。ムーン・ダンサーの前身グループであったサイレンのサウンドはジョン・ロードやブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック・キーボード奏者から影響を受けた厚見麗の多彩なオルガン・プレイを中心とするブリティッシュ臭いハード・プログレッシブ・ロックとクィーン、スパークスといったブリティッシュ・ポップのセンスを兼ね備えたサウンド(歌詞のほとんどは英語、ムーン・ダンサーの名曲"アラベスク"も英詞であった。)であり、ムーン・ダンサーのサウンドよりもブリティッシュ・ロック色が強いものであった。また、関西では魔璃鴉やシェラザード、ランブルといったハード・プログレッシヴ・ロックの源流を作るグループ達が次々と登場して来た時期であったが、東京ではこのサイレンの存在は唯一無比のものであった。サイレンは3回程ライブを行なった後にコスモス・ファクトリーのプロデューサーであった立川直樹にテープを送り、立川直樹が彼らに興味を示して、ライブ活動を中止させてサウンド固めとデモ・テープ制作、レコード会社への売込みに専念させ、約1年間程、キング・レコードやフィリップス・レコードなどでデモ・テープの制作と売込みに明け暮れ、(ドラマーの松坂が脱退し、コスモス・ファクトリーの末期のドラマーであった豊田がデモ・テープ制作に参加。)結局、新興レコード会社であったアルファーレコードと契約を交わして、1978年夏にドラムスの佐藤芳樹が加入して音羽スタジオに於いて本格的なデモ・テープを制作した後に秋から箱根ロックウェル・スタジオとアルファ・レコードAスタジオに於いてレコーディングを開始したが、バンド名の"サイレン"はイメージが悪いとのレコード会社の意向により、立川直樹がグループ名をムーン・ダンサーと改名。また歌詞も英語では売れないと、日本語に改訂して1979年3月にムーン・ダンサーのデビュー・アルバム「ムーン・ダンサー」がアルファ・レコードより発売された。ムーン・ダンサーは業界関係者を集めたプロモーションの為のコンサートを数回こなした後、4月20日に東京・赤坂砂防会館ホールに於いてデビュー&発売記念コンサートを行なった。芸能界系のプロダクション(西城秀樹と同じ事務所)に所属していた彼らは、デビュー当初は歌謡系ロック・グループとして売り込まれて、盛んにテレビなどにも出演していたが、アルバムのセールスは今一歩パッとせず、彼らの活動の場も次第に渋谷・屋根裏などのラウブ・ハウスを中心としたものになって行った。2ndアルバムの話は進み、プロデユーサーにはミッキー・カーチスが決定して、1980年夏に厚見と沢村がロサンジェルスへ渡米。渡米した際にガイ・シフマン(Ds)らとのセッションを通じて、向うのミュージシャンのリズム隊の良さを痛感させられて帰国し、8月にローディーミュージック・プラザで行なわれたライブを最後にリズム隊のチェンジを考えたが、この頃にはムーン・ダンサーのサウンドの方向性もブリティッシュ・ハード・プログレ&ポップスから、フュージョン的な要素を持ったアメリカン・ハード・ロックへと変化し始めていたので、ムーン・ダンサーを解散。再び厚見と沢村はロサンジェルスに渡り、先にセッションをしたドラムのガイ・シフマンとベースのグレック・リーを連れて帰国すると、秋にタオキンを結成。81年1月にタキオンのアルバムを発売し、半年間程活動したが、タオキンは短命に終わり、厚見麗はその後、難波弘之&センス・オブ・ワンダーなどを経て、バウワウに加入。ギターの沢村は矢沢永吉などのバック・バンドで活躍している。ムーン・ダンサーは厚見麗という日本のトップ・クラスのロック・オルガン・テクニックを持つキーボード奏者を擁し、ノヴェラと共に日本のハード・プログレッシヴ・ロックを代表する素晴らしいグループであった。

ムーンチャイルド[MOON CHILD]

ムーン・チャイルドは東京・太田区にあるレコーディング・スタジオ“ムーン・チャイド”（このスタジオにはメロトロンが常備されており、新月やアルターリミッツらがデモ・テープ制作として使っていた。）のオーナーである竹中氏を中心として結成されたプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ。ヴァイオリニストにギター、キーボード、ベース、ドラムスという編成で、ジャン・リュック・ポンティーや後期ゴングあたりのジャズ・ロック・サウンドを持ち、メンバー全員卓越した演奏力を持っていた好グループであった。1978年〜81年頃に都内のライブ・ハウスに於いて精力的な活動を行ない、一時期はメジャー・デビューの話もあったが、自然消滅してしまった。ムーン・チャイルドは1970年代後半の東京のプログレ・シーンの中で、メサイアと共にカンタベリー系のジャズ・ロック・サウンドを持つ代表的な存在であった。

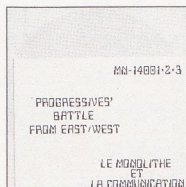
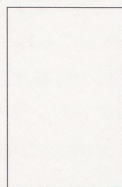
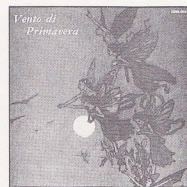
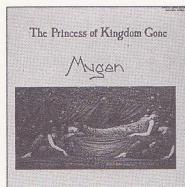
夢幻[MUGEN]

◀Member▶

林　克彦　Katsuhiko Hayashi(Kbd,G)
中村　隆士　Takashi Nakamura(Vo,A-G,Kbd)
加藤　明　Akira Kato(B,A-G) '78〜'85
古田　雅也　Masaya Furuta(Ds) '78〜'85
山崎　邦彦　Kunihiko Yamazaki(Per,Vo) '81〜'83
釜木　茂一　Shigekazu Kamaki(G) '82〜'83 ex.ORPHEUS,ref.EVE,KEHELL,Mr.SIRIUS
長嶋　伸行　Nobuyuki Nagashima(B) '87〜'88 ex.PAGEANT,CLEOPATRA
形山　和夫　Kazuo Katayama(Ds) '87〜'88 from MIDAS,ref.MAGDALENA
松浦　正平　Shiyohei Matsuura(B) '88 ref.MAGDALENA

〈GUESTS〉

林　多香子　Takako Hayashi(Vo)①、④、⑤
上西園　誠　Makoto Kaminishizono(G)①
中嶋　一晃　Ikkou Nakajima(G) '88 ex.RUNBLE,FROMAGE,FASION,from PAGEANT②
川口　貴　Takashi Kawaguchi(Vln) from.OUTER LIMITS,ref.KANON②、⑥
宮武　和広　Kazuhiro Miyatake(Fl,A-G) from.Mr.SIRIUS,PAGEANT②、⑥
西田　竜一　Ryuichi Nishida(Ds) ex.SOPHIA,NOVELA,TERU'S SYMPHONIA,ref.VIENNA,JACKS'N JOKER,ACTION②
笹井りゅうじ　Ryuji Sasai(B) ex.NOVELA,TERU'S SYMPHONIA②
引頭　英明　Hideaki Indo(Ds) '88 ex.SCHEHERAZADE,FASION,from PAGEANT④、⑥
藤井　卓　Taku Fujii(G) ex.ANRAKUSHI,from MAGDALENA③
赤尾　和重　Kazue Akao(Vo) from TERRA ROSA③

◀Discography▶

●ALBUM-「Sinfonia Della Lnua」(LP) LUNA:001' 84★①
●ALBUM-「レダと白鳥(Leda et Le Cygne)」(LP)NEXUS:K28P-801 '86★/(CD)CRIME:280E-2054 '89②
●ALBUM-「Sinfonia Della Luna"Re-Mix"」(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1011 '86★/(CD)MCD-2909 '90
●ALBUM-「過ぎ去りし王国の王女(The Princess Of Kingdom Gone)」
(LP)MADE IN JAPAN:MIJ-1020 '88/(CD)MADE IN JAPAN:MCD-3202 '88③
●7"EP-「冬夢(Snow Dream)」MADE IN JAPAN:MIJ-1008 '86④
●7"FLEXI-「Vento di Primavera」LUNA:002(Promo) '87⑤
●CT-「夢と幻/Visual」LUNA '80★
●CT-「Luna e Giullare」LUNA '82★
●CT-「Visual」MADE IN JAPAN:MIJTP-2005 '86★
●CT-「Concerto Andare Luna」MADE IN JAPAN:MIJTP-2006 '86★
●V.A.(7"FLEXI)-「Progressive's Battle」MONOLITH:MN-14001 ～3 '85★
●V.A.(7"FLEXI)-「Progressive's Battle '86」MADE IN JAPAN:MIJ-1069(Promo) '86
●V.A.(CT)-「Official Bootleg Lives I 」MADE IN JAPAN:MIJTP-2007 '87★
●V.A.(VIDEO)-「King Of Progressive」MADE IN JAPAN:MIV-98001 '86★⑥
●V.A.(VIDEO)-「Official Bootleg Lives」MADE IN JAPAN:MIV-58002 '87★

京都にある洛陽工業高校に通うギタリストであった林克彦は同級生であった中村隆士(Ds, Vo)、古田雅也(B)と共に学園祭バンドとして、1978年に夢幻を結成。キング・クリムゾンの"21世紀の精神異常者"のコピーとオリジナル・ナンバーを演奏していたが、1979年にベースの加藤明が加入して、林がギター専任からキーボード&ギター、古田雅也がベースからドラムス、中村がドラムス&ボーカルからボーカル&アコースティック・ギターへと担当楽器が大幅にチェンジして、この頃からフォーク・タッチのプログレッシウ・ロック・サウンドが確立され始めて行った。1990年に高校卒業記念として自主制作デモ・テープ「ヴィジュアル」(ブックレット付き)を制作して、卒業の為に解散したが、1982年になって林(Kbd, G)、古田(Ds)、加藤(B)、中村(Vo)の4人に山崎(Vo, Fl)が加わった5人によって再編成。ジェネシスから多大な影響を受けたプログレッシヴ・ロック・サウンドをイタリアのバンコ等のグループの様なキーボードを主体としたシンフォニック・アンサンブルとクラシカル・ロック手法によって表現するプログレッシヴ・ロック・サウンドへと発展した彼らはプロモーション用にデモ・テープ「月と道化師」を制作して、冬には京都のパブなどでライブ活動を開始。1983年にはボーカル&フルートの山崎が脱退して、一時期、元オルフェウスのギタリスト(現ミスター・シリウス)の釜木茂一が参加していたが音楽性の相違の為に脱退。"自分達のレコードが作りたい"という願望が募った林克彦はメンバー全員で資金を出し合って、自分達の手によって自主制作アルバムの発売を決意して、1984年7月にアルバム「シンフォニア・デッラ・ルナ] (初回300枚プレス)を発表。日本のプログレッシヴ・ロックの自主制作アルバムとしては、このアルバム以前に町田のレコード店"PAM"が制作したケンソーの1st&2stや、メイド・イン・ジャパン・レコードの第一作目であるアウターリミッツと観世音とのジョイント・アルバム「メイド・イン・ジャパン」、マーキームーン誌のベル・アンティーク・レーベルより発売されたフロマージュの1stなどが発売されているが、これらのものはアーティスト以外の資本家がバック・アップして制作されたもので、アーティスト自身の資本と手による純粋なプライベート・プレスとしては、夢幻の「シンフォニア・デッラ・ルナ」が日本で初めてのものであった。このアルバムはメンバー自身の手によって日本各地のプログレ専門店に配給されて東京のプログレ専門店を中心にまたたく間に完売して、初回プレスよりも多い500枚の再プレスも早々に完売。1985年～87年にかけて訪れる日本のプログレッシヴ・ロックの最盛期、とりわけインディーズ・プログレの最盛期の先駆的な役割を果すアルバムとなった。また純粋なプライベート・プレスのアルバムの中で、唯一商業的な成功を納めたアルバムでもあった。このアルバムのサウンドは初期ジェネシス・サウンドを基本としてよりクラシカルな手法を取り入れ、キーボード・アンサンブルを中心としたシンフォニック・ロックであり、ヨーロッパ指向の強い本格的なシンフォニック・ロック・サウンドが日本のプログレッシヴ・ロック・マ

ニア層から絶大な支持を受けて、この好セールの勝因となった訳だ。国内のプログレ・シーンが盛り上がる予感を見せ始めてきた中、マーキー誌を抜けた中藤正邦氏の提案で、関東、関西を代表する6グループによるオムニバス・サンプラー・ソノシート「Prgressives' Battle」が企画され、アウターリミッツ、ネガスフィア、アクアポリス、ページェント、剣の舞と共に夢幻もこのオムニバスに参加して、このサンプラー・ソノシートは1985年4月に発売。このサンプラーは予想外の反響を呼び、モノリス・レーベルとメイド・イン・ジャパン・レコードの協同企画による発売記念イベント"Progressibves' Battle Live"が5月2日〜5日の4日間に渡って吉祥寺シルバーエレファントに於いて開催され、夢幻も初日(2日)に登場。ページェント、アウターリミッツと共に好評を博して、このイベントとここに出演して注目を集めたグループ達が今後の日本のプログレ・シーンの隆盛を作って行く上で重要な役割を果して行く事になったのである。とりわけ、アウターリミッツ、ページェントと共に夢幻は、日本のプログレ・シーンのムーヴメントが従来のメジャーレコード会社(キング・レコードのネクサス・レーベル)の手からインディーズ(メイド・イン・ジャパンが主)・レーベルへ移行して行く上で重要な役割を果して行くのであった。1stアルバムが好評を博した彼らに対して、マーキームーン誌のベル・アンティーク・レーベルから2ndアルバム・リリースの話もあったが、マーキームーン側のあまりに消極的な内容にプログレッシヴ・ロックの前途に失望したベースの加藤とドラムスの古田が脱退。この脱退からしばらくすると今度はキング・レコードのネクサス・レーベル内で新しく企画された"ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ"からアルバム・リリースの話が持ち上がり、このシリーズの企画を担当したノヴェラのプロダクションであるリュカの山田次郎氏の紹介によって、ノヴェラのベースの笹井りゅうじ、ドラムスの西田竜一と、ページェントのギターの中嶋一晃、ミスターシリウスの宮武和広(Fl&A-G)、アウターリミッツのヴァイリンの川口貴といったノヴェラ一派とメイド・イン・ジャパン系の人気ミュージシャン達をゲストに加えて、大阪のラスク・スタジオと林克彦の自宅録音に於いて1985年11月〜86年1月にかけて2ndアルバムのレコーディングを行ない、2ndアルバム「レダと白鳥」はキング・レコードのネクサク・レーベルより86年4月に発売された。日本のプログレ・シーンの最盛期の真っただ中にリリースされ、またノヴェラ一派とメイド・イン・ジャパン系の人気アーティストをゲストに迎え、また林自身もページェントのライブ・サポート・メンバーとして参加して脚光を浴びた時期に発売されたアルバムは爆発的なセールを記録。("ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ"の中で最も売れたアルバムであった。)このアルバムの発売記念ライブは1986年5月2日〜5日に吉祥寺シルバーエレファントに於いて開催された。"第2回Progressives' Battle Live"の一貫として、5月4日に行なわれ、キーボードの林克彦とボーカル&キーボードの中村隆士以外はページェントのベースの長嶋伸行とドラムスの引頭英明、ミスターシリウスの宮武和広、アウターリミッツのヴァイオリンの川口貴らをゲストに迎えたライン・ナップで登場してシルバーエレファントの動員記録を作る超満員の観客を集め、夢幻として最も充実した時期を迎えた。9月にはページェントのリズム隊(長嶋、引頭)をゲストに加えて、メイド・イン・ジャパン・レコードよりシングル「冬夢」を発表。12月には1stアルバム「シンフォニア・デッラ・ルナ」のリミックス再発をメイド・イン・ジャパン・レコードより発売。永らくリズム隊不在のまま、ゲスト・ミュージシャンに頼っていた夢幻であたが、ページェントを脱退した長嶋伸行とミダスの片山和夫を正式なメンバーとして迎えて、3rdアルバム制作へ向けての準備を進める傍ら、1987年4月に新宿スペース107ホールに於いて開催されたイベント"メイド・イン・ジャパン・フェスティバル春の陣"に林(Kbd)、中村(Vo&Kbd)、長嶋(B)、片山(Ds)というライン・ナップにゲストにアウターリミッツのギターの荒牧隆を加えた布陣で出演。夢幻は年に1、2回程度のライブ活動をマイ・ペースで続けて、1988年5月3日〜5日に吉祥寺シルバーエレファントに於いて開催された"第3回Progressives' Battle Live"に林(Kbd)、中村(Vo&Kbd)、片山(Ds)に新加入メンバーの松浦(B)とマグダレーナのギターの藤井卓というライン・ナップで出演した後に、3rdアルバムのレコーディングを開始。10月にメイド・イン・ジャパン・レコードより3rdアルバム「過ぎ去りし王国の王女」を発表。従来のジェネシス・サウンドにバンコなどのイタリアン・プログレ色を加味したサウンドの本作は好評を博したが、リーダーの林克彦がメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーとして東京へ上京して解散。(結局、ラスト・ライブは5月の"Progressives' Battle Live"。)メイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーに移身した林克彦はソシアル・テンションのプロデュース及び、プロジェクト・アルバム「パッゾ・ファンファーノ・ディ・ムジカ」のプロデュース&作曲・演奏を担当している。またドラムスの片山とギターの藤井卓、ベースの松浦は藤井がやっていたマグダレーナを再編成して現在活動中である。夢幻はアウターリミッツと共に、最も洋楽のプログレ・マニア層に支持が高かったグループであり、またインディーズ・プログレのムーヴメントの先駆的な役割を果したグループであった。

メサイア[MESSIAH]

◀Member▶

船形　芳宏　Yoshihiro Funagata(Ds)
若田　仁司　Hitoshi Wakata(Kbd)
大崎　正男　Masao Osaki(Sax,Fl)

里見ケイヤ　Keiya Satomi(B)

メサイヤはピアノ&シンセサイザーの若田が1976年に結成したスターシアというグループを母体として1978年3月に結成されたアンダーグランドな存在の東京のジャズ・ロック・グループ。各メンバー共にジャズを正式に学び、ウェザーリポートやチック・コリアから影響を受け、またソフト・マシーンやゴングといったカンタベリー系のジャズ・ロックやキング・クリムゾンを想わせるジャズ・ロック・サウンドであったが、グループの曲のほとんどを手掛けているキーボードの若田がストリングス・シンセサイザーを多用している為に硬質なサウンドという印象は少なく、メロディアスな響きを持っていた。なを、彼らは1979年4月に東京・明大前キッド・アイラック・ホールでプリズムの和田アキラをゲストに迎えてデビューライブを行なった後、吉祥寺シルバーエレファントを中心として、1982年頃まで活動していた。

メビウス[MOBIUS]

◀Member▶

塚本　周成　Shusei Tsukamoto(Kbd) ref.OUTERLIMITS,VIENNA
藤井　暢之　Nobuyuki Fujii(B) ref.OUTERLIMITS
桜井　信行　Nobuyuki Sakurai(Ds) ref.OUTERLIMITS

メビウスはアウターリミッツの母体となったキーボード・トリオである。東京の北、駒込にある聖学院高校に通うキーボードの塚本周成、ドラムスの桜井信行、ギターの藤井暢之らがサークル内で活動していたハード・ロックのコピーバンドが高校卒業と共に解散して、塚本周成は武蔵野音楽大学パイプ・オルガン科に進学すると、高校時代のメンバーであったドラムスの桜井、ギターの藤井(ベースへ転向)を誘って1976年にメビウスを結成。メビウスはキング・クリムゾン、EL&P、PFM等のコピーを中心とするグループであり、とりわけ、当時の塚本はキング・クリムゾンに傾倒しており、"Starless And Bible Black"、"In The Wake Of Poseidon"等のクリムゾンのナンバーを数多く取り上げていた。楽器店が主催するイベント等を中心としてライブ活動を行ない、またアウターリミッツで取り上げた"Running Away"、"すべては風のように(原曲)"等のオリジナル・ナンバーも取り上げていた。メビウスは約3年間活動を行ない、塚本が大学3年生の時(1979年)に大学の作曲科の友人を通じて知り合ったコントラバス科の杉本正、ヴァイオリン科の川口貴を加えて、塚本(Kbd), 桜井(Ds)、藤井(再びベースからギターへ転向)、杉本(B)、川口(Vln)という新たなライン・ナップとなって、グループ名もアウターリミッツと命名。塚本周成はキング・クリムゾンやPFMといったプログレッシヴ・ロックから影響されながらもクラシックの対旋律法を取り入れ、ヴァイオリンをフィーチャーしたサウンドオリジナル・ナンバーを本格的に作曲し始めて、アウターリミッツは長い年月を経て、日本のプログレッシヴ・ロック・シーンを代表する不世出のグループへと成長を遂げて行ったのである。

森下　登喜彦[TOKIHIKO MORISHITA]

◀Member▶

森下　登喜彦　Tokihiko Morishita(Kbd)

◀Discography▶

● ALBUM-「Toccata」(LP)DARAMA:ぷ-1 '72★
● ALBUM-「妖怪幻想(Youkai-Genso)」(LP)VICTOR:KVX-1039 '78★

立教大学に通うキーボード奏者である森下登喜彦は大学の仲間を集めて、前衛的なパイプ・オルガンをフィーチャーしたプログレッシヴ・ロック的なサウンドとGSの名残りを留めたポップなロック・サウンドの自主制作アルバム「Toccata」を1972年に発表した。プログレッシヴ・ロック、とりわけロック要素としては明確に確立されたサウンドではなく、あくまで日本にプログレッシヴ・ロックが誕生する黎明期に生み出されたプログレッシヴな精神に基づいて制作された実験的な作品であった。このアルバム発表以降、森下登喜彦は78年に水木しげるの妖怪をイメージした「妖怪幻想」というシンセサイザー・ミュージックのアルバムを発表している。

モンゴル[MONGOL]

◀Member▶

モンゴル　Mongol(G,Kbd,etc.)
今井　澄　Kiyoshi Imai(Ds) ex.ROSE BAND
天崎　直人　Naoto Amazaki(B) ex.EURASIA,OOLA

◀Discography▶

●CT-「眠れる道(Nemureru-Michi」ROAD:R-016 '87★

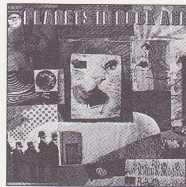
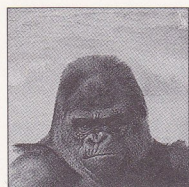
モンゴルはロゼが主宰していた自主制作カセット・レーベル"ROAD"から1987年にカセット・アルバム「眠れる道」を発表したマルチ・プレイヤーであり、プライベート・レコーディング・アーティスト。フランスの前衛ジャズ・ロック・アーティストのエマニエル・ブーツのナンバーを取り上げ、オリジナル・サウンドの方もこのエマニエル・ブーツ等のフランス前衛ジャズ・ロックから影響されたマニアックなサウンド作りであり、ロード・レコードの作品の中で最も秀れた作品であった。このカセット作品ではモンゴル1人による多重録音であったが、このカセット発売後、元オーラ、ユーラシアのベースの天崎直人、元ロゼ・バンドのドラムスの今井澄を加えて、吉祥寺シルバーエレファントに於いてライブ活動を行なっていたが、モンゴル自身が沖縄へ行く事になり、活動停止してしまった。

柳田ヒロ[HIRO YANAGIDA]

◀Member▶

柳田　ヒロ　Hiro Yanaida(Kbd) ref.FOOD BRAIN,LOVE LIVE LIFE,SHIN-ROKUMON SEN
〈GUESTS〉
水谷　公生　Kimio Mizutani(G) ref.LOVE LIVE LIFE①、②
江藤　勲　Isao Eto(B) ref.STRAWBERRY PATH,H.TAMAKI&SMT②
チト　河内　Cito Kawachi(Ds) ex.HAPPNINGS 4, ref.LOVE LIVE LIFE,TRANZAM②
横田　年昭　Toshiaki Yokota(Fl,Sax) ref.LOVE LIVE LIFE②
つのだひろ　Hiro Tsunoda(Ds) ex.JACKS,S.WATANABE QUARTET ref.FOOD BRAIN,STRAWBERRY PATH,FLIED EGG,SADISTIC MIKA BAND,CAPTIN HIRO&SPACE BAND ①
玉木　宏樹　Hiroki Tamaki(Vln) ref.H.TAMAKI&SMT①
石川　恵樹　Kei Ishikawa(B) ref.FAROUT,CRONICLE①
杉本喜代志　Kiyoshi Sugimoto(G)④
高中　正義　Masayoshi Takanaka(G) ex.ESCAPE, ref.FLIED EGG,SADISTIC MIKA BAND④

後藤　次利　Tsugutoshi Goto(B) ex.TRANZAM,ref.SHIN-ROKUMONSEN,SADISTIC MIKA BAND④
ジョーイ・スミス　Joey Smith(Ds) ex.SPEED,GLUE&SHINKI④

◀Discography▶

● ALBUM-「Milk Time」(LP)TOSHIBA LIBERTY:LPC-8037 '70★①

● ALBUM-「柳田ヒロ(Same)」(LP)ATLANTIC:P-8027A '71★②

● ALBUM-「HIRO」(LP)URC:4017 '72★/(CD)③

● ALBUM-「Hiro Cosmos」(LP)CBS SONY:SOLL 35 '73★④

● ALBUM-「Planets In Rock Age」COLUMBIA:JDX-61 '71★

<SONS OF SUN>

● ALBUM-「海賊キッドの冒険」(LP)VICTOR:SF-1020' 72★

柳田ヒロは日本のロック史の黎明期に於いて、成毛滋と共に日本で初めて"プログレッシヴ・ロック"というものを作り上げたキーボード奏者&作曲家であり、彼の残した功績は大きい。柳田ヒロは1949年5月7日生まれ。GSブームにかげりが見え始めた1968年にモンキーズ・ファンクラブ日本支部の公募によって集まったギターの菊地英二、ボーカルの小坂忠、ドラムスの義村康市、ベースの杉山喜一と共にGSグループ"フローラル"を結成。イラストレーターの宇野亜喜良がコスチューム、楽器デザイン、グループの命名、作詞まで手掛け、日本ミュージカラーという本邦唯一のピクチャーディスク制作会社からシングル「涙は花びら」、「さまよう船」の2枚を1968年にリリース。10月には来日したモンキーズの前座を務めたが、バンドのサウンドはGSからアート・ロック&サイケデリック・ロックへと変化し始め、ドラムスとベースが脱退して、柳田ヒロは小坂忠、菊地英二に、バーンズというサイケデリック・ロック・グループをやっていたドラムスの松本零(松本隆の事)とベースの細野晴臣を加えて1969年4月1日にエイプリール・フールを結成して、10月にコロンビアの配給によるミュージカラー・レコードからアルバム「エイプリール・フール」を発表した。エイプリール・フールのサウンドはヴァニラ・ファッジからの影響が強いアート&サイケデリック・ロックだが、柳田ヒロが主導権を持つナンバーではインプロビゼーションによるオルガン・プレイも聴かれ、彼自身の実験的なアプローチは日本に於けるプログレッシヴ・ロックの出発点とも呼べるサウンドであった。4月にこのアルバムをレコーディングした彼らは、新宿パニック、六本木スピード、渋谷ハッピー・バレー等のディスコを中心として精力的なライブを開始して、インプロビゼイションを重視したエキサイティングなステージを繰り広げていたが、(寺山修司の天井桟敷劇団の音楽担当をしていた。)ブリティッシュ・プログレ及び、ジャズ的なインプロビゼイション志向が強い柳田ヒロと菊地の音楽性と、もともとエイプリール・フールへは"給料"がもらえて、レコーディングが確定していたという経済的な動機によって加入し、バッファロー・スプリングフィールドやモビー・グレイプ等のウェスト・コースト志向の強い松本、細野、小坂との音楽性の違いによって、9月27日に東京・日消ホールに於いて行なわれたアルバム発売記念の無料コンサートを最後に解散。そして柳田ヒロは成毛磁が主催した日比谷野音でのイベント"10円コンサート"等でのセッションを通じて親交を深めた元ジャックスのドラムスのつのだひろ、元パワーハウスのギターの陳信輝、ゴールデン・カップスのベースの加部正義と共にセッション・グループ、フード・ブレーンを結成。1970年10月にポリドールからアルバム「晩餐」を発表。インプロビゼイションによる陳のブルース色と柳田ヒロのエッグやキャラバン等に通じるオルガン・プレイをフィーチャーした実験的なプログレッシヴ・オルガン・ロック色が混然一体となった先進的なロック作品であり、柳田ヒロはエイプリール・フール時代より明確な形としてプログレッシヴ・ロック・スタイルを確立し始めていた。このフード・ブレーンはセッション・バンドであった為に直ぐに解散して、柳田ヒロはつのだひろ(Ds)、石川恵樹(B)、元GSのアダムス&アウトキャストのギタリストの水谷公生を従えて柳田ヒロ・グループとして活動して、1970年11月に東芝リバティーからアルバム「ミルク・タイム」を発表。このアルバムは上記のメンバーに玉木宏樹(Vln)を加えたメンバーで作られ、玉木のヴァイオリンと柳田ヒロのチェンバロによる美しいクラシカル・パートと、水谷のギター、玉木のヴァイオリン、柳田ヒロのオルガンをフィーチャーしたワイルドなインタープレイを聴かせるサイケデリック&プログレッシヴ・ロック・パートの対比が素晴らしいアルバムであり、日本で始めて、明確な形としてアルバム全編を通じてプログレッシヴ・ロック・サウンドをやった記念すべきアルバムでもあった。実験的なプログレッシヴ・ロックを明確に確立した柳田ヒロは、実に短期間の間に数多くの"プログレッシヴ"な作品を発表して行く。1971

年に入ると、3月にワーナーパイオニアから彼の2ndソロ・アルバム「Hiro Yanagida」を発表。前作と同じくギターに水谷公生、そしてドラムスにはハプニングス4のチト河内、フルート&サックスに横田年昭、ベースにはストロベリー・パスや玉木宏樹&SMTに参加する江藤勲というライン・ナップで制作された本作は、「ミルク・タイム」と同様のプログレッシヴ・ロック・サウンドであるが、前作よりもインプロビゼイション指向からエッグ、ナイス、キャラバンなどに通じるアンサンブルを持つプログレッシヴ・ロック・サウンドを強調した形となり、彼のキーボード奏者としてプログレッシヴ・ロックが最も完成されたアルバムであった。彼は自らのソロ作品ばかりではなく、積極的にセッション・アルバムにも参加。現代音楽&フリージャズ・ピアニストである佐藤充彦&サウンド・ブレイカーズのアルバム「恍惚の昭和元禄」(東芝リバティー)では柳田ヒロとのゴールデン・コンビであるギターの水谷公生やラヴ・リヴ・ライフのベースの寺川正興らと共に参加してエモーショナルなオルガンのインタープレイを繰り広げ、また寺山修司原作の劇団天井桟敷主演映画「書を捨てよ町へ出よう」のサントラ盤(ビクター/1971年7月発売)ではつのだひろ(Ds)、石川恵樹(B)、J.A.シーザー、そして頭脳警察のオリジナル・メンバーであり、ファーラウトのギタリストである左右栄一らと共に参加。ここでもエネルギッシュなプログレッシヴ・オルガン・プレイを聴かせている。さらに柳田ヒロはサックス&フルートの市原宏祐を中心として、柳田ヒロのソロ・アルバムにも参加しているフルートの横田年昭、ドラムスのチト河内、ギターの水谷公生やベースの寺川正興、ギターの直居隆雄、ボーカルの布施明らを集めて結成されたユニット・グループ、ラヴ・リヴ・ライフにも参加して、柳田ヒロの「Hiro Yanagida」の発売の翌月(4月)にキング・レコードより1stアルバム「Love Will Make A Better You」を発売。1970年秋から71年にかけて、柳田ヒロが"プログレッシヴ"な感性をフルに発揮した時期であり、日のプログレ・シーンにとっても彼の活動そのものが"日本のプログレッシヴ・ロックの誕生"であったのだ。1972年に入ると柳田ヒロは、昨年まで精力的に創造していた先進的ロック・サウンドを捨て去り、フォーク・タッチのポップス・サウンドのアルバムを発表する。URCレコードから11月に発売された彼の3rdソロ・アルバム「Hiro」とサンズ・オブ・サンという名義でビクター・レコードから5月に発売されたアルバム「海賊キッドの冒険」の2枚のアルバムは共に、当時台頭し始めたフォーク・ソング・サウンドであり、この一転したサウンドの変化は彼の商業的意図によるものか、あるいは70年〜71年にかける期間の活動の中で彼自身のプログレッシヴ・ロック・サウンドが完成してしまって、当時台頭し始めたフォーク・サウンドが彼にとって次なる先進的なアプローチであったのだろう。1973年にはスピード・グルー&シンキのジョーイ・スミス(Ds)、高中正義(G)、後藤次利(B)らを加えた4thソロ・アルバム「Hirocosmos」を発表。このアルバムではインプロビゼーション主体のジャズ&フュージョン・アプローチによるサウンドを作り上げており、新たなる彼の試みが感じられる。翌年にはラヴ・リヴ・ライフの2ndアルバムがCBSソニーから発売され、このアルバムではキング・クリムゾンの「アイランド」的なジャズ・アプローチを強調したものになっている。フォーク・サウンドからジャズ・フュージョン・サウンドへ転身した柳田ヒロは自らのソロ・アルバム制作の傍ら、よしだたくろう、小室等にフォー・ジョー・ハーフのベースの後藤次利、ドラムスのチト河内と共にスーパー・ロック&フォーク・グループ、新六文銭を1973年2月に結成して全国ツアーを行なっている。(結局、新六文銭はアルバム発表もないままに、短命に終ってしまった。)1960年代末期〜70年代前半にかけて、実に精力的に様々なサウンドへアプローチした彼は、その後作曲家・アレンジャーへ転身して、クリエイティヴな音楽を生み出すアーティストとしては第一線から外れて行った。成毛滋(フライド・エッグ)と共に日本のプログレを創始した先駆者なキーボード奏者である柳田ヒロの残した功績は実に大きなものであったのだ。

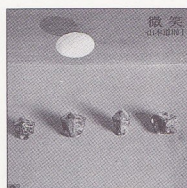
山本道則[MICHINORI YAMAMOTO]

◀Member▶

山本　道則　Michinori Yamamoto(Vo)

＋

水谷　公生グループ　Kimio Mizutani Group

◀Discography▶

● ALBUM-「微笑(Hohoemi)」(LP)POLYDOR:MR 5063 '75★

● 7"EP-「羅裸 I (La La One)」POLYDOR:DR1964 '75★

山本道則は1975年にポリドール・レコードからアルバム「微笑」とシングル「羅裸Ⅰ」を発表して消えていった無名のシンカー・ソング・ライターであるが、このアルバムの演奏・編曲をラブ・リブ・ライフ等のギタリストの水谷公生グループが全面的に担当しており、美しいストリングス・アンサンブル、インド音楽を連想させるパーカッション、多彩なシンセサイザー等の豊かなアレンジによって作られたこの作品は、当時のヨーロッパのプログレッシヴ・ロックの作品に匹敵する傑作であった。ニューミュージック全盛期の中で生み落されたプログレッシヴ・ロック産物であり、水谷公生グループの手による所が大きい。

誘精[YUSEI]

◀Member▶

手塚　啓一　Keiichi Tezuka(B) ref.NEGASPHERE
堂免　稔泰　Toshihiro Domen(Ds) ref.NEGASPHERE
滝沢奈緒美　Naomi Takizawa(Kbd)
花田　耕一　Koichi Hanada(G) '88~
渡辺　　修　Osamu Watanabe(G) ~'87
丸井　啓弘　Yoshihiro Marui(Vo) ~'87
今村　　修　Osamu Imamura(Vo) '88~

◀Discography▶

- CT-「A.I.」 '85★
- CT-「人工頭脳(Jinko-Zuno)」 '86★
- V.A.(CD)-「Symphonic Rock Colloction」MADE IN JAPAN:MCD-3205 '89
- V.A.(LP)-「Progressive's Battle '88」MADE IN JAPAN:MIJ-1017 '88★
- V.A.(LP)-「Heavy Metal Force Ⅰ」EXPLOSION:EXP-HM291037 '88★

誘精は1981年に結成された東京のイエス・タイプのプログレッシヴ・ロック・グループ。イエスから多大な影響を受けて、結成当初はイエスのコピー・グループとしてスタートした彼らは、1984年頃になると、手塚啓一(B)、堂免稔泰(Ds)、滝沢奈緒美(Kbd)、渡辺修(G)、丸井啓弘(Vo)、というライン・ナップとなって本格的にオリジナル・ナンバーに取り組む様になり、東京・神楽坂エクスプロージョンや吉祥寺シルバーエレファントを中心としてライブ活動を開始。1985年と1986年に2本のデモ・カセット・テープを制作。アンダーグランドな存在ながら、中期イエスを彷彿させるサウンドと手塚、堂面のリズム隊を中心とする演奏技術には好感が持てる優れたグループであったが、1987年に大幅にメンバーが脱退したネガスフィアへベースの手塚、ドラムスの堂免、ギターの渡辺の3人が加入して、一時期活動停止。翌年にギターが渡辺から花田、ボーカルが丸井から今村へとチェンジして活動を再開して、メイド・イン・ジャパン・レコードから発売されたオムニバス・アルバム「プログレッシヴス・バトル'88」と神楽坂エクスプロージョンからのオムニバス・アルバム「Heavy Metal Force Ⅰ」の2枚のオムニバス・アルバムに参加したが、ボーカリストが安定せずにグループ自体が煮詰まってしまって活動停止をしてしまった。古くはクロス・トゥ・エッジ、そして関西のディ・ブレイクと並んで、イエスの構築美アンサンブルを追求したグループとして誘精は日本のプログレッシヴ・ロック・シーンに於いて稀有の存在であり、また優れたグループであった。

ユーラシア[EURASIA]

◀Member▶

見越　卓也　Takuya Mikoshi(Kbd)'82~
金井　　浩　Hiroshi Kanai(G)'80~'81 ref.BIBLE BLACK,ROSE BAND
中野　隼人　Hayato Nakano(G)'82~
天崎　直人　Naoto Amazaki(B) ref.OOLA,MONGOL
栗田　正人　Masato Kurita(Ds)

◀Discography▶

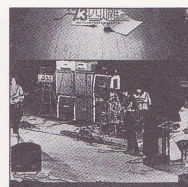
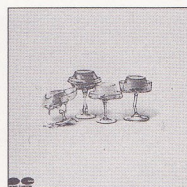
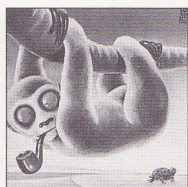
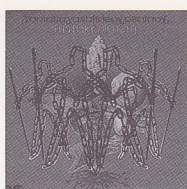
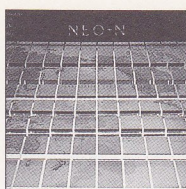
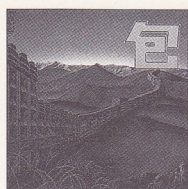
●CT-「Eurasia」ROAD:R-012 '85★

ユーラシアは東京にある日本で唯一のプログレッシヴ・ロック専門のライブ・ハウス・吉祥寺シルバーエレファントのブッキング・マネージャー&ミキサーである栗田正人(Ds)を中心として、ベースの天崎直人、ギターの金井浩〈ロゼ〉の3人によって1980年に結成されたマイナーな存在のグループ。マグマ、ヘルドン風の重厚な実験的なジャズ・ロック・サウンドを持つ彼らは吉祥寺シルバーエレファントを中心として、マイ・ペースなライブ活動を行ない、1982年にはギターの金井が脱退して、ギターの中野とキーボードの見越が加入。1984年頃まで地道にライブ活動を行なっていた。1982年にユーラシアを脱退したギターの金井はバイブル・ブラックを経てロゼという名前のソロ・プロジェクトで活躍して、自主制作カセット・レーベル"ROADレコード"を主宰。ベースの天崎はオーラを結成した。なお初期のユーラシアのライブ演奏を収めたカセット・テープが1985年にロード・レコードより、リリースされている。

四人囃子[YONIN-BAYASHI]

◀Member▶

岡井　　大二　Daiji Okai(Ds)'72~'79,'89~ ref.PEGMO
坂下　　秀美　Hidemi Sakashita(Kbd)'72~'78,'89~ ref.PEGMO
茂木　由多加　Yutaka Mogi(Kbd)'75,'79 ex.MISTOUCH
中村　　真一　Shinichi Nakamura(B)'72~'75
佐久間　正英　Masahide Sakuma(B,Kbd)'75~'79,'89~ ex.MISTOUCH,ref.PLASTICS
森園　　勝敏　Katsutoshi Morizono(Vo,G)'72~'76,'90~ ref.PRISM
佐藤　ミツル　Mitsuru Sato(Vo,G)'77~'79,'90 ex.CLOSE TO THE EDGE,MARTIAN ROAD
ポッピー神山　Hoppy Kamiyama(Kbd)'89~
大堀　　　薫　Kaoru Ohhori(G)'89~
西園　　まり　Mari Nishizono(G)'89~
藤沢　　由裕　Yoshihiro Fujisawa(Sax)'89~

◀Discography▶

- ALBUM-「二十歳の原点(Hatachino Genten)」(LP)TAM:AX-6006 '73★
- ALBUM-「一触即発(Ishoku-Sokuhatsu)」
  (LP)TAM:AX-8801 '74★/Re-issued:(LP)VIVID:DR0004 '88/(CD)CANYON:D33P-6284 '89
- ALBUM-「Golden Picnics」(LP)CBS:SOLN-7 '76★/(CD)CBS:CSCL-1245 '90
- ALBUM-「Printed Jelly」(LP)CANYON:WF-9006 '77★/(CD)CANYON:D25P-628 '89
- ALBUM-「Triple Mirrors(※Best)」(LP)TAM:AX-6029 ～30 '77★
- ALBUM-「Live '73」(LP)TAM:AX-7801 '78★/(CD)CANYON:D25P-6285 '89
- ALBUM-「包(Pao)」(LP)CANYON:WX-7003 '78★/(CD)CANYON:D25P-6287 '89
- ALBUM-「NEO-N」(LP)CANYON:C25A-0071 '79★/(CD)CANYON:D25P-6288 '89
- ALBUM-「History」(CD)CANYON:PCCA-00002 '89
- ALBUM-「Dance」(CD)BMG VICTOR:R32H-1080 '89/(CT)RHT-8601 '89
- ALBUM-「Live Full House Matinee」(CD)BMG VICTOR:B23D-13022～23 '90
- 7"EP-「空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ(Soratobuenbanni Otoutoganottayo」TAM:AT-1806 '75★
- 7"EP-「A Song For Lady Violetta」CBS:SOLB-406 '76★
- 7"EP-「挙法混乱(Kan Fusion)」CANYON:W-14 '79★
- VIDEO-「Full House Matinee」PIONEER LDC:HM055-3404 '90

四人囃子は日本のプログレッシヴ・ロック・シーンを代表するグループであると共に、日本のロック・シーンの創成期からニューウェーブの台頭期まで音楽面に於いて常に、"プログレッシヴな感性"を持ち、先進的な存在であり続けた偉大なるグループである。常に日本のロック・シーンに対して先進的なロック・サウンドを提示し、時代と共にサウンドの様変わりを続けた四人囃子の歴史は古く、結成のいきさつは1970年に遡る。中学2年の時にエレキ・ギターを購入した森園勝敏はビートルズ、スペンサー・ディヴィス・グループ、クリーム、ジミ・ヘンドリックス等のブリティッシュ・ロックのコピーを始め、東京・中野区にある都立武蔵ケ丘高校に進学すると、グループ・サウンズ、ムーリック(クリームの逆さ読み)などのコピーグループを結成して活動した後に、森園勝敏は都立武蔵ケ丘高校から近くにある都立鷺宮高校へ転校。鷺宮高校の学園祭のステージに立った際に、同校に通う1年生であり、クリームに狂っていたドラムスの岡井大二と知り合い、意気投合してブリティッシュ・ロック・サウンドのグループ結成を計画して、1970年暮れに四人囃子の前身グループであるザ・サンニンを結成。ザ・サンニンがミュージック・ライフ誌に出したメンバー募集によって、ベーシストの中村真一が加入して高校内を中心としてコピー・グループとしてのライブ活動を開始したが、1971年初めに森園が以前通っていた武蔵ケ丘高校の友人であったキーボードの坂下秀実を加えて、グループ名も新たに"四人囃子"と命名。本格的なブリティッシュ・ロック・サウンドを追求する彼らは少しずつオリジナル・ナンバーも書き初めて、1971年5月に東大五月祭に於いてデビュー・ライブを行なった。彼らはこの時、マウンテンやディープ・パープルのコピーナンバーと"おまつり"、"ライト・ハウス"などのオリジナル・ナンバーも披露して、1972年～1973年初めまでは吉祥寺OZを中心としたライブ活動を精力的にこなして行った。1973年8月21日には東京・浅草俳優座に於いて初のワン・マン・コンサートを行ない、急速に人気ロック・グループへと成長を遂げて行き、幾つかのレコード会社からの誘いの中から一番制約の少ない東宝レコードとレコード契約を結び、ATG映画のサウンド・トラック・アルバム「二十歳の原点」を制作。ディープ・パープルやマ

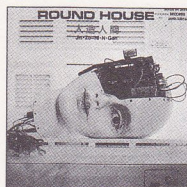
ウンテンなどのブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドをベーシックとしながらもピンク・フロイド的なプログレッシヴ・ロックを取り入れて複雑多岐な構成力を持つハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドとシュールな歌詞、卓越した演奏力を持つグループへと成長した彼らは、1974年2月〜4月にかけて彼らの真価を発揮した正式なデビュー・アルバム「一触即発」のレコーディングをPSCスタジオに於いて行ない、5月に日比谷野音に於いて開催されたイベント"日比谷セカンド・ロックンロール・ストリーク"にサディスティック・ミカ・バンド、サンハウス、ハルヲフォン、スモーキー・メディスン、ジョー山中等と共に出演した後、6月25日に東宝レコードより1stアルバム「一触即発」を発表。8月5日には福島県郡山市の郊外にある開成山公園に於いて行なわれた日本最大のロック・フェスティバル"ワン・ステップ・フェスティバル"に出演し、(この時の彼らの白熱した演奏は大きな評判を呼び、伝説的なライブとして語り継がれている。)クリエイション、カルメン・マキ&OZと並び日本を代表する人気ロック・グループとしての座を獲得して行った。1975年に入ると、和光大学内で結成されたフォーク・グループ、ノアの箱船、万華鏡を経てプログレッシヴ・ロック・キーボード・トリオへ発展したミスタッチというグループのキーボード奏者であった茂木由多加が2月に加入。また四人囃子のオリジナル・メンバーとして活躍していたベースの中村真一が脱退して、茂木由多加と同じくミスタッチのベーシストであった佐久間正英が新加入。5人編成となり、最もプログレッシヴ・ロック色が濃くなった四人囃子はシングル「空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ」を発表して、4月に日比谷野音に於いて開催されたイベント"ジャパン・ロック・フェスティバル"にクリエイション、サディスティック・ミカ・バンドと共に出演するなど、精力的な活動を繰り広げて、日本のロック・シーンに於いて押しも押されぬNo.1バンドとして君臨する様になった。(「ミュージック・ライフ」誌の75年度の人気投票ではドラムスの岡井大二が1位、ギターの森園勝敏が2位に入っている。)日本のロック・シーンを代表するメジャーグループとなった四人囃子から10月にキーボードの茂木由多加が脱退して、再び4人編成となった彼らはCBSソニーと契約を交わして、1976年1月13日〜3月16日の3ケ月間、300時間以上の録音時間を費して、音響ハウス第2スタジオとCBSソニー第1スタジオに於いて2ndアルバム「ゴールデン・ピクニックス」のレコーディングを行ない、5月にCBSソニーより発売。破格の録音時間を費して当時のレコーディング技術の粋を集めて制作されたこのアルバムは、彼らの豊かなアイデアが全編に渡って詰め込まれた完成度の高い作品で、初期の頃に持っていたブリティッシュ・ハード・ロック色は消えて、ピンク・フロイド的なSEコラージュや空間演出をベーシックとしながらも、アメリカのウェスト・コースト・サウンドを始めとする多彩な音楽性を取り入れたサウンドであり、真の意味に於いて"プログレッシヴ・ロック"と呼べる先進的なロック・アルバムであった。日本のロック史上に於いても屈指の名作である本作は当時の日本のロック・シーンにとって衝撃的な作品として大いに評価され、大々的なプロモーション・ツアーが予定されていたが、ブリティッシュ&プログレッシヴ・ロックからアメリカのウェスト・コースト・サウンドやフージョンへ音楽の興味が変化したギター&ボーカルの森園勝敏が突然、脱退してしまい、全てのツアー・スケジュールをキャンセルして、バンドは活動停止を余儀なくさせられてしまった。(四人囃子の表看板であり、人気を一手に集めていた森園の脱退が、四人囃子の商業的な成功にも大きな影響を与えてしまった。)四人囃子は森園の後任ギタリストを捜し、札幌でイエスの完コピグループとして噂さの高かったクロス・トゥ・エッジを経て、キーボードの中島優貴らと共にハード・プログレッシヴ・ロック、マーシャン・ロードに在籍してた佐藤満に白羽の矢を立てて、リハーサル&合宿に入り、キャニオン・レコードへ移籍をして1977年10月に3rdアルバム「プリンテッド・ジェリー」を発表。佐久間正英を中心としたサウンド作りを行なった本作は暗中模索の中で制作されたので今一つぱっとしないポップな作品であったが、翌年春にフリーダム・スタジオに於いて4thアルバム「包(Pao)」のレコーディングを行ない、8月に発表。このアルバムで再び、「ゴールデン・ピクニックス」的な精神とアイデアに包まれた"プログレッシヴ・ロック"サウンドを追求し、後期四人囃子を代表するアルバムとなった。彼ら自身もこのアルバムに賭ける意気込みは相当なもので、このアルバムの発売記念ライブとして日比谷野音をテントで梱包してしまい、風船を飛ばすというコンサートを計画したが、コンサート直前になり、都の許可を得られずに中止。商業的に失速してきた四人囃子は1979年11月に作詞及びアルアバム・コンセプト作りに島武実を迎えて5thアルバムであり、ラスト・アルバムとなってしまった「NEO-N」を発表。アルバムに収められた全ての曲のタイトルが"N"で始まるというコンセプトのもとに制作された本作は今までのプログレッシヴ・ロックから一転して、アイデア豊かなテクノ・ポップス&ニューウェーヴ・サウンドへと大変身を遂げた内容であり、当時としては最先端を行く先進的なアルバムであり、また高い完成度を持った作品であったが"四人囃子=プログレッシヴ・ロック"というイメージから脱却出来ずに商業的な失敗に終り、アルバム発表後はライブも行なわずに自然消滅してしまった。「ゴールデン・ピクニックス」を発表後、脱退したギタリストの森園勝敏はプリズムに加入して2枚のアルバムに参加した後、自らのソロ・アルバム「バット・マニア」を皮切りにソロ活動を開始して、フュージョン界の人気ギタリストとして活躍。ベースの佐久間正英はテクノ・ポップ・グループ、プラスティックスのメンバーとしての活動を始め、作曲・編曲家として活躍。キーボードの坂下秀実とドラムスの岡井大二はスタジオ・ミュージシャンの傍ら、ペグモを経てスコープで活躍。ギタリストの佐藤満はソロ・アルバムを発表後はスタジオ・ミュージシャンへ。キーボードの茂木由多加もソロ・アルバム発表後はスタジオ・ミュージシャン及び編曲家として活動といった具合に四人囃子に参加していたミュージシャン達は全員、日本のロック&ポップス・シーンに於いて四人囃子で培った先進的なアイデアと音楽センスを生かして活動していたが、四人囃子解散から10年経った1989年に佐久間正英、岡井大二、坂下秀実

の3人によって再結成され、BMGビクターよりアルバム「ダンス」を発表。そしてホッピー神山(Kbd)、西園まり(G)、大堀薫(B)、藤沢由裕(Sax)といった若いミュージシャン達と、森園勝敏と佐藤ミツルの2人のギタリストをゲストに迎えて1989年9月23日に東京・MZA有明に於いて復活ライブを行ない、このライブの模様を納めたライブ・アルバム「Live Full House Matinee」を発売した。この四人囃子復活は、センセーショナルなものとして日本のロック・ファンから大きな注目を集めたが、この再編成は一時的なものであった。日本のロック・シーンの創成期から、ニューウェーブ台頭期まで常に日本のロックの先駆的なサウンドを作り続けてきた四人囃子は真の意味に於いて、日本のプログレッシヴ・ロック史上、"最もプログレッシヴな"グループであり、また日本のプログレッシヴ・ロック・グループの中で、最もメジャー・シーンに於いて活躍し、商業的な成功を収めたグループでもあったのである。

ラウンドハウス[ROUND HOUSE]

◀Member▶

加藤　正之　Masayuki Kato(G)
藤井　良信　Yoshinogu Fujii(G)'75~'80
藤井　方象　Masakata Fujii(B)'75~'78
上村　義昭　Yoshiaki Uemura(B)'79~ ex.TWIST
染田　清治　Seiji Someda(Kbd)
名取　寛　Hiroshi Natori(Ds)'79~ ref.TENCHI SOZO,AIN-SOPH
北川　幸男　Yukio Kitagawa(Ds)'79
三宅　登　Noboru Miyake(Ds)'75~'78
雨皿　英樹　Hideki Amesara(Kbd)'81~

◀Discography▶

●ALBUM-「人造人間(Jinzo-Ningen」(CD)MADE IN JAPAN::MHD-25016 '91
●V.A.(CD)-「70'S West Japanese Rock Scene」MADE IN JAPAN:MHD-25013 '91

ラウンド・ハウスは70年代後期～80年代初頭にかけて関西で活動したプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループで、ラウンド・ハウス以前はアーデル・ハイド・ハイジというグループ名であった。アーデル・ハイド・ハイジは1975年にギターの加藤正之を中心として、もう一人のギタリストの藤川良信、ベースの藤井方象、キーボードの染田清治、ドラムスの三宅登によって結成された。結成当時はウィッシュボン・アッシュのコピーを半分と、ウィッシュボン・アッシュから影響されたオリジナル・ナンバーを半分づつくらいで学園祭などを中心として活動していたが、1978年にベースの藤井とドラムスの三宅が脱退して一時期活動停止。1979年に元ツイストのベースの上村義昭とドラムスの北川幸男が加入してグループ名をラウンド・ハウスと改名。サウンドも今までのウィッシュボン・アッシュ風のハード・ロックから、キャメル、ブランドX、リタン・トゥ・フォーエバーを融合させた全編インストゥルメンタルによるメロディアスなプログレッシヴ・ジャズ・ロック・サウンドへと変身。79年に京都サーカス&サーカスに於いてデビューライヴを行ない、精力的なライヴを開始。彼らは関西で最も有名なロック・コンテストの"8・8・ロック・ディ"の決勝大会に1977年～79年の3年間連続で出場し経歴からも解る様に、他のグループより群を抜いた演奏力を持っており、天地創造(アイン・ソフ)と並んで、関西を代表するプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループであった。1979年に加入したドラムスの北川が半年間程で脱退し、天地創造のドラムスの名取寛が天地創造と活動を平行して加入。1981年にはギターの藤井が脱

退し、キーボードの雨皿英樹が加入してツイン・キーボード編成となったが、1年に1回程度となって1984年7月に大阪キャンディーホールで行なわれたライブを最後に自然消滅してしまった。70年代後期〜80年代初頭の関西プログレッシヴ・ロック・シーンを語る上で欠かす事の出来ないグループであり、何も作品を残さずに消えてしまうには（何回かデモ・テープを録音しており、また彼らをリリースするかどうかを見る為にたかみひろし氏が彼らの練習まで足を運んだ事もある。）あまりに惜しい存在であった。

ラヴ・リヴ・ライフ[LOVE LIVE LIFE]

◀Member▶

柳田　ヒロ　Hiro Yanagida(Kbd) ex.APRIL FOOL,FOOD BRAIN ref.SHIN ROKUMONSEN
チト　河内　Cito Kawachi(Ds) ex.HAPPNINGS 4, ref.TRANZAM
水谷　公生　Kimio Mizutani(G) ex.ADAMS
市原　宏祐　Kosuke Ichihara(Sax,Fl)
横田　年昭　Toshiaki Yokota(Fl,Sax)
寺川　正興　Masaoki Terakawa(B)
布施　　明　Akira Fuse(Vo)
神谷　重徳　Shigenori Kamiya(G)
直居　隆雄　Takao Naoi(G)

◀Discography▶

● ALBUM-「Love Will Make A Better You」(LP)KING:SKK-3009' 71★/(CD)MADE IN JAPAN:MHD-25004 '90
● ALBUM-「殺人十章(10 Chapters Of Murder)」(LP)CBS:SOLL-74002 '74★
● ALBUM-「Rock In Bacharach」(LP)CBS:SOND-66053 ★

1970年初頭にキング・レコードは“ニューエモーショナル・シリーズ”を設立して、笠井紀美子や横田年昭、猪俣猛といった先進的な感性に溢れた新鋭のジャズ・アーティスト達の作品を精力的に制作した。これらのアーティスト達の作品の中で、猪俣猛とサウンド・リミテッドの「イノセント・カレン」（水谷公生らが参加。）は先進的なジャズとして傑出した作品であり、ちょうどキース・ティペット周辺のカンタベリー系ジャズ・ロック・ムーヴメントに近い動きを見せていた。そしてこれらの“ニューエモーショナル・シリーズ”の作品群の中で、積極的に参加して感性を磨いたサックス奏者の市原宏祐を中心として、フルートの横田年昭、1965年にエレキ・インスト・バンドのブルーエースでプロ入りして、GSグループ、アウトキャスト、アダムスのギタリストとして活躍した後に、柳田ヒロやキングの“ニューエモーショナル・シリーズ”のセッションで活躍する水谷公生、プログレッシヴな感性を持ったGSグループのハプニングス4のドラマーであるチト河内、水谷公生と同様に柳田ヒロやニューエモーショナル・シリーズのセッションで活躍するベースの寺川正興、GSグループ、フローラルから細野晴臣、松本隆、小坂忠らと共に1969年にエイプリール・フールを結成して、日本に於いて初めてプログレッシヴ・ロック要素を持つロック・サウンドを作り出し、その後、つのだひろ、陳信輝、加部正義共にフード・ブレーンを結成したり、自らのソロ・アルバムを発表して、日本のプログレッシヴ・ロックの黎明期を作り上げたキーボードの柳田ヒロ、水谷公生と共にもう一人のギタリストである直居隆雄、そしてキング・レコードからソロ・デビューを果して日本のポップス・シーンに於いて売れっ子歌手であった布施明が集まり結成されたセッション・グループが、ラヴ・リヴ・ライフであり、1971年4月にキング・レコードの“ニューエモーショナル・シリーズ”から1stアルバム「Love Will Make A Better You」を発表。このアルバムはキング・レコードの“ニューエモーショナル・シリーズ”が一貫して追求した先進的なジャズ・ロック・サウンドの集大成であり、かつキース・ティペットのセンティピードやキング・クリムゾンの「アイランド」と類似し、最もプログ

レッシヴ・ロックとしての要素を全面に打ち出した作品であり、柳田ヒロの「Hiro Yanagida」やフライド・エッグの「Dr.シーゲルのフライド・エッグ・マシーン」と並んで、日本のプログレッシヴ・ロックの黎明期に於ける名作であった。この1stアルバム発表後、各メンバーはセッション・ミュージシャンして活動していたが、1974年にCBSソニーへ移籍して2ndアルバム「殺人十章」を発表。(布施明は1stアルバムのみの参加で、またギタリストも神谷重徳にチェンジ。)近・現代の凶悪な犯罪をテーマとしたこのアルバムは前作よりも、サックス、フルートなどの管楽器をフィーチャーし、キング・クリムゾンの「アイランド」的なナンバーも含んではいるが、全体的にはよりジャズやIFなどのブラス・ロックとしての要素を強調したサウンド作りへ変化した。翌年にはバカラックのナンバーをアレンジした企画アルバム「ロック・イン・バカラック」を制作したが、初期の頃に彼らが持っていたプログレッシヴな感性は全く失われたムード音楽サウンドとなってしまい、このアルバムを最後にラブ・リヴ・ライフは自然消滅してしまった。

ラベンダー[LAVENDER]

◀Member▶

川渕　裕滋　Hiroshige Kawafuchi(G)
高橋　　庸　You Takahashi(Ds)
竹内　昌弘　Masahiro Takeuchi(Kbd)
月本　美香　Mika Tsukimoto(Vo)
北村　修一　Shuichi Kitamura(B)

◀Discography▶

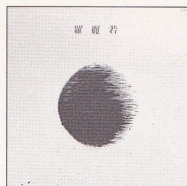
●CT-「Lavender」'89

ラベンダーはギターの川渕裕磁を中心として1988年に結成された東京のアンダーグラウンドな存在のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。1989年4月頃には現在のメンバーとなり、吉祥寺シルバーエレファントを中心としてライブ活動を開始し、自主制作デモ・カセット「ラベンダー」を制作。女性ボーカルの月本美香を中心とするそのサウンドはページェント、ジェラルド、UKあたりの影響を受けたハード・プログレッシヴ・ロックである。若い世代のグループなので今後の成長に期待したい現役のグループだ。

羅麗若[LALENA]

◀Member▶

佐々木晴夫　Haruo Sasaki(Ds)
古川　初穂　Hatsuho Furukawa(Kbd)
古川　　望　Nozomi Furukawa(G)
浦野　武司　Takeshi Urano(B)
宮　　哲之　Tetsuyuki Miya(Sax)

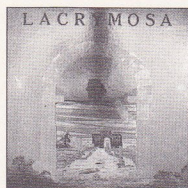
◀Discography▶

● ALBUM-「羅麗若(Lalena)」(LP)BETTER DAYS:YF-7046 '82★

羅麗若はドラムスの佐々木晴夫を中心として、1974年に関西大学軽音楽部内に於いて結成された。結成当初はウィッシュボーン・アッシュやキング・クリムゾンといったブリティッシュ・プログレッシブ・ロックのコピーを中心としたサウンドであり、75年にはキース・エマーソンとジャズから影響を受けたキーボード奏者の古川初穂、76年には古川初穂の弟のギタリストの古川望(高校時代に8.8.Rock Dayジュニア部門で個人賞を受賞した事がある。)が加入したが、大学卒業と共に、1977年には一時解散。1978年に佐々木(Ds)、古川(Kbd)、古川(G)を中心として再び結成され、羅麗若は以前のブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックからウェザーリポート、ジャン・リュック・ポンティといったジャズ・ロック&フュージョンのコピーグループへと変化を遂げて、1979年にベースの浦野武司、大上留利子のツアーバンドに参加していたサックスの宮哲之が加入すると、オリジナル・ナンバーを取り上げる様になって本格的なライブ活動を開始。ウェザーリポート風のフュージョン・サウンドをベーシックとしながらも時折、キング・クリムゾン的なプログレッシヴ・ロック・フレーズが顔を出すサウンドと卓越したテクニックを持つ各メンバーの演奏力によって、羅麗若は急速に注目を集めて行った。また、この当時、東京のライブ・ハウス・シーンではプリズム、スペース・サーカス、クロスウィンド、カシオペア、スクエアといった若手のジャズ・ロック&フュージョン・グループが台頭して来て一世を風靡する程までのブームを巻き起しており、羅麗若はこの東京を中心に盛り上がって来たフュージョン・ブームに対抗する最右翼に位置する関西のグループとして地元、関西で高い支持を得、またブラック・ペイジらの地元、関西のグループへ大きな影響を与える存在となって行った。1981年6月に行なわれたコロムビア・レコードの先進的なジャズ・ロック・レーベル"ベター・ディズ"のオーディションに於いてグランプリを受賞して、ベター・ディズからアルバム・リリースが決定。7月12日にはベター・ディズ・フェスティバル"81サマー・フォーカス・イン"に出演して、プロ・グループとしてデビューライブを行ない、1982年にアルバム「羅麗若」を発表して、一部のフュージョン・ファンからは高い評価を受けたが、商業的にはうまく行かず、煮詰まってしまって解散へと追い込まれてしまった。羅麗若解散後、各メンバーともセッション・マンとし現在でもプロ活動を行なっている。

ラクリモーザ[LACRYMOSA]

◀Member▶

斉藤　千尋　Chihiro Saito(B,Vo,Vln) ex.KATURA TURANA ref.CIRCADIAN RYTHM,GOLDEN AVANT-GARDE
中田　晴一　Seiichi Nakada(Clarinet)
中川つよし　Tsuyoshi Nakagawa(Recorder) '82～'85
藤田佐和子　Sawako Fujita(P) '83～'84 from.KATURA TURANA
佐々木正博　Masahiro Sasaki(Ds)
高橋　　篤　Atsushi Takahashi(Vln)
山崎　尚洋　Naohiro Yamazaki(P) '82,'85～
山崎慎一郎　Shinichiro Yamazaki(Sax) '85～
小山　景子　Keiko Koyama(Vo) '85～ from.CHE-SHI-ZU
渡辺　聡司　Souji Watanabe(Fl) '82

◀Discography▶

- ●ALBUM-「Lacrymosa」(LP)LLE:1008 '84★
- ●7"EP-「疑心暗鬼(Gishin-Anki)」LLE:3004' 85★
- ●V.A.(CD)-「Lost Years In Labyrinth」BELLE ANTIQUE:9119 '91

チェンバーロックと世紀末デカタンスを融合させたサウンドを持つカトラ・トゥラーナのオリジナル・ベーシストであった斉藤千尋は、1982年にテレグラフ・レコードよりカトラ・トゥラーナの1stアルバム「Katra Turana」を発表後、自らのチェンバーロック・サウンドを追求する為に脱退して、ヴァイオリンの高橋篤、ドラムスの佐々木正博、マーキー誌の編集長であるピアノの山崎尚洋、フルートの渡辺聡司、ファゴット&ギターの立原準悟といったメンバーを集めて1982年8月にラクリモーザを結成した。1983年初頭に横浜ジーン・ジニーに於いてデビューライブを行なった彼らは、1983年には斉藤千尋、高橋篤(Vln)、佐々木正博(Ds)の他はクラリネットの中田晴一、リコーダーの中川つよし、カトラ・トゥラーナのピアノの藤田佐和子というライン・ナップとなり、LLEレーベルより1stアルバム「ラクリモーザ」を発表。ヴァイオリン、リコーダー、クラリネット、ピアノ、ベース、ドラムスというユニークな編成による彼らのサウンドは、現代音楽の和声法を取り入れた実験的なプログレッシヴ・ロックであり、フランスのユニベル・ゼロに類似した、日本で唯一のチェンバーロック・サウンドを持つグループとして、異彩を放つ存在であった。1985年にはCHE-SHI-ZUの女性ボーカリストの小山景子、オリジナル・メンバーであった山崎尚洋、サックスの山崎慎一郎を加えたライン・ナップとなり、シングル「疑心暗鬼」を発表。前作のアルバム時よりも、躍動感に溢れるチェンバーロック・サウンドとイタリアのオパス・アヴァントラ的なクラシカル・ロック・サウンドを持つグループへと成長して、グループとして最も充実した時期を迎え、海外のアヴァンギャルト・ミュージック・ファンや関係者達から注目を集める様になったが、1987年に突然、活動を停止してしまい、斉藤千尋は元タイム・ユニット、ソフト・ウィード・ファクターのドラムスの長沼武司、ギターの田中耕太郎と共にゴールデン・アヴァンギャルトを結成した。ラクリモーザは東京のアンダーグラウンド・ミュージックの鬼才である斉藤千尋の鋭い感性がほとばしる素晴らしいグループであり、日本で唯一、世界のアヴァンギャルト・ミュージックと肩を並べるサウンドを持つ稀有の存在であった。

乱舞流[RUMBLE]

◀Member▶

中島　一晃　Ikkou Nakajima(G) ref.FROMAGE,FASION,PAGEANT
永川　敏郎　Toshio Egawa(Kbd) '76~ ref.FROMAGE,SCHEHERAZADE,NOVELA,GERARD,EARTHSHAKER
白井　雅之　Masayuki Shirai(Ds)
新川　武人　Taketo Shinkawa(B)
亀谷　奈津　Natsu Kametani(Vo) '76~
奥田　正一　Shoichi Okuda(Vo) '75~ ref.FROMAGE

◀Discography▶

- ●V.A.(CD)-「70'S West Japanese Rock Scene」MADE IN JAPAN:MHD-25013 '91

大阪に在住するギタリストの中嶋一晃は、高校時代に同級生でドラムスの白井雅之、ベースの新井武人と共にT.Rexやグランド・ファンク、フリー、外道といったグラム系のコピー・バンドをやっていたが大学に進学すると、中嶋、新井、白井にボーカルの奥田正一を加えてオリジナルを中心とするグループ、ランブルを1975年に結成。1975年秋に樟蔭女子大学の学園祭にてライヴ・デビュー。結成当時のランブルはブリティッシュ・ハード・ロック・サウンドであったが1976年に女性ボーカルの亀谷奈津と、当時高校1年生だったキーボードの永川敏郎が加入すると、カルメン・マキに近い歌唱法の亀谷のボーカルとジェネシスや初期キャメルを想わせる永川のオルガン・ワーク、中嶋の泣きのギター・メロディーを中心として、カルメン・マキ&OZやユーライア・ヒープ、初期キャメルを融合させたメロディアスなハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドへと発展して行った。ランブルはイベントなどを中心としてライヴ活動を重ね、1977年7月にデモ・テープを制作。当時のプログレッシヴ・ロック・シーンの中では、シェラザードや魔璃鴉と並んで、プログレッシヴ・ロックとしてのアンサンブルを明確に打ち出した先進的な存在であったが、シェラザードや魔璃鴉のような本格的な活動をすることもなく、1977年秋に解散。ランブル解散後、ランブルの初代ボーカリストの奥田正一と中嶋一晃、永川敏郎はフロマージュを結成し、活動した後に永川敏郎はシェラザード、ノヴェラ、ジェラルドのキーボード奏者として、また中嶋一晃はファッションを経てページェントを結成して、80年代の関西のプログレッシヴ・ロック・シーンに大きな影響力を持つ存在となって行った。

ルシフェル[LUCIFER]

◀Member▶

西森　　毅　Takeshi Nishimori(G) ex.ARMERIA
細野　純弘　Yoshihiro Hosono(Vo) '82～'83、'90 ex.ARMERIA
高瀬　秀樹　Hideki Takase(Vo) '86～'90 ex.VISUAL SCANDAL
鬼海　　仁　Hitoshi Kikai(B) '82～'83 ex.ARMERIA
吉田　明史　Akihito Yoshida(B) '87～
桑原　　康　Yasushi Kuwabara(Ds) '82～'83 ex.ARMERIA
加藤　清英　Kiyohide kato(Ds) '87～'89
白井　昭己　Akimi Shirai(Ds) '89～ ex.LUNA,LEONOLA,女的
吉田　　学　Manabu Yoshida(Kbd) '82～'84 ex.ARMERIA ref.PRIVATES

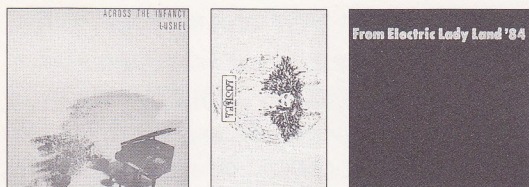
ヴィジュアル・スキャンダルと並んで東京のハード・プログレッシヴ・ロック・グループの草分け的な存在であったアルメリアは約1年間程で解散して、このアルメリアのメンバーによって1982年6月に結成されたのがルシフェルである。渋谷ラママや目黒鹿鳴館を中心にマイ・ペースなライブ活動を行なって、幾度かのメンバー・チェンジを繰り返して現在は元ヴィジュアル・スキャンダルのボーカルの高瀬、元ルナ&レオノーラのドラムスの白井らが参加している。(またオリジナル・メンバーのキーボードの吉田はプライベーツで活躍。)サウンド的には、初期の頃はアルメリアのサウンドを継承したノヴェラ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロックであったが、次第にポップス色の強いロックへと変化して行った。またルシフェルは一時期、カナリーというグループ名で活動していた事もある。

ルーシェル[LUSHEL]

◀Member▶

広瀬　正之　Masayuki Hirose(Vo)
本橋　　厚　Atsushi Motohashi(Ds)
宮崎　哲郎　Tetsuro Miyazaki(B) '83～'84
鬼頭　　満　Mitsuru Kito(G) '83～'84 ex.TILT
原　　一博　Kazuhiro Hara(Kbd) '83～'86
杉山　哲也　Tetsuya Sugiyama(B) '85～

加藤　　厳　Iwao Kato(G)'85~
山田　　厚　Atsushi Yamada(Kbd)'86~

◀Discography▶

● ALBUM-「Across The Infancy」(LP)ELECTRIC LADY LAND:ELL 023 '86★
● CT-「奇蹟の城(Kisekino Shiro)」 '85★
● V.A.(LP)-「From Electric Lady Land '84」ELL:015 '84★

ルーシェルはノヴェラの影響を受けてボーカルの広瀬、ドラムスの本橋、ベースの宮崎、元ティルトのギターの鬼頭らによって1983年に結成された名古屋のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。名古屋のエレクトリック・レディ・ランドを中心にライブ活動を開始し、1984年に同ライブ・ハウスから発売されたオムニバス・アルバム「From Electric Lady Land」に参加。初期ノヴェラ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロックを純粋に聴かせるサウンドとルックスによって地元名古屋で急速に人気を集め、翌年にはデモ・カセット「奇蹟の城」を発表して東京・大阪を中心に積極的にライブ活動を展開。スターレス、ソフィアに次ぐハード・プログレッシヴ・ロック・グループとしてノヴェラ・ファンの女の子達から強い支持を得て、秋には渋谷エッグマン、横浜ビブレ、名古屋ELL、大阪キャンディーホールの4ケ所のライブ・ハウスが合同で行なったプログレ最大のイベント"プログレッシヴ・サーキット"にも積極的に参加して、彼らの中で最も充実した時期を迎えたが、1986年の初めにハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドの要であり、女の子のファンから人気も高かったキーボードの原一博が脱退し、(彼は浜田麻理のバック・バンドへ加入。)代わって山田厚が加入して、ノヴェラ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロックからポップなサウンドへと変化してしまい、名古屋ELLのインディーズ・レーベルよりミニ・アルバム「Across The Infancy」を発表したが、音楽的に煮詰まってしまって1987年に解散してしまった。ルーシェルは名古屋で最も人気を博したプログレ・グループであり、東京、大阪以外の地方のグループとしては最も盛んな活動を行なったグループとして、女の子達を中心とするファンから解散が惜しまれたグループの一つであった。

ルーシフェル[LUCIFER]

◀Member▶

宮本　佳子　Yoshiko Miyamoto(Vo)'83 ex.NIGHT,ref.STARLESS,4LDK
徳久　恵美　Megumi Tokuhisa(Vo)'81~'82 ex.ANRAKUSHI,ref.MAGDALENA,TERU'S SYMPHONIA
村田　浩美　Hiromi Tamura(Vo)'82
永見　　健　Ken Nagami(B) ex.ATOMIC SYSTEM
上野まりあ　Maria Ueno(Ds) ref.SIREEN
宮崎　雄三　Yuzo Miyazaki(Kbd) ex.FERIER
梶　　弘武　Hirotake Kaji(G)'81-'82 ex.ATOMIC SYSTEM
田口　俊一　Toshikazu Taguchi(G)'82
石坂　賢一　Keiichi Ishizaka(G)'83 ex.NIGHT

ルーシフェルというバンド名を持つプログレ・バンドは2つ存在するが、これはマグダレーナやテルズ・シンフォニアのボーカリストの徳久恵美やスターレスのボーカリストの宮本佳子らが在籍していた神戸の幻のプログレッシヴ・ロック・グループ。フェリアに一時期在籍していたキーボードの宮崎雄三はエディ・ジョブソンから多大な影響を受けて、フェリアのライブを聴きに来ていた、当時高校2年生の上野まりあ(Ds)と、Hz(ヘルツ)というノヴェラの完全コピーバンドをやっていたボーカリストの徳久恵

美、後にミダスに加入するドラムスの片山とキーボードの林と一緒にアトミック・システムというUKなどのコピーをやっていたバンドのギターの梶弘武とベースの永見健と共に、1981年冬にルーシフェルを結成。ノヴェラなどの関西ハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドとは対照的なUKなどのイギリスのプログレッシヴ・ロックを意識したサウンド作りの為にリハーサルを繰り返していたが、ライブを行なわないうちにボーカルの徳久恵美とギターの梶は脱退し、代わって村田浩美(Vo)と田口俊一(G)が加入。1982年12月に神戸のヤマハで行なわれたコンテストにて初ライブを行なった。このコンテスト出場後、再びボーカルとギターが脱退し、ナイトというノヴェラのコピーバンドをやっていたボーカルの宮本佳子(ジュラ/当時高校3年生)とギターの石坂賢一が1983年春に加入して、幾つかのコンテストに出場し、8月には大阪のマイナーなライブ・ハウス"ポップ・コーン"で正式なデビューライブを行なったが、結局ルーシフェルはこの一回のライブのみで、秋にはボーカルのジュラがスターレス加入の為に脱退して解散。ドラムスの上野まりあはレディース・ポップ&プログレッシヴ・ロック・バンドのセイレーンに加入。また初代ボーカリストの徳久恵美はマグダレーナの前身グループである安楽死へ加入した。ルーシフェルはメンバーが定まらず、活動の面では数回のライブを行なった程度で終ってしまったグループであったが、UKやYESなどのブリティッシュ・プログレ風のキーボード・ワークをフィーチャーしたハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドは素晴らしく、演奏の面でも高校生の女の子とは思えない上野まりあのパワフルなドラミングや宮崎の華麗なキーボード・プレイなど聴き所の多いグループであり、人知れず埋もれてしまうには惜しいグループであった。なお、ルーシフェルは当時、スタジオでデモ・テープも制作していた。

ルドン[REDON]

◀Member▶

金井　浩　Hiroshi Kanai(G,Kbd etc) ex.EURASIA,BIBLE BLACK ref.ROSE

◀Discography▶

●CT-「Obsession」ROAD:RMA-004 '85★

自主制作カセット・テープ・レーベルであるロード・レコードを主宰するギタリストの金井浩は、彼のメイン・ソロ・プロジェクトであるロゼ以外にも、ロード・レコードから別のプロジェクト名を使ってプライベート録音による作品を発表しており、このルドンもその中の一つ。(他にフリーズなどがある。)フランスのエルドンを意識したエレクトロニクス&アヴァンギャルド・プログレッシヴ・ロック・サウンドで、石膏製のオブジェに包まれたカセット・アルバムであった。

ルナ[LUNA]

◀Member▶

飯生晃一郎　Koichiro Ioi(Kbd,G)
中村　　実　Minoru Nakamura(Ds)
野田　智秀　Tomohide Noda(Vo)
有本　弘志　Hiroshi Arimoto(B)
吉田　昭彦　Akihiko Yoshida(G)
前川　　亮　Ryo Maekawa(G)

◀Discography▶

●CT-「History」'85★

ルナは1983年冬にキーボードの飯生晃一郎を中心として結成された横浜のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。アベル、ヴィジュアル・スキャンダル、ルシフェルらと共に東京のアンダーグラウンドなシーンで活動していたハード・プログレッシヴ・ロック・グループであり、ノヴェラからの影響の強いサウンドを持つグループであった。1985年にはデモ・カセット「History」を制作したが、1985年秋に行なわれた大規模なプログレッシヴ・イベント"プログレッシヴ・サーキット"に出演後はほとんど活動を行なっておらず、自然消滅となってしまった。

レオノーラ[LEONOLA]

◀Member▶

山形のり子　Noriko Yamagata(Vo)
佐藤　由美　Yumi Sato(Kbd)
小長谷　潔　Kiyoshi Kohase(G)
三上　伸也　Shinya Mikami(B)
白井　昭己　Akimi Shirai(Ds) ref.LUCIFER

◀Discography▶

●CT-「The Thousand And One Night」'87★

レオノーラはルナ、ハーレクィーンなどと同様に、東京のアンダーグラウンド・シーンで1987年頃に活動していたアマチュア・ハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。自主制作カセット・テープ「The Thousand And One Night」を発表した。女性ボーカルをフィーチャーした彼らのサウンドはラヴェンダーや吉祥天女といったグループに近いハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドであった。なお、ドラムの白井はルナやルシフェルなどでも活動している。

レディー・ダンス[LADY DANCE]

◀Member▶

金森　　直幹　Naoki Kanamori(Vo,G) ref.SERAPHITA
池田　　　勉　Tsutomu Ikeda(B)
川村まさひろ　Masahiro Kawamura(Ds)
伊藤　　　洋　Hiroshi Ito(G)
高埜橋茉莉緒　Mario(kbd)

レディー・ダンスはセラフィータのリーダーであるギター&ボーカルの金森直幹が、セラフィータ以前に仙台で結成していた、アマチュア・レベルのハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。ヴァージン・キラーというグループで活動していた金森はノヴェラから影響を受けて1983年にレディー・ダンスを結成。ノヴェラのコピーを始め、オリジナル・ナンバーも取り上げ、東京へもライブ活動を行なっていたが、1985年に解散。リーダーの金森は東京へ上京して、佐藤普(B)、溝口明宏(Ds)と共にセラフィータを結成して現在でも活動している。

レナディン[REYNARDINE]

◀Member▶

武井誓一郎　Senichiro Takei(G,B)
渕元　秀和　Hidekazu Fuchimoto(Ds,Vo,G,B)
折野　圭祐　Yoshihiro Orino(Kbd,G,Vo)

◀Discography▶

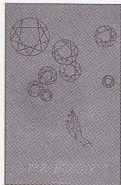
●CT-「Let's Progress」'87(Promo)

レナディンは1987年にプロモーション用のデモ・カセット「Let's Progress」を制作したマイナーな存在の大阪のグループで、キャメル、ノヴァリスといった叙情派のヨーロッパ・スタイルを持ったプログレッシヴ・ロック・サウンドを聴かせてくれるグループであったが、ライブ活動はほとんど行なわずに自然消滅してしまった。

ローザ[ROZA]

◀Member▶

小村　誠治　Seiji Komura(Vo,G)
山口　一久　Kazuhisa Yamaguchi(G)
志村　和寿　Kazuhisa Shimura(B)'83~'85
今井　一郎　Ichiro Imai(B)'86~
斉藤　剛人　Masato Saito(Ds)'83~'84
久嶋　善朗　Yoshiro Hisajima(Ds)'85~
角　和洋　Kazuhiro Sumi(Kbd)'85~

◀Discography▶

●CT-「静寂からの余想(Seijakukarano Yoso)」ROZA:R-211 '85★
●CT-「2nd」ROZA:R-212 '87★

● V.A.(LP)-「Neo Hard Rock」EXPLOSION:EXP-NH281 ’85★

● V.A.(CD)-「The End Of Century Rockers」CROWN:CRCR-6010 ’90

ローザは高校時代からのバンド仲間であったボーカルの小村誠二とギターの山口一久を中心として、1983年9月に結成された東京のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。結成当初は70年代ブリティッシュ・スタイルのハード・ロック・サウンドであったが、神楽坂エクスプロージョンを中心にライブ活動を重ねて成長を遂げた彼らは、1985年にキーボードの角が加入すると、ノヴェラから影響を受けたハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドとは一線を引く、70年代のブリティッシュ・ハード・ロック色を臭わせたハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドを確立した。また演奏面に於いてもこの時期にかなりの向上を計って、デモ・カセット「静寂からの余想」を制作。メロトロンまで導入したこの作品は、一連のハード・プログレッシヴ・・ロック・グループが制作したデモ・カセットの中で群を抜いた作品として話題を呼び、ローザも活動の場を渋谷エッグマンへと移し、地方へもツアーを行なうなど精力的な活動を展開。1987年には2ndデモ・カセット「2nd」を制作、前作よりも演奏、録音、アレンジの上で成長を見せた作品であったが、音楽的に煮詰まってしまい、一時期活動停止。1989年冬に再び活動を再開して、クラウン・レコードから発売されたオムニバス・アルバム「The End Of Century Rockers」に参加して現在も活動中である。

六神通[ROKUJINTSU]

六神通は1980年代前半に京都で活動していたアンダーグランドな存在のグループで、キャメルやジェネシスからの影響がみられる新月タイプのサウンドのグループであった。“ブローニュイ家の悲劇”など文学的なものを題材した大作指向のサウンドは好感が持てるものであったが、大した活動も行なわずに自然消滅してしまった。

ロザリア[ROSALIA]

◀Member▶

三浦奈緒美　Naomi Miura(Kbd) ref.AFTER THE RAIN

西田恵美子　Emiko Nishida(Ds) ’86~’90

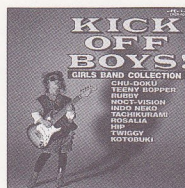
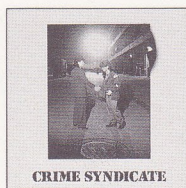
竹田　幸代　Yukiyo Takeda(G) ’86~’90

大島　知子　Tomoko Oshima(Vo) ’86~’88

坂上　伊織　Iori Sakagami(Vo) ’88~’90

宮崎　由美　Yumi Miyazaki(B) ’86~’88

藤本絵衣子　Eiko Fujimoto(B) ’88~’90

◀Discography▶

● ALBUM-「Zillion Tears」(CD)MADE IN JAPAN:MCD-2014 ’90

● V.A.(CD)-「Prospective Faces」MADE IN JAPAN:MCD-3203’89

● V.A.(CD)-「Crime Syndicate」CRIME:250E-2068 ’89

● V.A.(CD)-「Kick Off Boys」CROWN:CRCR-6004 ’90

〈NAOMI MIURA SOLO〉

● V.A.(CD)-「King’s Boards」MADE IN JAPAN:MCD-2918’90

高校時代にはドラムスをやっていた三浦奈緒美は、神戸女子大学に進学すると、ノヴェラの永川敏郎に憧れ、キーボードに転身。キース・エマーソンやユーライア・ヒープなどのブリテッシュ・ハード・ロックから影響を受けた三浦は、レインボーやノヴェラなどのコピーバンドを幾つか経た後の1986年6月に、レディース・ハード・プログレッシヴ・ロック・グループ結成を計画して、ボーカルの大島知子、ギターの竹田幸代、ベースの宮崎由美、ドラムスの西田恵美子を集めてロザリアを結成。1987年4月に神戸ヤマハの"レディース・コンテスト"に出場してグランプリを受賞し4月20日に大阪ヤンタ鹿鳴館でデビューライブを行なう。ロザリアは神戸チキン・ジョージを中心とした精力的なライブ活動の他、ロック・コンテストにも数多く出場し、6月には"ヤマハBAND EXPLOSION地区大会"でグランプリを受賞、7月には"コカコーラ・フレッシュサウンズ・コンテスト京阪神大会"グランプリ受賞、11月には"CBSソニー・ラオックス・レディース・コンテスト地区大会"優秀賞受賞といった具合に、地元のコンテスト荒しとして注目を浴びて行った。この頃のロザリアはオリジナル数曲にジェラルドやスターレスのナンバーのコピーを加えてライブを行なっており、スターレスやジェラルドといったハード・プログレッシブ・ロック色が強いサウンドであった。サウンドはハード・プログレッシヴ・ロックだが、女の子のバンドの利を生かしてルックスにも恵まれた彼女たちは、ビクター・レコードから目をつけられ、またデモ・テープをスタジオ・サウンドRで録音もしたが、あくまでプログレッシヴ・ロックを追求する三浦と、ポップス指向の大島、宮崎との音楽性の違いにより、1988年3月に大島(Vo)と宮崎(B)が脱退。一時活動停止となったが、オーディションで坂上伊織(Vo)と藤本絵衣子(B)が新メンバーとして決まり、1988年11月に神戸チキン・ジョージで新ライン・ナップの初ライブを行なう。新ライン・ナップとなったロザリアは全てオリジナル・ナンバーを演奏するグループとなり、サウンド的にも初期の頃のジェラルドやスターレスに非常に近いハード・プログレッシヴ・ロックから少しずつ三浦のオリジナリティーを発揮したサウンドが顔を見せ始めてきた。1989年3月にヴィエナ、アウターリミッツなどの主要グループが解散してしまい、新しい世代の有力なグループを捜していたメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデューサーのヌメロ・ウエノがロザリアに興味を示し、新人グループを集めたオムニバスCD「プロスペクティヴ・フェイセス」にプロビデンス、オーガスト、ホワイト・ファングらと共にロザリアを収録。以降、ロザリアはメイド・イン・ジャパン・レコードのプロデュース&マネージメントのもとに、今までの地元関西地区のみの活動から、7月の吉祥寺シルバーエレファントを始めに、同7月にフランスのアトールを迎えて川崎クラブ・チッタで行われたイベント"クライム・シンジケート"に、ソシアル・テンション、デジャブらと共に出演、TBSの"イカ天"などにも出演し、本格的なライブ活動及び東京進出を行ない、全員女の子なのにもかかわらず、卓越した演奏力を持ち、ルックスにも恵まれた彼女たちは急激に人気を高め、1990年3月にメイド・イン・ジャパン・レコードよりミニ・アルバム「ジリオン・ティアーズ」をリリースして、デジャヴ、ソシアル・テンションと並ぶ人気を獲得。このミニ・アルバムはブリティシュ&イタリアン・プログレ指向の強いキーボード&リーダーの三浦のサウンド・カラーを大きく反映し、メロトロン、オルガン、サンプリングによるオーケストレーションを導入したプログレ色が前面に押し出された作品として仕上がっており、またこの作品が世界でも初めての女の子だけによるプログレ・グループの作品であった。このアルバム発表後、全国ツアーを行なったロザリアは活動と住居を東京へ移すが、1990年5月にベースの藤本が脱退。また6月にはハード・ロック指向のギターの竹田とボーカルの坂上が音楽性の違いにより相次いで脱退してしまい、活動停止。キーボードの三浦は若手のキーボード奏者によるキーボード・トリオ・オムニバス「Kings Board」に参加し、彼女のプログレ指向をより強調しバンコやイル・バレット・ディ・ブロンゾ・タイプのナンバーを発表したが、三浦が急病で倒れてしまい、現在、ロザリアは名前だけが残ってはいるものの今後の動向は不明。またキーボードの三浦は、現在、元アウターリミッツのギターの荒牧隆、ソシアル・テンションのベースの太田雅彦と共に新グループ、アフター・ザ・レインを結成して、再び活動を始めた。プログレ・ナンバーを作曲する女性アーティストは、ページェントの永井とこの三浦くらいしか存在せず、またサウンドにポリシーを持った本格派の女性キーボード奏者としても唯一の存在なので、今後の彼女の活躍が期待されている。

ロゼ[ROSE]

◀Member▶

金井　　浩　Hiroshi Kanai(G,B,Syn) ex.EURASIA,BIBLE BLACK,REDON
石澤　博幸　Hiroyuki Ishizawa(B) ref.IO④、⑤
今井　　澄　Kiyoshi Imai(Ds) ref.MONGOL④、⑤
手塚　啓一　Keiichi Tezuka(B) from YUSEI
安本　　毅　Takeshi Yasumoto(Kbd)⑤

真野めぐみ　Megumi Mano(Kbd) ref.INTERPOSE,ex.SCHEHERAZADE⑤

◀Discography▶

- CT-「Rose」ROAD:R-001 '84★
- CT-「蜘蛛の糸(Kumono-Ito)」ROAD:R-002 '84★
- CT-「漂流教室(Hyoryu-Kyoshitsu)」ROAD:R-003 '86★
- CT-「航海(Koukai)」ROAD:R-011 '86④
- CT-「Subway」ROAD:R-020 '87⑤

ホークウィンドやヘルドン的なアヴァンギャルト・プログレシッシヴ・ロック・サウンドを持つユーラシアを経て、自らのハード・プログレシッシヴ・ロック・グループ、バイブル・ブラックを結成して活動していたギタリストの金井浩は、バイブル・ブラックが解散すると、1984年に自主制作カセット・レーベル"ROAD RECORDS"を設立して、金井自身によるプライベート録音のソロ作品を"ロゼ"の名義で発表。エロイやノヴァリスといったジャーマン叙情派プログレ・サウンドの影響を受けた作品で3本発表。また金井は"ロゼ"とは別に、"フリーズ"や"ルドン"の名義を使ってソロ作品を発表したり、ミニコミ誌"ユニコーン"を発行していたが、1986年にはモンゴルのドラムスの今井澄、後にIOに加入するベースの石澤博幸を加えてロゼ・バンドを結成して、「航海」と「Subway」の2本の作品を発表した。

ロマネスク・シンドローム[ROMANESQUE SYNDROME]

◀Member▶

石橋　清一　Seiichi Ishibashi(Vo)
羽仁　俊輔　Shunsuke Hani(G) '86,'87~
古川　竜也　Tatsuya Furukawa(G) '86
南　　一幸　Kazuyuki Minami(B) '86,'87~
佐野　泉明　Motoaki Sano(B) '86
石崎　　豊　Yutaka Ishizaki(Ds) ref.SEILANE

ロマネスク・シンドロームはノヴェラ、ソフィア、ラッシュなどのコピーバンドからスタートした東京のマイナーな存在のハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。1984年11月に日大芸術学部内のサークルで結成されて、ラママを中心に活動を行なっていたが、1987年2月に解散。ドラムスの石崎豊はセイレーンに加入して活動する傍ら、セッション・ドラマーとしてもメイド・イン・ジャパン・レコード系のレコーディングにも参加している。

ワルキューレ[VALKYRE]

◀Member▶

鈴木　　敦　Atsushi Suzuki(Vo)
浅海　　淳　Jun Asami(Kbd) ex.ARMERIA,ABEL
水口　貴之　Takayuki Mizuguchi(G) ex.ABEL
林　　淳介　Junsuke Hayashi(B)

鈴木維一郎　Iichiro Suzuki(B)
石田　正　Tadashi Ishida(Ds) ex.ABEL

ノヴェラ・タイプのハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドを純粋に聴かせるグループとして、最右翼に位置する好グループであったアベルは、1984年に解散して、アベルの浅海(Kbd)、水口(G)、石田(Ds)を中心として1985年に結成されたのが、ワルキューレである。1985年6月にデビュー・ライブを行なった後、秋には"プログレッシヴ・サーキット"等に出演するなど、一時期精力的なライブ活動を行なっていたが、約一年程で解散してしまった。サウンド的にはアベルと同様に、初期ノヴェラを彷彿させるハード・プログレッシヴ・ロックであり、この手のグループの中で楽曲は仲々、素晴らしいものを持っていた。

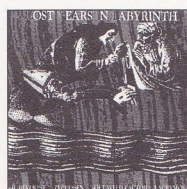
キングダム[KINGDOM]

◀Member▶
中川　隆雄　Takao Nakagawa(Vo,G) ex.SNAKE CHARMER ref.STARLESS
堀江　睦男　Mutsuo Horie(Ds) ex.SNAKE CHARMER ref.STARLESS,TERRA ROSA,WOLF
武居　秀紀　Hideki Takei(B)
井元　俊樹　Toshiki Imoto(G)

ギターの大谷令文や、ミスターシリウスのベーシストの村岡秀彦、スターレスのドラマーの堀江睦男などの人材を擁したグループとして、関西ハード・ロック・シーンでは有名な存在のスネーク・チャーマーの初代ギタリストであった中川隆雄が、1979年9月にスネーク・チャーマーを脱退して、80年3月に結成したのが、キングダムである。キングダムは中川がシェラザードや山水館、フロマージュ等から影響されて結成したグループであり、サウンドと、堀江のパワフルなドラミングは素晴らしかったが、ギターの井元が脱退して、1981年9月には自然消滅してしまった。その後、中川は、元シェラザードの大久保と共に、ノヴェラを脱退した五十嵐久勝のソロ・プロジェクトに参加したが、結局、これは形にならず、スターレス結成へと活動の駒を進めた。
シェラザードや山水館に近いハード・プログレッシヴ・ロック・サウンドのグループであった。また、スターレスで取り上げていた"章未"、"アフロディジアック"などのナンバーは、このキングダム時代のナンバーであり、スターレスのサウンドの母体を作り出したグループでもあった。1980年11月3日に大阪市立大学田中会館に於いてライブ・デビューを果した後は、大阪バハマに於いて数回ライブを行い、中川を中心とするツイン・ギター・

ツィプレッセン[ZYPRESSEN]

◀Member▶
今井　広文　Hirofumi Imai(Ds)
高橋　順二　Junji Takahashi(B,Cello)
三宅　信義　Nobuyoshi Miyake(Vln)
山上　晃司　Kouji Yamagami(P)
浅野　淳二　Atsushi Asano(G)

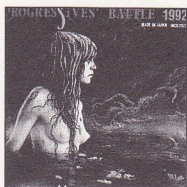
◀Discography▶

●V.A.(CD)-「Lost Years In Labyrinth」BELLE ANTIQUE:9119 '91
●V.A.(CD)-「誓い空しく(The Lost Vow)」京浜兄弟社 '91

ツィプレッセンは1986年に結成された東京の新鋭チェンバーロック・グループ。ドラムス、ギターにチェロ、ヴァイオリン、ピアノというアコースティック楽器を主体とした編成の彼らのサウンドは、ベルギーの初期ユニヴェル・ゼロやジュルヴェヌに近い。演奏力は発展途上にあるが、ラクリモーザと共に、日本では稀有の存在である。

マージュリッチ[MARGE LITCH]

◀Member▶

横山　嘉照　Yoshiteru Yokoyama(G,Kbd)
関　潔志　Kiyoshi Seki(B)'86~'89
七沢　昭夫　Akio Nanasawa(B)'90~
工藤　誠一　Seiichi Kudo(Ds)'86~'89
長倉　哲郎　Tetsuro Nagakura(Ds)'89~
中川　純子　Junko Nakagawa(Vo)'88~

◀Discography▶

●CT-「Rainbow Knight」1986 TM-004
●CT-「Star Light」1987 K.MACHINE:KM-001
●CT-「The Force of Trinity」1988 K.MACHINE:KM-002
●CT-「Mage Lich」1989 K.MACHINE:KM-003
●CT-「Prologue」1989 K.MACHINE:KM-004
●CD-「Fantasien」1991 K.MACHINE:KM-005

マージュリッチは、1986年12月に結成された東京の新鋭ハード・プログレッシヴ・ロック・グループ。結成当初は、トリオ編成のブリティッシュ・ヘビー・メタル・バンドであったが、1988年に女性ボーカルの中川純子が加入してからは、ハード・ロックとクラシックを融合したハード・プログレ・サウンドへと音楽性を変え、カセット6本とCD1枚を自主制作で発表している。ノヴェラを想わせるハード・プログレを基本としながら、正統的なクラシック唱法のボーカルの中川をフィーチャーした歌劇風のクラシカル・ロック色を強く打ち出したサウンドには好感が持てる。次代のプログレ・シーンを代表するグループの最有力株であろう。

第1期NOVELA（Live at ロフト，1979）

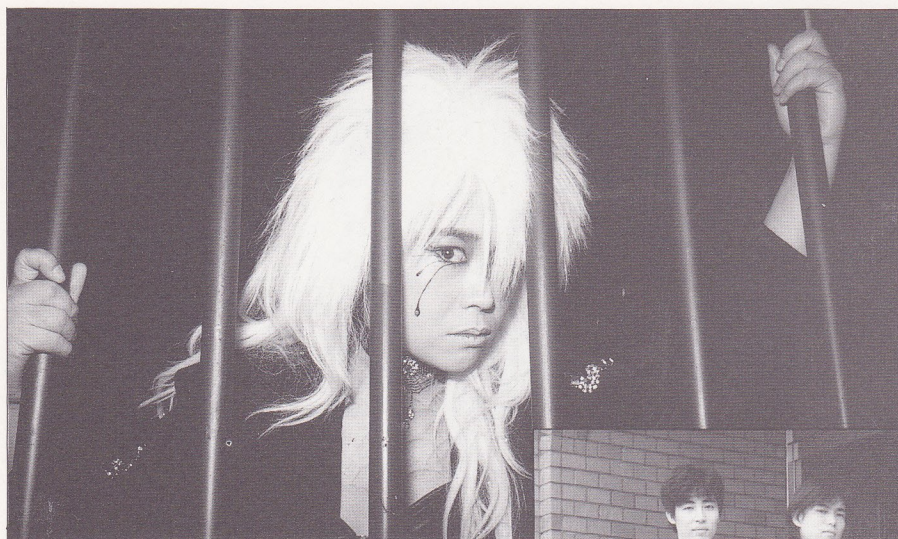
第1期NOVELA（1st アルバム「魅惑劇」のプロモーション用）

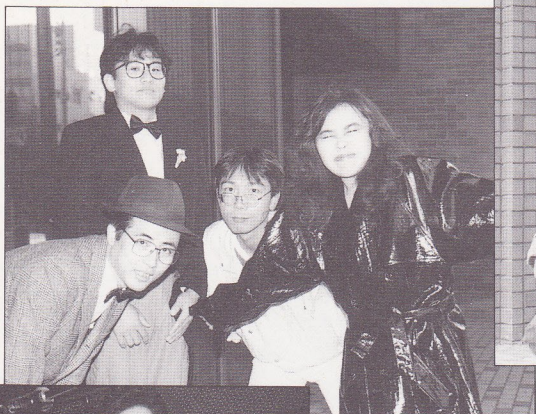
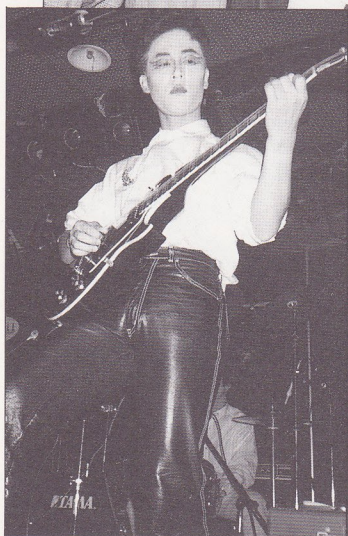
アルバム「Egg The Universe」プロモーション写真

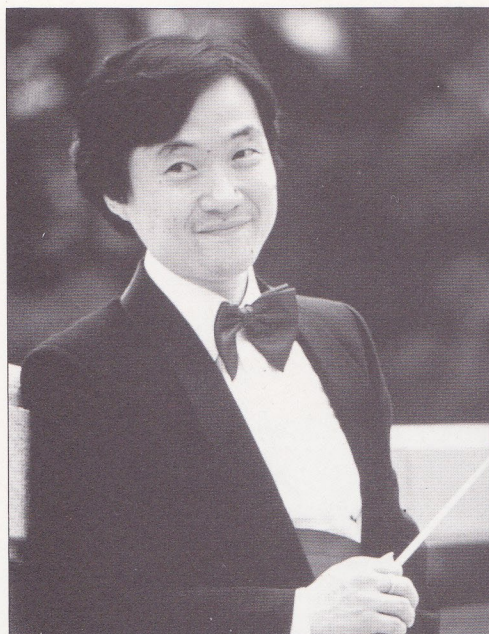
下町香織在籍時のライヴ（Muse Hall, 1987）

第1期ジェラルド

再結成されたジェラルド

藤村幸宏（Vocal & Guitar）

大木理紗〔永井博子〕
(Vocal)

1987

全盛期のライヴ（大阪キャンディーホール，1986）

中嶋一晃（1984）

▶Mr. SIRIUS

Mr.シリウスこと宮武和広

夢幻のリーダー　林　克彦

▶MUGEN

第2回「プログレッシヴズ・バトル」出演（1986）

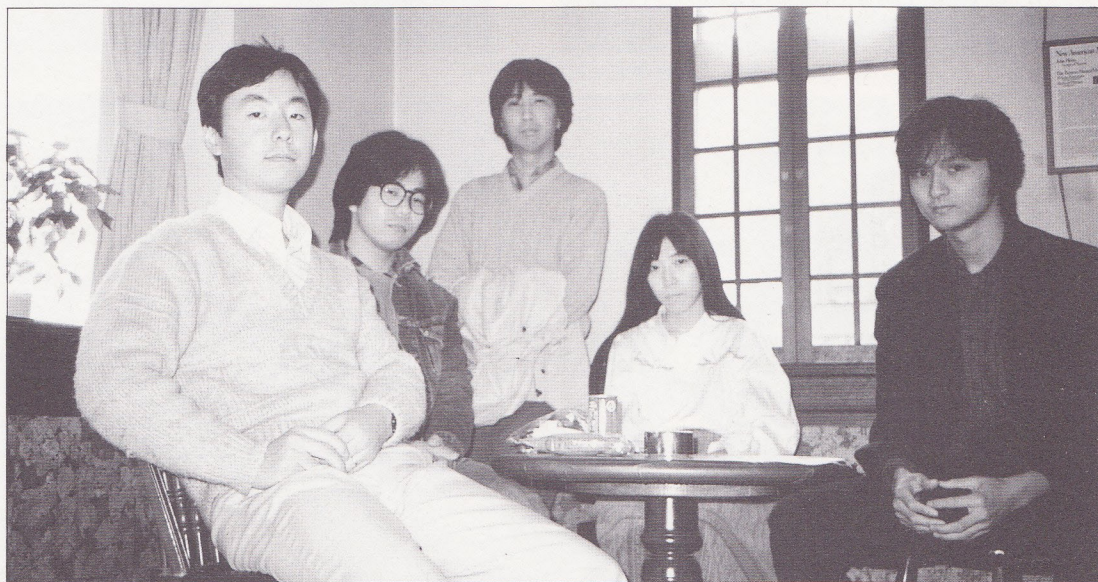
結成当初の夢幻の林
（当時はギタリスト，1978）

MAGDALENA

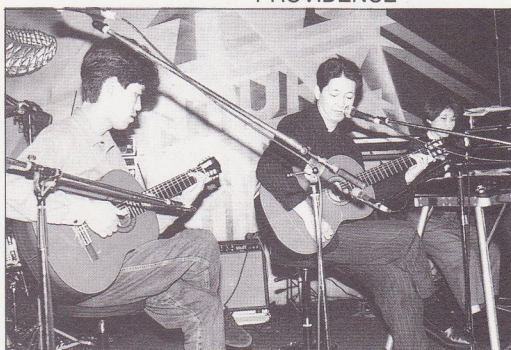
FROMAGE

誘精

孔雀音

ATARAXIA

VERMILION SANDS

PROVIDENCE

久保田陽子（PROVIDENCE）

ASTURIAS

PAZZO FANFANO DI MUSICAのメンバー

プログレッ史ヴ
番外編②

ネクサス物語＋α

たかみひろし

アイン・ソフ、いや、天地創造との出会いがすべての始まりだった——。

黄金の70年代、その初期、ぼくはロックに夢中だった。生活そのものがロックであり、朝食、昼食代はもちろん、時には夕食代さえもレコード代へと変身していた頃のこと。まだいわゆる輸入盤店も少なく、中古レコード店もほんの数える程だった。そのすべての店がぼくのホームグラウンドであり、少なくとも大学の講義を聞きに行くよりは、多く通いつめたものだ。輸入盤なら池袋、渋谷、銀座の日本楽器(ヤマハ)であり、そして値はちょっぴり張るし、数人が入ると身動きが出来なくなるような狭いスペース(失礼!)に、まだ見ぬ玉石たちが正に混沌としていた憧れの新宿レコード。ディスク・ユニオンだとかシスコ、メロディ・ハウスなどの台頭は、まだまだあとの話だし、謎の中野レコード、UKエジソンなどはまだ影も形も無い遠い遠い昔——。

3,000円あるいは、それを上回る価格の新品輸入盤は、ビンボー金欠病学生には、見るだけのものであり、事実ジャケット見学ツアー(?)を毎日のように飽きもせず行っていたのだ。今のように、これだけ読んでいればほぼプログレ・シーンの全貌がつかめてしまうマーキーのような雑誌は皆無であり、情報は輸入盤そのもののクレジットや、ろくに読めないメロディー・メイカー誌あたりがすべてだった。

実際によく買ったのは中古(セコハン)店でだったし、しかしいわゆるテスト盤、別名白ラベル盤だ。これはギョーカイ向けにレコード会社が配布する非売品なのだが、よく中古店に出没したのだ。当時ロックのホットな中古盤は1,400円前後だったが、この白ラベル盤は1,000円、時には500円で出たりするのだから、とにかくジャケットがあり、数多くの盤が聴ければよかった空腹学生にとっては、格好の的であった。しかし、これら白盤は、たいがい一枚づつしか出ないので、すぐに売れてしまう。いつ売りに出るかわからない的を射るためには毎日チェックする必要があったのだ。欲しくてたまらなかったタンジェリン・ドリームや、サード・イアー・バンド、そして帯の「極上の美!」というコピーが情報のすべてであったBJHの「ワンス・アゲイン」との出会い。コミカルなジャケットに魅かれて買ってはみたものの、ずっこけたブラス・モンキーまで、何が出るかは、出てからのお楽しみだったのだ。(それにしても特に東芝のハーヴェスト盤は頑張ったっけ)

中古店は、高田馬場のタイム、新宿のトガワとジャズがメインのオザワ、ディスク・ユニオン、銀座のハンター、御茶ノ水～神保町でのディスク・ユニオン、佐々木レコード、レコード社、トニイ、クラシック専門店のミューズ社(ここの店頭にはなぜか2列ほどロックのコーナーがあって、穴場だったのだ)等々を毎日のようにウィッシュボーン・アッシュ(巡礼の旅)していたのだった。

これらの店で見つけた盤にまつわる悲喜劇についてはまたの機会にしよう。(切りがないからね)まあとにかくこんな日々をぼくは送っていたわけだ。まったくタンチョーヅルの毎日だったのだ。レコード中心の生活を送っているうち、多少の知識もつき、そうなってくると何か自分も書きたくなってくる。何にでものめり込む方だったから、ロック遊人たちとのミニコミをすぐに作ってしまった。「ブリティッシュ・ロック・マガジン」というガリ版刷りの、確か週刊誌(B5)のさらに半分ぐらいのサイズだった。ホントのミニコミだったのだ。ここでの文が某レコード会社のディレクターの目にとまり、いきなりライナー・ノーツを依頼されたり、某社からディレクターとして入社するように誘われたり、同じく某一流音楽出版社から編集員としても誘われることとなった。ぼく自身としては、ラッキーな出発といえただろう。

キング・レコードに入社したぼくは、そこで「ブリティッシュ・ロック秘蔵盤」「ユーロピアン・ロック・シリーズ」等を企画し、さらにムーディー・ブルースやキャラヴァン、キャメルのデラム(デッカ)レーベル担当ディレクターとして2年ぐらい頑張ったのだが、他社の仕事(ライナー・ノーツ、企画等)も手掛けたく、一度円満退社する。この2年の間にローリング・ストーンズや、デッカに数多くあったブリティッシュ・ビート系のミュージ

シャンから、ZZトップに至るまで、色々担当したのだ。この間ヘヴィ・メタというよりはまだプログレ系&ブリティッシュ・ロック・マニアだった伊藤政則と出会い、ZOOを創刊、そして栄光と伝説の3号雑誌「ロッカダム」を同じく創刊するが、書き手はゴチャゴチャいたが足を使うヒト、つまり営業系のヒトが誰もいなくて、売れているのに忙しくて集金さえまともに出来ぬまま、かくのごとく見事に3号で終えてしまうハメとなったのだ。この3号誌に誘発された人々が後に同スタイルの「フールズ・メイト」や「マーキー(ムーン)」を創刊し、(ぼくらと違って)今日に至るまで頑張っているわけだ。

例のごとくプロローグが本文より長くなりソーだが、(でも、これでも超駆け足なのだ)このような時代、ぼくの雑誌の愛読者のひとりであった山本要三から長い〒と一本のテープをもらったのだ。それまでも、日本のロックに関心がないわけではなかった。グループ・サウンズは、タイガース、スパイダースからサベージまで、おまけにブロードサイド・フォーといったフォークも含めて、大体聴いていたし、フラワー・トラベリン・バンド、ミッキー・カーチスのサムライ、ヒロ・ヤナギダ、ストロベリー・パス、フライド・エッグ、フード・ブレイン、そしてスピード・グルー・アンド・シンキといったところまで一応しっかり聴いていた。レコードだってちゃんと買っていた。しかし、正直ぼくの心の中では、常に「日本のバンドも中々やるもんだ」という、欧米のバンドとの比較級としての存在でしか認めていなかったことも確かだった。単なる好奇心的な聴き方だったともいえるだろう。むしろ、いまこれらの日本最初期のロック・バンドのアルバムを聴き、ぼくは唸らされているところだ。

これらは現在ありがたいことに、ほとんどがCDとして再発入手可能な状態にあるようだから、イカ天とその周辺バンドのメンバーなどは、大先輩たちが当時どんなにまじめに欧米のバンドから種々の要素を学び取り、吸収し、自分たちのサウンドに反映させていったかを聴き取って欲しい。前述のとおり情報が極端に少なかったこの時代、レコードがすべてだった頃、回転を落としてまでサウンド・チェックし、コピーし、必死に自分達の音楽創造に燃えていたことは、涙ぐましくさえあった。

話を戻そう。プログレだけでなく、ブリティッシュ・ロック全般にドップリと身を浸していたぼくにとって、山本要三の送ってくれた天地創造の一本のテープは、充分驚きに値した。そこにはピンク・フロイドが、キャメルが、そしてキャラヴァン、ソフト・マシーンに至るまで、当時ブリティッシュ・ロック・シーンにおいてさえ異端児扱いされていたプログレ・バンドの諸要素が、思わずニヤリとさせられるほどうまく消化され(あるいは未消化のまま!?)、オリジナル作品の中に見え隠れしていたのである。ぼくはさっそく彼に返事を書き、また彼もそれに応え、何回か文通するようになった。そのうち天地創造が東京でのコンサートをすることになり、渋谷の「屋根裏」(日本のライヴ・ハウスの草分け的存在!)で初めて彼と会うこととなったのだ。後にノヴェラ、DADAなども所属した事務所LUC(リュカ)のマネージャーとなる山田次朗とも、その時初めて会った。

話してみれば、みんなマニアだった。なにもレコード巡礼は東京の、しかもぼくだけのものではなく、大阪だって同じことをやっていたのだ。しかし、大阪はLPコーナー中心にホッジぐらいしかロック(ジャズ)のレコード専門店はなかったようだが…。この時の天地創造の上京コンサートのエピソードがひとつある。屋根裏の他に新大久保のDADA(!!)という小さな(喫茶店としか思えない)店でも、どういうわけかライヴをやったのだ。記憶によると、数10人も入れば鮨詰めの状態になってしまいソーな店とはいえ、お客の姿はぼくを除くと、女の子ひとりだけで、なんとあとできくと、この子もメンバーのガールフレンドだったという、すなわちお客ゼロの幻のコンサートがあったのだ。その店がなぜDADAだったのか、そしてなぜにそんなところでライヴをやるハメになったのか、未だにぼくは彼らに聞きそびれている。

で、ぼくはなんとかこのバンドのレコードを出せないものかと、特に仲の良かったキングのディレクターに相談してみた。すると、彼は当時も今も大プロデューサー(ぼくはこの方が日本で最高の本物のプロデューサーであると今も信じている)であるT氏に紹介してくれたのだ。T氏は熱心にぼくの話をきいてくれて、検討してみるのでしばらく時間が欲しいといった。ぼくはこの時正直だめだろうと思っていた。天地創造は、実力の方は別として、まったく無名バンドだったし、まして日本のロック・バンドだったわけだから…。常に利益優先のメジャー・レコード会社にとって、天地創造は正に海の物とも山の物ともつかぬ存在であった。

一週間程たって呼び出された。T氏の渋い表情から、吉報は期待出来そうになかった。しかし、氏の口から出た言葉は意外なものだった。これも今だから書けること(バンドがカワイソーだからね)なのだが、T氏は当時のキング・レコードに初めて洋楽系の制作部を設立しようとしていたのだった。そこのロック担当ディレクターとして、ぼくが来てくれるなら、なんとか天地創造が出せるだろうということだった。ウーム、このギョーカイ、ディレクターの他社への移籍は日常茶飯事なれど、同社への出戻り(?)という例は、ほとんど聞いたことがなかったのだ。フセインじゃないけど、ぼくは天地創造の人質となるのか。迷ったが、ぼく自身制作の方の仕事には大いに引かれることがあり、結局引き受けることになった。レコードを出すように頼みに行った人間が、そのままディレクターになってしまうのだから、まあ、すべてにおいて手っ取り早いとはいえた。

しかし、営業が乗らなかった。ブリティッシュ・プログレでさえまだ売れるものと、売れないものとの格差が大きかったのに、日本のプログレ・バンドなど…というわけだ。とにかく、これ一本じゃショーガナイということで、とりあえずレーベルを創ってしまおうということになった。ここでもエピソードを幾つか挙げておこう。当時レーベル名は(持ち上げの意味もあって?)社長が考えていたのだ。しかし、ロックのレーベル名に、とんでもないのをつけられては、たまったものではないと、このレーベル名だけは、我々の部(といってもぼく個人)で付けさせてもらう約束をまず、なんとか取りつける

ことが出来た。色々細かい苦労の多い時代だったのだ。その結果、今考えると笑い話だが、最初はパンドラ・レーベルと決まったのだ。で、T氏(部長)とレーベルの手続きをと、パンフを見ていて2人でニガ笑い。そのパンフの見本に出ていたわずか数10の中に既にパンドラ・レーベルは存在したのだ。このように実際にレコードを出そうが出すまいが、登録だけは出来るのだ。余談になるが醤油の某大メーカーが、レコード・レーベルとして「トマト・レーベル」という名で登録してあったのが印象的だった。多角経営を考えていたのか、はたまた謎であった。未だそのメーカーからレコードが出たという話を聞かないが…。

時間もなかったので、これは相当ややこしい名前にしないとダメだということになり、幾つかの候補から、遂に79年ネクサス・レーベルの誕生となったわけだ。このレーベル名がどこからとられたかは、みなさんならすぐわかるでしょう? ロゴ・マークが映画のCICとソックリと気づいたのは、ノヴェラのデビュー・アルバムが出来た後だった。

さて、天地創造だが、営業から色々出た注文の中に、どうもバンド名がアルバム・タイトルみたいでよくないというのが多かった。山本要三もなれ親しんで来たバンド名とはいえ、レコードは出したいし、まあ良い名が他にあればというところまで決心した。それから何百という候補が挙げられ、その中からAIN SOPH(至高の者たち)という名に決まった。このバンド名は実は意味としては、シュープリームス(!)と同じということはあまり知られていない。

彼らはレコーディングに備えて、リハーサルに余念が無かった。にもかかわらず、レコード・デビューの日が、まったく定まらなかった。営業からは次々と企画に対する注文が来るだけで、発売の賛同は得られなかった。今ならなんのことはない、自主制作盤で出してしまえば良いのだが、まだそんなシステムが確立していなかったのだ。それとメジャーデビューは、アングラ・レーベルがはびこる今と違って、バンドの最終目標だったのだ。

このあたりからのちのストーリーは、マーキー29号の別冊「私の愛聴盤」の中に書いた「テルズ・ストーリー」に詳しいが、少し重複させておくと、そもそもノヴェラは、ネクサス・レーベル設立時には、構想に入っておらず、アイン・ソフの次は、これもぼくのお気に入りのDADAと決まっていた。しかし、何度も書いたようにキングの営業乗りが悪く、せっかくレーベルを創ったのだからせめて3バンドぐらいは、用意した方がレーベルとしてのスケール感が出るということもあったし、しかもいやな言葉だが、もうひとバンドは“売れ線”のものをという条件がつけられていた。バンドのマネージャーだった山田に相談すると、まだ若くて荒削りだが、女の子には人気抜群のバンドがひとつあるという。あまり気乗りはしなかったが、とにかくリハーサル・テープを聴かせてもらう。ドラマティックな曲は悪くないし、プログレ・ファンにもなんとか受けそう。しかし、そのド派手なルックスをフォトで見た時、ぼくは迷った。アイドル・バンドをネクサスからはデビューさせたくなかったからだ。ところがテープはともかく、この一枚の写真の方に営業は乗ってしまった。ロッキンf誌のコンテストの第一回グランプリ受賞バンドという“肩書き”も効いた。こうして、いつの間にかネクサスのファースト・デビュー・バンドになってしまったのがノヴェラだった。

セールス面で考えれば、確かに女の子に絶大の人気というのは、強力な味方であった。ロッキンf誌のバック・アップもあって、ノヴェラのデビューは、まずは大成功であった。誤解のなきようあえて書いておくが、レコーディングに立会って、初めてぼくはこのバンドの良さ(まじめさ)に気づいた。その派手なルックスとは裏腹に、彼らの音楽に対する姿勢は実にピュアーなものだったし、性格的にも意外に謙虚だった。特に常に音楽的なリーダーであった平山照継の才能はまだ全開してはいなかったが、ぼくに強力な将来性を予感させてくれた。

ノヴェラが当たると現金なもので、アイン・ソフのデビューはおろか、厳しいかなと思っていたDADAに至るまで、スンナリ決まってしまったのだ。さて、アイン・ソフのデビュー時のエピソードも既にCD再発盤「妖精の森」に書いたが、これがまた大変なレコーディングだったのだ。今だから言える、書けることが、どのバンドにもあった。メンバー間のトラブルというのは、いつの時代にも当然のごとくあったが、レコーディング中にメンバーが「もうやめる」と言い出して、出ていってしまうようなことは、そうはないだろう。なんだかアイン・ソフのレコーディングでぼくは、メンバーのなだめ役にばかり回っていた。原因は加入したばかりのキーボード奏者、服部眞誠にあった。しかし、彼が悪いわけではなく、ハッキリ言って彼の演奏レベルが高過ぎたのと、彼はあまりにハッキリ物をいう性格だったので、年上のメンバーから、おもしろくなく思われたのだ。

彼の才能は今でもレコード(CD)でハッキリ確認出来る。例えばその才能の一端は、自分の好みのタイプの曲と違い、ロコツに嫌々やった「組曲:妖精の森」(しかし、音にその影響を、まったく出していないことはさすが)よりも「ブライアン・スミス〜」でのバッキングに最も良く出ていると思う。他人のソロ時のバッキングなどというものは、大体が適当にコードを押えるだけのものだが、要三の見事なソロに負けないスリリングなバッキングは、バンドのテンションをぐっと高めているのだ。このあたりは、ジャズの基礎が相当ないと中々出来るものではない。アコースティック・ピアノ(キングの2スタにあるベーゼンドルファーの音の良さといったら、一流ジャズメンが来日して、このピアノを弾く毎に思わず肩をすくめるのだ)のソロにおける、スムースで美しいアドリブ・プレイはもちろん、仕方なしにハマリ込んで弾いた「妖精の森」におけるリック・ライト風ハモンド・オルガンも素晴らしいのひとことだ。彼の才能はその後、彼自身がリーダーとなったフュージョン・バンド「99.99(フォーナイン)」で開花することになるが、プログレ・ファンにこのサウンドは受けないだろう。服部だけ褒めてしまったが、リーダーの山本要三はいうまでもなく、当時としてはオールド&ヤング・コンビ・リズム・セクションも十分頑張ったと思う。「妖精の森」は、やはり日本のプログレ史の中ではエポックメイキングなアルバム

であると今も思う。

ノヴェラの「魅惑劇」もそうだが、いつもレコーディング時に苦労したのが、質の良いメロトロンの調達だった。ノヴェラ、アイン・ソフ、美狂乱、ジェラルド…、なんだかぼくはレコーディングの毎にそわそわしていたようだ。とにかくいいメロトロンがなかったからだ。(そもそもメロトロンに質の良さを求める方が無謀というものか?)使ったのは主に400Sというモデルだが、そこがいいとはいえピッチはメチャクチャ、テープはよれよれ、あげくの果てはテープが切れてしまうというハプニング続出。ただでさえ、テープの長さの関係上7秒強しか音が持続出来ないのに、なんとかテープはつないだものの、そこのコードにきたら4秒以上押えずにごまかせとか、大変なしろものだったのだ、メロトロンは。中を開けてみるとその原始的な構造にア然としてしまう。なにせ一音一音(ひと鍵盤ごと)にテレコの再生ヘッドがついていて、ヨースルに鍵盤状のボタンを押すと、7秒強の長さの録音済(もちろんヴァイオリン、チェロ、フルート、ヴォイス等)テープが作動し、再生ヘッドにて、再生されるという気が遠くなりそうな嬉しい仕掛けなのだ。つまり鍵盤が再生専用のテレコの押しボタン(スイッチ)なのだ。コードをおさえると3本のうなぎ状テープが、一斉にニョロニョロたるむのだが、見ているとまるでマンガだ。R・フリップがシンセを使わずメロトロンにこだわり続けたのもよくわかる。この危ないピッチの狭間から奏でられる哀愁の響きを聴いているとメロトロン党という病気集団を創らせてしまったのも、あながち理解出来ないでもない。

取り留めもないことを書いているうちに予定の枚数をオーヴァーしてしまいそうだ。ストーリーはまだまだ続くのだ。それこそ、この本一冊まるごとぐらい…。しかし今回はスペースの関係上、あとは駆け足でネクサス史をたどらなければならないようだ。

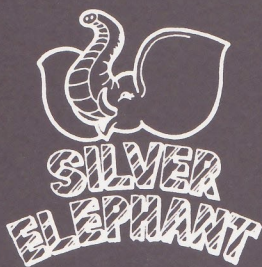
ノヴェラ、アイン・ソフ、DADA、そして美狂乱…。このバンドに関しても、既にぼくは多くのことを語ってきた。ぼくにとってアイン・ソフと並んで、最も思い入れの多いバンドだ。リーダーの須磨君とは今も、ごくたまにではあるけど、電話連絡はとっている。活動はまったくしていないし、ギターはほとんど弾いていないということで、実に惜しい気がする。ドラムの佐藤君は、あまりプログレ・ファンに知られたくないようだが、某バンドを組んで、CDも出し、現役バリバリで活躍中だ。今の彼のバンドの音楽を言葉で表すのは難しいが、本人が嫌がるのを承知であえて書くと、もう過去のジャンルとなってしまったフュージョンということになるのだろうか…。佐藤君の在籍したスタジオ盤での美狂乱を聴きたかったのは、ぼくを含めて、ファン全員の念願だったろう。いまやシルヴァー・エレファント時代のあのとてつもなく緊張感のあるサウンドは、聴いたことのあるものだけの心の宝となってしまった。この事に関しても書き出すと切りがない程エピソードがあるが、間が悪かったとしかいいようがない。それでもネクサスにアルバムを2枚残せたのは、奇跡のようなものだ。もちろんキング・クリムゾンが全てだったこのバンド、影響は彼ら自らまったく隠そうとしなかったが、未聴の人がいたら絶対聴いて欲しい。オリジナリティーと、彼らの真の才能は「パララックス」のB面に全て表現されている。

ジェネシス・ファンにはジェラルドだ。ノヴェラの永川がやりたかったことの、これも全てがこの2枚のアルバムに込められている。特に永川の作曲面での才能と、藤村幸宏というプログレ・シーンへの新たな才能が、ベストな形で結実していたのが忘れられない。また、皮肉にもこのジェラルドのファースト・アルバムにて、ゲスト参加ではあるが佐藤正治のドラムスが、初めてレコードで聴けるのだ。久々の新作が楽しみだ。

そしてケンソー。つい先日もNEW KENSOのステージを六本木のピット・インで聴いてきたばかり。清水君とは今も時々会う。(歯の方ではお世話さま!)歯科医でロック・ミュージシャンというと、最近そんなタイトルの本を見つけてビックリしたが、彼の他にもいたとは…!それにしてもケンソーはうまくなった。今や年一度のピット・インでのライヴが恒例となってしまったケンソーだが、ニュー・アルバムの発売も決まり、CD上ではまだまだ現役なのだ。その昔(10年以上前?)ぼくのところに送られてきた自主制作盤は、フルートばかりが印象的で、線の細い、軽い演奏であり、正直(ゴメン!)とてもアルバムを出したいというようなバンドではなかった。それが今日の演奏を聴くと、ひょっとしてテクではトップ・クラスなのではと思えるほどスリリングで、真の意味でプログレスしたバンドといえるだろう。

その後ネクサス・レーベルからは時代に対応して(営業的な意味も含めて)、ヘヴィ・メタル・アーミー、イースタン・オービット、アースシェイカー、アンセムといったハード&ヘヴィ・メタル系のアーティストも続々とデビューしたし、86年にはケネディ、ソフィア、夢幻、ブラック・ペイジ、そしてスターレスといった関西のプログレ・バンドが「NEW PROGRESSIVE REVOLUTION」の名の下アルバムを発表している。この頃になるとぼくは他の仕事も忙しく、エグゼクティヴ・プロデューサーの立場で、企画だけを行い、ディレクションは若いヒトたちにまかせていた。

残念ながらネクサス・レーベルの歴史は事実上このあたりで終わりとなってしまった。今もレーベル名だけは残っているが、所属バンドの性格からすると別のレーベルともいえる。むしろクライム・レーベルこそがネクサスの直系なのだろう。いずれにしても最近のぼくは、たまにライナーを書く以外はほとんどノータッチである。

今年でネクサス・レーベル設立から既に11年である。長いようでもあったし、また短いようでもある。この間他社からデビューした(プログレ系の)バンドは、先輩に当たる四人囃子、コスモス・ファクトリー、羅麗若、ムーン・ダンサーあたりだけで、ほとんどがネクサス・レーベルに集中していたことがわかる。ネクサス・レーベル史なんていうことが、あえていえるなら、それはそのままジャパニーズ・プログレッ史ヴと言い変えてもよいだろう。今は遠い昔の物語となりつつあることだけが妙に淋しい気もするが…。また機会があれば"秘蔵の"未発表エピソードを紹介することを約束して、今回はペンを置くことにしよう。

日本で唯一、そして世界での唯一のプログレッシヴ・ロックの専門のライヴ・ハウスが、吉祥寺シルバーエレファントである。吉祥寺シルバーエレファントは、JR中央線の吉祥寺北口を出て、東急デパートの裏側にあるレストラン「シルバーエレファント」の地下1階にある小さなライヴ・ハウス。開店当時からステージの天井が鏡張りになっているのが特徴で、50人余しか椅子に座ることができなく、立ち見を入れても、せいぜい150〜170人くらいで超満員となってしまう所だが、ここには数多くの歴史がある。1970年代の吉祥寺は若者、特にミュージシャン達が集まる街として栄えており、フォーク・ソングの登竜門的ライヴ・ハウス「ぐわらん堂」、民族音楽の老舗の「曼陀羅」、カルメン・マキ&OZや四人囃子等が出演していたロック喫茶「OZ」などが犇めき合っていたが、シルバーエレファントも、

近くにある八百屋の「八百銀」の銀造氏が、事業拡張の一環として、1978年4月に開店された。店名は経営者の銀造氏の名前から、"シルバーエレファント"(銀象)と名付けられて、初代ブッキング・マネージャーは、現ミュージック・チェイス(アースシェイカーや世飢魔IIが所属しているプロダクション)の取締役社長である岩井周三氏でスタート。開店当初は、プリズム、スペース・サーカス、クロスウインド、カシオペアといった新興勢力のフュージョン系のグループや、フォーク・ソング・グループも多かったが、今まで屋根裏や渋谷ジャン・ジャンといった所で、細々と活動していた美狂乱、新月、グリーン、魔法陣、オクタスコープ、観世音、アウターリミッツ、ネガスフィアといったグループ達が、一斉にプログレッシヴ・ロックに理解のあるシルバーエレファントへ出演し始めて、"プログレッシヴ・ロックの根城"と化して行った。(他に開店当初は、ZONEや四人囃子らも出演していた。)岩井氏が、ホット・スタッフへ入社の為退き、1983年には、PAエンジニアをしていた栗田正人氏が、ブッキング・マネージャーとなり、プログレのライヴには、「Progressive Live Vol〜」と銘打つ様になり、彼がプログレッシヴ・ロックが好きであった為に、プログレッシヴ・ロックの専門ライヴ・ハウスとして定着して行った。特に栗田正人氏自身が、"ユーラシア"というプログレ・グループのドラマーであった為に、凄腕のドラマーが在籍しているグループや、ジャズ・ロック・グループの育成に力を入れ、この中から、美狂乱の佐藤政治、KENSOの山本治彦、ネガスフィア&グリーンの菅野詩朗といった名ドラマーが頭角を現わして、各グループの人気を支えて行った。また、メイド・イン・ジャパン・レコードとの結び付きも強く、1985年以降は、毎年、ゴールデン・ウィークに開催されているイベント「プログレッシヴズ・バトル・ライヴ」を始めとする多くのイベントが、メイド・イン・ジャパン・レコードによって主催されている。

先にも書いたが、八百屋「八百銀」のオーナーによって経営されているシルバーエレファントのスタッフは、昼は八百屋で働き、夜はライヴ・ハウスに勤務という形態を取っており、また、ライヴは土、日曜日のみで、平日はレストランの貸しスペースとして経営されている。

シルバーエレファントが開店した1978年以降の東京のプログレ・シーンの歴史は、シルバーエレファントの歩み、そのも

のである。美狂乱、新月、グリーン、KENSO、アクア・ポリス、アウターリミッツ、観世音、ネガスフィア、デジャヴ、ソシアル・テンション、ヴァーミリオン・サンズなどの多くのグループが、エレファントで育って行った。開店から14年。この間に出演したプログレ・グループの総数は、150バンドを越える。この数は、日本のプログレ・グループの半数を越える数だ。文字通り、プログレッシヴ・ロックの由緒正しい“登竜門”である。日本のプログレッシヴ・ロックの歴史は、シルバーエレファントが生み出した、と言っても過言ではない。

ブッキング・マネージャー兼PAエンジニアの栗田さん曰く、“美狂乱、新月、グリーン、観世音、スペース・サーカス、ネガスフィア、KENSO、アフレイタス、盃勝浮あたりが、最も印象に残るグループ”とのこと。中でも、開店まもなくに出演した美狂乱のステージは忘れられない、と笑っていた。僕も、美狂乱が“最もエレファントに似合うグループ”と思っている。

ブッキング・マネージャーの栗田氏

大阪のプログレ・シーンを育ててきたのは、70年代末期〜80年代の初期は、大阪の心斎橋にある小さなライヴ・ハウス「バハマ」であり、シェラザード、フロマージュ、シリウス、ページェント、ソフィア、天地創造などのグループの駆け出しの頃は、必ず"お世話"になっていた所だが、85年〜86年頃の関西プログレ最盛期を作り上げたのは、今はなきキャンディーホールである。キャンディーホールは、大阪の梅田の東の外れにあるいかがわしいネオン街に、1983年6月に開店された。(残念だが、現在は建物ごと取り壊されてしまい、跡形もなく写真も残っていない。)もともとは、"ケネディーハウス"という名前で開店される予定であったが、開店前に経営会社が倒産してしまい、ビルのオーナーから、音楽一般に渡るプロデュース会社であるアーム・エンタープライズが経営委託を受けて、寺田和久氏がブッキング・マネージャーとして、"キャンディーホール"が開店され、当時関西ではハード・ロック、殊にノヴェラが全盛を誇っていた頃であったので、ソフィア、スターレス、ページェントなどの"バハマ"で産声を上げたグループ達が、一斉によりよい条件でライヴが出来るキャンディーホールに出演し始めた。特にソフィアのマネージメントを寺田氏が行なっていた為に、キャンディーホールのプログレッシヴ・ロック傾向は拍車をかけ、1984年12月31日にはノヴェラのプロダクションのリュカの山田氏と、マクランサの西村氏の協力をもとに、盛り上がりを見せてきた関西プログレ・グループを一同に集めたイベント「プログレッシヴ・ナイト」を企画して、このイベントが、関西プログレ全盛期の足掛かりとして大きく影響を及ぼしたのである。初代ブッキング・マネージャーであった寺田氏は、1985年中頃に、横浜ライブスクエアー・ビブレへ転勤となり、彼とエッグマンの堂前氏、バースディ・ソングの今村氏、メイド・イン・ジャパン・レコードのヌメロ・ウエノらが中心となり、1985年11月には、大阪キャンディーホール、名古屋ELL、横浜ビブレ、渋谷エッグマンの全国4ヶ所のライヴ・ハウスで、延べ20日、出演グループ総勢20グループに及ぶ、日本のプログレ史上最大のイベント「プログレッシヴ・サーキット」が企画された。ソフィア、スターレス、ページェント、ペール・アキュート・ムーン、ジェラルド、センス・オブ・ワンダー、ブラック・ペイジ、フロマージュらで犇き合っていたキャンディーホールは、プログレッシヴ・ロックの最盛期と共に波に乗っていたが、1986年の秋にメイド・イン・ジャパン・レコードが主催したイベント「メイド・イン・ジャパン・フェスティバル」(ページェント、Mr.シリウス、アウターリミッツ、アタラクシア、ベラフォンが出演)の頃になると、キャンディーホールがあったビルが地上げ屋の的となり、1986年12月31に行われたオールナイト・ライヴを最後に閉店されてしまった。このキャンディーホールの閉店は、関西のプログレ・ミュージシャンとファンへ大きな影響を与え、根城を奪われてしまったミュージシャン達は、次々と活動停止に追い込まれ、ミュージシャンと客が一体となったあの"熱い大阪"が再び帰って来る事はなかった。キャンディーホールは、関西プログレの象徴であり、キャンディーホールの閉店と共に、一つの歴史の幕が閉じられたのである。

1987年5月11日には、大阪のみなみ、心斎橋にアーム・エンタープライズが経営担当をして、ミューズ・ホールが開店されて、現在では、キャンディーホールを受け継いだ形として、プログレッシヴ・ロック・グループの根城となっている。

キャンディーホールのブッキング・マネージャーであった寺田氏は、当時を振り返って、ソフィアとページェントが最も印象に残るバンドであったと、語っている。

僕にとっての、"プログレッシヴ・ロック"
"プロデューサー"という職業と
道楽の狭間

by
NUMERO UENO

ちょっと私的な学生時代の話を先に話しておこう。僕は中野区にある都立鷺宮高校というごく平均的な普通の高校に入学した。さほど、この高校へ行きたかった訳ではなく、都立高校の郡別入試(今はこのシステムはないのだろうか?)システムでたまたまこの高校に回されただけのことだった。僕の家は練馬区の北の僻地、東武東上線の下赤塚にあるから　通学するのには遠くて、受験して受かってはみたもののあまり嬉しくなかったと記憶している。今から15年以上も前の、1974年のことだ。中学の頃に、地元じゃちょっとは騒がれたフォーク・グループのリーダー&リード・ボーカルをやっていた僕は入学早々、意気揚々と軽音楽同好会が主催していた新入生歓迎コンサートに顔を出してみたのだが、これがびっくり。当時の僕には理解できないくらい難しいロックを信じられないくらい上手くやっているのだからもう。自信満々だった僕のプライドがガラガラと音をたてて壊れていくのが、僕の額に流れる冷や汗と共に僕自身で手に取るようにわかった。その"信じられないくらい上手いバンド"の名前は、"四人囃子"といった。そう、あの"四人囃子"である。僕は偶然にも四人囃子のギターの森園勝敏とドラムスの岡井大二の通う高校に後輩として入学したのだった。僕にとって"プログレッシヴ・ロック"との出会いは、キング・クリムゾンでもなく、YESでもなく、目の前でライヴをしている四人囃子であったのだ。親にオペラを習わされていた幼い頃は考古学者になるのを夢見、そして高校に入学してからは美大へ行くのを目指していたフォーク少年の僕は、この四人囃子との出会いによってどんどんとロックの、それもプログレッシヴ・ロックの淵へと嵌って行ったのだ。今振り返ってみると、これが全ての始まりだったのだ…。

I.事件
=それはセンセーショナルな出会い

高校入学から時は移り、僕はしがないキーボード奏者として活動する傍ら、高校時代からの"プログレ病"が進行しユーロ・ロックの虜となり、当時ではなかなか手に入りにくかったイタリアやスペインなどのレコードを自分が欲しいが為に、ついには自分で輸入卸業者まがいの事を始め、友人たちと"ソシアル・コンプレックス"という小さな会社を作ってしまった。1978年のことだ。そしてこの頃の、ある日のある事件を境に僕の"音楽"への関わり方が一変してしまったのである。その事件とは、当時ソシアル・コンプレックスの仲間の一人として事務所に出入りしていた高校生のいわねあつみ君(彼は現在、ユーロ・ロックのライターをしている。)が持ってきてくれた幾つかの日本のグループのライヴ・テープが事の始まりだった。そのとき彼が持ってきたテープはたしか美狂乱とマンドレイクと、そして結成したばかりのアウター・リミッツのライヴ・テープだったと思う。ヨーロッパのグループにまったく引けを取らない楽曲とアレンジ力と演奏は、僕にとってとてもショッキングな出会いだったと同時に、僕がキーボード奏者の端くれとして自分がやりたかった事を、僕の技量を遥かに上回った次元で作り上げている彼らのサウンドに、心底"僕にはかなわない!"と脱帽し、彼らの応援をしたい、そしてプロデュースをしたいという想いが心の中で頭を持ち上げてきたのだ。この時から、僕にとっての"音楽"そして"プログレッシヴ・ロック"は自分でやることではなく、聴くことでもない、"プロデュース"をすることへと移り変わって行った。そして、いわね君からもらった幾つかのライヴ・テープの中で、演奏力は群を抜いて下手であったが、ヴァイオリンがいる事と、その楽曲(確かライヴ・テープには"シンドローム""ミキサー""ミスティームーン"が入っていた。)の素晴らしさにひかれてアウターリミッツとコンタクトを取り、彼らの世話をするようになって行った。

II.敗北と決意
=レコード店の店頭にて想う見果てぬ夢

1980年。アウターリミッツとそしてその後知り合った観世音をメジャーのレコード会社にいくら売り込んでみても、梨のつぶ手で、これに腹をたてた僕は、自分のレコード・コレクションのすべてを売っ払ったお金を元に、自主制作レーベル"メイド・イン・ジャパン・レコード"を設立して、アウターリミッツと観世音とのジョイント・アルバム「Made In Japan」を作った。クリムゾンらに日本のプログレだって負けてないゾ、っていう思いを込め、僕が高校時代にクリムゾンの1stアルバムのおじさんをパロって作った銅版画を元にして、レーベル・マークを作った。録音なんて2トラックのオープン・デッキを使って自宅でピン・ポンを何回も繰り返した、チャチなものだったけれど、僕なりに一大決心をして意気揚々と300枚プレスした。だがこれが、さっぱり売れない。まあ、今考えればこのレコード、日本のプログレのインディーズの記念すべき第一弾であるばかりではなく、当時インディーズでLPといったら、スターリンの「Trash」くらいしかまだ制作されていなかったんだから売れなくて当然なくらい時代が早すぎたのだろうが、これにはかなりショックだった。当時はプログレッシヴ・ロック=西洋の音楽という洋楽至上主義妄想が強く、(もっとも、現在でも根本的に変わってはいないが…)プログレ・ファンは日本のグループに一切興味を示さないばかりか、耳を傾けようともしない。まして、プログレを扱っているレコード店の店頭に立っている店員からして興味を示さない。こんな悲惨な状況だった。

観世音、アウターリミッツの両グループ共、あまりの状況の悪さに意気消沈してしまい、僕自身もレーベルの第2弾アルバム用にアクアポリスなどの幾つかのグループの録音をしていたが、すべてお蔵入りにしてしまった。また僕の周辺だけでなく、当時のプログレッシヴ・ロックの状況の悪さに新月、マンドレイク、グリーン、クエーサーなどの多くのグループが意気消沈してしまい、解散、もしくはサウンドの方向転換を図ってしまった。そして僕はひとつの大きな決心を抱いたのである。"レコード店の店員からして日本のプログレッシヴ・ロックに興味がないのだから、らちがあかない。それならば僕がレコード店の店頭に立って薦めればいい。ひとつひとつのグループにファンをつけるのは難しいけれど、僕自身にファンがついてくれて、僕が良いと言ったら皆んなが注目してくれるようになれば…。また、ヨーロッパの廃盤ばかりに気がいってしまっているプログレ・ファンを日本のグループへ目を向けさせるのには、プログレ・ファンが欲しがっている入手困難なヨーロッパの廃盤をどんどんと手に入れさせてしまえば注目するものが無くなり、日本のグループに目を向けてくれるだろう。"などと音楽プロデューサーとしてはかなり突飛な考えであり、

(もっとも、音楽プロデューサーなどという高尚な自意識は、無論なかった訳だが…)遠大な計画であり、若かったからこそ思いつく、悔しさに対する不確かな夢であった。

それから僕は都内のプログレ専門店への輸入盤及び、廃盤レコードの卸売り会社であったソシアル・コンプレックスを畳み、モダーン・ミュージックなどの都内のプログレ専門店の店頭に立ち、レコード・コンサートやラジオのDJ、ライター、海外への買い付けを自分なりに無我無中でやった。もちろん、全てが日本のプログレッシヴ・ロックへ興味を向かせるための作戦などと高尚な志しだけであった訳ではなく、今でも個人的にはそうだが、単にレコード店頭に立ってプログレ好きの(特にイタリアン・プログレ)お客さんと管を巻いて話しているのが何よりも好きなだけであり、また自分の気に入ってる音楽をよりひとりでも多くの人に聴かせたい、という気持ちが大きかったからである。このレコード店の店頭に立っている時の気持ちはレコード制作をしている今も変わっておらず、これが売れそうだから作る、発売する、などという前向きな商業的発想など毛頭なく、僕が好きな音楽、気に入ってる音楽だから聴かせたい、という実に単純な発想しかないのだ。「売れそうだから作ってみる」とか、「皆んなが買うから売る」という何処ぞのメジャーレコード会社のディレクター的な考えは全くない。「自分が気に入っているのだから作る」、「聴いて欲しいから売り込む」だけだ。せっかく世の中の流行とは一切無縁のプログレッシヴ・ロックを作っているのだから…過去への懐古趣味に凝り固まっていて前向きに新作を制作する人がほかにいないのだから…せっかく自分だけの資金で自分だけの考え方を持って制作できるインディーズ・レーベルをやっているのだから…これでいいのである。

話が少し横に逸れてしまったので、元に戻す事にしよう。レコード店頭に立つ毎日を過ごしていた頃、以前に自分で制作したアルバム「Made In Japan」が全く売れなくて苦い経験を味わった事など、忘れてしまった僕は、アウターリミッツのフル・アルバムを作りたい、という想いが再び募り、3年振りにアウターリミッツのメンバーと再会した。1983年の暮れのことである。しばらくつき合っていない間、彼ら自身で細々とライヴを行なってはいたものの、ほとんど活動停止状態であり、昔の曲は捨てて日本語によるポップなナンバーの新曲ばかりを演っていた。「アウターリミッツをプログレ・バンドとしてもう一度やり直そう、そしてレコードを出そう」という僕の提案に、始めは戸惑いを見せていた彼らを口説き、3年余りの間僕の心の中で燻り続けていた“日本のプログレ復興計画”が、胸の中で弾けて増大していったのである。そしてこの“日本のプログレ復興計画”を僕の心の中で不確かな夢から「やれば出来るかも知れない」という現実的な発想へと変化させた出来事があった。ちょうど、アウターリミッツのメンバーと共にアルバム用のデモ・テープ録りとサウンドの煮詰めをやっており、レコーディング・スタジオ捜しと、アルバム制作の為の資金繰りに明け暮れていたころ、僕が当時働いていた明大前の変態レコード店「モダーン・ミュージック」に一人の関西弁をしゃべるマニアがレコードを片手にやって来たのだ。彼はイタリアの廃盤を“高価買取り”してもらう為に訪れた訳だが、彼は林克彦と名乗り、 京都で“夢幻”というプログレ・バンドを演っていて、自主制作アルバムを作ったから店で扱ってくれ、と言った。(もちろん、標準語ではなく、関西弁でしゃべっていたが…。余談だが、僕はこの時までまともに関西弁をしゃべる人間に遭遇したことがなかったのである。)彼の持ち込んだ夢幻の「シンフォニア・デッラ・ルナ」は、録音は今一歩であったが、実にヨーロッパの匂いを漂わせたプログレ然とした作品であり、何よりも自分の好きなプログレ・サウンドを辱した気もなく、何のためらいもなく生き生きした演奏に好感がもてたのと同時に、単に“アウターリミッツのレコードを作りたい”という発想から、“日本のプログレ・バンドのレコードを作りたい”という発想へ広がり、またそれを、メジャーのレコード会社に頼らず、インディーズ・レーベルでやって行くことに決心がついたきっかけにもなったのである。

1984年9月。アウターリミッツの復活ライヴ(彼らは今さら、プログレ然とした昔のサウンドを演っても受け入れられないだろうと、僕に半分乗せられた形で、半信半疑でライヴに臨んだ。もし、動員が悪かったり、不評だったら、もうやめてしまおうと思いながら…)と共に、このライヴのみで販売する為のシングル「飽和溶液」を限定50枚プレスをして、4年ぶりにメイド・イン・ジャパン・レコードを復活させた。さらに、このころに知り合ったアタラクシアなどと共にゲリラ戦法で、ソノシートやカセット作品を細々と制作し始めて、アウターリミッツのフル・アルバム発売の現実的な第一歩を踏み出した。

先に挙げた夢幻の「シンフォニア・デッラ・ルナ」やマーキームーン誌のベル・アンティーク・レーベルより発売されたフロマージュの「オンディーヌ」、LLEレーベルから発売されたネガスフィアの「Castle In the Air」など、インディーズによる日本のプログレ・グループの作品が次々と、雨の降り終わった大地に草木が芽えるかの如くリリースされて、日本のプログレ・シーンが増大して行く予感を肌で感じ取っていた時に、僕と同じ予感を抱いていた元マーキームーン誌のライター中藤氏が、関東・関西を代表する6グループによるオムニバス・ソノシート「プログレッシヴ・バトル」の計画を持ちかけてきた。1985年の初めの事である。この年は僕にとって、そして日本のプログレ・シーンにとって、最もエキサイティングな年であったと思う。中藤氏との計画は次第に膨れ上がり、ソノシートの発売に合わせて、吉祥寺シルバーエレファントに於いて4日間に渡るイベントを主催するまでに発展して行った。あまりにもサウンドそのものや、体質まで異なった個性の差を持つ関東と関西のグループ同志の対抗意識は大きく、このイベントへは主催者という立場と、アウターリミッツとアタラクシアのマネージャーという立場の“東京のひと”であった僕も、ページェントの強力なライヴ・パフォーマンスや大阪を売りにしたMCへの“東京だって負けるものか”的な対抗意識は強く、アウターリミッツのヴァイオリンの川口貴に女装をさせて驚かせてやろうなどいろいろと真剣に策を講じたものだ。良くも悪くも、この関東と関西のグループ達との「あいつらには負けるものか!出し抜いてやる!」という対抗意識と、しいては関西や東京の各々のグループ達の中で、「一番になってやる!」という強い意志によって、急激にプログレ・シーンが成長

を遂げて行き、また、このバンドの対抗意識(関西と東京派、ハード・プログレとシンフォニック派、ネクサスとメイド・イン・ジャパン派といった様々なものがあった。)がファンへも反映して行き、ミュージシャン側とプロダクションやレコード会社などの制作側、そしてファン側が一体となって"熱く"なっていた時期であったと思う。そして、この「プログレッシヴス・バトル・ライヴ」が、この対抗意識の原点を生み出し、またインディーズ・プログレ・ムーヴメントの戦いの狼煙であったのだと思う。今振り返ってみれば、都内のプログレ専門店数軒の店頭告示程度の宣伝だけで、よくあれだけの動員ができたものだと感心してしまうし、このイベントに触発されて、数々のプログレのミニコミ誌が創刊された訳であり、本当に本物の熱気と、これから一気に開花するプログレ・ブームの前夜の本物の鼓動が、このイベントには満ちていた。この本を読んでいる方の中で、第1回の「プログレッシヴ・バトル・ライヴ」を体験した方は、とてつもないワクワクした気持ちと熱気を思い出してくれるだろうか?とにかく、中藤氏と共に無我無中で、僕にとって最も純粋に突っ走れた時であった。

III. 夢が現実に化ける時＝「プログレ食えない」なんて言わせない

1985年夏。いよいよ、アウターリミッツのフル・アルバムを現実的に制作する潮時が来た。当時、明大前にある「モダーン・ミュージック」という小さなレコード店の店頭に立っていた僕は、このレコード店頭での"プログレの布教活動"の潮時を感じていた。インディーズのレーベルをやるだけの資本を得なければ、またヨーロッパ至上主義妄想の偏見に凝り固まったプログレ・ファンを唸らせる事の出来る録音のクオリティーを持つアルバムが作れるほどの資金を得なくては。そして、アルバムを発売した際に、全国的な規模で販売出来るだけのルートを持たなくてはいけない、と思いを巡らせていた時にちょうど、エジソンの田島社長から、「エジソンに来ないか」という誘いがあった。僕の方もこの際だから、「エジソンに入って、2カ月でプログレの店の売上を2倍にしたら、自主制作のレコードを作らせてくれ。」と、大風呂敷を広げて、トラバーユした。全国に支店を数軒持っていたエジソンのポジションは正直言って、僕の販売計画に合っていたし、個人的にもこの時に結婚をしたので、もう少し収入が欲しかったこともある。そして何よりも、少し大雑把過ぎるが単刀直入な田島社長の性格が、「何かやらせてもらえそう」という期待を大きくさせたのである。こうして、エジソンのプログレ・フロアーを強引に新設してもらい、店頭に立つことになった僕は、2カ月間、必死でレコードを売りまくり、入社時の"大風呂敷"が現実となり、好き勝手にレコードが作れることになった。余談であるが、僕は元来、地道な努力家ではない。つまり真面目ではないのだ。定められた目標があれば、そこまでは猪突猛進出来るのだが、目標が見えない日々のコンスタントな地道な努力はまるで駄目。典型的なO型なのだ。また、秘密事が出来ない。気が短いうえに、その日のうちに結果が見えないと気にくわない性格なので、全て人に言ってしまう。無限実行など、僕には全く縁のない言葉である。要するに、男のくせにおしゃべりなのだ…。こういう性格なので、なるべく現実性のない頭の中の思いつきの段階で、「次はこれをやる」とか、「こうするつもりだ」とか、まわりの人間に言いふらすことにしている。それも、出来るだけ、確証がなくても最大限の事を口にしてみる。特にごく身近な人々には、目一杯、ホラを吹いてみる。もし実行出来なければ、単なる"嘘つき"になってしまう。特に大切に付き合いたい人達に対して"嘘つき"になりたくないから、必死で現実化しようと努力を始められる訳だ。僕を良く知っている人か、ライヴで見かけたことのある人ならお解りいただけるだろうが、僕がいつも出たがり、しゃべりたがりのプロデューサー(最近はたまに、司会進行役のへんなおじさん。と思われているらしい。)としてライヴ・ステージに立っているのも、お客さんを前にして言ってしまえば、やらなくてはいけなくなる、からなのだ。決して、目立ちたがりや、しゃべりたがりなだけの無粋な行動ではない。これにはこうした深〜い考察が存在していたのである…。こんな私的なことばかりをうだうだと言ってみても、僕を知らない人には全く意味のない(知っていても意味のない気もするが。)事なので話を元に戻すと…夏に、都内練馬区の豊島園のすぐ脇にあるユーフォニック・スタジオに於いて、アウターリミッツのアルバム「ミスティー・ムーン」のレコーディングを開始した。今までのプログレの自主制作アルバムからは考えもつかない24チャンネルの本格的なレコーディングであったが、何せ売れる確証など何処にもない。したがって、予算だって40万円ほどしかなかったので、各メンバーとお金を出し合って、トラック・ダウンも含めて4日間の超特急並みのレコーディングであった。(ちなみに現在ではアルバム1枚、15〜20日ほど)田島社長には先程書いた持ち前の"大風呂敷"を広げて「売れる」と豪語してはみたものの、(僕が現在までいろいろなレコードを作ったり、イベントを仕掛けたりしたのも、全てはこの"大風呂敷"に対する、"嘘はつきたくない"パワーなのだ。)売れる訳がないだろう、としか考えられなかったのだ。だから、アウターリミッツとの契約書にも確か、「もし、万が一売り切れたら、ギャラを払うetc」と書いていたはずである。当時のエジソンは全国に4〜5軒店舗があるだけの単なる輸入レコード・チェーン店にしか過ぎなかったので、自分で全国の輸入レコード店へ電話して、レコードを置いてもらう話から始まって、レコード店の店頭の傍らで、自ら見よう見真似で版下を作り、レコード会社の知り合いにプレスを注文して発売に至った。ところが発売してみると、始めは700枚プレスであったはずのこのアルバム、オーダーが殺到してしまい、発売時点で初回プレス枚数は1500枚にはね上がり、1カ月も経たないうちに完売してしまい、すぐに追加プレスとなってしまった。僕自身も必死になってプロモーションをしてみたり、自分の立つエジソン・レコード店頭では1カ月間、アウターリミッツのみをかけまくった結果、新宿エジソンのみで800枚を売りさばいてしまった。フールズ・メイト誌のインディーズ・チャートでウイラードを押さえて第1位にもなった。この1カ月間にして、僕を取り巻く状況や、今まで5年余りの間、"夢"でしかなかった事が、"夢の何倍"にも膨れ上がって、一瞬のうちに現実へ変わってしまった。僕にとってまさに"夢"が"現実"へと化けてしまったのであ

る。意気揚々とした僕は「プログレだけの本格的なレーベルにしよう。そして、プログレは食えない、と言っている奴らを見返して、プログレだけで立派な商売にしてやろう。」という新たな夢を抱き始めた。そして、アウターリミッツに続く、第2のグループとして、ページェントにアルバム・リリースの話を持ちかけた。5月に主催した「プログレッシヴス・バトル・ライヴ」の時に、敵味方(つまり、関東と関西)同士として、初めて顔を合わせたページェントに関しては、あんなに大阪弁をしゃべる人種を目の当たりにしたことがなかった僕にとって(僕は代々、練馬に生まれ育った生粋の江戸っ子です。)まずカルチャー・ショックがあり、どう話していいかも解らなかった。プログレッシヴ・ロックを演っているはずなのに、あの大阪芸人まる出しにしたおちゃらけたMCと、中嶋一晃と名乗る白塗りのけったいなおっちゃんが思いっきり下手くそに歌う「セルロイドの空」(何故か、この曲の前ふりになると、今までのおちゃらけたMCではなくなり、実に真剣に語る。正に“なにわ人情物”の世界だ。)には、始めはものすごく抵抗があって、正直言って“良い”とは思えなかったし、ましてレコードを出そうなどと、にも思わなかった。今までキング・クリムゾンやYES、イタリアン・プログレが好きで、プログレッシヴ・ロックとはかくあるべきだ、という観念を持っていた僕にとって大阪芸人まる出しのステージ・パフォーマンスやフォーク・ギターのコードの“C”から始まって“C”で終わる曲など、ページェントの存在を肯定してしまう訳にはいかないのである。頭の中で、僕のプログレに対する概念をフィルターに通して考えれば、こうであったが、そんな概念なんてちっぽけなくらいに彼らのライヴは“良い”のだ。そして永井博子の歌は“素晴らしかった”。そして、いつの間にか彼らのレコードを出したい、と心底夢見ている自分に気がつき始めたので、思い切って誘ってみた訳だ。ページェントの当時のリーダーであった中嶋一晃にとっては「何処の馬の骨か知れぬ東京の人間が声をかけてきた。」という疑い深い目で僕を見ていたらしいが、(彼はページェントのCD「螺細幻想」のライナー・ノーツでそう書いている。)ページェント側にとっては、マーキー誌からレコードの誘いはあったが、キング・レコードのネクサス・レーベルの“ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”にページェントが選ばれなかった事で意気消沈していた矢先であり、また当時のインディーズとしては破格のレコーディング費用を僕が提示し、また内容的な事やレコーディング・スタジオなどはバンドの好きにしていいという僕の条件が気に入ったのであろう。(もっとも僕自身は最後の最後まで、「セルロイドの空」をアルバムに入れるかどうか、思い悩んではいたが…)アウターリミッツに対しては、練習や作曲の段階からかなり口を出してサウンド・プロデューサーとして親密に付き合っていたが、逆にページェントに対しては、サウンド的にはほとんど口を挟まずに野放しにしておいた。そしてページェントのパフォーマンスや大正ロマンティズムと学芸会を足したようなイメージ作り、なにわ芸人を装い、大阪を売りにしている事などを考えている作戦参謀の中嶋一晃のアイディアを、より増大させる役目に徹した。サウンドにほとんど口を出さなかったのは、何も彼らのサウンドに興味がなかった訳ではなく、アウターリミッツ、ページェント共に、互いに持っていない個性をより増長させて180度違うグループへと、いろいろな意味で成長させたかったから、ページェントに対してはサウンド・プロデュースをする事よりも、キャラクターの増長役を買って出た訳だ。実際に、彼らが(というよりは、ほとんど中島一晃の思いつき)「こうやりたい、ああやりたい」と思いついた事を、「何でも好きにやっていいよ。」と、僕が火に油を注いだものだから、どんどんと手のつけられないグループとなってしまった。中島一晃は、いなたい体操着に赤い運動帽でステージに立つわ、バットを持ち込み野球はするわ、宮武君はガブリエルのパロディーをするわ、傘屋自前の傘パフォーマンスをするわ、セルロイドのめがねを配ったり、と好き放題しまくって、キング・レコードのネクサスに選ばれなかったことに対する異様なパワーのもとに、あっという間に、ライヴの動員No.1グループへと押し上がってしまった。ネクサス・レーベルの“ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズ”が商業的に今一歩パッとしない時に、インディーズ・ブームの波にも乗り、半官びいきのプログレのお客さん達や、ミニコミ誌の応援を得て、アウターリミッツとページェントは、僕の夢の中で描いた計画よりも、遥かに上回って、日に日に怪物のような人気と成長を遂げて行った。正直言って、僕自身も毎日が忙しく、楽しく、無我夢中で、そして笑いが止まらなかったのである。そして、この両グループ共に絶頂期を迎えた1986年10月に、新橋ヤクルト・ホールに於いてライヴ・ハウスの渋谷エッグ・マンの主催のもとに「メイド・イン・ジャパン・フェスティバル」を開催、前売りチケットは3時間ほどで全て完売し、当日には500人以上の動員が集まった。僕は現在まで、あの手、この手を使って、いろいろなイベントを企画しているが、今振り返ってみても、

どうしてこれだけの動員が集まったのか不思議だ。どうしても、これを越える企画が出来ないのである。インディーズの、しかもプログレのグループ、まして恒例のように常に対バンしていたアウターリミッツとページェントであったのに、である。今から思えば、やはりこれも“時の波”に乗った者の強さであったのだろう。そして、このイベントを頂点として、「夢が現実に化けてしまった」僕にとって、少しずつ夢から醒めさせられる事が起きてくるのである。

Ⅳ.崩壊の足音 ="夢よ、醒めないで!"

相変わらず、絶大なる人気を誇っていたアウターリミッツとページェントであったが、その実、グループ内部では崩壊への静かなる足音が、そっと忍びよって来た。1987年に入ってすぐに、ページェントの中島一晃が僕に、「最近、永井博子との折り合いが上手くつかない。永井さんはページェントの学芸会的ライヴ・パフォーマンスと演奏力に不満をもっている。」と、しばしば相談して来るようになった。また、一方のアウターリミッツは、表看板であるヴァイオリンの川口君が、本業の日本フィルハーモニーの方が忙しくて、スケジュールが思うように取れなくなり、リハーサルではいつも彼抜き、本番のライヴでも、開演直前に駆けつけて、ぶっつけのライヴをせざるを得なくなってしまい、アルバム「ペール・ブルーの情景」のレコーディングでは、たった3時間のみでヴァイオリンのレコーディングを行わなくてはいけない状況へと陥ってしまった。また、僕のメイド・イン・ジャパン・レコード以外の周辺のアーティスト達を見渡せば、キングのネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズの旗頭であったスターレス、ソフィアが共にレコード発売をして間もなくすると、活動を停止し、このことがシリーズの商業的な失敗を招き、またディレクターのたかみ氏が辞めたり、プロダクション側の力量不足などが重なり、ネオ・プログレッシヴ・ロック・シリーズに参加したグループの大半が、次作のアルバムの発表も決まらずに行き詰まってしまった。そして、キング・レコードのネクサス・レーベルそのものが、日本のプログレ・グループのリリースを中止して、ノヴェラやジェラルド、テルズ・シフォニアなどのグループ達も作品の発表の場を失い、活動停止や解散という状況であった。また、LLEレーベルやモノリス・レーベルなどのプログレのインディーズ・レーベルも所属グループの相次ぐ解散により、閉鎖された。今まで、ハード・プログレ系のアーティストはキングがやっているから、と高みの見物を決め込み、キング・レコードから相手にしてもらえそうもないマニアックなサウンドのシンフォニック・ロック系のアーティストのアルバムさえ制作してればいい、という考えのもとに、“対抗キング・レコード”の旗を掲げて、アンダーグラウンドな活動を展開していた僕にとって、周囲の状況の一変した行き詰まりは“計算外”の事であった。「僕のレーベル以外のアーティストを放っておいたら日本のプログレ・シーンは駄目になってしまう」という思いと、「ただでさえ少ない日本のプログレ・ファンが、キング・レコード系のハード・プログレとか、メイド・イン・ジャパン系のシンフォニック・ロックとか、あるいはジャズ・ロックとかに分かれてしまっているのを何とか一つに出来ないものか、全てのファンを納得させる事の出来るサウンドがやれないものか。」という願いと、そして何よりも、自分なりには何とかアウターリミッツやページェントの内部崩壊を食い止めようとしてみたが、僕の力ではどうにもならない流れを感じて、僕自身、「アウターリミッツやページェント以外に、夢中になってプロデュース出来るグループを作り出したい」という夢とが頭の中を駆け巡っていた頃、僕のところのスタッフである橋川を通じて、「ノヴェラをやめた西田君がライヴをやりたがっているから話を聞いて欲しい」との知らせを耳にした。確か、1987年の3月頃だったと思う。西田君にコンタクトを取ってみたら、「ラッシュのコピーバンドのライヴをチャチャ丸(藤村幸宏のこと。)と一緒にしたい」彼の意向は、ざっとこんなものであった。彼がライヴをしたいと思っている事は、僕にとって“飛んで火に入る夏の虫”であった。すぐに、「日本のプログレ・シーンの頂点に立てるようなスーパーグループを結成してやろう。」と思い立ち、西田君には、「どうせやるんだったら、ノヴェラ以上のスーパーグループを結成しよう!」と、半ば強引に押し切り、次にジェラルドをやめたばかりの永川君とチャチャ丸に連絡を取り、彼らを口説き始めた。

エジソンとクラウン・レコードの共同企画でクラウン・レコード内にVICEレーベルが誕生する事になり、VICEレーベルからアウターリミッツやページェントをリリースする計画に追われる毎日(この頃は僕1人で、アウターリミッツ、ページェント、夢幻、ミスターシリウス、マグダレーナ、ヴァーミリオン・サンズ、アタラクシア、ベラフォン、デジャヴ etc、を全てマネージメント&プロデュースをしており、またエジソン店頭にも立って店員をしたり、洋楽の再発シリーズもやっており、多忙な日々を極めていた。)であった一方で、スーパーグループ結成の夢を求めて、毎晩のように新宿の安居酒屋へ行っては、西田君、チャチャ丸、永川君達を口説き、他のメンバーの検討や音楽性の話を重ねた。元来、中嶋一晃と同じくアルコールが全く苦手の僕は、気が付くと夜空が白みかける、といった生活を1カ月ほど送っていた。(そしてある日、家へ帰ってみると、奥さんの「実家に帰らせてもらいます。」という置き手紙があった。音楽馬鹿でしかない僕に愛想を尽かし、その結果、離婚してしまったのだ。そういえば、1カ月間奥さんの存在など全く蚊帳の外で忘れ去っていたようだ。それほど夢中で、また忙しかったのだが…。)結局、ペール・アキュート・ムーンのベースであった井上靖やノヴェラの笹井君に東京へ来いと声をかけたが、上京する気はないとの事で、ベースの適当な候補が見つからずに、アウターリミッツのギターの荒牧君に白羽の矢を立てた。また、永川君はアース・シェイカーへ加入してしまい、契約上参加出来ないという事で、アウターリミッツの塚本君に声をかけ、そしてページェントの中嶋一晃にも参加を呼びかけ、やっとバンドの形が整い グループ名も、ウルトラヴォックスの曲のタイトルから“VIENNA”と名付けた。僕にとっては付き合いの浅い、“別の世界”で活躍していたチャチャ丸や、西田君(僕は彼を強引に上京させた。)らには、「必ず、メジャーレコード会社で、成功出来るグループになるはずだから、1年間、僕に騙されてくれ。」と、大見栄をきり、実際に彼らも黙って“騙されて”く

れた。チャチャ丸にとっては、スタジオやバック・ミュージシャンの仕事を全てやめなくてはいけなかったし、西田君は大阪から東京へと移り住まなければならなかった。塚本君や荒牧君にとっても、アウターリミッツとの2足のわらじを履かなければならない、といったように各メンバー共、よく頑張ってくれたと感謝している。実際にグループ名を決めて、リハーサルに入ってみたものの、元来ハード・ロックの中で育ってきたチャチャ丸や西田君と、クラシック畑の塚本君とのサウンド指向の折り合いが上手くつかず、しばらくの間てこずった。あまりにも前に進まない為に、夏にサウンドの方向性と作曲の為の合宿を行なったり、(アウターリミッツも、結成当初はよく合宿をしていた。)結局、本来ギタリストであり仕方なくベースを担当していた荒牧から、元フォー、アフレイタスの永井君へチェンジした時点(レコーディングを1週間後に控えていた。)で、やっとバンドとしてのスタート・ラインに立っていた。余談だが、永井君がヴィエナに加入したいきさつは、永井君のアフレイタスでのライヴ・テープを聴いた西田君が、強引に永井君を誘った訳であるが、当時の永井君はジャズ・ロックにどっぷりで、ノヴェラやジェラルドなどのハード・プログレの事など、一切知らなく、また髭ぼうぼうという風体であった。永井君の腕に惚れ込んだ僕たちは、永井君がヴィエナに入る条件として、「5千円あげるから、髭を剃って来い。」という注文を出した。

こうして、1週間くらい髭を剃ることを真剣に悩んだ永井君は、レコーディングの1週間前に加入して、右も左も解らないままにレコーディングを迎えたのであった。

1stアルバムのレコーディングを通じて、やっと、グループとしての音楽の方向性や、バンドとしての絆が固まったヴィエナは、ネクサス・レーベルに代わるプログレの新しいレーベルとして、僕とキング・レコードのディレクターの新井さんとで新設したクライム・レーベルの第1弾のグループとして、僕の大きな夢と周囲の大きな期待を担って、デビューへと漕ぎ着けた。

一方、ヴィエナの結成と同時期に、ノヴェラの平山君から1本のデモ・テープが届けられた。それはギター、ベース、ボーカル以外は打ち込みで、笹井君のお世辞にも、うまいとは言えないボーカルが耳につく、"第4期ノヴェラ"のデモ・テープであった。(夜想曲の原曲などが入っていた。)正直言ってこのデモ・テープには、ほとんど興味がなかった。それからしばらくして、マグダレーナの大阪センサス・ホールのライヴの際に(確か7月くらい?)平山君と話す機会が出来て、平山君は僕に、ノヴェラとテルズ・シンフォニアの両方共、活動を計画している、と話してくれたが、僕ははっきりと、「ノヴェラには全く興味がない。テルズ・シンフォニアだったらやりたい。」と返事をした。平山君の周囲の人は必ず、"ノヴェラ"という名前に商業的な価値を見い出して"商売"をしたがっていたが(事実、ノヴェラはそれだけ、偉大なグループであったのだが…)僕としては、プログレッシヴ・ロックを捨て、またニューウェーヴ・グループとしても煮詰まってしまったノヴェラよりも、テルズ・シンフォニアの方が限りない可能性と将来性がある、と判断したのである。平山君も、僕がいとも簡単に「ノヴェラには全く興味がない。」と言ってのけたのに気を良くしたらしく、長年籍を置いていたプロダクションのリュカから、僕の"ヴィエナ・ガーデン"へと、いつの間にか移ってきて、ヴィエナと共にテルズ・シンフォニアは僕の夢を育ててくれる大きな存在として活躍して行く事になった。

こうして、ヴィエナ、テルズ・シンフォニア、という大きな新戦力を手に入れた僕は、彼らのアルバムをリリースする為と、閉鎖されてしまったネクサス・レーベルに代わるプログレ・レーベルをメジャー・レコード会社内に設立するために、キング・レコードの新井さんと、クライム・レーベルの構想を練る傍ら、クラウン・レコード内に設立されたVICEレーベルから、アウターリミッツ、ページェント、マグダレーナ(マグダレーナは当初、メイド・イン・ジャパン・レコードの方からリリース予定で、レコーディングを開始したが、エジソンの社長である田島氏の"鶴の一声"で急拠、メジャー・リリースとなってしまった。)をリリースし

て、クラウン・レコードの営業所へのプロモーション等に大わらわであった。話は脱線してしまうが、クラウン・レコードというレコード会社は、北島三郎や増位山(相撲取りの力士だよー。)を目玉にしている演歌の由緒正しい大会社で、昔にかぐや姫やイルカ、ムーン・ライダースなどを一時期発売していた以外は、若者向けの音楽とは一切無縁のレコード会社であったので、社内を見渡しても、20代の人はどこにも見当たらない。ロックなど、毛頭解るはずもないおじさん相手に、営業会議でアウターリミッツの12"シングル「マリオネッツ・ラメント」の営業方法の説明をした時など、まず、"プログレッシヴ・ロックとは何ぞや"から始まって、営業マン(その実体は単なるボケおじさん)の質問でも、"ジャズのコーナーへレコードを置かせればいいのか?"とか、B面の「スパニッシュ・ラビリス」を聴いて、"B面はカラオケ・ヴァージョンですか"なんてのがいつもの事。(まあ、他のメジャー・レコード会社でも大差はないけど…)何せ、今どき、東京営業所が鶯谷にあるレコード会社なんだから、これが。いかにも演歌ひと筋!……。ただでさえ余談が多いのに、こんな事ばかり書いていても、話が進まないので、元に戻すと、ヴィエナ、テルズ・シンフォニアのプロデュース及び、クライム・レーベルの設立準備、クラウン・レコードVICEレーベルでの制作、ミスターシリウスやベラフォン、ヴァーミリオン・サンズ等のメイド・イン・ジャパン・レコードの自主制作、そしてクェラ・ヴェッキア・ロカンダ等のイタリアRCA再発の真最中であったエジソン・ユーロピアン・シリーズの進行を、新宿エジソンの店頭に立ちながらこなしていた僕は、多忙を極めていた。今振り返ってみても、どうしてこれだけの事を出来たのだろうと、自分自身でも感心してしまう。僕にとって、最も充実した時期であり、第1回「プログレッシヴズ・バトル・ライヴ」の頃と共に、無我夢中になれた時であった。ただ、始めは、プログレ・マニアが高じて、自分の好きなサウンドであるアウターリミッツの面倒を見ていただけであったのが、気がつくと、日本で唯一、日本のプログレ・シーンの明日を支えようとしているプロデューサーという存在になってしまった。そして、僕はこの立場から、もう逃げられない様になってしまった。後戻りが出来ない見果てぬ夢を常に見続けるしかないのだ。

V.葛藤の泥沼 ="メッキの削れる音が響く"

1989年1月15日。　時代は正に、"昭和"から"平成"へと移り変わり、ドラムスの西田竜一の突然の脱退から端を発して、僕の大きな夢を乗せたヴィエナか解散してしまった。西田君の脱退理由は、"プログレより売れる音楽"がしたいという事と、ヴィエナの他の3人のメンバーが、2ndアルバムの時には、サウンド・クリエイターとして一丸となり、より音楽的な絆を深めて行ったのに対して、西田君はひとり、"プレイヤー"に徹していたので、グループの中で孤独であったのだろう。何とかヴィエナを維持していこうと思い、西田君を説得したり、あれこれと考えを必死に巡らせるチャチャ丸(藤村幸宏のこと)の姿を見ていたら、始めは僕が作為的に結成を企てたバンドであったヴィエナが、僕の思いの外、チャチャ丸、永井君、塚本君の3人の結束が固く、バンドとして1人歩きを始めていたのを強く感じたと同時に、あれだけ高度なテクニックを要するサウンドを作り上げ過ぎた為に、あの4人以外に代われない音楽であり過ぎた。西田君に代わる優れたドラマーは見つからず、グループを同様に維持して行くことは難しいと、誰からもなく解散が決定してしまった訳だ。そして、プログレ・シーンの救世主となるべく、またプログレ・ファン以外のロック・ファンにもアピール出来るように、大宣伝と僕の夢を賭けて、僕が自信をもって売り込んだヴィエナであったが、プログレ・サウンドを他のロック・ファンに真っ向から売り込む限界を思い知らされてしまった。(もちろん、プログレ・シーンにとっては、大きな刺激となったのだが…。)解散ライヴの最後のナンバー「白夜」が流れる中、いろいろな想いが走馬灯の様に駆け巡り、思わず、涙が込み上げて来てしまった。

こうして、日本のプログレ・シーンにとって、70年代末期から80年代にかけて、長年に渡って活躍し続けたミュージシャン達の世代の、最後の象徴であったヴィエナの解散は、一つの大きな時代の転換期となり、(キング・レコードも、ヴィエナの解散によって、やる気を失くした。)僕にとっても、大きな、大きな転換期となったのである。ヴィエナを始めとして、アウター・リミッツ、夢幻などの解散、またページェントは最盛期を過ぎて、一つの過渡期の中で方向が定まらず、最後の頼みの綱のテルズ・シンフォニアまでが、キーボードの仙波君の脱退によって、低迷してしまった。プロデューサーという稼業は悲しいもので、ひとりで音楽が出来ない。今までだって、日本のプログレの歴史は、あくまで1つ1つのグループの存在と活動が作ってきた訳で、僕は、それを記録に残す作業を手伝って来ただけである。ミュージシャンという相手が存在して始めて、僕の存在価値があるのだ。僕にとって、特にアウター・リミッツや、ヴィエナは、真剣にサウンド・プロデューサーとして関わって来たグループであり、彼らと僕の"真剣に無我夢中になれる時間"を同じ価値観を持って共有出来る事で、僕はプロデューサーという稼業を、常に少年のような"熱い想い"を持ち続けて来られたのだが、僕の夢は全て失われてしまい、プロデューサーとしての僕の前には、ただ暗黒の闇間が無限に存在するだけであった。(少しキザか?)日本のプログレ・グループをプロデュースし続けなければならない使命感のメビウスの輪から逃げられない僕と、僕個人にとって、アウターリミッツやヴィエナに代わって夢中になれる音楽の相手がいない事との葛藤が始まった。

しばらくすると、ボーカル&ベースの長妻君の脱退によって、活動停止中であったデジャヴに、アウターリミッツのボーカルの上野知己(実は、僕の弟です。)が加入した。川口君(Vln)の脱退によって、低迷して活動停止状態にあったアウターリミッツに不満を抱いていた矢先、"再現イタリアン・プログレ・ライヴ"などを通じて、デジャヴのリーダーの桜庭君と交流を求めての加入であった。桜庭統が作るUKとロシア・クラシックから影響されたサウンドと、彼のキーボード・プレイは、若い世代のグループの中で、卓越した存在で、僕個人としても、アウターリミッツ、ヴィエナに続いて期待をしていたグループであったが、何せ今まではボーカルが弱体すぎて、グループとしての統合力も今一歩であったのだが、上野知

己の加入は、これらの問題を解消し、ヴィエナなき後の日本のプログレ・シーンを背負って立たなければならない若手世代の牽引車的存在になり得ると確信して、ヴィエナの解散によって意気消沈していた僕の心に、再びプロデューサーとしての、"熱意の炎"を灯してくれた。新生デジャヴの誕生と共に、日本のプログレ・シーンも若い世代によって新たな歴史のページを作って行かなくてはならない事を痛感していた僕は、僕の所に既に所属していた新生デジャヴ、ソシアル・テンションの2グループ以外にも、若手世代を形成する為の有力なグループを捜して、僕の所に山積みされていたデモ・テープ(年間で50〜100本くらいのデモ・テープが、いろいろな形で僕の所へ届けられるので、あまりに数が多く、半年に1回くらい、まとめて聴く事にしている。)の中から、"ルナ"という曲が印象的であったホワイト・ファングと、全員女の子にもかかわらず、正統派関西プログレ・サウンドを聴かせ、またオルガン・プレイが光っていたロザリアに声を掛ける事にした。(余談だが、ロザリアのライヴ・テープは、1年以上前に、スタッフの男の子からもらっていたのだが、その時はまさか、全員女の子だとは思わず、また、そのライヴ・テープがジェラルドのコピーであった為に、ずーっと忘れていた。)今までのヴィエナ・ガーデンの所属のプログレ・グループとは、"体質"や"肌"の違ったこの2グループを加えて、新生デジャヴを中心とする、ソシアル・テンション、ホワイト・ファング、ロザリアの4グループが揃い、若い世代による新体制が整い、彼らの世代を強くアピールする為に、フランスの大御所グループ、アトールを迎えて、1989年7月23日に川崎クラブ・チッタに於いて、イベント「クライム・シンジケート」を開催した。アトールのリハーサル時間が押してしまい、他のグループは、全てリハーサルなしの本番ぶっつけ、しかもオール・ナイト・ライヴという悪条件の中、各グループ共に、演奏の方は今一歩であったが、800人余りを集めたイベントは、一応成功に終わり、若手世代が台頭する第一歩を踏み出した。デジャヴは、ヴィエナに代わるクライム・レーベルの"いち押し"アーティストに決定して、アルバムの曲目の検討やレコーディング・スケジュール取りなどが進み、僕のプロデューサーとしての"勢い"も再び、蘇ろうとしていた。そんな矢先、キーボードの桜庭君から、突然「解散したい」との申し入れが舞い込んで来た。理由は、「現在のデジャヴのサウンドは満足行くものではない。」との事であった。ドラムスの源太(工藤)とトン(上野知己)と一緒に、さんざん説得したが、この意志は固く、予定されていたエッグ・マンでのライヴを急拠、解散ライヴとして行なう事になってしまった。このエッグ・マンでの解散ライヴは、実に熱の籠もった彼らの最高の演奏を聴かせて、"これだけ素晴らしい演奏をして、先のあるグループが、解散してしまわなくてはいけないのか"と、また、トンや源太のデジャヴに賭ける意気込みと悔しさが、ひしひしと伝わってきて、僕は無性に涙が込み上げてきてしまった。僕はやっと、ヴィエナ解散のショックから立ち直った矢先の、度重なる出来事によって、完全にプロデューサーとしてのやり場を失なってしまったのである。無理やりにでも残ったホワイト・ファングとロザリアに賭けることしか、残される道はなくなってしまったのである。

今までの僕の周囲のプログレ・バンド達と、いろいろな面で考え方や体質が全く違う若い世代のグループであるロザリアやホワイト・ファングとの"プロデューサー"としての付き合いは、正直言って、大変であった。僕にとってのプロデュースする事の第一歩は、僕とどれだけ同じくらいに音楽を愛していて、自分の音楽をどれだけ真剣に追求しようとしているか、という共通の価値観を見つけ出す事である。そして、どれだけ、そのバンドにとって、僕を"プロデューサー"として必要とし、また信頼しているか、ということだ。今まで僕がプロデュースをしてきた、どのグループも、僕の中にある様々な"僕の嗜好する音楽"のうちの2〜3の部分で、互いに"音楽の嗜好性"を共有して、共感する事によって意気投合して、僕は彼らに対して、"プロデューサー"として、また彼らは僕に、"プロデューサー"としての必要性を求めて、作品を制作してきた訳だが、この音楽の嗜好性の共有以前に、最も大切な事は、僕とどれだけ同じ次元で、音楽を真剣に愛して、追求しているか、という事なのである。こんな事を書いて悪いとは思うが、正直言って、ホワイト・ファングやロザリアには、これがあまり感じられなかった。ヌメロ・ウエノというプロデューサーの価値も理解していなかったと思う。彼らは"最近の若い子"なのかも知れないが、音楽を共に愛して作る人間と人間の付き合い方=ヒューマニズムを知らない。資本のある音楽プロダクションとの、悪い言い方をすれば、"お金"での付き合いでしかなかったのだと思う。僕は音楽上でのミュージシャンが主張する"我"や"わがまま"、"甘え"(もちろん"良い意味"に於いてのものだが…。)には、実に寛大であると思うが、それは、その個々の人間性を表現する手段として、音楽が存在しているからである。しかし、彼らとの付き合いの中には、"お金上"での"わがまま"や"甘え"しか感じられなかった。僕が真剣に追求するプログレ・サウンドを共に作れる相手ではなかった事はおろか、人間的な付き合い方の出来る相手ですらなかった。僕は自分がプロデュースをしているグループの曲と作品は、自分が作り出した曲や作品と同じように、愛しているし、かわいい。どれも"自分の愛すべき息子達"という気持ちでいっぱいだが、彼らは自分達の作品すら、愛していないのである。いろいろ勝手に書いて、失礼であったが、彼らとの付き合いを通じて僕は、本当に自分自身がプロデューサーを続けていく"自信"と"闘志"を失ってしまった。(実はこの本を制作するもともとのきっかけは、もうプロデューサーを辞める決意を固めたからであったのだが…。)今まで、長年に渡って夢中になって共に作品を作ってきたミュージシャン達の動きは全て停止してしまい、また、若い子達とは、思うようなコミュニケーションが取れなかった僕は、孤独であった。ホワイト・ファング、ロザリアを通じて、唯一、僕のプロデュースに共感し、また僕が作ってきた作品を愛してくれ、僕の個人的なプログレの趣味性に共感してくれた三浦奈緒美の存在だけが、救いであった。三浦奈緒美は正直いって、キーボード・プレイや楽器の知識、アレンジ技量などの点においては、まだまだ駆け出しのミュージシャンであったが、ぼくと個人的にプログレの趣味が近く、(これだけ数多くのミュージシャンのプロデュースを手掛けてきた僕は、彼らの作る音楽の上で、意気投合して付き合ってきたが、個人的なプログレの趣味の範疇の中で、"気が合うミ

ュージシャン"は以外に少ない。僕はキング・クリムゾン、YES、UK、アラン・パーソンズ・プロジェクトやダンカン・マッケイなどのブリティッシュ勢や、バンコ、イル・バレット・ディ・ブロンゾ、チェルベロ、マクソフォーネなどのイタリア勢が、最も好きなプログレで、叙情派シンフォニックは、あまり好きではないが、僕の所のミュージシャンの多くは、いわゆる"ジェネシス派"であり、"クリムゾン派"の僕とは根本的にかなり違う。また、ユーロ・ロックまで聴いているミュージションの太田君、夢幻の林君くらいだとジェラルドの永川君やソシアル・テンションの太田君、夢幻の林君くらいいだろうか?その中で、三浦奈緒美とは、同じキーボード奏者という立場もあって、僕と最も音楽趣味が近い。あの可愛い顔をして、バンコ、イル・バレット・ディ・ブロンゾ、オザンナやEL&P、ジェスロ・タル、フォーカス、そしてヴァーティゴ・オルガン・ロックなどを愛聴しているのだから、世の中わからない。彼女とは、プロデューサーとミュージシャン以前に、"プログレ・マニア友達"という間柄である。)また、レコーディングに対する執着度も、僕と同じくらいのものを持っていて、久々に夢中で音楽を作れる相手であった。僕にとって、そのミュージシャンと共同作業をどのくらい、のめり込んでやれるか、という事は、相手の様々な音楽の技量よりも、どれだけ僕について来てくれるか、という熱意と制作意欲が大切なのだ。

こうして何とか、彼女の存在によって、プロデューサーを引退する事に至らなかった僕であったが、1990年の夏に、三浦奈緒美が急病の為に倒れて、実家に帰って床に伏せてしまった。そして、僕にとって、"最後の光"すら、失われてしまったのである。

Ⅵ.メビウスの輪、再び="愛すべきプログレ戦士たちの復活"

プロデューサーとしての僕の"最後"のミュージシャンであった三浦奈緒美までが、僕の前から姿を消して、僕は本当にプロデューサーを引退する決心を固めて、この本に取りかかった。そして、この本の制作をするにあたって、昔の事を聞くために、しばらく音沙汰のなかった数多くのミュージシャン達にコンタクトを取った。もちろん、最近あまり話していなかった平山君や永川君、塚本君、チャチャ丸など、僕の所のミュージシャン達とも、久し振りに多くの事を話した。この本を作り、彼らの輝かしき過去を、より鮮明に掘り下げて行けば行くほど、彼らの長年に渡って作り上げてきた活動の偉大さと尊さが、今更ながら身に滲みて来た。また、自分の活動するグループの形は壊れてしまっていても、自分の"愛するプログレ・サウンド"を自分自身の中で、ずーっと大切に温め続けている事、彼らが、プログレをする意欲を失ってしまったとか、才能が尽きたとかいう事は全くなく、ただ単に、活動するきっかけがなかっただけである事。そして、彼らが作り上げて来た過去の作品があまりにも偉大である為に、彼らの作ろうとする新しいものに対して、常に否定的な先入観を持つ"プログレ・ファン"や"周囲"の偏見によって押し潰されてしまった結果であることなどを痛切に感じた。僕と話した数多くのミュージシャンのほとんどが、何らかの形で、自分自身にとっては、何ら変わらずに"プログレを愛し続けて"おり、デモ・テープを数多くもらった。ファンや周囲から見れば、すぐにバンドを解散したり、結成したりと長続きしないから失望してきた所があるのだろうが、彼らから見れば、一つのバンドを作り上げるために、プログレをやりたがる数少ないミュージシャンの中で、メンバー捜しからはじまり、サウンドを煮詰めて、リハーサルを重ねて、初めてお客さんの前に立つまでには、かなりの時間がかかる。特にプログレは、プログレをやりたがるミュージシャンの人口が少ないうえに、かなりの演奏技量を必要とされるので、メンバー捜しは大変な作業であり、また、作曲やサウンド固め、リハーサルにもかなりの時間を費やさなくては、ライヴ・ステージにたつ事は出来ない。例えば、ヴィエナは1stアルバム発表から解散まで、わずか9カ月しかなかったが、バンド結成から、1stアルバム発表までに1年以上費やされている。お客さんの前に立って、表の活動をしている期間よりも、それまでの準備期間の方が、遥かに大変であり、長いのである。一つのバンドが解散して、その直後から、真面目に次なるバンド結成へ向けて動き出しても、ファンから見れば、2年近くのブランクが空いたように映ってしまう。かなり名を残した活動をしたミュージシャンならともかく、このブランクによって多くのミュージシャン達は、ファンから忘れ去られてしまい、再び復活の狼煙を上げた時には、ファンから"過去の人"のレッテルを貼られてしまう。ミュージシャン側から見れば、一切、やめたつもりはなく、継続している事なのだ。　彼らと話を重ねる度に、彼らがいかに"プログレを愛している"かという事、そして何よりも、僕をプロデューサーとして必要としているのかを思い知らされて、再び、僕の中で失ってしまった自信と熱意が蘇って来た。"時代は若い世代によって、切り開かなくてはいけない"と思っていて、その若い世代が全滅して、"プロデューサーとしての道"を失ってしまった僕は、彼らの"プログレへの愛情と熱意"に久し振りに触れて、自分の永遠なる居場所がここであると、また彼らの音楽と共に、僕のプロデューサー生命を心中させようと、長かった闇から抜け出した、晴れ晴れとした自分の姿が取り戻されて行くのを、肌で感じている。この、「ヒストリー・オブ・ジャップス・プログレ・シリーズ」の企画は、彼らの偉大なる過去に敬意を表し、また、彼らによって生み出される新たなる歴史の1ページの第一歩として、そして、僕自身の新たなる戦いの宣戦布告の狼煙として、スタートさせたのである。"キング・オブ・プログレ"の平山照継、塚

本周成、永川敏郎、シェラザード、スターレス、アイン・ソフetc…、といった布陣に、若いグループの中からも、病気も治り復帰した三浦奈緒美、アウターリミッツの荒牧隆、ソシ・テンの太田君らが集まって、結成したアフター・ザ・レインも加わった。

メイド・イン・ジャパン・レコードを設立して、今年でちょうど10年を迎えた。10年間、まがりなりにも、プロデューサーとしてやってきた僕の周囲には、結局、プログレを愛して止まないミュージシャン達だけが残った。これでいいのだ。僕は、僕の“愛して止まない”ミュージシャン達の為に、今再び、闘志を燃やそうと思っている。

気が付いたら、原稿用紙70枚も書いてしまった。今時の大学の文学部の卒論だって、こんなに長くはない。こんなに私的な、だらだらと長い文章をここまで読んでくれた方、ありがとうございます。どうせ、これだけ長いものにお付き合い願えたのなら、もう少し。　最後に僕のプロデューサーとして、またメイド・イン・ジャパン・レコードのレーベル・オーナーとしてのポリシーを書いておこうかと思う。僕自身、“プロデューサー”という大層な肩書の職業名を意識し始めたのは、最近のこと。もともとは、バンドの世話をやき、自主制作レコードを作っていただけであった筈が、いつの間にか、“プロデューサー”という立場に納まってしまった。従って、レコード会社の様な“プロフェッショナル”な職業としてのプロデューサーではないし、ありたくもない。レコード会社のプロデューサーの様に、レコーディングの時のみに、上司からの命令で、“担当”して、お金の算段や営業作戦を考える係ではないし、また、何処ぞのミュージシャン上がりのプロデューサーの様に、レコーディングの時に“初めまして、おはようございます。”とバンドに関わり、直接的にアレンジやサウンドに手を出す輩(本当はこういった人は、アレンジャーと呼ばれるものだ。)でもないと思う。自分が“このサウンドだ”と思えるアーティストに巡り会ったら、彼らの目指すサウンドの個性をより延ばす事や、演奏技量を延ばす事から始まり、レコーディング、ライヴ、営業作戦に至るまで、全てを総合的に見渡す役目であり、アーティストの持つアイデアやイメージを尊重しながら、より良い方へ補正し、広げて行く役目であり、また、彼らが自分達の手で生み出せないものを提案して、きっかけを作る役目であると思っている。従って、練習スタジオにバンドと一緒に通い詰める事もあれば、作曲合宿に同行したり、楽器のレッスンの為のアドバイスや、僕自身がレッスンを見てあげる事もある。また、音楽は“夢を売る商売”、とりわけ、ストーリー性や映像イメージの強いプログレッシヴ・ロックの魅力や、ファンが望むものは、“夢”を見られる音楽、そして感動する音楽だという事だと思う。そして、良い音楽を作る上でも、良い演奏をする上でも、音楽というものはその個人個人の人間性によって生み出され、その個人個人の人間性によって表現される“夢”が映し出される鏡であると思っている。従って、直接的な音楽技法以外にも、例えば、絵を観に行ったり、一緒に遊んだり、恋愛の相談に乗ったりと、いろいろな面で彼らと付き合っている。僕自身も不器用なほうなので、「音楽をする時のみ、ビジネスで付き合います。」みたいなクールな関係では付き合えないし、人間的にも、例えば女の子のミュージシャンは女としても魅力を感じなければ、心底、彼らの事を応援できない質なのである。プロデューサーとしての第一の事は、“その人間性を見る”事だとも思っている。いろいろな付き合いをして、ツアーも同行して、一緒に機材も運び、レコーディングの苦労も共にして初めて、僕自身の“思い入れ”が生まれるのである。正直言って、こうして付き合いをして来たグループと、そうでないグループとでは、僕にとって、かなり“思い入れ”が違う。僕にとって、プロデュースするというのは、こういった事である。また、“プログレ”サウンドをプロデュースしている訳だが、70年代のプログレをそっくりそのまま再現する、という保守的な考えは一切ない。イエスやクリムゾンといた70年代のプログレ・グループの生み出したサウンドは偉大であり、楽曲としての音楽的な完成度は非常に高い。音楽的な楽曲やアレンジ上の技法は大いに学ぶ所があるが、録音上での技法や、SEなどの効果的な部分は、ウルトラヴォックスやティアーズ・フォー・フィアーズ、プロパガンダ、アン・ピガール、アラン・パーソンズ・プロジェクトなどの80年代前半のニューウエーヴ・サウンドから影響される所が大きく、また僕自身も学ぶ所が多い。僕個人としては、元来、幼い時に母が声楽をやっていた為にクラッシック、とりわけ声楽で育った。中学時代には、拓郎やガロなどに影響されてボーカルとギター、高校に進学すると、ジャズ、ブルース&フュージョンやアメリカのロック、ことにサザン・ロックをやりたくてキーボード奏者へ転身する。(キーボードを始めた当時は、サンタナのトム・コスナー、オールマン・ブラザース・バンドのグレック・オールマン、チック・コリア、そしてダンカン・マッケイから大きな影響を受けた。)また、ニューミュージックの作曲・アレンジャーと

してプロ活動していたので、僕が今まで体験してきた様々な音楽の上で、プログレをプロデュースしているのである。また、プロデューサーとしては、アラン・パーソンズとトレバー・ホーンを敬愛している。特にアラン・パーソンズが作り出す生のオーケストレーション以上のリアリティーを持ったブラス・セクションの定位やエフェクト処理、民族楽器(僕もガムランは好んで多く取り入れている。)や鳴り物などの導入と空間処理、また、トレバー・ホーンのZTTレーベル(プロパガンダやアン・ピガール等)のアーティスト達に対して行ったプロデュースの中で、アイディア豊かなSE効果とその処理、レコーディング上の遊びとして行われた数多くの別ヴァージョンの発想、そして縦横無尽に広がる空間設定とリアリティーを持って迫る楽器のエフェクト処理は、同じプロデューサーとして、学ぶ所が多い。一生に一度でいいから、彼らのプロデュースした作品の完成度と肩を並べられるものを、自分の手で生み出したいと思っている。

そして、プログレ・マニアでもある僕が、ある、ひとつのグループに興味を持ち、プロデュースをしたいと思う第1の理由は、実に単純なもので、あるグループの、ある曲が気に入ると、「この曲をどうしても、レコード(今ならCDか。)で聴きたい。自分のレコードの棚にそっと仕舞っておきたい。」と思う"マニア発想"にしか過ぎないのである。

僕は僕自身が個人的に気に入った音楽だけをプロデュースしており、僕自身が好きな音楽だから、人にも聴いてもらいたい、売り込みたい、のである。決して、売れるからレコードを出すなどというレコード会社的発想は、一切持ち合わせていない。好きで作ったものだから、一生懸命に売るだけである。せっかく、インディーズ、しかもわざわざ"世間から相手にされない"プログレをやっているのだから、これで良いのだ。従って、例えば、ヴァージン・レコードの様に、商業的なヒットを狙うものを作るつもりもなく、まして飛行機会社まで持とうなどという商業的な拡張など、更々考えていない。自分の"好きさ"を明確にしたサウンド・ポリシーを持つ作品を、たらたらと数多く、長く、発表し続けているヴァーティゴ・レーベルを目標にしているのである。

▶DEJA-VU

第2期 DEJA-VU

初期DEJA-VUのライヴ（吉祥寺シルバーエレファント、1987）

▶SOCIAL TENSION

遠藤信夫（SOCIAL TENSION）のライヴ・パフォーマンス

SOCIAL TENSION

〝TOKYO アヴァンギャルドの帝王〟

Chihiro. S（GOLDEN AVANTGARDE）

Chihiro. S（LACRYMOSA）

KATRA TURANA

著者▶ヌメロ・ウエノ

〈略歴〉

1959年4月29日東京・練馬区生まれ。34歳。
小学校〜中学校時代に二期会のオペラ歌手柳原徹男に師示後、フォーク・ソング及び、ロックに目覚めて、ボーカル、ギター、キーボードを遍歴してプロ・ミュージシャンとして活動。
都立鷲宮高校在籍時代からプログレッシヴ・ロック、とりわけユーロ・ロックに興味を示して、1979年に大学へ進学する傍ら、ユーロ・ロック仲間と共にレコードの輸入・御売会社「ソシアル・コンプレックス」を設立。
ソシアル・コンプレックスの企画するイベントを通じて、アウターリミッツなどのバンドの世話役となり、1981年に自主制作レーベル「メイド・イン・ジャパン・レコード」を設立。
その後、プログレ・レコード店の店員を務めながら、1985年にはメイド・イン・ジャパン・レコードの本格的なリリースを開始。1987年にはクラウン・レコード内にVICEレーベル、また洋楽の再発レーベルとして、エジソン・ユーロピアン・ロック・シリーズを企画。
1988年にはキング・レコード内にクライム・レーベルを設立して、ヴィエナ等をプロデュース。
現在はメイド・イン・ジャパン・レコードや、エジソン・ユーロピアン・ロック・シリーズ、クライム・レーベルの制作、及びプロダクション〝ヴィエナ・ガーデン〟の制作・運営を行なう会社「スプリング・ソング・コーポレーション」の取締役社長兼プロデューサー、評論家として活躍。
今までプロデュースを手掛けたプログレのアルバムはアウターリミッツ、ページェント、ヴィエナ、テルズ・シンフォニアを始めとして50タイトルにのぼる。

〔History of Jap's Progressive Rock〕

執筆▶ヌメロ・ウエノ
たかみひろし〈ネクサス物語＋α〉

編集▶ヌメロ・ウエノ、橋川典恵、林 克彦、三浦奈緒美
レイアウト▶小松 剛、高橋 洋、西村かなえ

資料提供▶吉瀬孝行、小間淳彦、宇藤毅平、中藤正邦、三橋 徹、橋川典恵、(株)キング・レコード、ポリドール(株)、平山照継、永川敏郎、中嶋一晃、深草 彰、清水義央、林 克彦、たかみひろし、竹迫一郎、三浦奈緒美、西頭京子、斉藤千尋、菅野詩朗、宮武和広、栃沢 潤、小川文明、難波弘之、マーキー、ミュージック・チェイス、泉 洋次、山田次郎、曽我修衛、梶木則男、津田治彦、中島優貴、徳久恵美、大久保寿太郎、宮本佳子、上野まりあ、佐藤仁代、吉祥天女、平野安芸子、武士守広、永井敏己、厚見玲依、山本要三、菅沼孝三、高山 博、増田 洋、中川隆雄、須磨邦雄、塚田 円、井上 靖、手塚啓一、加藤正之、西森 毅、岡部 卓、栗田正人(シルバー・エレファント)、寺田和久(ミューズ・ホール)、山村 竜、エッグ・マン(敬略同不順)

1994年2月25日　初版第一刷発行
発 行 所●マーキームーン社
161東京都新宿区下落合3-15-18SYビル404
TEL. 03(3954)2055　FAX. 03(3954)9563

乱丁・落丁本はお取り替え致します。

税込定価3,600円（本体3，495）